

関係データ集

令和6年6月28日版

関係データ集 目次

(1) 近年の社会の変化	2
・ 出生数と人口推計	
・ 経済・産業・雇用の変化	
・ デジタル化の進展	
・ 社会ニーズの変化	
・ 若者の現状	
・ 学術研究を取り巻く動向	
(2) 高等教育の現状	54
・ 18歳人口と高等教育進学率	
・ 学校数・学生数・入学定員等の状況	
・ 進学率・学校数・入学定員・進学者収容力等の状況（都道府県別）	
・ 大学院の現状	
・ 高等教育機関修了後の進路	
・ 多様な学生の受入れ	
・ 入学者選抜・大学教育の現状	
・ 大学通信教育	
・ 留学生交流	
・ 教員を取り巻く環境	
・ 少子化を見据えた大学経営の状況	
(3) 国公私の設置者別等の状況	188
(4) 高等教育の財政措置	203
(別添) 将来推計	230

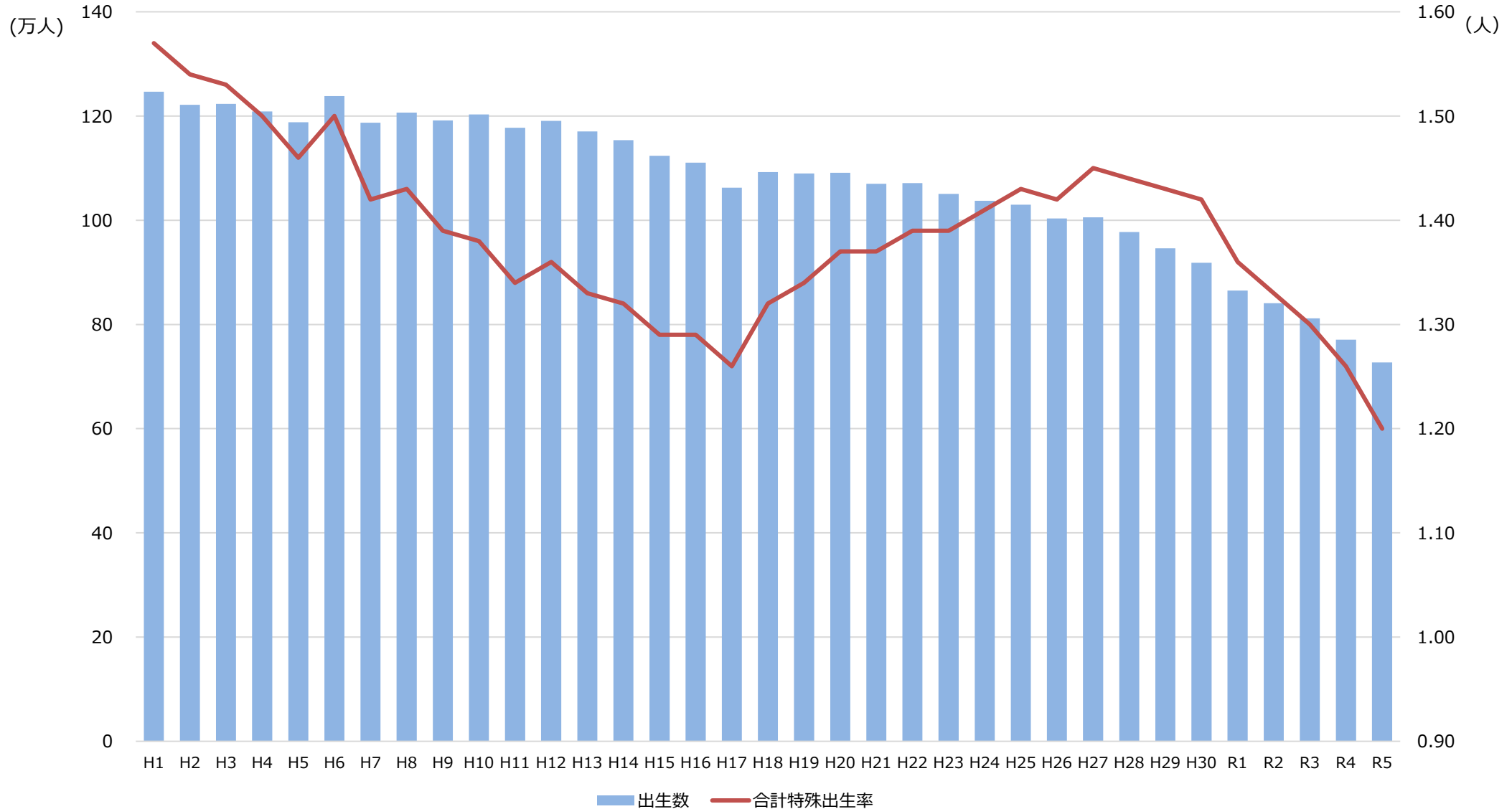
(1) 近年の社会の変化

関連データ

出生数と人口推計

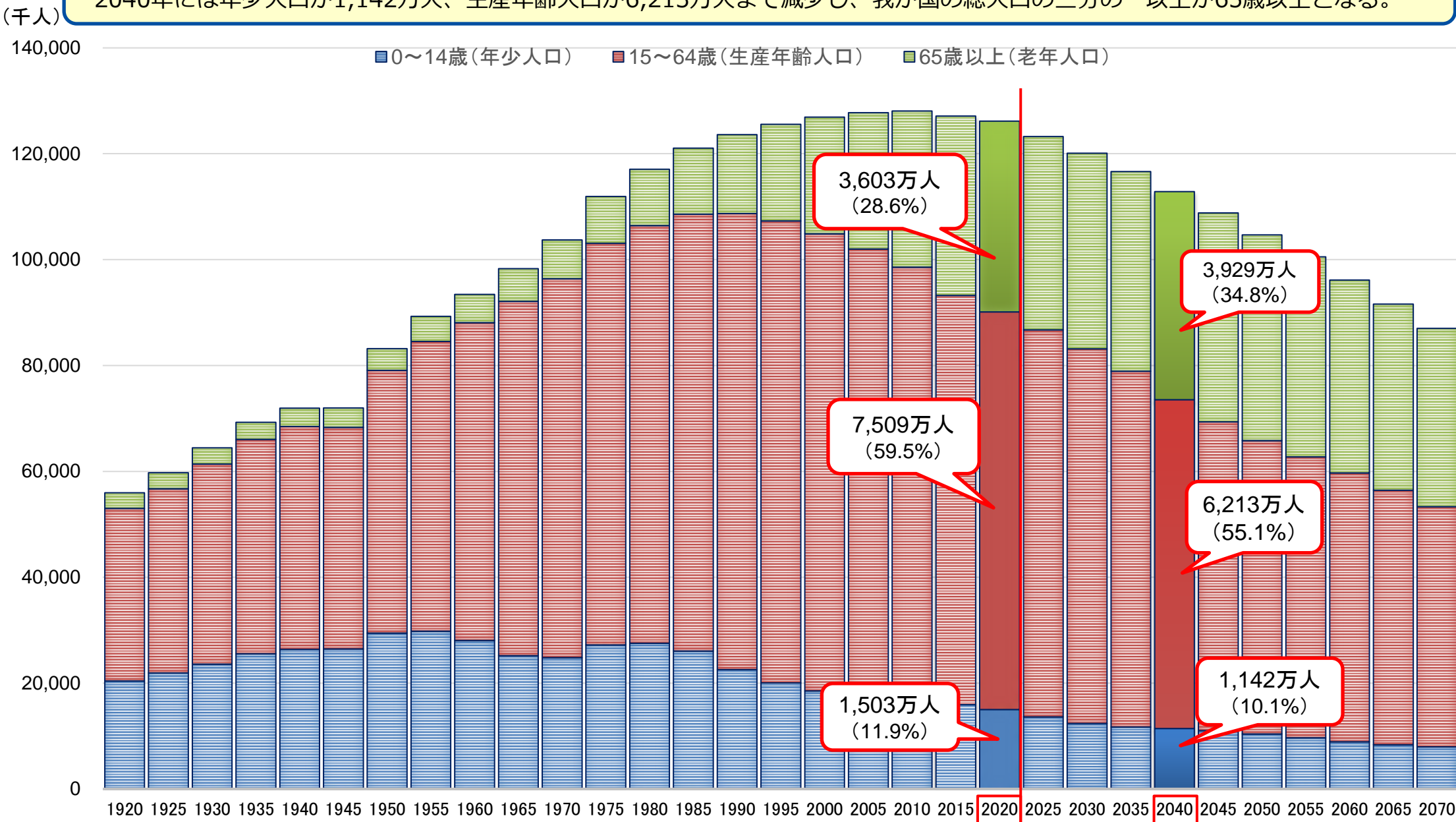
合計特殊出生率と出生数の推移

令和5年の合計特殊出生率は1.20と過去最低を更新。また、出生数は727,277人（前年比 43,482人減）と過去最少となっている。



人口の推移と将来推計

国立社会保障・人口問題研究所の予測では、少子高齢化の進行により、2040年には年少人口が1,142万人、生産年齢人口が6,213万人まで減少し、我が国の総人口の三分の一以上が65歳以上となる。



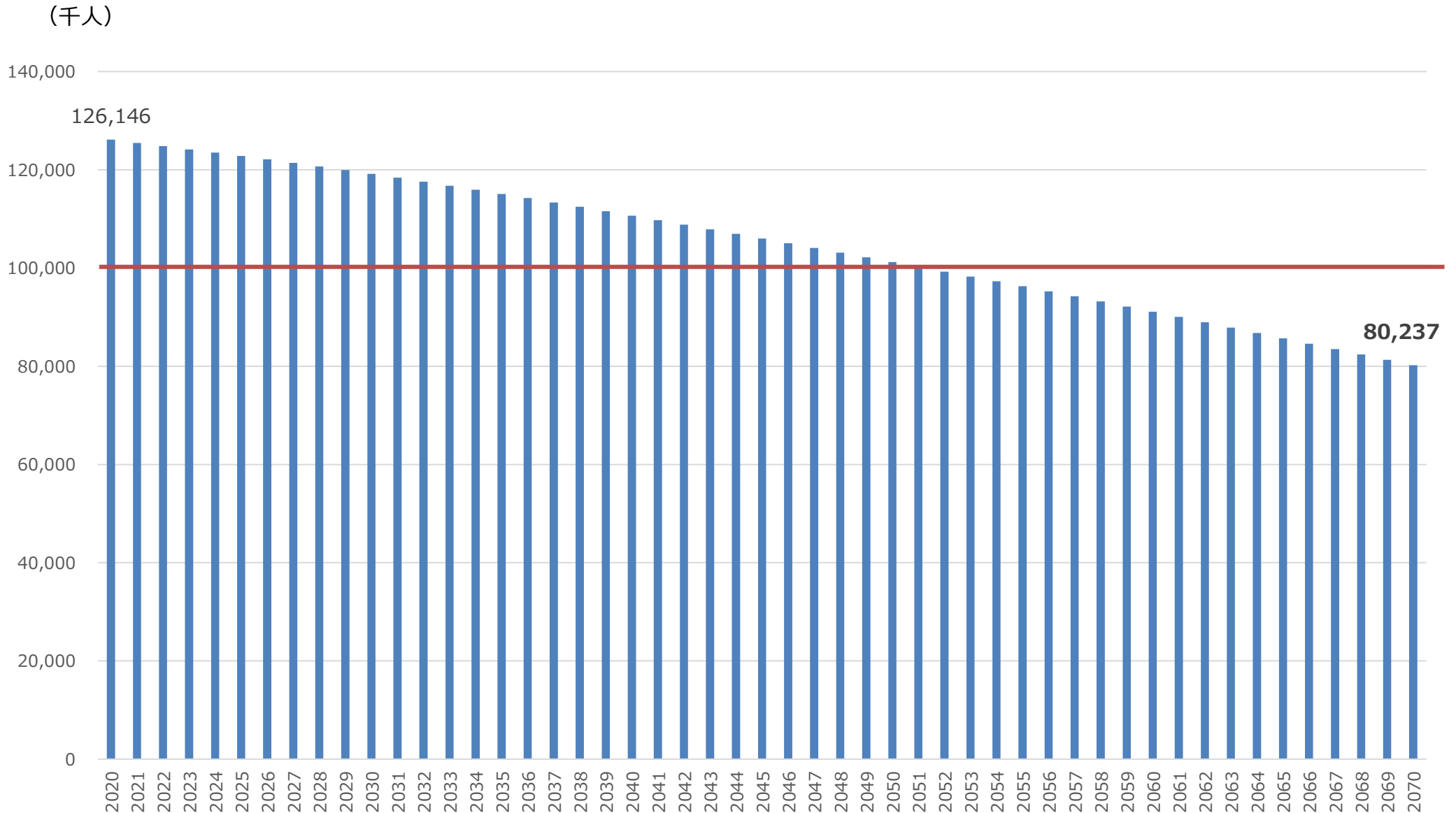
※推計値は出生中位(死亡中位)推計による。実績値の1950年～1970年には沖縄県を含まない。
1945年については、1～15歳を年少人口、16～65歳を生産年齢人口、66歳以上を老年人口としている。

推計値

(出典) 1920年～2020年:「人口推計」(総務省統計局)、2025年～2070年:「日本の将来推計人口(令和5年推計)」(国立社会保障・人口問題研究所)

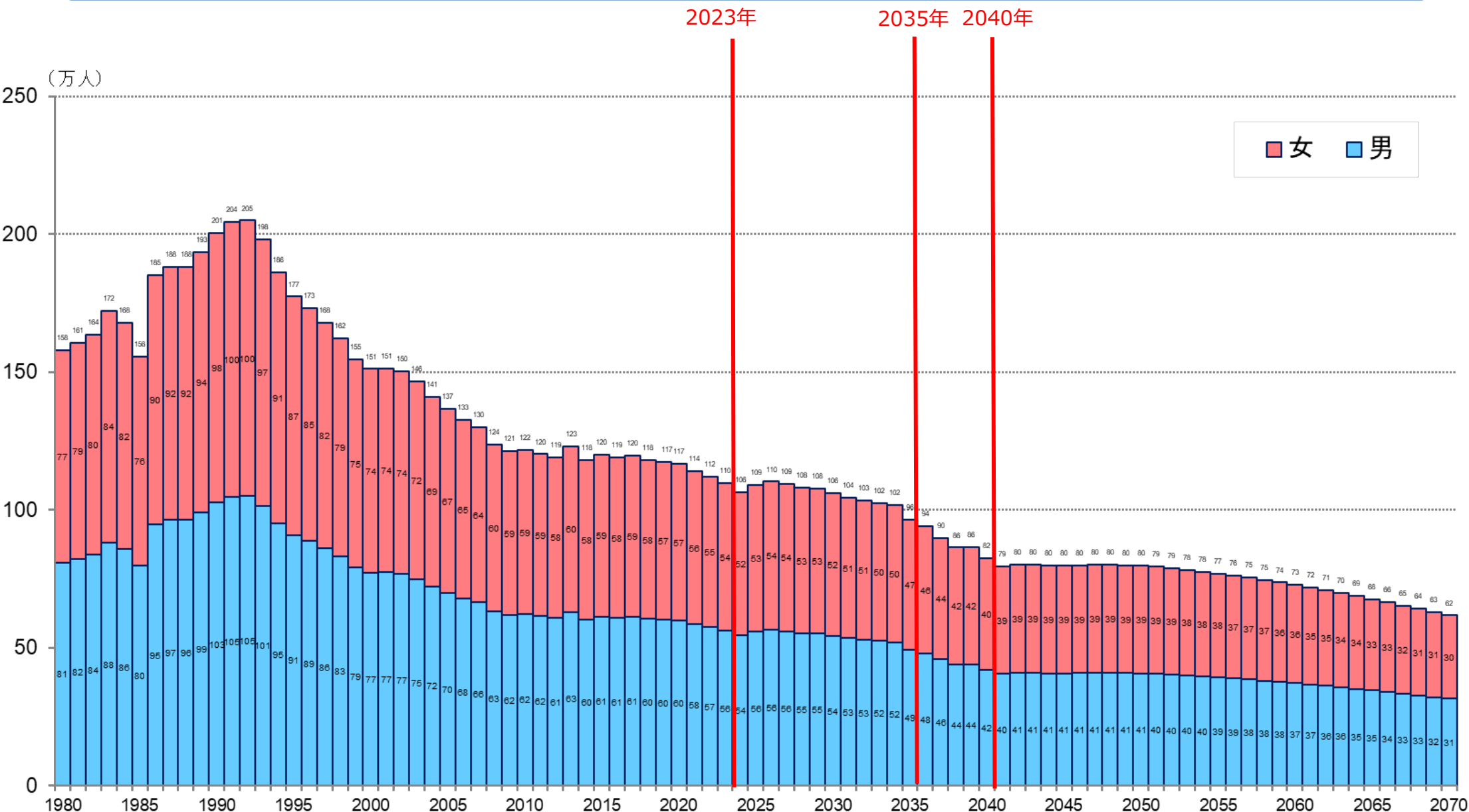
日本の推計人口

出生低位推計では、2052年には1億人を割り、2070年には8,024万人になると推計されている。



18歳人口(男女別)の将来推計

- 我が国の18歳人口の推移を見ると、2005年には約137万人であったものが、現在は約110万人まで減少している。
- 今後、2035年には初めて100万人を割って約96万人となり、さらに2040年には約82万人にまで減少するという推計もある。

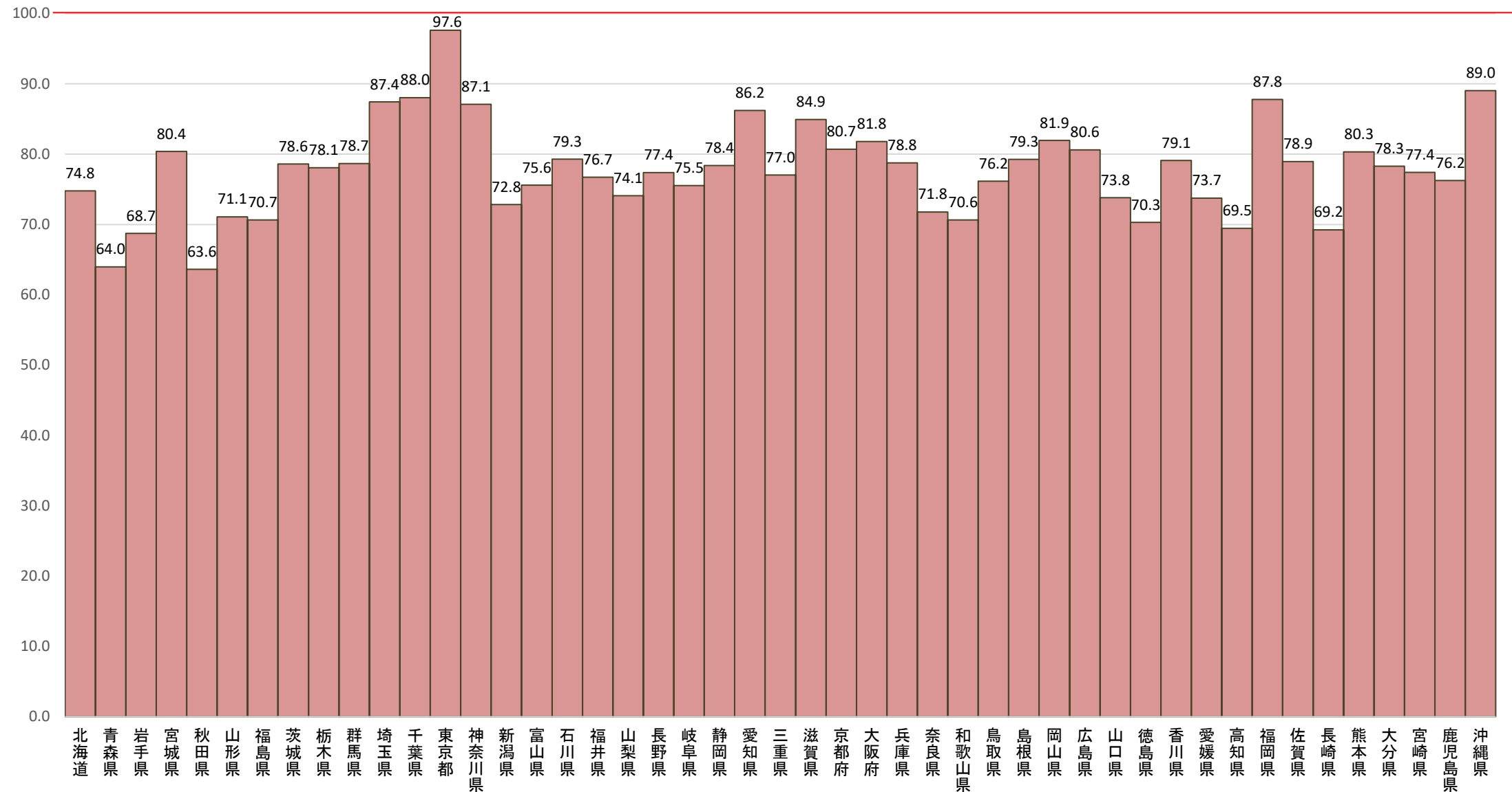


(出典) 2022年以前は文部科学省「学校基本統計」、
2023年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(令和5年推計)(出生中位・死亡中位)」を元で作成

2040年生産年齢人口(15～64歳)の都道府県別推計

国立社会保障・人口問題研究所の予測では、2040年生産年齢人口(15～64歳)は、東京都を除く道府県で1割以上の減少となり、特に地方における減少が著しい。

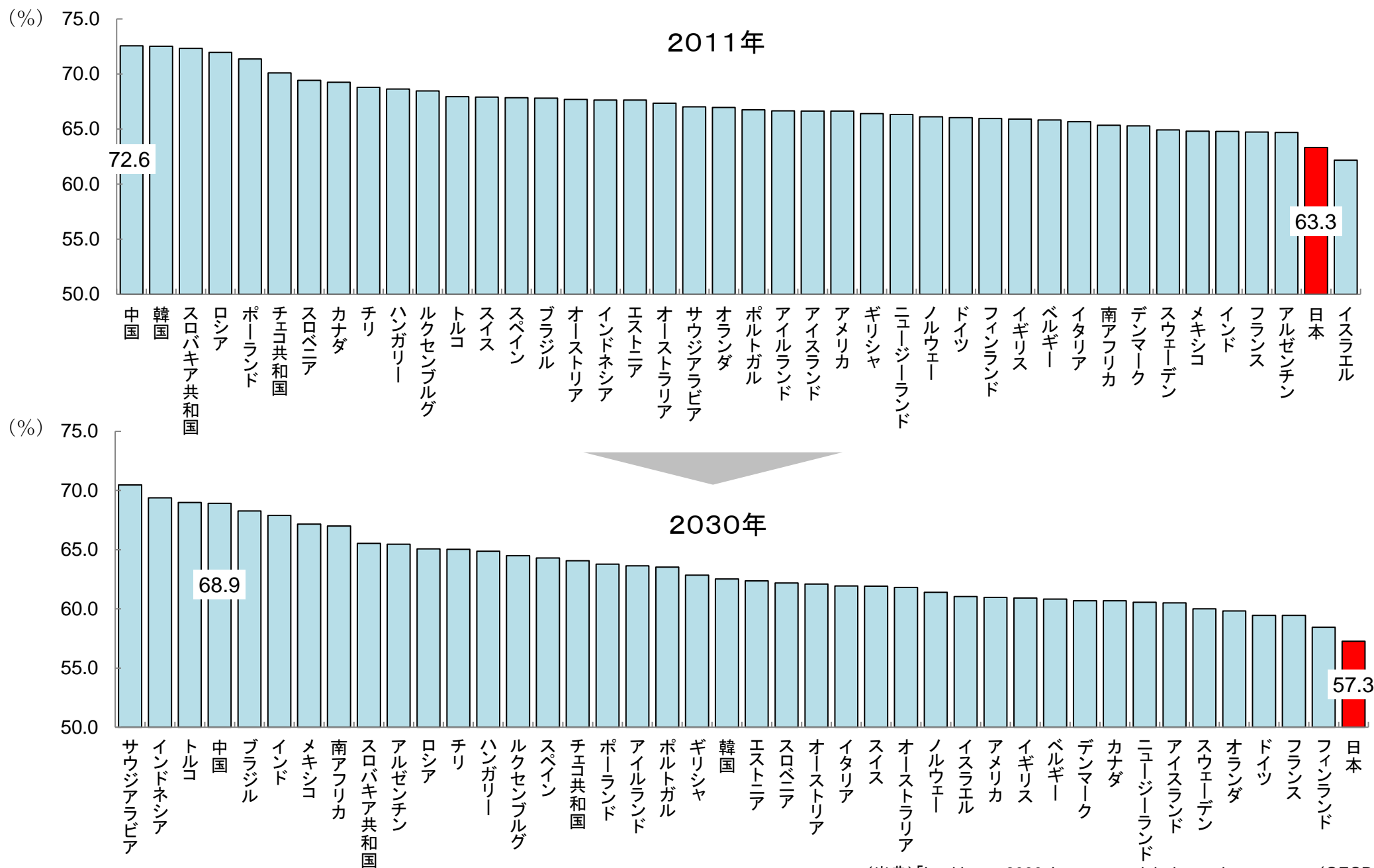
令和2(2020)年の15～64歳人口を100としたときの15～64歳人口の2040年の指数



【出典】国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(令和5(2023)年推計)」を基に、文部科学省作成。

OECD加盟国の生産年齢人口の将来予測

OECDの予測では、2030年には日本の生産年齢人口が57.3%にまで減少し、OECD加盟国中最下位になる。



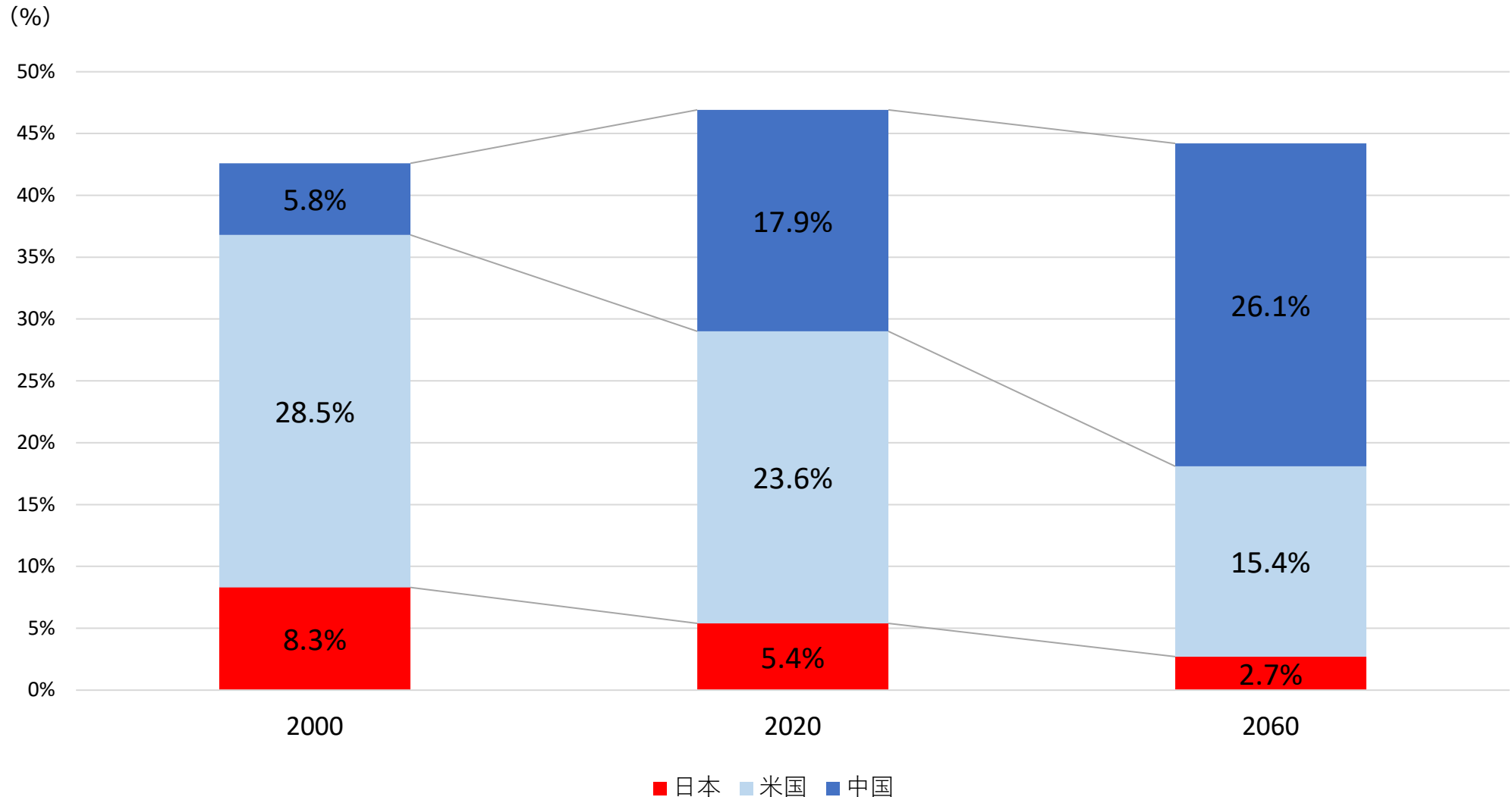
(出典)「Looking to 2060: Long-term global growth prospects」(OECD)

経済・産業・雇用の変化

世界のGDPに占める各国の比率

世界のGDPに占める日本の割合は2020年時点で約5%であり、中国や米国と比べて大幅に低く、将来的にも低下することが見込まれる。

世界のGDPに占める各国の比率（2000-2060）

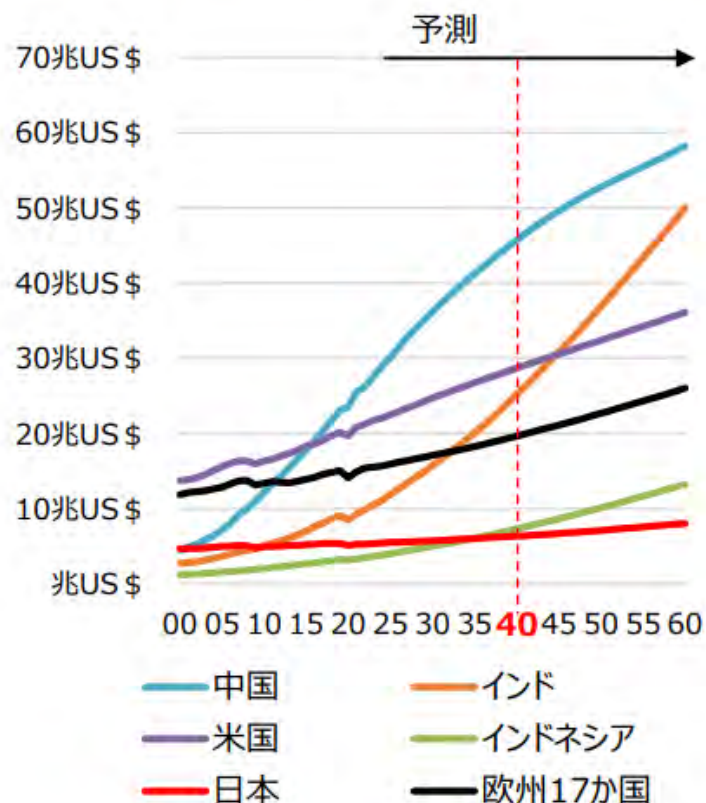


GDP予測(各国比較)

2040年までに日本の実質GDPはインドネシアに抜かれ、中長期的にはグローバルサウス諸国の経済力がG7諸国を上回るとの予測がある。

OECDによる実質GDP予測

※2010年時点での購買力平価に基づく実質GDP予測



➤ OECDによると、2040年までにインドネシアが経済規模で日本を追い抜くと予測。

GS社によるGDPランキング

※USドルベース

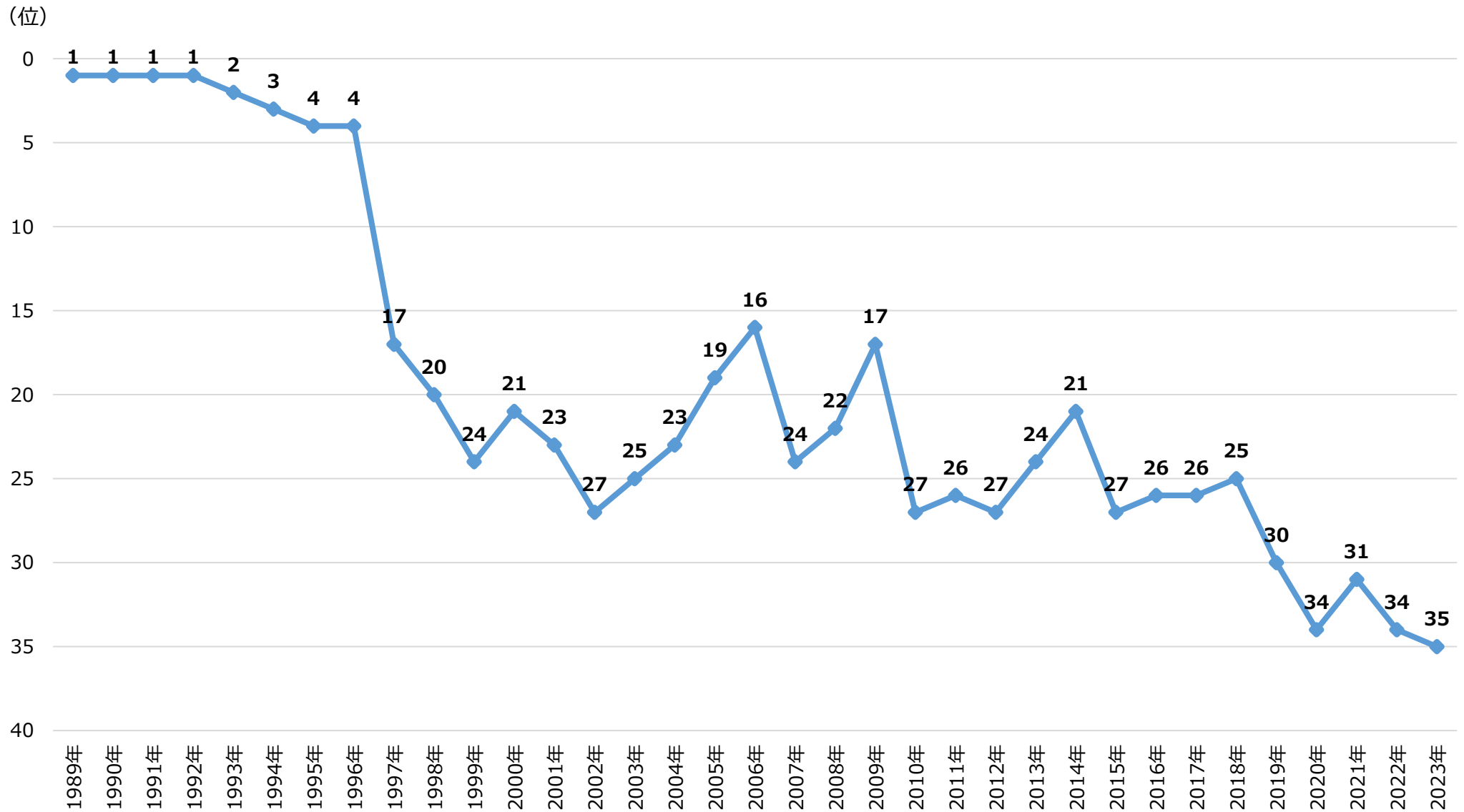
予測

	2000年	2022年	2040年	2050年	2075年
1	米国	米国	中国	中国	中国
2	日本	中国	米国	米国	インド
3	ドイツ	日本	インド	インド	米国
4	英国	ドイツ	ドイツ	インドネシア	インドネシア
5	フランス	インド	日本	ドイツ	ナイジェリア
6	中国	英国	英国	日本	パキスタン
7	イタリア	フランス	インドネシア	英国	エジプト
8	カナダ	カナダ	フランス	ブラジル	ブラジル
9	メキシコ	ロシア	ロシア	フランス	ドイツ
10	ブラジル	イタリア	ブラジル	ロシア	英国

➤ 2075年、GDP上位10か国中、6か国がグローバルサウス。

世界競争力ランキングにおける日本の順位

1990年代中頃まで日本の世界競争力は5位以内だったが、1990年代後半から順位を落としており、2023年は1989年以降最低の35位となった。



(備考) 世界競争力は経済状況、政府効率性、ビジネス効率性、インフラに関する統計データや経営層を対象としたアンケートデータから算出。

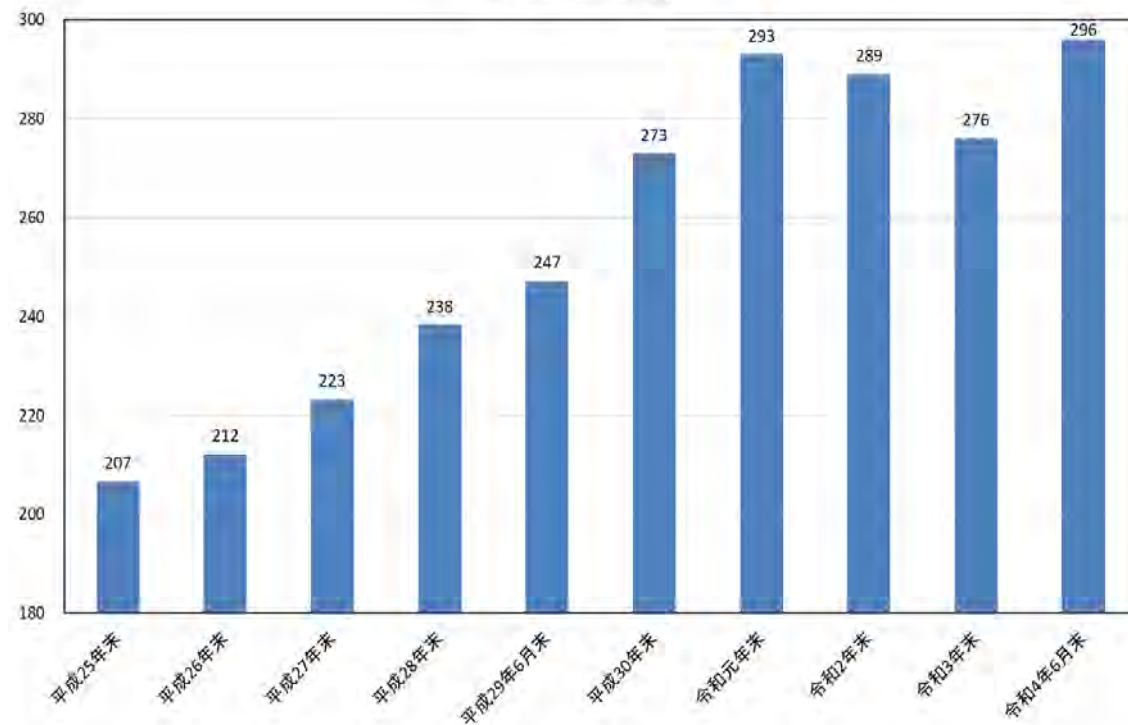
(出典) IMD「World Competitiveness Ranking」より作成。

在留外国人数及び海外在留邦人数の推移

在留外国人数、海外在留邦人数ともに新型コロナウイルス感染症の影響により、一時的な減少は見られるものの全体としては増加傾向。社会のあらゆる分野でのつながりが国境を越えて活性化しており、人材の流動化、人材獲得競争などグローバル競争の激化が予想される。

(万人)

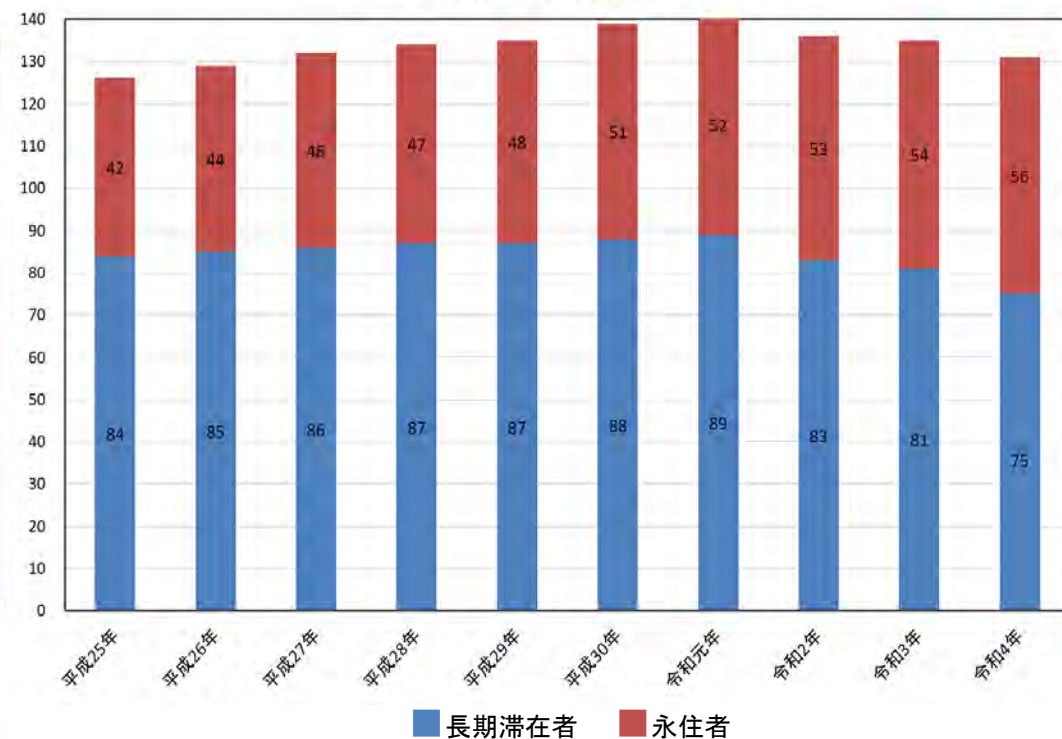
在留外国人数



(出典) 在留外国人統計(法務省 令和4年6月末)

(万人)

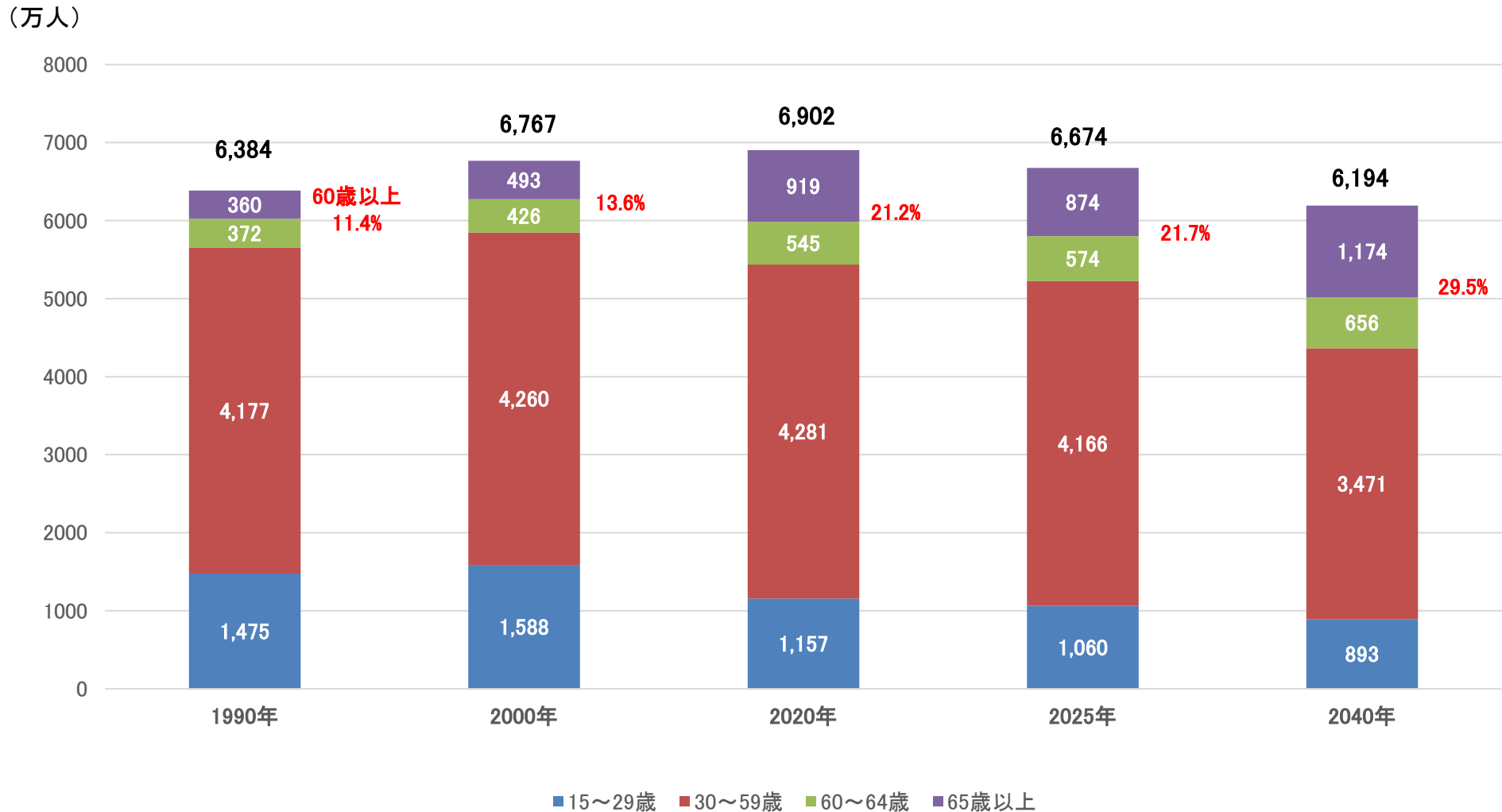
海外在留邦人数推移



(出典) 海外在留邦人数調査統計(外務省 令和4年10月1日現在)

労働力人口(年齢層内訳)の推移

推計によれば、我が国の労働力人口は2020年頃をピークに減少を続け、60歳以上の割合が増加する。

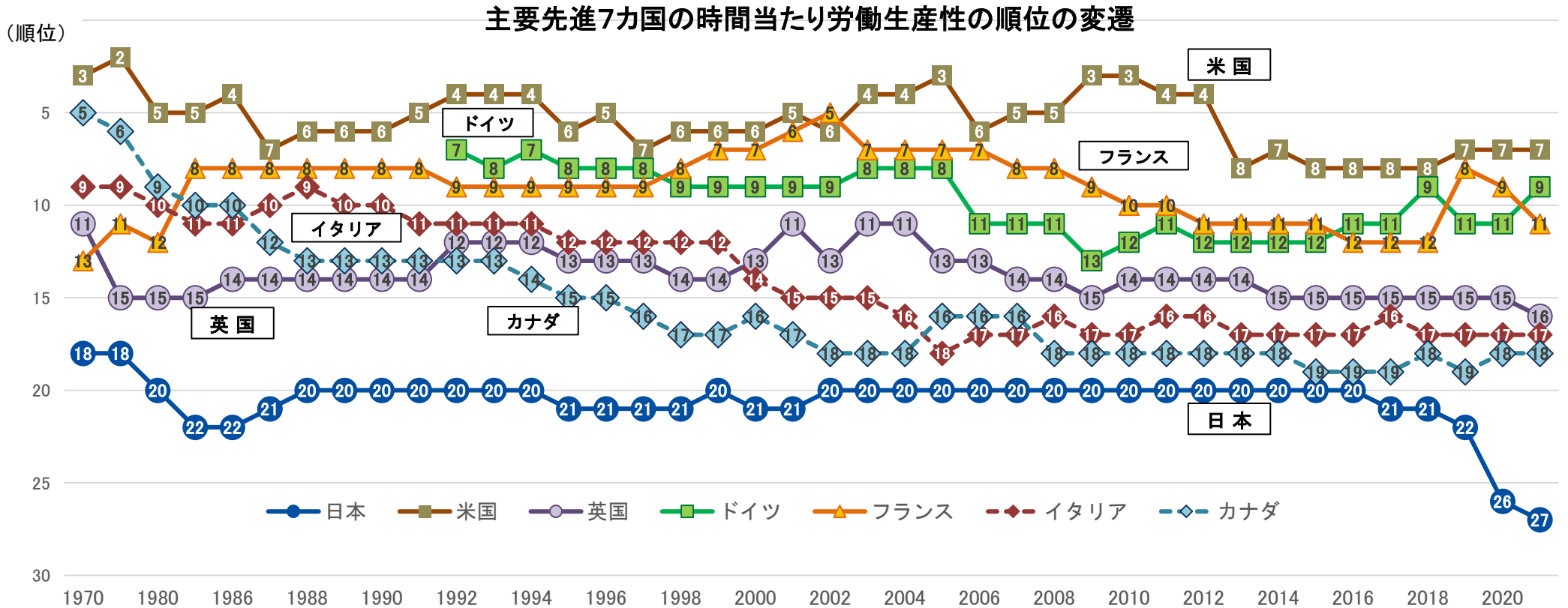


(出典) 1990、2000、2020年は総務省統計局「労働力調査」、2025年、2040年は(独)労働政策研究・研修機構「労働力需給の推計—労働力需給モデル(2018年度版)による将来推計—」。

- (注)
- 労働力人口に係る2025年、2040年の推計値は、経済成長と労働参加が進むケース(各種の経済・雇用政策を適切に講ずることにより、経済成長と、若者、女性、高齢者等の労働市場への参加が進むシナリオ)。
 - 労働力人口に係る当該推計値は、「労働力調査」の2017年までの実績値を踏まえて推計しているのでご留意されたい。

時間当たり労働生産性の各国比較

主要7カ国の中でも、OECD加盟国の中でも、日本の時間当たりの労働生産性の順位は、一貫して下位となっており、近年、さらに順位が低下している。



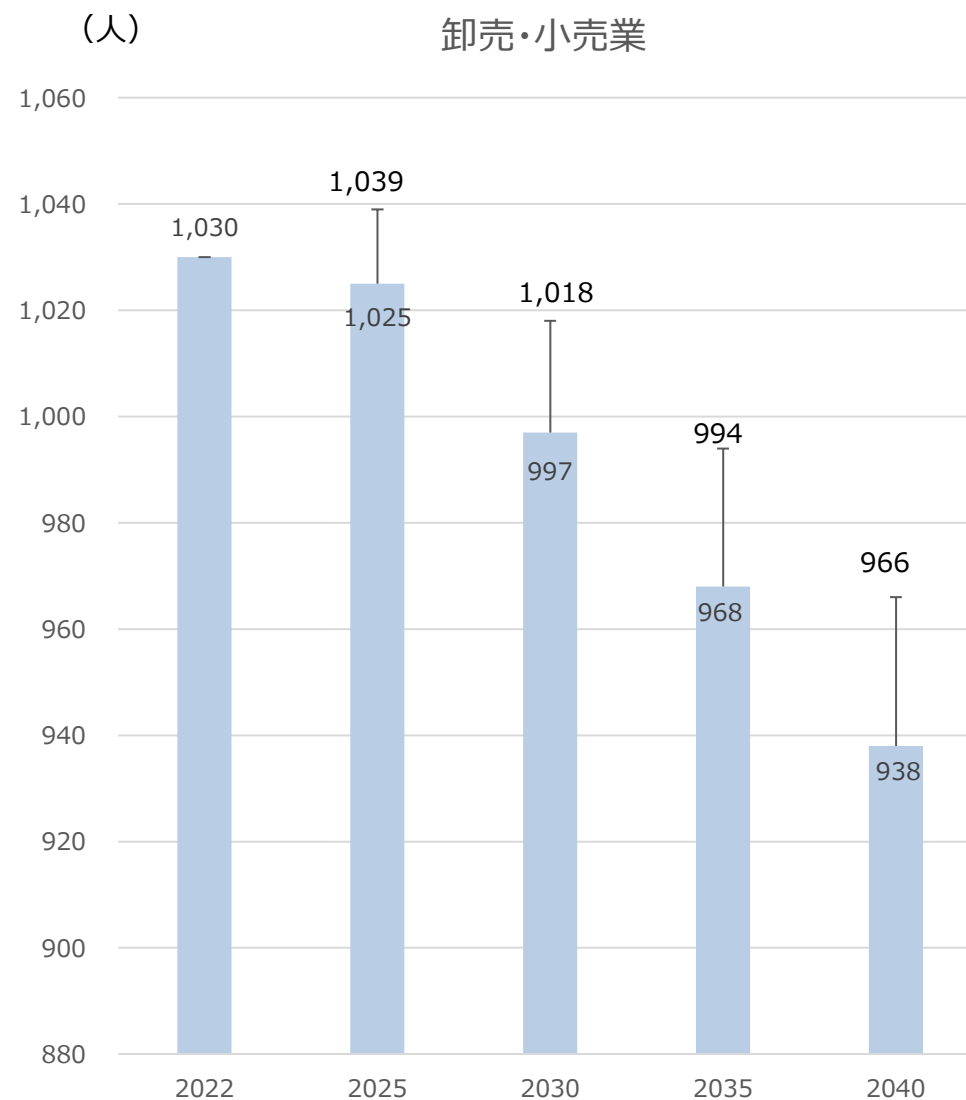
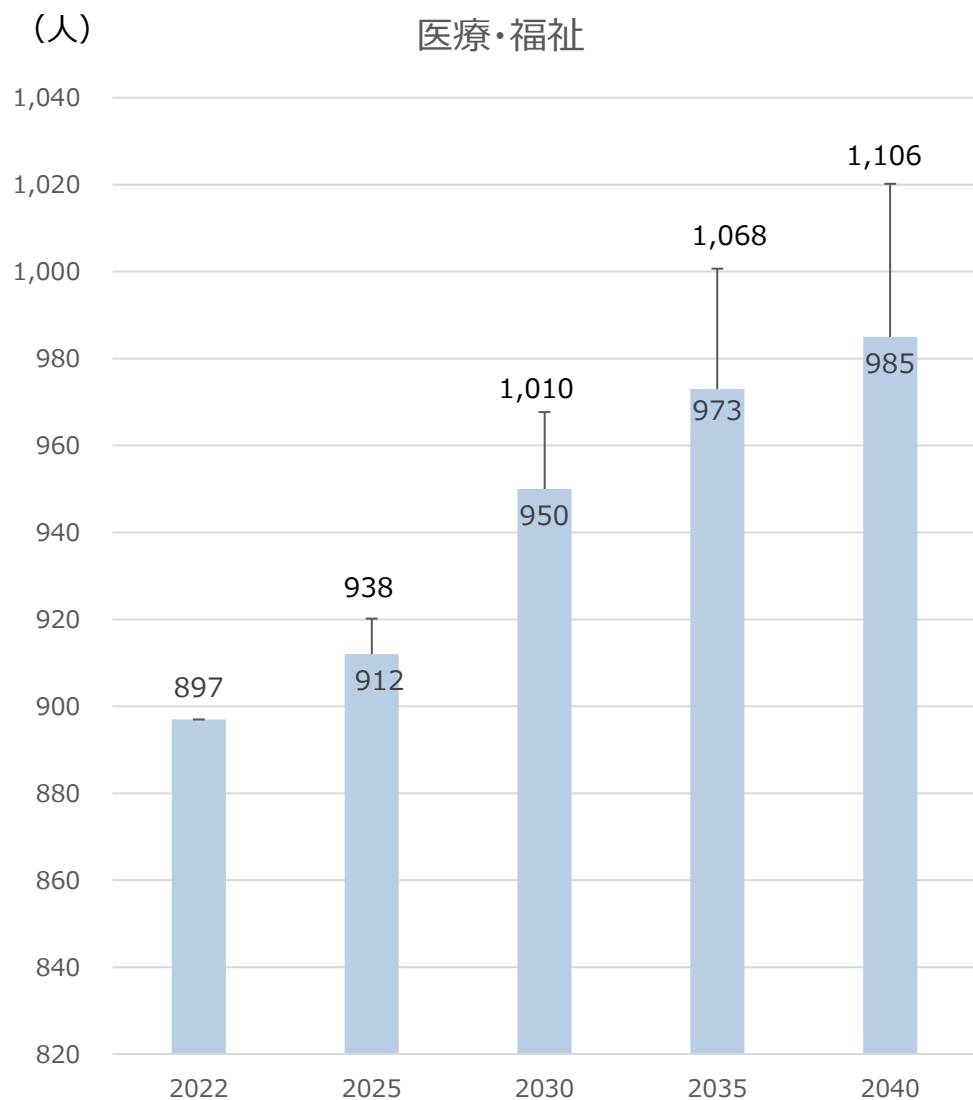
時間当たり労働生産性 OECD加盟38カ国上位10カ国の変遷

	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2020年
1	スイス	スイス	ルクセンブルク	ルクセンブルク	ルクセンブルク	アイルランド
2	ルクセンブルク	ルクセンブルク	ドイツ	ノルウェー	ノルウェー	ルクセンブルク
3	米国	オランダ	オランダ	ベルギー	米国	ノルウェー
4	スウェーデン	スウェーデン	ベルギー	オランダ	アイルランド	デンマーク
5	カナダ	米国	スイス	スウェーデン	ベルギー	ベルギー
6	オランダ	ベルギー	米国	米国	デンマーク	スウェーデン
7	オーストラリア	ドイツ	スウェーデン	フランス	スウェーデン	米国
8	ベルギー	アイスランド	フランス	スイス	オランダ	スイス
9	イタリア	カナダ	ノルウェー	ドイツ	スイス	ドイツ
10	ルクセンブルク	イタリア	イタリア	デンマーク	フランス	オーストリア
-	日本 (18位)	日本 (20位)	日本 (20位)	日本 (21位)	日本 (20位)	日本 (27位)

(出典)公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較2022」より

産業別就業者数推計

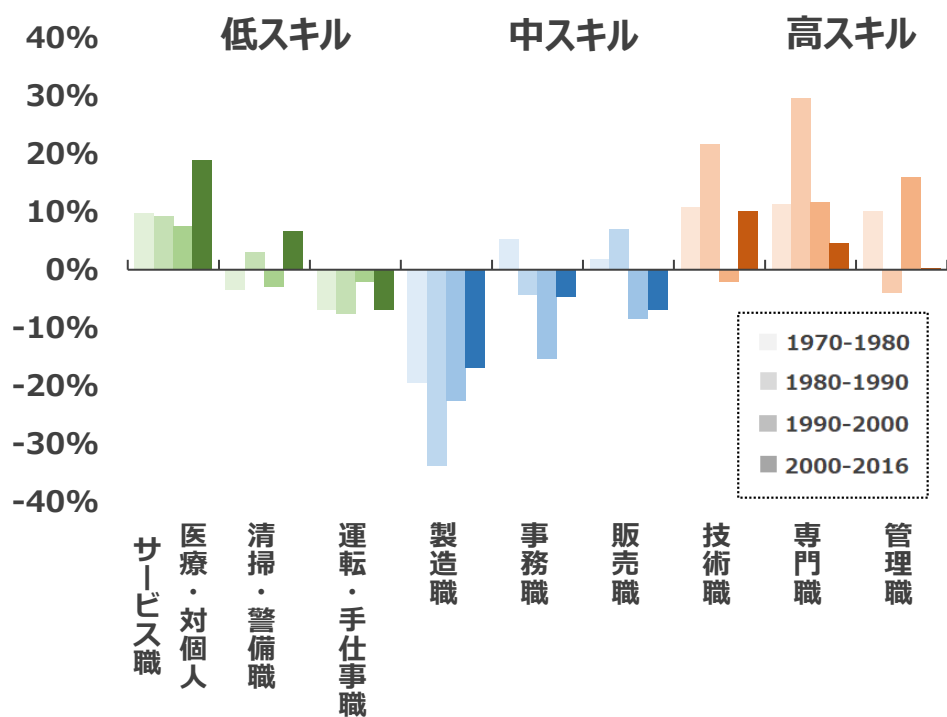
医療・福祉分野では就業者数が増加することが見込まれている一方で、卸売・小売業分野では減少することが見込まれている。



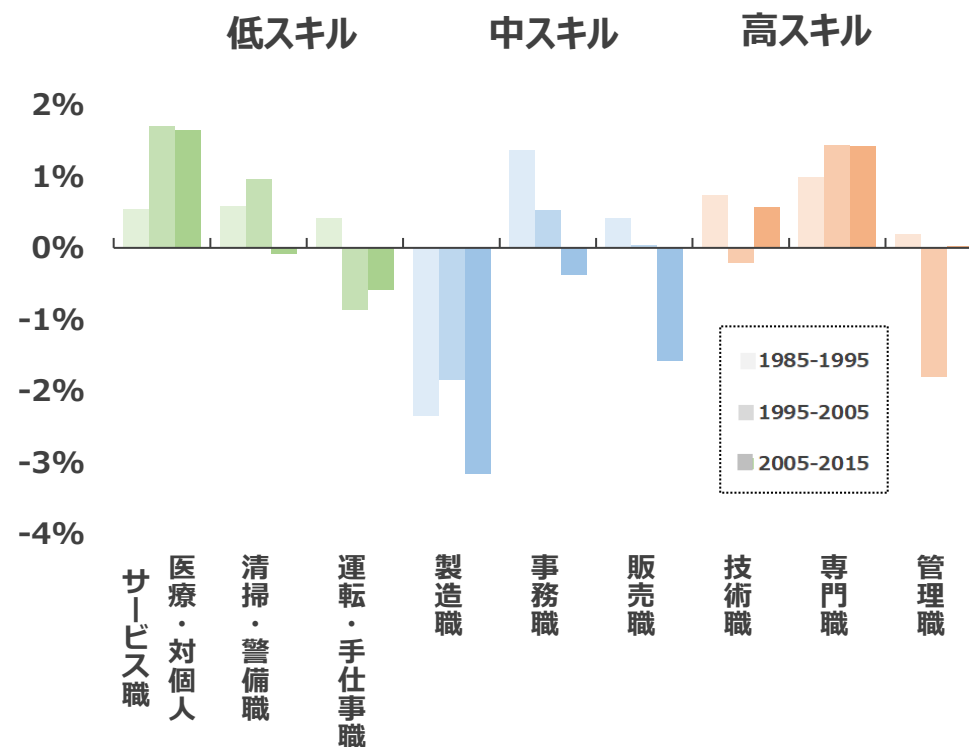
自動化で両極化が進む労働市場(労働市場の両極化)

米国では、自動化により、専門・技術職や医療・対個人サービス職等の就業者が増加する一方で、製造職や事務職等の就業者が減少する現象（労働市場の両極化）が確認されており、日本においても、その兆候が確認されている。

米国における職業別就業者シェアの変化



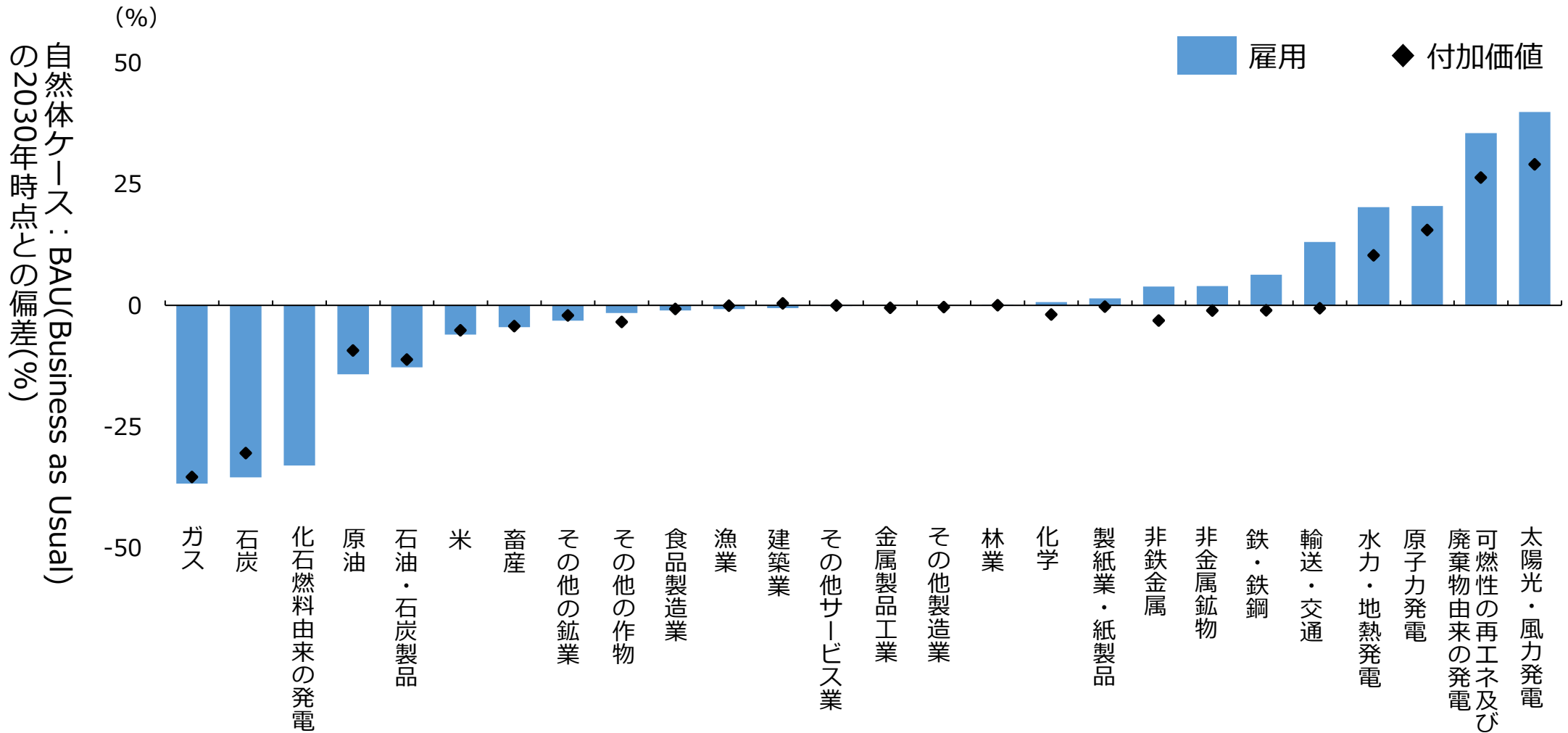
日本における職業別就業者シェアの変化



(出典) 経済産業省「未来人材ビジョン」(令和4年)より

脱炭素化による雇用創出・喪失効果

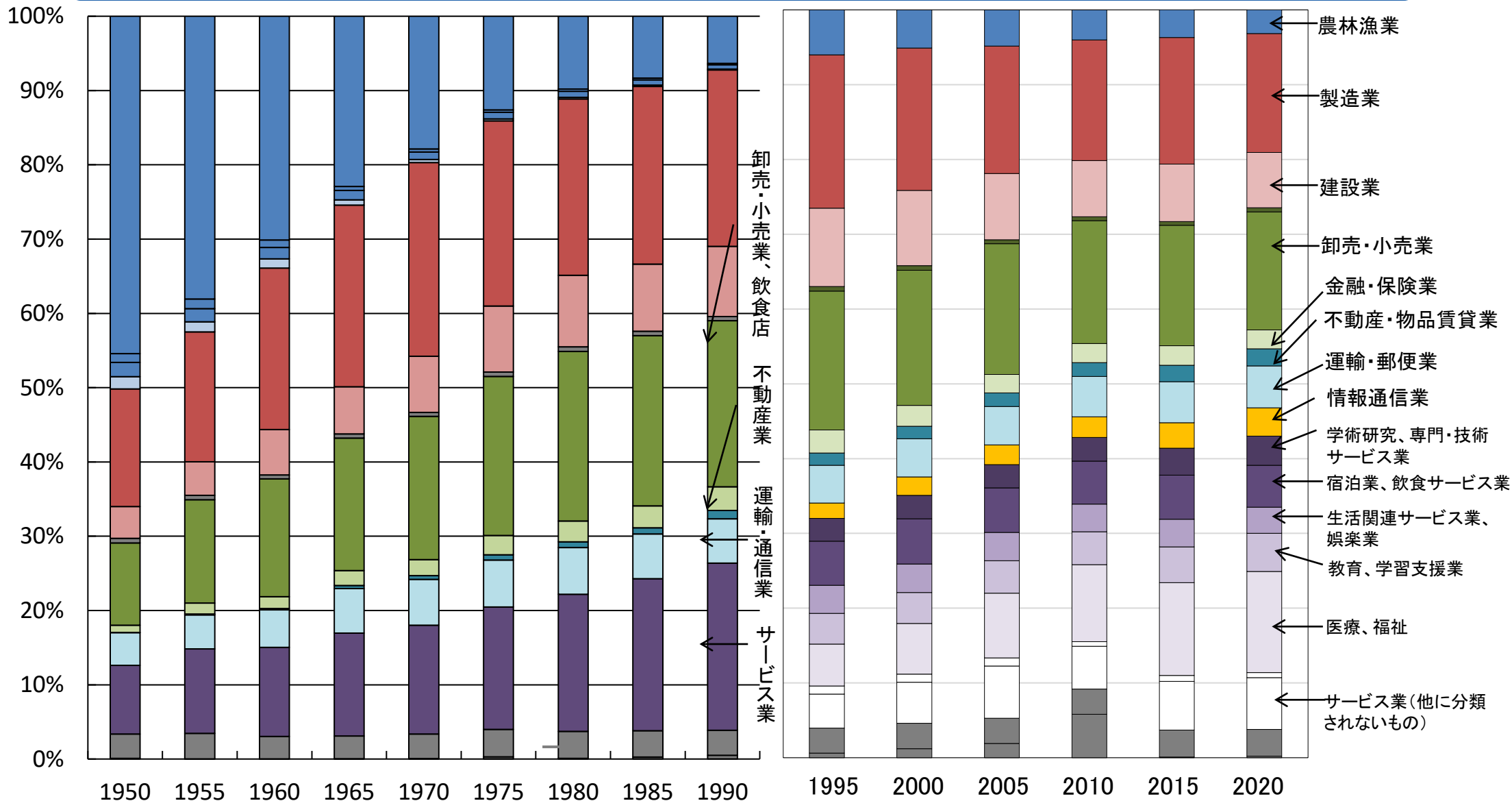
脱炭素の潮流は、特に化石燃料に関連する産業の雇用を減少させる一方、再生可能エネルギーなどで新たな雇用も創出する。



(出典) 経済産業省「第2回未来人材会議」(2021年12月7日) 資料より。OECD「Green Growth Indicators 2017」を基に作成。

産業別就業者構成割合の推移

第1次、第2次産業の就業者割合は縮小傾向にあり、就業構造のサービス産業化が進んでいる。



(出典)「国勢調査」(総務省統計局)

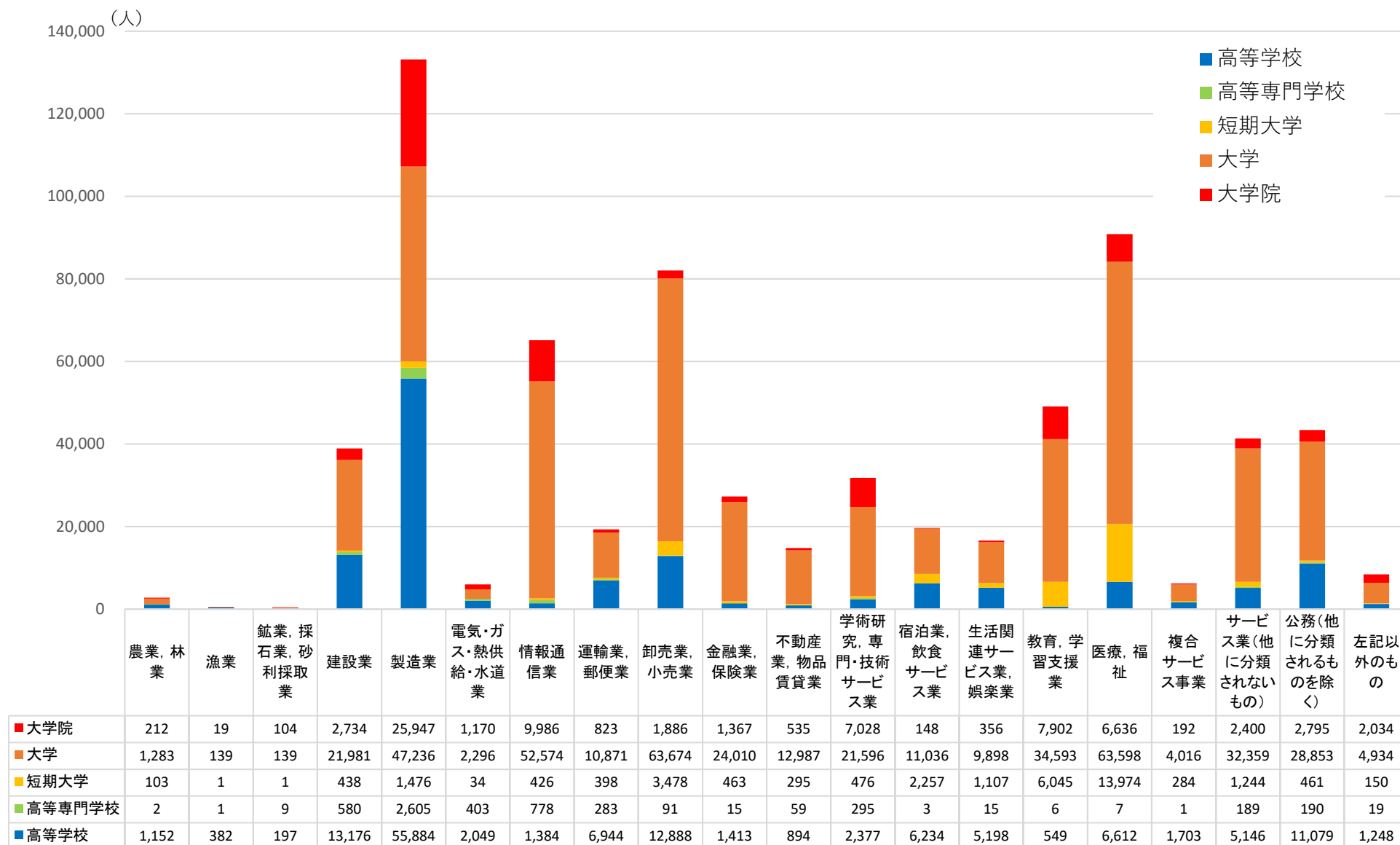
※1995年、2000年及び2005年は、総務省統計局による抽出詳細集計に基づく推計、集計である。

1990年までとは産業の表章が異なっており、接合は行えない。

※2010年は「労働者派遣事業所の派遣社員」を派遣先の産業に分類していることから、派遣元である「サービス業(他の分類されないもの)」に分類している他の年との比較には注意を要する。

各学校段階の産業別就職者数

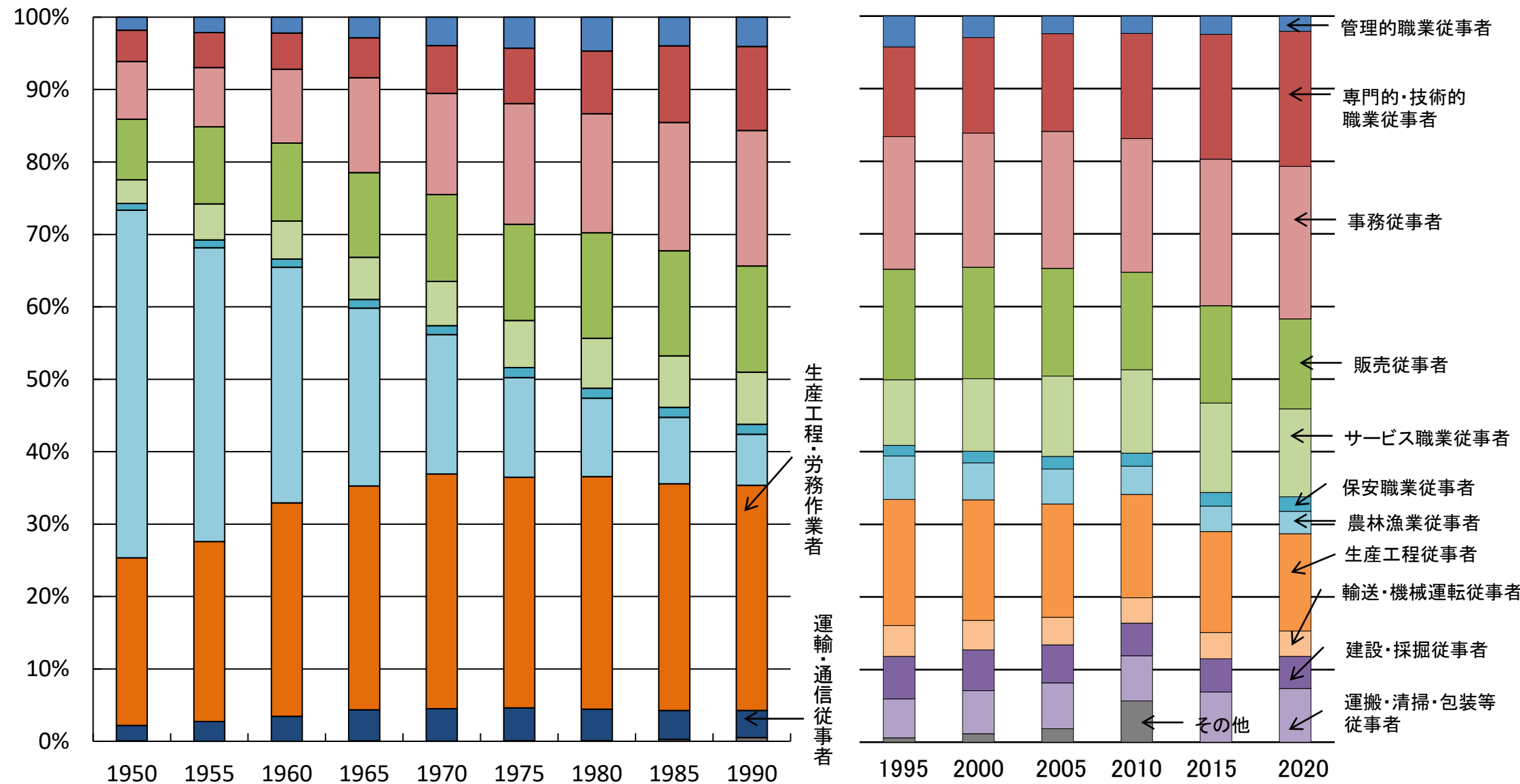
- 大学卒の就職者数は、「卸売業、小売業」「医療、福祉」「情報通信業」「製造業」の順に多い。
- 高等専門学校及び大学院の卒業者は「製造業」、短期大学の卒業者は「医療、福祉」への就職が最も多い。



(出典)文部科学省「令和5年度学校基本統計」
 ※専門学校は職業別就職者数データがないため記載していない。

職業別就業者構成割合の推移

- 農林漁業従事者が減少する中で、専門的・技術的職業、事務従事者、サービス職業従事者等の割合が高まっている。
- 高生産工程・労務作業者の割合は低下傾向にあり、職業別にみても就業構造のサービス産業化が進んでいる。



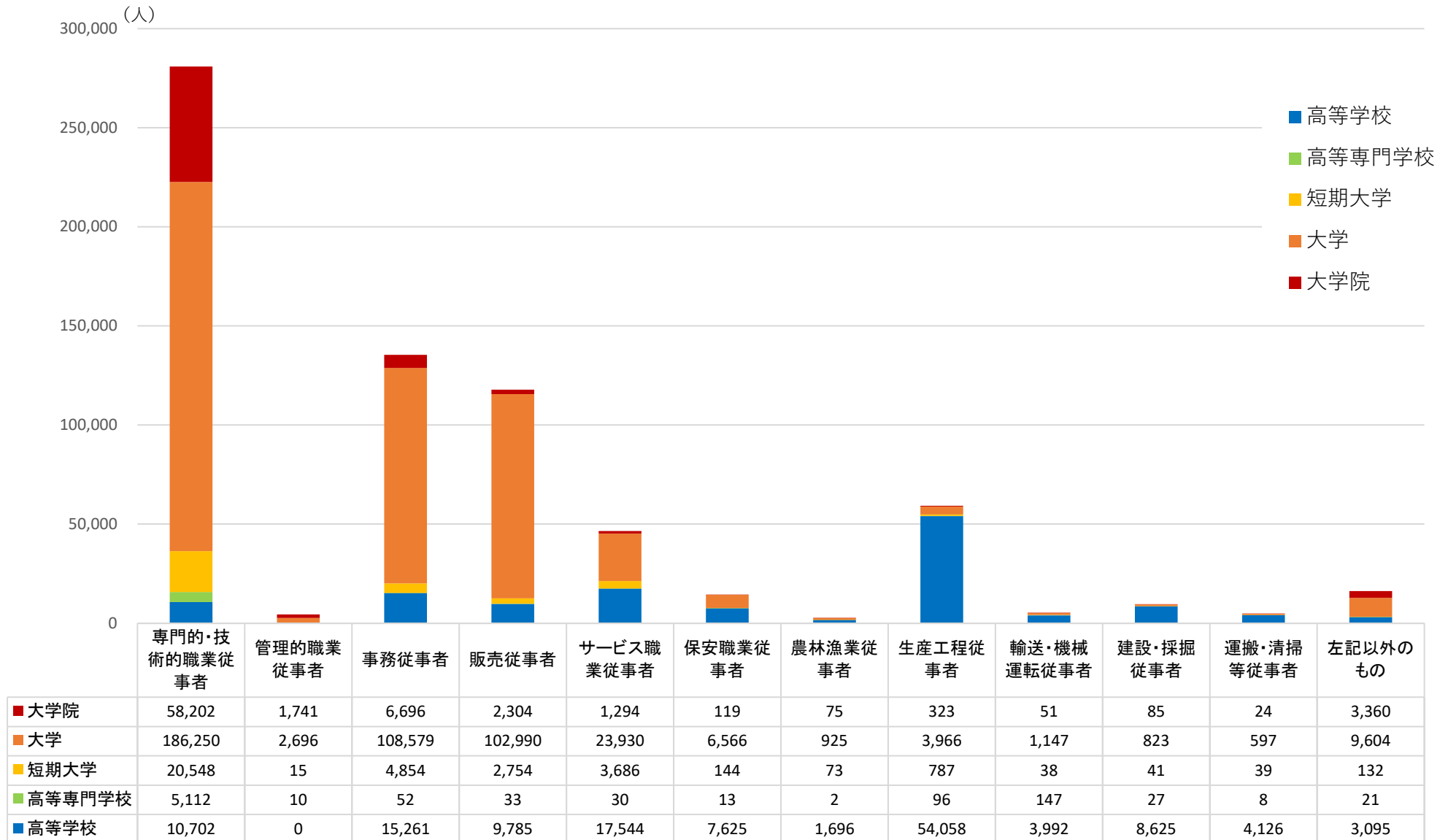
(出典)「国勢調査」(総務省統計局)

※1995年、2000年及び2005年は、総務省統計局による抽出詳細集計に基づく推計、集計である。

1990年までとは産業の表章が異なっており、接合は行えない。

各学校段階の職業別就職者数

- 専門的・技術的職業従事者「事務従事者」「販売従事者」の職業には、多くの大学卒業者が就職している。
- 短期大学、高等専門学校及び大学院の卒業者は、「専門的・技術的職業従事者」への就職が多い。

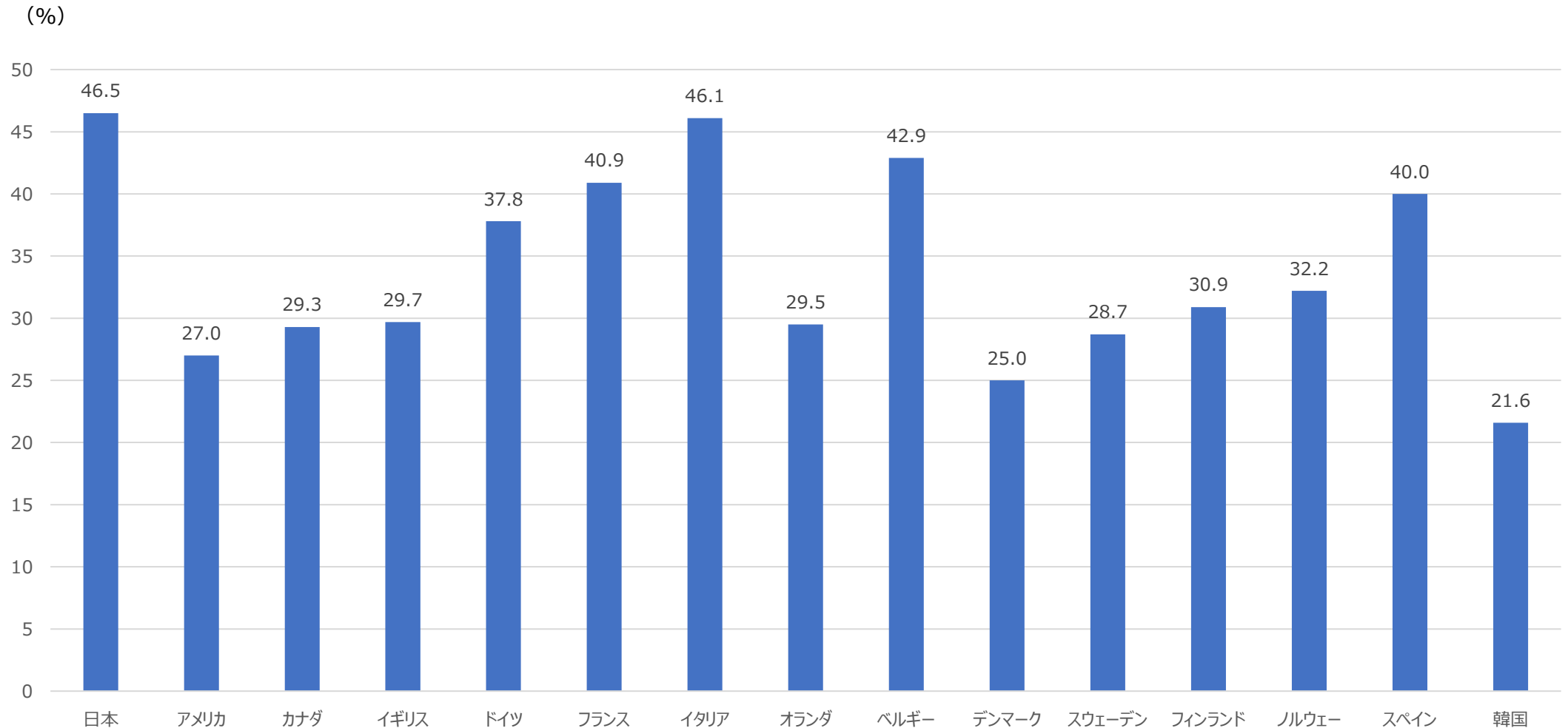


(出典) 文部科学省「令和5年度学校基本統計」

※ 専門学校は職業別就職者数データがないため記載していない。

勤続10年以上の雇用者割合(諸外国比較)

日本における勤続10年以上の雇用者比率は46.5%であり、他の先進国と比べて雇用の流動性が低い。

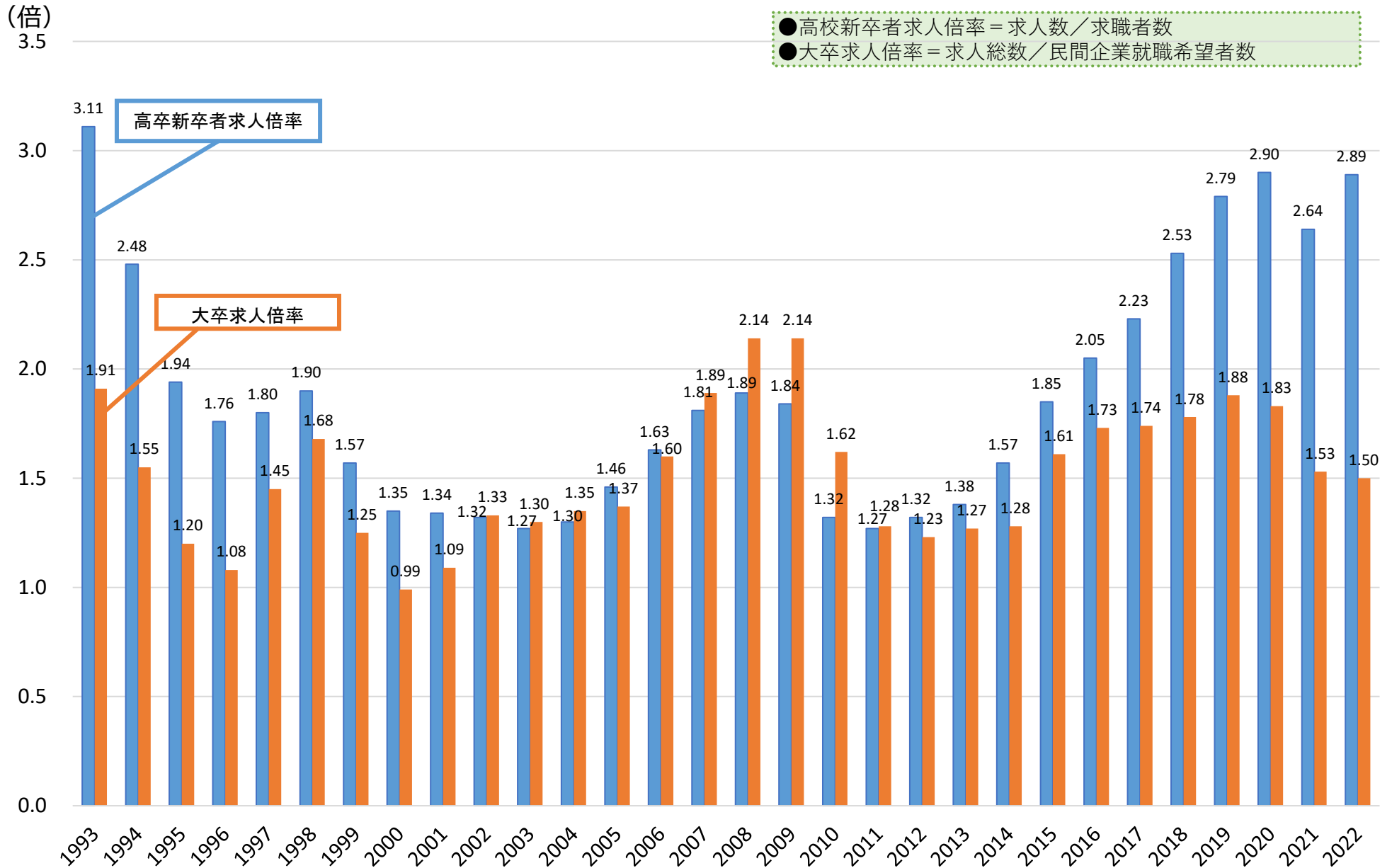


出典：【日本】厚生労働省（2023.3）「2022年賃金構造基本統計調査」
【その他】OECD (<https://stats.oecd.org/>) “Employment by job tenure intervals” 2023年9月
注 1)2022年6月末時点における、民営事業所の常用労働者が対象。短時間労働者を除く。JILPTによる算出
2)Dependent employmentが対象。

(出典) 労働政策研究・研修機構 データブック国際労働比較2024

高校新卒者求人倍率と大卒求人倍率の推移

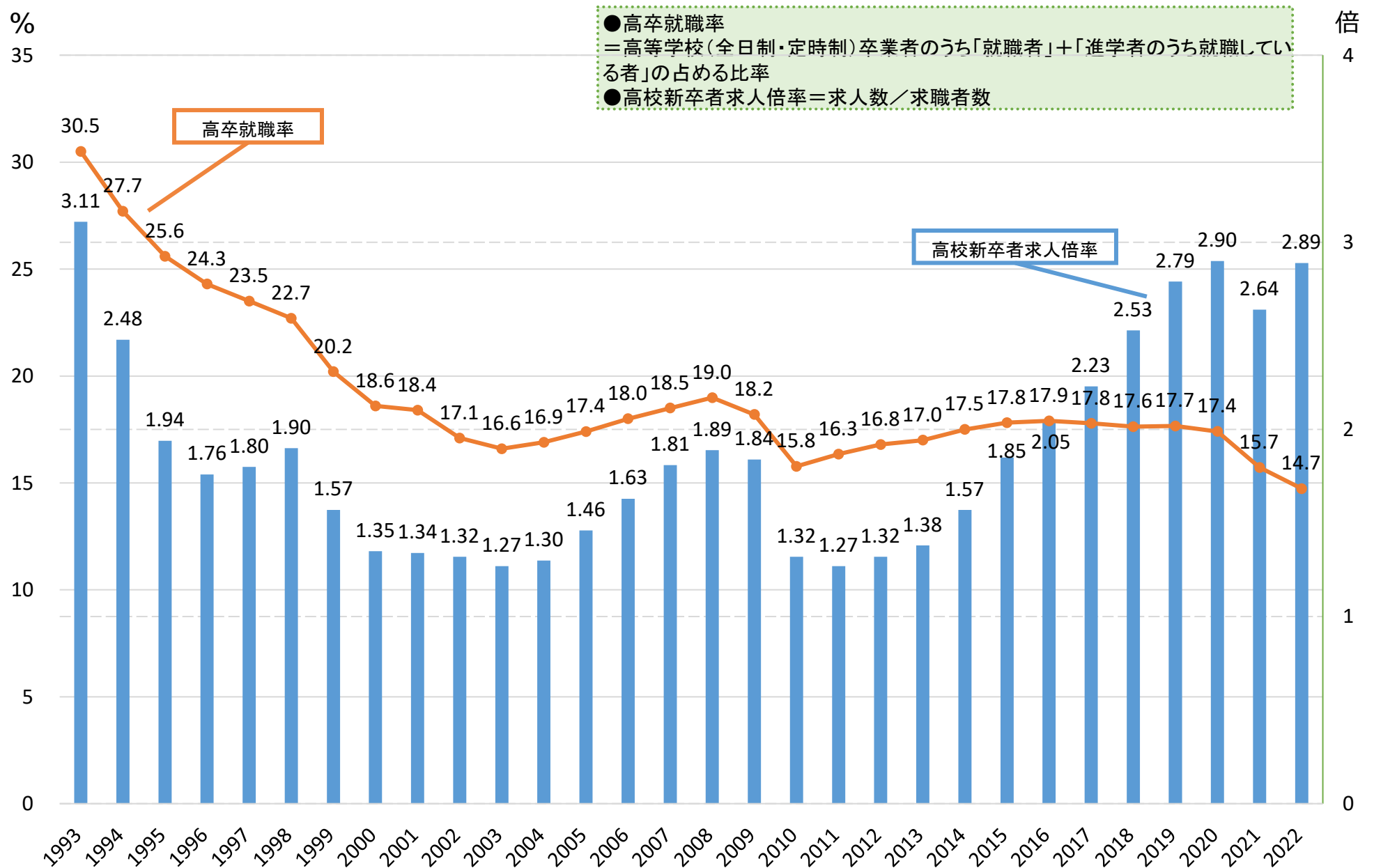
- 高卒新卒者求人倍率は平成5年に最も高くなったが、バブル崩壊以降減少。リーマンショック前は改善していたが、以降減少。近年は改善している。
- 大卒求人倍率も同様に、バブル崩壊以降減少。リーマンショック前に最高値となったが、以降は減少。近年は新型コロナウイルス感染症の影響等により悪化。



出典：厚生労働省(高校新卒者求人倍率)、リクルートワークス研究所(大卒求人倍率)

高卒就職率と高校新卒者求人倍率の推移

高卒就職率は、求人倍率と同様、バブル崩壊後減少。リーマンショック前に若干上昇したが、その後減少し、以降横ばい。近年は、新型コロナウイルス感染症の影響により減少。一方で、求人倍率はリーマンショック後の減少から上昇に転じている。



デジタル化の進展

世界デジタル競争ランキング(2023年)

日本は前年調査から3つランクを下げた32位となり、2017年の調査開始以来過去最低となった。

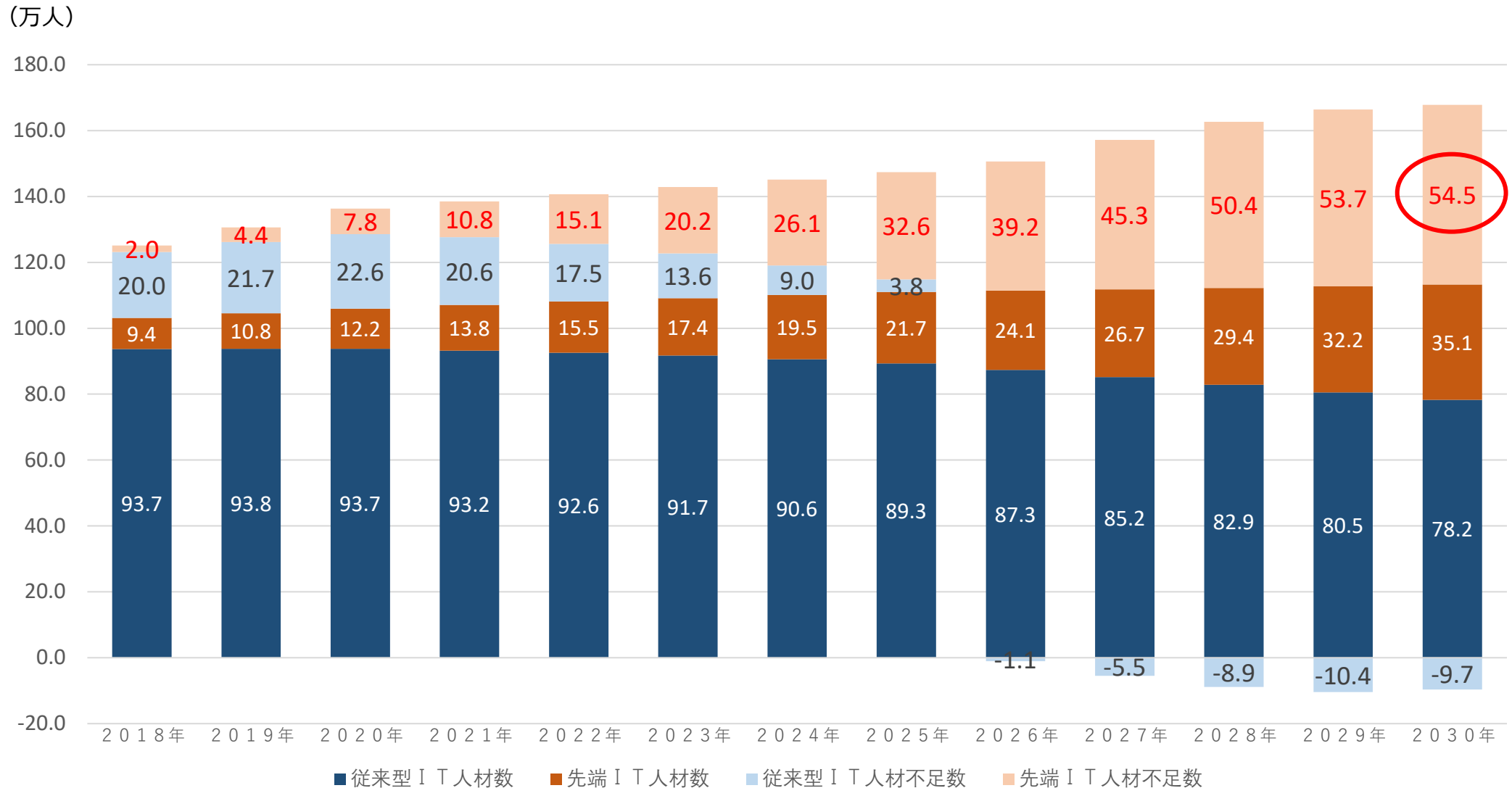
順位	国・地域	前回順位	順位変化
1	米国	2	↑ 1
2	オランダ	6	↑ 4
3	シンガポール	4	↑ 1
4	デンマーク	1	↓ -3
5	スイス	5	→ 0
6	韓国	8	↑ 2
7	スウェーデン	3	↓ -4
8	フィンランド	7	↓ -1
9	台湾	11	↑ 2
10	香港	9	↓ -1
11	カナダ	10	↓ -1
12	アラブ首長国連邦 (UAE)	13	↑ 1
13	イスラエル	15	↑ 2
14	ノルウェー	12	↓ -2
15	ベルギー	23	↑ 8
16	オーストラリア	14	↓ -2
17	アイスランド	21	↑ 4
18	エストニア	20	↑ 2
19	中国	17	↓ -2
20	英国	16	↓ -4

順位	国・地域	前回順位	順位変化
21	アイルランド	24	↑ 3
22	オーストリア	18	↓ -4
23	ドイツ	19	↓ -4
24	チェコ	33	↑ 9
25	ニュージーランド	27	↑ 2
26	ルクセンブルク	30	↑ 4
27	フランス	22	↓ -5
28	リトアニア	25	↓ -3
29	カタール	26	↓ -3
30	サウジアラビア	35	↑ 5
31	スペイン	28	↓ -3
32	日本	29	↓ -3
33	マレーシア	31	↓ -2
34	カザフスタン	36	↑ 2
35	タイ	40	↑ 5
36	ポルトガル	38	↑ 2
37	スロベニア	37	→ 0
38	バーレーン	32	↓ -6
39	ポーランド	46	↑ 7
40	ラトビア	34	↓ -6

【出典】IMD「世界デジタル競争ランキング(2023)」を基に文部科学省作成。

IT人材需給に関する試算

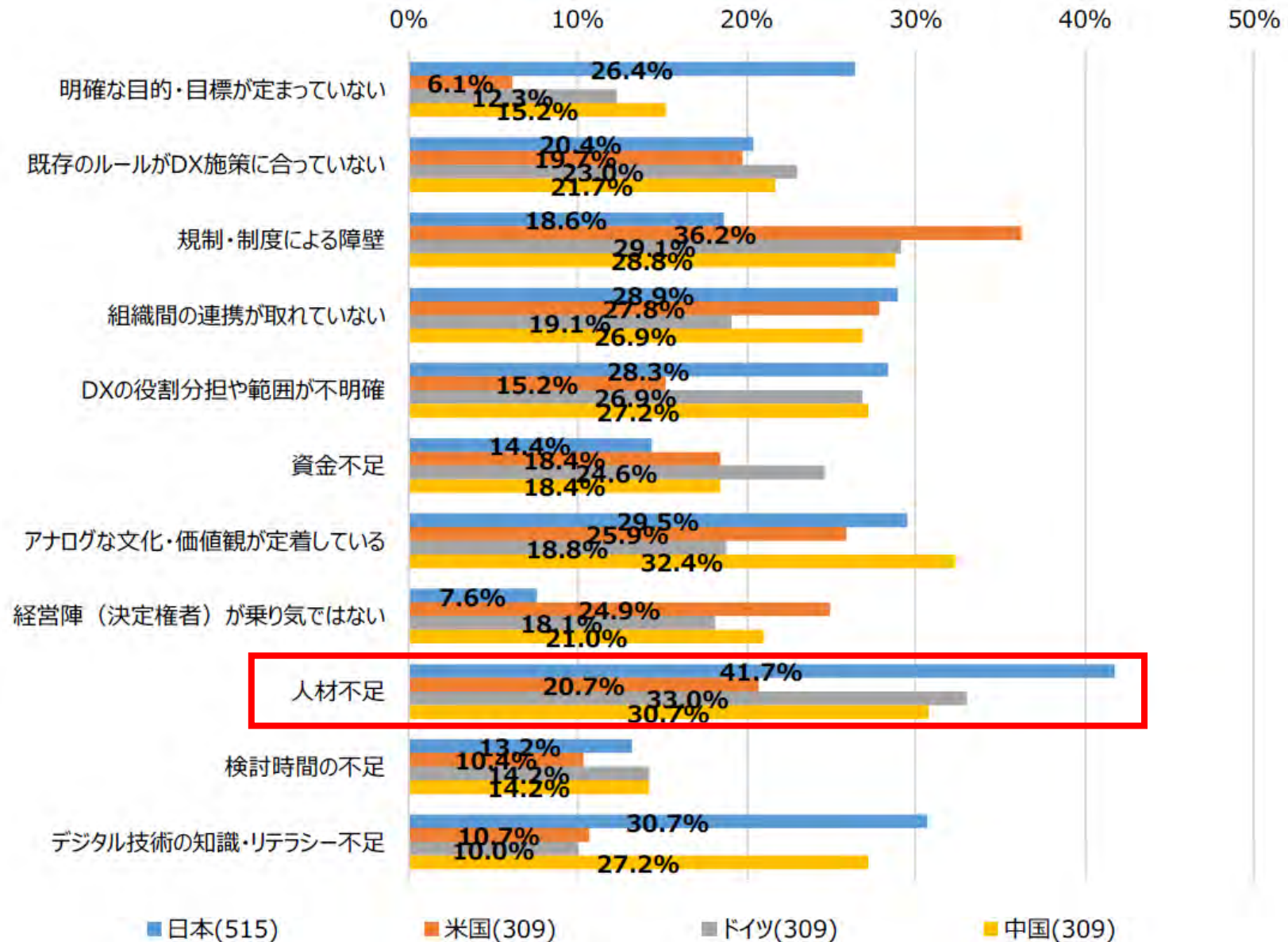
IT人材需給に関する試算では、人材のリスキングが停滞した場合、2030年には先端IT人材が54.5万人不足。



(出典) 経済産業省委託調査「IT人材需給に関する調査(みずほ情報総研株式会社)」(2019年3月)より作成。

企業がデジタル化を推進する上での課題(日米独中比較)

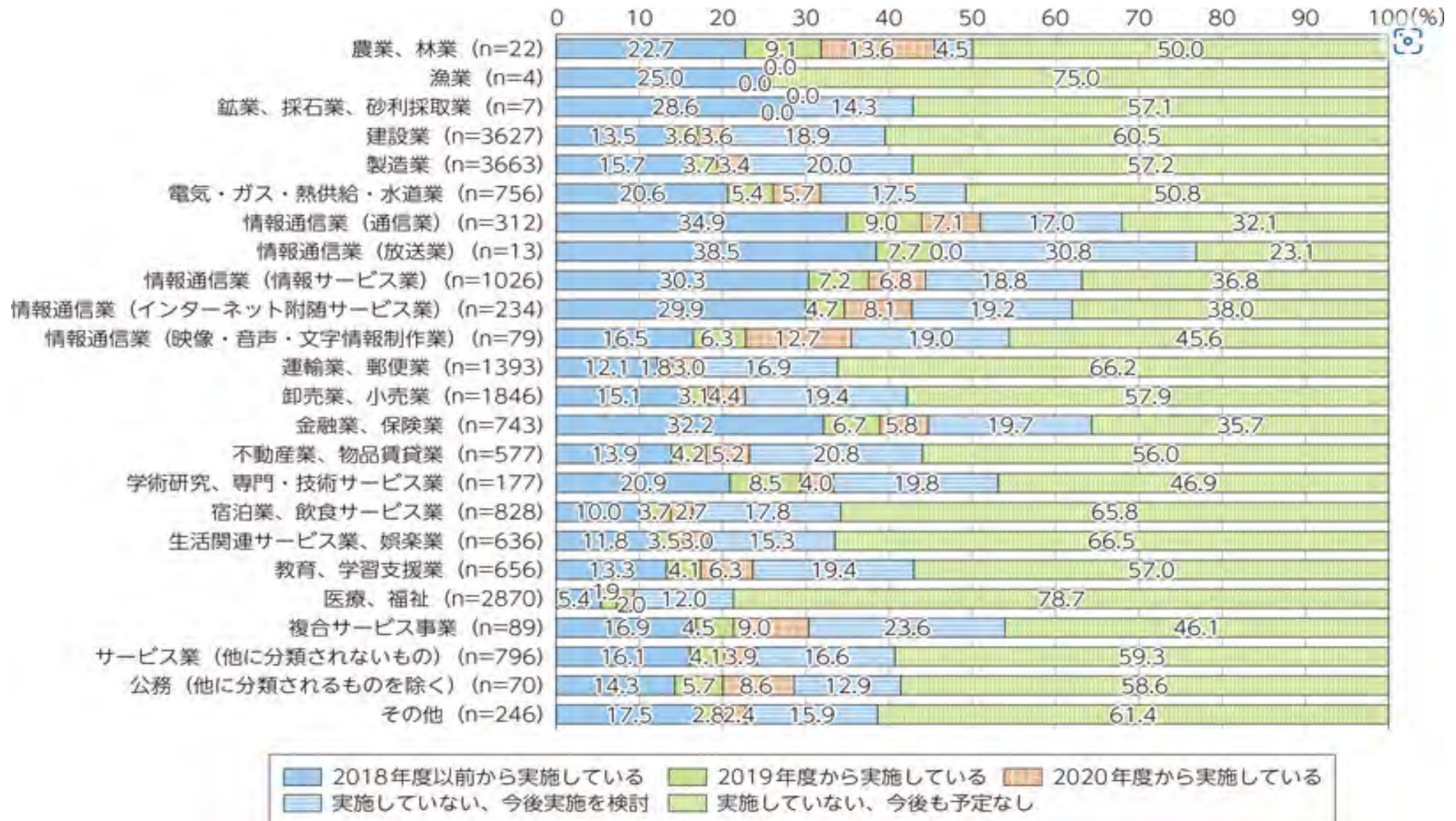
アメリカ、ドイツ、中国と比較して、日本はデジタル化を推進する上での課題として、「人材不足」を挙げている企業が圧倒的に多い。



(出典) 総務省委託調査「国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究の請負成果報告書(株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所)」(2023年3月)

デジタル・トランスフォーメーションの業種別状況

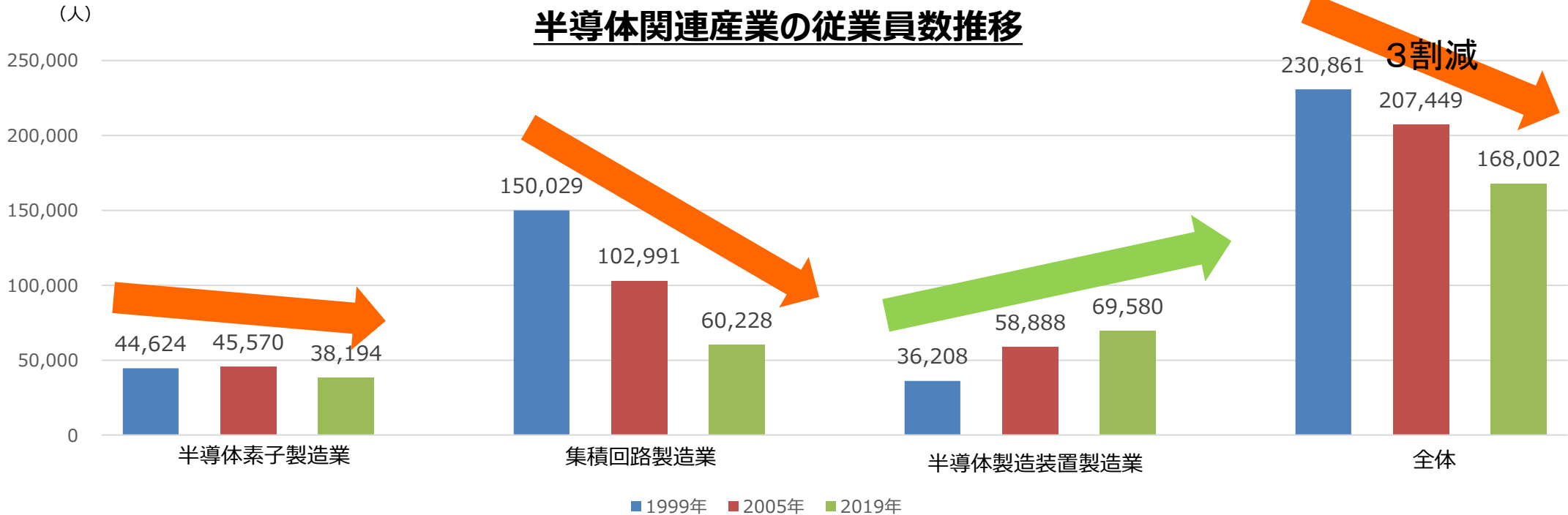
デジタル・トランスフォーメーションの業種別の状況は、情報通信業では取組が軒並み進んでいるほか、金融業、保険業が約45%と取組が進んでいる。



(出典)総務省(2021)「デジタル・トランスフォーメーションによる経済へのインパクトに関する調査研究」

我が国の半導体関連産業の人材動向

- 半導体関連事業所の減少に伴い、従業員数も基本的に減少傾向。半導体製造装置製造業は増加傾向であるものの、集積回路製造業は大幅減。全体として20年間で約3割減。
- 足下では、今後の世界的な半導体市場の拡大見込みを受けて、半導体関連産業は人材不足の状態。
- 例えば、主要8社で、今後10年間で少なくとも4万人程度の半導体人材が追加が必要になると見込まれている。



【出典】平成11年・平成17年・令和2年工業統計
 ※令和2年調査に置いては、便宜上、「半導体素子（光電変換素子を除く）」と「光電変換素子」を合計して「半導体素子」としている
 ※「全体」は、「半導体素子製造業」「集積回路製造業」「半導体製造装置製造業」の合計

【参考】
 ✓ 半導体素子：ダイオード、トランジスタ、サーミスタ、など
 ✓ 集積回路：MCU、MPU、DRAM、SRAM、フラッシュメモリ、CMOSイメージセンサ、など
 ✓ 半導体製造装置：レジスト処理装置、電子ビーム露光装置、ダイシング装置、など

電子情報技術産業協会（JEITA）の示した今後10年間の半導体人材の必要数

北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州	合計
6,000人	12,000人	6,000人	4,000人	3,000人	9,000人	40,000人

※ JEITA半導体部会の主要企業8社による見込み

（出典）経済産業省商務情報政策局「半導体・デジタル産業戦略」（令和5年（2023年）5月）

社会ニーズの変化

仕事に必要な能力等の需要変化予測

意識・行動面を含めた仕事に必要な能力等について、現在は「注意深さ・ミスがないこと」「責任感・まじめさ」が重視されるが、将来は「問題発見力」「的確な予測」「革新性」が一層求められるとの予測がある。

56の能力等に対する需要

2015年	
注意深さ・ミスがないこと	1.14
責任感・まじめさ	1.13
信頼感・誠実さ	1.12
基本機能（読み、書き、計算、等）	1.11
スピード	1.10
柔軟性	1.10
社会常識・マナー	1.10
粘り強さ	1.09
基盤スキル※	1.09
意欲積極性	1.09
⋮	⋮



2050年	
問題発見力	1.52
的確な予測	1.25
革新性※	1.19
的確な決定	1.12
情報収集	1.11
客観視	1.11
コンピュータスキル	1.09
言語スキル：口頭	1.08
科学・技術	1.07
柔軟性	1.07
⋮	⋮

※基盤スキル：広く様々なことを、正確に、早くできるスキル

※革新性：新たなモノ、サービス、方法等を作り出す能力

（注）各職種で求められるスキル・能力の需要度を表す係数は、56項目の平均が1.0、標準偏差が0.1になるように調整している。

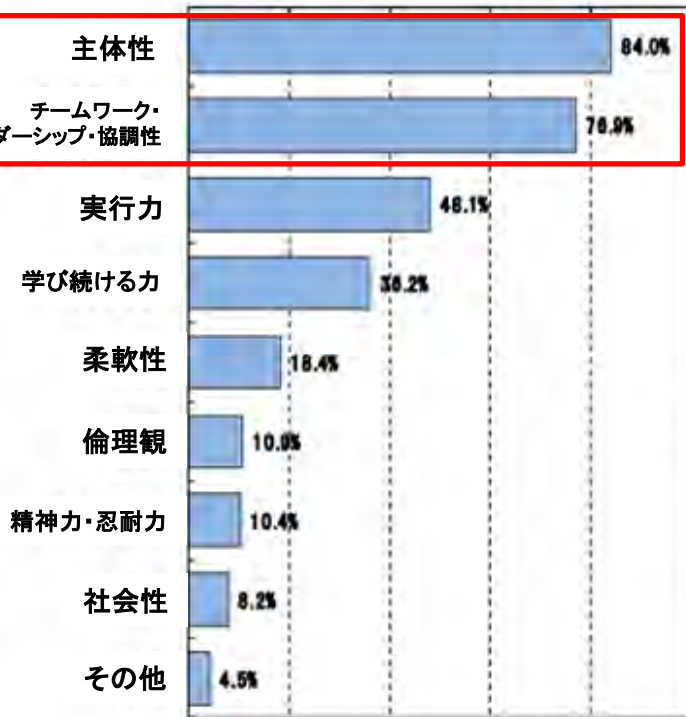
（出典）経済産業省「未来人材ビジョン」（令和4年）より

産業界が求める人材ニーズ

採用の観点から、産業界が大卒者に特に期待する資質としては「主体性」「チームワーク・リーダーシップ・協調性」、能力としては「課題設定・解決能力」「論理的思考力」、知識としては「文系・理系の枠を超えた知識・教養」「専攻分野における基礎知識」の割合が高い。

<特に期待する資質>

0% 20% 40% 60% 80% 100%

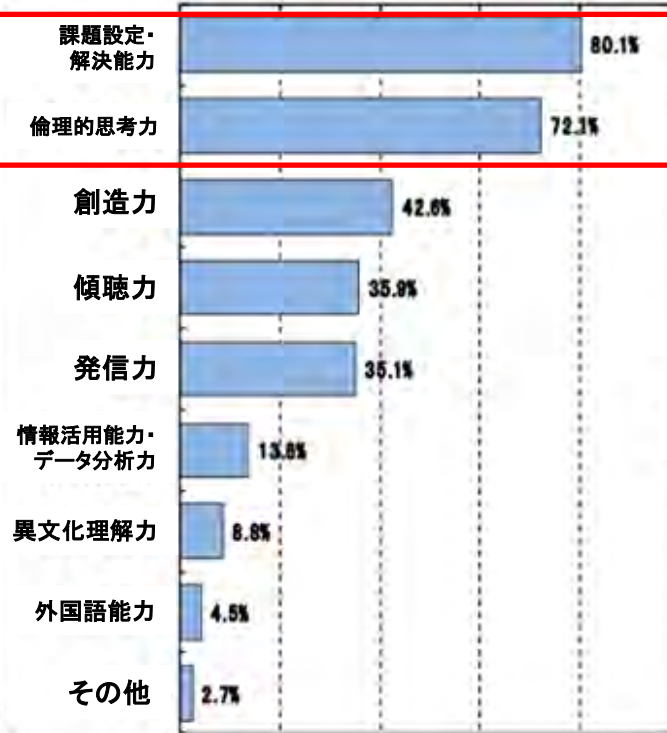


(n=376)

注: 資質・能力・知識についてそれぞれ3つまで選択可能

<特に期待する能力>

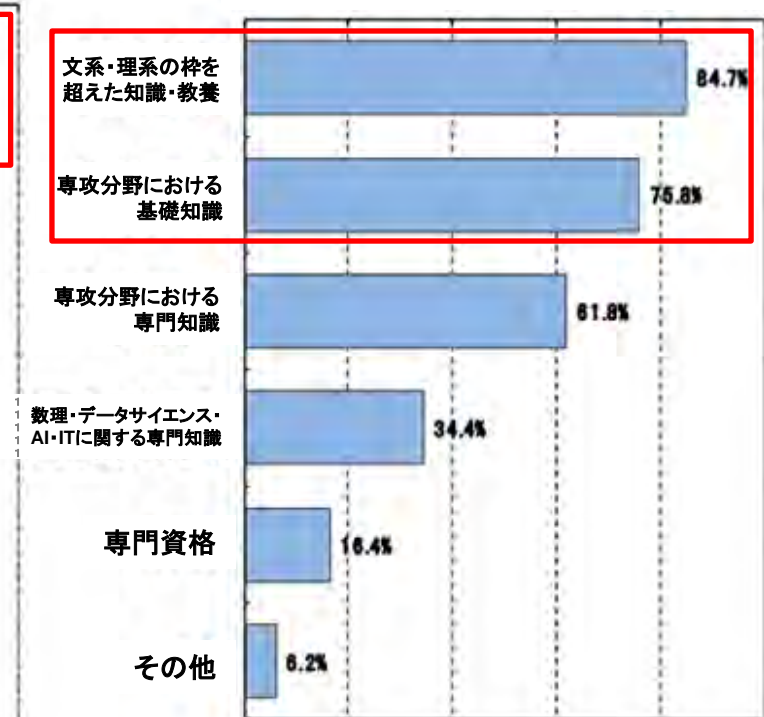
0% 20% 40% 60% 80% 100%



(n=376)

<特に期待する知識>

0% 20% 40% 60% 80% 100%

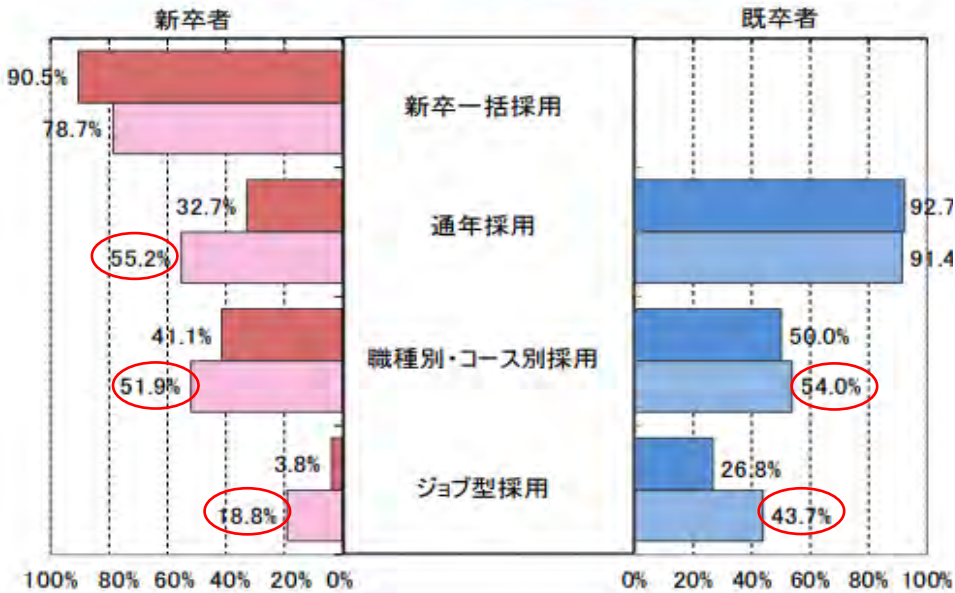


(n=372)

産業界における採用トレンドの変化

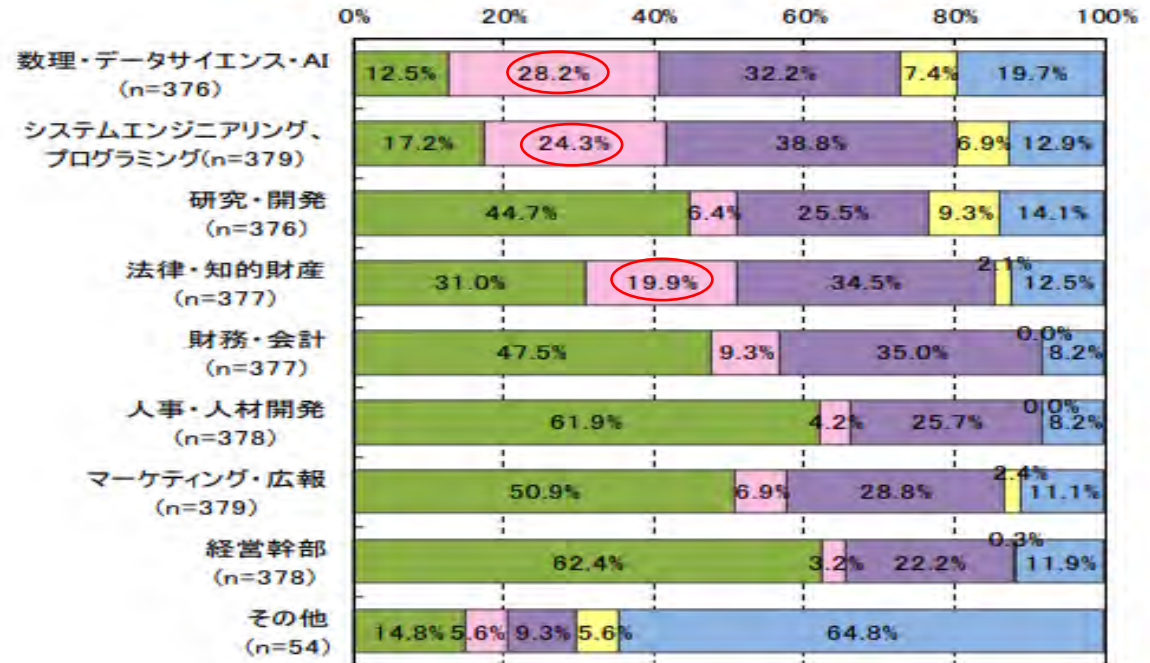
今後5年程度先の採用トレンドとして、「新卒一括採用」以外の「通年採用」「職種別・コース別採用」「ジョブ型採用」の実施割合が増加し、多様化が進む見込みであり、「数理・データサイエンス・AI」「システムエンジニアリング、プログラミング」「法律・知的財産」の分野では、主として即戦力の外部採用の方針の企業が多い。

＜新卒者・既卒者の採用方法の動向＞（複数回答可）



- これまで実施 新卒者 (n=370)
- 今後5年程度先実施 新卒者 (n=362)
- これまで実施 既卒者 (n=354)
- 今後5年程度先実施 既卒者 (n=350)

＜分野別専門人材の採用・育成動向＞



- 主として、社内で育成
- 社内育成と外部採用が同程度
- 主として、即戦力の外部採用
- 専門人材を必要としない
- 未定

(出典)「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果(2022年1月18日)」(一般社団法人 日本経済団体連合会)

大学で取得することが期待されるコンピテンス(資質・能力)の認識

大学教員は理論的思考や分析力、知識適用力や問題特定・解決力などの技能的コンピテンスが必要と考える一方で、企業は対人関係や自己管理力及び協調性などの資質的なコンピテンスを重視するという報告がある。

コンピテンス重要度認識上位5位（日本）

全対象者	
1位	5.母国語により、口語・筆記両方でコミュニケーションできる
2位	14.解くべき問題を特定し、解決することができる
3位	3.時間を管理しつつ、物事を計画的に進めることができる
4位	15.筋道を立てて考え、物事を決めることができる
5位	2.実際の状況に知識を適用することができる
教員	
1位	5.母国語により、口語・筆記両方でコミュニケーションできる
2位	1.抽象的な理論や概念を使って、物事を考え、分析し、まとめることができる
3位	2.実際の状況に知識を適用することができる
4位	14.解くべき問題を特定し、解決することができる
5位	22.自律的に仕事を進めることができる
学生	
1位	14.解くべき問題を特定し、解決することができる
2位	5.母国語により、口語・筆記両方でコミュニケーションできる
3位	1.抽象的な理論や概念を使って、物事を考え、分析し、まとめることができる
4位	2.実際の状況に知識を適用することができる
5位	15.筋道を立てて考え、物事を決めることができる

卒業生	
1位	3.時間を管理しつつ、物事を計画的に進めることができる
2位	14.解くべき問題を特定し、解決することができる
3位	28.与えられた職務とそれに伴う責任を、強い意志と忍耐力をもって遂行することができる
4位	5.母国語により、口語・筆記両方でコミュニケーションできる
5位	15.筋道を立てて考え、物事を決めることができる
企業	
1位	16.チームの一員として働くことができる
2位	3.時間を管理しつつ、物事を計画的に進めることができる
3位	17.他人とうまく関係を作ることができる
4位	5.母国語により、口語・筆記両方でコミュニケーションできる
5位	15.筋道を立てて考え、物事を決めることができる

(出典) 大卒に求められる資質と技能の国際比較調査

調査の枠組：Tuning Pilot を基礎枠組みとし、「何が身に付けばよいのか」=大卒に求められる資質と技能（コンピテンス）を、大学のステークホルダーである学生、教員、卒業生、企業等雇用者に尋ねる質問紙調査を実施（汎用と専門分野別に設計）

調査対象：2012年に文部科学省の支援の下に設置された研究大学12校（北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、早稲田大学、慶應義塾大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）を参加大学とする「教育改革推進懇話会」の「チューニング・ワーキング」によって2014年から3回にわたって実施

有効回答数：教員586人、学生2,767人、卒業生817人、企業473人

若者の現状

PISA2022の結果

日本は数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーのいずれにおいても諸外国と比較して上位に位置している。

PISA2022の3分野の得点の国際比較（概要）

OECD加盟国（37か国）における比較

 は日本の平均得点と統計的な有意差がない国

	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	日本	536	アイルランド*	516	日本	547
2	韓国	527	日本	516	韓国	528
3	エストニア	510	韓国	515	エストニア	526
4	スイス	508	エストニア	511	カナダ*	515
5	カナダ*	497	カナダ*	507	フィンランド	511
6	オランダ*	493	アメリカ*	504	オーストラリア*	507
7	アイルランド*	492	ニュージーランド*	501	ニュージーランド*	504
8	ベルギー	489	オーストラリア*	498	アイルランド*	504
9	デンマーク*	489	イギリス*	494	スイス	503
10	イギリス*	489	フィンランド	490	スロベニア	500
	OECD平均	472	OECD平均	476	OECD平均	485
	信頼区間※(日本) : 530-541		信頼区間(日本) : 510-522		信頼区間(日本) : 541-552	

全参加国・地域（81か国・地域）における比較

 は日本の平均得点と統計的な有意差がない国

	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	シンガポール	575	シンガポール	543	シンガポール	561
2	マカオ	552	アイルランド*	516	日本	547
3	台湾	547	日本	516	マカオ	543
4	香港*	540	韓国	515	台湾	537
5	日本	536	台湾	515	韓国	528
6	韓国	527	エストニア	511	エストニア	526
7	エストニア	510	マカオ	510	香港*	520
8	スイス	508	カナダ*	507	カナダ*	515
9	カナダ*	497	アメリカ*	504	フィンランド	511
10	オランダ*	493	ニュージーランド*	501	オーストラリア*	507
	信頼区間※(日本) : 530-541		信頼区間(日本) : 510-522		信頼区間(日本) : 541-552	

* 国名の後に「*」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を一つ以上満たしていないことを示す。

※信頼区間は調査対象者となる生徒全員（母集団）の平均値が存在すると考えられる得点の幅を表す。PISA調査は標本調査であるため一定の幅をもって平均値を考える必要がある。

社会課題解決に関する若者の意識(諸外国比較)

若者の自身と社会の関わり意識について、以下の全ての項目で日本は6カ国中最下位となった。特に「自分は大人だと思う」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」がそれぞれ3割に満たず、他の国に差をつけて低い。

Q 以下の項目に同意しますか。(各国n=1000)

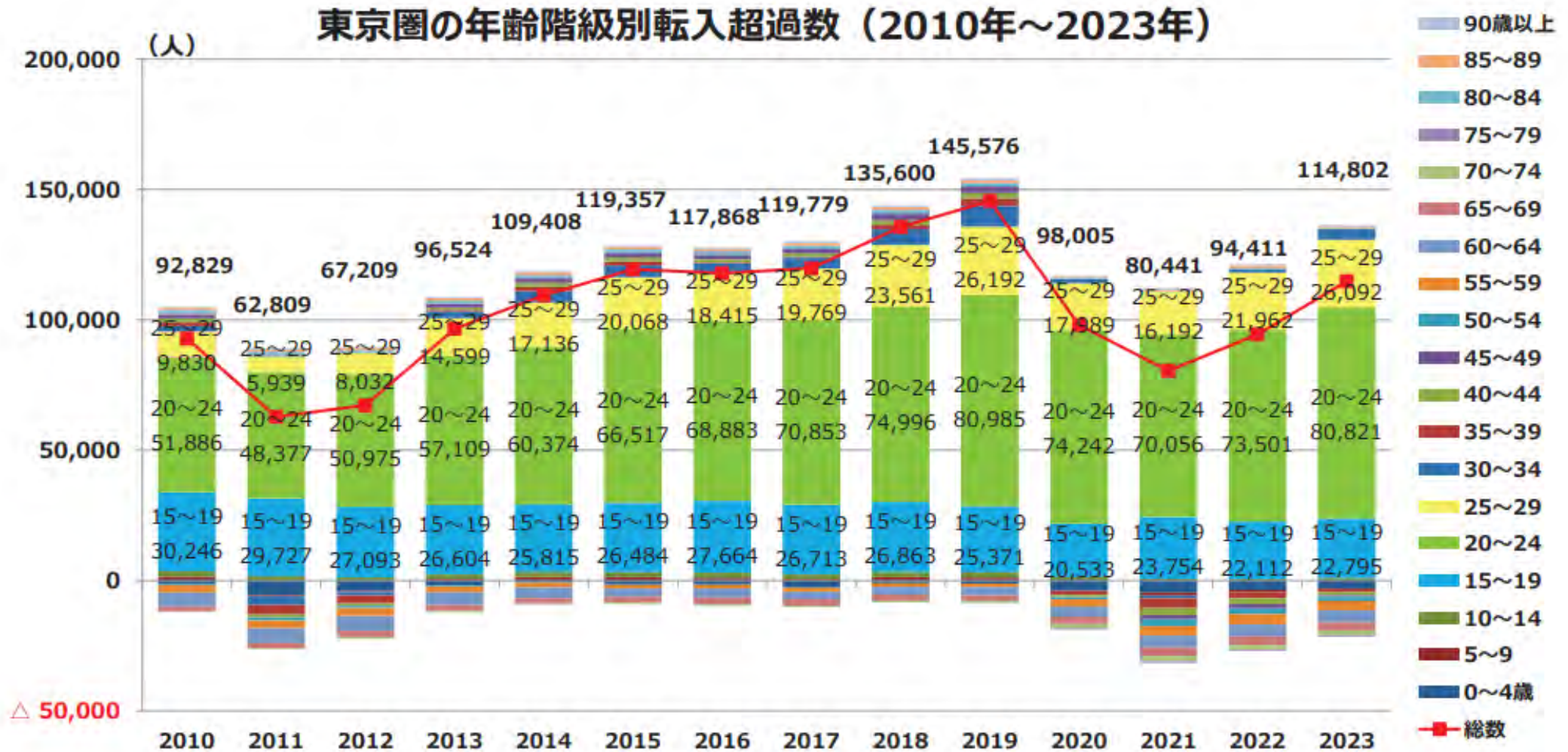
※「はい」回答率を掲載

(単位: %)	自分は大人だと思 う	自分は責任があ る社会の一員だと思 う	自分の行動で、 国や社会を 変えられると思 う	国や社会に役立 つことをしたいと思 う	慈善活動のため に寄付をしたい	ボランティア活動 に参加したい
日本	27.3 6位	48.4 6位	26.9 6位	61.7 6位	36.2 6位	49.7 6位
アメリカ	85.7	77.1	58.5	73.0	66.7	70.4
イギリス	85.9 1位	79.9	50.6	71.2	69.5	64.2
中国	71.0	77.1	70.9	82.1	78.9	85.3 1位
韓国	46.7	65.7	61.5	75.2	62.4	70.7
インド	83.7	82.8 1位	78.9 1位	92.6 1位	83.7 1位	78.1

(出典) 日本財団「18歳意識調査第46回 -社会や国に対する意識(6カ国調査)-」(令和4年3月)

東京圏への転入超過数(2010-2023年、年齢階級別)

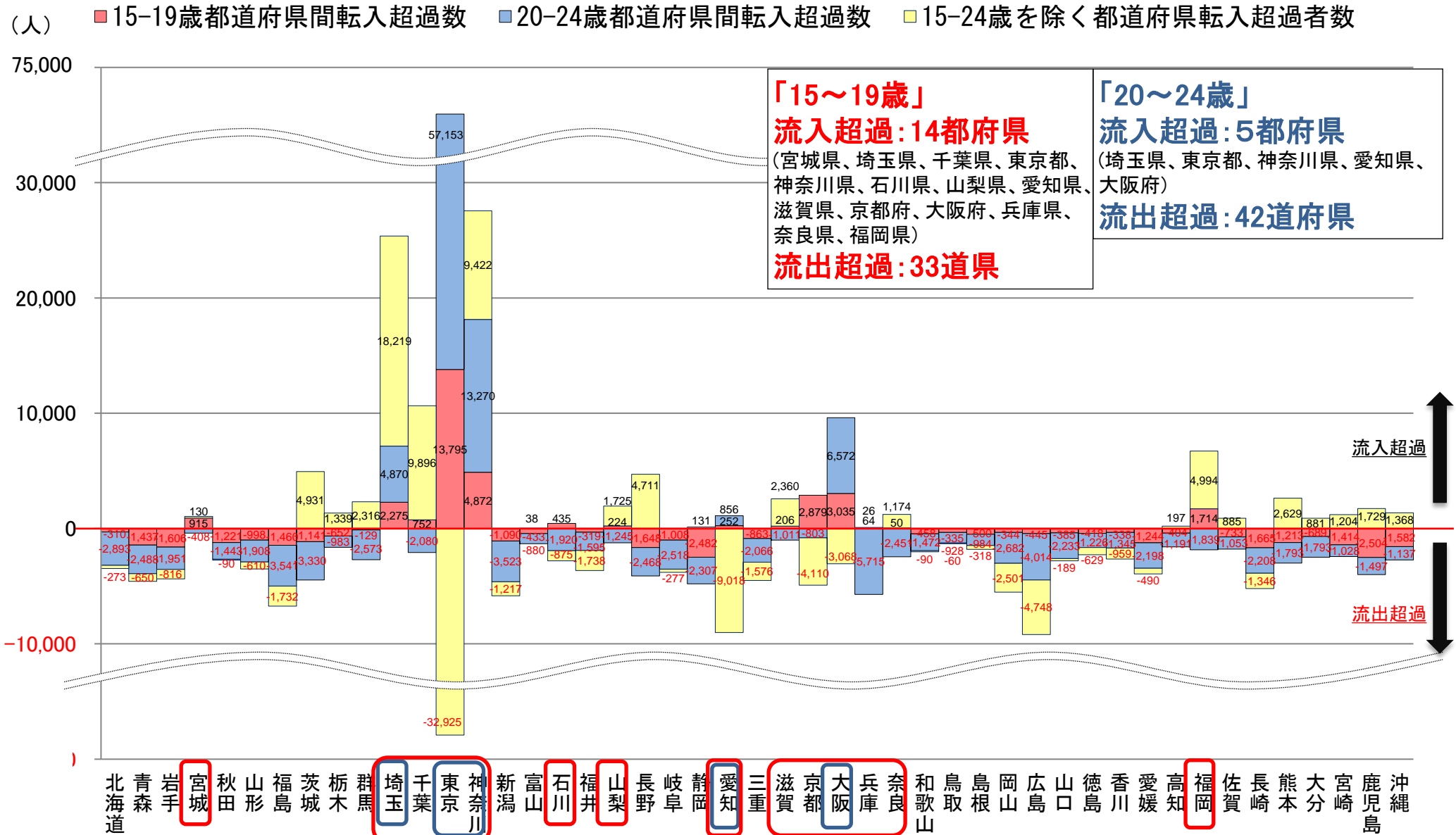
- 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、一時東京圏への流入が弱まったが、2022年は約9.4万人、2023年度は約11.5万人となるなど、東京圏への人の流れが強まりつつある。
- 東京圏の転入超過数の大半を10代後半、20代が占めており、大学等への進学や就職がきっかけとなっていることが考えられる。



(備考) 総務省「住民基本台帳人口移動報告(日本人移動者)」を元に内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局・内閣府地方創生推進事務局において作成。

若者の人口移動

若者の人口移動は、15～19歳（大学進学等）では各都市圏に、20～24歳（就職）では東京圏・大阪府・愛知県に集中している。



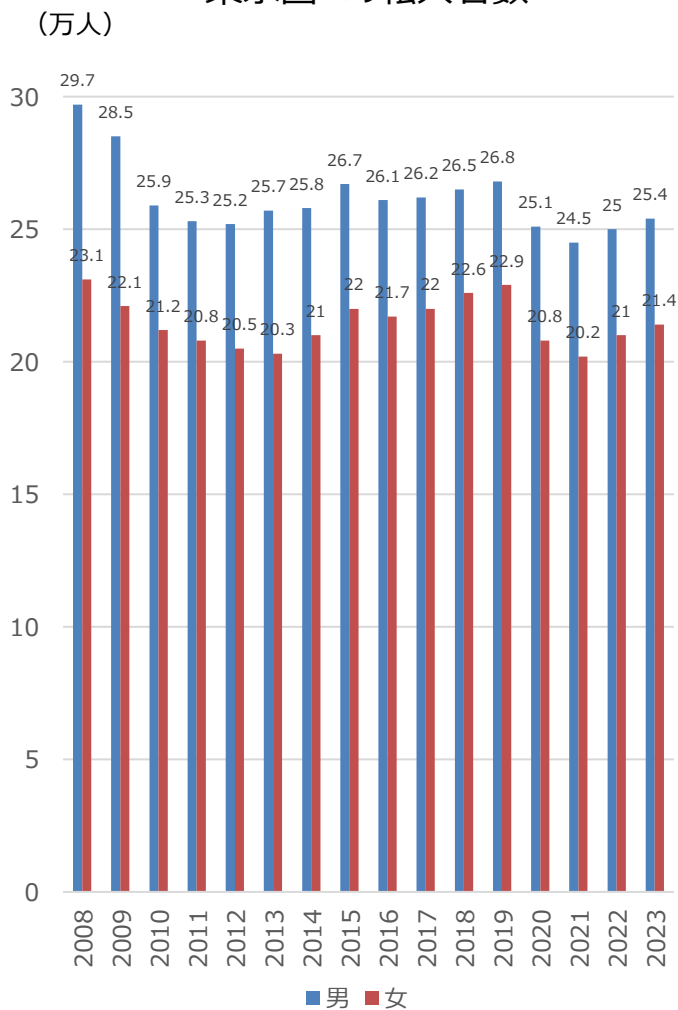
(注) 数値には外国人移動者を含む。

(出典) 総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告」(2022年)より作成

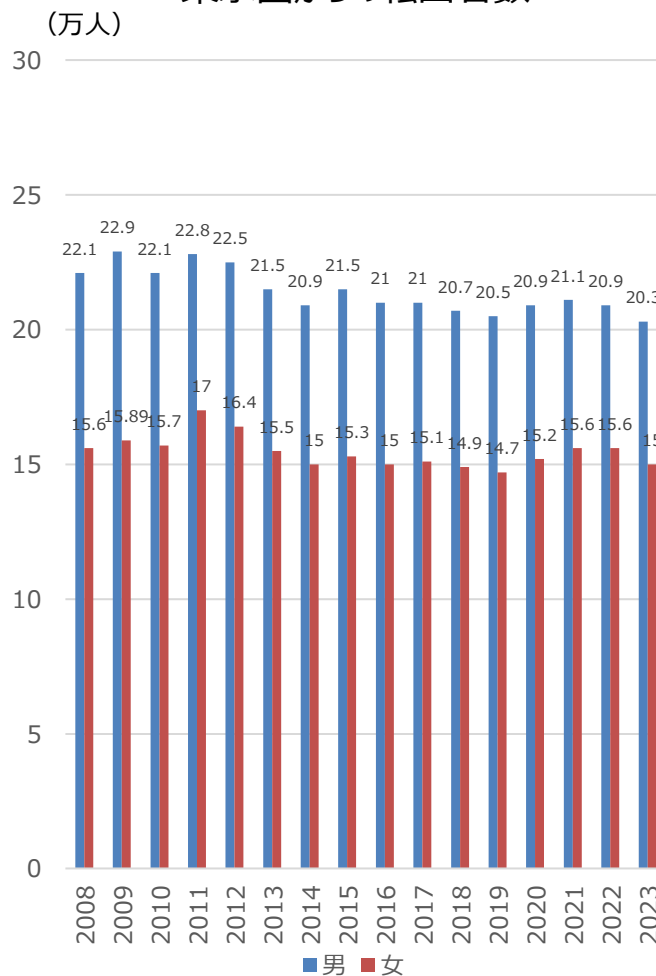
人口移動の状況(東京圏・男女別)

東京圏の転入者数・転出者数は男性が多く、転入超過数は女性が多い。

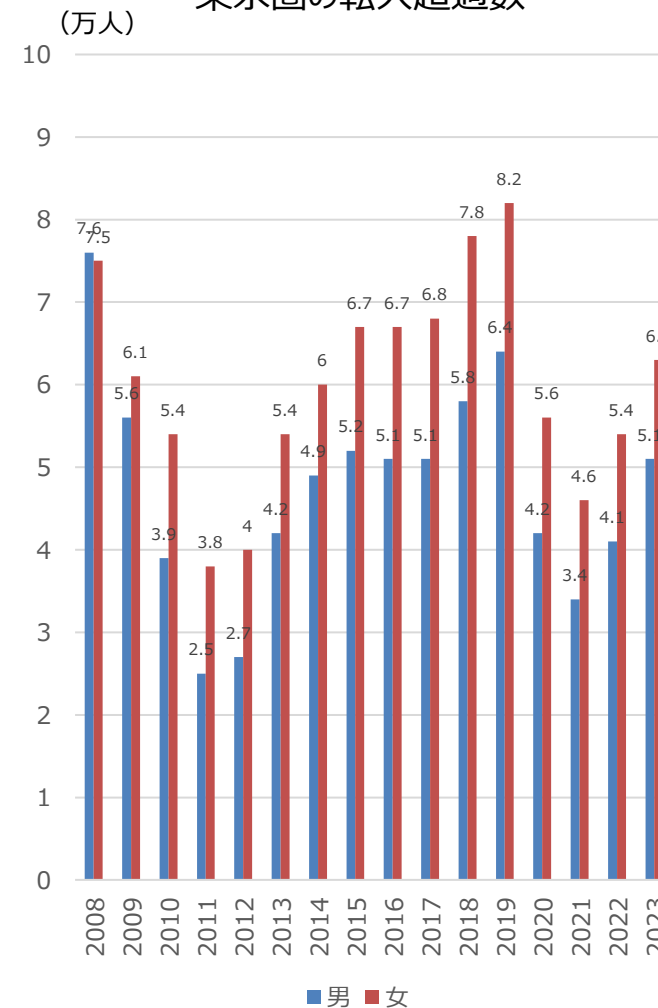
東京圏への転入者数



東京圏からの転出者数



東京圏の転入超過数



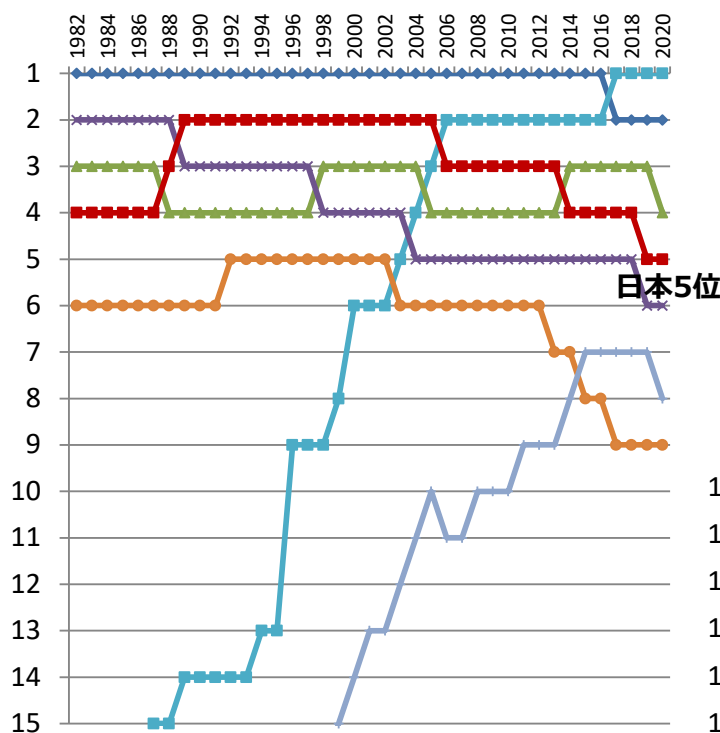
(備考) 総務省「住民基本台帳人口移動報告(日本人移動者)」を元に内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局・内閣府地方創生推進事務局において作成。

学術研究を取り巻く動向

主要国の論文数、注目度の高い論文数における世界ランクの変動

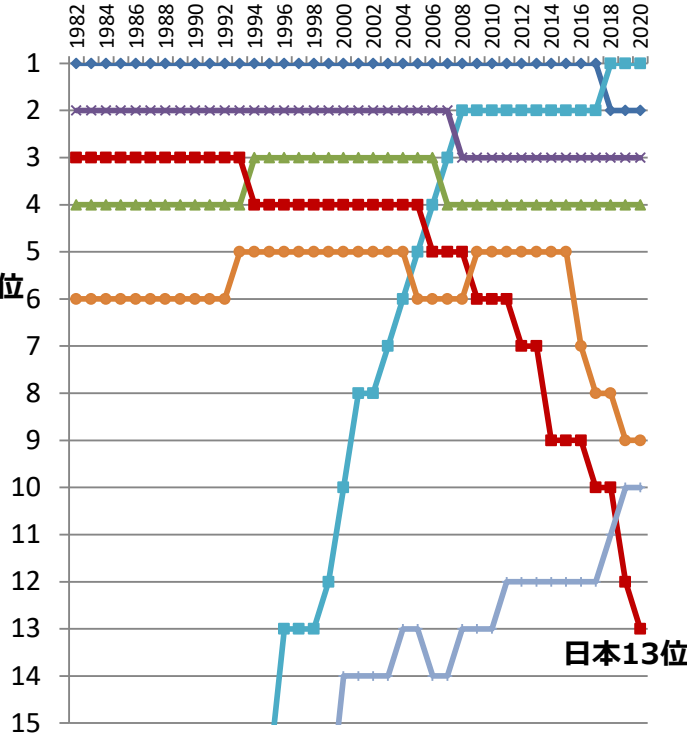
日本の論文数及び注目度の高い論文数(Top10%・Top1%補正論文数)における世界ランクが、2000年代半ばから低下。
 分数カウント法では、日本の論文数(2019-2021年の平均)は第5位、Top10%補正論文数は第13位、Top1%補正論文数は第12位。

論文数(分数)の世界ランク



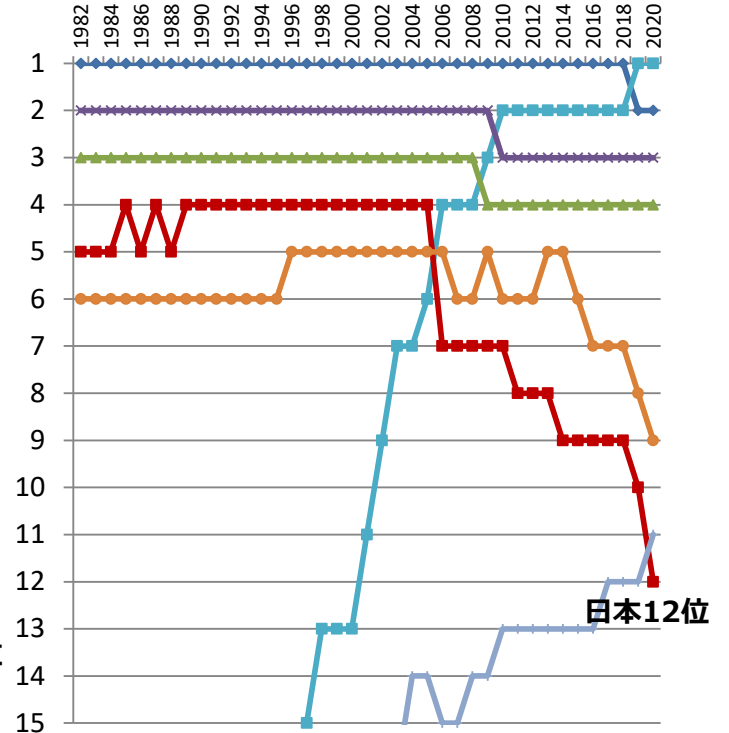
日本5位

Top10%補正論文数(分数)の世界ランク



日本13位

Top1%補正論文数(分数)の世界ランク



日本12位

— 米国 — 中国 — ドイツ — 英国 — 日本 — フランス — 韓国

分数カウント法とは、1件の論文が、日本の機関Aと米国の機関Bの共著の場合、日本を1/2、米国の1/2と数える方法。論文の生産への貢献度を示している。

(注1) Article, Reviewを分析対象とし、分数カウント法により分析。3年移動平均値であり、2020年は、2019-2021年平均値における世界ランクを意味する。

(注2) 論文の被引用数(2022年末の値)が各年各分野(22分野)の上位10%(1%)に入る論文数がTop10%(Top1%)論文数である。Top10%(Top1%)補正論文数とは、Top10%(Top1%)論文数の抽出後、実数で論文数の1/10(1/100)となるように補正を加えた論文数を指す。

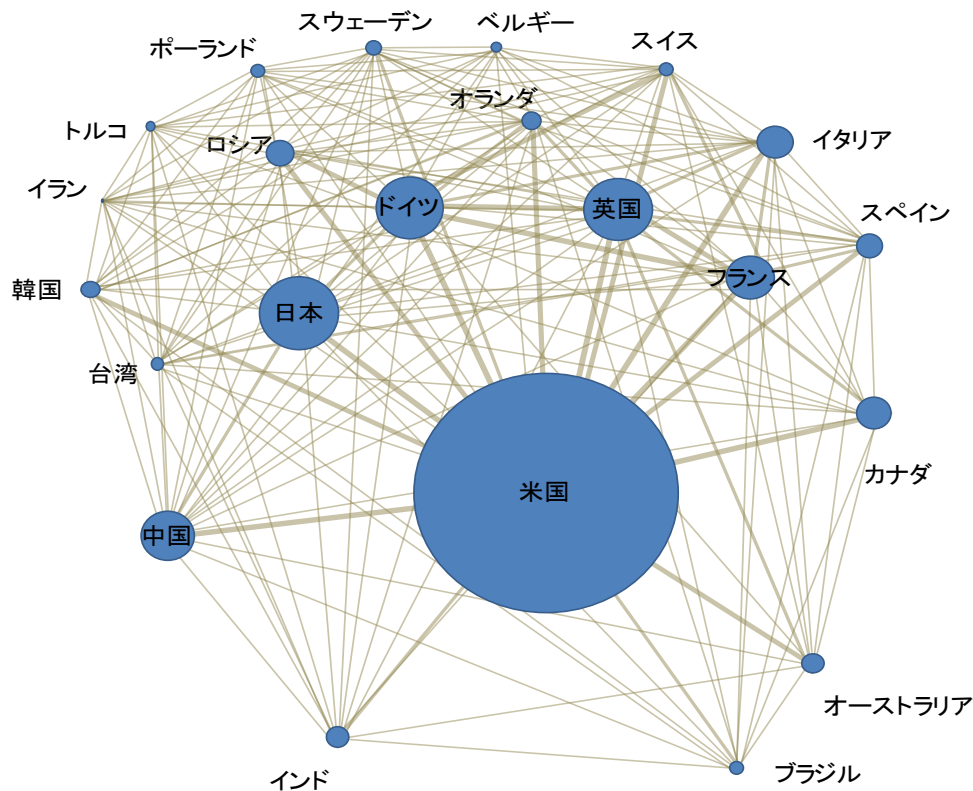
クラリベイト社 Web of Science XML (SCIE, 2022年末バージョン)を基に、科学技術・学術政策研究所が集計。

出典：文部科学省 科学技術・学術政策研究所「科学研究のベンチマーキング2023」(2023年8月)

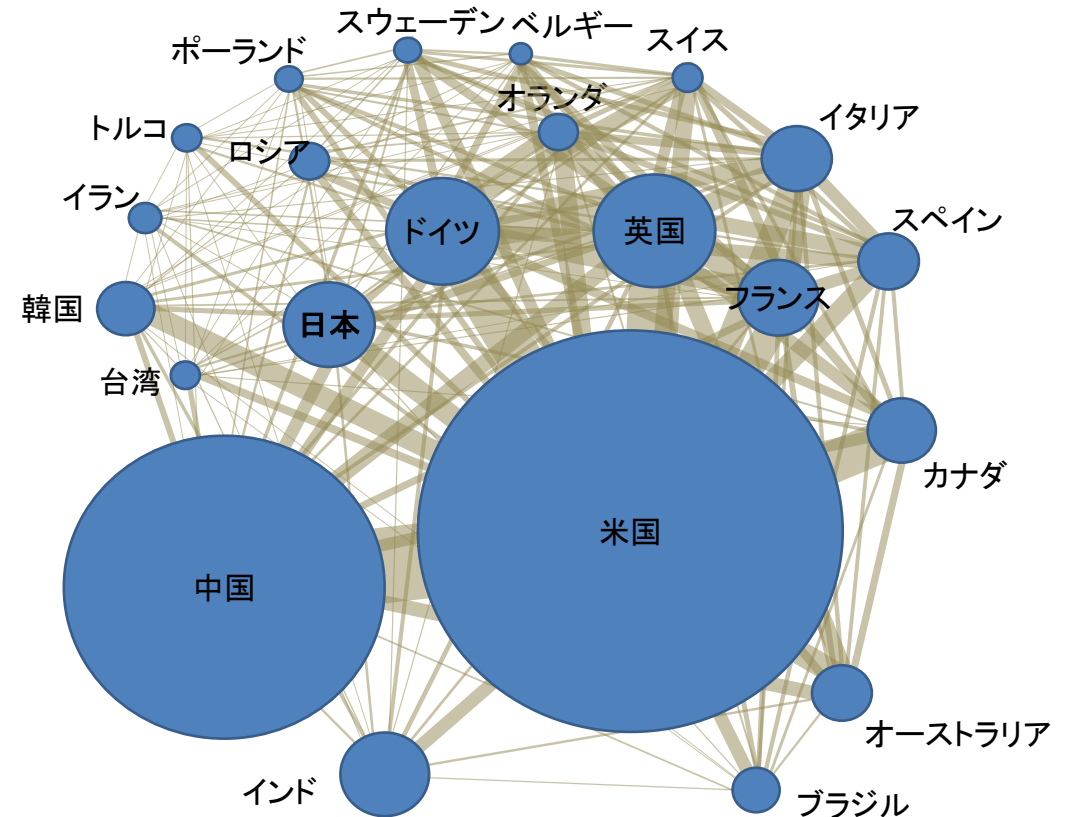
論文と国際共著論文の動向の変化

国際的に科学論文数や国際共著論文数が伸びており、特に中国の増加が目立つが、日本の伸びは鈍い。

2005年



2015年



- 注: 1. 円の大きさ(直径)は当該国又は地域の論文数を示している。
2. 円の間を結ぶ線は、当該国又は地域を含む国際共著論文数を示しており、線の太さは国際共著論文数の多さにより太くなる。
3. 直近3年間分の論文を対象とし、整数カウントにて求めている。

各国のノーベル賞受賞者数の推移

- 我が国のノーベル賞受賞者数（自然科学系）は米国、英国、ドイツ、フランスについて世界第5位。
- 過去の科学技術投資の結果として、2000年以降だけで見ると米国に次いで世界第2位となっている。

○各国のノーベル賞受賞者数（自然科学系3分野）の推移

	1901－1990年	1991－2000年	2001－2023年	合計
米国	156	39	82	277
英国	65	3	17	85
ドイツ	58	5	10	73
フランス	22	3	13	38
日本	5	1	19	25
スウェーデン	15	1	2	18
スイス	12	2	4	18
ロシア	10	1	3	14

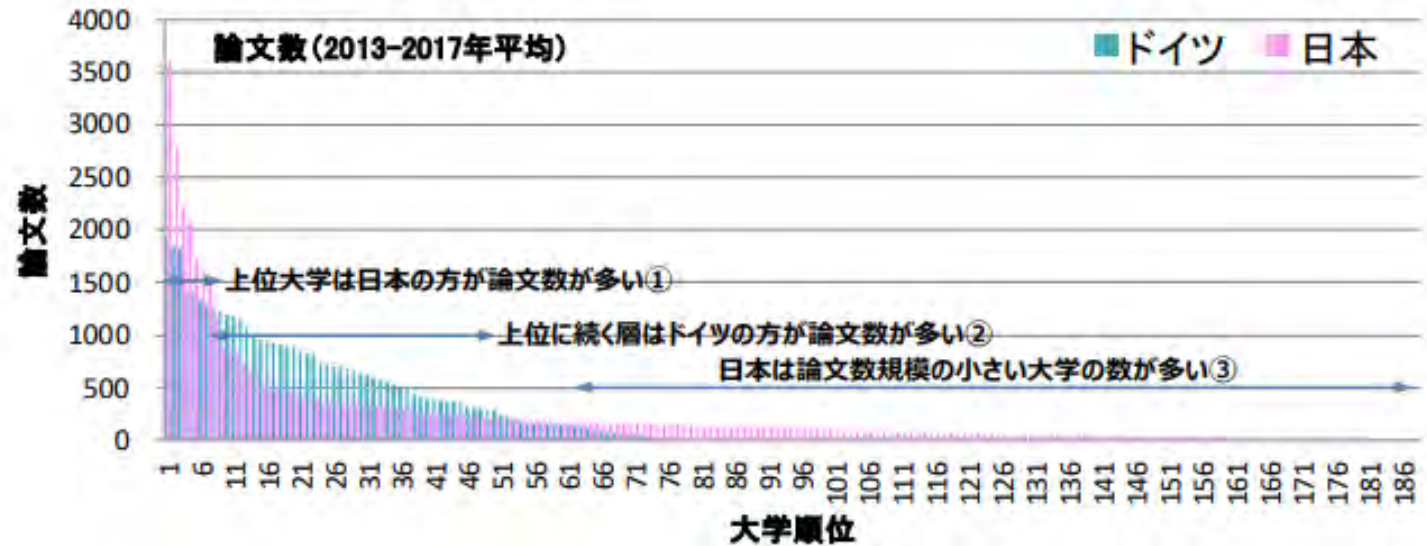
※日本人受賞者のうち、2008年南部陽一郎博士、2014年中村修二博士は、米国籍で受賞している。

日英独の大学における論文数分布の比較

- 上位大学の論文数は、日本がドイツよりも多く、英国とは同程度であるが、上位に続く層の大学（10～50位程度）の論文数は日本が独英と比べて少ない。
- 論文数規模の小さい大学の数は、日本が独英と比べて多い。

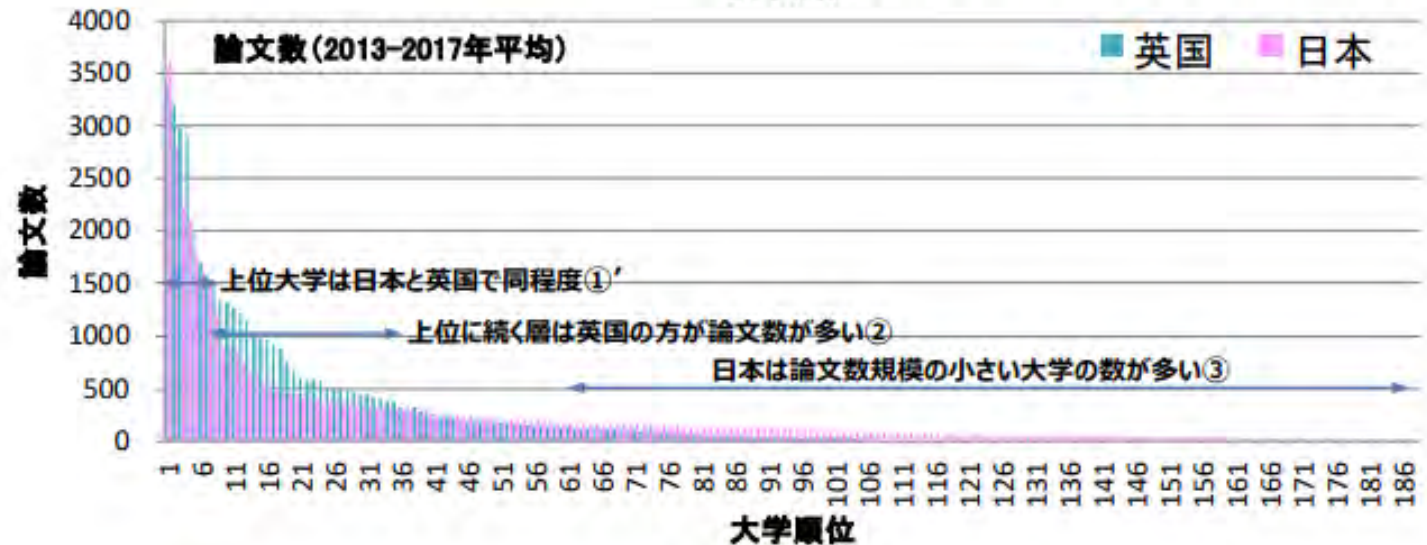
論文数の合計

日本	45,173
ドイツ	43,567



論文数の合計

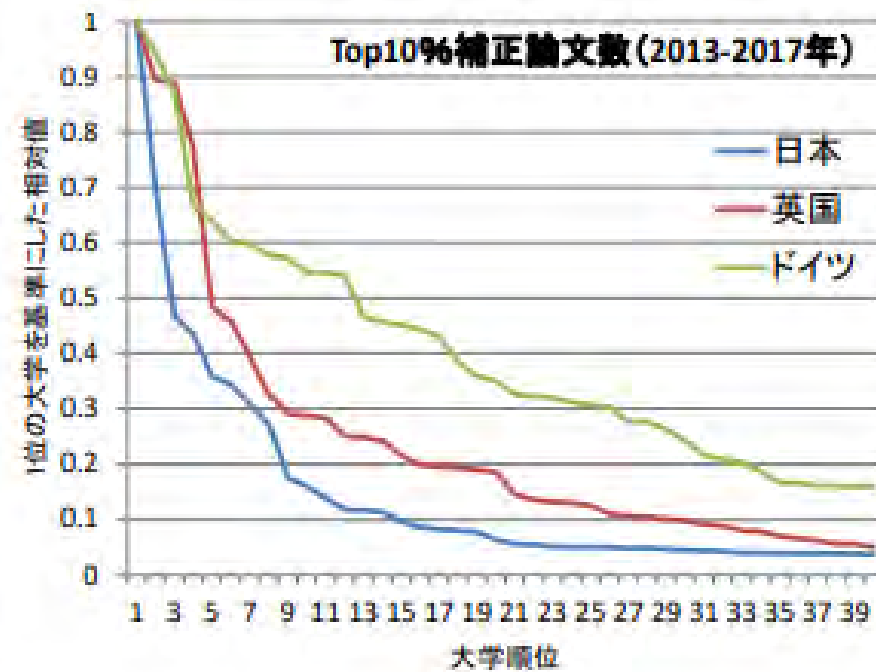
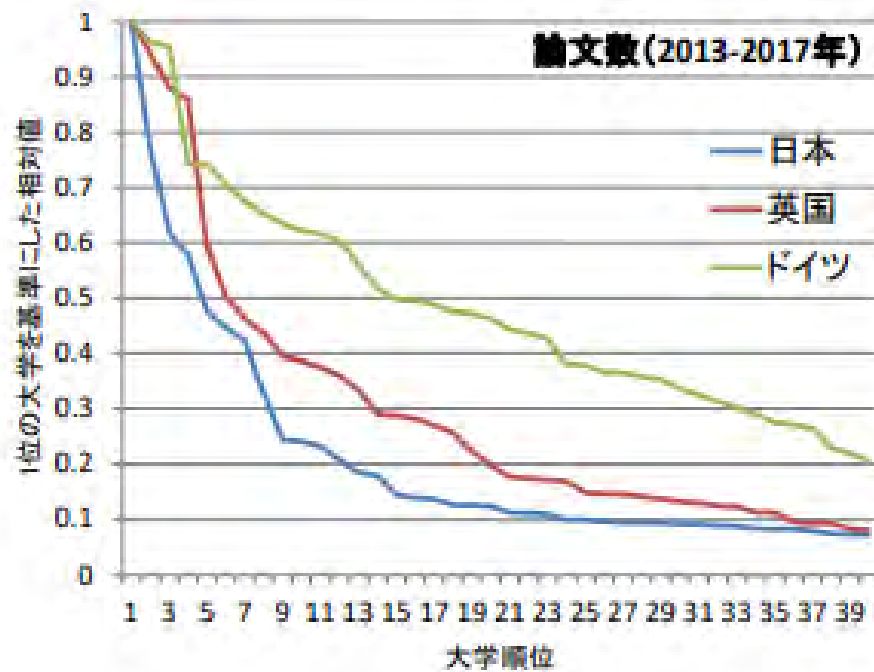
日本	45,173
英国	46,979



注: ArticleReviewを分析対象とした。分数カウント法を用いた。10年間で論文数が500件以上の大学を分析対象とした。
 出典:「研究論文に着目した日英独の大学ベンチマーキング2019」

日英独の大学における論文数及びTop10%補正論文数の相対分布

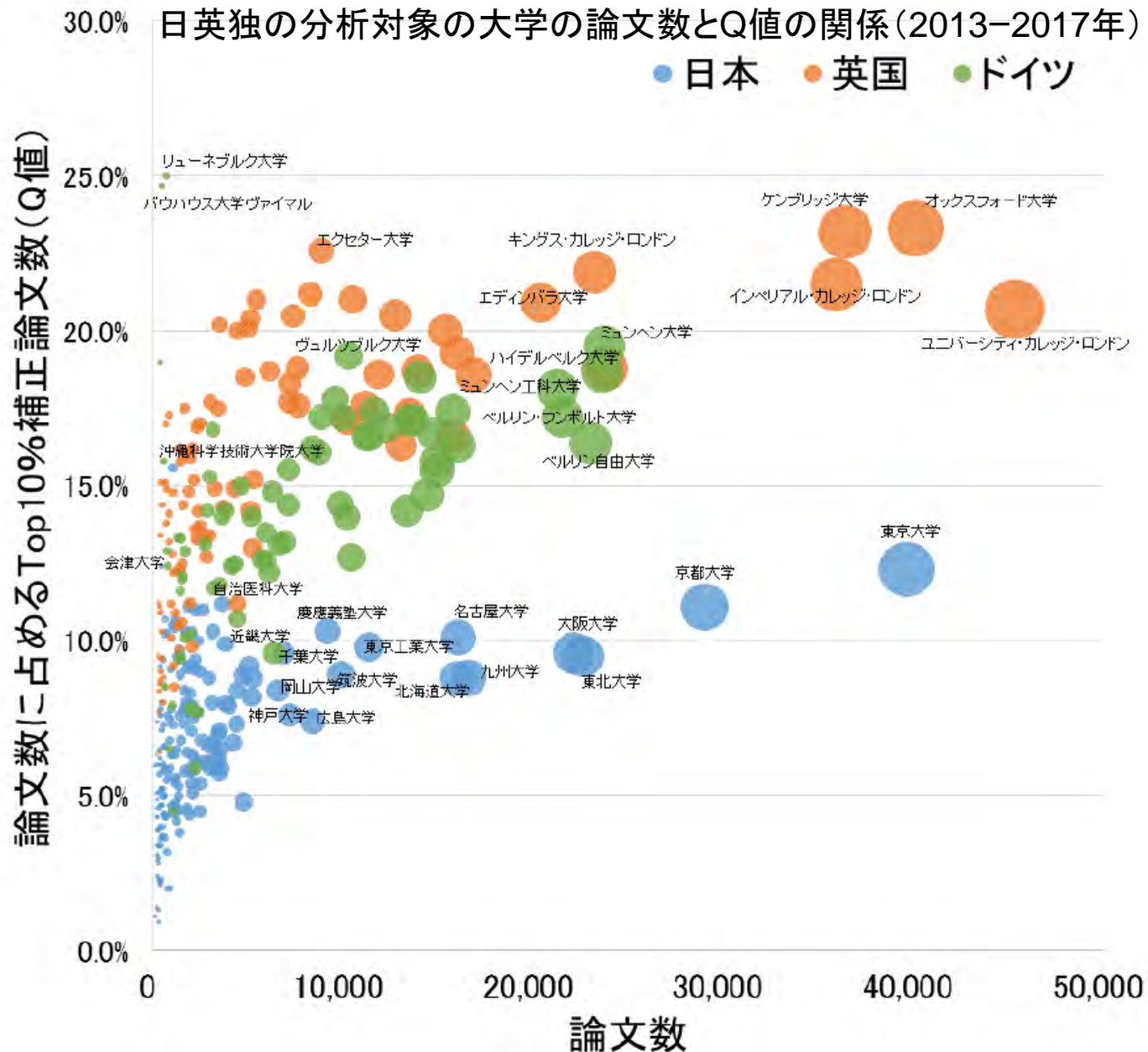
日本は、大学における論文数及びTop10%補正論文数の相対分布で見ても、英国とドイツと比べ、上位大学に論文数及びTop10%補正論文数が集中している。



注: ArticleReviewを分析対象とした。分数カウント法を用いた。10年間で論文数が500件以上の大学を分析対象とした。
出典:「研究論文に着目した日英独の大学ベンチマーキング2019」

日英独の分析対象の大学の論文数とQ値の関係

日本の大学は、英国とドイツの大学に比べて、論文数に占めるTop10%補正論文数の割合（Q値）が低い傾向にある。



注: ArticleReviewを分析対象とした。論文数に占める注目度の高い論文数の割合(Q値)は整数カウント法。円の大きさは論文数規模に対応している。

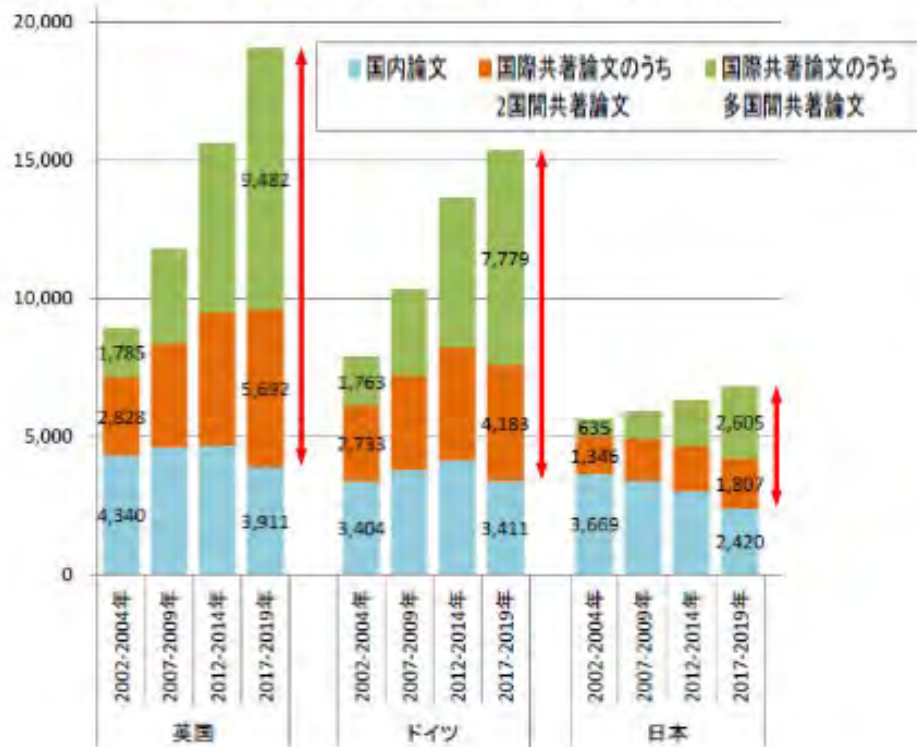
論文数に占める注目度の高い論文数の割合(Q値)は、著者数100人以下の論文で分析した。

出典: クラリベイト・アナリティクス社 Web of Science XML(SCIE, 2018年末バージョン)を基に、科学技術・学術政策研究所が集計。

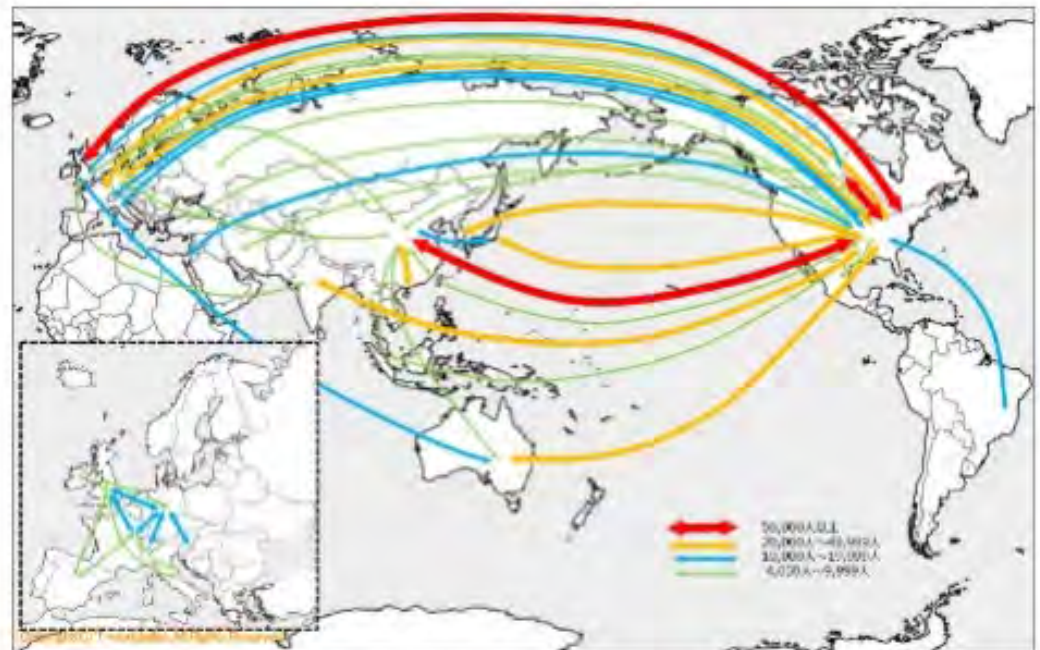
国際頭脳循環について(我が国の現状)

- 英国とドイツでは、被引用数でTop10%に入るような論文の大部分は国際共著によって生産されているが、日本では国際共著によるTop10%論文の生産が進んでいない。
- 世界の研究者の流動を見ても、日本と諸外国の間での研究者交流は欧米と比較して少ない。

TOP10%論文における 国内論文数と国際共著論文数



世界の研究者の主な流動



注: 矢印の太さは二国間の移動研究者数(2006~2016)に基づく。移動研究者とは、OECD資料中”International bilateral flows of scientific authors,2006-16”の”Number of researchers”を指す。

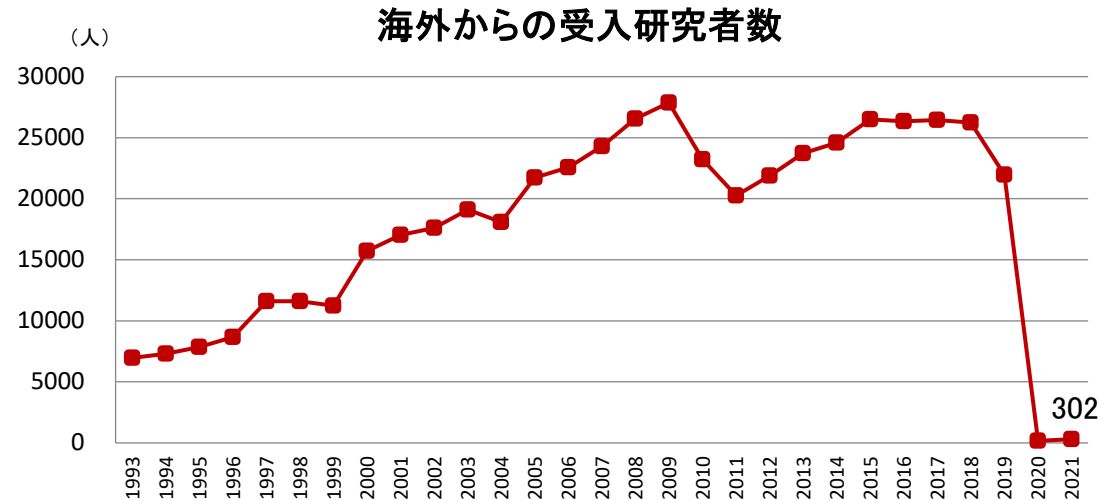
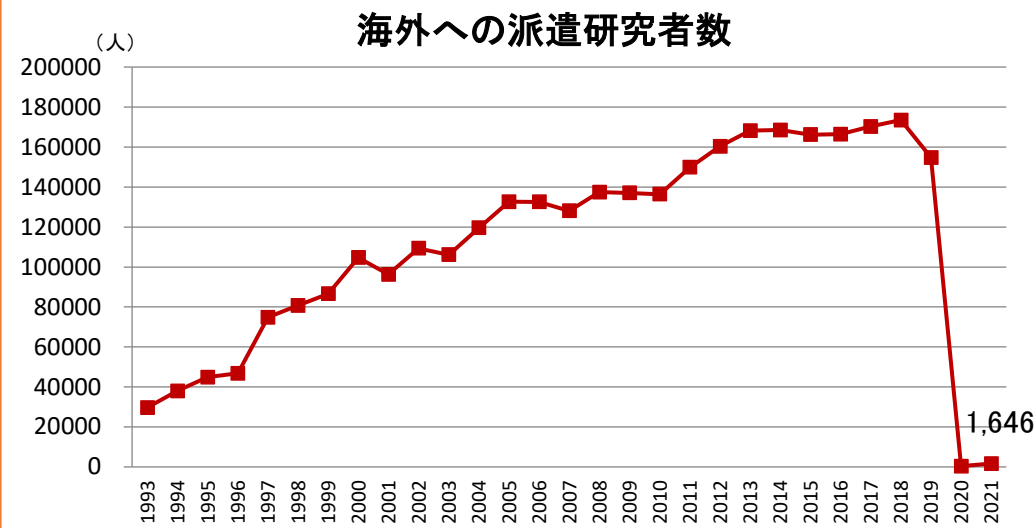
本図は、二国間の移動研究者数の合計が4,000人以上である矢印のみを抜粋して作成している。

出典: OECD “Science, Technology and Industry Scoreboard 2017”を基に文部科学省が作成。

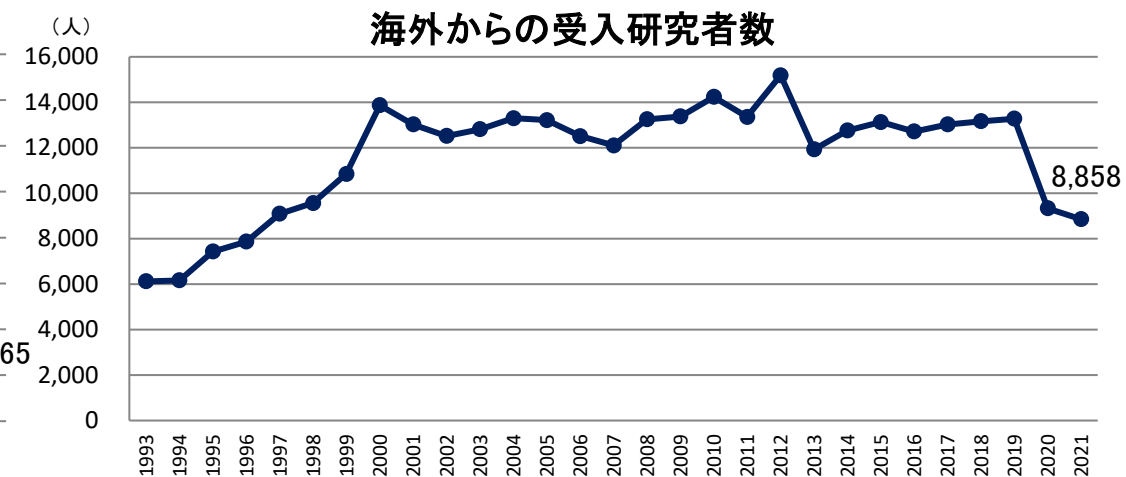
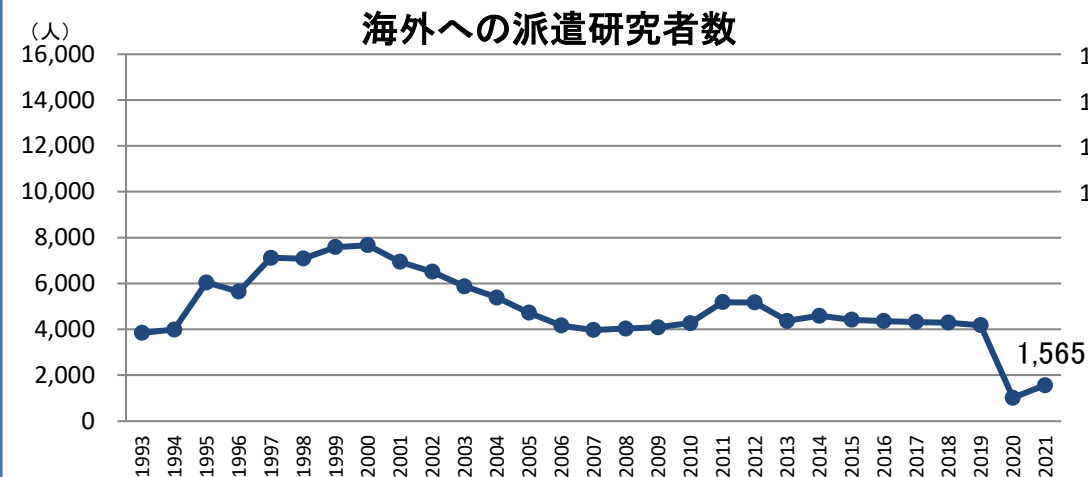
海外への派遣研究者数・海外からの受入研究者数(年度毎)

- 短期：派遣者数は増加傾向、受入者数は横ばい傾向であったが、2019～2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響で減少。
- 中長期：近年、派遣者数・受入れ者数ともに横ばい傾向であったが、2019～2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響で減少。

短期(1か月未満)



中長期(1か月以上)



出典：令和4年度科学技術試験研究委託事業「研究者の交流に関する調査」

※派遣・受入期間が中・長期(31日以上)の研究者数(博士課程の学生は対象外。ただし、平成25年度実績より、所属する大学と雇用契約を締結し、職務を与えられ研究に従事している博士課程在籍学生については対象)

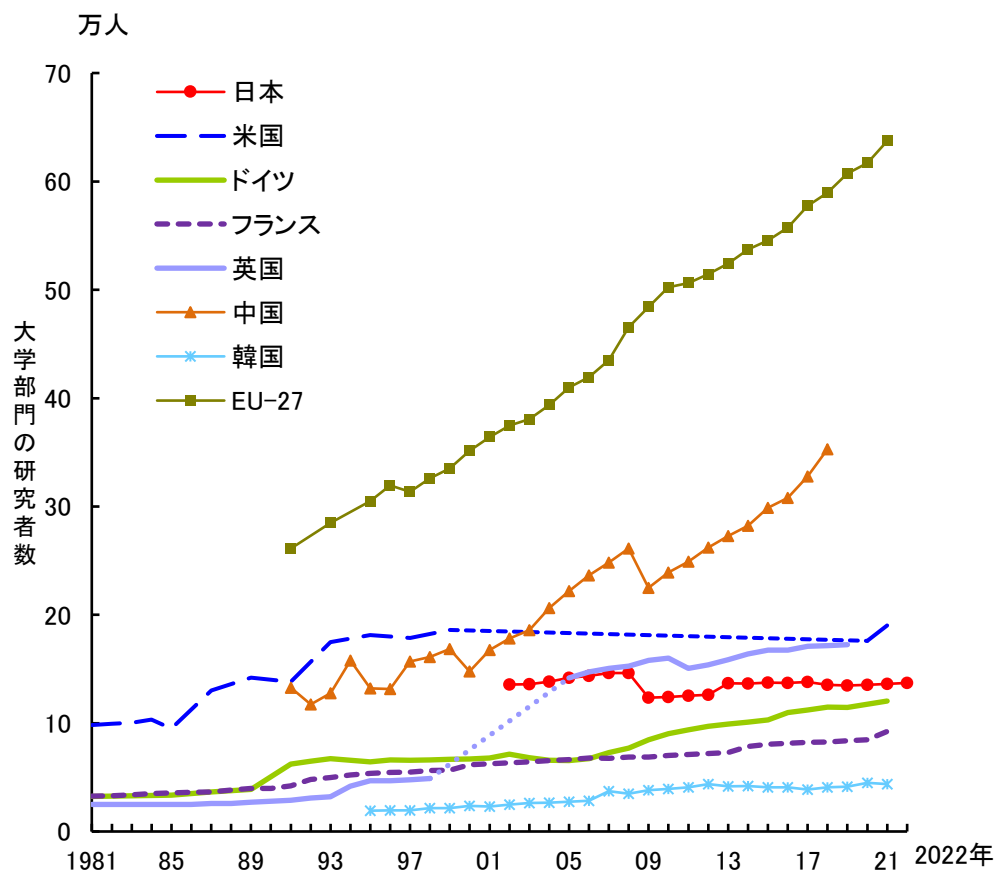
※平成25年度実績から、受入研究者の定義を変更(日本国内の機関からの受入れ外国人研究者は対象外)

※平成22年度実績から、「ポスドク・特別研究員等」を対象に加えている。

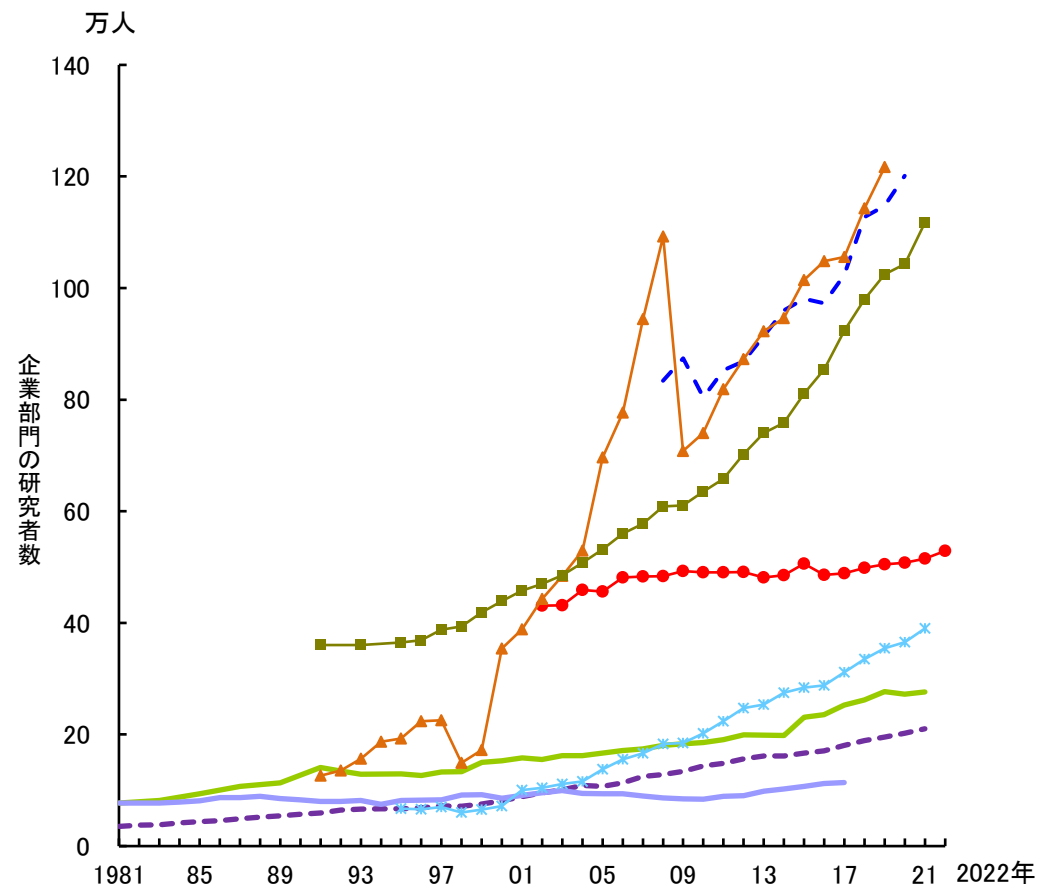
主要国における大学部門と企業部門の研究者数の推移

- 大学部門では、EU、中国の研究者数が長期的に増加している。日本の伸びは緩やかであり、最近はやばい傾向である。
- 企業部門では、米国、中国、EUが急速な伸びを見せており、韓国の研究者数も長期的に増加している。日本の企業部門の研究者数は、2000年代後半からほぼ横ばいに推移していたが、2017年以降は微増している。

大学部門の研究者数の推移



企業部門の研究者数の推移



※各国の値はFTE値である。

※研究者の定義は各国で異なる。日本における研究者の定義は、大学(短期大学を除く)の課程を修了した者やそれと同等以上の専門知識を有する者のうち、特定のテーマを持って研究を行っている者。特に大学部門については、①教員、②博士課程在籍者、③医局員、④その他研究員を測定している。

(2) 高等教育の現状

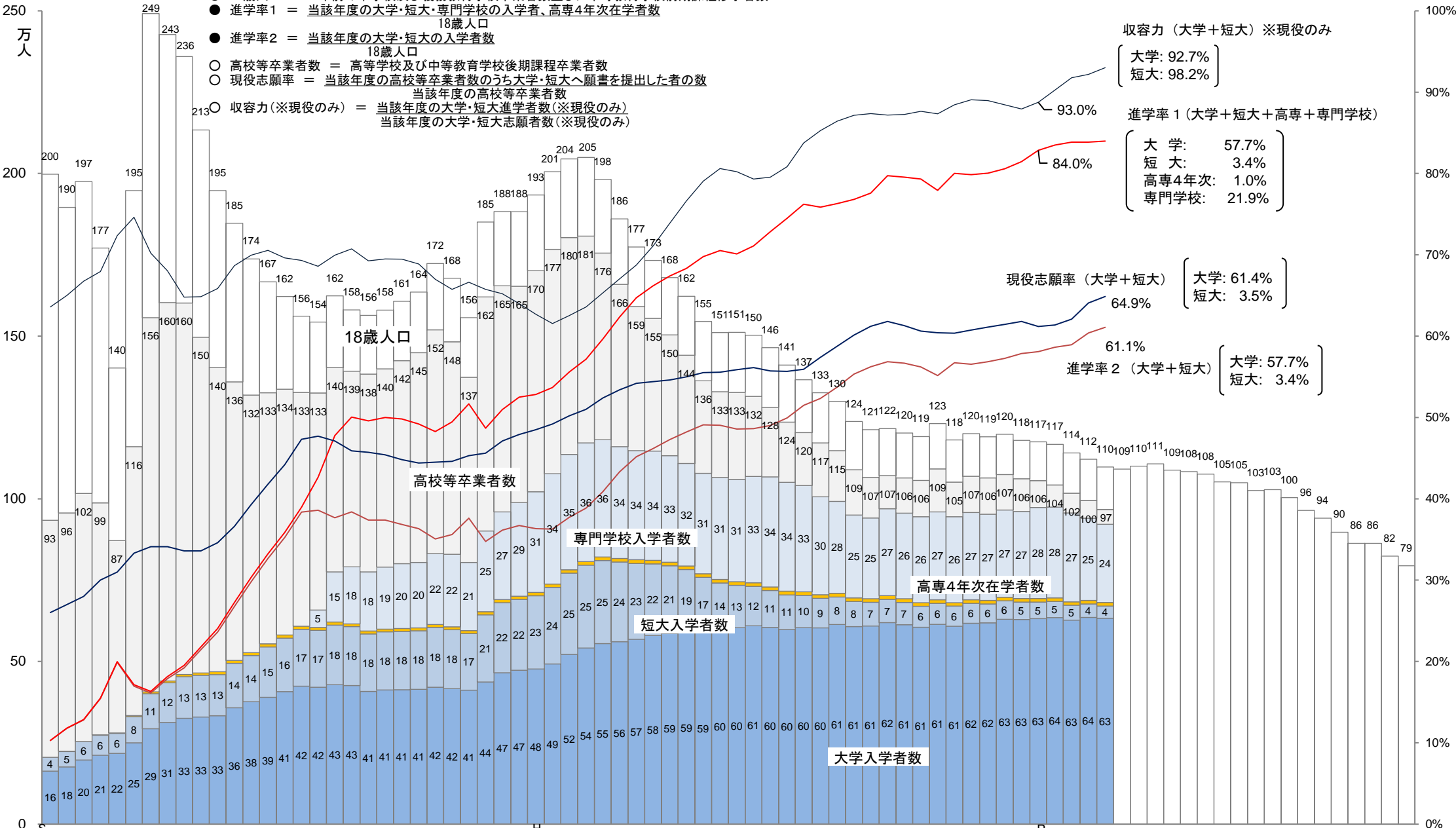
関連データ

18歳人口と高等教育進学率

18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移

18歳人口は、ピークであった昭和41年には、約249万人であったが、令和5年には110万人にまで減少。令和23年には80万人を切ることが予測されている。高等教育機関への進学率は概ね上昇を続け、令和5年には大学のみで57.7%、全体で84.0%となっている。

- 18歳人口 = 3年前の中学校及び義務教育学校卒業生数並びに中等教育学校前期課程修了者数
- 進学率1 = 当該年度の大学・短大・専門学校の入学者、高専4年次在学者数 / 18歳人口
- 進学率2 = 当該年度の大学・短大の入学者数 / 18歳人口
- 高校等卒業生数 = 高等学校及び中等教育学校後期課程卒業生数
- 現役志願率 = 当該年度の高校等卒業生数のうち大学・短大へ願書を提出した者の数 / 当該年度の高校等卒業生数
- 収容力(※現役のみ) = 当該年度の大学・短大進学者数(※現役のみ) / 当該年度の大学・短大志願者数(※現役のみ)



出典: 文部科学省「学校基本統計」。令和6~23年については国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(令和5年推計)(出生中位・死亡中位)」を基に作成。
 ※進学率、現役志願率については、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の計と合計が一致しない場合がある。

男女別・18歳人口と大学進学率等の推移

- 昭和50年（1975年）と比べて、女性の大学入学者数は約20万人増加、進学率も約42ポイント増加している。
- 近年は、男女とも進学率は上昇傾向にあるが女性の上昇幅が大きい。

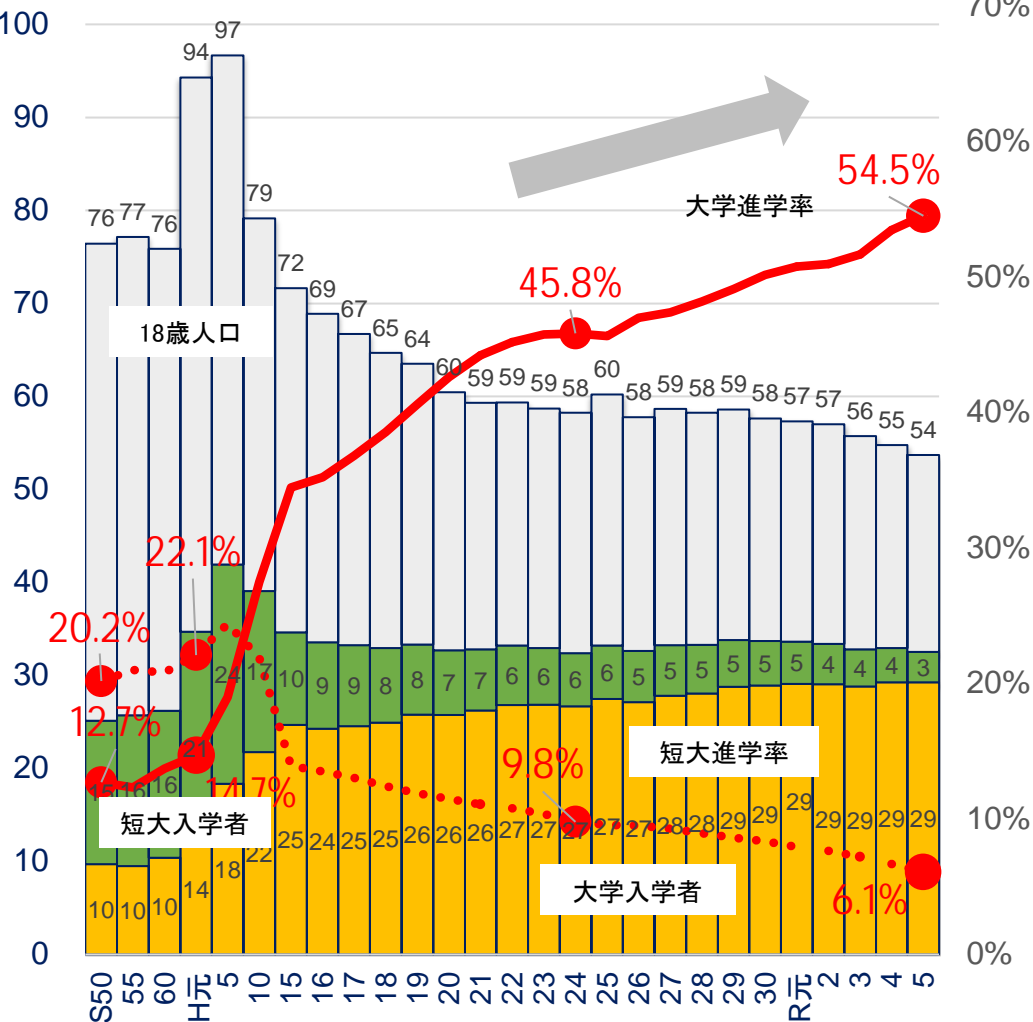
H25→R5

大学進学率：約8.9ポイント増

大学入学者数：約1.8万人増

女性

(万人)



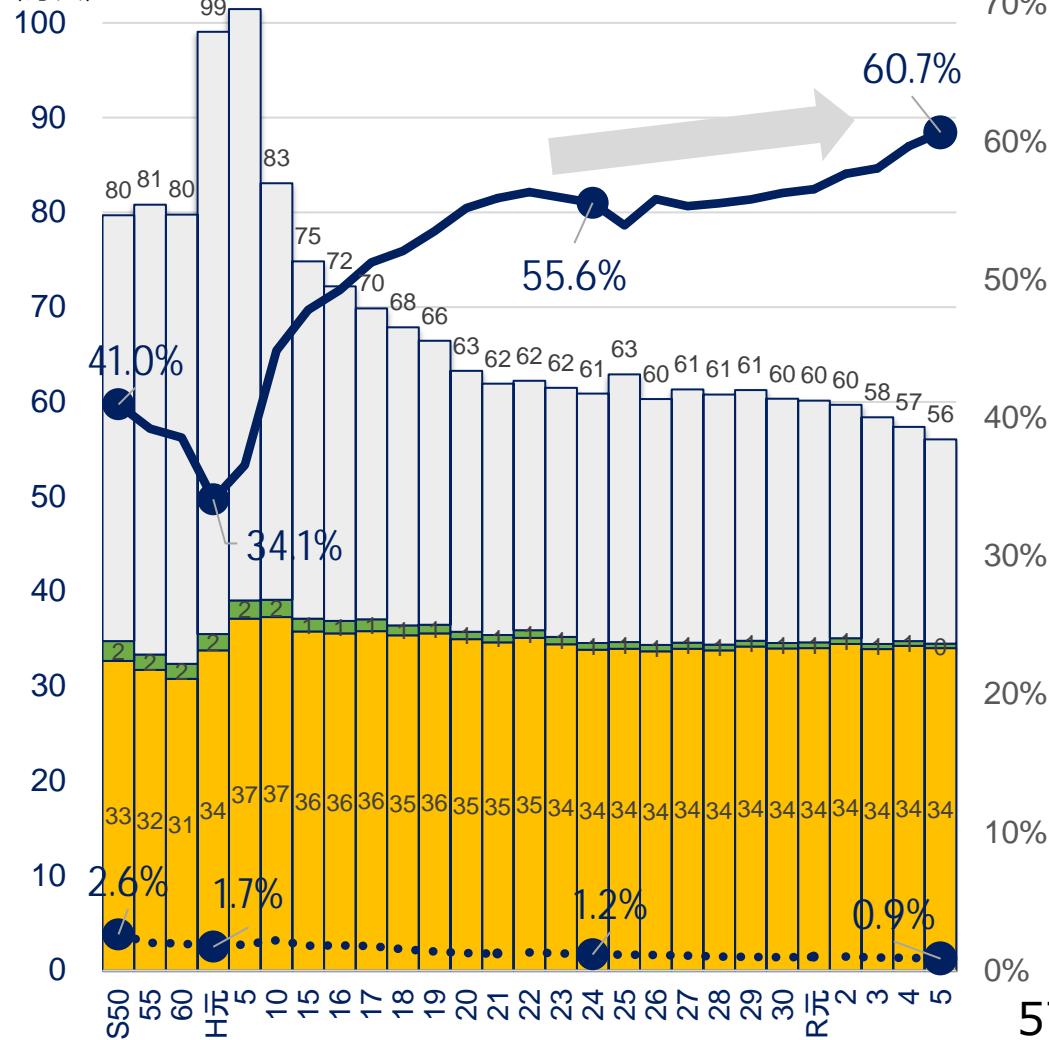
H25→R5

大学進学率：約6.7ポイント増

大学入学者数：横這い

男性

(万人)

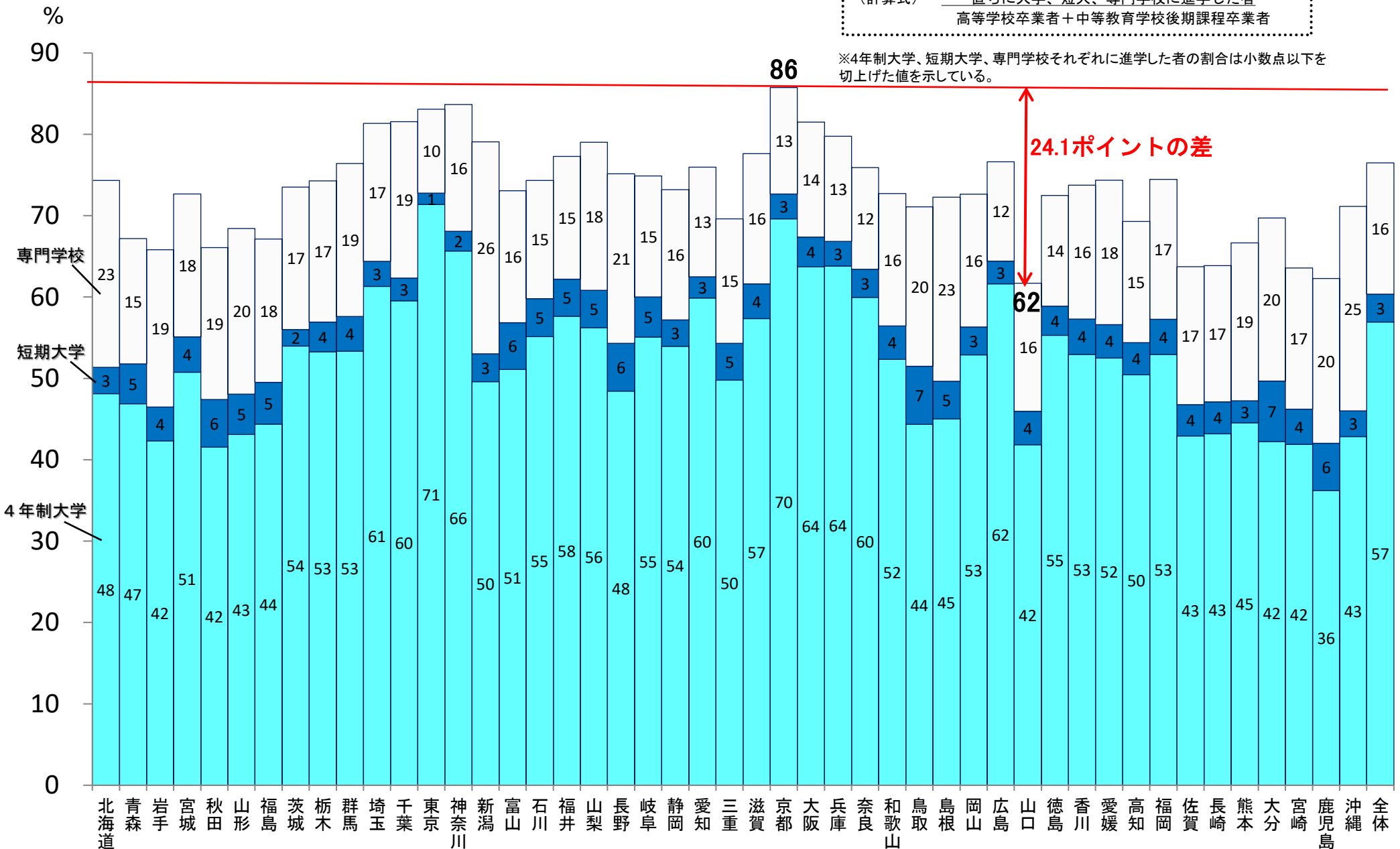


都道府県別高校新卒者の4年制大学、短期大学、専門学校への進学率

令和5年度の都道府県別高校新卒者の4年制大学、短期大学、専門学校への進学率は、京都府（85.7%）が最も高く、山口県（61.7%）が最も低い。京都と山口では24.1ポイントの差。

(計算式) $\frac{\text{直ちに大学、短大、専門学校に進学した者}}{\text{高等学校卒業生} + \text{中等教育学校後期課程卒業生}}$

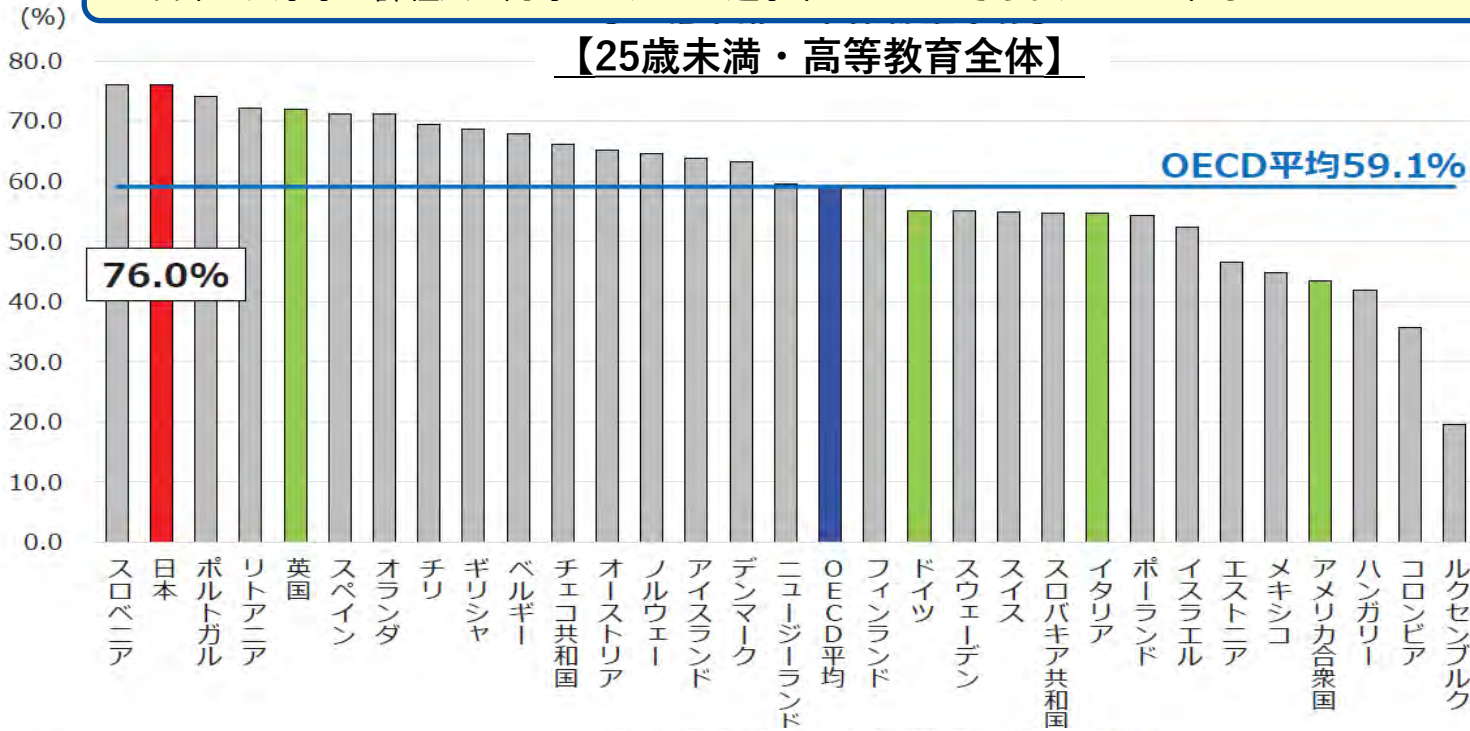
※4年制大学、短期大学、専門学校それぞれに進学した者の割合は小数点以下を切上げた値を示している。



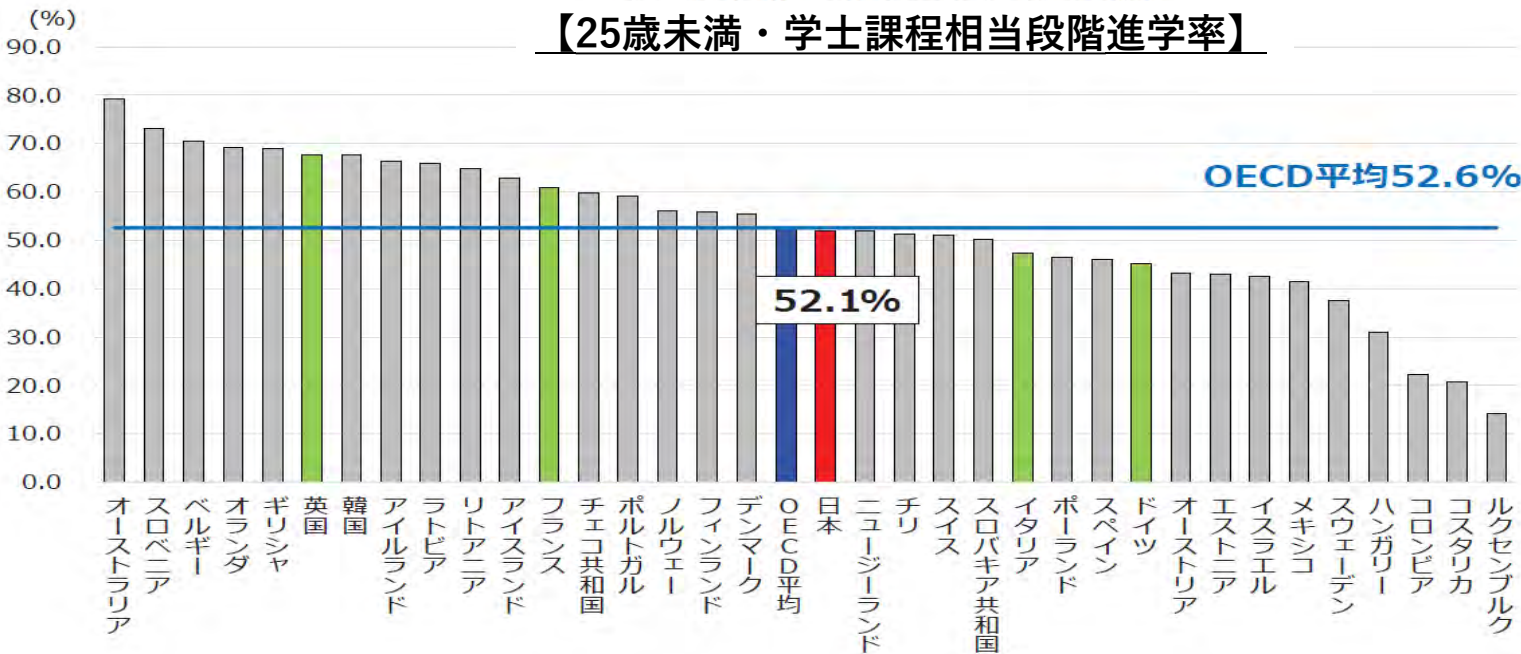
(出典)文部科学省「令和5年度学校基本統計」

高等教育段階における進学率の国際比較

- 短期大学、専門学校等を含めた高等教育機関全体への初回進学率は、OECD平均の59.1%に対して、日本は76%。
- 日本の大学学士課程又は同等レベルへの進学率は52.1%であり、OECD平均の52.6%とほぼ同水準。



(2021年)
 ※OECD加盟38カ国のうち、オーストラリア、カナダ、コスタリカ、フランス、アイルランド、韓国、ラトビア、トルコを除く。
 ※グラフ緑色は日本以外のG7諸国。
 ※初回進学率は、25歳未満の各年齢における高等教育段階の初回入学者数を当該年齢人口で除した率の合計。留学生含む。
 ※高等教育への初回入学者のみが対象となるため、学士課程修了後に修士課程に進んだ者は含まない。
 ※参照年度は2020年度(令和2年度)。

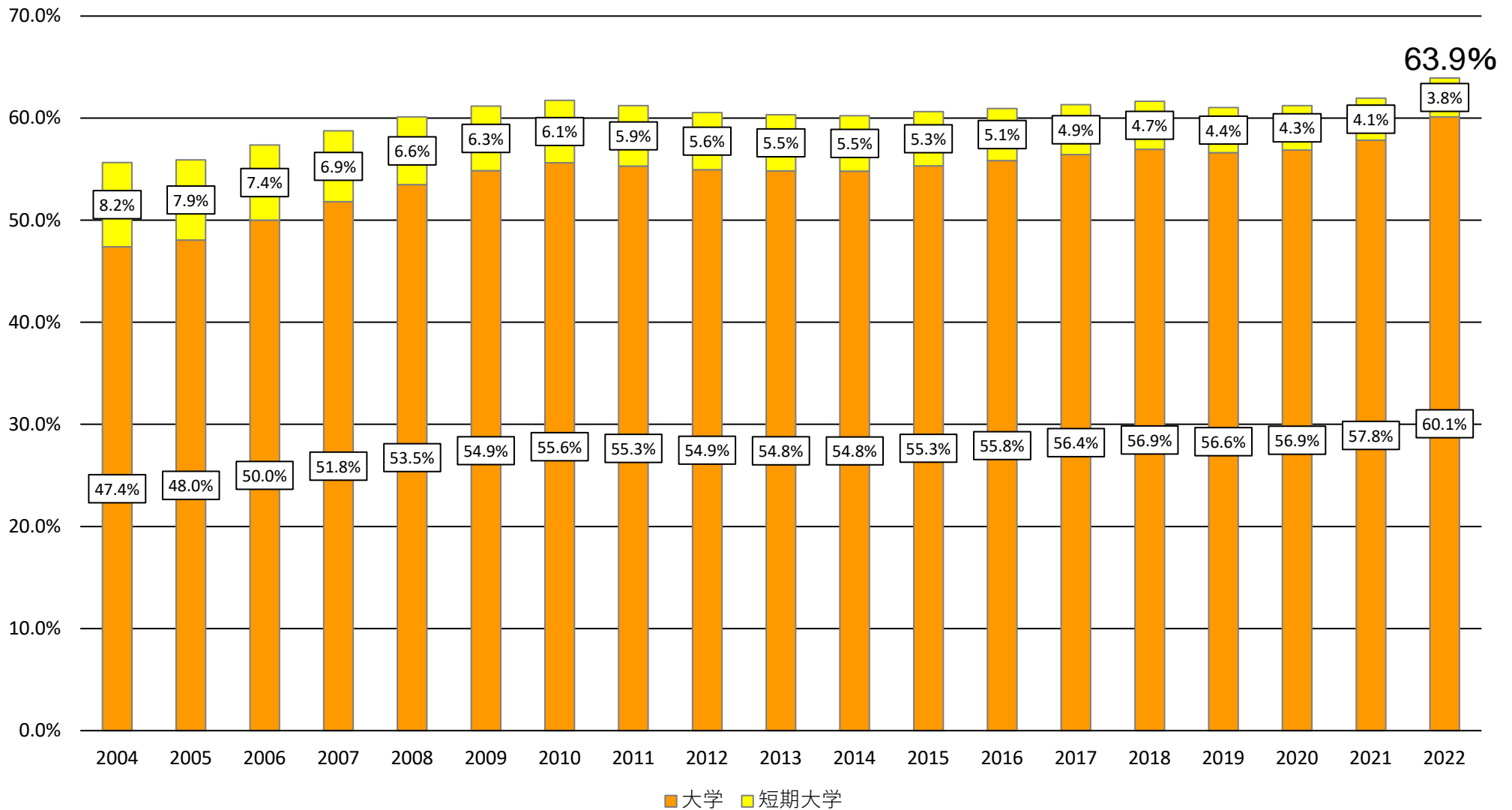


(2021年)
 ※OECD加盟38カ国のうち、カナダ、アメリカ合衆国、トルコを除く。
 ※グラフ緑色は日本以外のG7諸国。
 ※進学率は、25/30歳未満の各年齢における当該高等教育段階の新入学者数を当該年齢人口で除した率の合計。留学生含む。
 ※参照年度は2020年度(令和2年度)。

高卒者の大学・短期大学志願率推移

- 高校卒業者のうち大学または短期大学を志願する割合は2010年代以降約6割程度でほぼ横ばい。
- 2022年は63.9%でありやや上昇している。

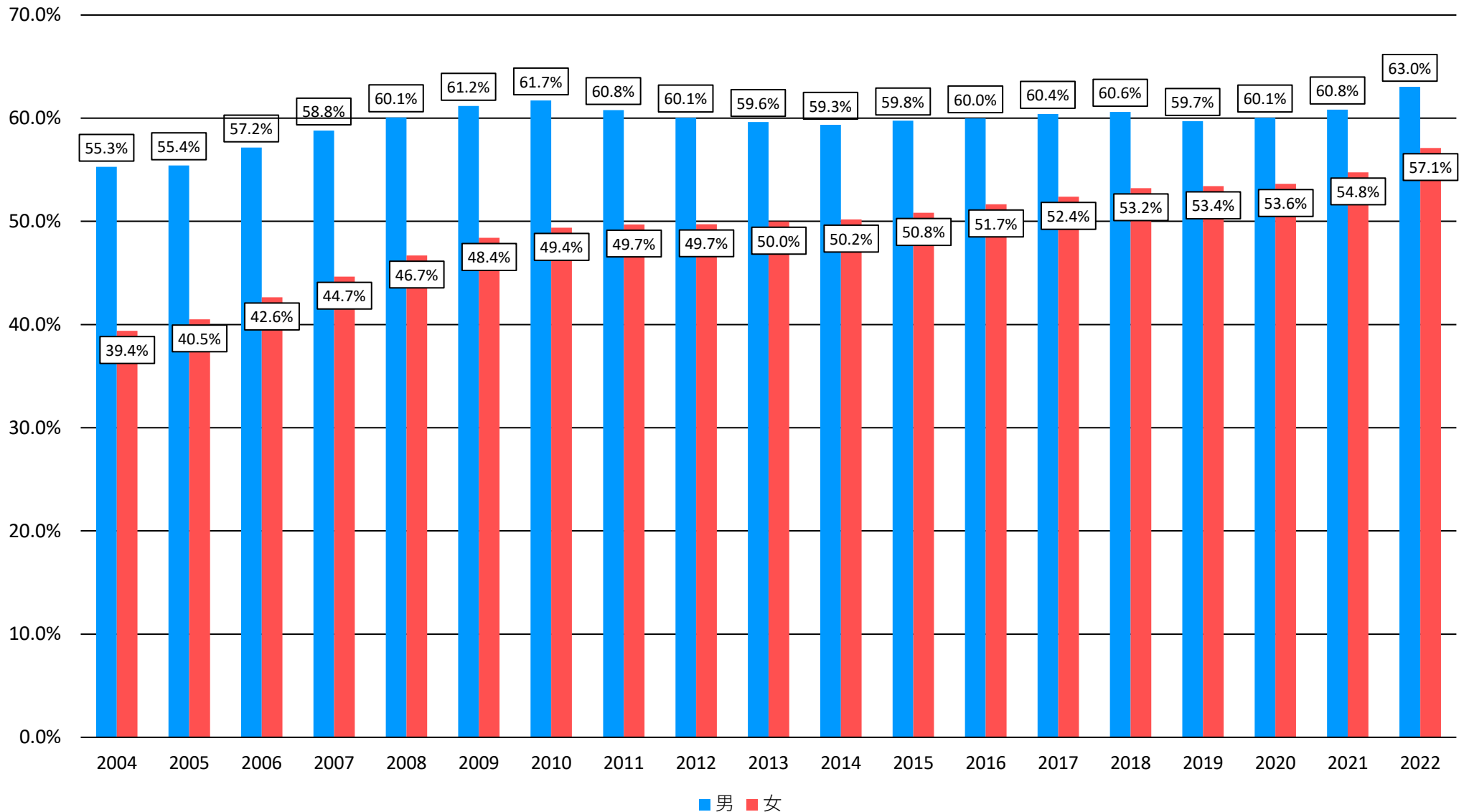
高卒者の大学・短期大学志願率推移



高卒者の大学志願率推移(男女別)

高校卒業者の大学進学志願率は男性の方が女性より高いが、近年は男女差が減ってきている。

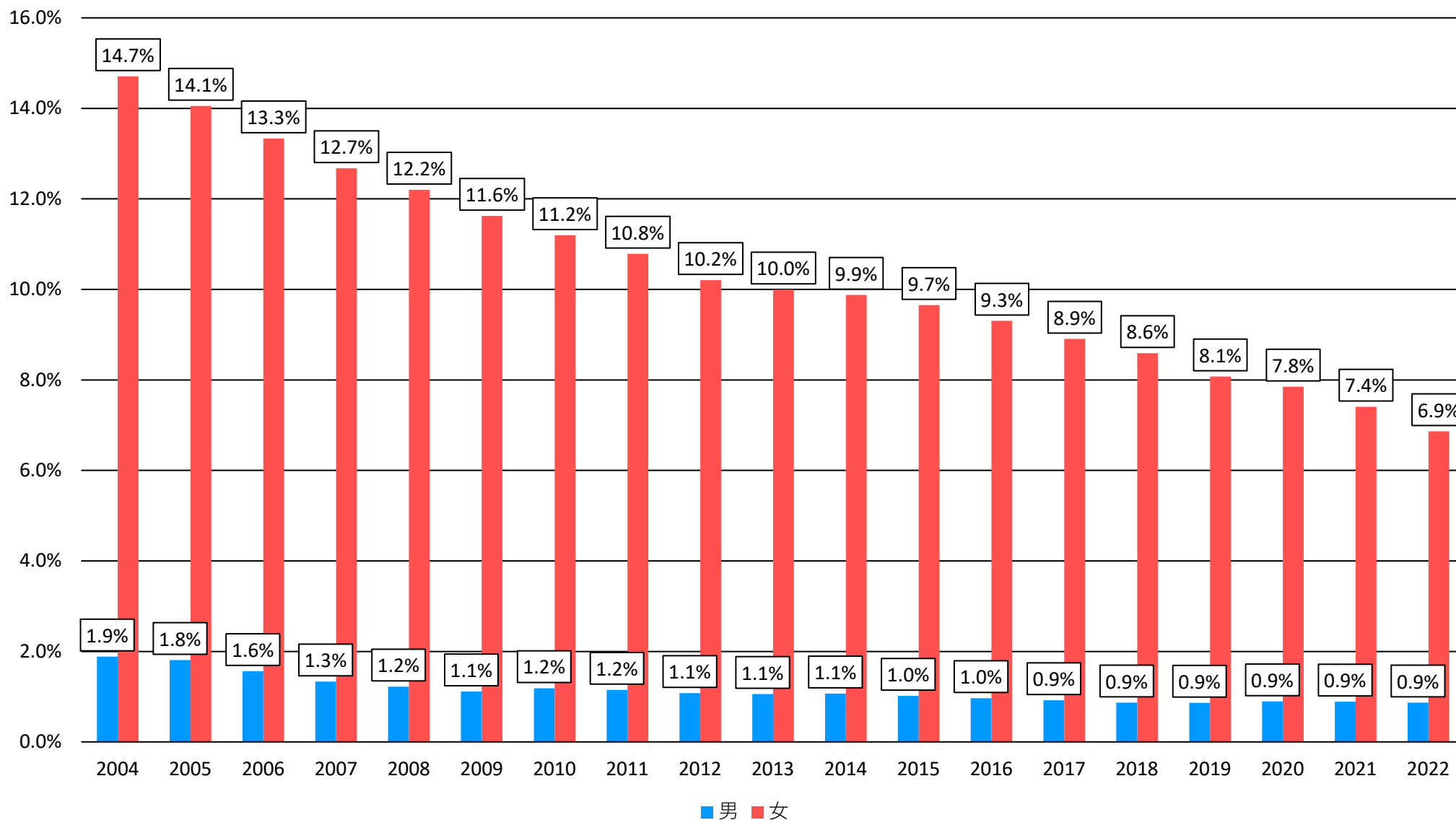
高卒者の大学志願率推移 (男女別)



高卒者の短期大学志願率推移(男女別)

- 高校卒業者のうち短期大学を志願する割合は女性の方が高い。
- 近年では、男性の志願率は1%程度で一定だが、女性は一貫して志願率が減少している。

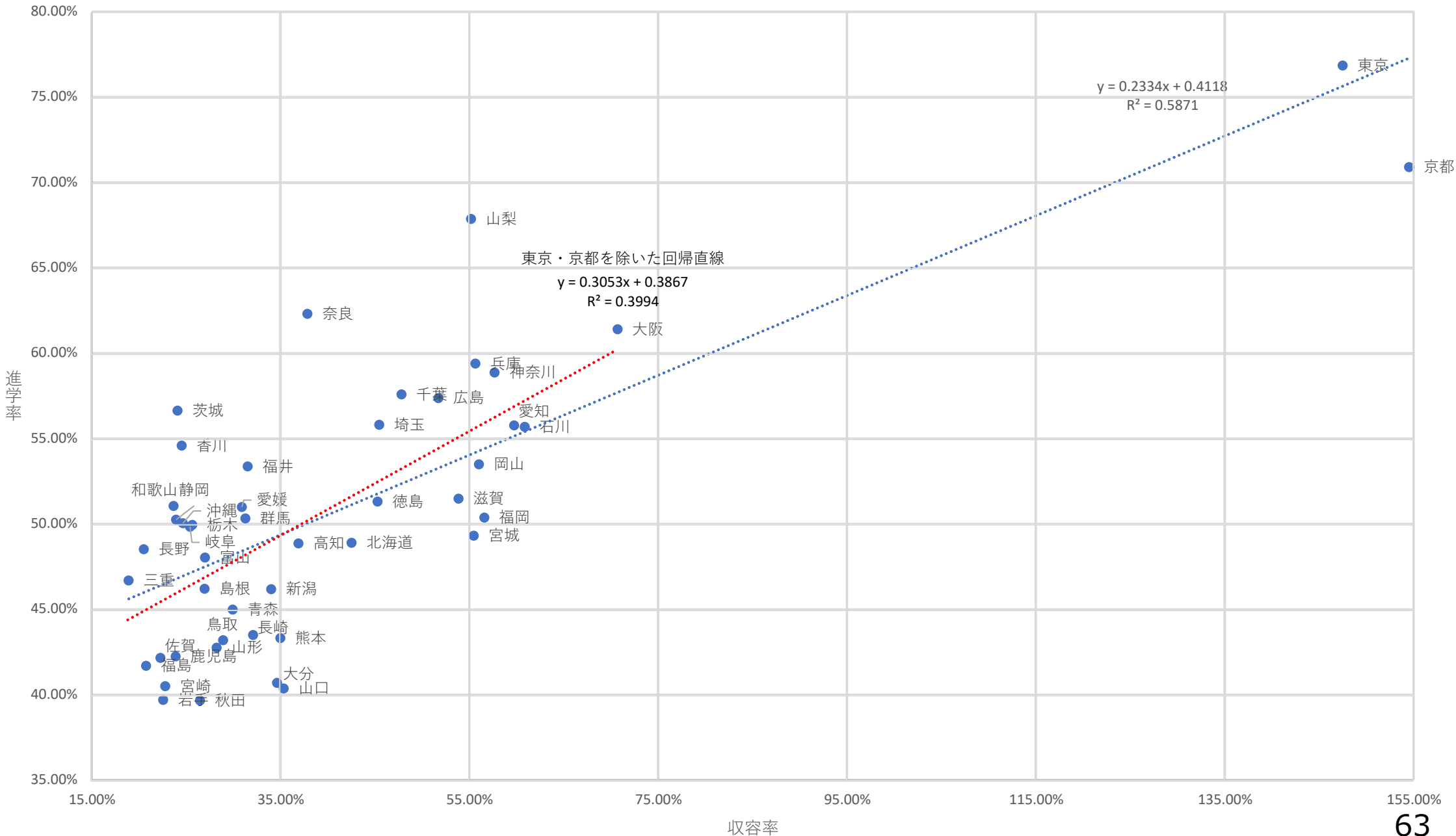
高卒者の短期大学志願率推移 (男女別)



(出典)文部科学省「学校基本統計(令和4年度版)」

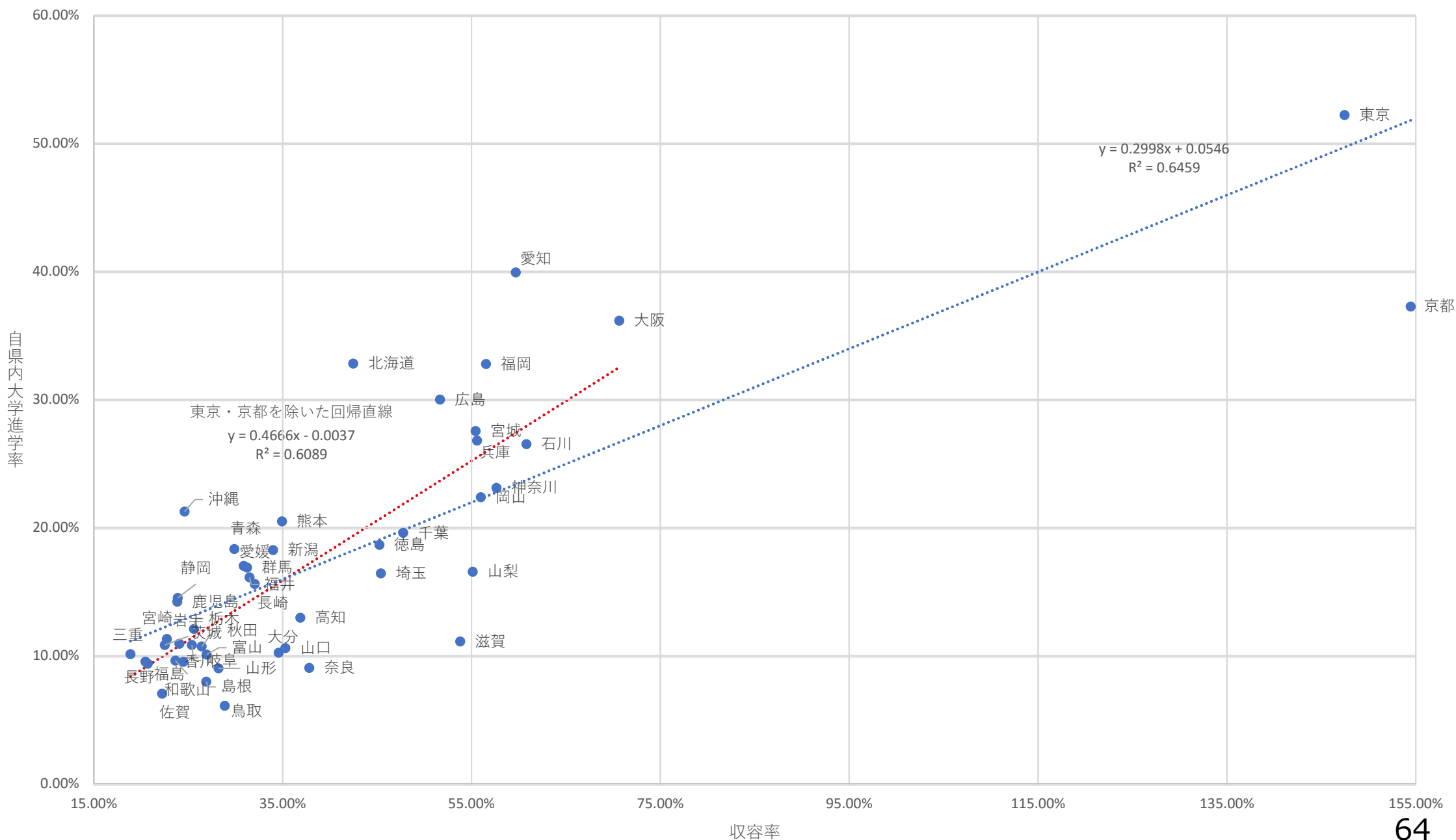
収容率と進学率の相関関係

- 収容率と大学進学率は正の相関関係にあり、収容率が高い都道府県ほど、進学率が高い傾向にある。
- 収容率の極めて高い東京・京都を除いても、収容率と大学進学率には正の相関関係が認められる。



収容率と自県内大学進学率の相関関係

- 収容率と自県内大学進学率には、強い正の相関関係があり、収容率が高い都道府県ほど、自県内進学率が高い傾向にある。
- 収容率の極めて高い東京・京都を除いても、収容率と自県内進学率には強い正の相関関係が認められる。



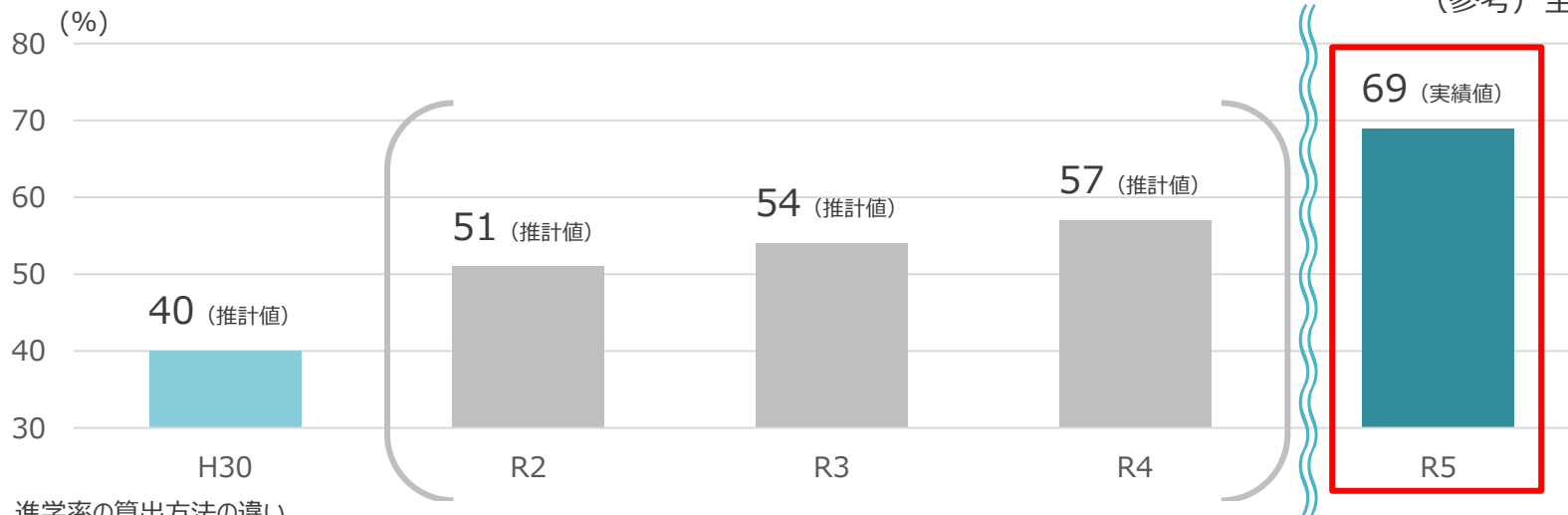
出典：文部科学省「学校基本調査」を基に作成。

「高校生等奨学給付金※受給者」の進学動向について

※高校生等奨学給付金は生活保護受給世帯及び住民税非課税世帯に対して授業料以外の教育費を支援するもの。

住民税非課税世帯の進学率は、平成30年度に約40%と推計されたところ、令和5年度には約69%となった。

○住民税非課税世帯の進学率



(注) 進学率の算出方法の違い

- ・H30は、(住民税非課税世帯のJASSO奨学金利用者(実績) + JASSO奨学金を利用せずに進学している者(推計)) / (高校生等奨学給付金を受給している高3生 + 児童養護施設への措置を解除された者、里親への委託を解除された者(18歳)) (推計)
- ・R2~R4は、住民税非課税世帯のJASSO奨学金利用者 / (高校生等奨学給付金を受給している高3生 + 児童養護施設への措置を解除された者、里親への委託を解除された者(18歳)) (推計)
- ・R5は、R4高校生等奨学給付金受給者のうち大学等に進学した者 / R4高校生等奨学給付金受給者(実績)
令和4年度に「高校生等奨学給付金」を受給していた高校3年生の卒業後の進路について、全国の国公立高等学校等の割合を踏まえ、10分の1程度の高校を無作為に抽出して調査を実施(500校について実施。(令和5年9月))

○R4高校生等奨学給付金受給者の進学・就職動向の内訳 (%)

大学(学部)	短期大学	大学・短期大学の 通信教育部及び 放送大学	専修学校 専門課程 (専門学校)	高等専門学校(4, 5年生)	高等学校 (専攻科)	就職者等	その他
41.6 国公立:24.5 私立:17.2	4.2	0.4	21.7	0.6	0.3	22.6	8.4

69.0%

学校数・学生数・入学定員等の状況

高等教育機関の入学者数等

	人数	割合（人数／合計）
大学（計）	63万2,902人	57.7%
国立大学	9万8,757人	9.0%
公立大学	3万5,260人	3.2%
私立大学	49万8,885人	45.5%
短大	3万7,484人	3.4%
高専	1万599人	1.0%
専門学校	24万626人	21.9%
上記以外の者 （未進学者）	17万5,805人	16.0%
合計	109万7,416人	100%

（令和5年5月1日現在）

【出典】文部科学省「学校基本統計」

高等教育機関の数及び学生数

令和5年5月1日現在の高等教育機関の総数は1,171校、学生数は約325.6万人（いずれも専修学校（専門課程）を除く）。

● 高等教育機関の数

● 学生数

区分	計	大学				専修学校 (専門課程)
		大学	うち大学院 を置く大学	短期 大学	高等 専門 学校	
計	1,171	810	661	303	58	2,693
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
国立	137	86	86	0	51	8
	11.7%	10.6%	13.0%	0.0%	87.9%	0.3%
公立	120	102	90	15	3	178
	10.2%	12.6%	13.6%	5.0%	5.2%	6.6%
私立	914	622	485	288	4	2,507
	78.1%	76.8%	73.4%	95.0%	6.9%	93.1%

(令和5年5月1日現在)

区分	計	大学院	小計	大学			通信 教育	専修学校 (専門 課程)
				大学 (学部)	短期 大学 (本科)	高等専門 学校(4・5 年次)		
計	3,255,643	265,977	2,737,263	2,632,775	83,585	20,903	252,403	555,342
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
国立	604,744	154,706	450,038	431,207	0	18,831		239
	18.6%	58.2%	16.4%	16.4%	0.0%	90.1%		0.0%
公立	169,946	17,796	152,150	145,683	5,040	1,427		21,495
	5.2%	6.7%	5.6%	5.5%	6.0%	6.8%		3.9%
私立	2,480,953	93,475	2,135,075	2,055,885	78,545	645	252,403	533,608
	76.2%	35.1%	78.0%	78.1%	94.0%	3.1%	100.0%	96.1%

(令和5年5月1日現在)

(注1)通信教育のみを行う大学(私立6校(放送大学含む))及び短大(私立2校)を除く。

(注2)学生募集停止をしている機関を含む。

(注1)学生数には、「専攻科」、「別科」、「その他」の学生を含まない。

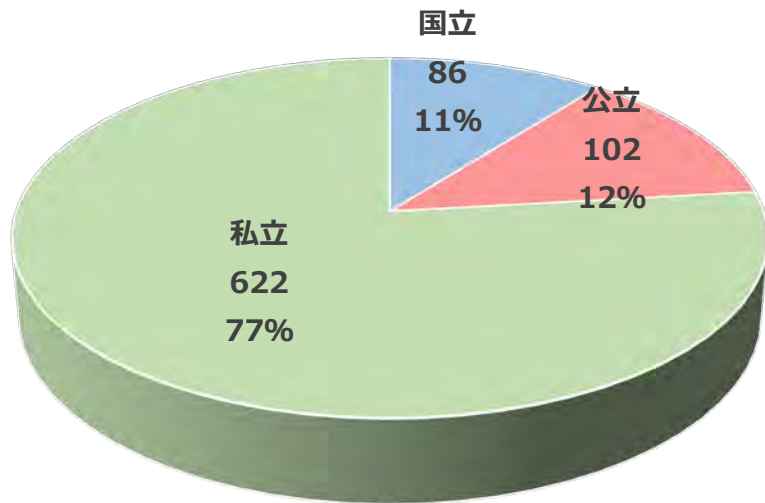
(注2)上記には、放送大学学園立の学生を含む。

国公立大学学生数(学部、修士、博士)

- 我が国の学校数は810校（うち、私立622校（76.8%））であり、学部学生数は約263万人（うち、私立約205万人（78.1%））。
- 修士課程・博士課程の学生数は、国立が占める割合が高い。

学校数

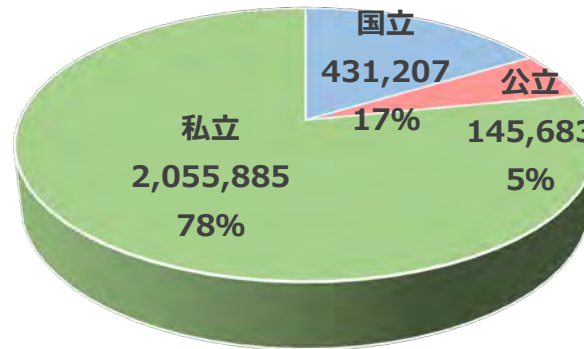
● 合計810校



学生数

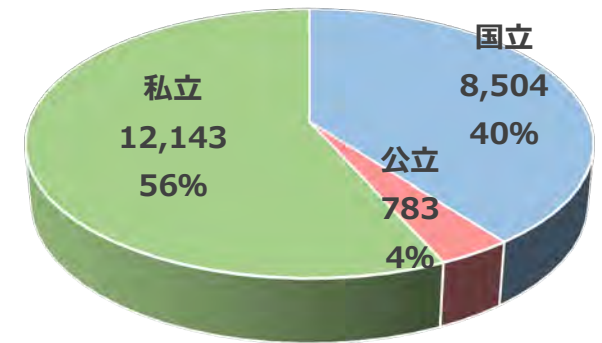
学士課程

● 合計263万2,775人



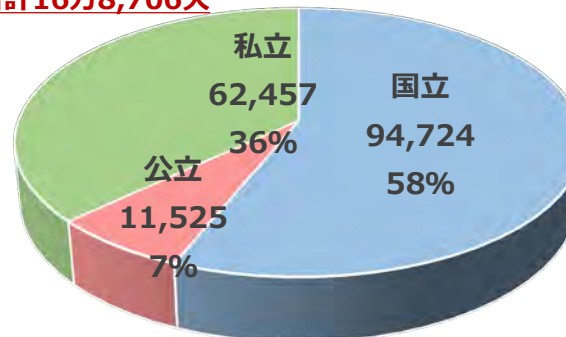
専門職学位課程

● 合計2万1,430人



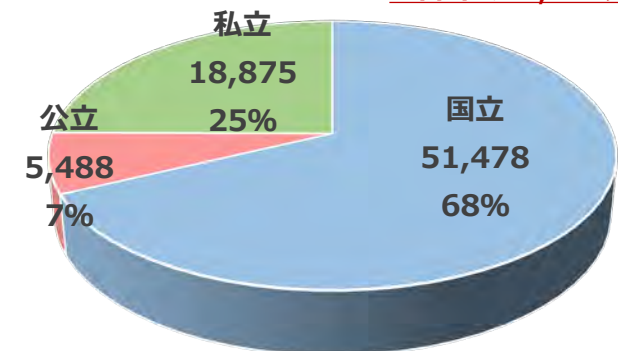
修士課程

● 合計16万8,706人



博士課程

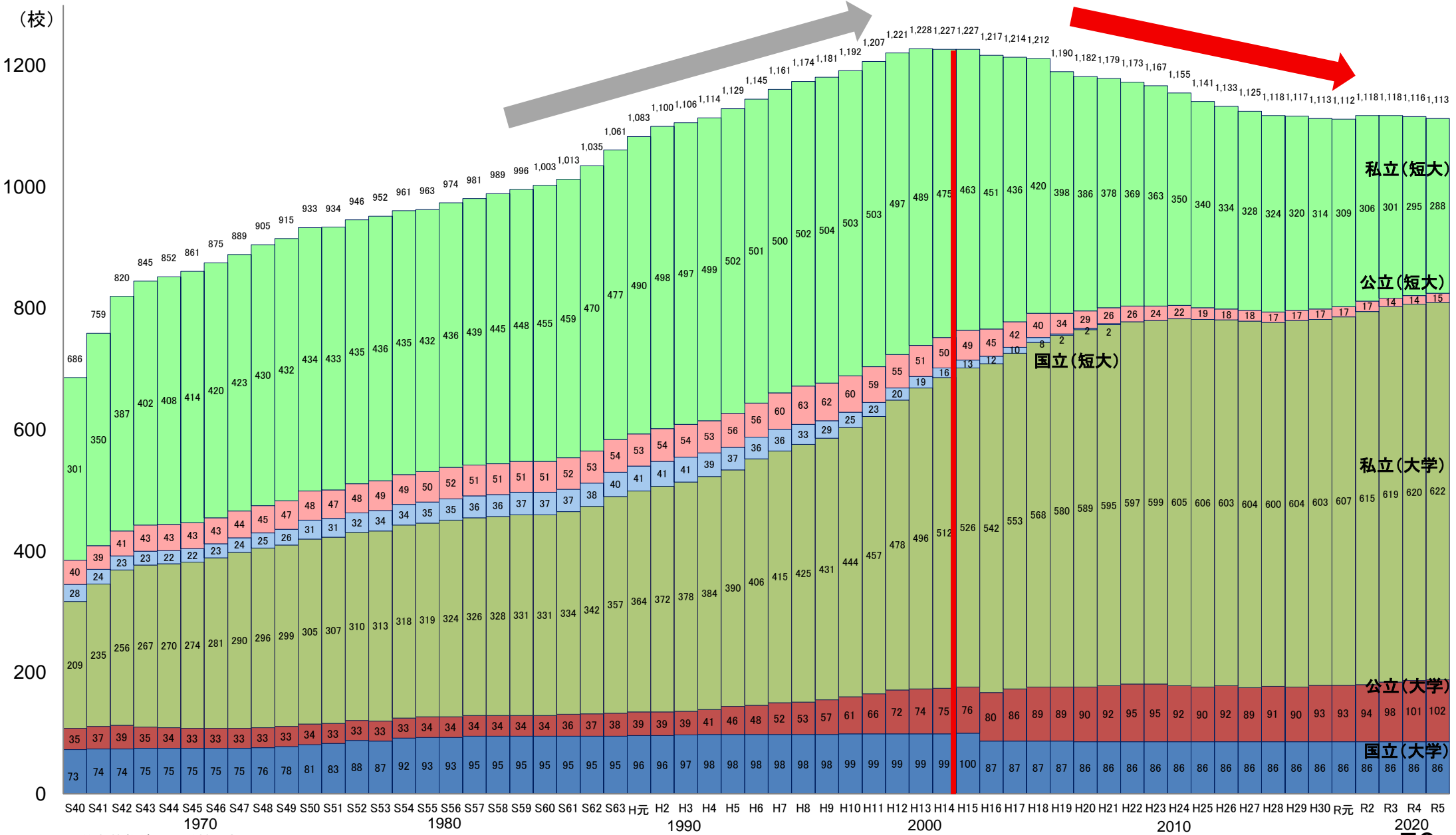
● 合計7万5,841人



(出典) 文部科学省「学校基本統計」(令和5年度)より作成。

大学・短期大学数の推移

- 近年の主な傾向として、四大化や廃止により短期大学数は減少。
- 平成14年以降は全体的に四大・短大の合計数も減少傾向。国立大学数は平成16年以降ほぼ横ばい。

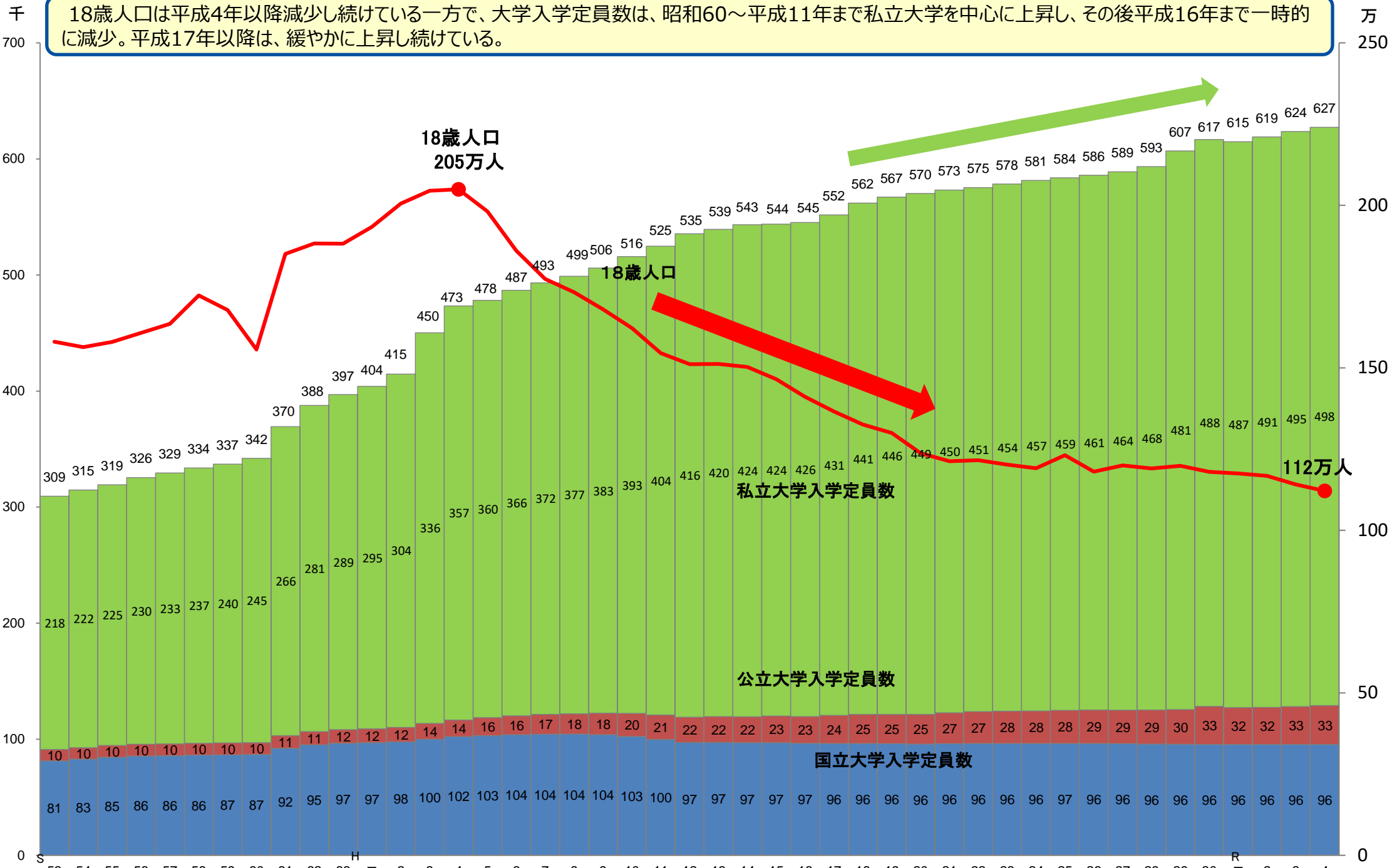


※学生募集停止の学校も含む。
 ※通信教育課程のみ置く学校は含まない。

(出典) 文部科学省「学校基本統計」

設置者別大学入学定員数の推移

18歳人口は平成4年以降減少し続けている一方で、大学入学定員数は、昭和60～平成11年まで私立大学を中心に上昇し、その後平成16年まで一時的に減少。平成17年以降は、緩やかに上昇し続けている。

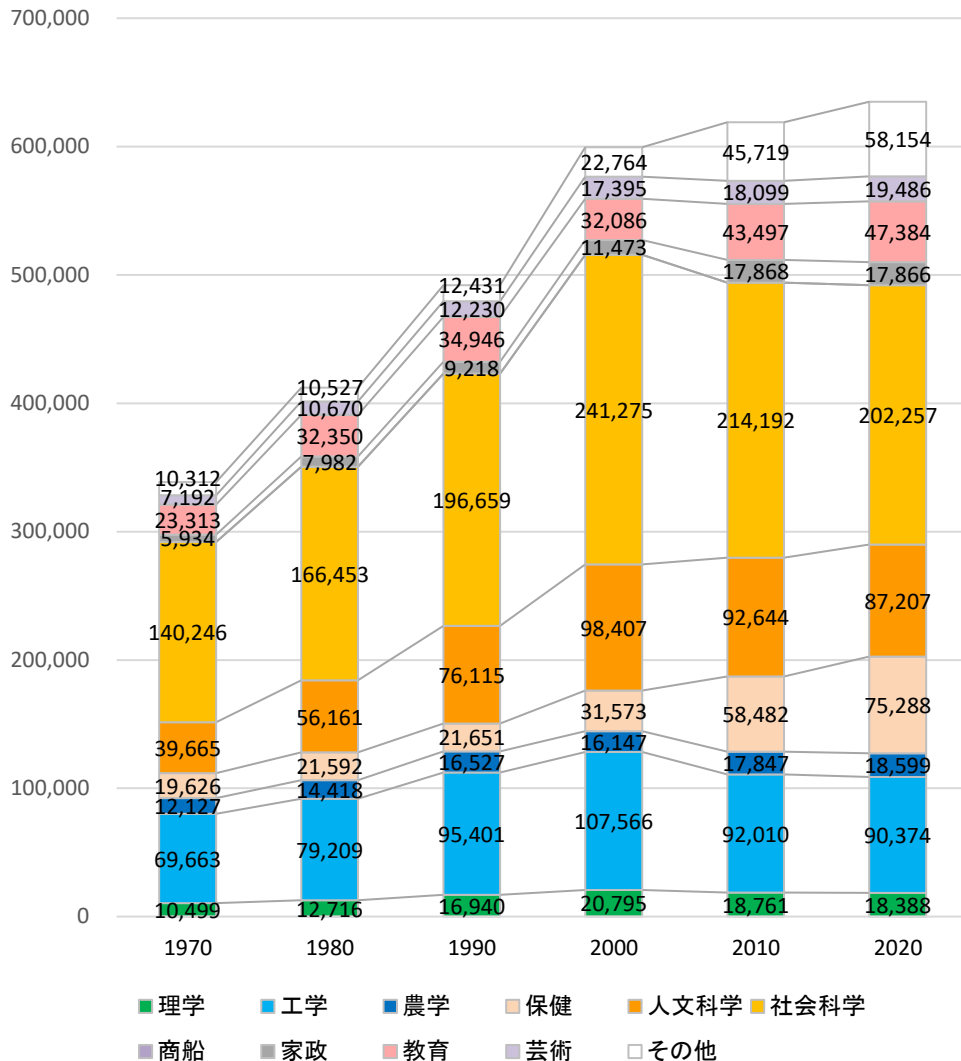


出典：文部科学省「全国大学一覧」。「学校基本統計」
 ※大学定員数については、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の計と合計が一致しない場合がある。

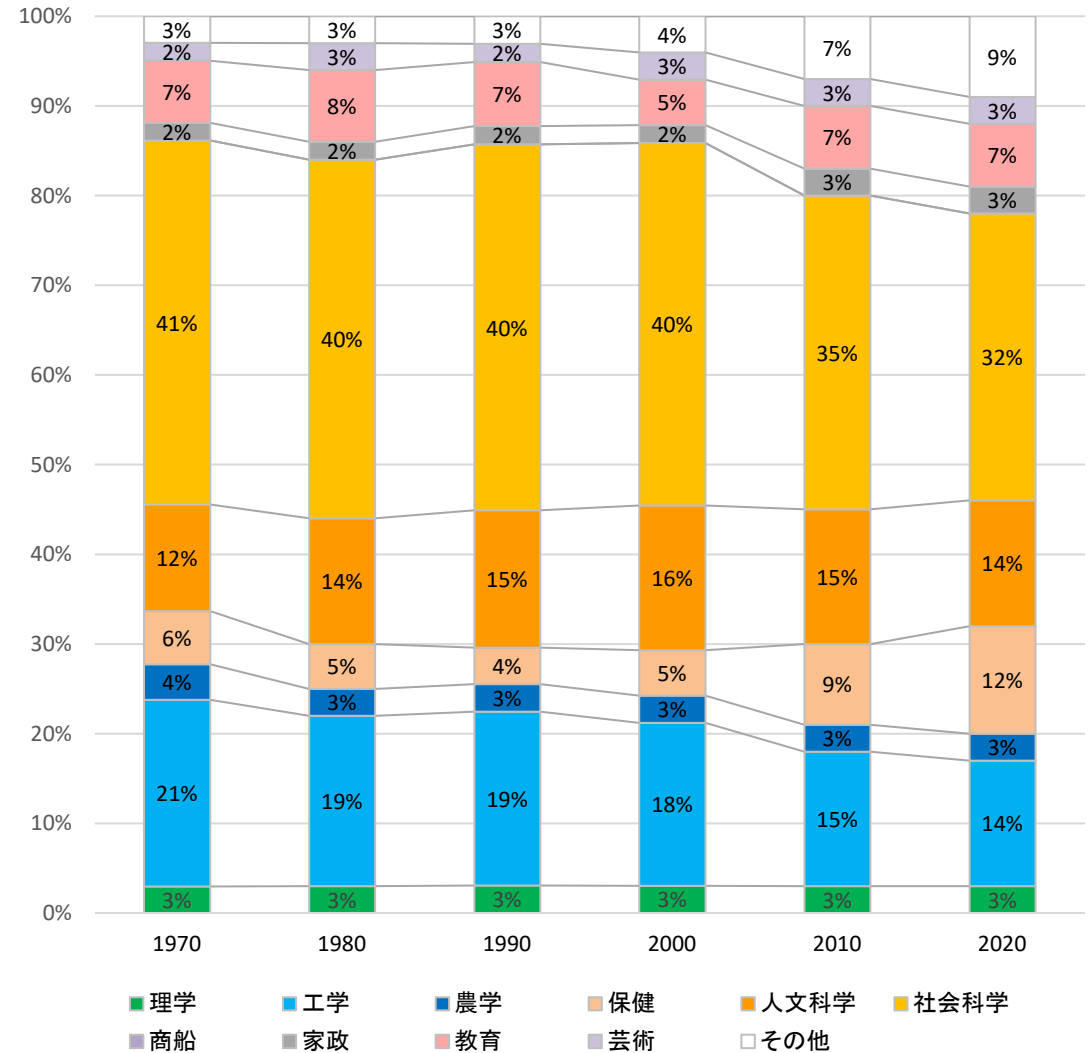
専攻分野別入学者数の推移

2000年以降、全体の入学者数は横ばいで推移。関係学科別では、「保健」、「その他」が増加する一方で、「工学」「理学」などの学部の入学者数は減少傾向。

関係学科別入学者数の推移(国公立大学)



関係学科別入学者割合の推移(国公立大学)



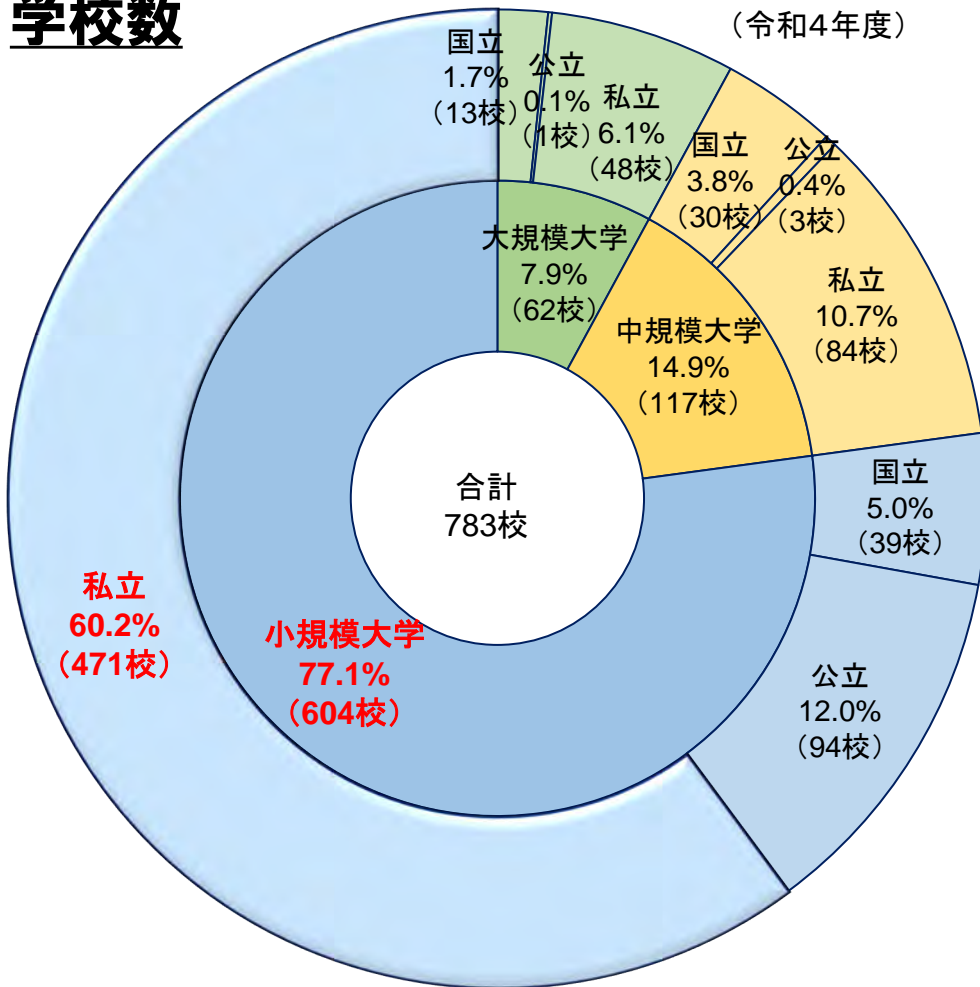
※「その他」には文理融合型の複合的新領域の学部も含まれる

(出典) 文部科学省「学校基本統計」より作成。

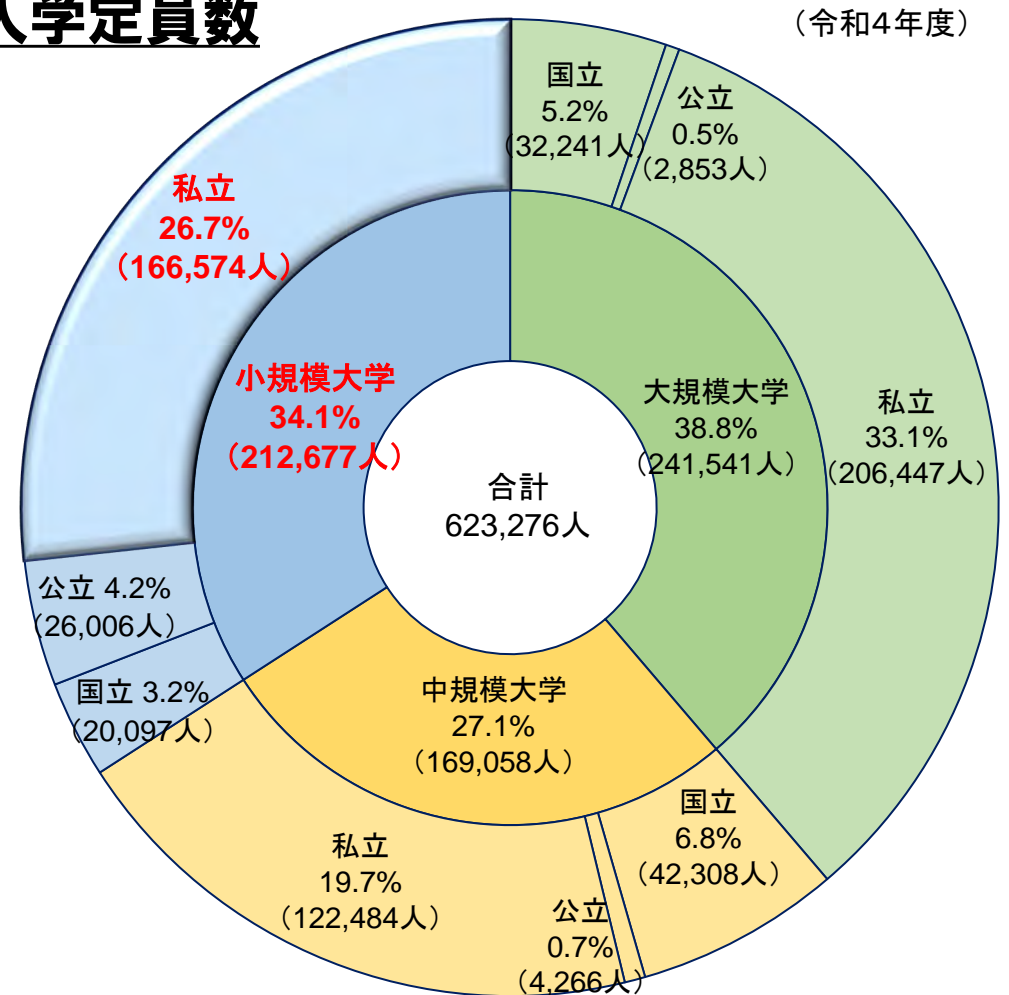
規模別学校数及び入学定員数の割合

- 学校数において小規模大学は全体の77.1%を占めており、このうち私立が大半を占めている。
- 入学定員において小規模大学の定員は全体の34.1%を占めており、このうち私立が大半を占めている。

学校数



入学定員数



■ 大規模大学 ■ 中規模大学 ■ 小規模大学

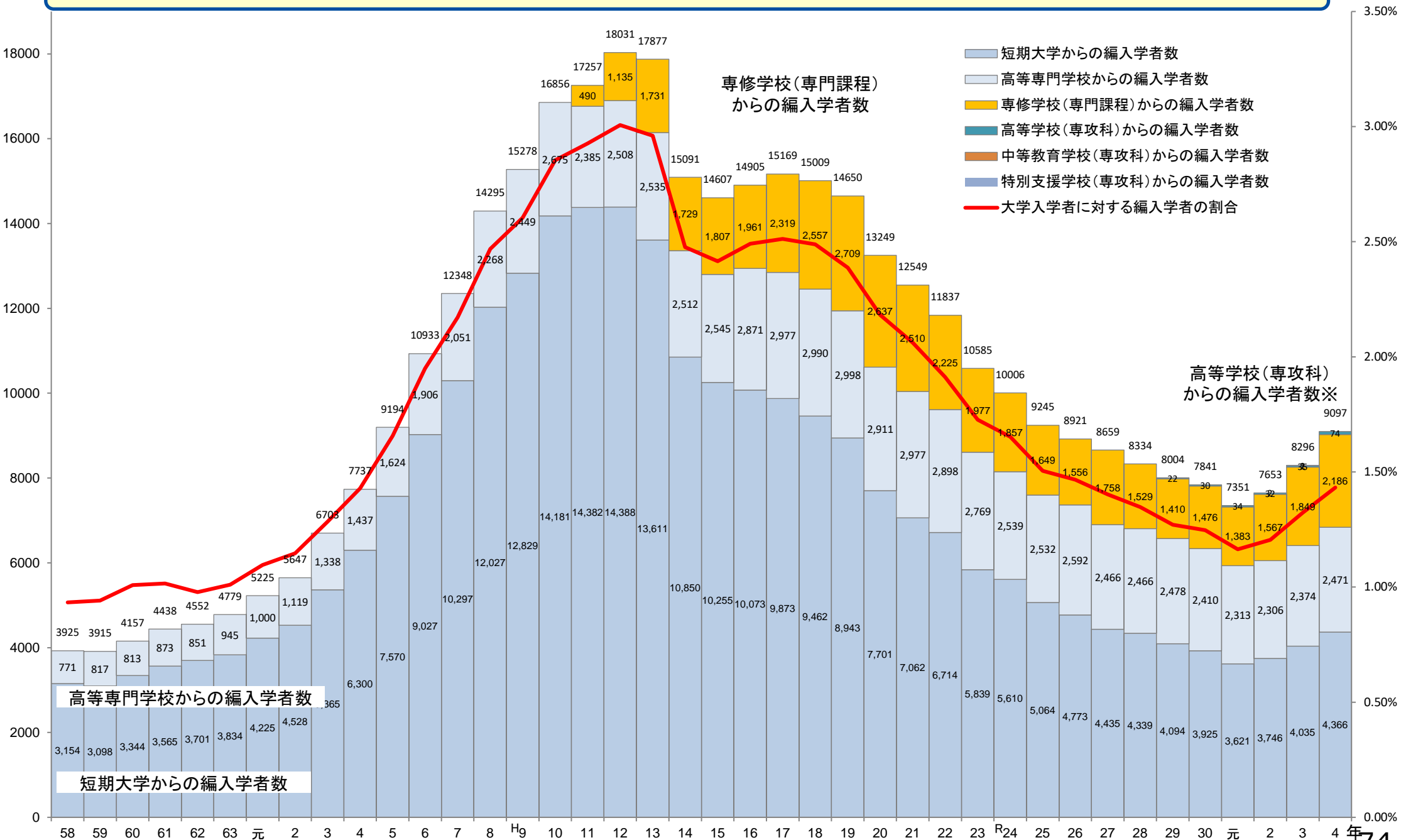
※大規模大学: 入学定員が2,000人以上の大学、中規模大学: 入学定員が1,000人~1,999人の大学、小規模大学: 入学定員が999人以下の大学

※小数点第二位を四捨五入しているためグラフの合計値が一致しない場合がある。

【出典】文部科学省調べ

編入学者数の推移

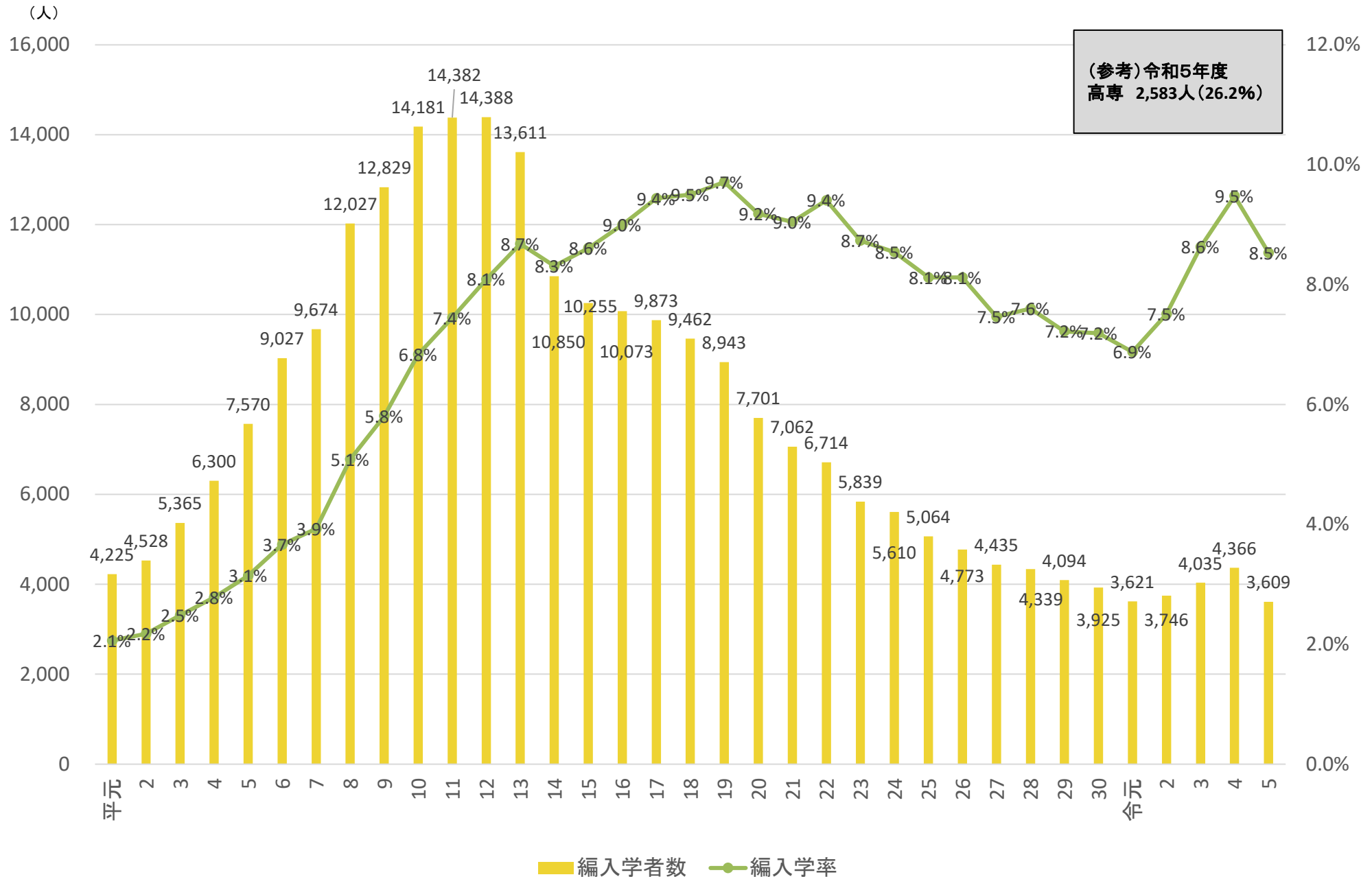
編入学者数は、平成12年頃まで急激に上昇し、平成17年以降令和元年まで減少し続けたが、近年は上昇している。



出典: 文部科学省「学校基本調査」。

※高等学校(専攻科)からの編入学者数内に中等教育学校(専攻科)からの編入学者数及び特別支援学校(専攻科)からの編入学者数が含まれている

短期大学から4年制大学への編入学者の推移

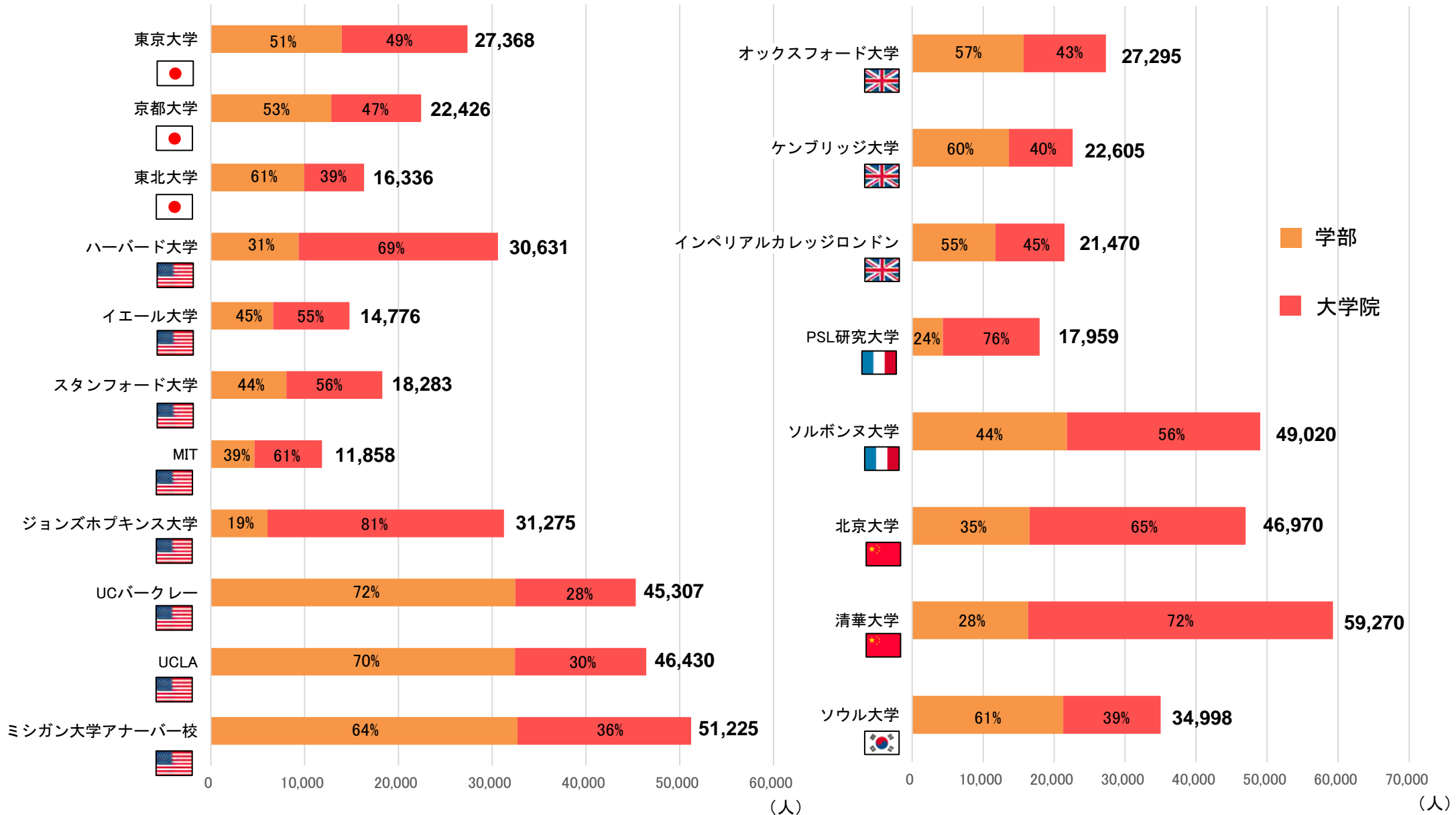


※編入学者は夜間含む。
 ※短期大学卒業生数に占める編入学者数の割合。
 ※当該年度に4年制大学が受け入れた編入学者数で過年度卒業生を含む。

(出典:「学校基本調査」)

各国の有力大学における学部・大学院学生比較(人数・割合)

- 米・仏・中の研究大学の多くが、学部生よりも大学院生の占める割合が大きい。
- 日本のほか、米国の州立大学や英国の大学においては 学部生の割合の方がやや大きい。



日米の高等教育の構造比較

- 世界大学ランキングにランクインしている日米の大学をランキング順位別に配置すると以下のとおり。
- ランクインしている大学は、米国では全大学の約4%に過ぎず、かつトップ200位に集中しているのに対し、日本ではトップ200位以内の大学は少ない一方で、全大学の10%以上がランクインしている状況。

赤: 私立大学
黒: 州立大学

アメリカの高等教育

大学名は、カリフォルニア州内の大学のみを表示

UC Berkeley (9)
UC Los Angeles (18)
UC San Diego (34)
UC Davis (59)
UC Santa Barbara (69)
UC Irvine (92)

スタンフォード大学 (2)
カリフォルニア工科大学 (7)
南カリフォルニア大学 (74)

UC Santa Cruz

UC Riverside

UC Merced

San Diego State University

カリフォルニア大学
(University of California)

カリフォルニア州立大学
(California State University)

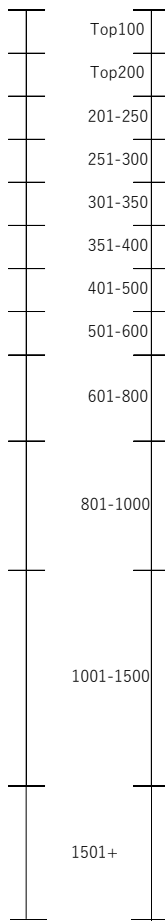
カリフォルニア・コミュニ
ティ・カレッジ
(California Community College)

総数: 約4,000校
(Top6.1%に169校)

(出典) THE World University Rankings 2024に基づき作成

THE World University Rankings 2024

Top1904
(6.1%)



others
(93.9%)

総数: 約31,000校
(Top6.1%の1,904校でランキング)

日本の高等教育

黒: 国立大学
赤: 私立大学
青: 公立大学

東京大 (29)
京大 (55)

東北大 (130)、大阪大 (175)、東京工業大 (191)

名古屋大

九州大

北海道大、筑波大

東京医科歯科大

広島大、神戸大、順天堂大学、慶應義塾大
会津大

千葉大、熊本大、岡山大学、東京農工大、東京医科大、早稲田大
横浜市立大、京都府立医科大

浜松医科大、金沢大、新潟大、岐阜大、信州大、豊橋技術科学大、愛媛大、電気通信大、群馬大、香川大、九州工業大、三重大、長岡技術科学大、長崎大、滋賀医科大、徳島大、東京海洋大、富山大、山形大、山梨大、横浜国立大、鹿児島大、京都工芸繊維大、名古屋工業大、お茶の水女子大、山口大、東京理科大、兵庫医科大、東京都立大、名古屋市立大、和歌山県立医科大、大阪公立大

琉球大、佐賀大、秋田大、福井大、茨城大、岩手大、高知大、宮崎大、室蘭工業大、大分大、埼玉大、島根大、静岡大、鳥取大、宇都宮大、奈良女子大、高知工科大、兵庫県立大、静岡県立大、富山県立大

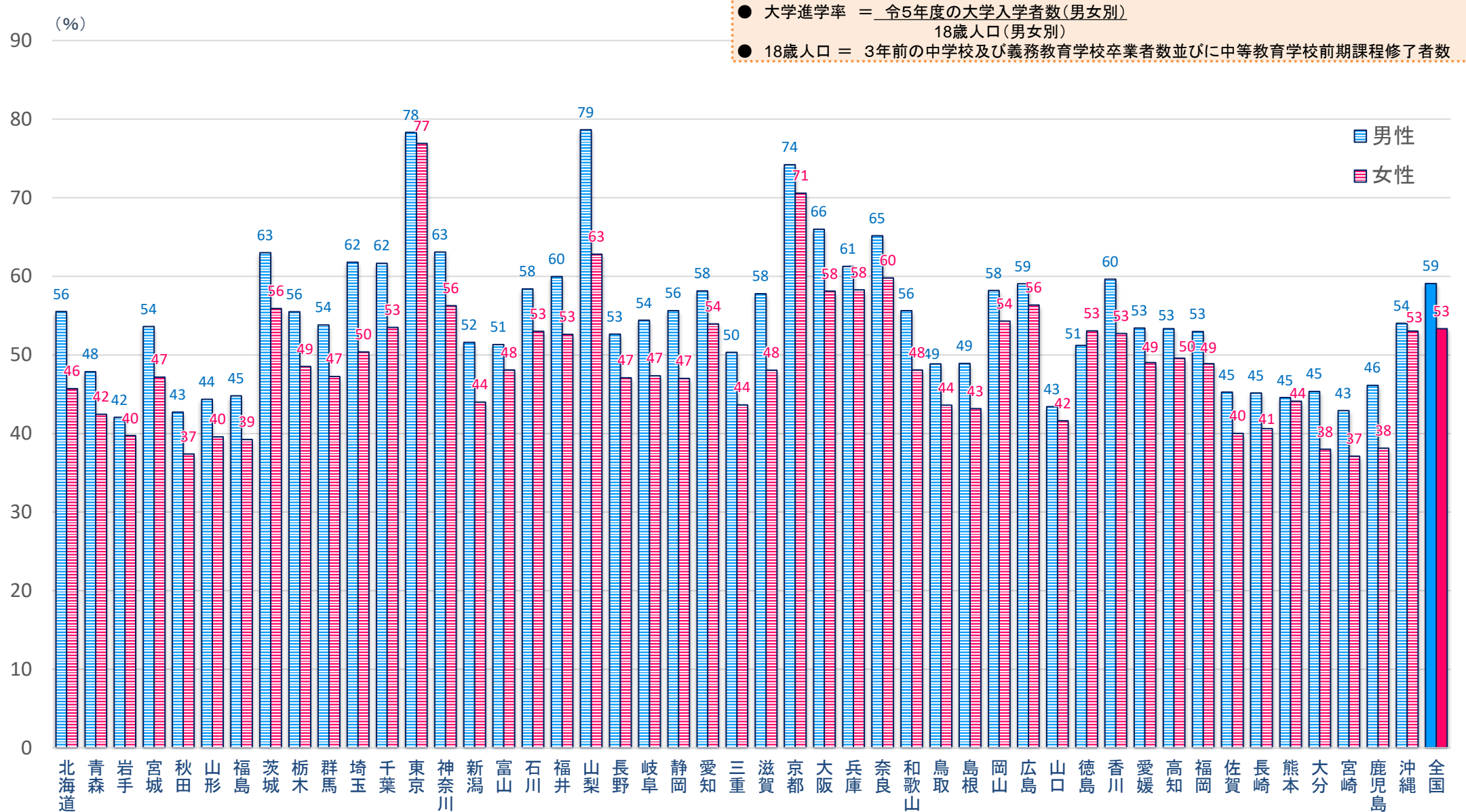
法政大、金沢医科大、帝京大、青山学院大、千葉工業大、中部大、中央大、獨協医科大、同志社大、福岡大、神奈川大、関西大、工学院大、関西学院大、京都産業大、明治大、名城大、大阪工業大、大阪医科薬科大、龍谷大、上智大、東京農業大、東京都市大、東京電機大、東洋大学

総数: 約1,100校
(Top6.1%に119校)

進学率・学校数・入学定員・進学者
収容力等の状況（都道府県別）

男女別・都道府県別の4年制大学進学率

大学進学率を男女別にみると、徳島県を除く46都道府県で男性の方が女性よりも高く、男女の進学率の差は
 ①山梨県（15.8ポイント）、②埼玉県（11.4ポイント）、③北海道（9.8ポイント）、④滋賀県（9.7ポイント）の順に高い。



(出典) 文部科学省「令和5年度学校基本統計」

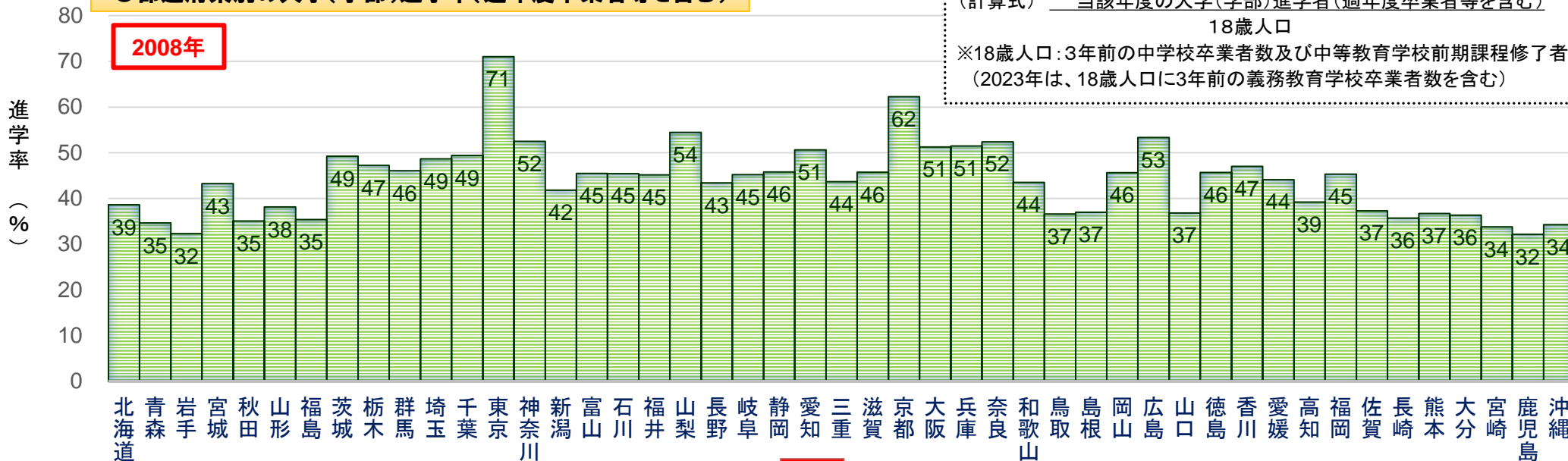
都道府県別大学(学部)進学率の変化(過年度卒業生等を含む)

都道府県別の過年度卒業生等も含む大学(学部)進学率は、地域によって差があるが、2008年と比較すると全体的に上昇している。

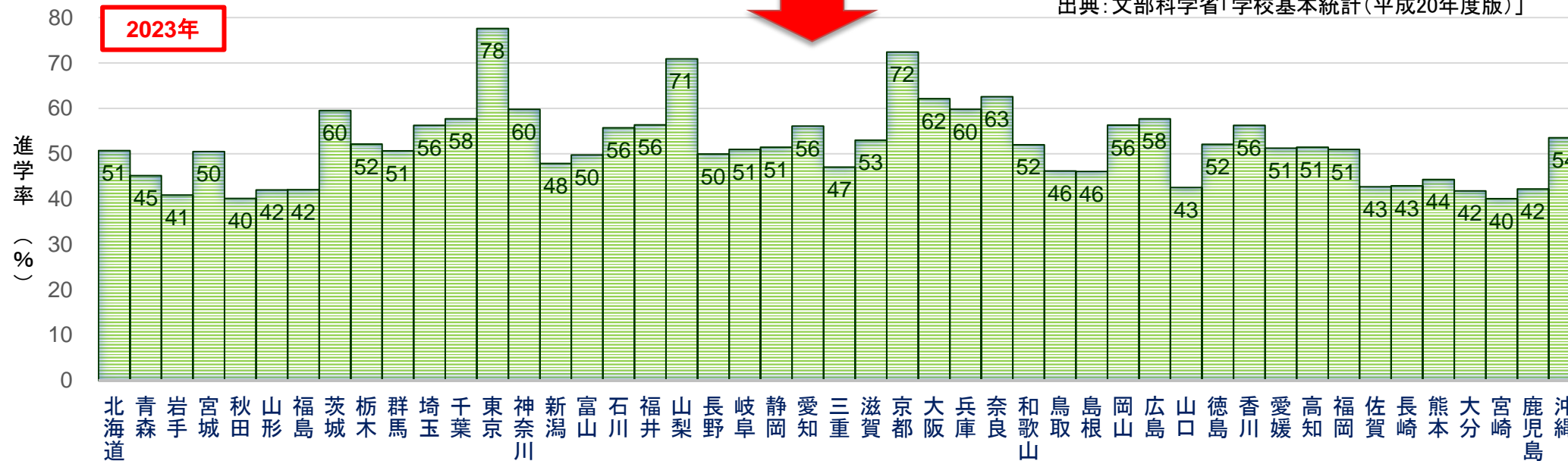
○都道府県別の大学(学部)進学率(過年度卒業生等を含む)

(計算式) $\frac{\text{当該年度の大学(学部)進学者(過年度卒業生等を含む)}}{18\text{歳人口}}$

※18歳人口:3年前の中学校卒業生数及び中等教育学校前期課程修了者数
(2023年は、18歳人口に3年前の義務教育学校卒業生数を含む)



出典:文部科学省「学校基本統計(平成20年度版)」



出典:文部科学省「学校基本統計(令和5年度版)」

大学進学時の都道府県別流入・流出者数

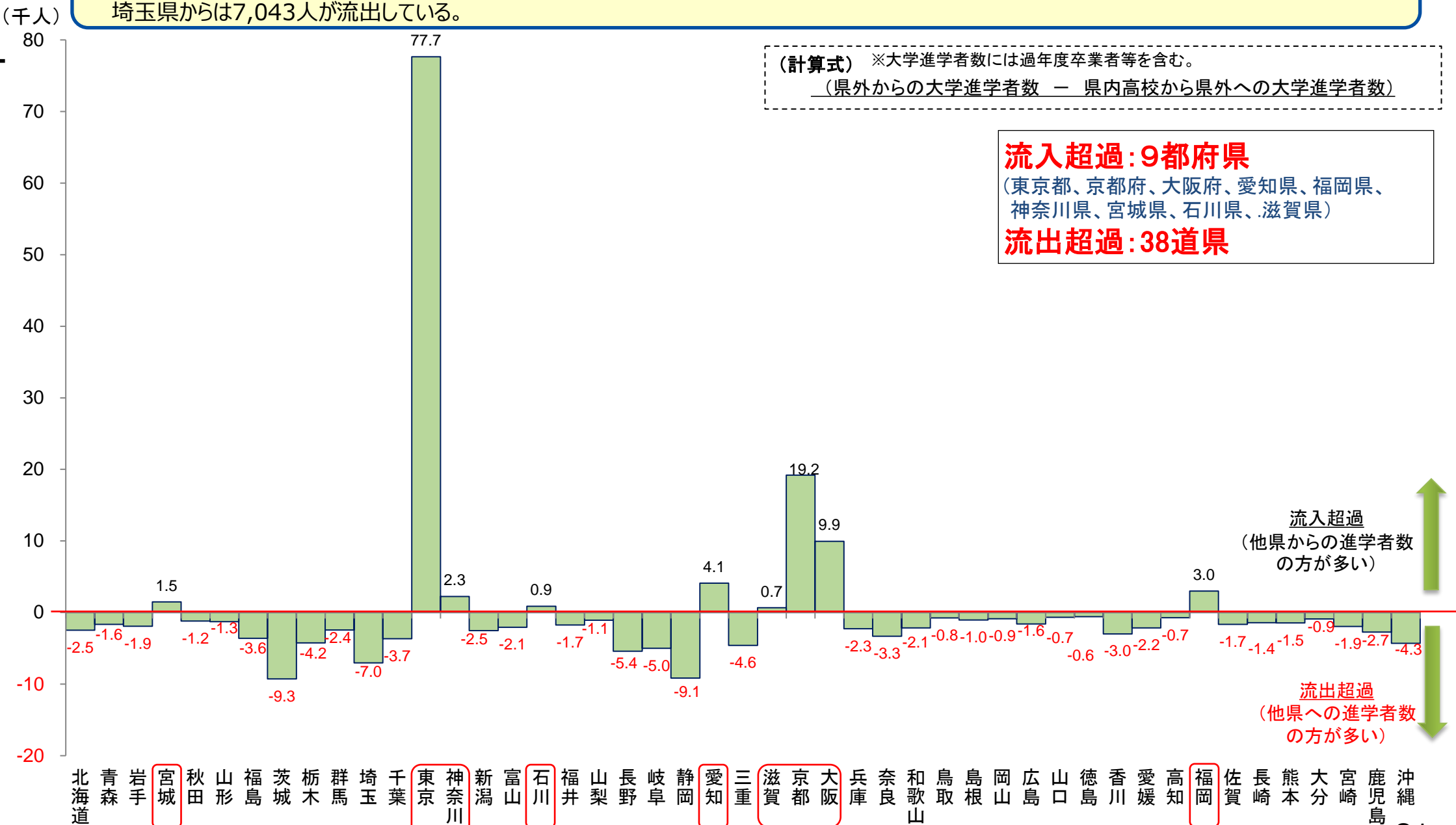
- 大学進学時の各都道府県における流入者・流出者数をみると、流入超過が9都府県、流出超過が38道県となっている。
- 東京都には77,656人、京都府には19,193人、大阪府には9,947人が流入している一方、茨城県からは9,261人、静岡県からは9,149人、埼玉県からは7,043人が流出している。

(計算式) ※大学進学者数には過年度卒業者等を含む。
 (県外からの大学進学者数 - 県内高校から県外への大学進学者数)

流入超過: 9都府県

(東京都、京都府、大阪府、愛知県、福岡県、
 神奈川県、宮城県、石川県、滋賀県)

流出超過: 38道県



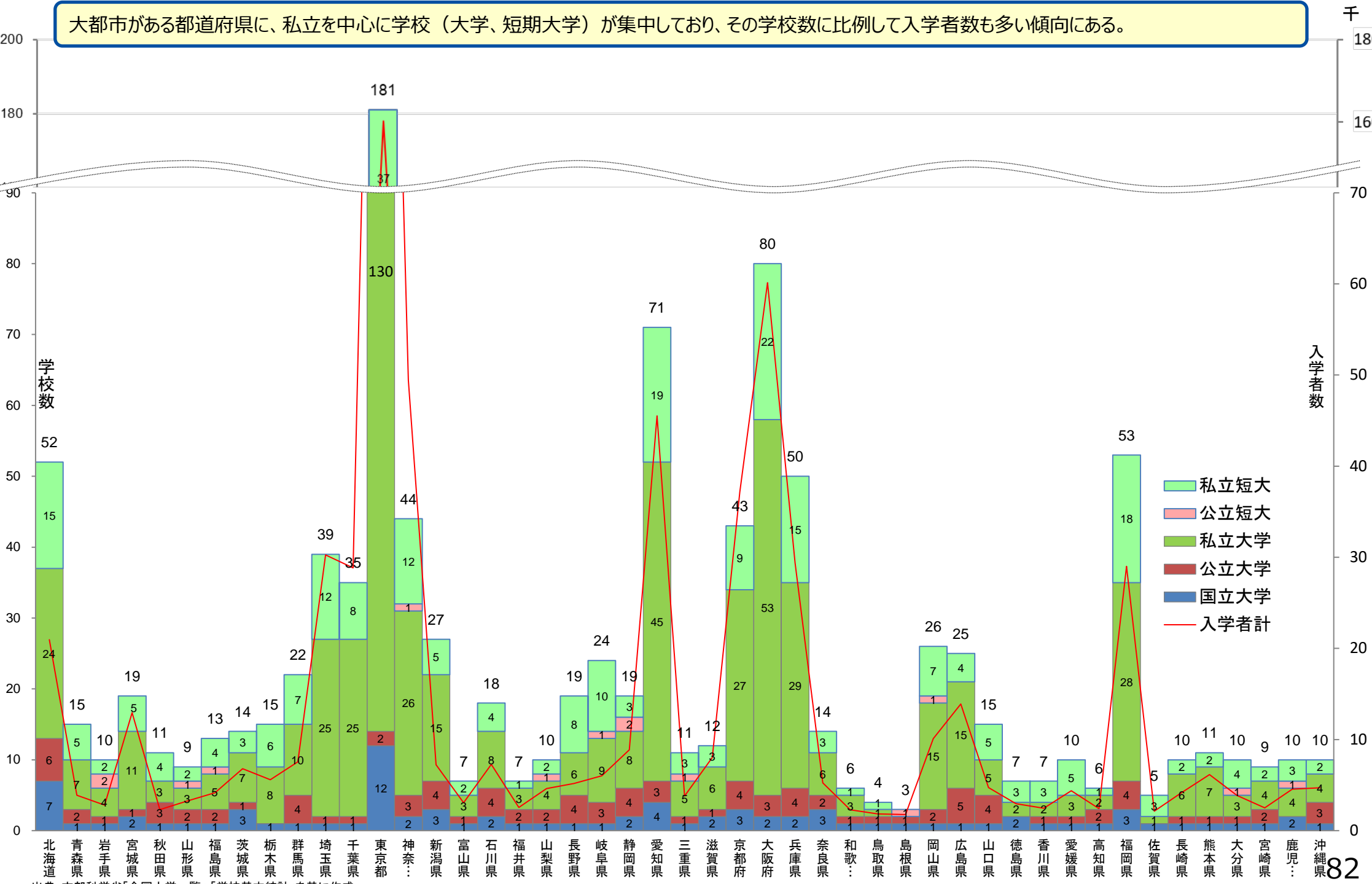
流入超過
 (他県からの進学者数
 の方が多い)

流出超過
 (他県への進学者数
 の方が多い)

【出典】文部科学省「学校基本統計(令和5年度)」

都道府県別・設置者別学校数及び入学者数

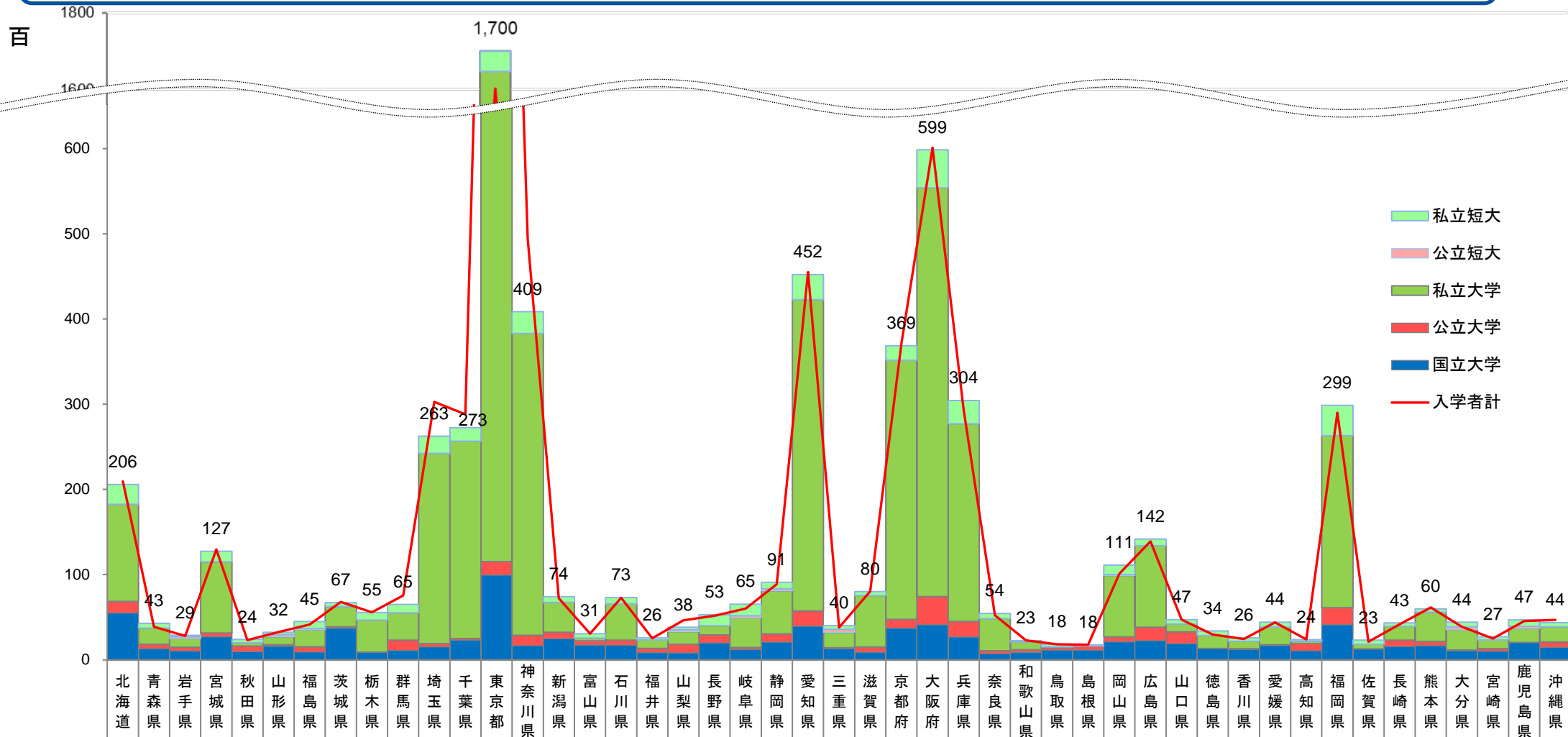
大都市がある都道府県に、私立を中心に学校（大学、短期大学）が集中しており、その学校数に比例して入学者数も多い傾向にある。



出典: 文部科学省「全国大学一覧」「学校基本統計」を基に作成。

都道府県別・設置者別入学定員数及び入学者数

- 大都市がある都道府県に、私立大学を中心に入学定員が集中しており、その入学定員に比例して入学者も多い傾向にある。
- 特に、東京都は、約15万人の私立大学の入学定員があり、最も入学定員が多い都道府県となっている。



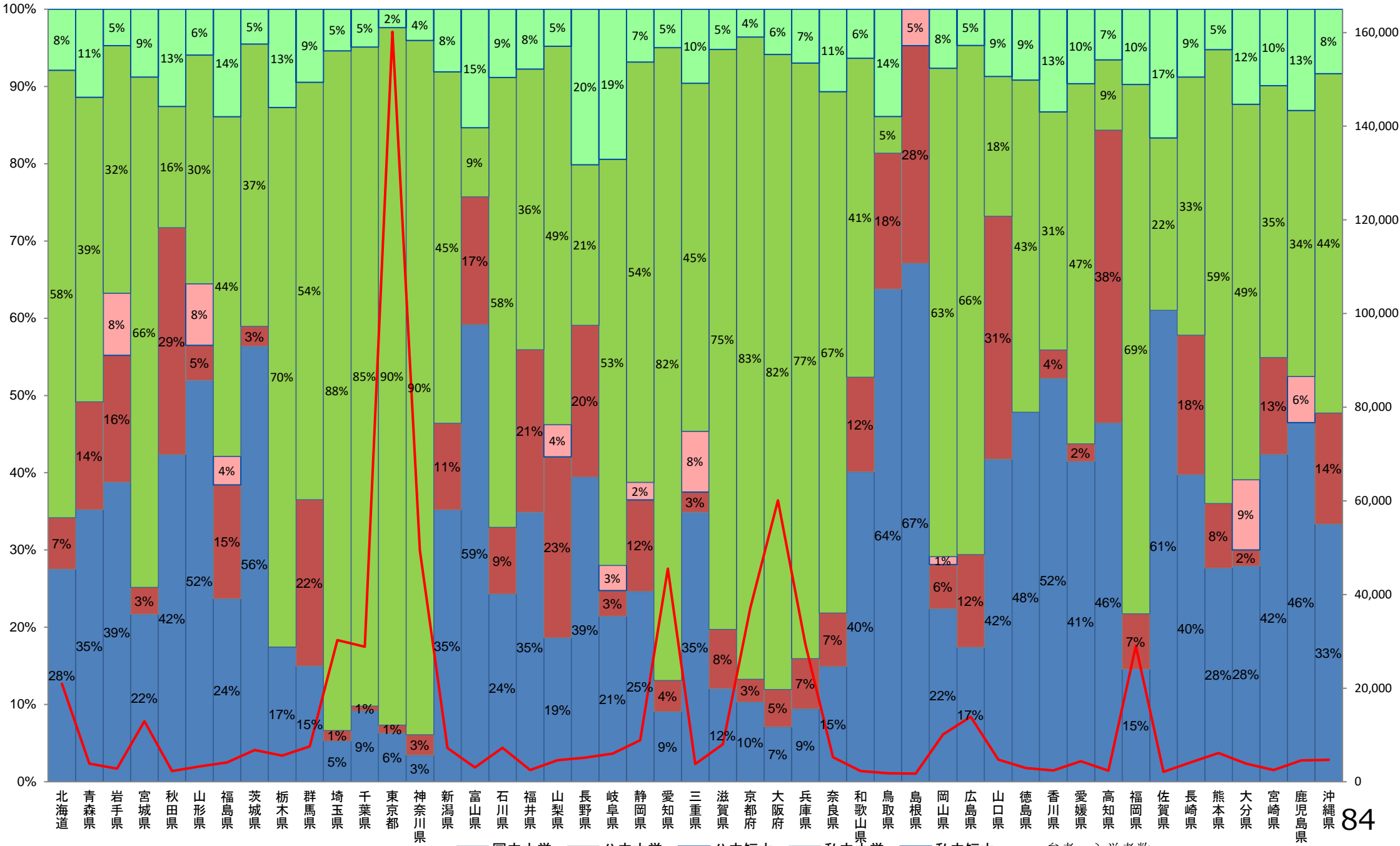
	北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	新潟県	富山県	石川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県
私立短大	23	6	2	12	4	3	8	5	9	10	20	16	52	26	7	5	8	2	3	13	14	8	29	4	5	17	45	27	6	2	3	1	11	8	5	6	4	6	2	36	5	4	4	5	4	7	5
公立短大	0	0	2	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0		
私立大学	114	19	10	83	4	10	20	24	38	32	223	232	1533	354	35	3	42	10	15	11	35	50	365	18	61	304	480	232	38	9	1	0	72	96	9	15	9	21	3	202	5	16	34	24	10	16	18
公立大学	13	5	4	4	7	1	6	2	0	12	4	2	16	12	8	5	6	5	10	10	2	10	18	1	6	10	33	18	3	3	3	5	6	16	14	0	1	1	8	20	0	7	5	1	3	0	6
国立大学	55	13	10	27	10	16	9	37	9	11	15	23	100	17	25	17	17	9	8	20	12	21	40	13	9	37	41	27	7	9	11	12	21	23	19	13	12	17	11	41	13	16	17	11	10	21	15
合計	206	43	29	127	24	32	45	67	55	65	263	273	1700	409	74	31	73	26	38	53	65	91	452	40	80	369	599	304	54	23	18	18	111	142	47	34	26	44	24	299	23	43	60	44	27	47	44
入学者計	210	39	28	130	23	33	42	68	56	76	303	288	1602	494	72	31	73	25	46	52	60	89	455	38	80	372	601	294	52	23	18	18	101	139	47	30	25	44	24	290	21	42	62	39	25	46	47

出典：文部科学省「全国大学一覧」「学校基本統計」を基に作成。

※「全国大学一覧」における入学定員数の集計方法は、「学校基本統計」における入学者計の集計方法と異なる場合がある。 ※百位未満は四捨五入。

都道府県別・設置者別入学定員数比率

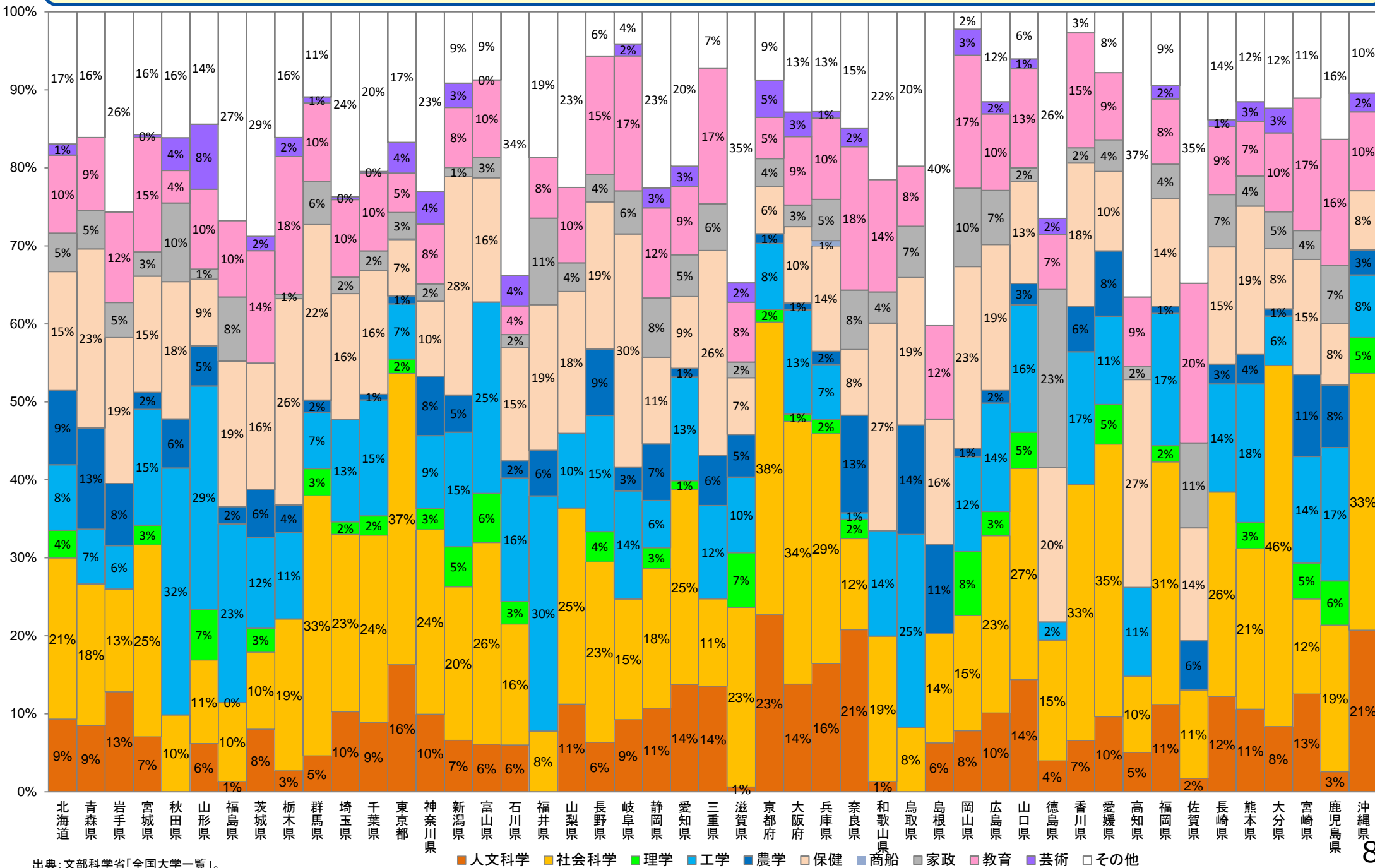
大都市がある都道府県を中心に私立の入学者の占める割合が高い傾向にある一方で、地方では国公立の入学者の占める割合が高い傾向にある。



出典: 文部科学省「全国大学一覧」「学校基本統計」を基に作成。

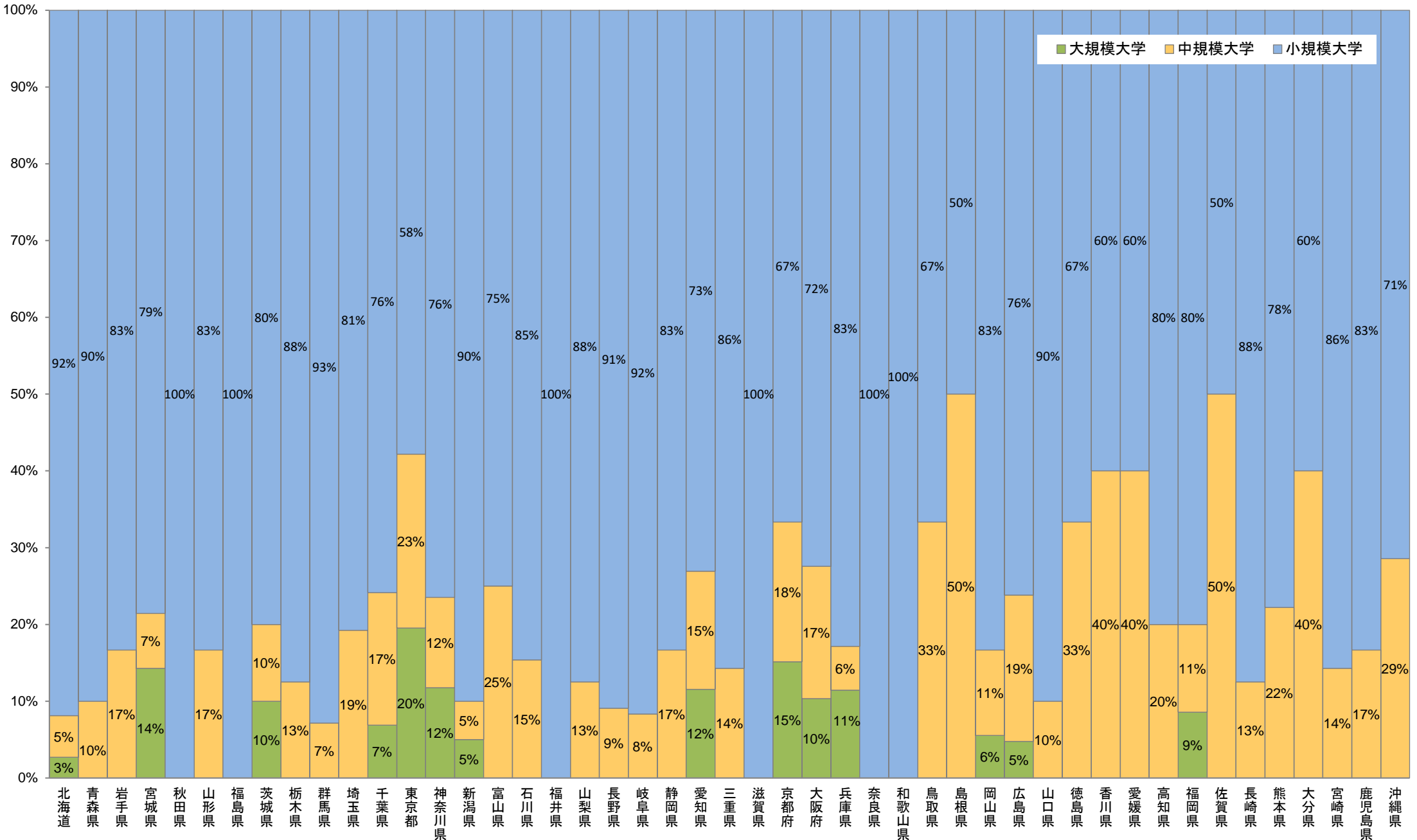
都道府県別・専攻分野別入学定員数比率

各都道府県の専攻分野別入学定員の割合（大学・短期大学）は様々であるが、例えば、大都市圏である東京や京阪神では、人文・社会科学分野の占める割合が大きく、理学・工学・農学分野の占める割合が小さい傾向にある。



都道府県別・規模別大学数比率

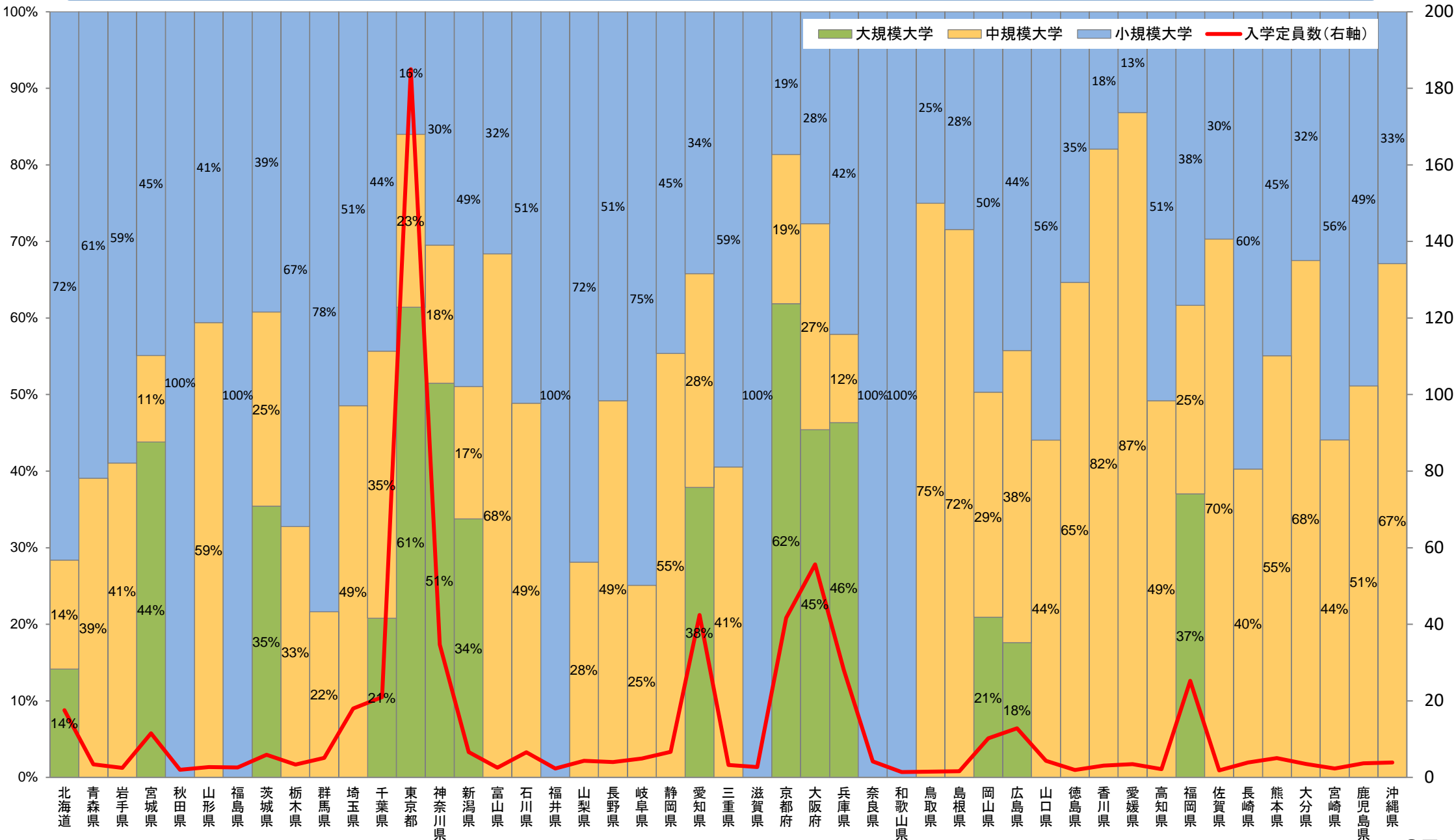
大都市がある都道府県に、大規模大学が多い傾向にある。



※大規模大学: 入学定員が2,000人以上の大学、中規模大学: 入学定員が1,000人~1,999人の大学、小規模大学: 入学定員が999人以下の大学
 ※小数点第二位を四捨五入しているためグラフの合計値が一致しない場合がある。

都道府県別・規模別大学入学定員数比率

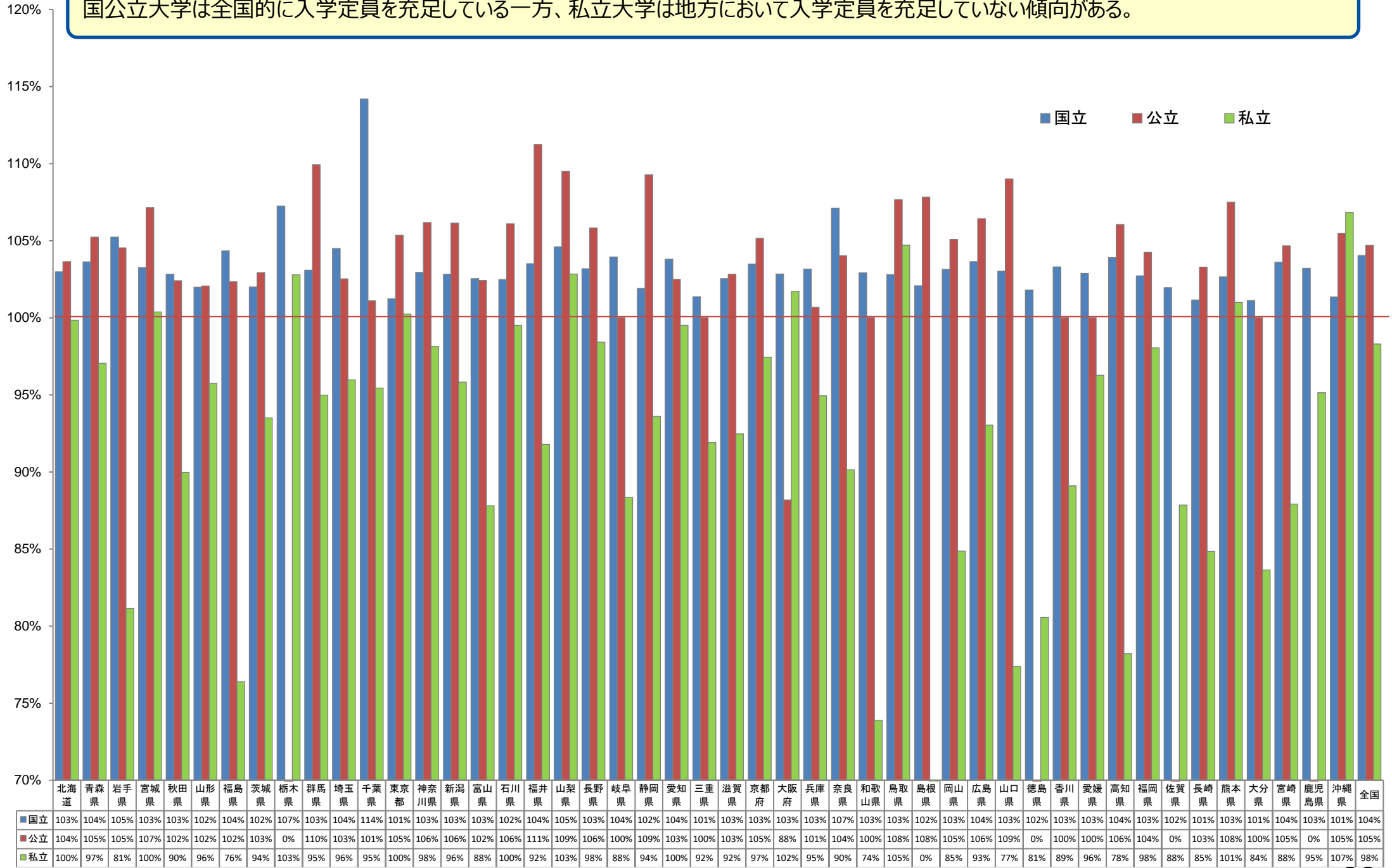
- 大都市がある都道府県を中心に、大規模大学の入学定員が集中している。
- 入学定員数が比較的多い都道府県では、その入学定員数の多くを大規模大学が占める傾向にある。



※大規模大学: 入学定員が2,000人以上の大学、中規模大学: 入学定員が1,000人~1,999人の大学、小規模大学: 入学定員が999人以下の大学
 ※小数点第二位を四捨五入しているためグラフの合計値が一致しない場合がある。

都道府県別・設置者別入学定員充足率

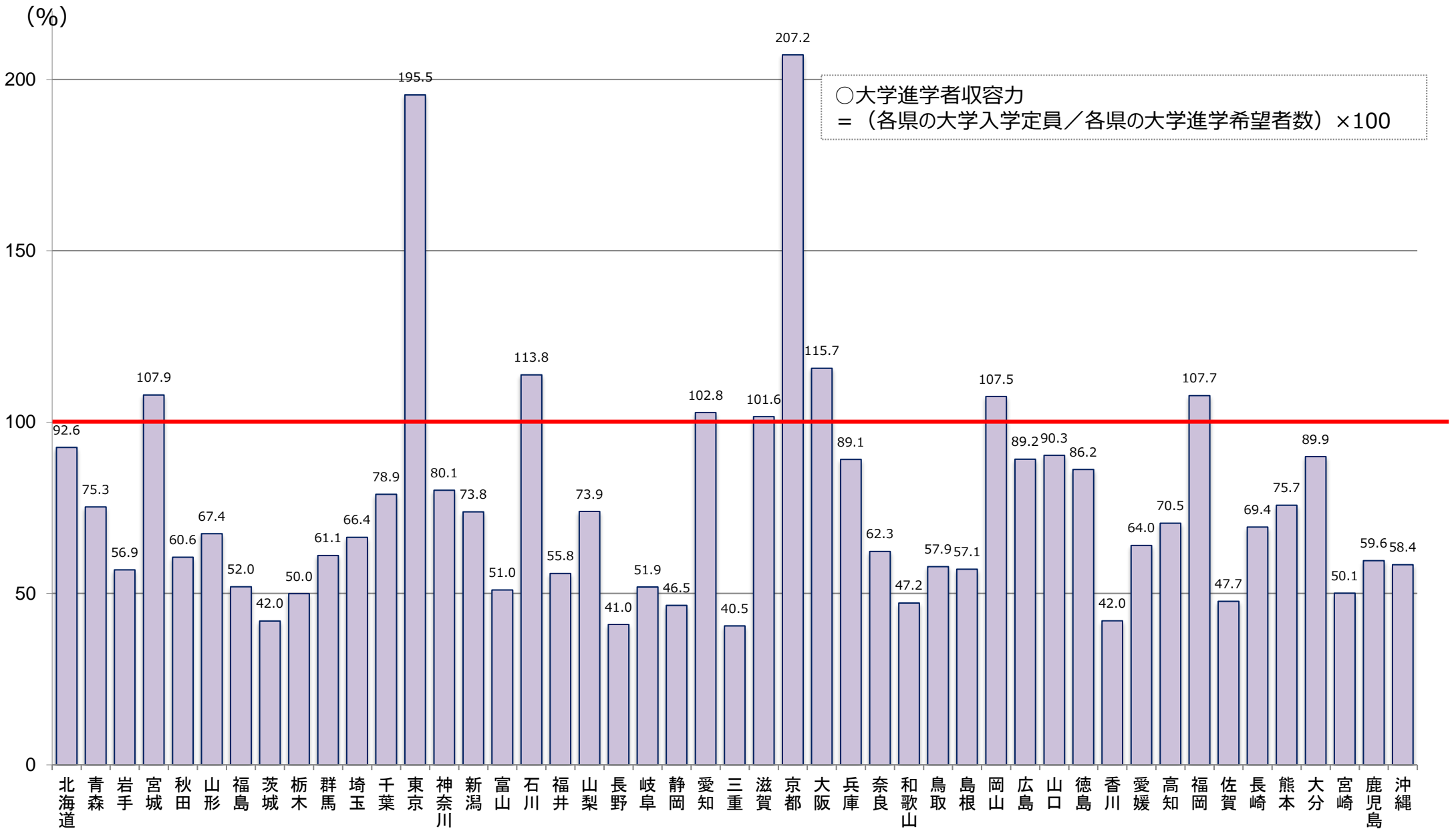
国公立大学は全国的に入学定員を充足している一方、私立大学は地方において入学定員を充足していない傾向がある。



出典: 国公立大学は文部科学省「全国大学一覧」「学校基本調査」、私立大学は日本私立学校振興・共済事業団「令和4(2022)年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向」を基に作成。

都道府県別大学進学者収容力(対大学進学希望者)

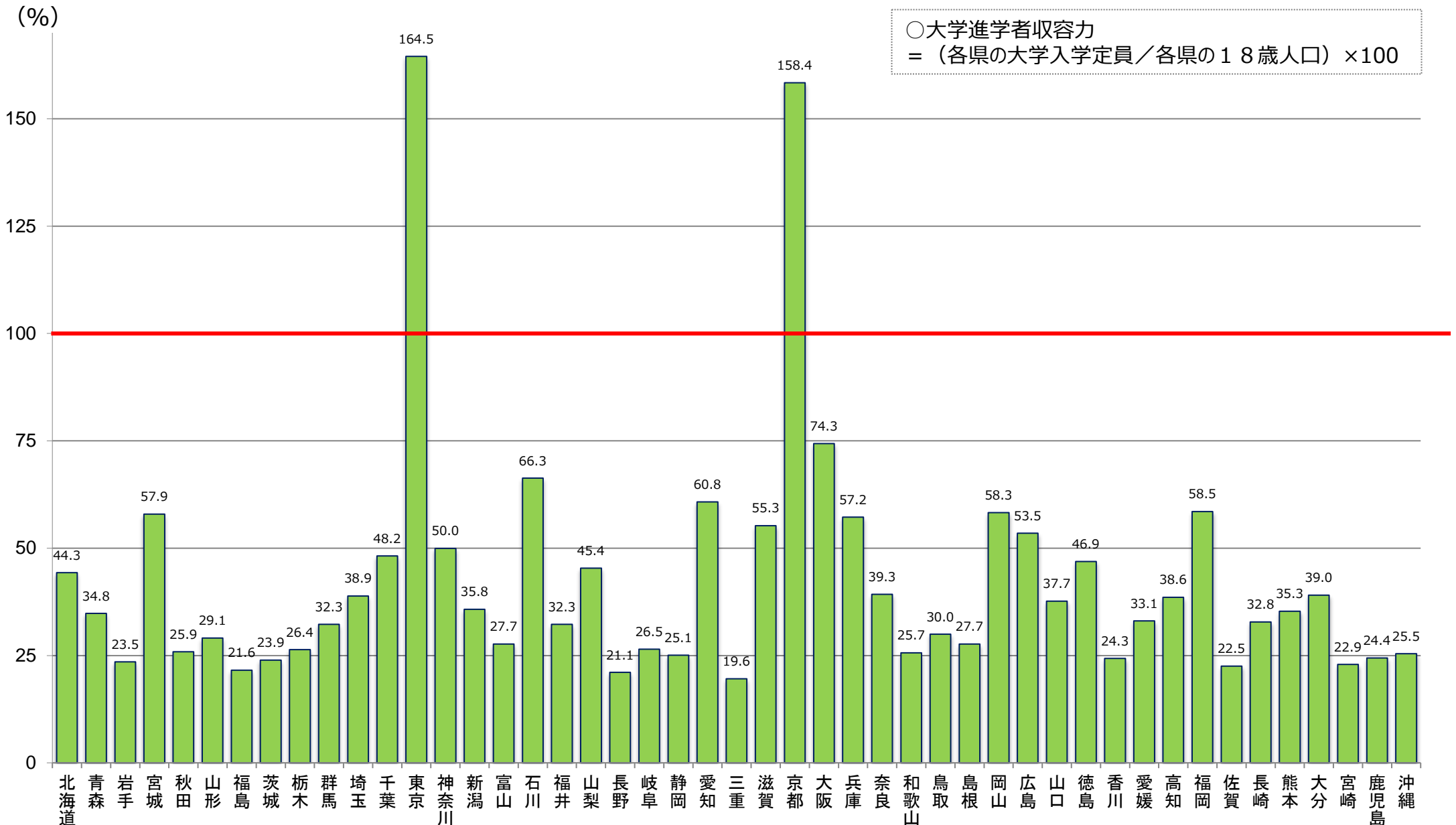
各県の大学進学希望者に対する収容力は、東京都と京都府で150%を上回っているほか、9県でも90%を超えている。
他方で、50%に満たない県も7県ある。



(出典) ○大学入学定員数：文部科学省調べ（令和5年度）（※各県（学部所在地による）に所在する大学の入学定員）
○大学進学希望者数：文部科学省「学校基本統計（令和5年度）」

都道府県別大学進学者収容力(対18歳人口)

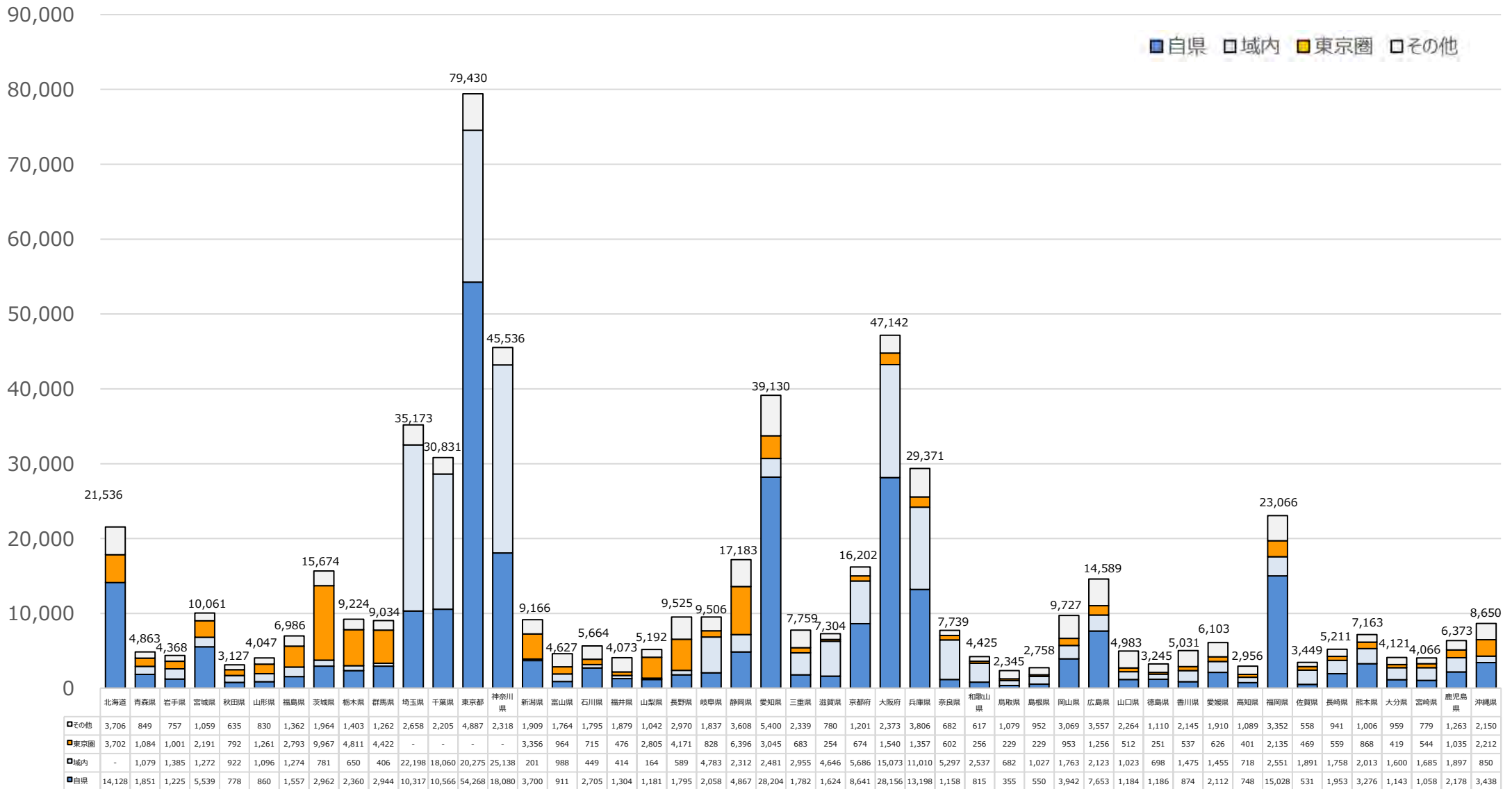
各県の18歳人口に対する収容力は東京都と京都府を除く全ての県で100%を下回っており、その多くの県では50%未満となっている。



(出典) ○大学入学定員数：文部科学省調べ（令和5年度）（※各県（学部所在地による）に所在する大学の入学定員）
○18歳人口：文部科学省「学校基本統計（令和2年度）」（※大学入学定員数調査年度の3年前の中学校及び義務教育学校卒業生並びに中等教育学校前期課程修了者数）

都道府県別高卒者の地域別大学進学者数

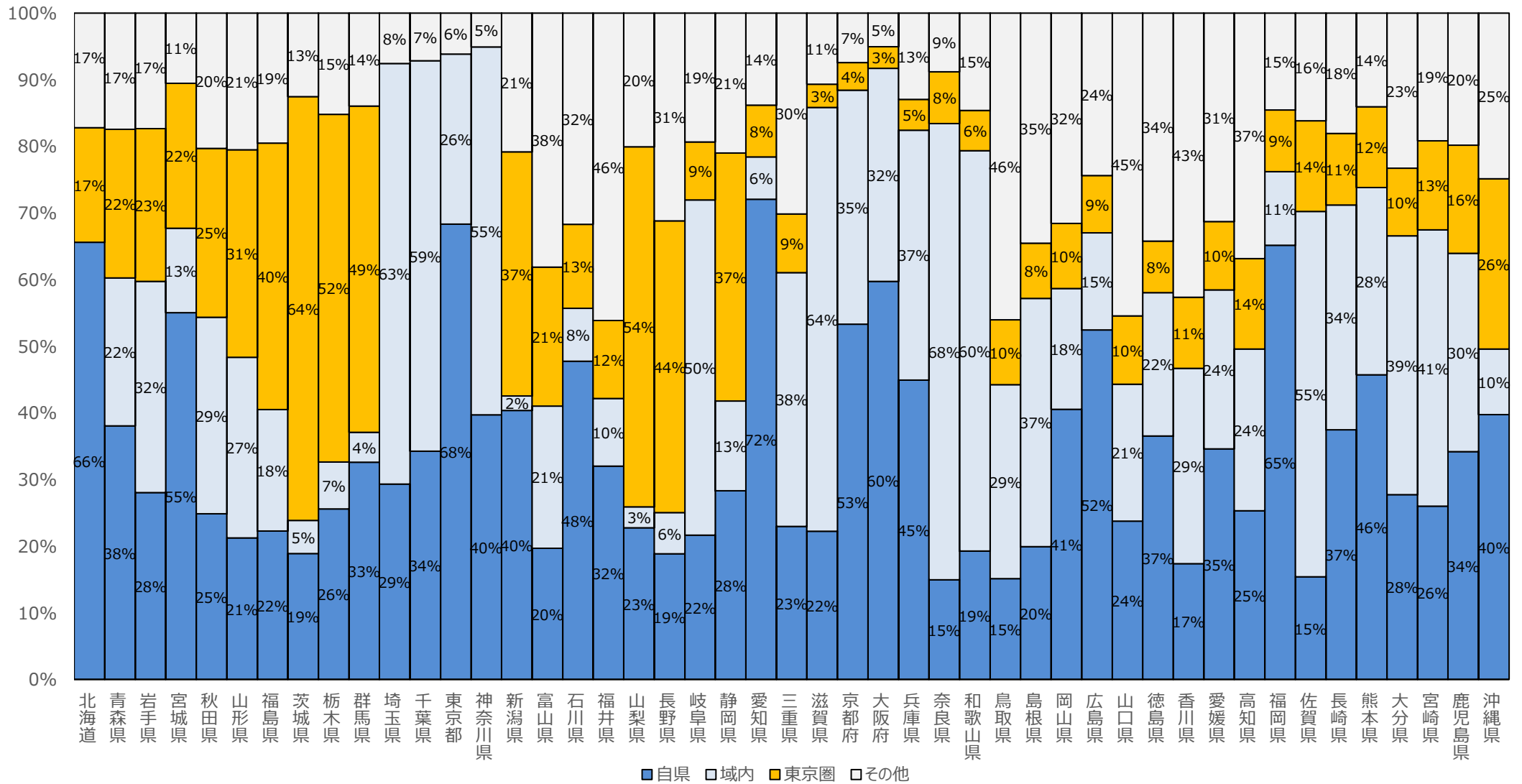
- 大都市がある都道府県を中心に大学進学者が多い傾向にある。
- 東日本では東京圏への進学者数が多い。



※地域区分：北海道、東北、関東（東京圏除く）、東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、甲信越、北陸、東海、近畿、中国四国、九州

都道府県別高卒者の地域別大学進学者数比率

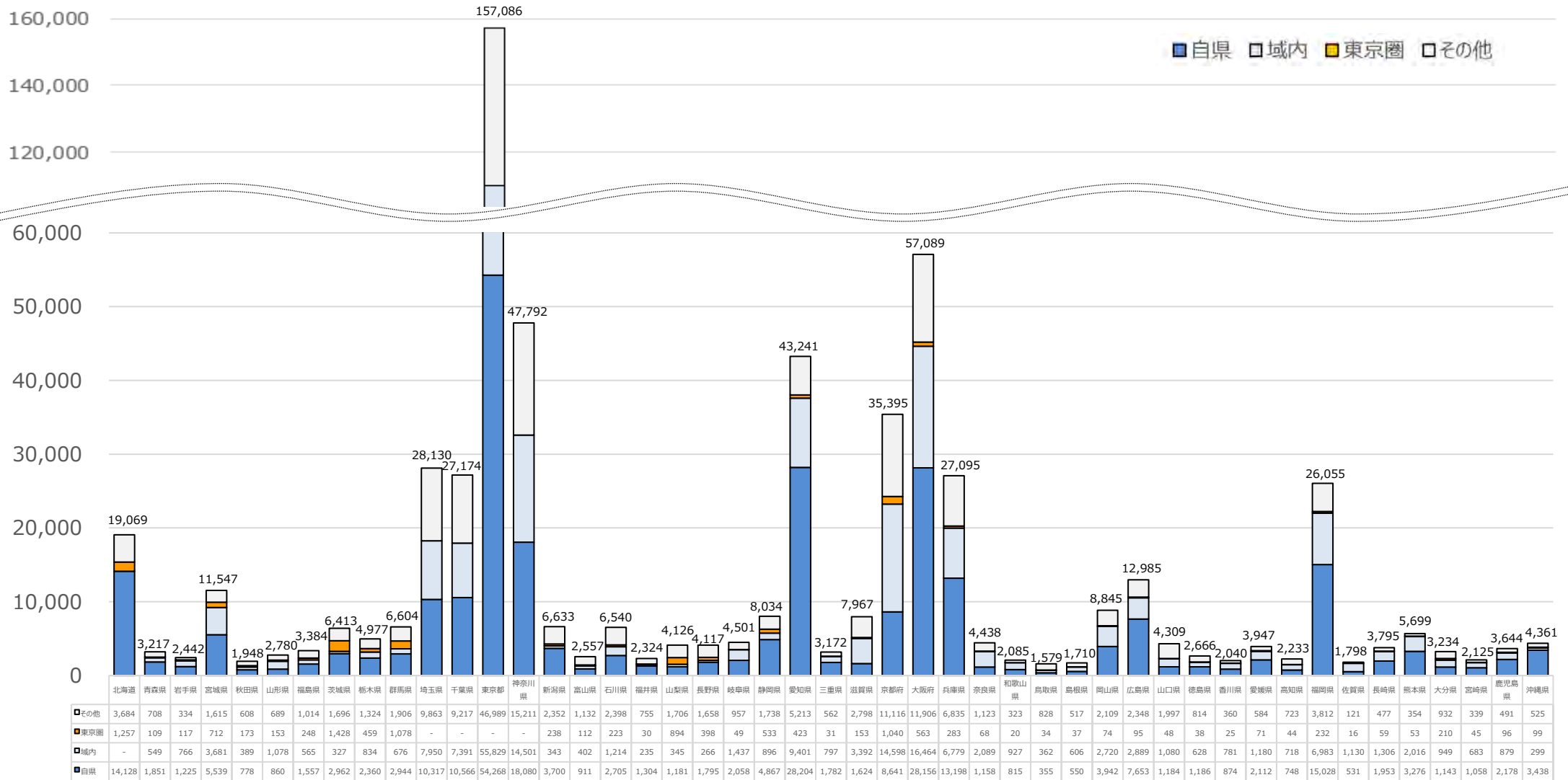
- 東日本では、東京圏への進学が3割を超える県が相当数ある。また、東京圏出身者は東京圏への進学が多い。
- 西日本では、東京圏への進学は1割程度で地域ブロックへの進学が多い傾向がある。



※地域区分：北海道、東北、関東（東京圏除く）、東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、甲信越、北陸、東海、近畿、中国四国、九州

都道府県別・出身地域別大学入学者数

- 大都市にある大学では域外からの入学者を相当数受け入れている。
- 特に、東京圏にある大学は域外から多くの入学者を受け入れている。

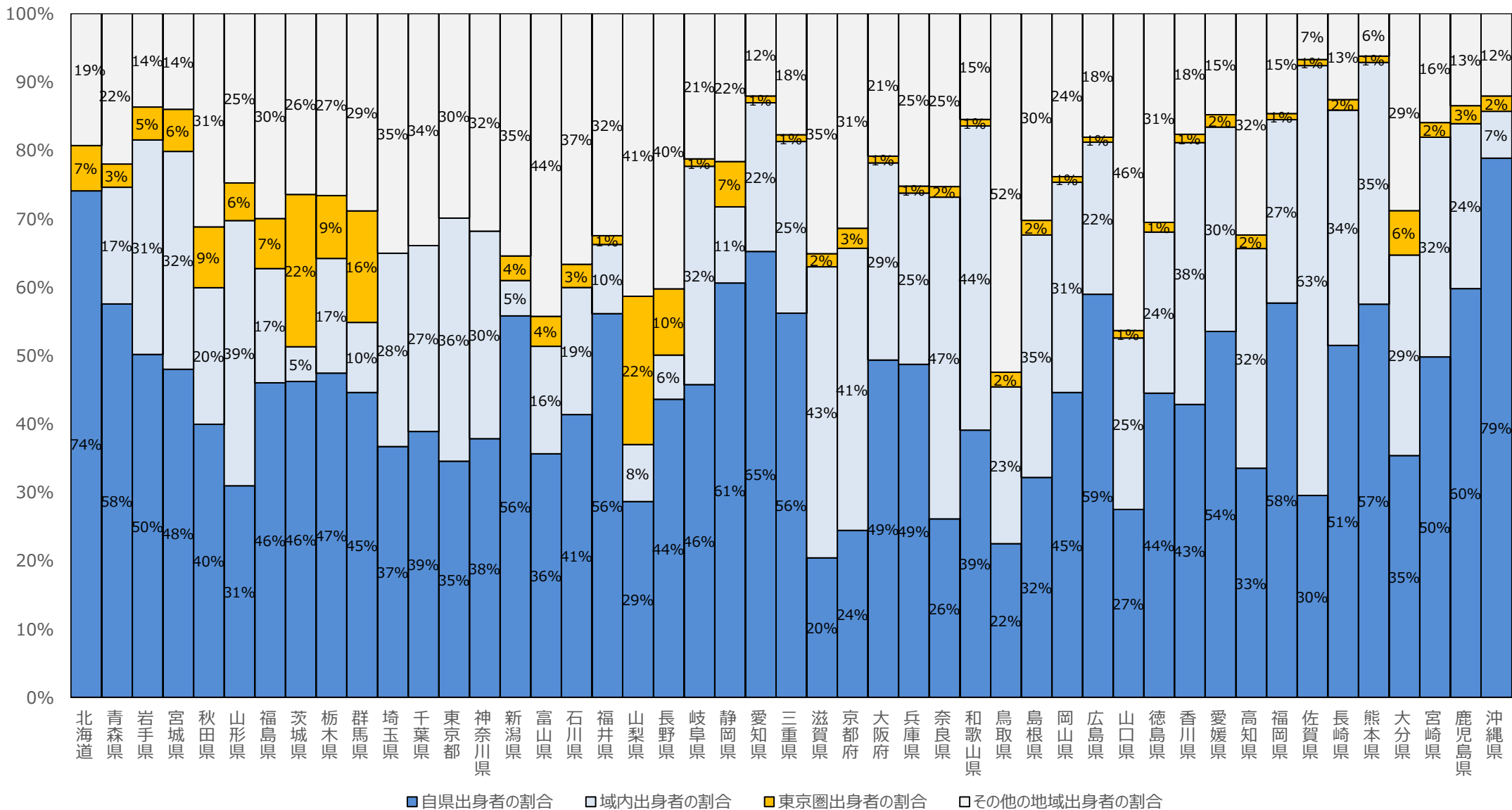


※地域区分：北海道、東北、関東（東京圏除く）、東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、甲信越、北陸、東海、近畿、中国四国、九州

(出典) 文部科学省「学校基本統計（令和5年度版）」

都道府県別・出身地域別大学入学者数比率

東日本の大学は域外からの入学者が比較的多い一方で、西日本の大学では自県及び域内からの入学者が多い傾向にある。



※地域区分：北海道、東北、関東（東京圏除く）、東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、甲信越、北陸、東海、近畿、中国四国、九州

（出典）文部科学省「学校基本統計（令和5年度版）」

大学入学者数及び社会人・留学生数

2040年には約12万人の入学者が減少すると推計されるが、学部入学者に占める留学生・社会人の割合は2.3%しかない。

2023年入学者数	学部	大学院
通学	63.3万人 → 51.0万人(2040年)	10.1万人
うち留学生	1.2万人 (1.9%)	2.8万人 (27.7%)
うち社会人	0.2万人 (0.4%)	1.8万人 (17.7%)
通信制	2.2万人	0.1万人

出典：学校基本統計。

※留学生数については在留資格「留学」を有する者をカウントしている。

※学部入学者のうち、社会人入学者については25歳以上の入学者数をカウントしている。

※2040年の推計値は中央教育審議会大学分科会（第175回）参考資料集2040年～2050年の進学率・進学者推計結果より作成。

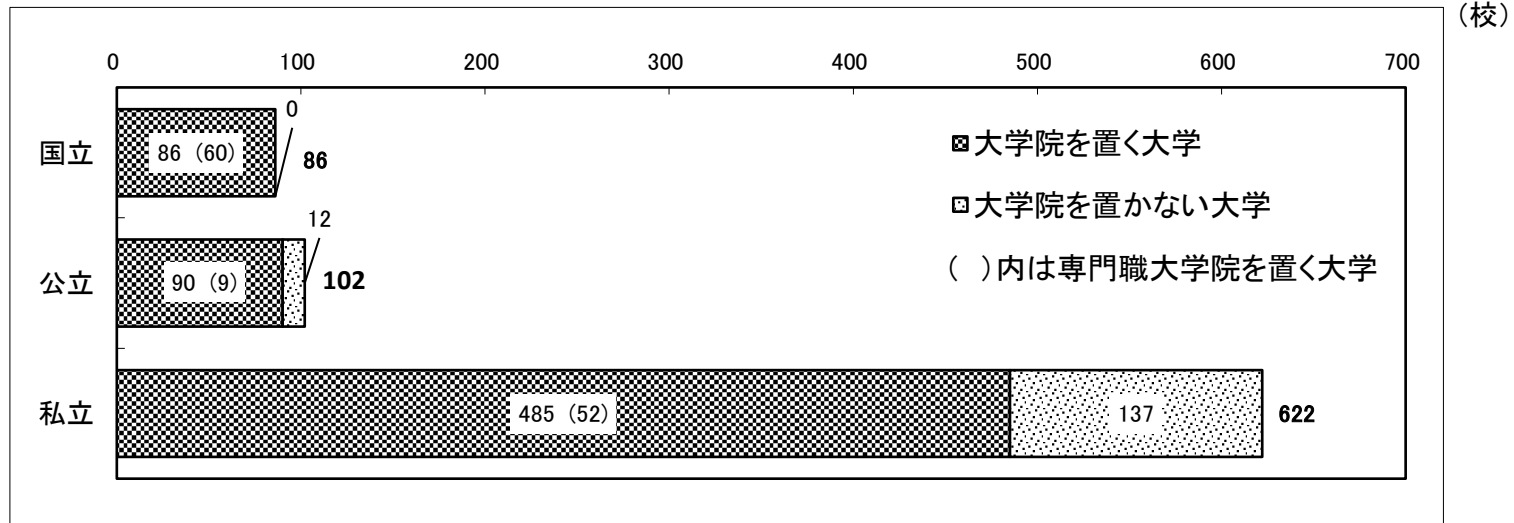
大学院の現状

大学院を置く大学数および研究科数

国立：100%，公立：88%，私立：78%の大学が大学院を置いている。

大学院を置く大学数

(令和5年5月1日現在)



国立：100%
公立：88%
私立：78%

出典：令和5年度学校基本調査

研究科数

(令和5年5月1日現在)

区分	研究科数		
	修士課程 (修士、博士前期)	博士課程 (博士後期、一貫制)	専門職学位課程
国立	389	368	87
公立	195	171	11
私立	1,181	826	71
計	1,765	1,365	169

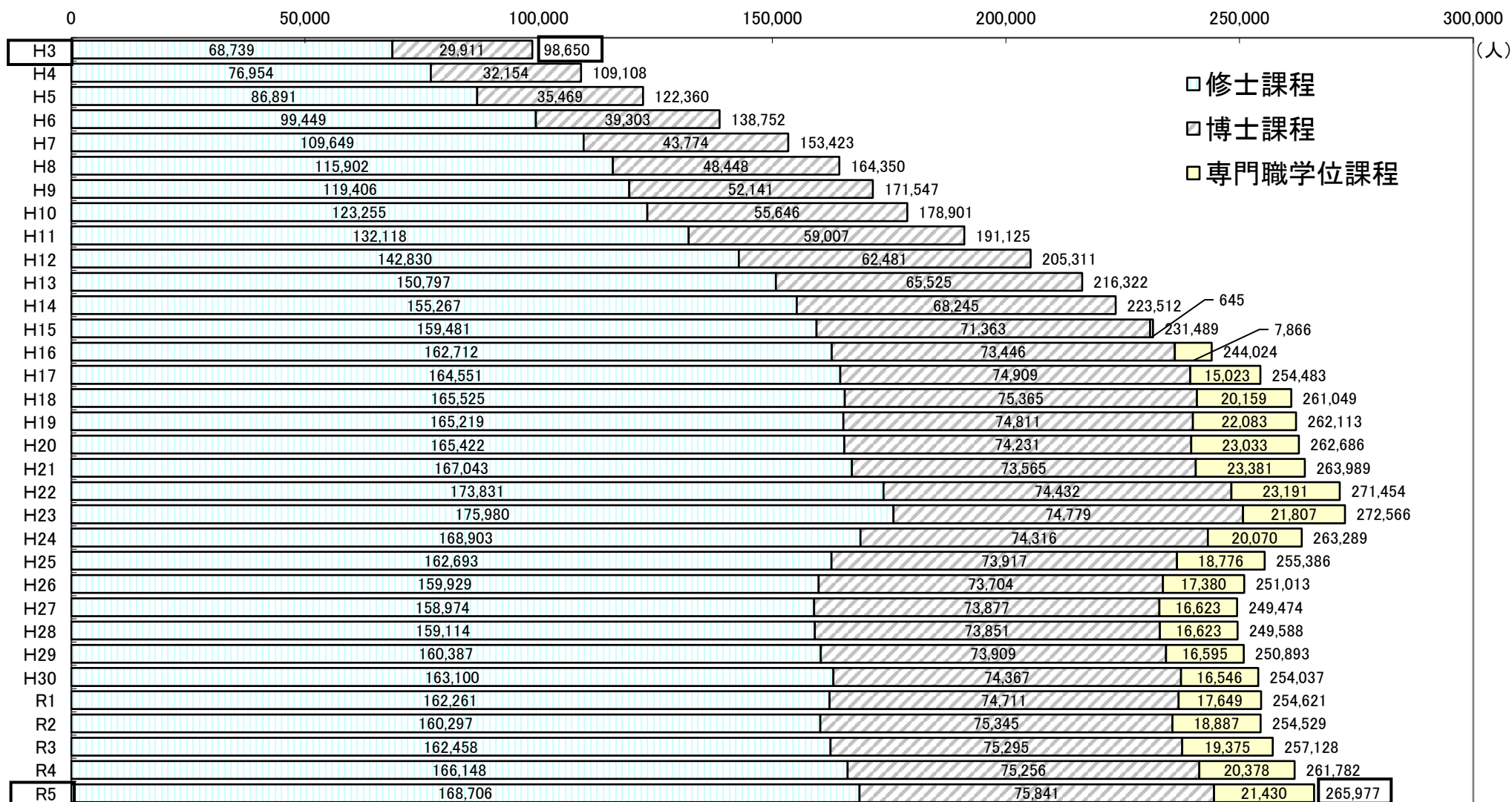
※学生が在籍している研究科の数

出典：令和5年度学校基本調査

大学院在学者数の推移

大学院在学者数は、平成3年から令和5年にかけて約2.7倍に増えている。

(各年度5月1日現在)



※ 在学者数

「修士課程」: 修士課程, 区分制博士課程(前期2年課程)及び5年一貫制博士課程(1, 2年次)

「博士課程」: 区分制博士課程(後期3年課程), 医・歯・薬学(4年制), 医歯獣医学の博士課程及び5年一貫制博士課程(3~5年次)
通信教育を行う課程を除く

出典: 学校基本調査

高等教育段階における進学率の国際比較

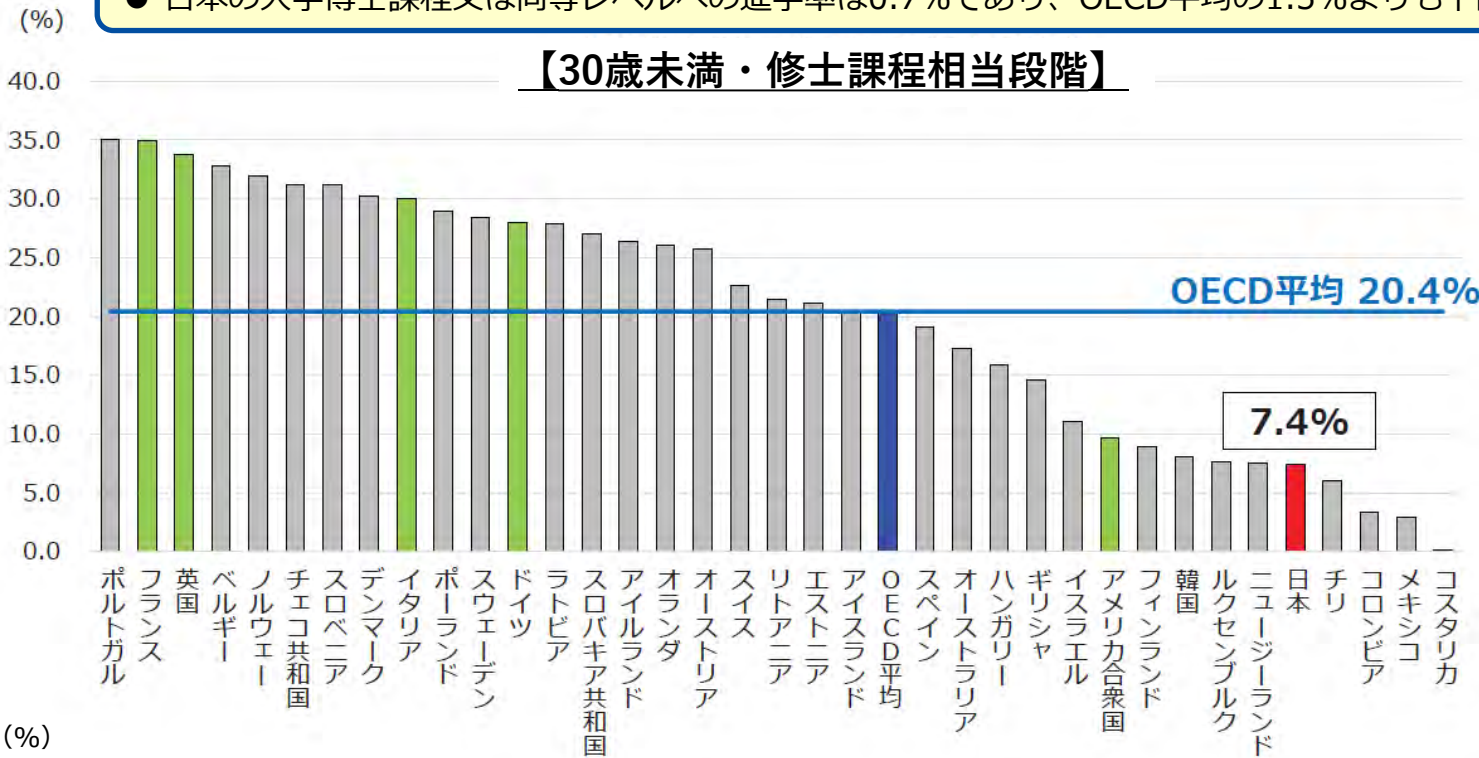
- 日本の大学修士課程又は同等レベルへの進学率は7.4%であり、OECD平均の20.4%の約3割ほどしか満たない。
- 日本の大学博士課程又は同等レベルへの進学率は0.7%であり、OECD平均の1.5%よりも下回っている。

【30歳未満・修士課程相当段階】

(2021年)

※OECD加盟38カ国のうち、カナダ、トルコを除く。
※グラフ緑色は日本以外のG7諸国。

※進学率は、25/30歳未満の各年齢における高等教育段階の新入学者数を当該年齢人口で除した率の合計。
留学生含む。
※参照年度は2020年度(令和2年度)。

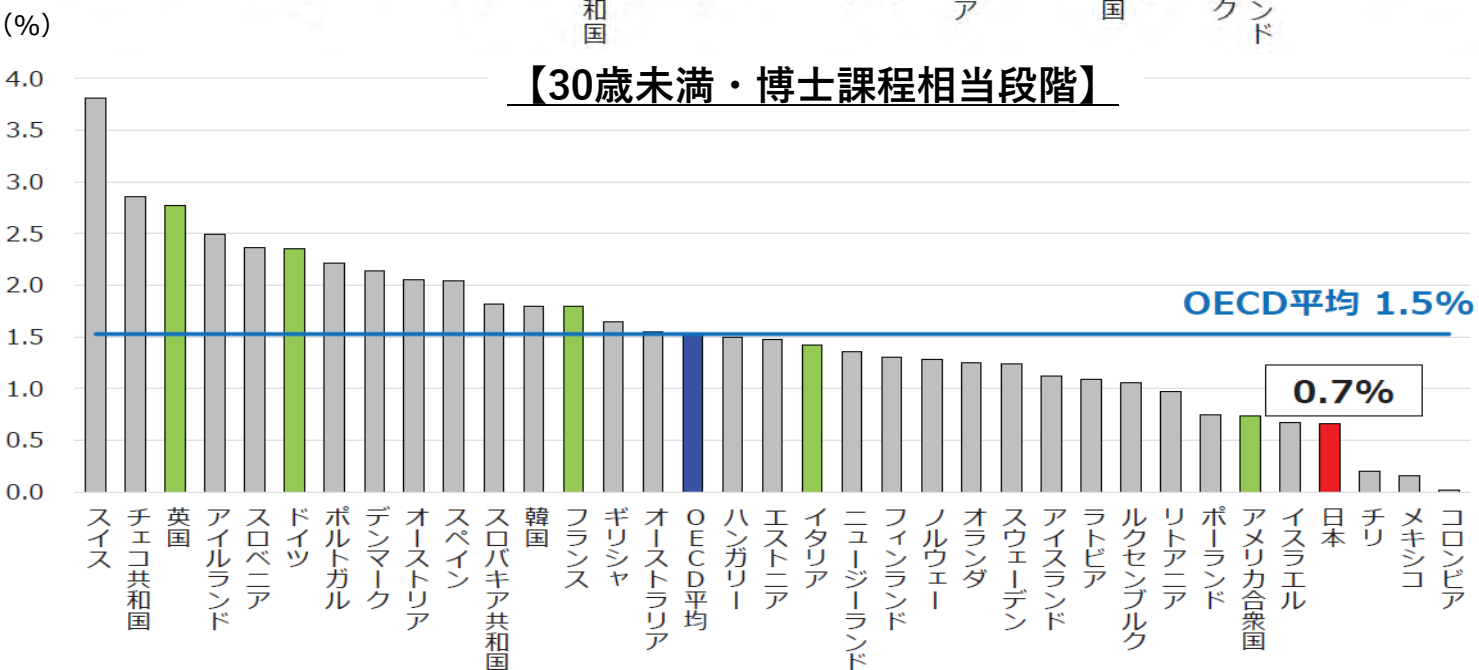


【30歳未満・博士課程相当段階】

(2021年)

※OECD加盟38カ国のうち、ベルギー、カナダ、コスタリカ、トルコを除く。
※グラフ緑色は日本以外のG7諸国。

※進学率は、25/30歳未満の各年齢における当該高等教育段階の新入学者数を当該年齢人口で除した率の合計。
留学生含む。
※参照年度は2020年度(令和2年度)。

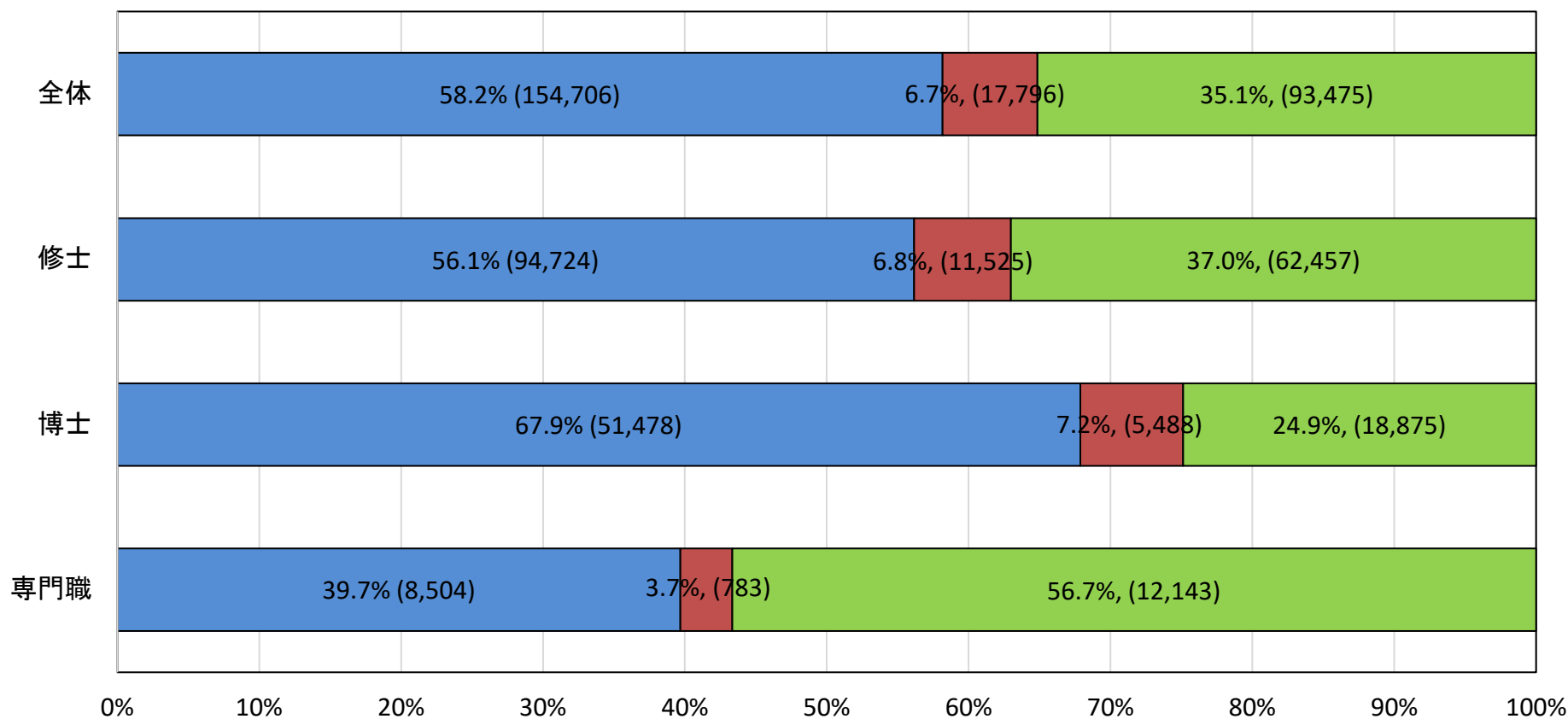


課程別・設置者別在学者比較(在学者数)

我が国の大学院在籍者の6割は国立大学に在籍。博士課程においては国立の割合が7割弱である一方、専門職大学院においては私立の在籍者比率が一番高い。

(令和5年5月1日現在)

■ 国立 ■ 公立 ■ 私立

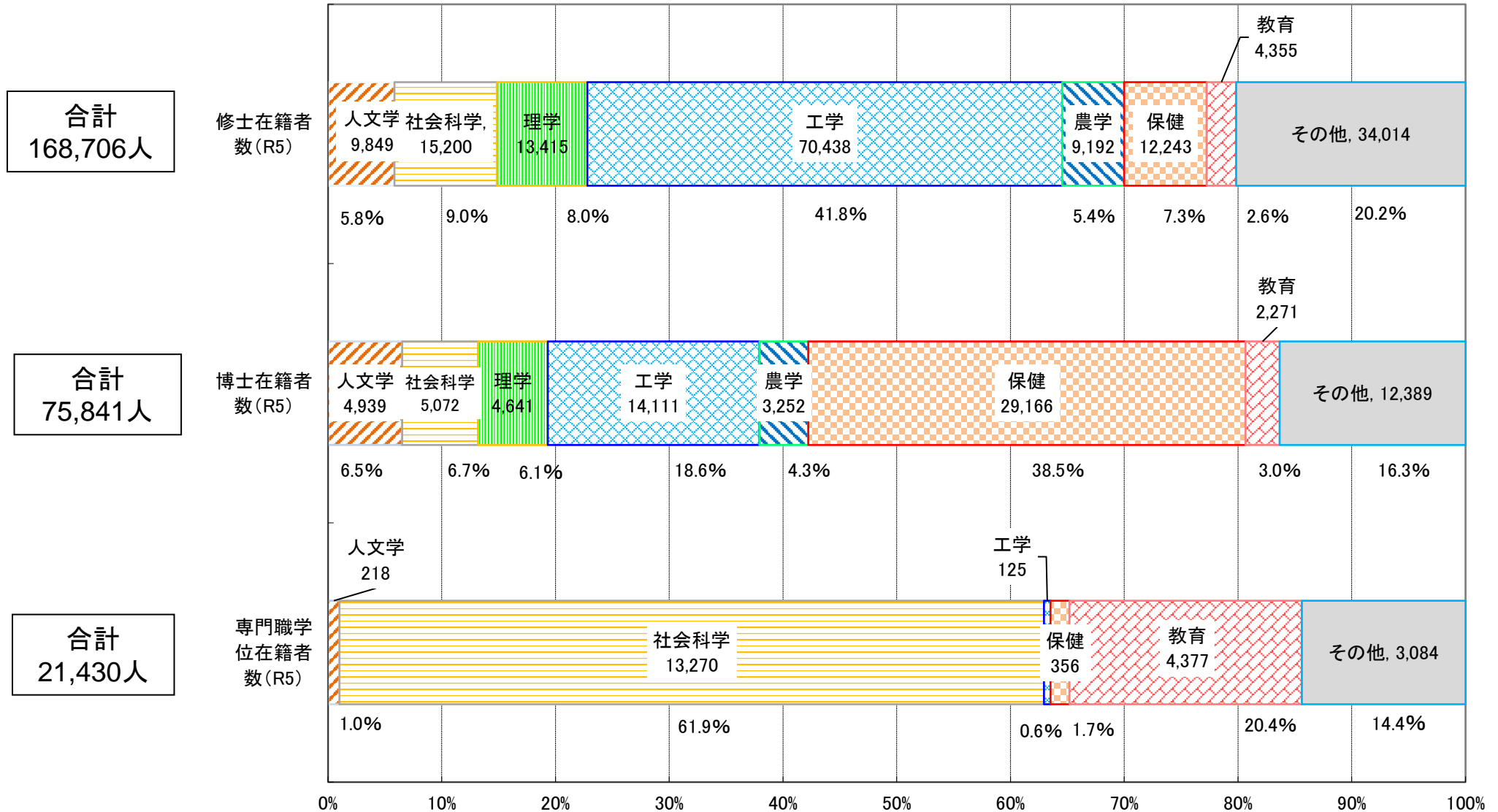


出典: 令和5年度学校基本調査

学問分野別の大学院学生数

修士在籍者の場合は「工学」分野、博士在籍者の場合は「保健」分野が全体の約4割、専門職学位在籍者の場合は「社会科学」分野が全体の6割以上を占めている。

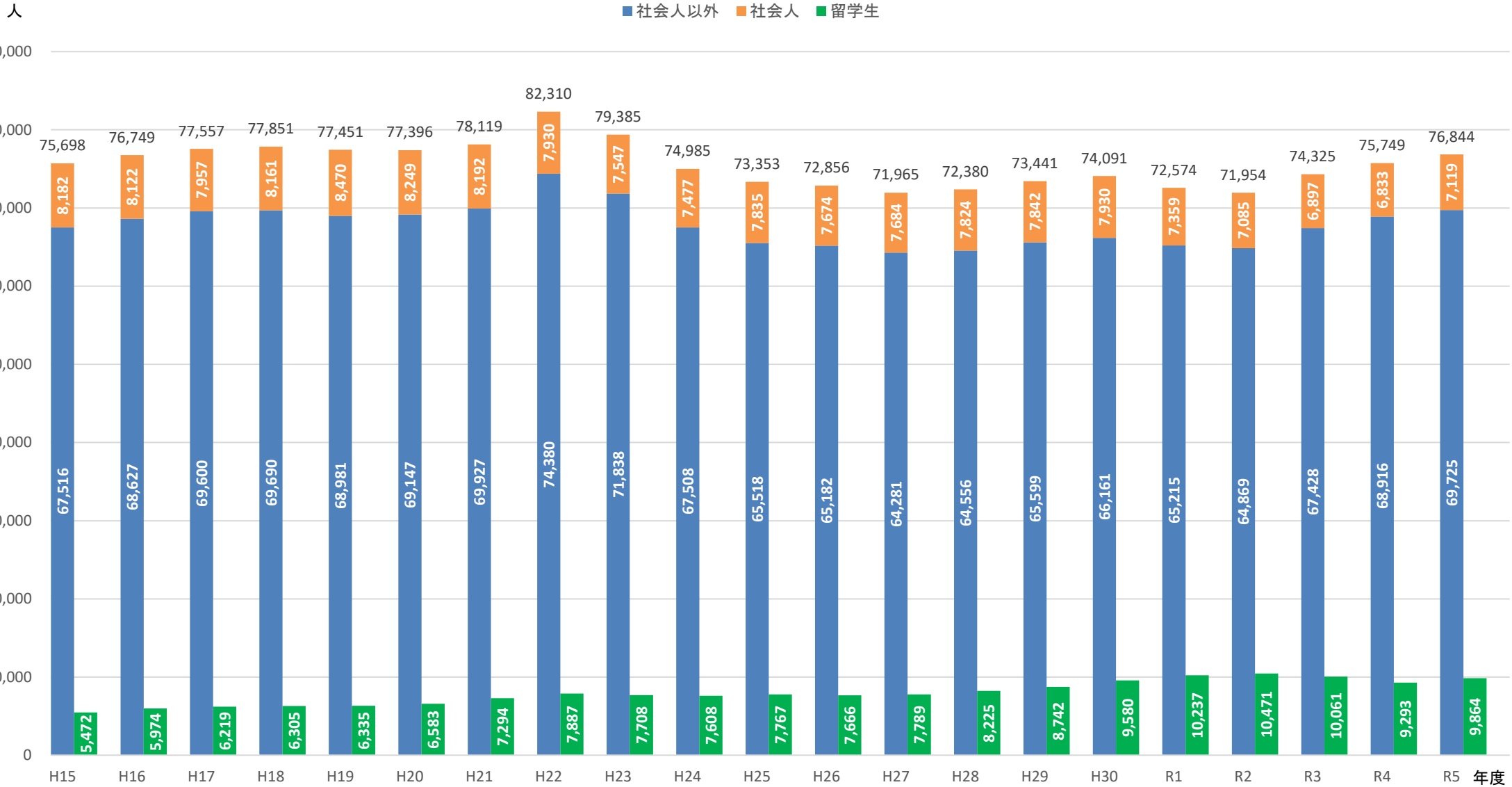
(令和5年5月1日現在)



出典: 令和5年度学校基本調査

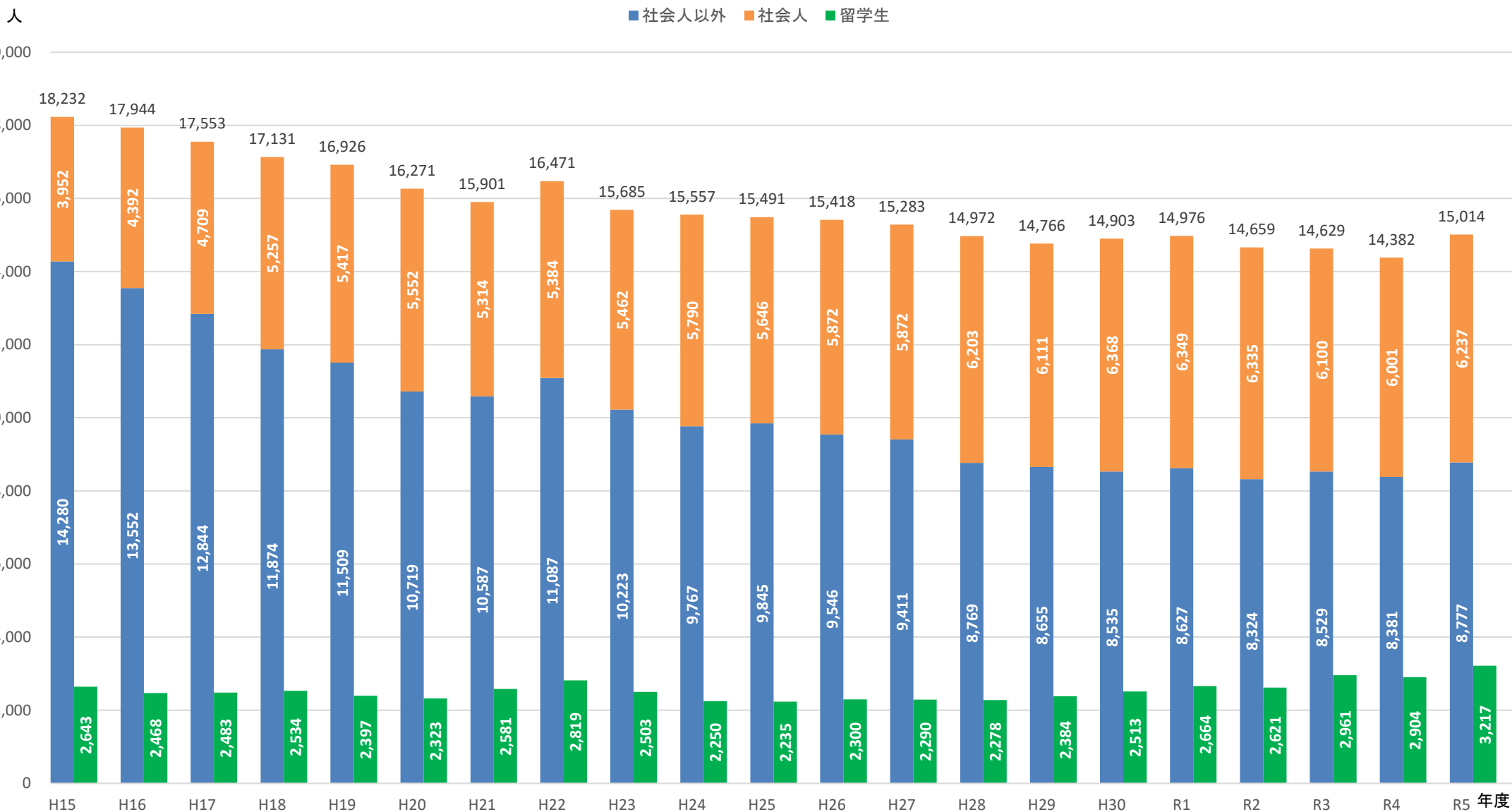
修士課程入学者の推移

修士課程入学者は平成22年度をピークとして減少したが、近年は若干の回復傾向がみられる。社会人以外の入学者数は令和2年度より増加傾向、社会人学生は平成30年度をピークに減少傾向。



博士課程入学者の推移

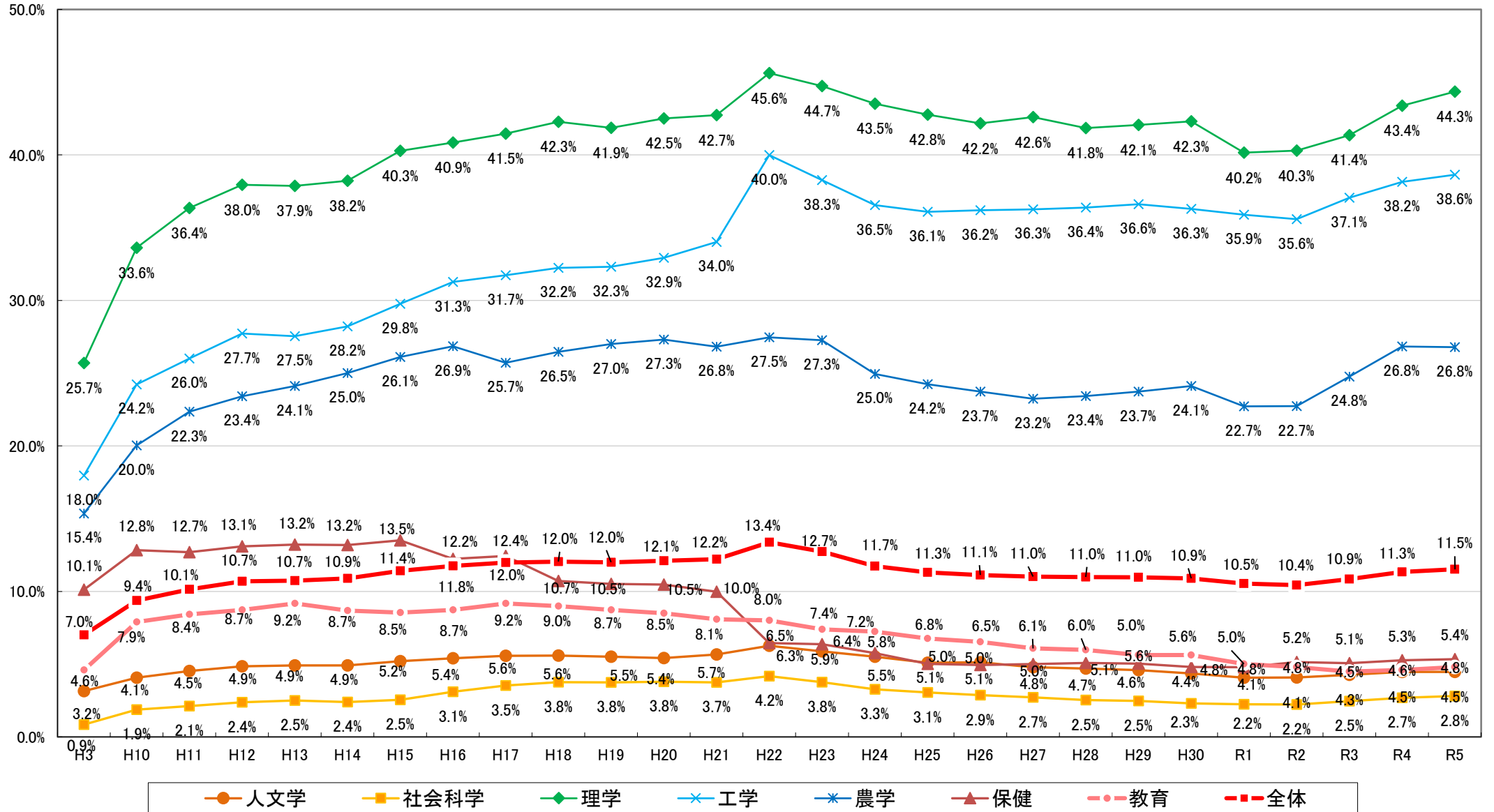
博士課程入学者のうち、社会人以外の入学者数は、平成15年度の約1.4万人をピークに大幅に減少し、令和5年度には最大時から約40%の減少。



学士課程修了者の進学率の推移(分野別)

学士課程修了者の進学率は、全体的に横ばい傾向にある。

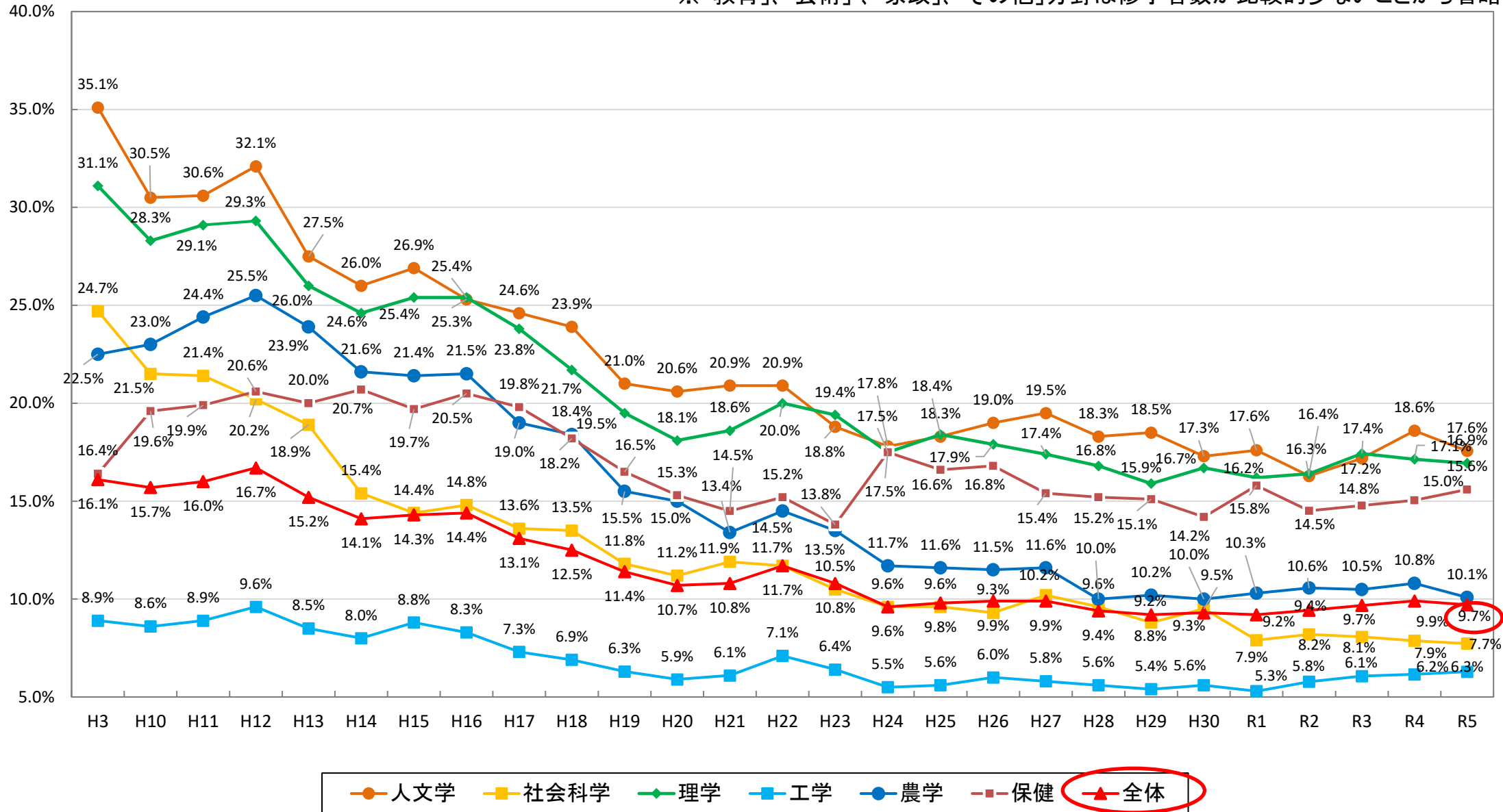
※「芸術」、「家政」、「その他」分野は修了者数が比較的小さいことから省略



修士課程修了者の進学率の推移(分野別)

修士課程修了者の博士課程等への進学率は、各分野を通じて減少傾向であったが、近年は横ばい。

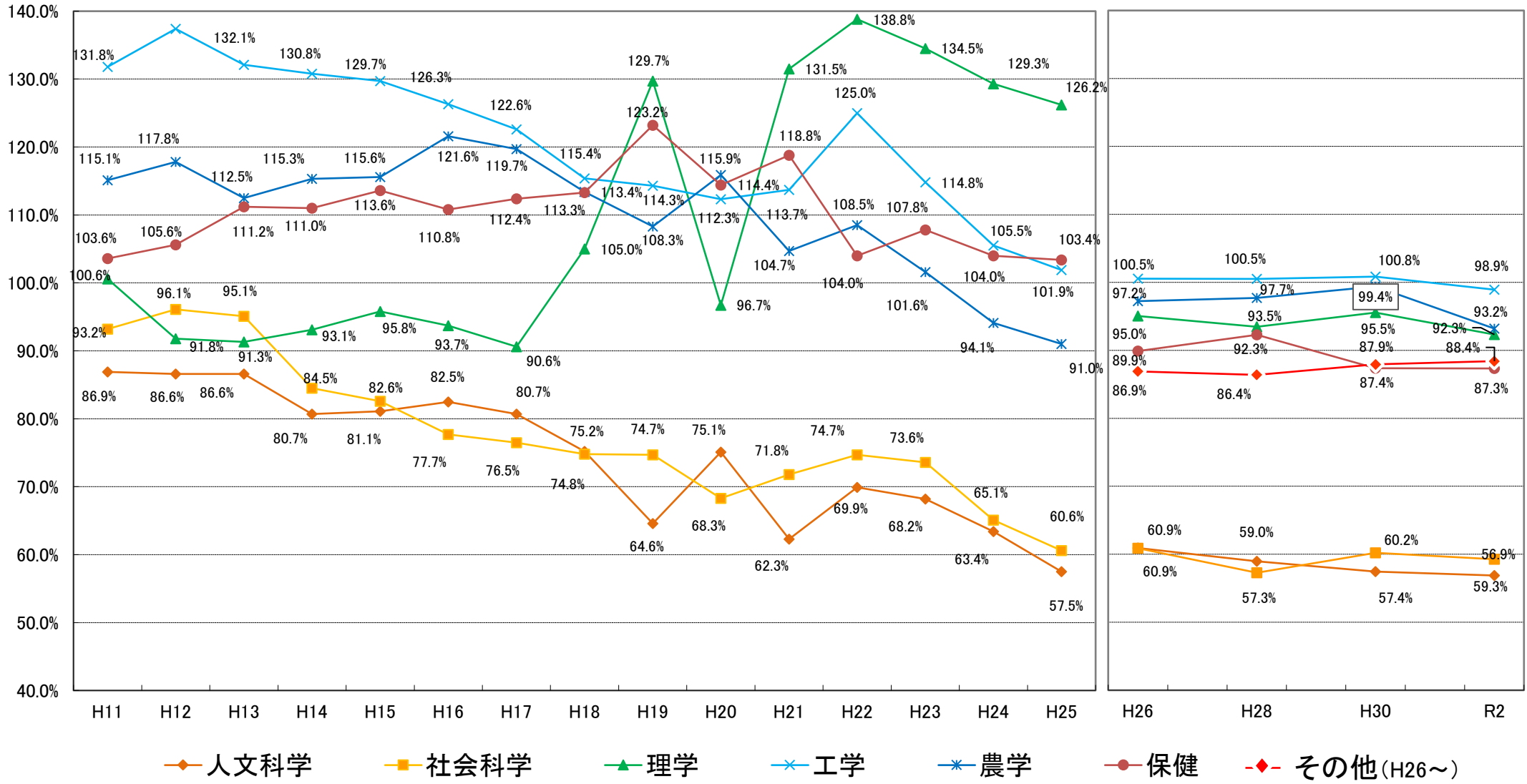
※「教育」、「芸術」、「家政」、「その他」分野は修了者数が比較的少ないことから省略



修士課程入学者充足率の推移(分野別)

「人文・社会」分野修士課程の入学者充足率（＝入学者／入学定員）は6割前後で推移。

※平成25年度以前と平成26年度以降のグラフは出典が異なる。

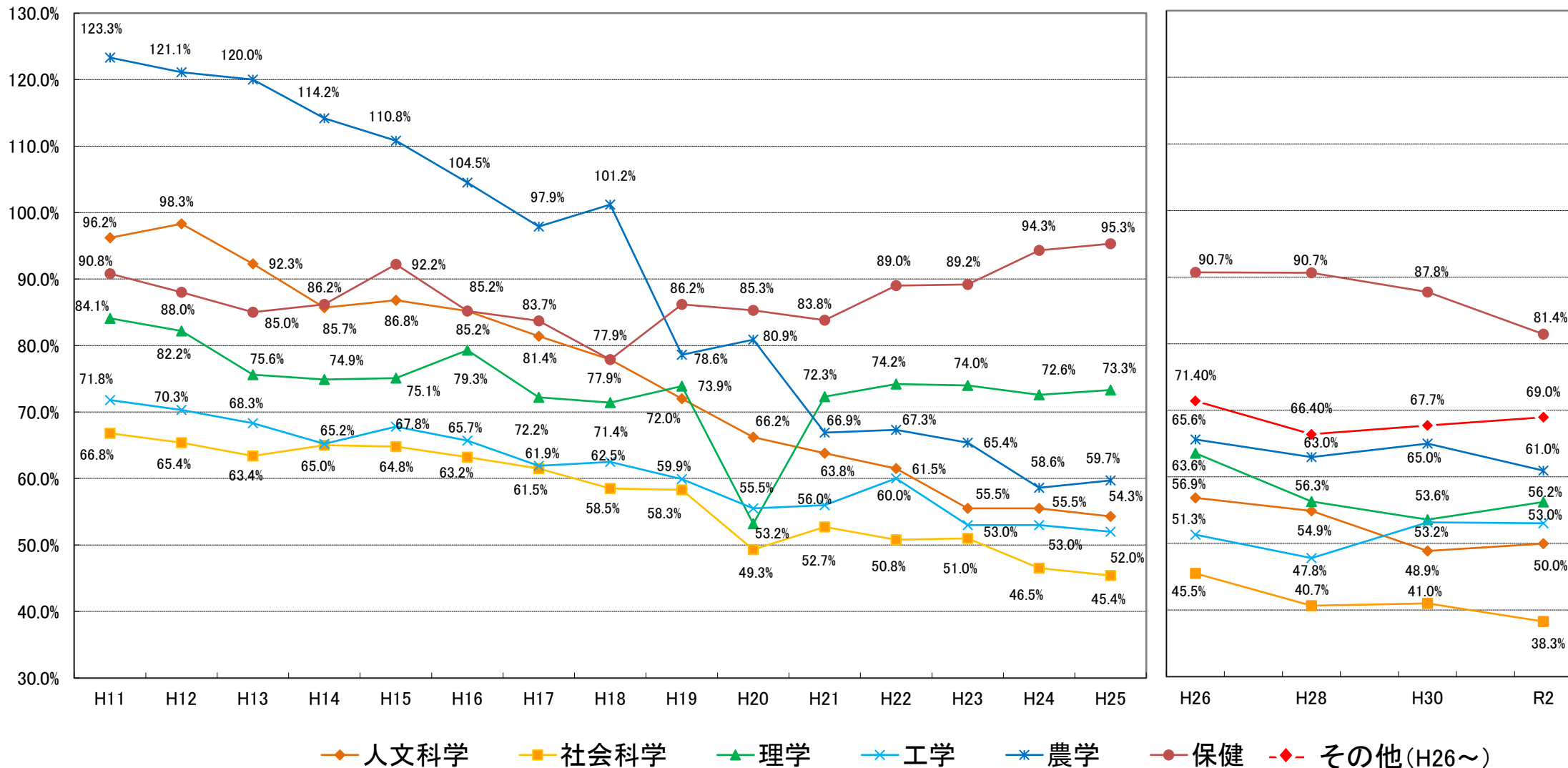


出典：（平成25年まで）学校基本統計及び全国大学一覧より文部科学省作成
 （平成26年）「大学院における「第2次大学院教育振興施策要綱」等を踏まえた教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（平成28年2月 株式会社リベルタス・コンサルティング）＜文部科学省：先導的・大学改革推進委託事業＞
 （平成28年）「大学院における「第3次大学院教育振興施策要綱」等を踏まえた教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（平成30年3月 株式会社リベルタス・コンサルティング）＜文部科学省：先導的・大学改革推進委託事業＞
 （平成30年）「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（令和2年3月 株式会社リベルタス・コンサルティング）＜文部科学省：先導的・大学改革推進委託事業＞
 （令和2年）「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（令和4年2月 株式会社リベルタス・コンサルティング）＜文部科学省：先導的・大学改革推進委託事業＞

博士課程入学者充足率の推移(分野別)

博士課程の入学者充足率（＝入学者／入学定員）は全体的に低下傾向。

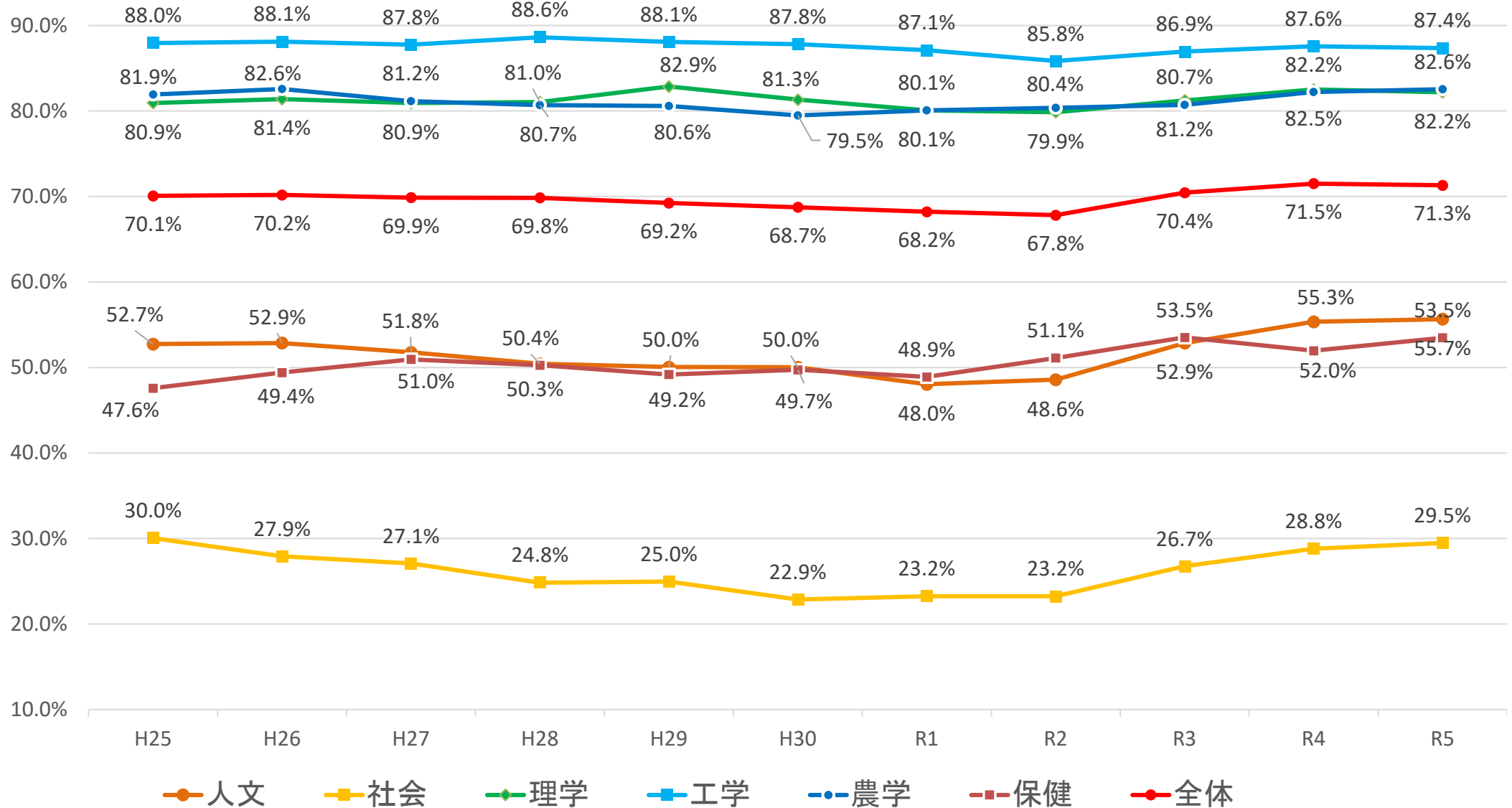
※平成25年度以前と平成26年度以降のグラフは出典が異なる。



出典：(平成25年まで) 学校基本統計及び全国大学一覧より文部科学省作成
 (平成26年) 「大学院における「第2次大学院教育振興施策要綱」等を踏まえた教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」(平成28年2月 株式会社リベルタス・コンサルティング) <文部科学省：先導的の大学改革推進委託事業>
 (平成28年) 「大学院における「第3次大学院教育振興施策要綱」等を踏まえた教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」(平成30年3月 株式会社リベルタス・コンサルティング) <文部科学省：先導的の大学改革推進委託事業>
 (平成30年) 「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」(令和2年3月 株式会社リベルタス・コンサルティング) <文部科学省：先導的の大学改革推進委託事業>
 (令和2年) 「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」(令和4年2月 株式会社リベルタス・コンサルティング) <文部科学省：先導的の大学改革推進委託事業>

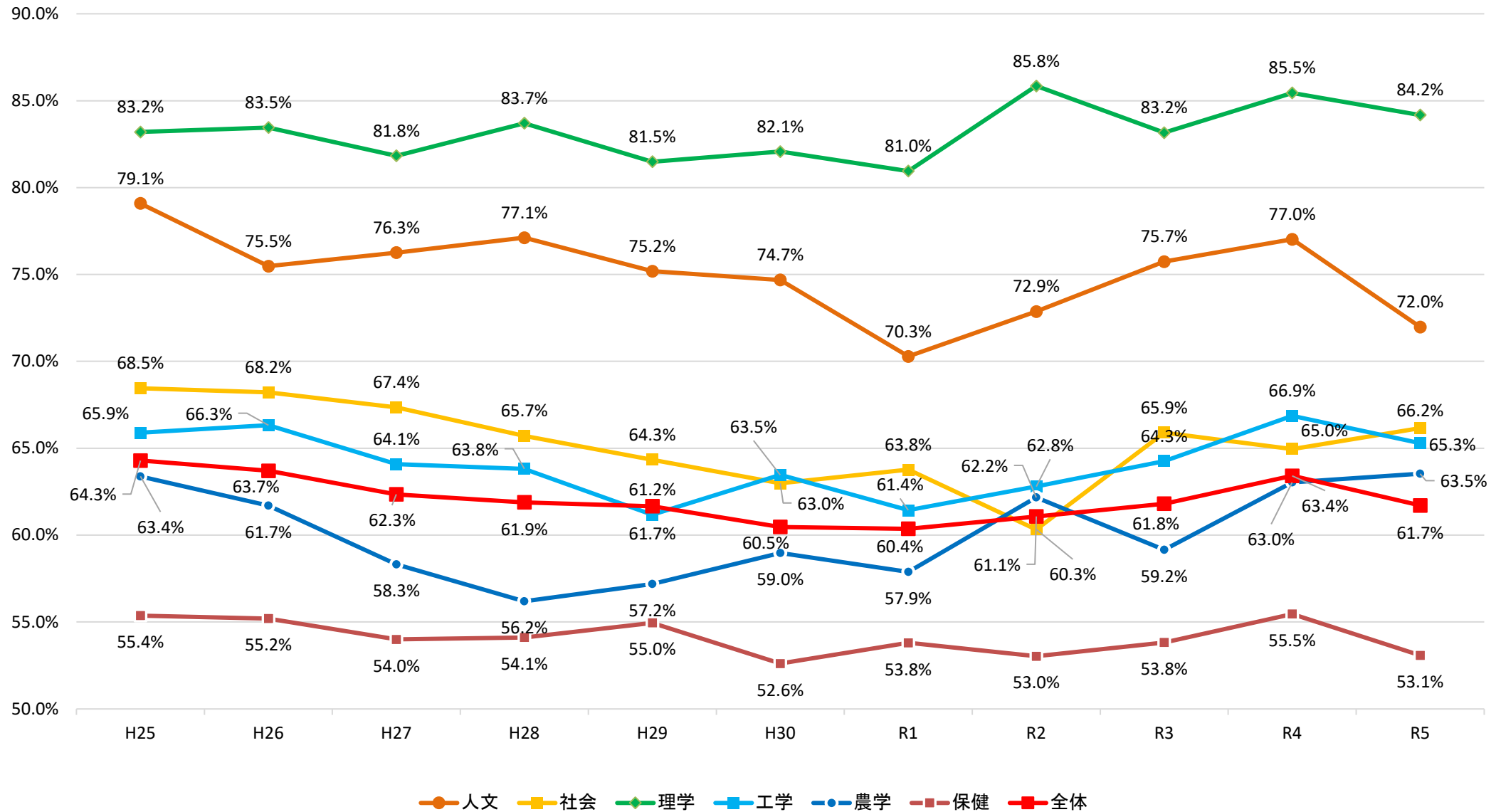
入学者数に占める自大学出身者割合(修士)

- 「工学・農学・理学」分野の自大学出身者割合は高く、8～9割で推移している。
- 「社会」分野の自大学出身者割合は低く、2～3割程度で推移している。



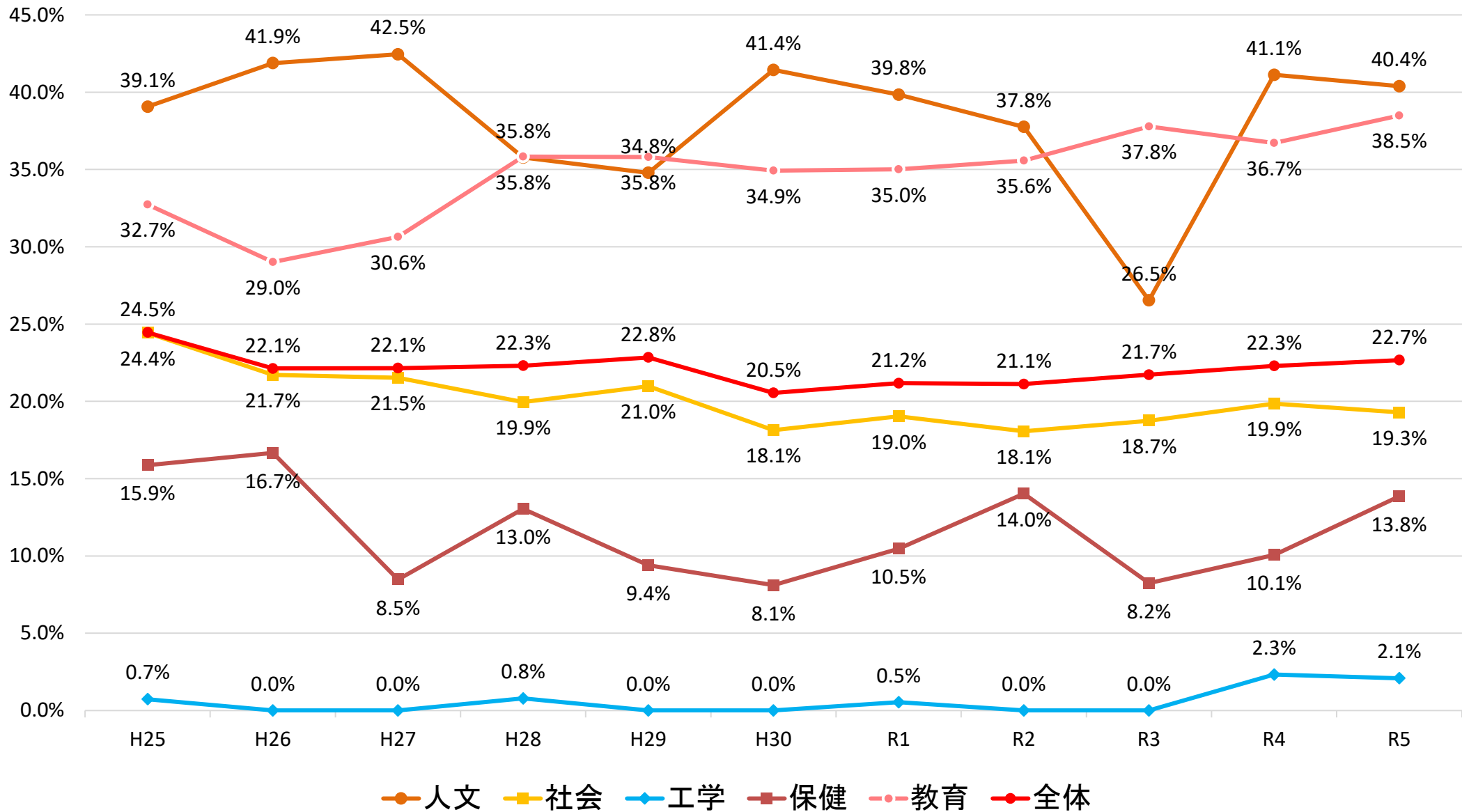
入学者数に占める自大学出身者割合(博士)

「理学」分野の自大学出身者割合は高く、8割以上で推移している。



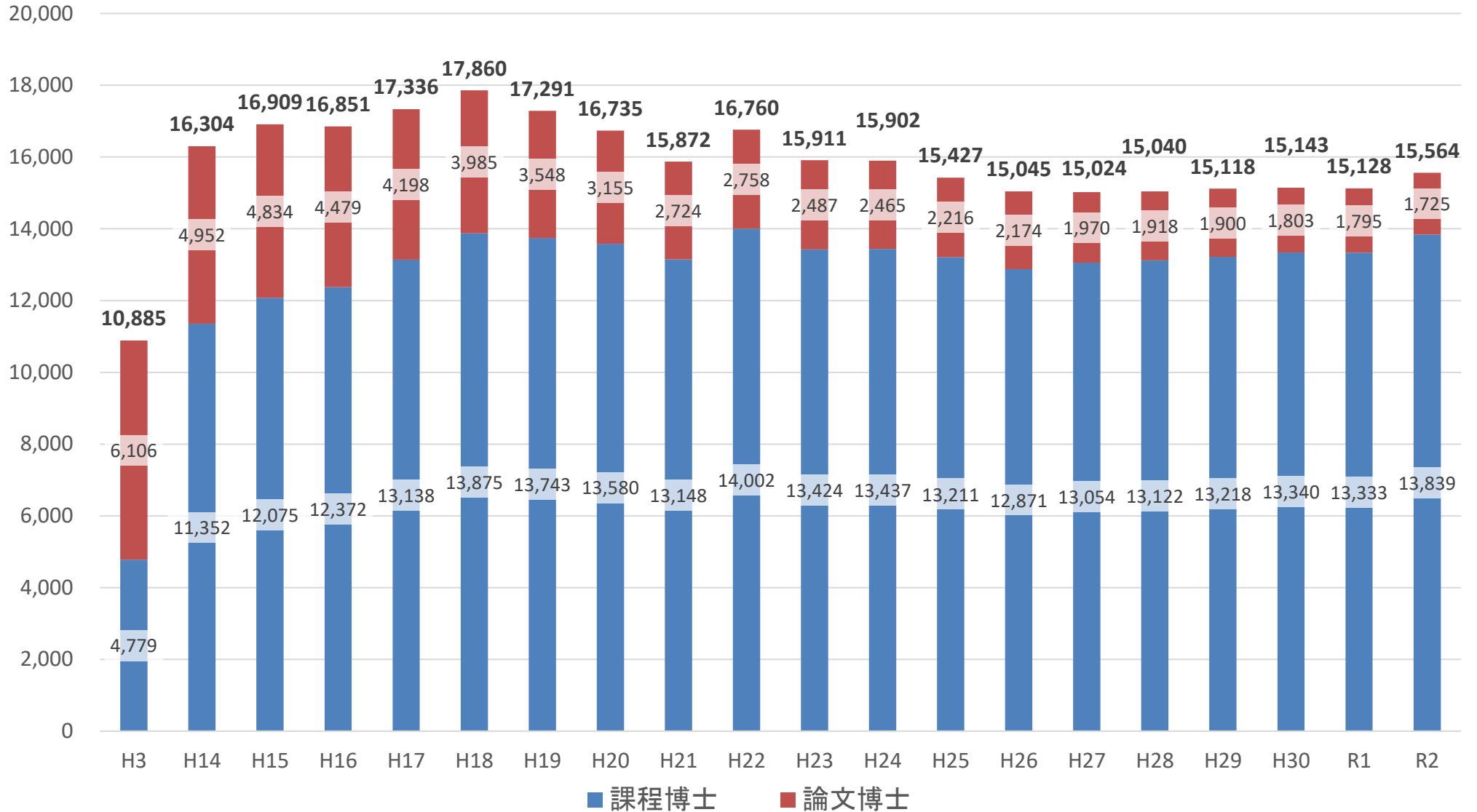
入学者数に占める自大学出身者割合(専門職学位)

「工学」分野の自大学出身者の割合は非常に低い。



博士の学位授与者数の推移

- 学位授与者数は、課程博士は平成18年頃までは上昇傾向であったが、その後はほぼ横ばい。
- 論文博士は、減少傾向。

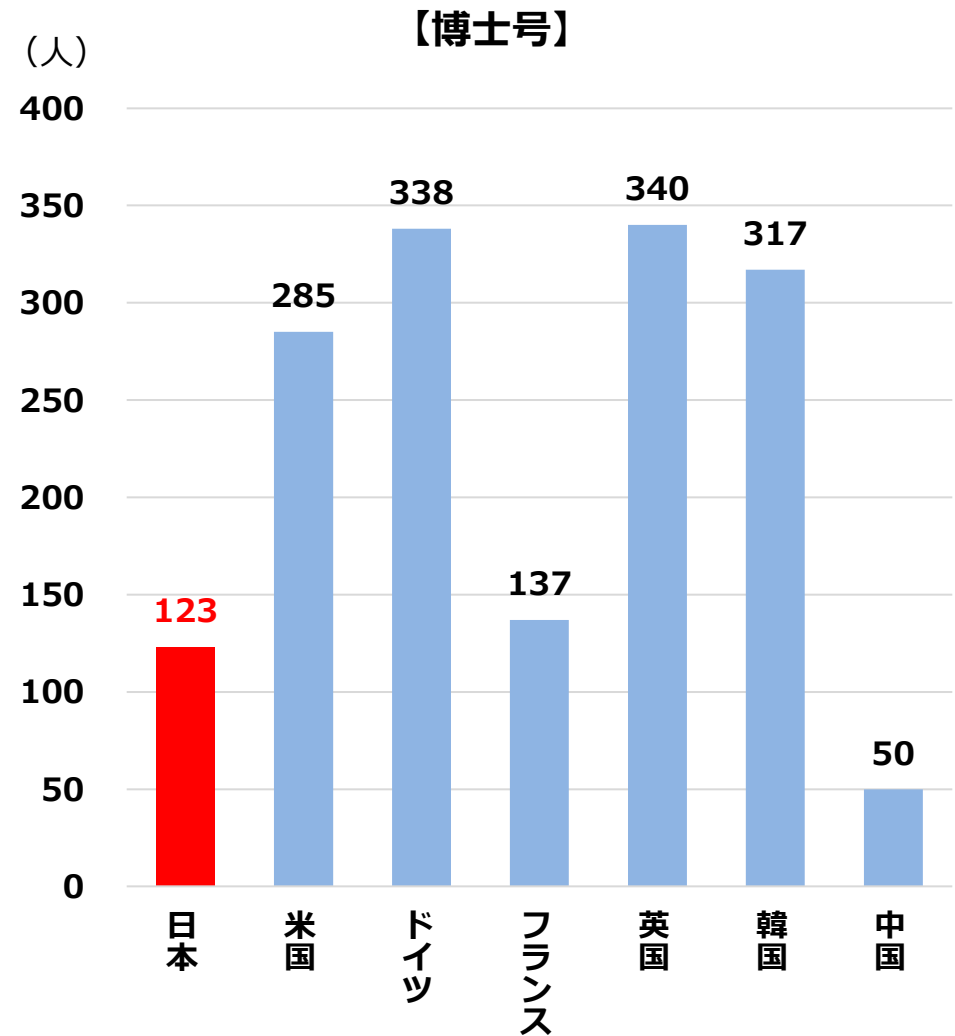
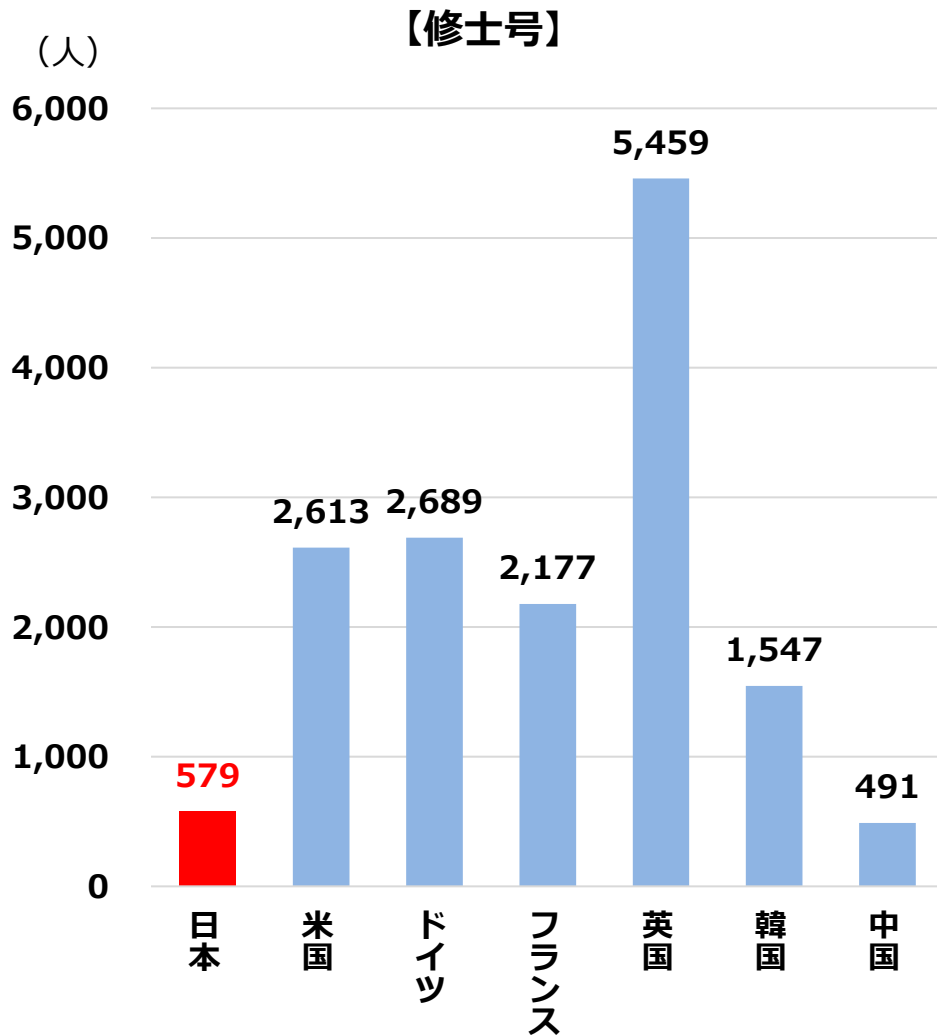


出典：文部科学省「学位授与状況調査」

修士号・博士号の取得者数

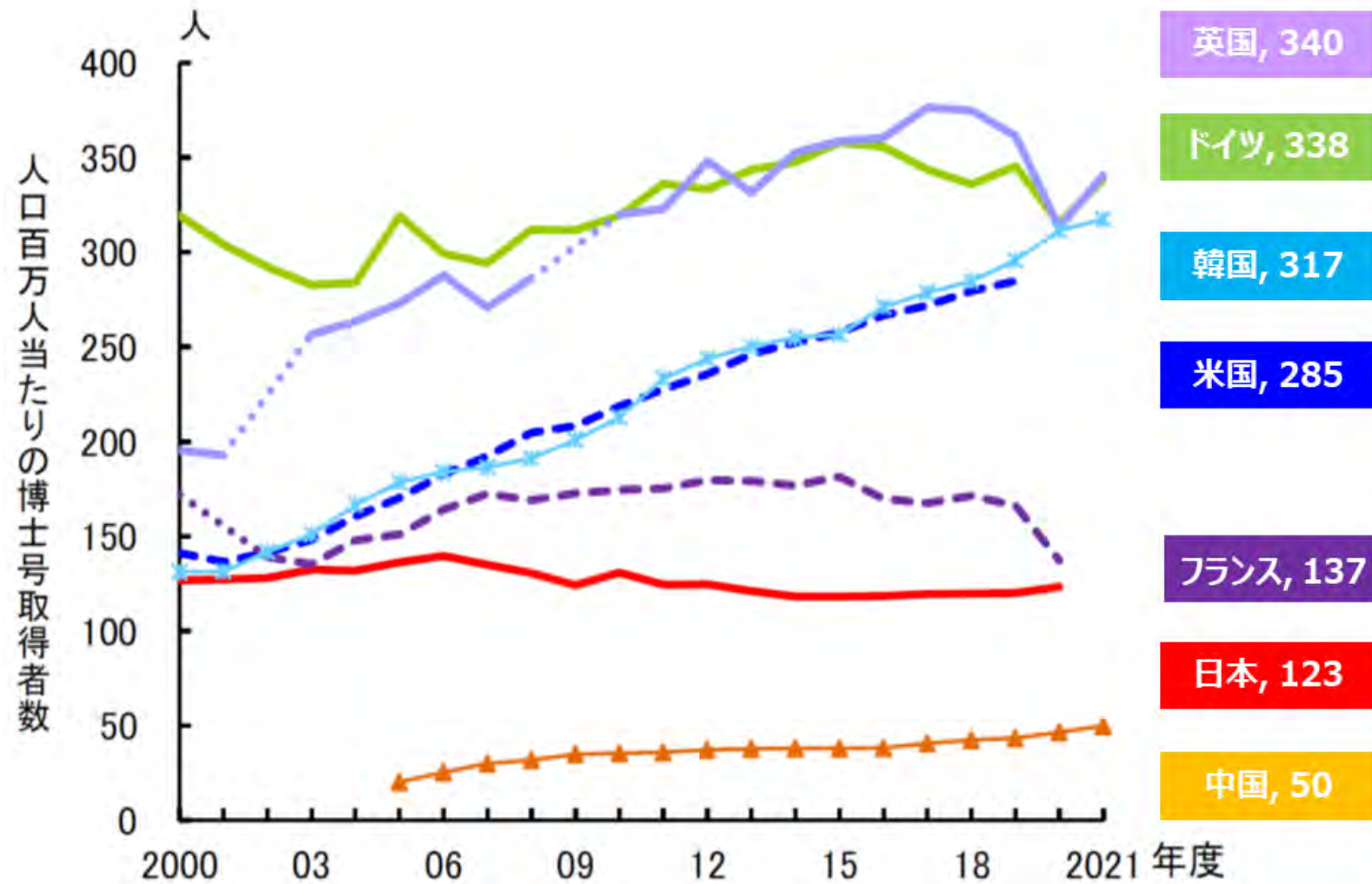
人口100万人当たりの修士号、博士号を取得している者の数は、諸外国と比較して低水準。

人口100万人当たりの修士号、博士号取得者数



諸外国における人口100万人当たりの博士号取得者数の推移

主要国の中では、日本のみ、人口100万人当たりの博士号取得者数の減少傾向が続いている。



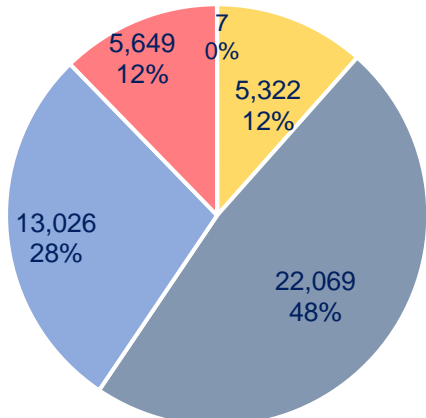
出典：科学技術・学術政策研究所「科学技術指標2023」

高等教育機関修了後の進路

短期大学士課程修了後の分野別進路

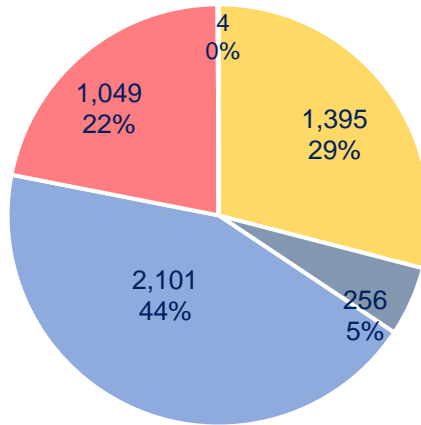
- 人文、社会、工業は他の分野に比べて進学者の割合が高い傾向。
- 保健、教育は就職者のうち専門的・技術的職業の割合が高く、人文、社会、家政ではその他の職業の割合が高い傾向。

卒業生合計(46,073人)

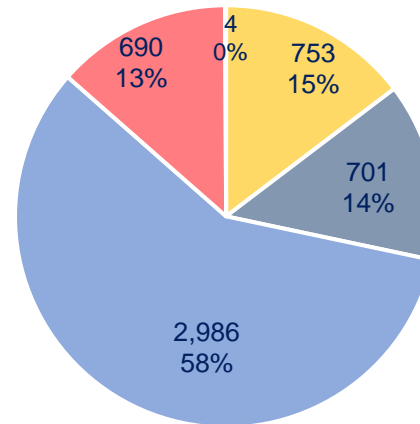


●:進学者 ●:就職者(専門的・技術的職業)
●:就職者(その他) ●:その他 ●:死亡・不詳

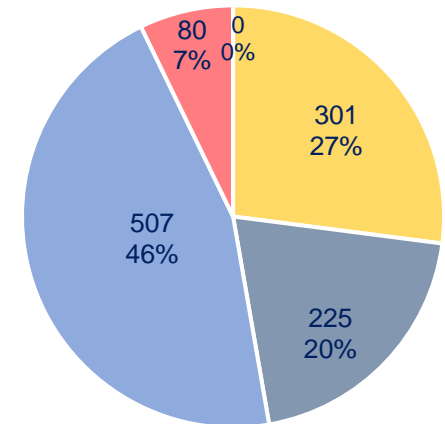
人文(4,805人)



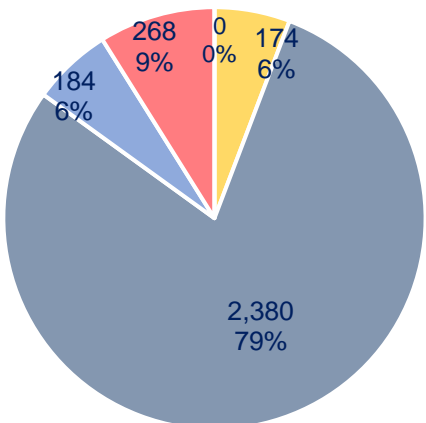
社会(5,132人)



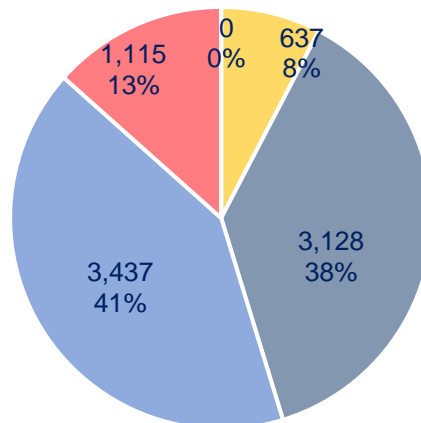
工業(1,113人)



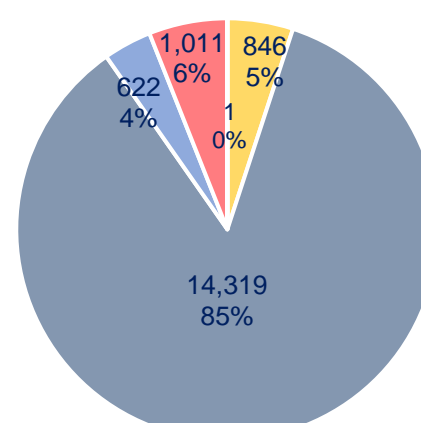
保健(3,006人)



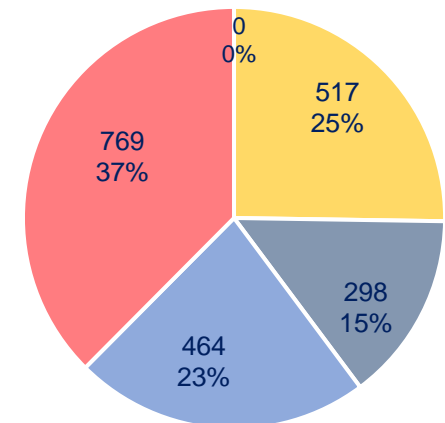
家政(8,317人)



教育(16,799人)



芸術(2,048人)



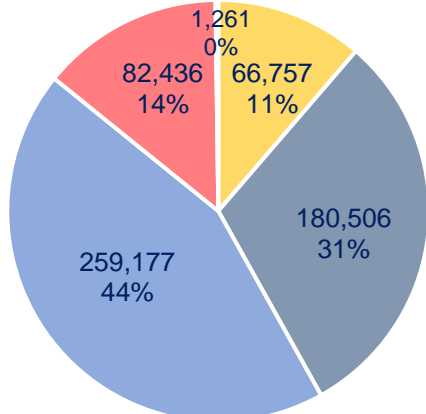
【注】

- 「進学者」とは、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。
- 「就職者」とは、給料・賃金・報酬・その他の経常的な収入を得る仕事に就いた者である。
- 「就職者(専門的・技術的職業)」とは、就職者のうち、研究者、農林水産技術者、製造技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理・通信技術者、教員、医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、医療技術者、美術家、写真家、デザイナー、音楽家、舞台芸術家等として従事している者である。
- 「就職者(その他)」とは、就職者のうち、専門的・技術的職業従事者以外の者で、管理的職業従事者、事務従事者、販売従事者、サービス職業従事者、保安職業従事者、農林漁業従事者、生産工程従事者、輸送・機械運転従事者、建設・採掘従事者、運搬・清掃等従事者等である。
- 「その他」とは、専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発校等への入学者、研究生として入学した者や、一時的な仕事に就いた者(臨時的な収入を得る仕事に就いた者)、臨床研修医(予定者を含む)、進学でも就職でもないことが明らかな者(進学準備中の者、就職準備中の者(求職中の者並びに公務員・教員採用試験及び国家資格試験の準備中の者を含む)等)である。
- 進学者であり、かつ就職をしている者については、「就職者」として算出している。

学士課程修了後の分野別進路別

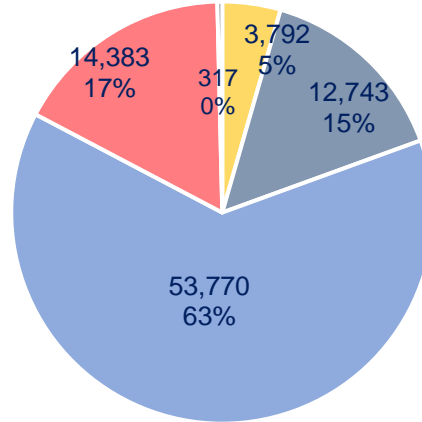
- 人文科学・社会科学は進学者と就職者（専門的・技術的職業）の割合が低く、就職者（その他）の割合が高い傾向。
- 理学・工学・農学は進学者の割合が他の分野に比べて高く、保健・教育は、就職者（専門的・技術的職業）の割合が他の分野に比べて高い傾向。

卒業生合計(590,137人)

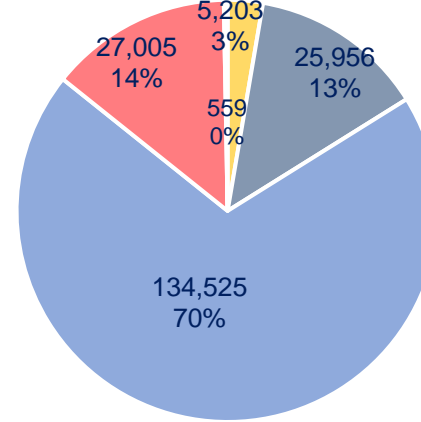


- : 進学者
- : 就職者(専門的・技術的職業)
- : 就職者(その他)
- : その他
- : 死亡・不詳

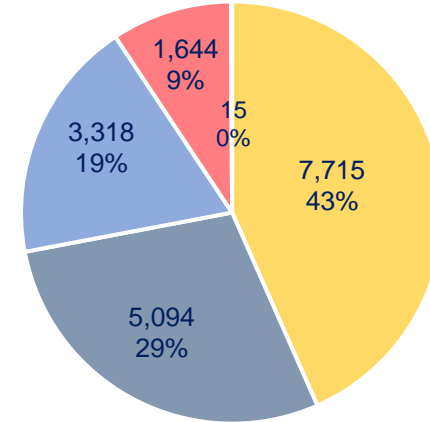
人文科学(85,005人)



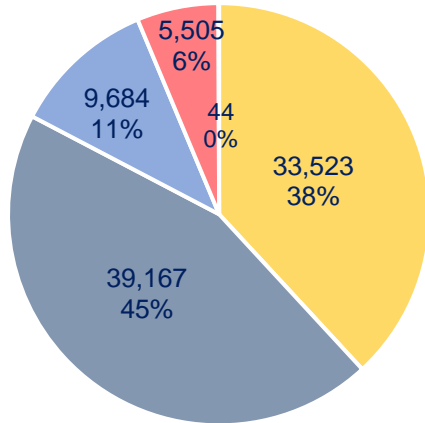
社会科学(193,248人)



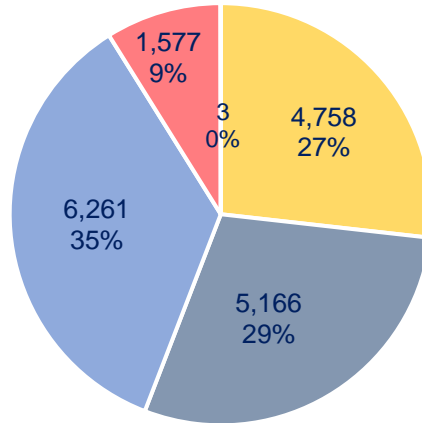
理学(17,786人)



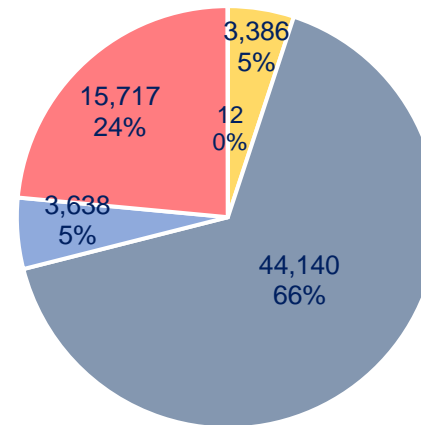
工学(87,923人)



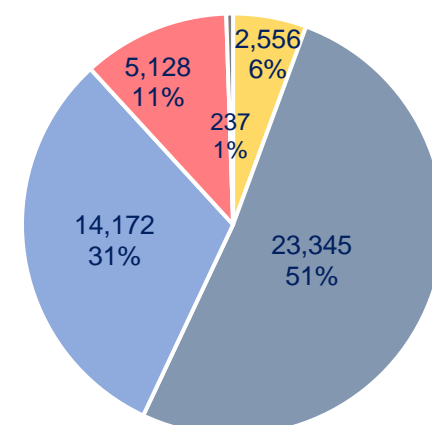
農学(17,765人)



保健(66,893人)



教育(45,438人)



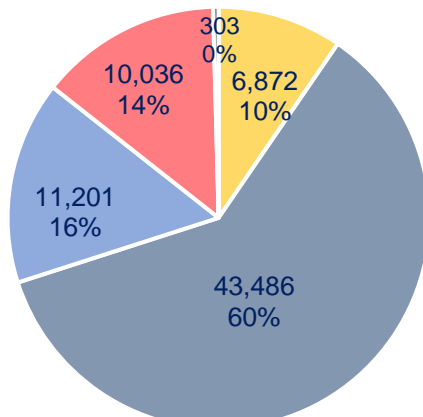
【注】

- 「進学者」とは、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。
- 「就職者」とは、給料・賃金・報酬・その他の経常的な収入を得る仕事に就いた者である。
- 「就職者(専門的・技術的職業)」とは、就職者のうち、研究者、農林水産技術者、製造技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理・通信技術者、教員、医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、医療技術者、美術家、写真家、デザイナー、音楽家、舞台芸術家等として従事している者である。
- 「就職者(その他)」とは、就職者のうち、専門的・技術的職業従事者以外の者で、管理的職業従事者、事務従事者、販売従事者、サービス職業従事者、保安職業従事者、農林漁業従事者、生産工程従事者、輸送・機械運転従事者、建設・採掘従事者、運搬・清掃等従事者等である。
- 「その他」とは、専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発校等への入学者、研究生として入学した者や、一時的な仕事に就いた者(臨時的な収入を得る仕事に就いた者)、臨床研修医(予定者を含む)、進学でも就職でもないことが明らかな者(進学準備中の者、就職準備中の者(求職中の者並びに公務員・教員採用試験及び国家資格試験の準備中の者を含む)等)である。
- 進学者であり、かつ就職をしている者については、「就職者」として算出している。

修士課程修了後の分野別進路

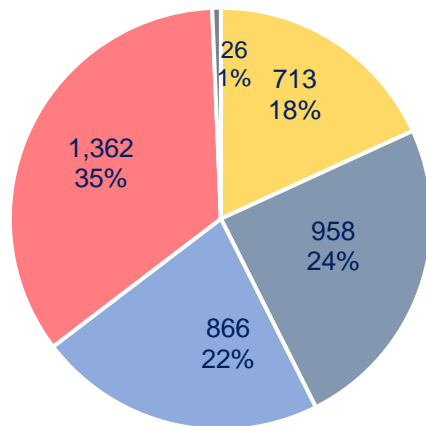
- 人文科学・社会科学、教育では「その他」の割合が高く、社会科学は「就職者（その他）」の割合が他の分野に比べて高い傾向。
- 理学、工学、農学、保健、教育は就職者のうち、専門的・技術的職業の割合が高い傾向。

卒業者合計(71,898人)

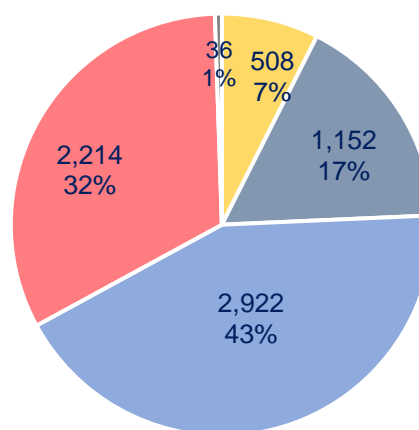


●: 進学者 ●: 就職者(専門的・技術的職業)
●: 就職者(その他) ●: その他 ●: 死亡・不詳

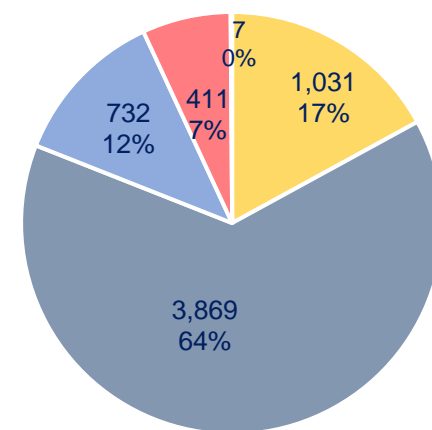
人文科学(3,925人)



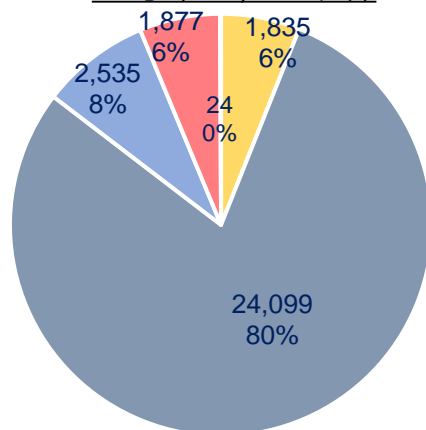
社会科学(6,832人)



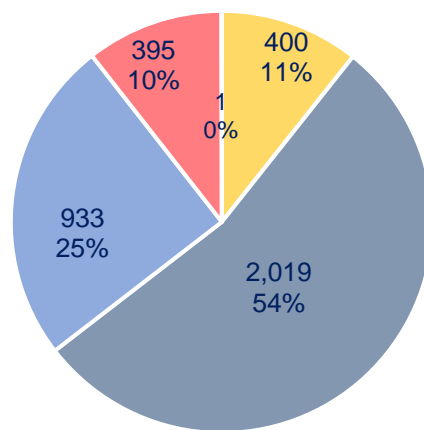
理学(6,050人)



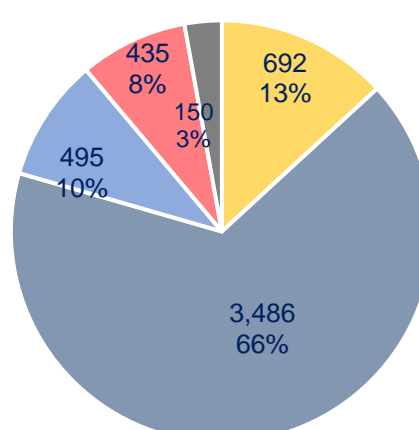
工学(30,370人)



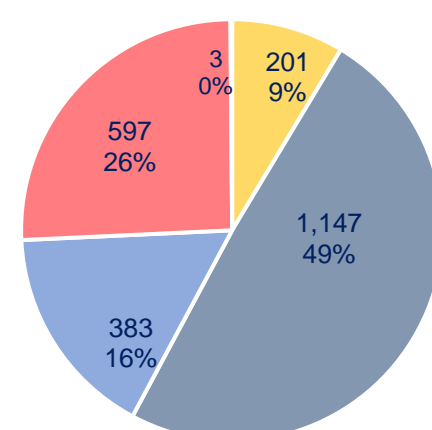
農学(3,748人)



保健(5,258人)



教育(2,331人)



【注】

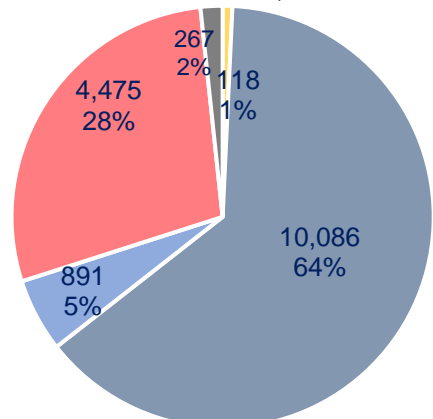
- 「進学者」とは、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。
- 「就職者」とは、給料・賃金・報酬・その他の経常的な収入を得る仕事に就いた者である。
- 「就職者(専門的・技術的職業)」とは、就職者のうち、研究者、農林水産技術者、製造技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理・通信技術者、教員、医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、医療技術者、美術家、写真家、デザイナー、音楽家、舞台芸術家等として従事している者である。
- 「就職者(その他)」とは、就職者のうち、専門的・技術的職業従事者以外の者で、管理的職業従事者、事務従事者、販売従事者、サービス職業従事者、保安職業従事者、農林漁業従事者、生産工程従事者、輸送・機械運転従事者、建設・採掘従事者、運搬・清掃等従事者等である。
- 「その他」とは、専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発校等への入学者、研究生として入学した者や、一時的な仕事に就いた者(臨時的な収入を得る仕事に就いた者)、臨床研修医(予定者を含む)、進学でも就職でもないことが明らかな者(進学準備中の者、就職準備中の者(求職中の者並びに公務員・教員採用試験及び国家資格試験の準備中の者を含む)等)である。
- 進学者であり、かつ就職をしている者については、「就職者」として算出している。

【出典】文部科学省「学校基本統計(平成29年度)」を元に作成

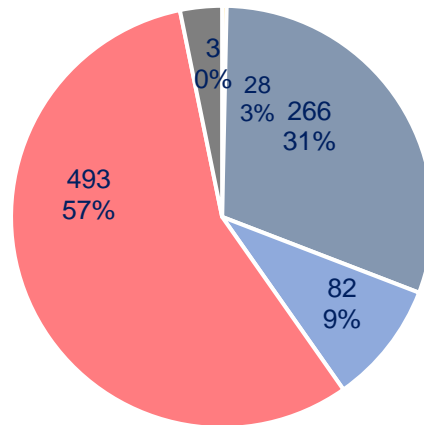
博士課程修了後の分野別進路

- 他の課程と比較して、就職者のうち、専門的・技術的職業の割合はどの分野においても高い傾向。
- 全体として、「その他」の割合が他の課程と比較して高い傾向。

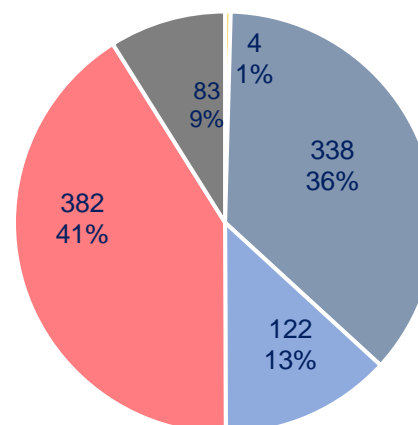
卒業生合計(15,837人)



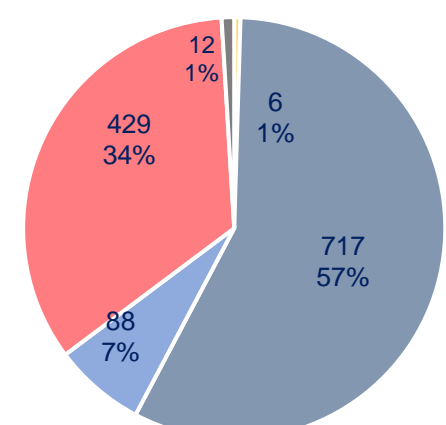
人文科学(872人)



社会科学(929人)

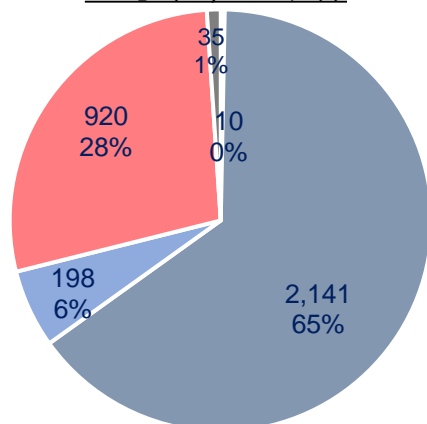


理学(1,252人)

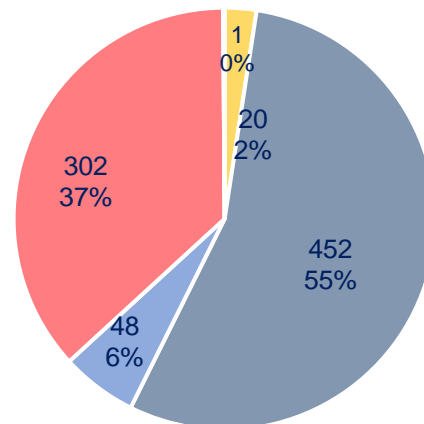


- 進学者
- 就職者(専門的・技術的職業)
- 就職者(その他)
- その他
- 死亡・不詳

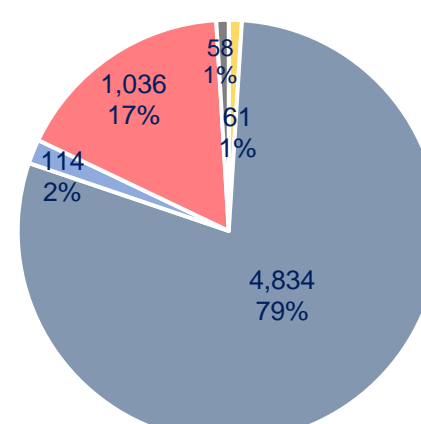
工学(3,304人)



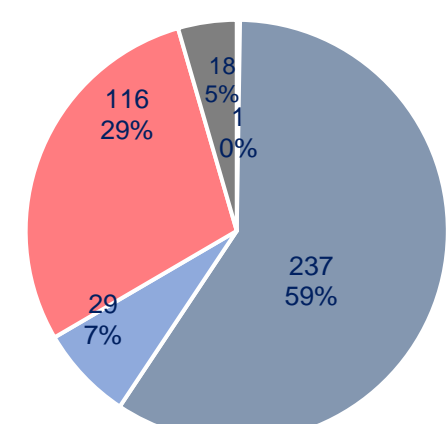
農学(823人)



保健(6,103人)



教育(401人)



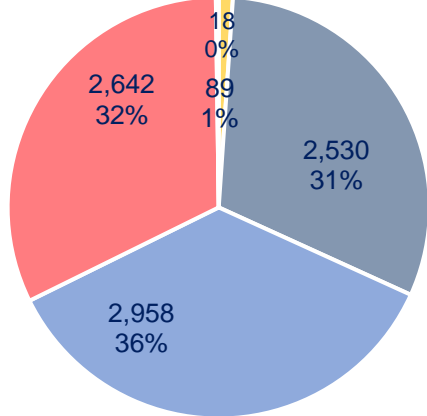
【注】

- 「進学者」とは、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。
- 「就職者」とは、給料・賃金・報酬・その他の経常的な収入を得る仕事に就いた者である。
- 「就職者(専門的・技術的職業)」とは、就職者のうち、研究者、農林水産技術者、製造技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理・通信技術者、教員、医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、医療技術者、美術家、写真家、デザイナー、音楽家、舞台芸術家等として従事している者である。
- 「就職者(その他)」とは、就職者のうち、専門的・技術的職業従事者以外の者で、管理的職業従事者、事務従事者、販売従事者、サービス職業従事者、保安職業従事者、農林漁業従事者、生産工程従事者、輸送・機械運転従事者、建設・採掘従事者、運搬・清掃等従事者等である。
- 「その他」とは、専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発校等への入学者、研究生として入学した者や、一時的な仕事に就いた者(臨時的な収入を得る仕事に就いた者)、臨床研修医(予定者を含む)、進学でも就職でもないことが明らかな者(進学準備中の者、就職準備中の者(求職中の者並びに公務員・教員採用試験及び国家資格試験の準備中の者を含む)等)である。
- 進学者であり、かつ就職をしている者については、「就職者」として算出している。

専門職学位課程修了後の分野別進路

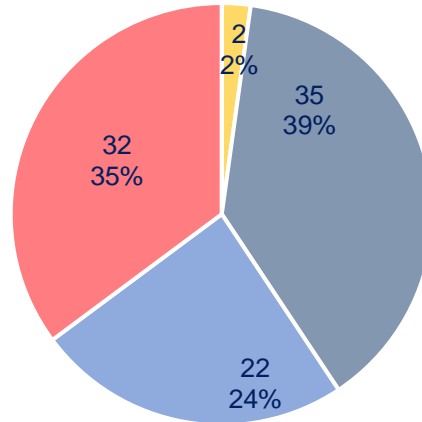
他の課程と比較して、就職者のうち、専門的・技術的職業の割合が高い傾向。（※社会科学は、「その他」（司法修習等を含む）が9割以上を占める法科大学院を含むため、他の分野に比べて「その他」の割合が高い。）

卒業生合計(8,237人)

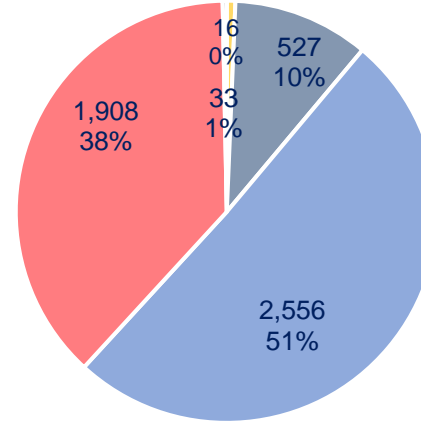


●:進学者 ●:就職者(専門的・技術的職業)
●:就職者(その他) ●:その他 ●:死亡・不詳

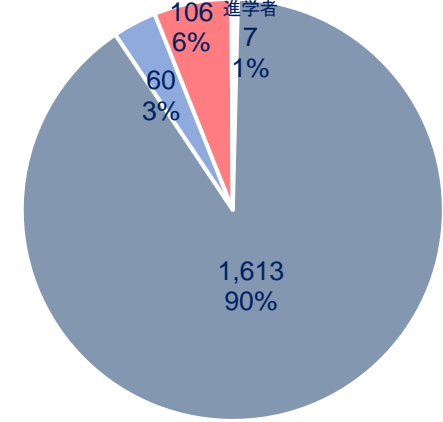
人文科学(91人)



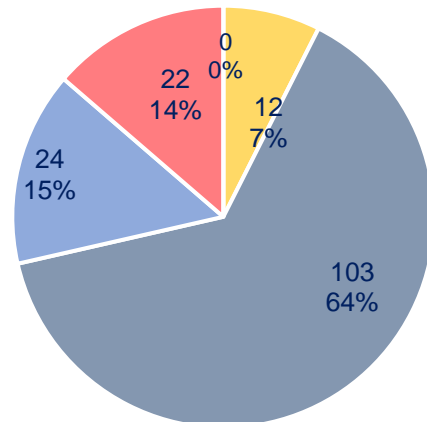
社会科学(5,040人)



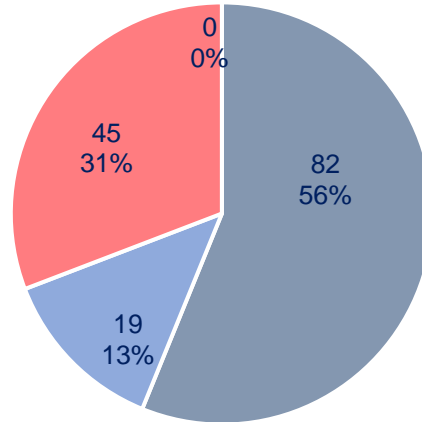
教育(1788人)



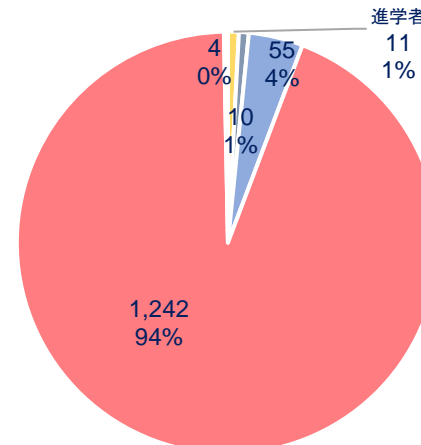
保健(161人)



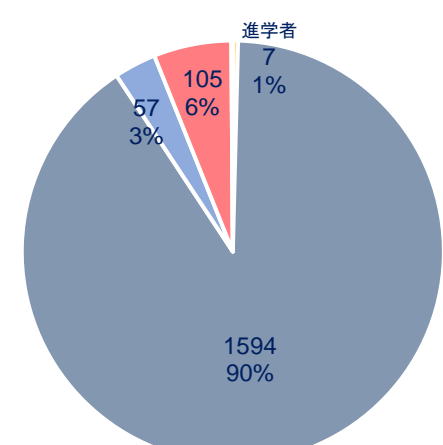
工学(146人)



うち、
法科大学院(1,322人)



うち、
教職大学院(1,765人)

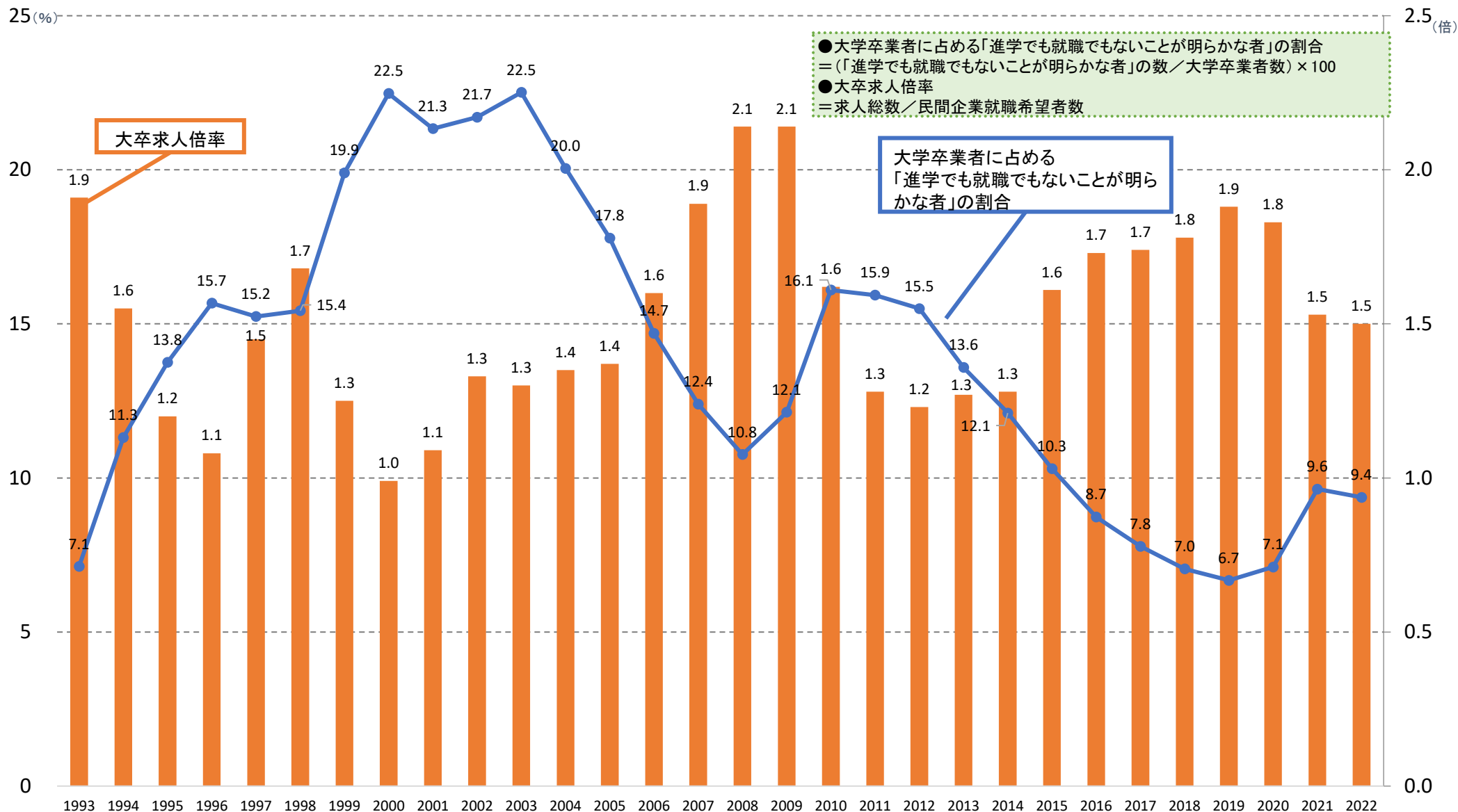


【注】

- 「進学者」とは、大学院研究科、大学院学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。
- 「就職者」とは、給料・賃金・報酬・その他の経常的な収入を得る仕事に就いた者である。
- 「就職者(専門的・技術的職業)」とは、就職者のうち、研究者、農林水産技術者、製造技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理・通信技術者、教員、医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、医療技術者、美術家、写真家、デザイナー、音楽家、舞台芸術家等として従事している者である。
- 「就職者(その他)」とは、就職者のうち、専門的・技術的職業従事者以外の者で、管理的職業従事者、事務従事者、販売従事者、サービス職業従事者、保安職業従事者、農林漁業従事者、生産工程従事者、輸送・機械運転従事者、建設・採掘従事者、運搬・清掃等従事者等である。
- 「その他」とは、専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発校等への入学者、研究生として入学した者や、一時的な仕事に就いた者(臨時的な収入を得る仕事に就いた者)、臨床研修医(予定者を含む)、進学でも就職でもないことが明らかな者(進学準備中の者、就職準備中の者(求職中の者並びに公務員・教員採用試験及び国家資格試験の準備中の者を含む)等)である。
- 進学者であり、かつ就職をしている者については、「就職者」として算出している。

大学卒業者に占める「進学でも就職でもないことが明らかな者」の割合の推移

大学卒業後、進学も転職もしない者の割合は、大卒求人倍率と反比例しており、いわゆる平成の大不況やリーマンショック後に高くなっている。



出典：文部科学省学校基本統計、リクルートワークス研究所（大卒求人倍率）

※進学でも就職でもないことが明らかな者

1993～1998年：無業者(専修学校及び各種学校等の入学者を含む)

1999～2003年：家事の手伝い、研究生として学校に残っている者及び専修学校・各種学校・外国の学校・職業能力開発施設等へ入学した者、または就職でも「進学者」でもないことが明らかな者

2004～2011年：家事の手伝いなど就職でも「進学者」や「専修学校・外国の学校等入学者」等でもないことが明らかな者

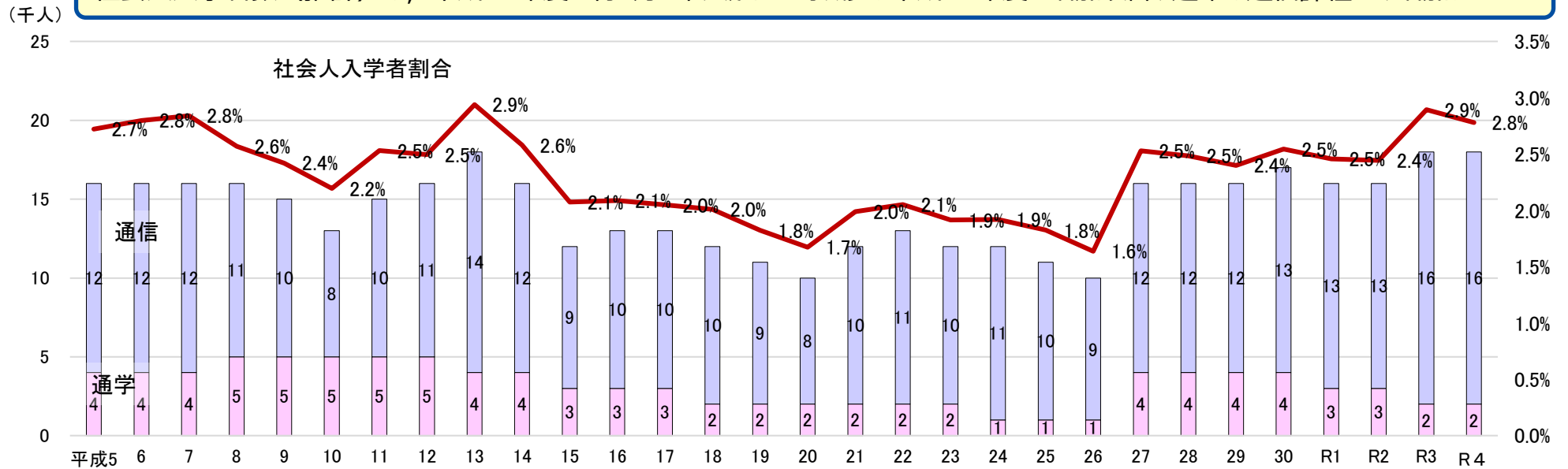
2012～2022年：進学でも就職でもないことが明らかな者（進学準備中の者、就職準備中の者、家事の手伝いなど）

多様な学生の受入れ

社会人入学者の動向

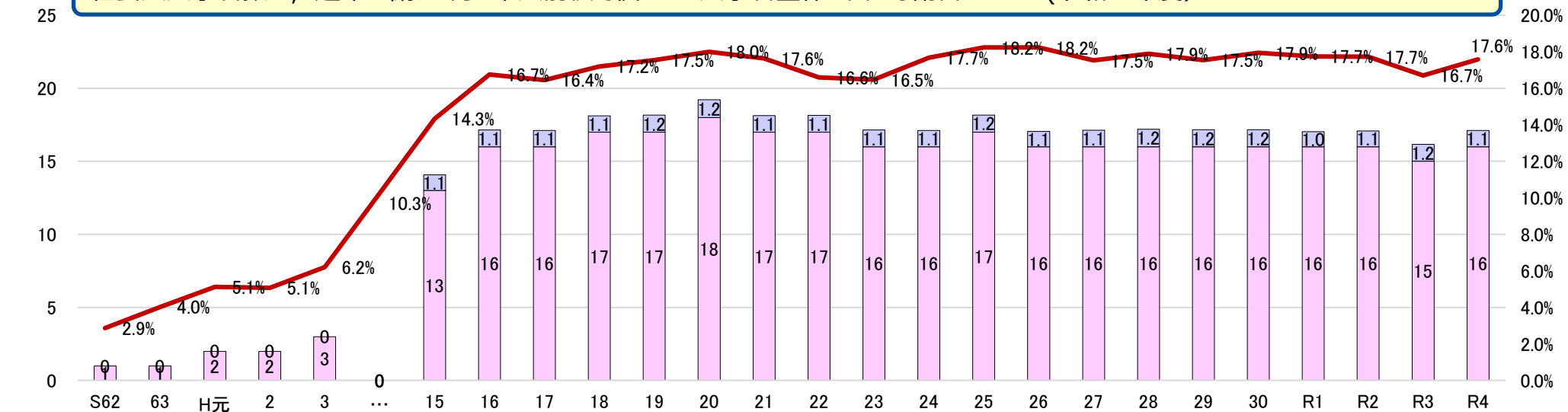
(1) 学部

社会人入学者数（推計）は、平成13年度の約1万8千人から一時減少。平成27年度に増加以降、近年は通信課程のみ増加。



(2) 大学院

社会人入学者数は、近年は概ね1万7千人前後で横ばい。入学者全体に占める割合17.6%(令和4年度)。

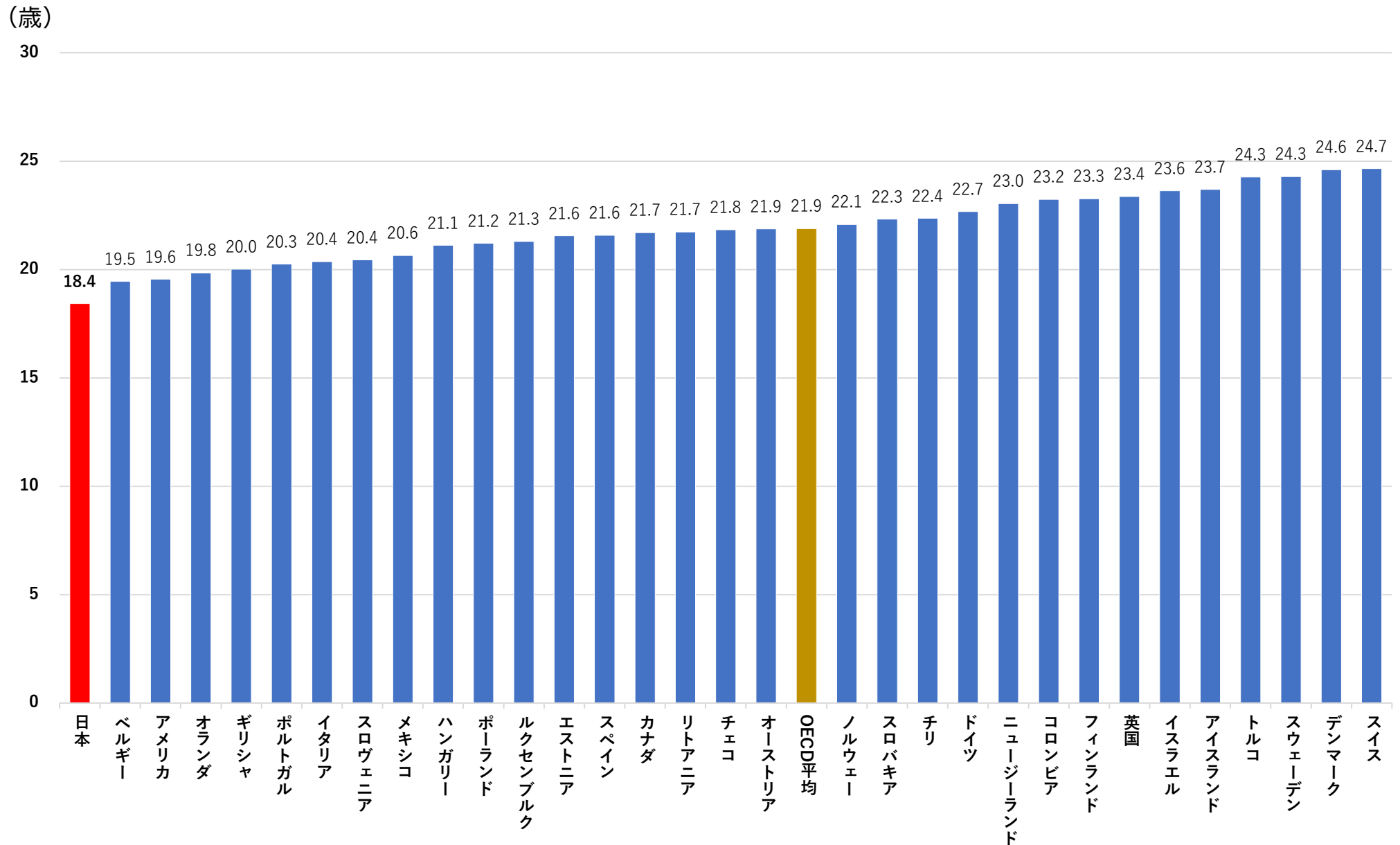


※ 出典: 学校基本調査報告書

※ 通信及び放送大学の社会人入学者は推計である(「学校基本調査報告書(高等教育機関編)」をもとに、通信制学生のうち職についている学生の割合から按分)。

高等教育機関入学者の平均年齢

我が国の高等教育機関への入学者の平均年齢は18.4歳であり、OECD諸国の中で最も低い。



(備考)データは2021年時点の集計可能な国のみ。

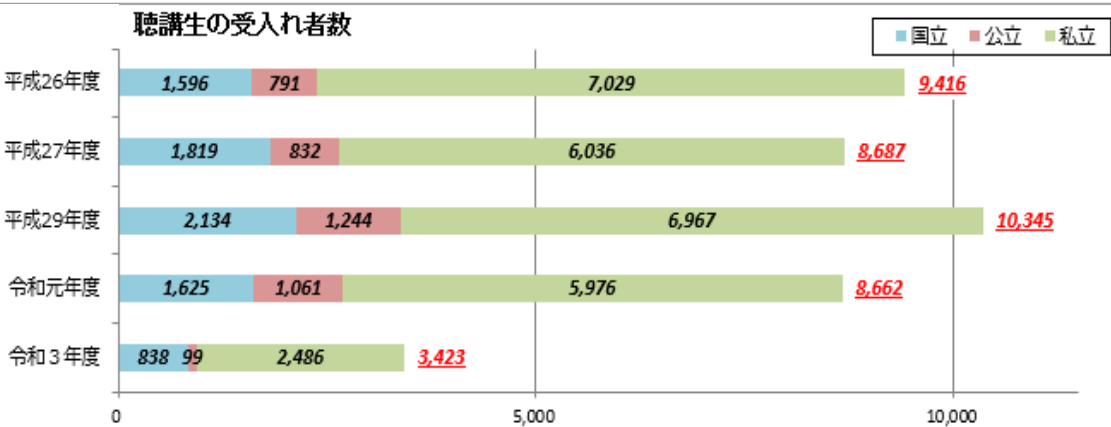
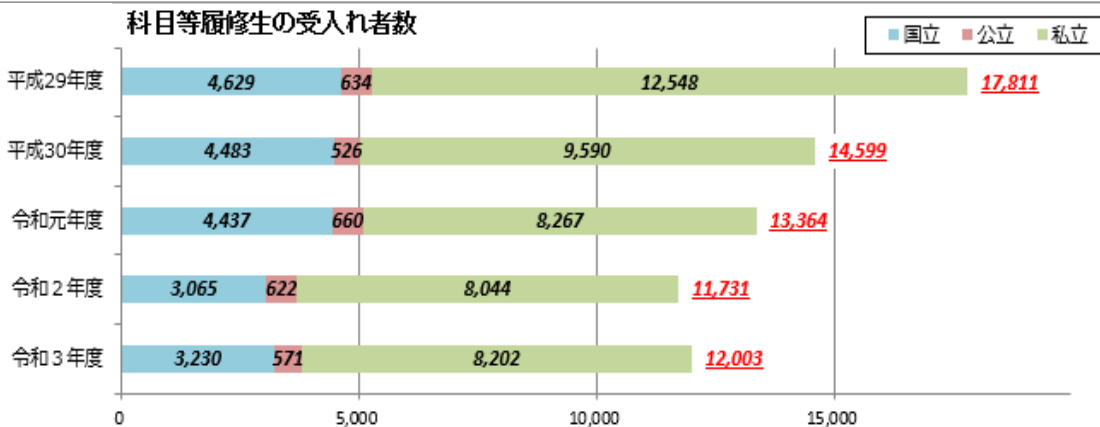
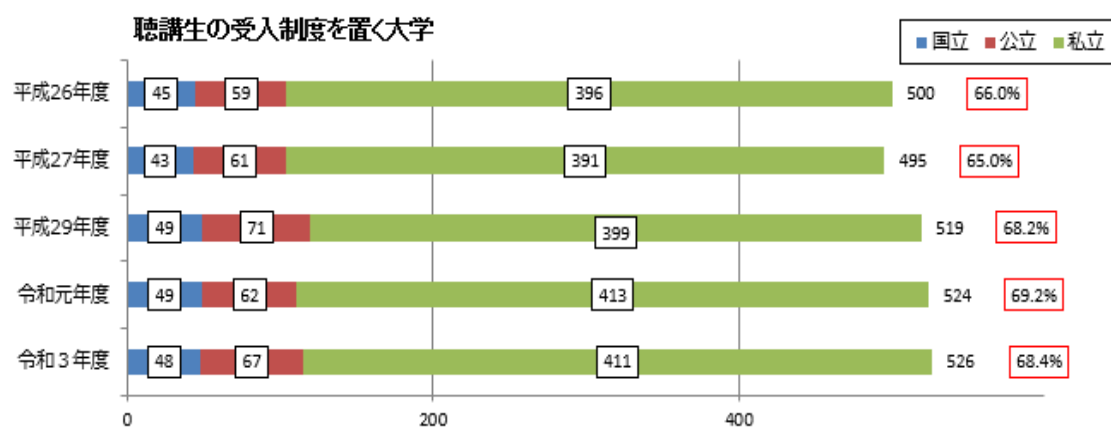
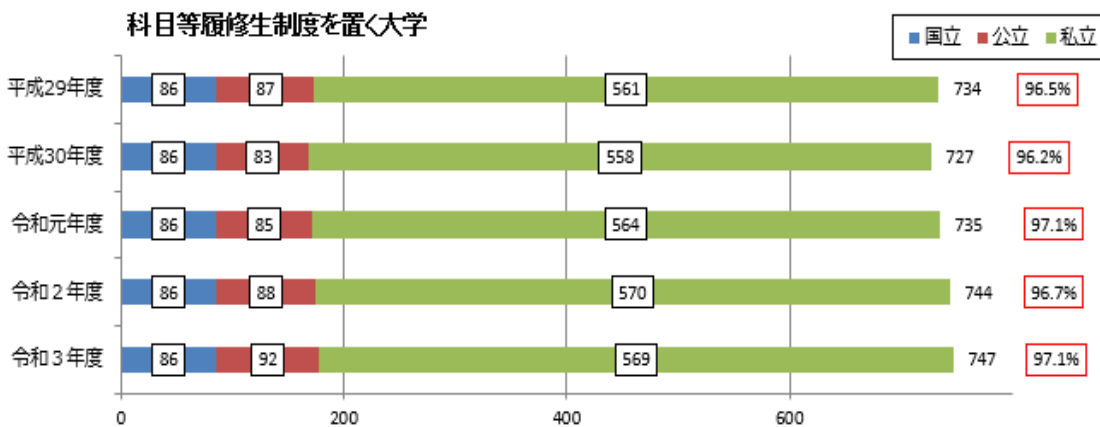
(出典)OECD「Education at a Glance2023(図表でみる教育2023)」TableB4.1(<https://stat.link/b3lxch>)

科目等履修生・聴講生の受入状況

- 科目等履修生の受入れ者数は、国公私ともに減少傾向。
- 聴講生の受入れ者数は、平成29年度に全体的に増加していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和3年度に急激に減少している。

「科目等履修生」：当該大学の学生以外の者にパートタイム形式による大学教育を受ける機会を広く認め、その履修成果に単位を与えることができる制度。

「聴講生」：当該大学の学生以外の者が、授業の一部を履修することを可能とする制度。「科目等履修生」制度とは異なり、単位認定は行われぬ。

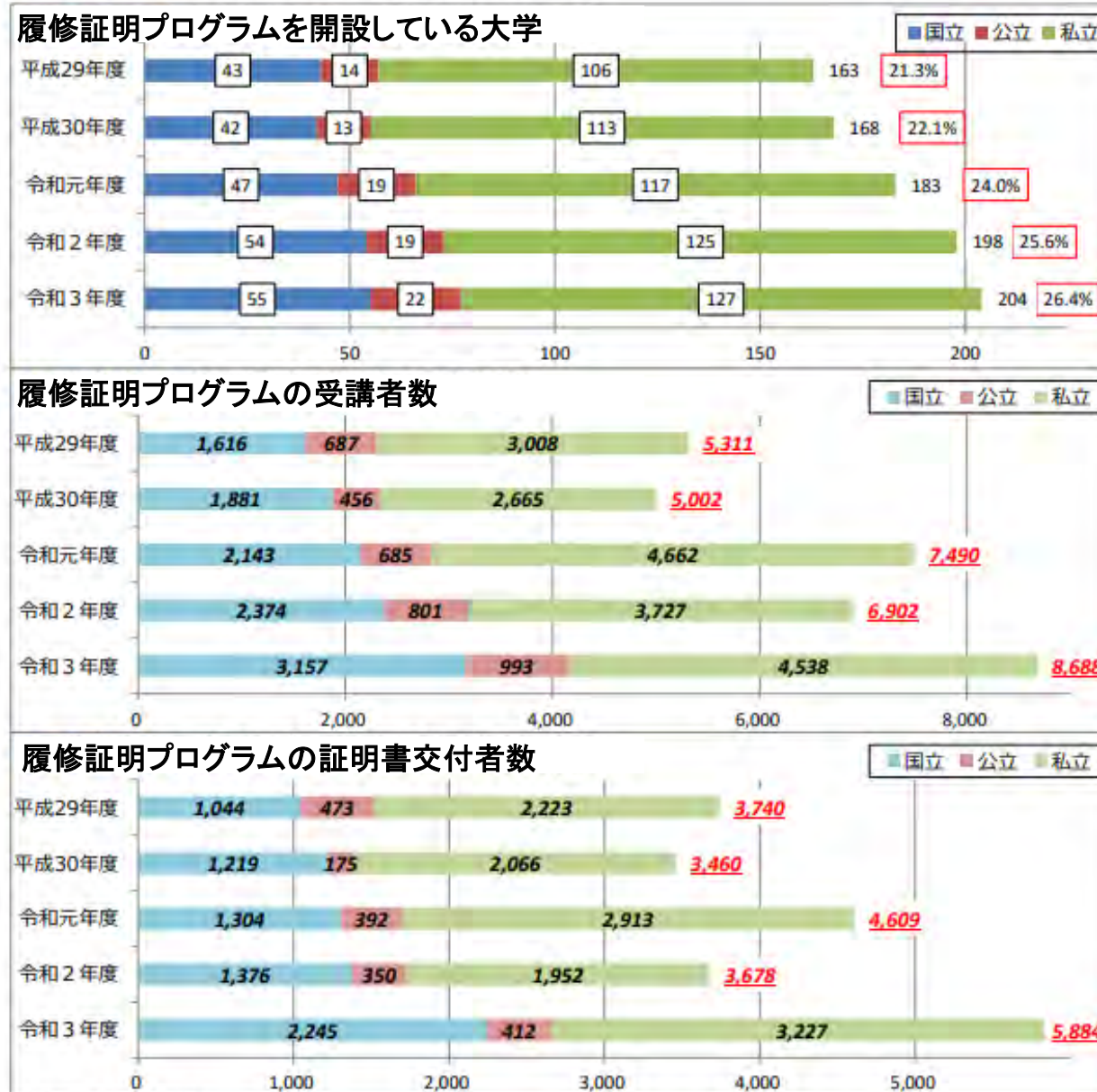


(備考) 科目等履修生..通信制の学部・研究科、放送大学を除く。
 聴講生..通信制のみの大学を除く。調査項目を隔年にしたため平成28年度、平成30年度、令和2年度は調査をしていない。
 (出典) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について(令和3年度)」

履修証明プログラムの実施状況

履修証明プログラムを開設している大学数、履修証明プログラムの受講者数等は、近年は増加傾向となっている。

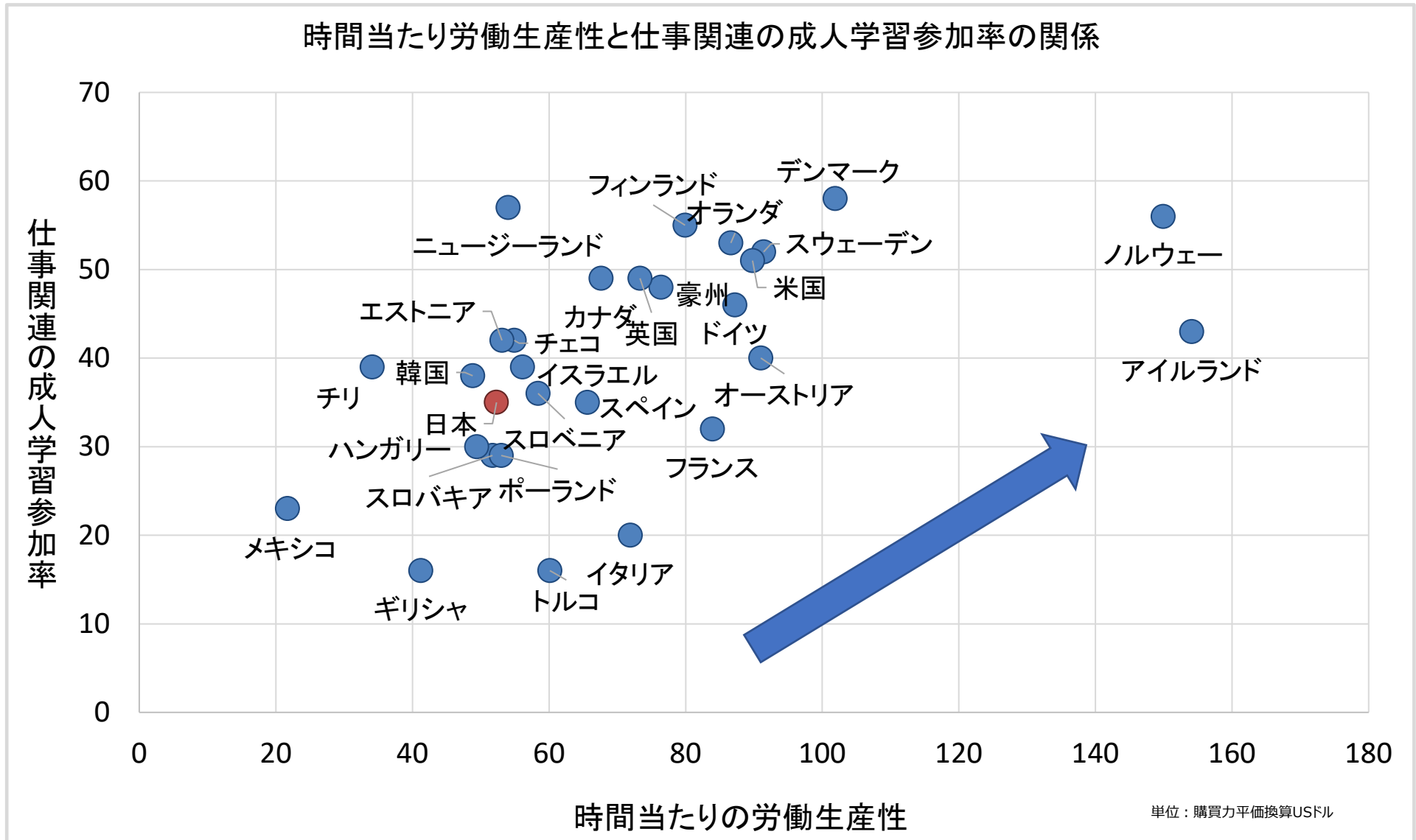
※「履修証明プログラム」：社会人等の学修の機会を拡充するための特別な課程として編成されるもので、大学は、課程の修了者に証明書を交付することができる。



(※)放送大学を除く。

諸外国の労働生産性と仕事関連の成人学習参加率の比較

仕事関連の成人学習参加率が高い国ほど、時間当たりの労働生産性が高い傾向にある。

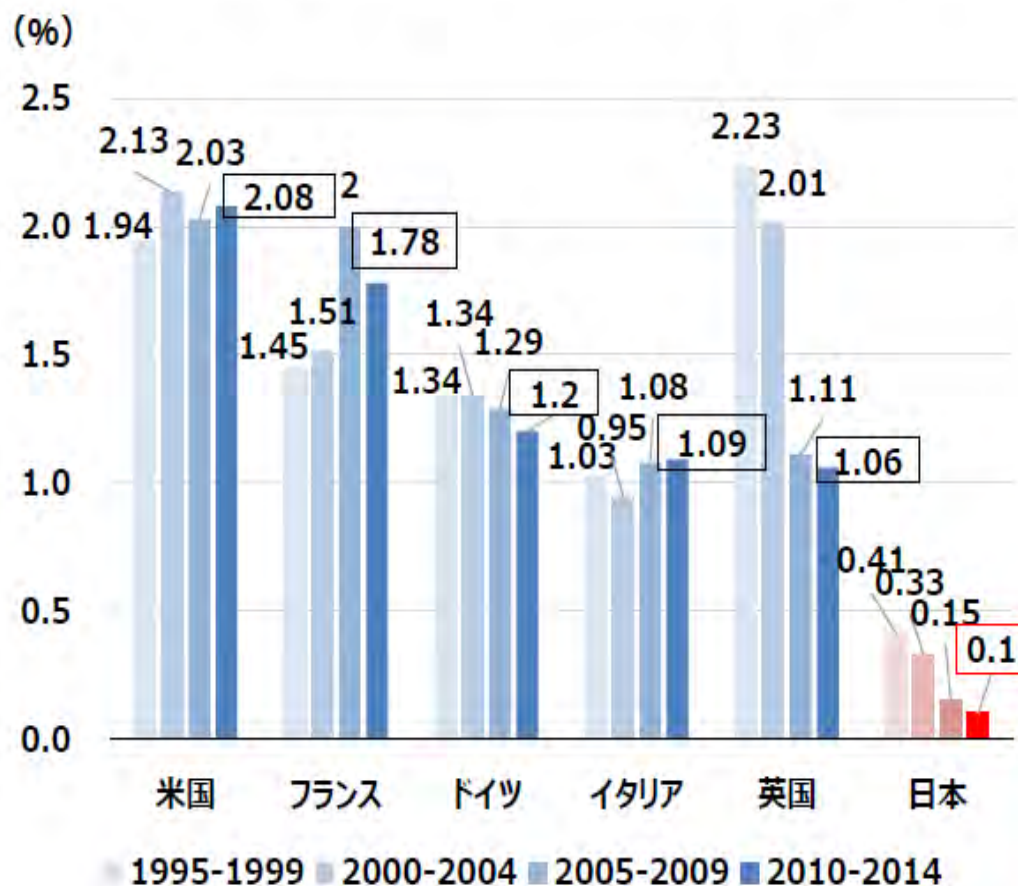


(出典) 縦軸：大学学位取得者の成人教育参加に関する国際比較 (加藤, 2022)
 横軸：(出典) 公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較2023」
 を基に文部科学省作成

人材投資(OJT以外)の国際比較(GDP比)／社外学習・自己啓発を行っていない人の割合

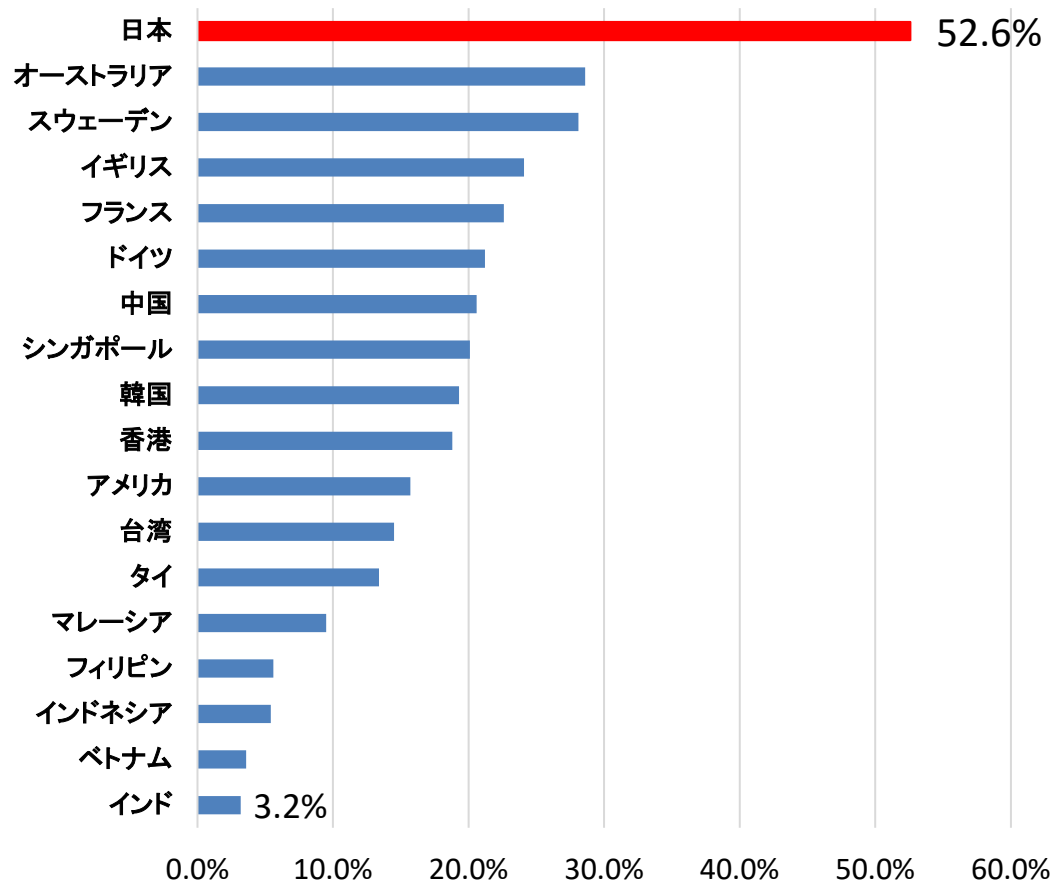
- 日本企業のOJT以外の人材投資（GDP比）は、諸外国と比較して最も低く、低下傾向。
- 社外学習・自己啓発を行っていない個人の割合は半数近くで、諸外国と比較しても極めて高い。

人材投資（OJT以外）の国際比較（GDP比）



（出典）内閣府「国民経済計算」、JIPデータベース等を利用し、学習院大学宮川努教授が推計

社外学習・自己啓発を行っていない人の割合

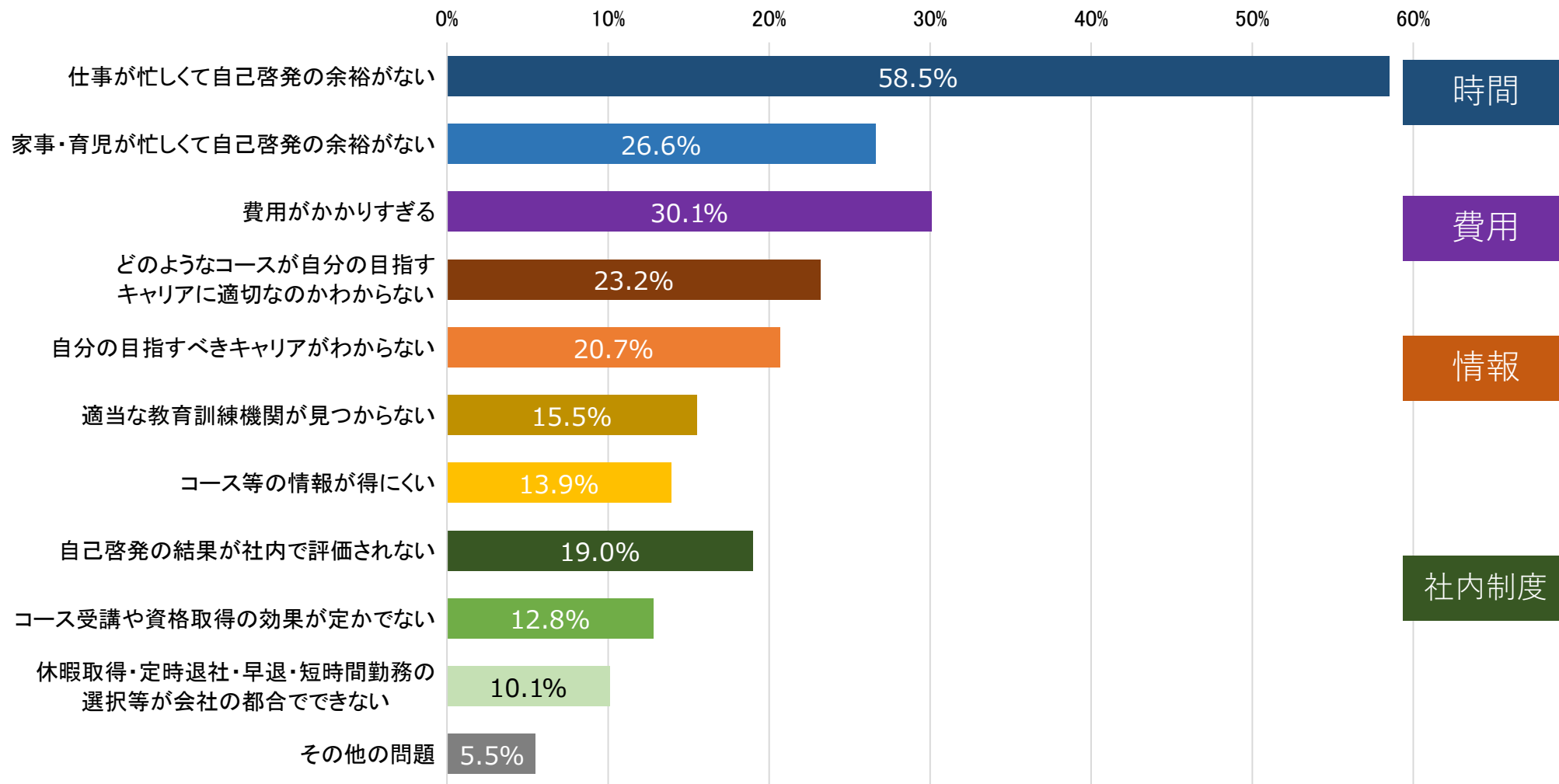


（出典）パーソル総合研究所「グローバル就業実態・成長意識調査（2022年）」

自己啓発を行う上での問題点

自己啓発を行う上での課題は、「時間」「費用」「情報」「社内制度」となっている。

(正社員：複数回答)

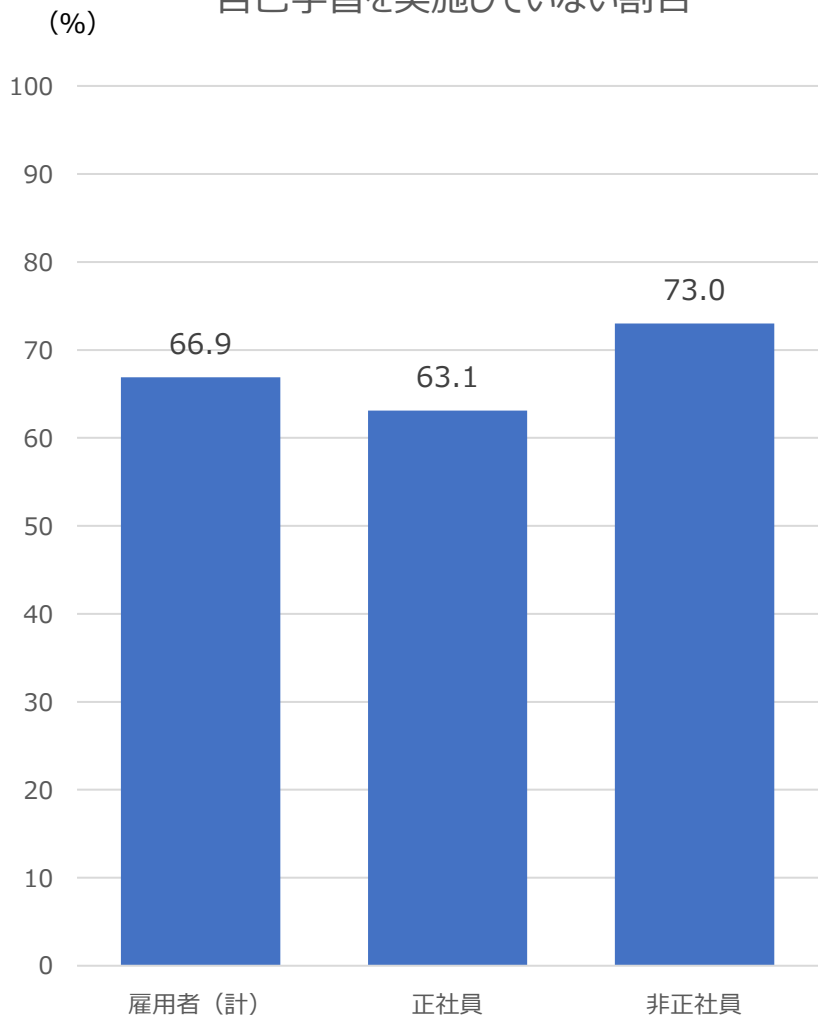


(出典) 厚生労働省「能力開発基本調査(令和4年度)」より作成。

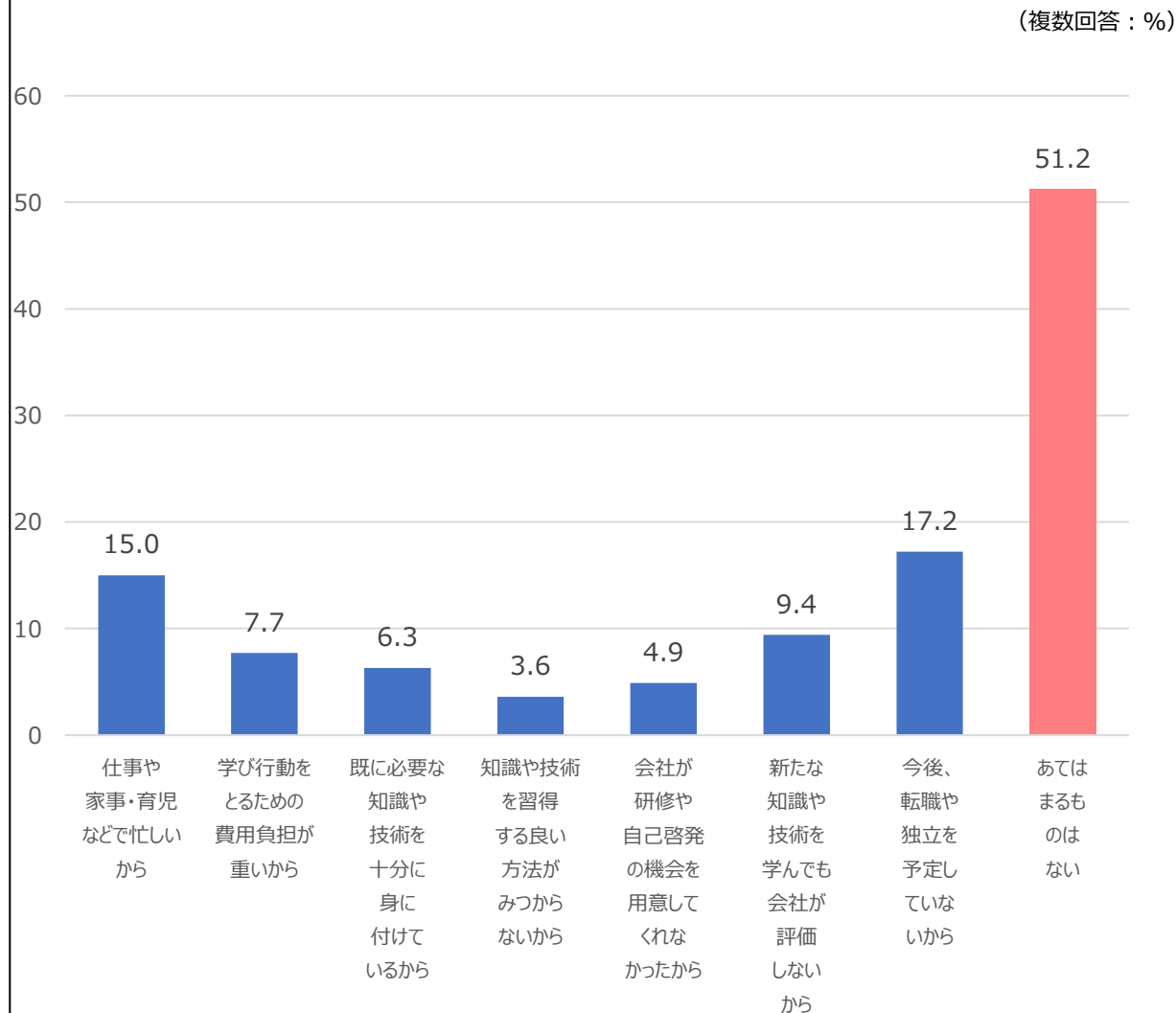
自己学習の実施割合と学び行動をとらない理由

我が国の社会人（雇用者）の6割以上が自己学習を実施しておらず、その約半数が学ばないことに特段の理由はないという報告がある。

自己学習を実施していない割合



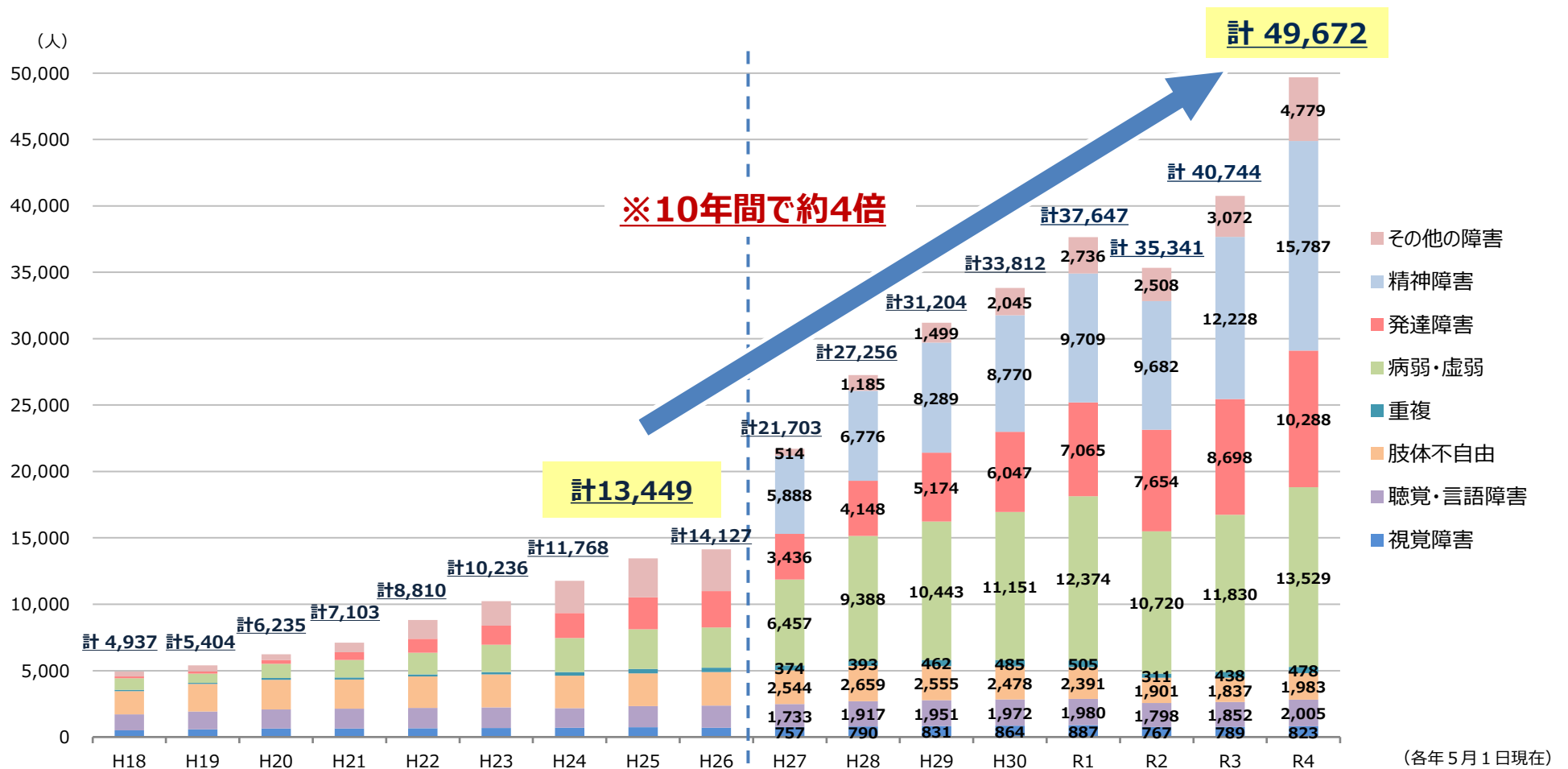
仕事に関連した学び行動をとらなかった理由



(出典) リクルートワークス研究所 (2018) 「どうすれば人は学ぶのかー「社会人の学びを解析するー」

※ 全国就業実態パネル調査 (JPSED)
有効回答数 : 50,677サンプル

障害のある学生の在籍者数

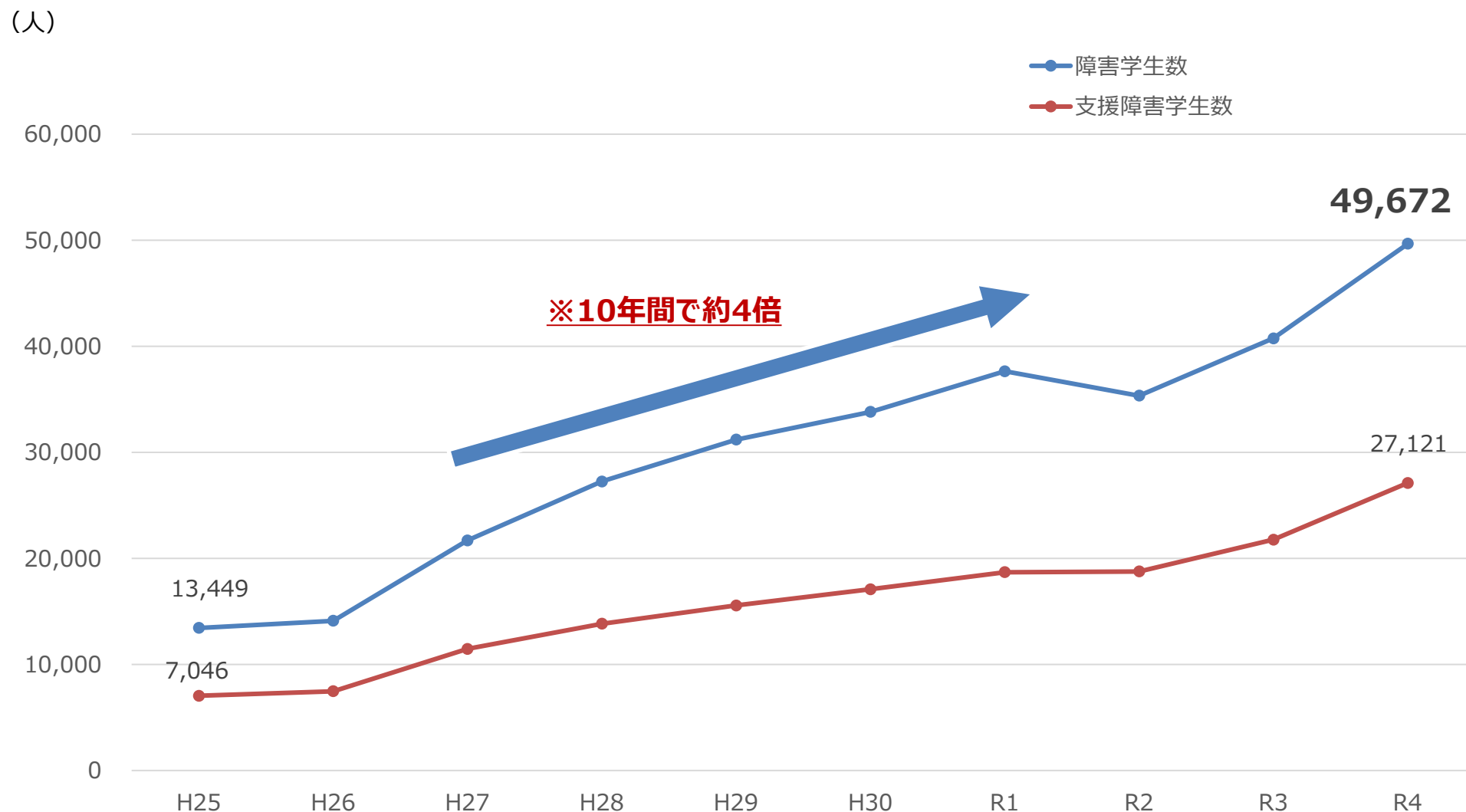


出典：令和4年度大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査（日本学生支援機構）

- ※1 本調査における「障害学生」とは、「身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳及び療育手帳」を有している学生又は「健康診断等において障害があることが明らかになった学生」をいう。
- ※2 「病弱・虚弱」とは、慢性の呼吸器疾患、腎臓疾患及び神経疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療又は生活規制を必要とする程度のもの、並びに身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度のことをいう。
- ※3 「精神障害」は平成27年度よりカテゴリーとして独立。平成26年度までは「その他」に含む。（平成24年度から「その他」の内訳を調査（平成26年度の「その他」3,144人中、精神疾患・精神障害は2,826人、慢性疾患・機能障害は247人、知的障害46人、それ以外25人））
- ※4 グラフの数値には、「大学」「短期大学」「高等専門学校」における人数を含む。ただし、研究生、科目等履修生、聴講生及び別科生は含まない。

障害のある学生の在籍数及び支援障害学生の在籍数

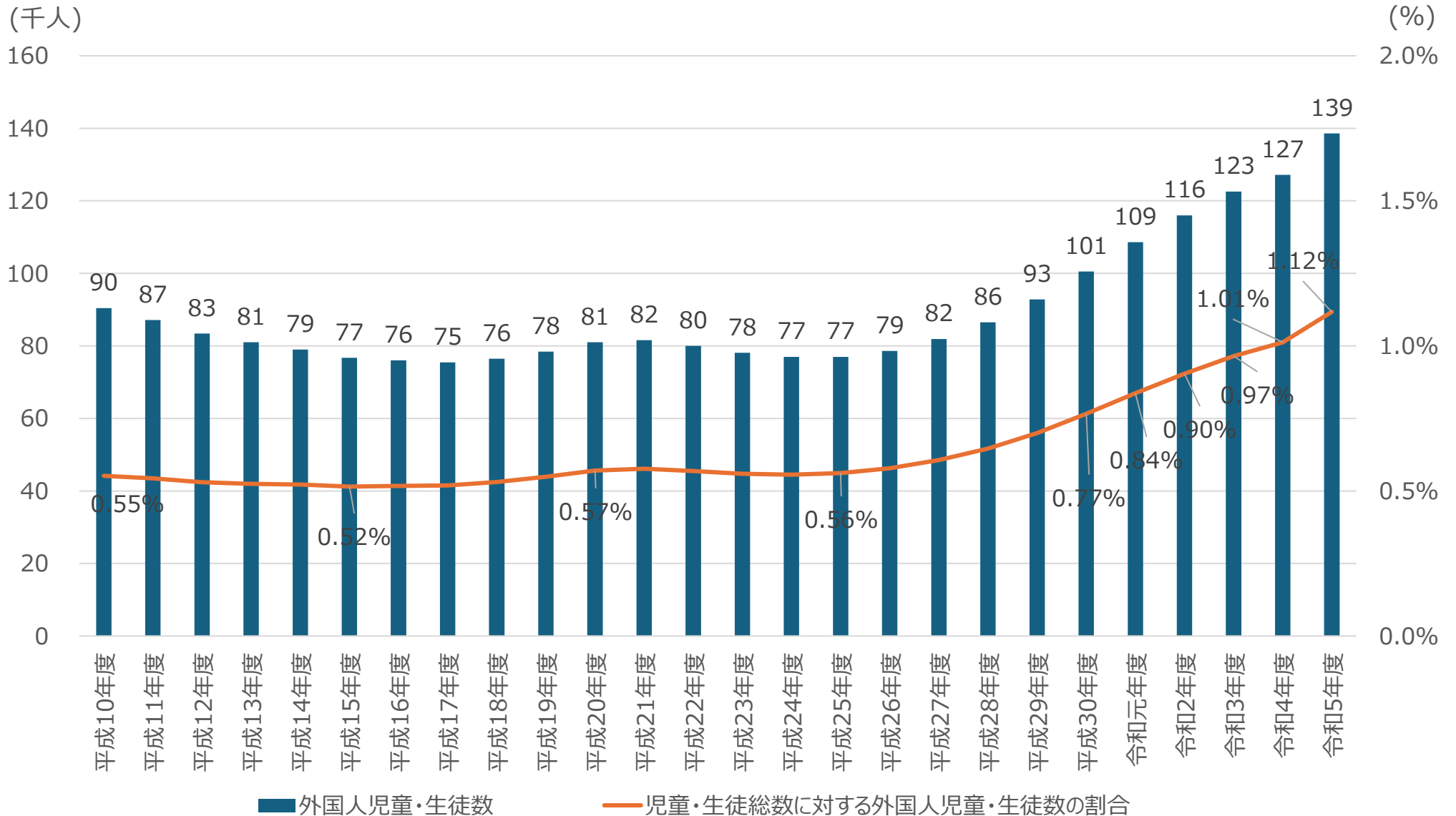
大学・短期大学・高等専門学校における障害のある学生の在籍者数は、平成25年の13,499人から、令和4年には49,672人と約4倍に増加している。



※ 支援障害学生：学校に支援の申し出があり、それに対して学校が何らかの支援を行なっている（予定を含む）障害学生

外国人児童・生徒数の推移

初等中等教育段階において、外国人児童・生徒数は増加している。



出典：文部科学省「学校基本統計」

【学校種】小学校・中学校・義務教育学校・中等教育学校・高等学校・特別支援学校
 (注) 義務教育学校は、平成28(2016)年に制度化
 中等教育学校は、平成11(1999)年に制度化

日本語指導が必要な高校生等の大学等進学率

日本語指導が必要な高校生等の大学等進学率は51.8%（令和3年度）と、前回調査の42.2%（平成30年度）から上昇。

	高等学校等を卒業した生徒数		高等学校等を卒業した後大学や専修学校などの教育機関等（※2）に進学等した生徒数		進学率	
	令和3年度	平成30年度	令和3年度	平成30年度	令和3年度	平成30年度
全高校生等	712,927	750,315	523,223	533,118	73.4%	71.1%
日本語指導が必要な高校生等（※1）	951	704	493	297	51.8%	42.2%

※1 「日本語指導が必要な高校生等」とは、「日本語で日常会話が十分にできない高校生等」及び「日常会話ができても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な高校生等」を指す。また、「高校生等」とは、公立の全日制・定時制高等学校、通信制高等学校、中等教育学校後期課程及び特別支援学校高等部の生徒を指す。

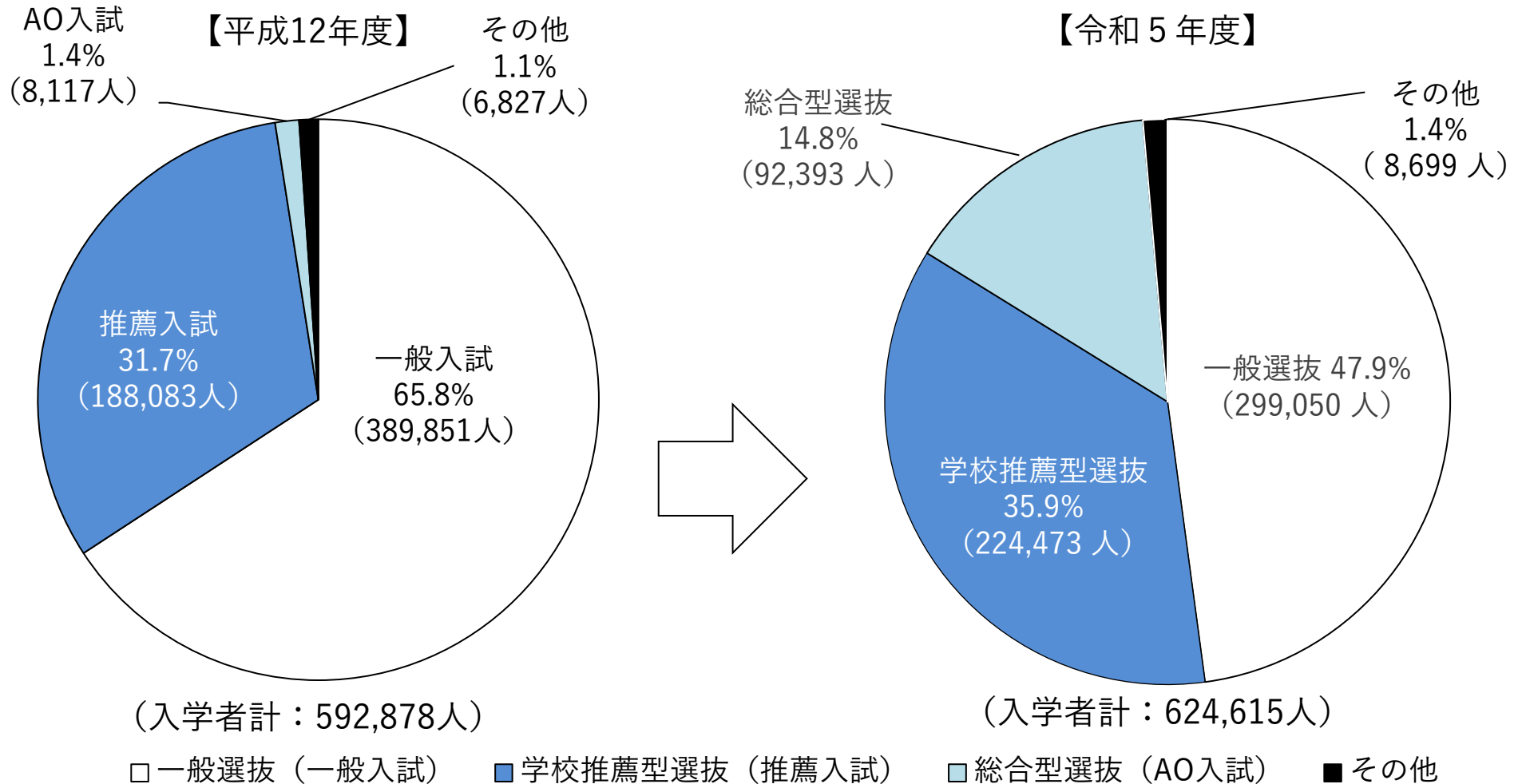
※2 短期大学、専門学校、各種学校を含む。

【出典】文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和3年度）」

入学者選抜・大学教育の現状

令和5年度入学者選抜実施状況の概要（平成12年との比較）

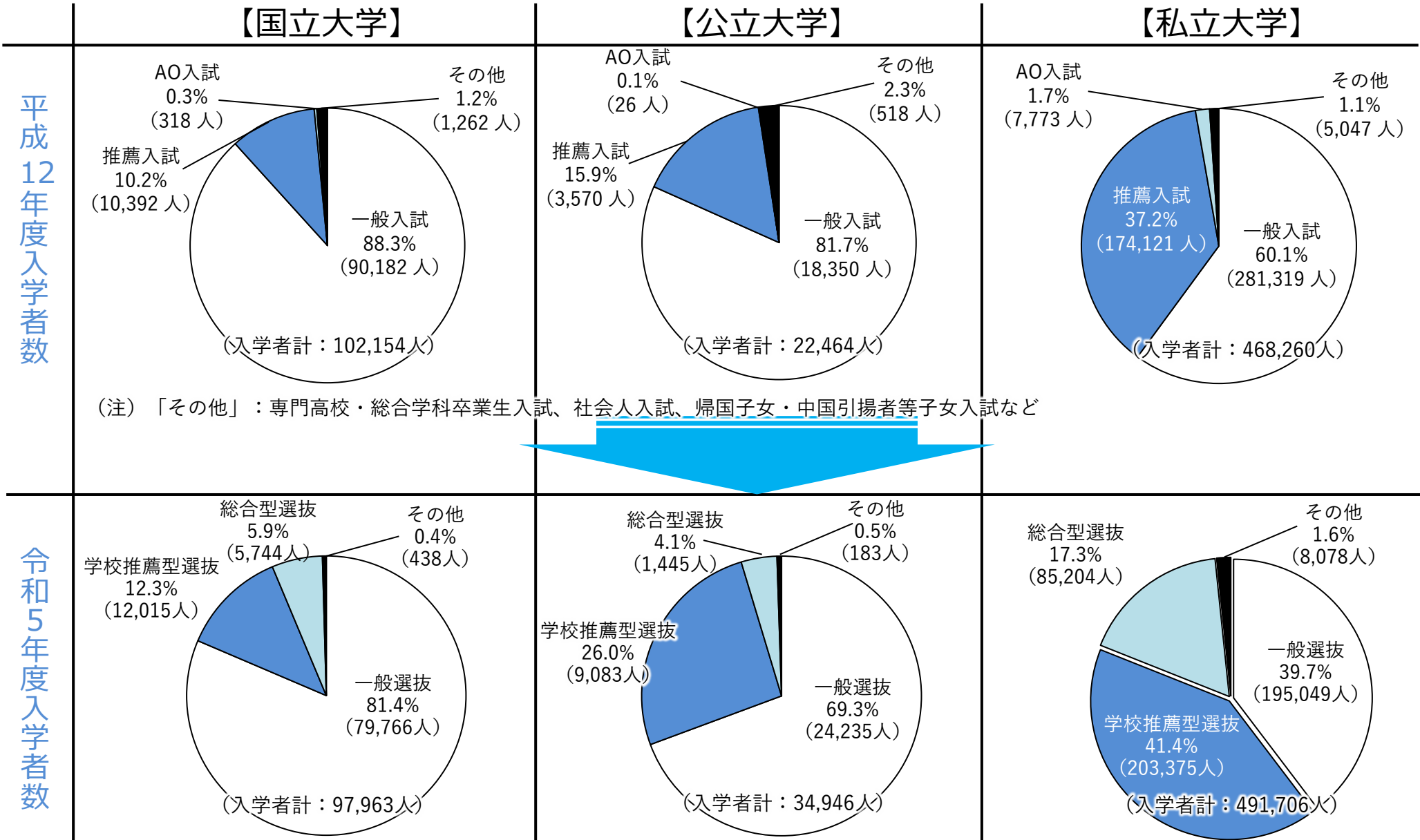
平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、総合型選抜、学校推薦型選抜を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。



(注) 「その他」(平成12年度)：専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など
 「その他」(令和5年度)：専門学科・総合学科卒業生選抜、社会人選抜、帰国生徒・中国引揚者等生徒選抜及びその他選抜。

令和5年度入学者選抜実施状況の概要（国公立別平成12年との比較）

令和5年度入学者選抜の総合型選抜、学校推薦型選抜を経由した入学者の割合について、国公立別に見ると、国立大学は18.2%、公立大学は30.1%、私立大学は58.7%となっている。



(注) 「その他」：専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など

(注) 「その他」：専門学科・総合学科卒業生選抜、社会人選抜、帰国生徒・中国引揚者等生徒選抜及びその他選抜。

なお、四捨五入の関係で合計が100%とならない場合がある。【出典】文部科学省「令和5年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」

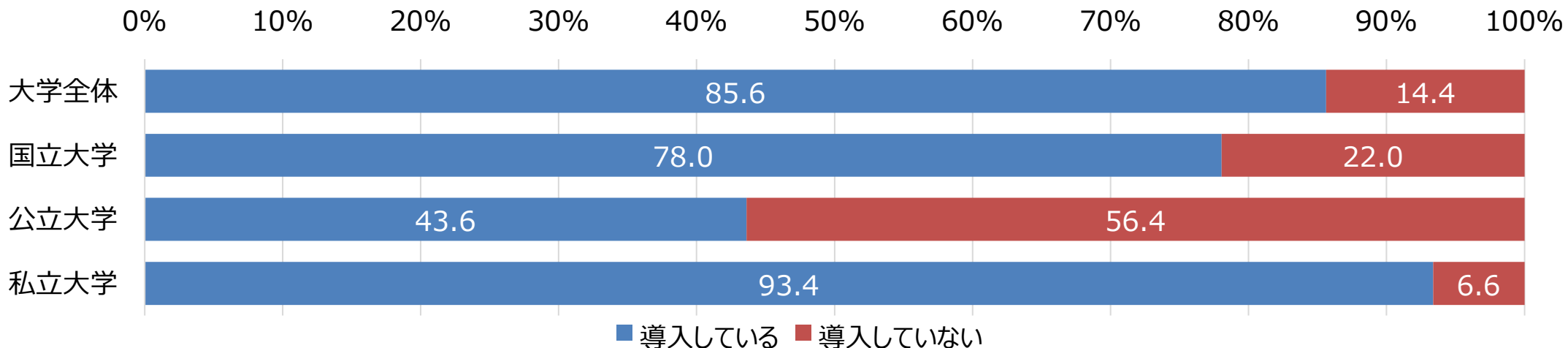
総合型選抜の導入状況①（導入大学割合、未導入大学における）

- 85.6%の大学で総合型選抜の導入が進んでおり、私立大学では導入率が93.4%となっている。
- 未導入大学のうち、11.8%の大学が総合型選抜の導入を決定しており、また16.4%の大学が導入を検討をしている。

（出典）文部科学省「大学入学者選抜における総合型選抜の導入効果に関する調査研究 報告書」（令和6年3月）

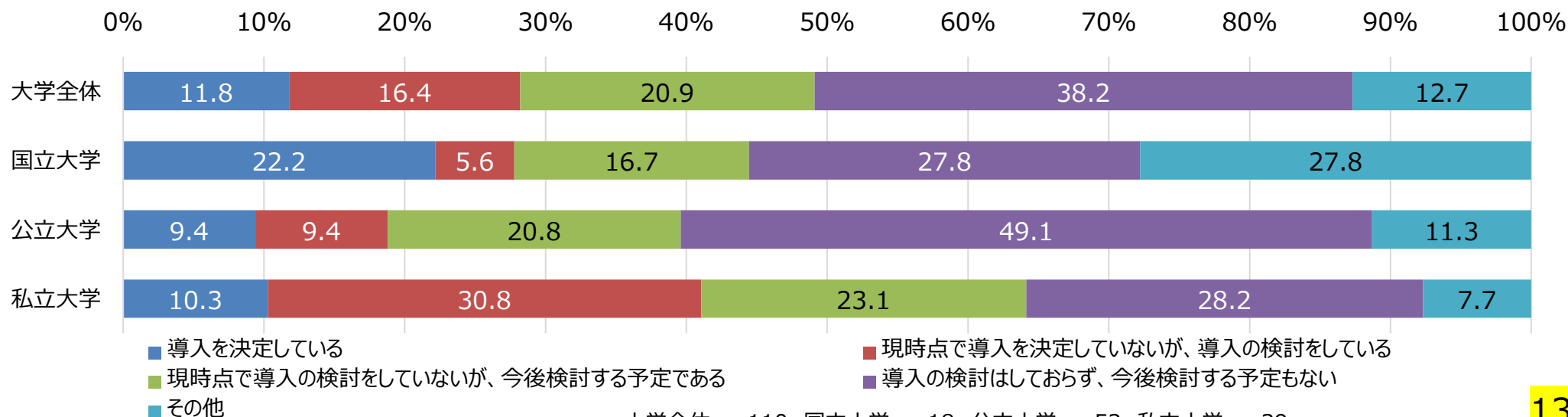
※ 総合型選抜方法導入に関するアンケート調査や面接調査の実施により、総合型選抜の成果と課題について分析を行う上での基礎資料とすることを目的として実施したもの

※ アンケート調査期間：令和5年9月～6年1月）、回答大学数は765（回答率97.8%）



大学全体 n=765: 国立大学 n=82: 公立大学 n=94: 私立大学 n=589:

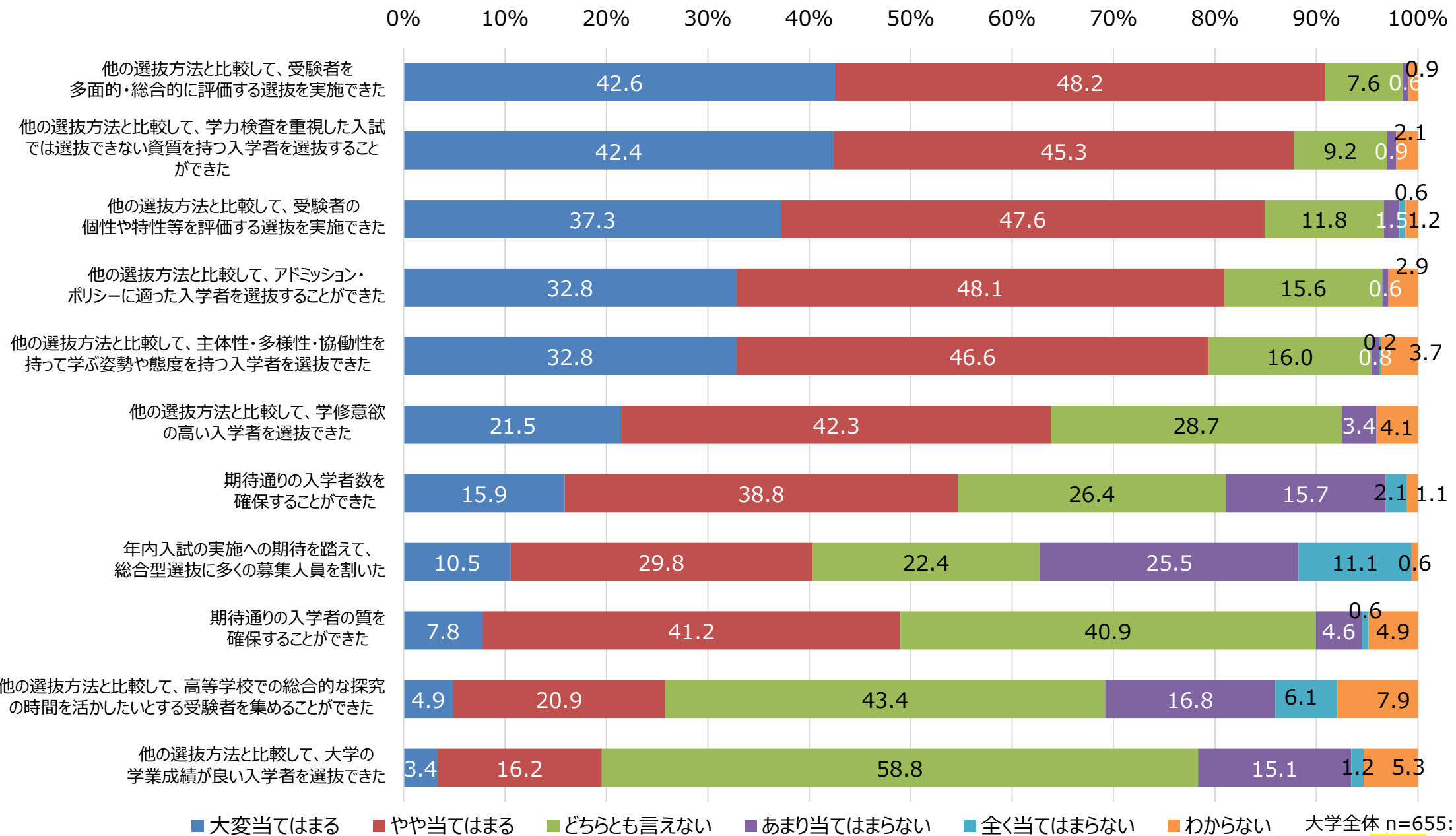
● 未導入大学における、今後の総合型選抜の導入予定



大学全体 n=110: 国立大学 n=18: 公立大学 n=53: 私立大学 n=39:

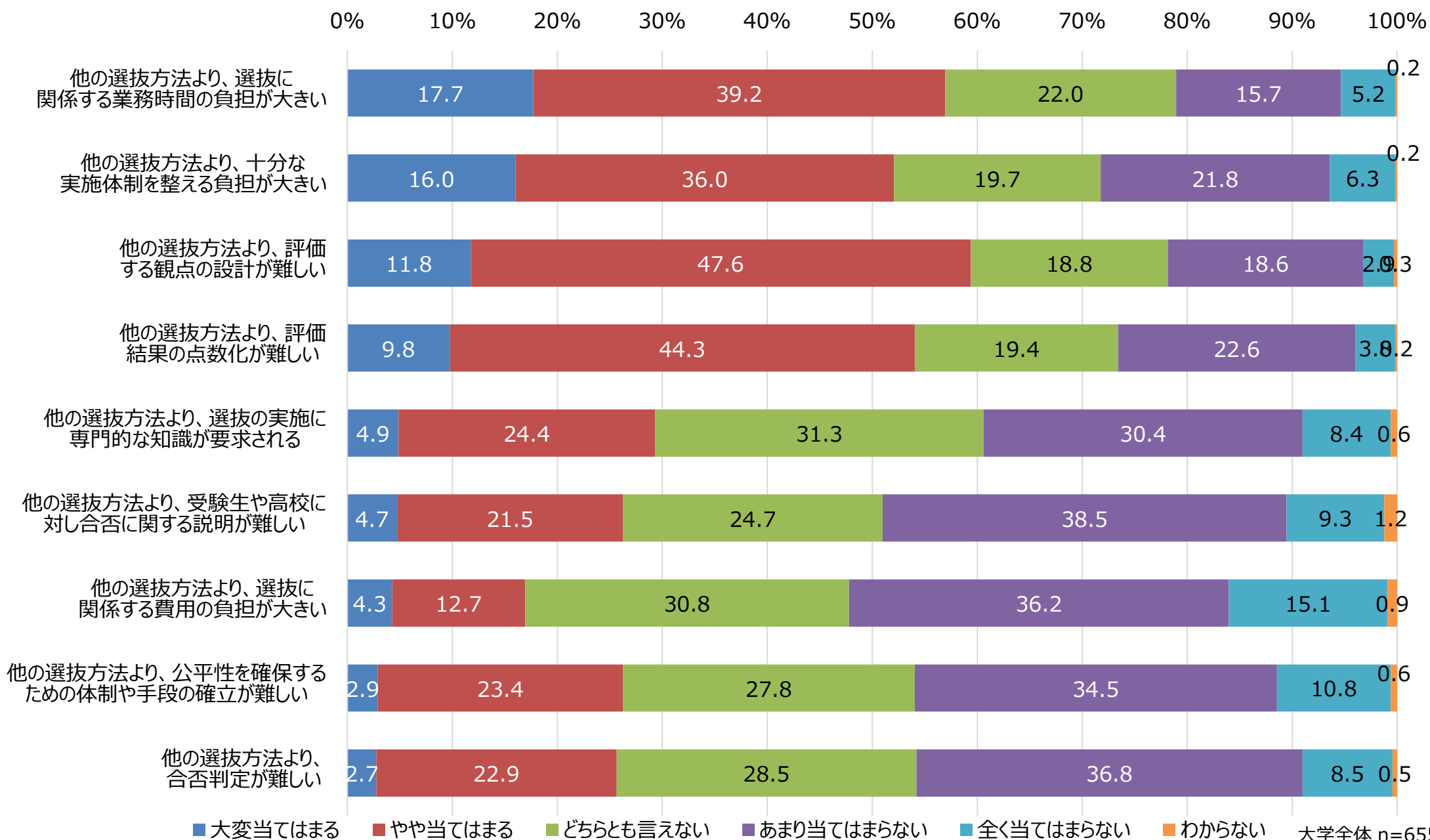
総合型選抜の導入状況②（導入による効果）

- 「大変当てはまる」「やや当てはまる」の合計で見ると、他の選抜方法と比較して、「受験生を多面的・総合的に評価する選抜を実施できた」「学力検査を重視した入試では選抜できない資質を持つ入学者を選抜することができた」とする大学が多い。



総合型選抜の導入状況③（導入に際しての課題）

- 「大変当てはまる」「やや当てはまる」の合計で見ると、他の選抜方法より、「評価する観点の設計が難しい」「選抜に関する業務時間の負担が大きい」「評価結果の点数化が難しい」「十分な実施体制を整える負担が大きい」とする大学が多い。

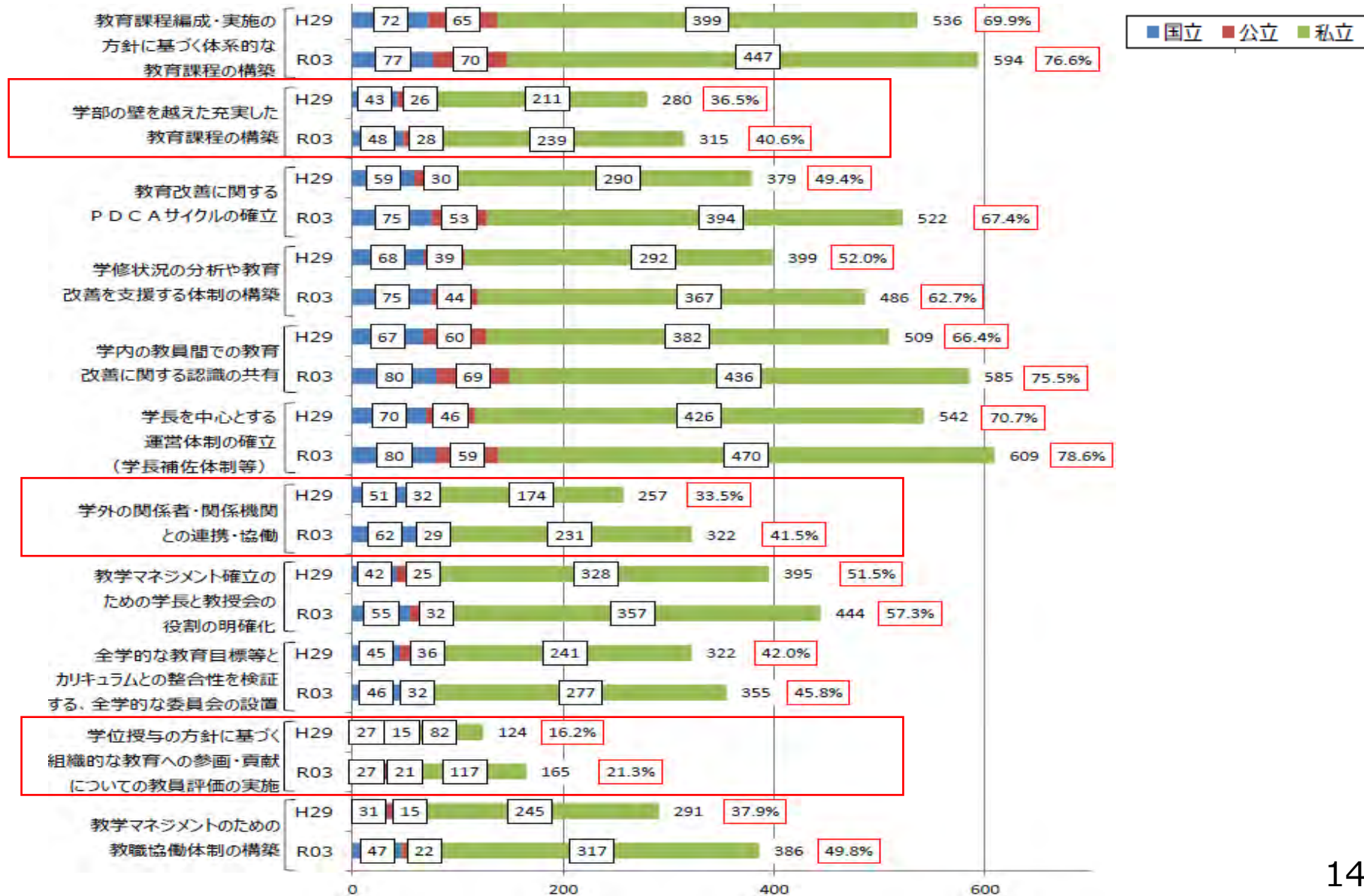


(出典) 文部科学省「大学入学者選抜における総合型選抜の導入効果に関する調査研究 報告書」(令和6年3月)

教学マネジメントに関する取組の状況

教学マネジメントに関する取組は、グランドデザイン答申（H30）前と比べると、全体として進捗している。一方で、「学部の壁を越えた充実した教育課程の構築」「学外関係者・関係機関との連携・協働」「学位授与の方針に基づく組織的な教育への参画・貢献についての教員評価の実施」などに関する取組を実施している大学の割合は、依然として低い状況。

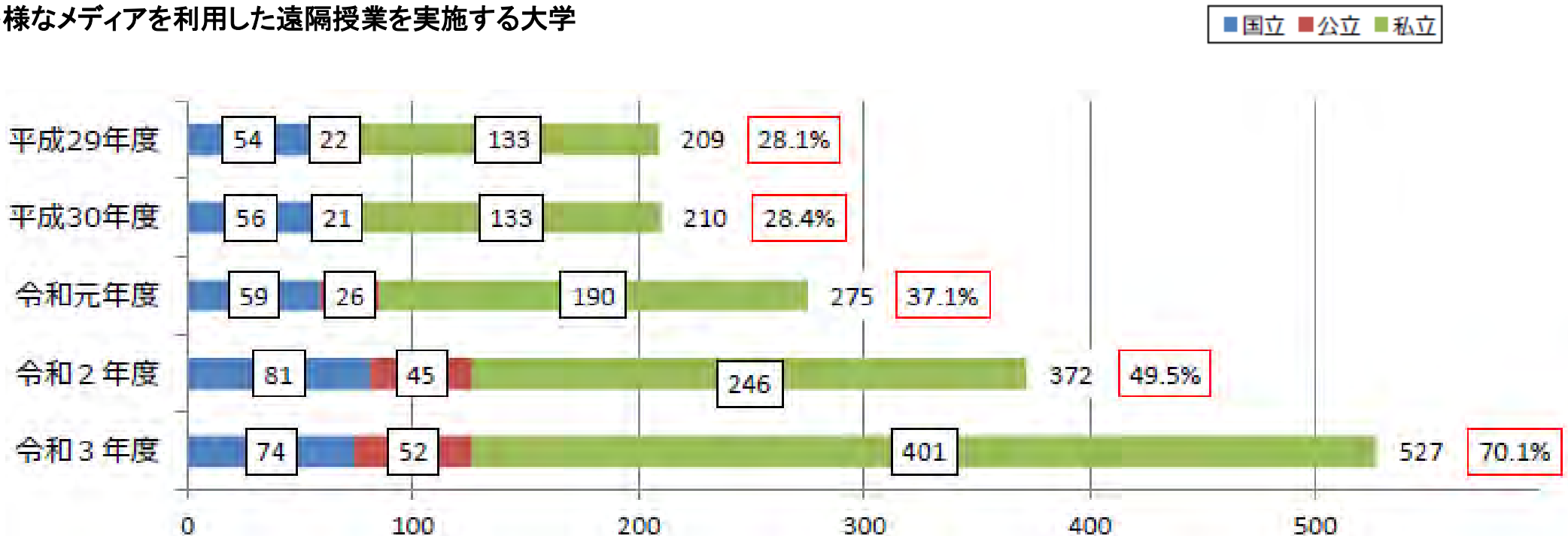
教学マネジメントとして実施している取組



多様なメディアを利用した遠隔授業の実施状況

多様なメディアを利用した遠隔授業を実施する大学は増加傾向。

多様なメディアを利用した遠隔授業を実施する大学



(※)大学院のみを設置する大学は母数に含めない。

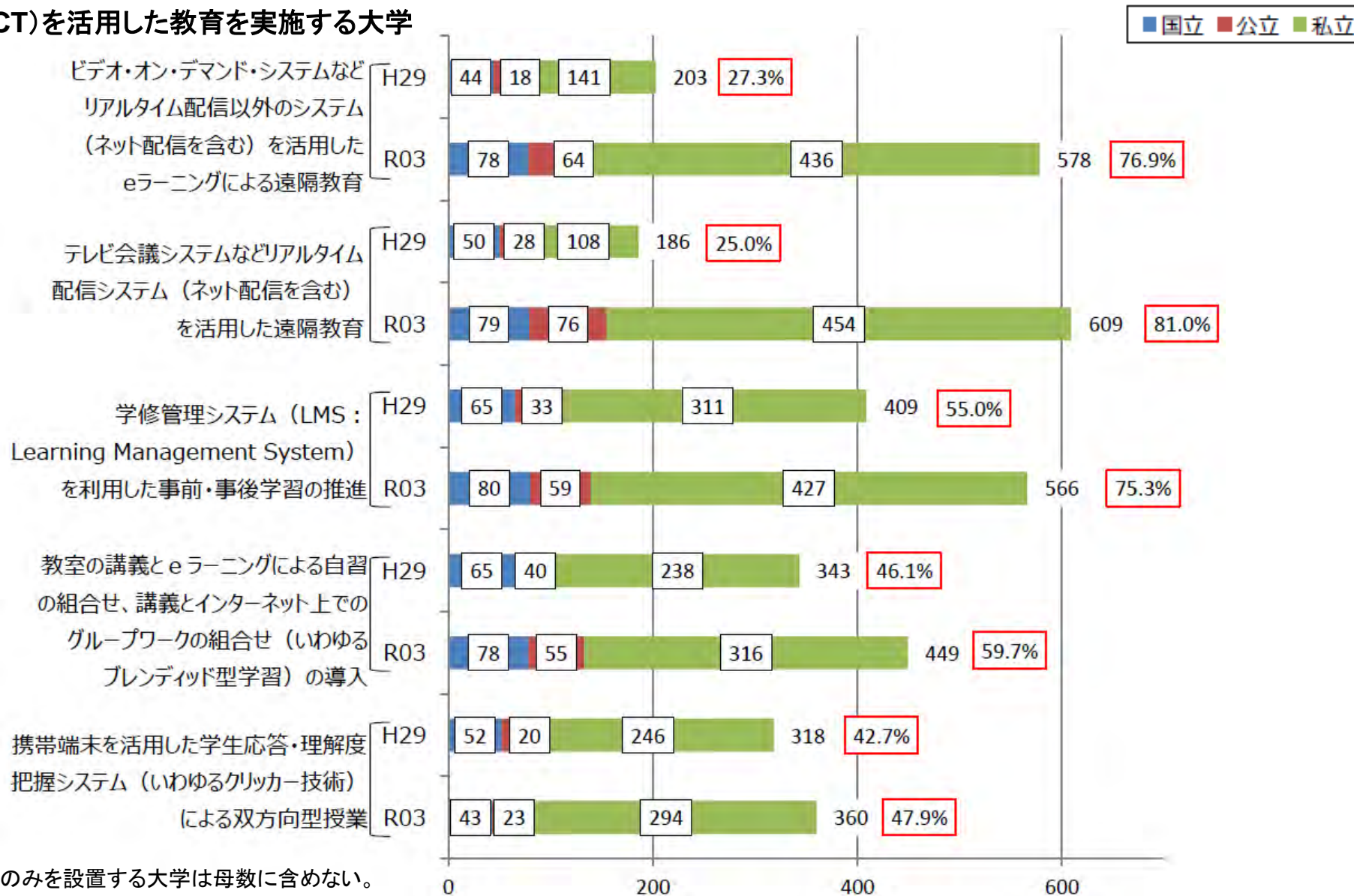
多様なメディアを利用した遠隔授業：

ここでは、大学設置基準第25条第2項に定める、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させる授業科目を指す。

情報通信技術(ICT)を活用した教育の実施状況

情報通信技術 (ICT) を活用した教育を実施する大学は増加傾向。

情報通信技術 (ICT) を活用した教育を実施する大学



(※) 大学院のみを設置する大学は母数に含めない。

学修管理システム (LMS: Learning Management System) :

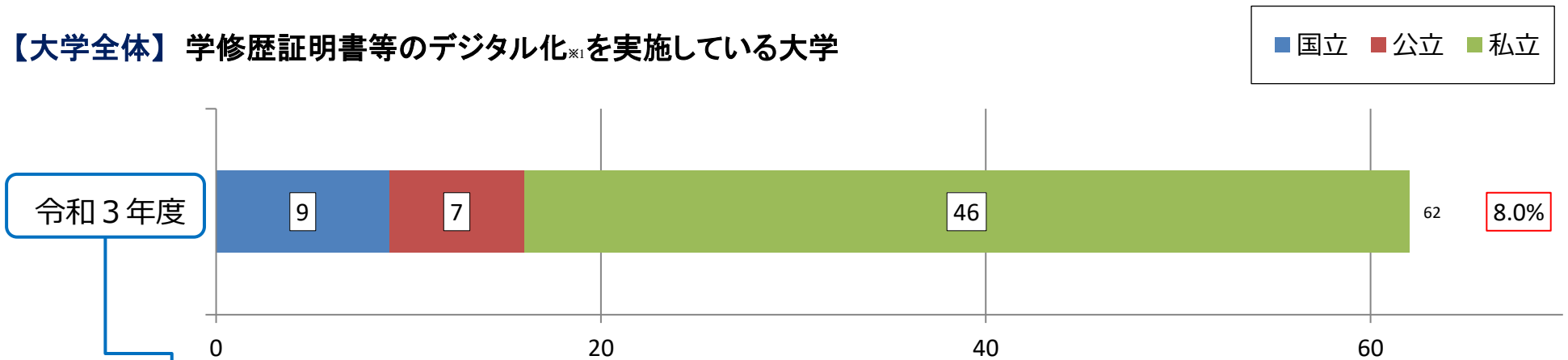
eラーニングの運用を管理するためのシステムのこと。学習者の登録や教材の配布、学習の履歴や成績及び進捗状況の管理、統計分析、学習者との連絡等の機能がある。

出典：文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について (令和3年度)」

学修歴証明書のデジタル化の実施状況

大学全体において、学修歴証明書等のデジタル化を実施している大学は62大学（8.0%）。

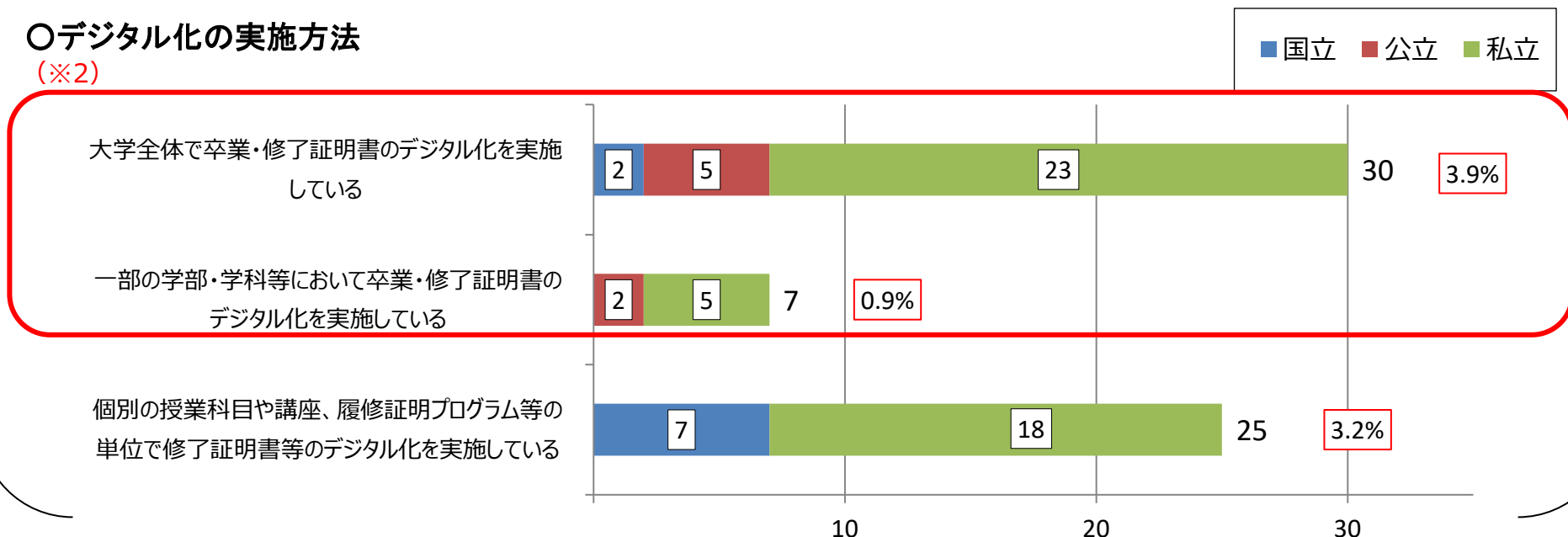
【大学全体】学修歴証明書等のデジタル化^{※1}を実施している大学



(※1) 学修歴証明書のデジタル化とは、各種証明書等（卒業・修了証明書、成績証明書、各授業科目・講座等の履修証明書等）について、インターネット（オープン・バッジの利活用を含む。）等を利用して発行および保管・共有できるようデジタル形式に変換することをいう。

○デジタル化の実施方法

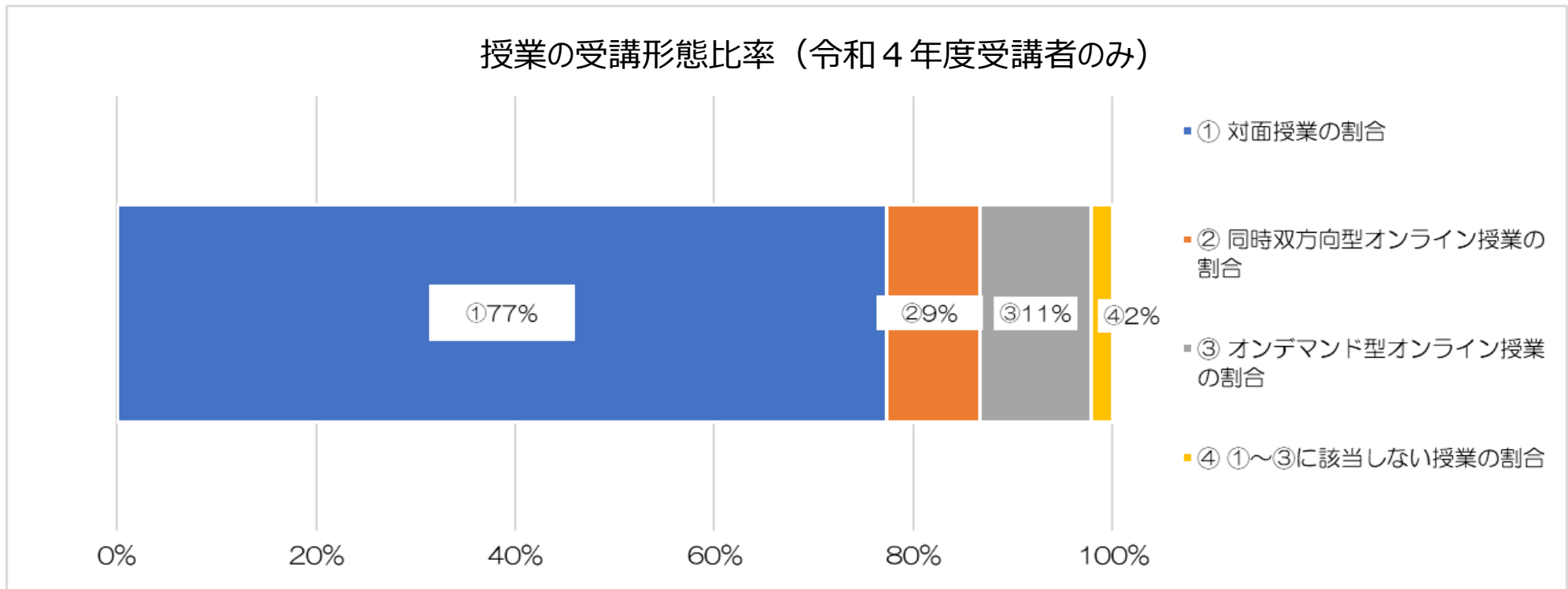
(※2)



(※2) 回答には、本調査で定義する「学修歴証明書のデジタル化」に該当しないコンビニ発行やメール送付も含まれている可能性がある。

授業の受講形態の割合(令和4年度)

大学の授業の受講形態について、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度、令和3年度においては同時双方向型オンライン授業やオンデマンド型オンライン授業を受けている学生が多かったことが明らかになってきたが、令和4年度は、対面授業が77%を占めるなど、対面授業中心で大学の授業が行われた。



※上記受講比率は、学生に各授業形態の割合について0～10割で回答を求め、その平均値を集計したものである。

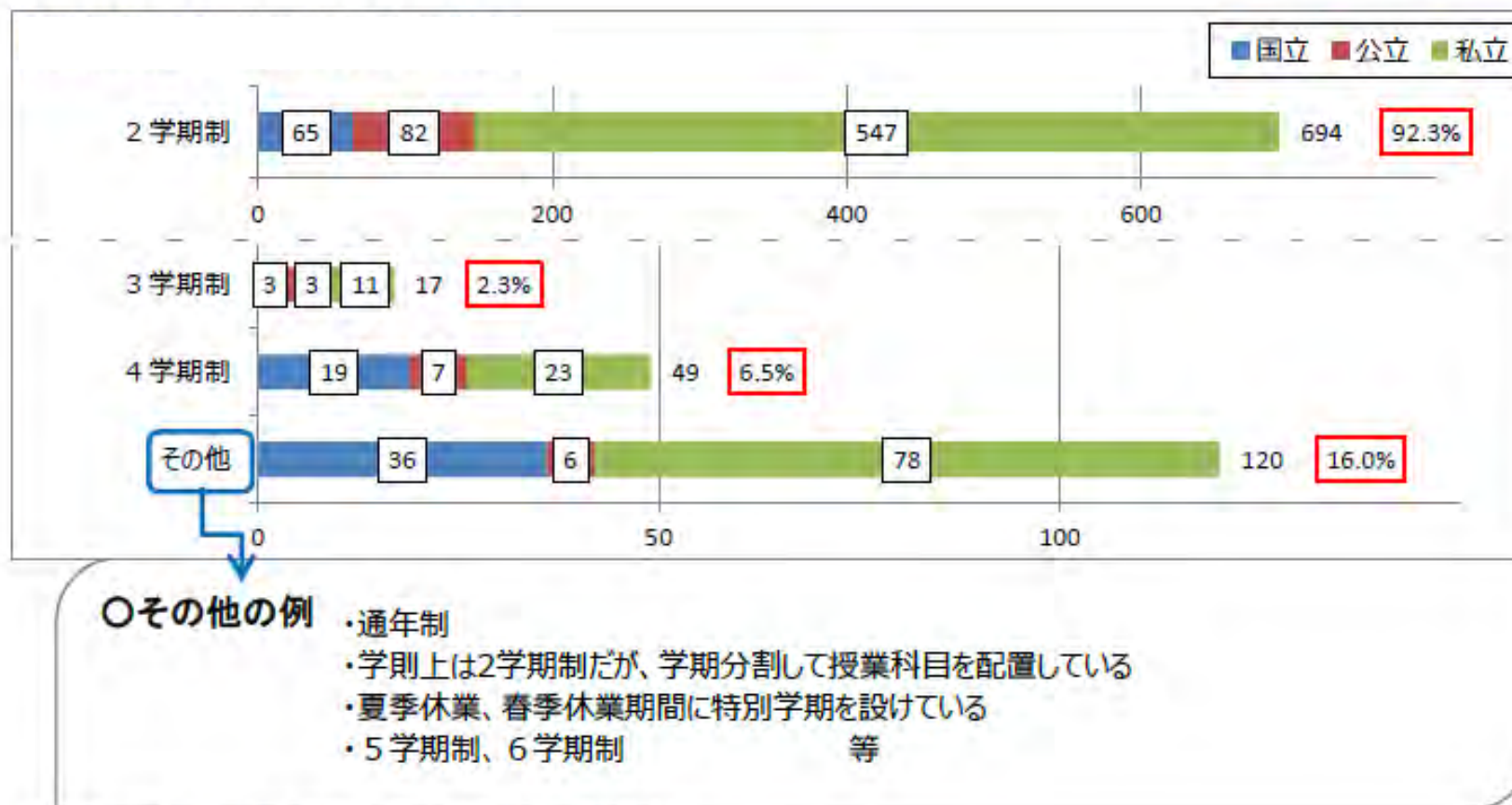
※対面授業の割合が10割と回答した学生は、対面授業の割合に回答した者のうち36%であった。

出典：文部科学省 「令和4年度全国学生調査（第3回試行実施）」

学期制の採用状況

ほとんどの大学では2学期制を採用しており、3学期制は少数。一部の大学では学期を分割して、事実上のクォーター制を導入している大学もある。

学期制の採用状況

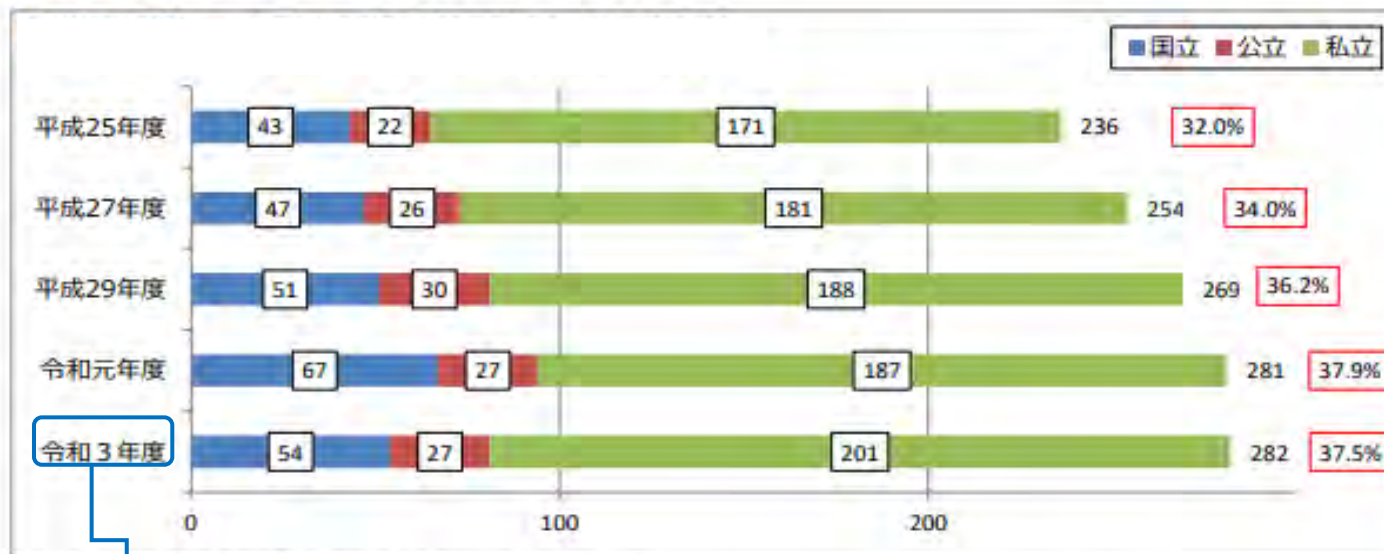


(※)大学院のみを設置する大学は母数に含めない。

大学における主専攻以外の分野を履修させるための取組状況

専攻分野以外の分野の授業科目を体系的に履修させる「主専攻・副専攻制」を導入している大学は、令和3年度現在、学部段階では282大学（約38%）、その内、全ての学生に履修を義務付けしている大学は60大学（約8%）となっている。

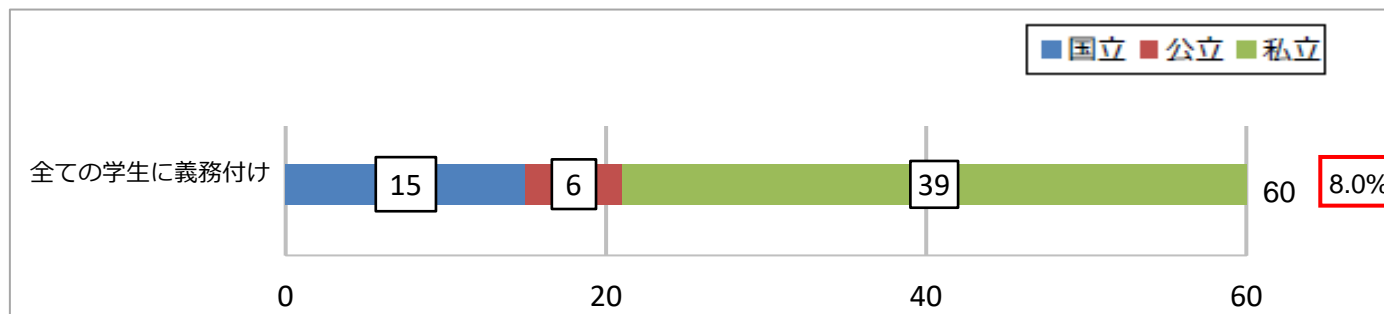
主専攻・副専攻制を導入している大学



(※)大学院のみを設置する大学は母数に含めない。

(※)調査項目を隔年にしたため平成26年度、平成28年度、平成30年度、令和2年度は調査をしていない。

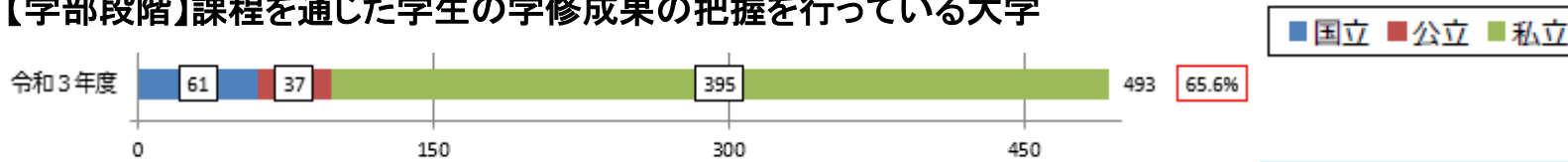
○義務付けの状況



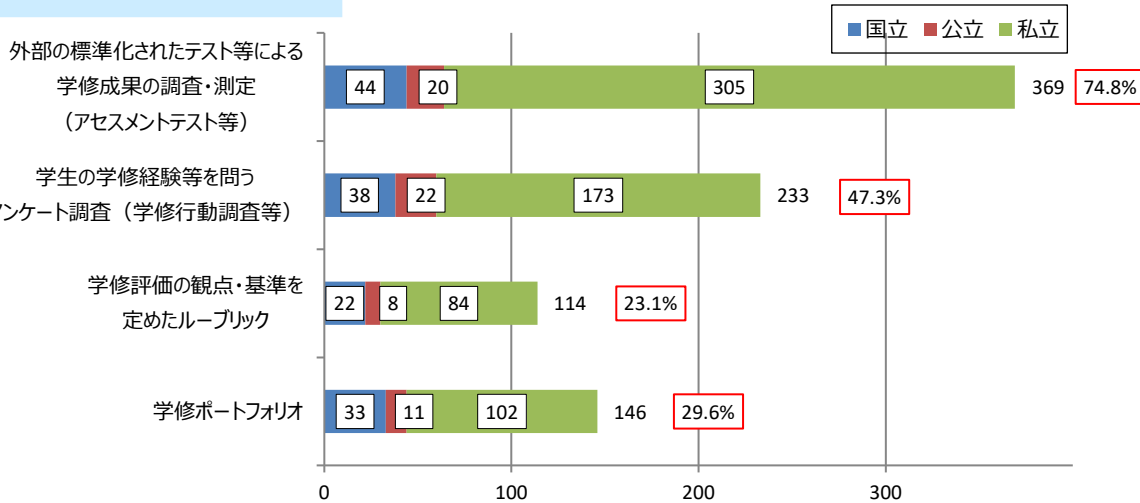
学生の学修成果の把握状況

課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている大学は493校（全体の65.6%）であり、把握方法としては「外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定（アセスメントテスト等）」が最も多い。学修成果として調査・測定を行っている事項としては、「汎用的能力」「態度・志向性」「知識・理解」の順に多くなっている。学修成果に関する情報の活用方法としては、「教育課程や教育方法の改善」が最も多い。

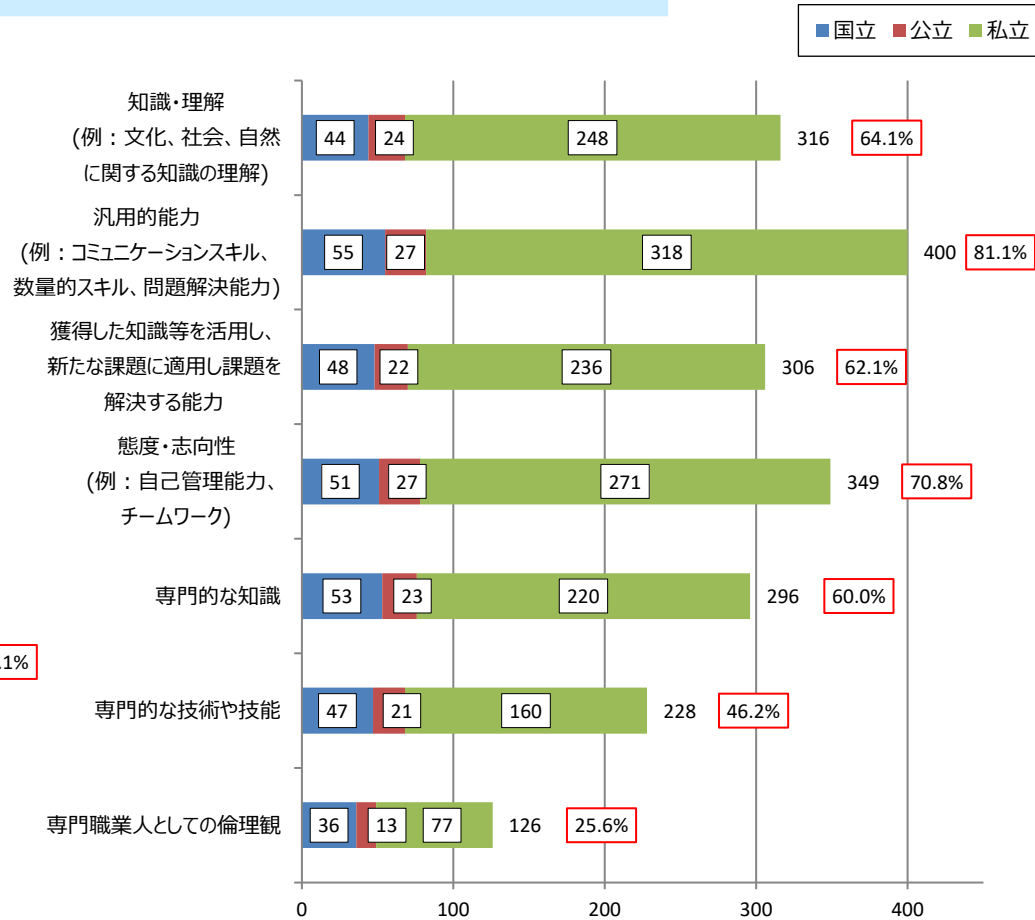
【学部段階】課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている大学



学修成果の把握方法



学修成果として調査・測定を行っている事項



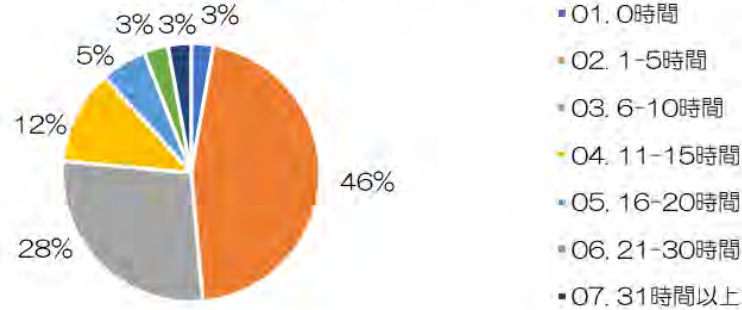
学修成果に関する情報の活用方法



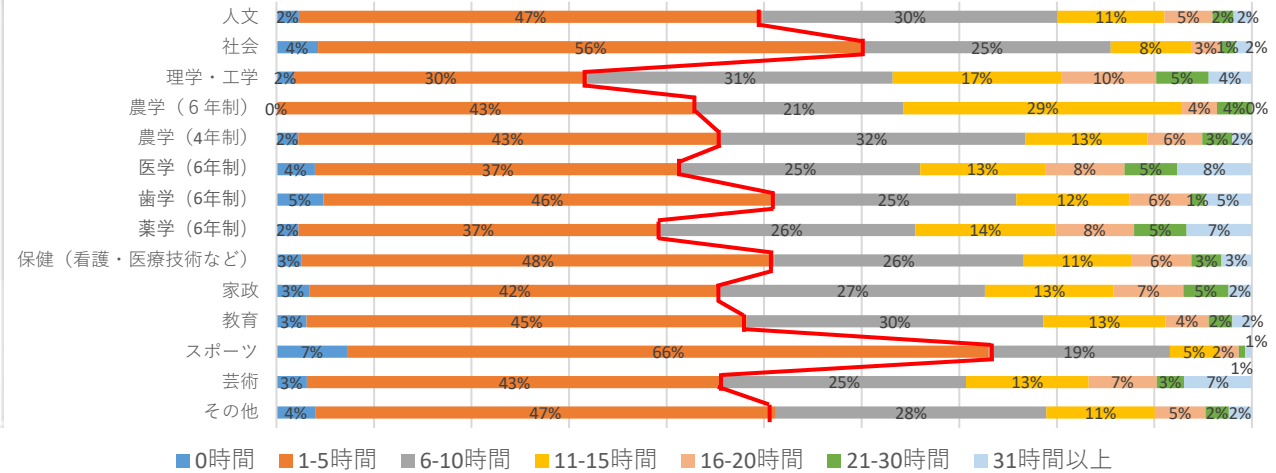
学生の分野別学修時間

- 学部2年生は、予習・復習等の授業に関する学習は5時間以下が49%であり、授業に関する学習時間が短いことは課題である。
- 分野別の状況では、5時間以下の割合で見ると社会（60%）等が高い水準。

予習・復習・課題など授業に関する学習（卒業論文等は除く）

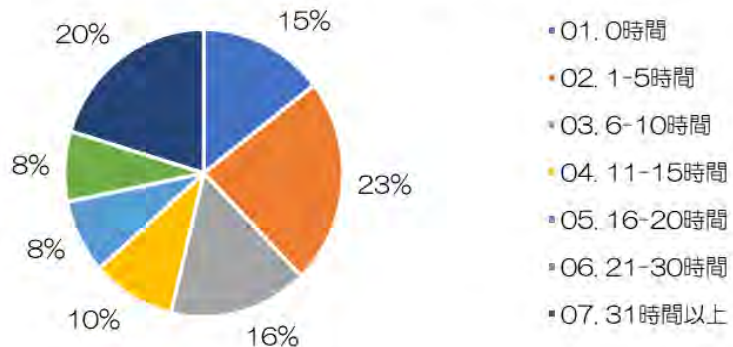


予習・復習・課題など授業に関する学習（2年生）

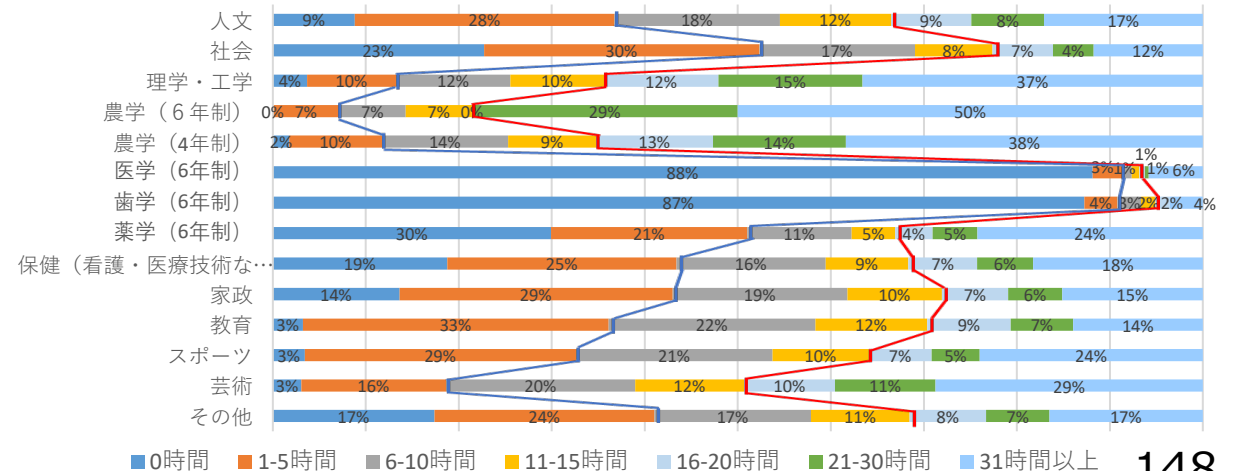


- 4年生以上の学生の卒業論文等に費やす時間については、16時間以上が36%となる。一方で、卒業論文等に費やす時間が5時間以下となる学生も38%存在する。
- 卒業論文等に16時間以上を費やす割合は農学（6年制）（79%）、農学（65%）、理学・工学（64%）で高く、5時間以下となる割合は医学（6年制）（91%）、歯学（6年制）（91%）で非常に高いほか、社会（53%）、薬学（6年制）（51%）も相当程度の割合に上る。

卒業論文・卒業研究・卒業制作（最終学年生のみ）



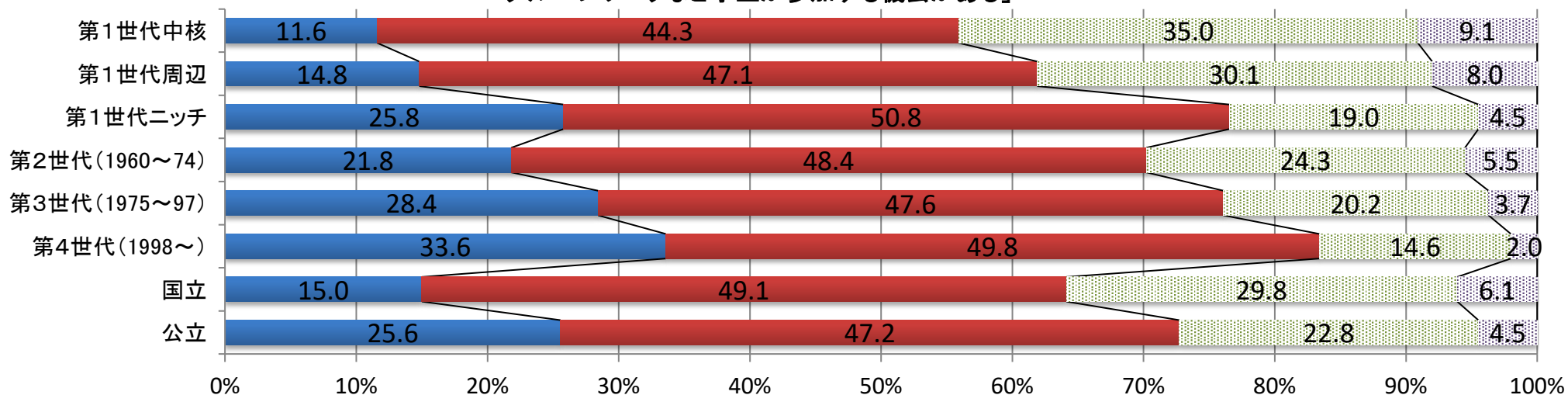
卒業論文・卒業研究・卒業制作



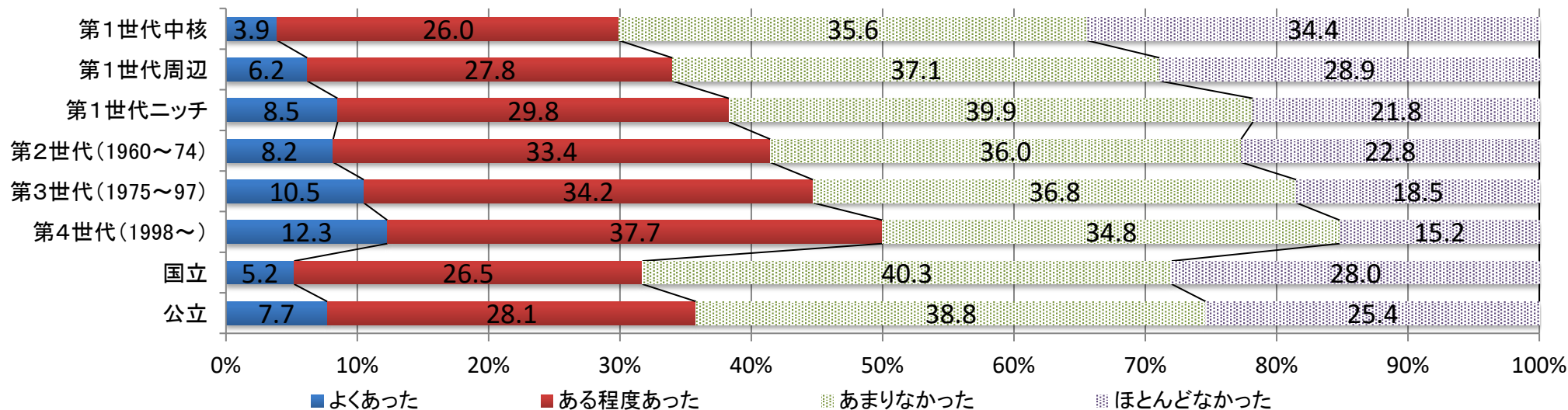
設置年代別・設置者別の授業改善状況

アクティブラーニング、学生・教員間の双方向的コミュニケーションなどの授業改善は、新設大学（私立）の方が進んでいる。

「グループワークなど学生が参加する機会がある」



「適切なコメントが付されて課題などが返却される」



※上記の第1～第4世代の私立大学の分類は、金子元久(1996)「高等教育大衆化の担い手」、『学習社会におけるマス高等教育の構造と機能に関する研究』、放送教育開発センター研究報告91, pp.37-59による。

第1世代: 高等教育の大拡張期までに設立された大学(大学設置年～1959年)。中核大学は大規模で私立大学の中では中核的存在である大学10校。周辺大学は中核大学に含まれない規模が中～大の大学(1992年時点の在学者が4000人以上の大学)。ニッチ大学は特定の需要に対応しながら発展してきた小規模大学(女子大学、医歯薬系・宗教系・芸術系の単科大学)

第2世代: 高等教育大拡張期(1960～74年)に設立された大学。

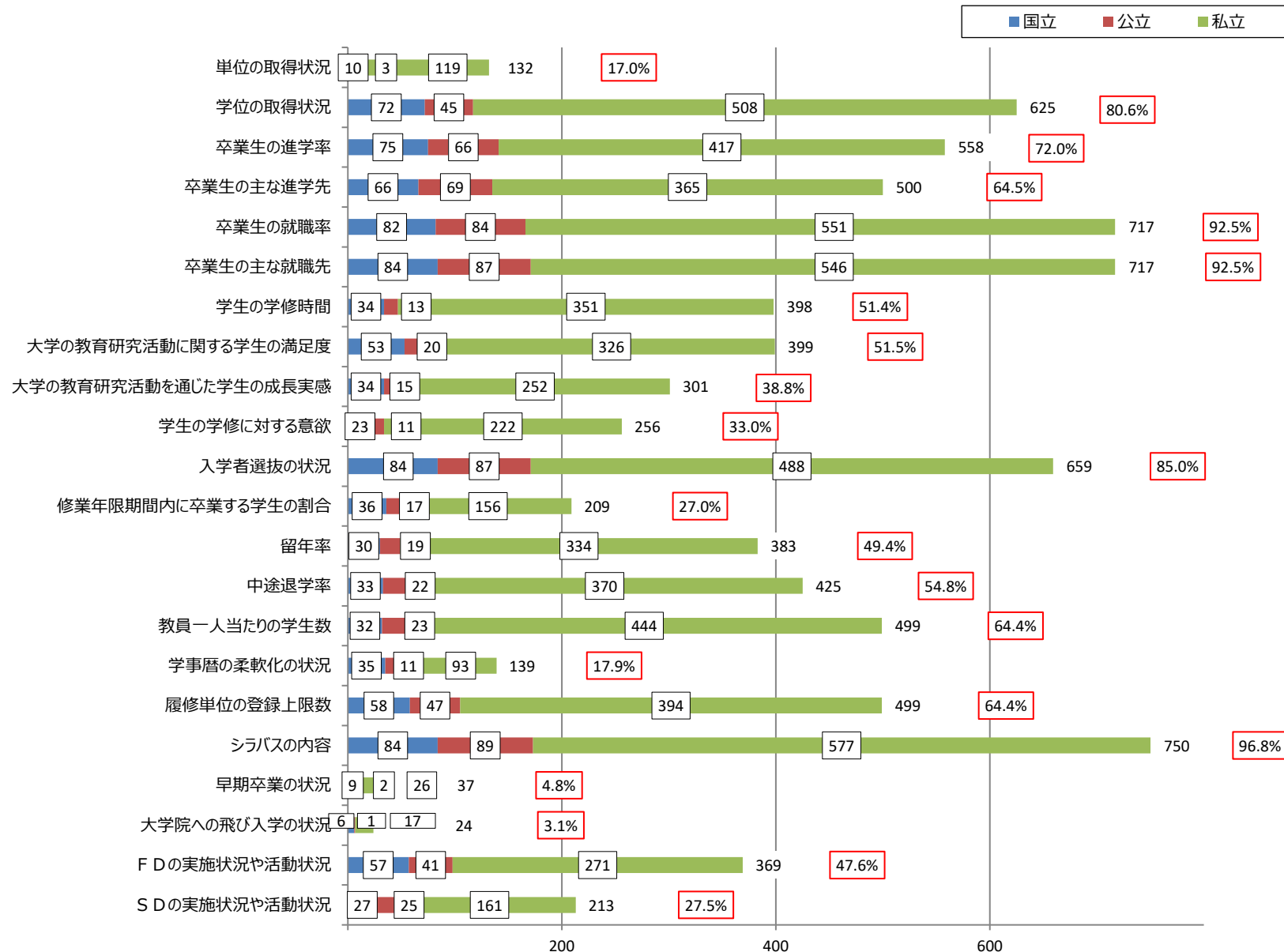
第3世代: 大拡張期以降(1975年～)に設立された大学。

第4世代: 1998年以降に設立された大学。

出典: 国立教育政策研究所 平成30年度「大学生等の学習状況に関する調査」より濱中義隆氏作成

情報公表に関する取組状況

全ての大学において一定の情報公表が行われているが、法令において公表が義務付けられている項目以外、特に、「教学マネジメント指針」において社会から公表が強く求められると整理された情報項目（学生の学修時間、満足度、成長実感、学修に対する意欲、修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率、教員一人当たりの学生数、学事暦の柔軟化状況など）は、十分ではない状況。



大学通信教育

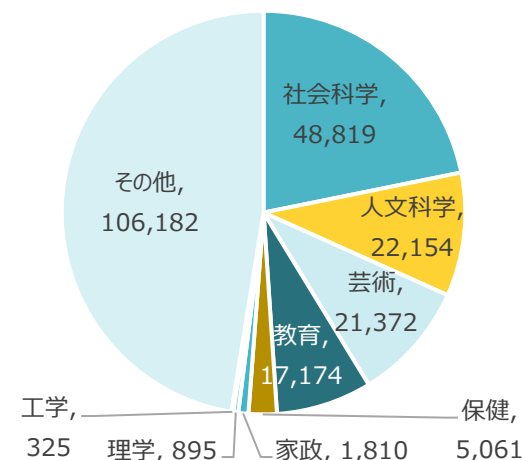
大学通信教育の現状

- 通信課程の学生数は、学部184,499人、大学院3,713人（修士2,824人、博士247人、専門職642人）、短大19,017人。
- 通信制大学（学部）は、幅広い年齢層と約半数の有職者の学生で構成されている。

■ 通信教育を行う大学数・通信課程の学生数

	学部	大学院			短期大学
		修士	博士	専門職	
通信教育を行う大学数（延べ数。R4）	45	25	11	2	11
通信課程の学生数（R5,人）※正規課程	184,499	2,824	247	642	19,017
うち放送大学学園	60,931	726	78	-	-
通信課程の卒業生数（R4年度間、人）	19,320	835	28	169	6,760

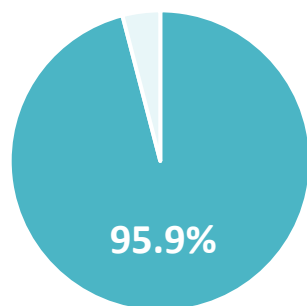
■ 通信教育学部学生数（関係学科別）



■ 通信制大学における学生の特色

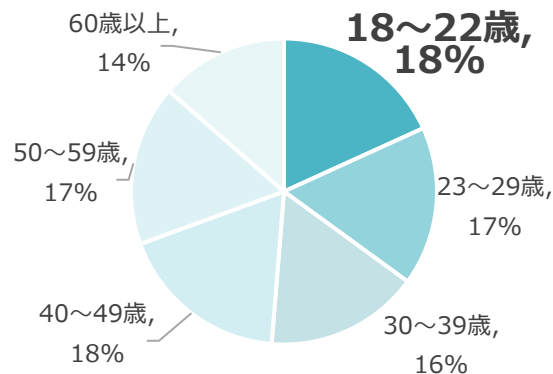
【通学制大学】

—10代入学者割合—

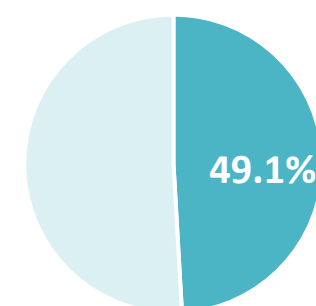


【通信制大学（学部）】

—年齢別学生割合—



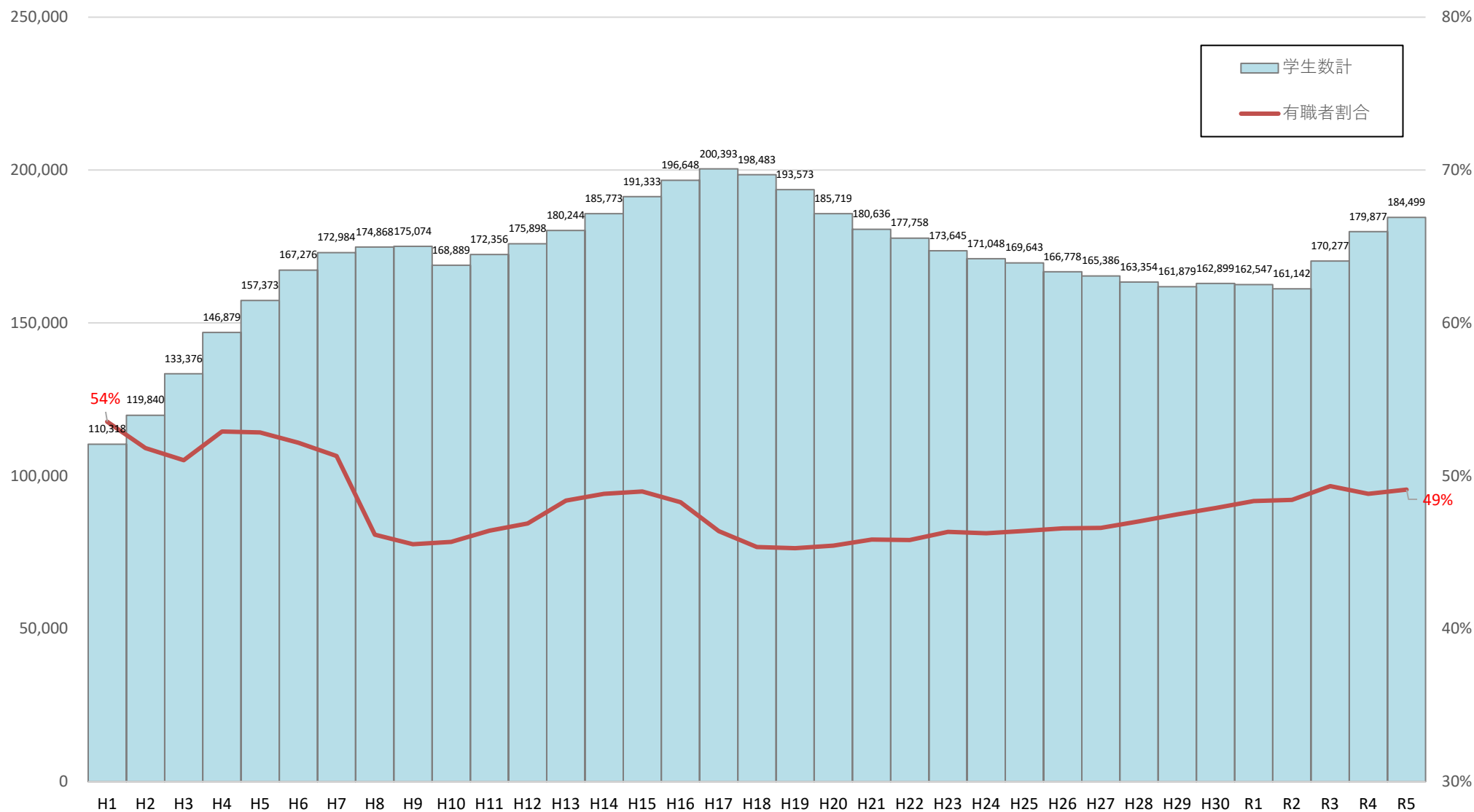
—学生の有職者割合—



※通信教育を行う大学数については令和4年度全国大学一覧、短期大学一覧より作成（新規募集停止となっている大学を含む）。その他については、令和5年度学校基本調査により作成（正規課程の学生のみ）。

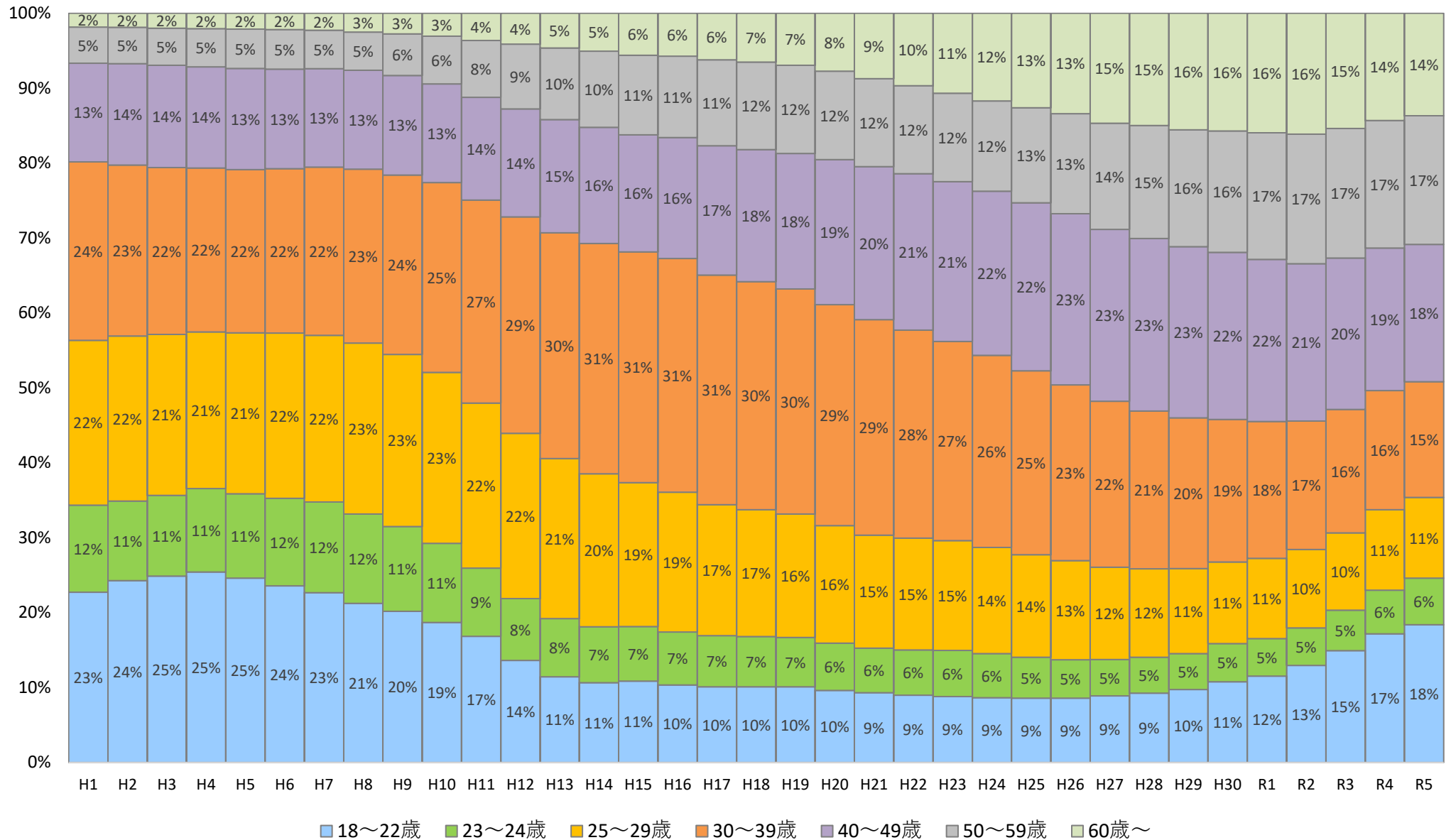
通信制大学(学部)の学生数及び有職者割合の推移

- 通信制大学（学部）の学生数は、平成17年をピークに減少していたが、近年は増加傾向となっている。
- 有職者の割合は、概ね50%程度で推移している。



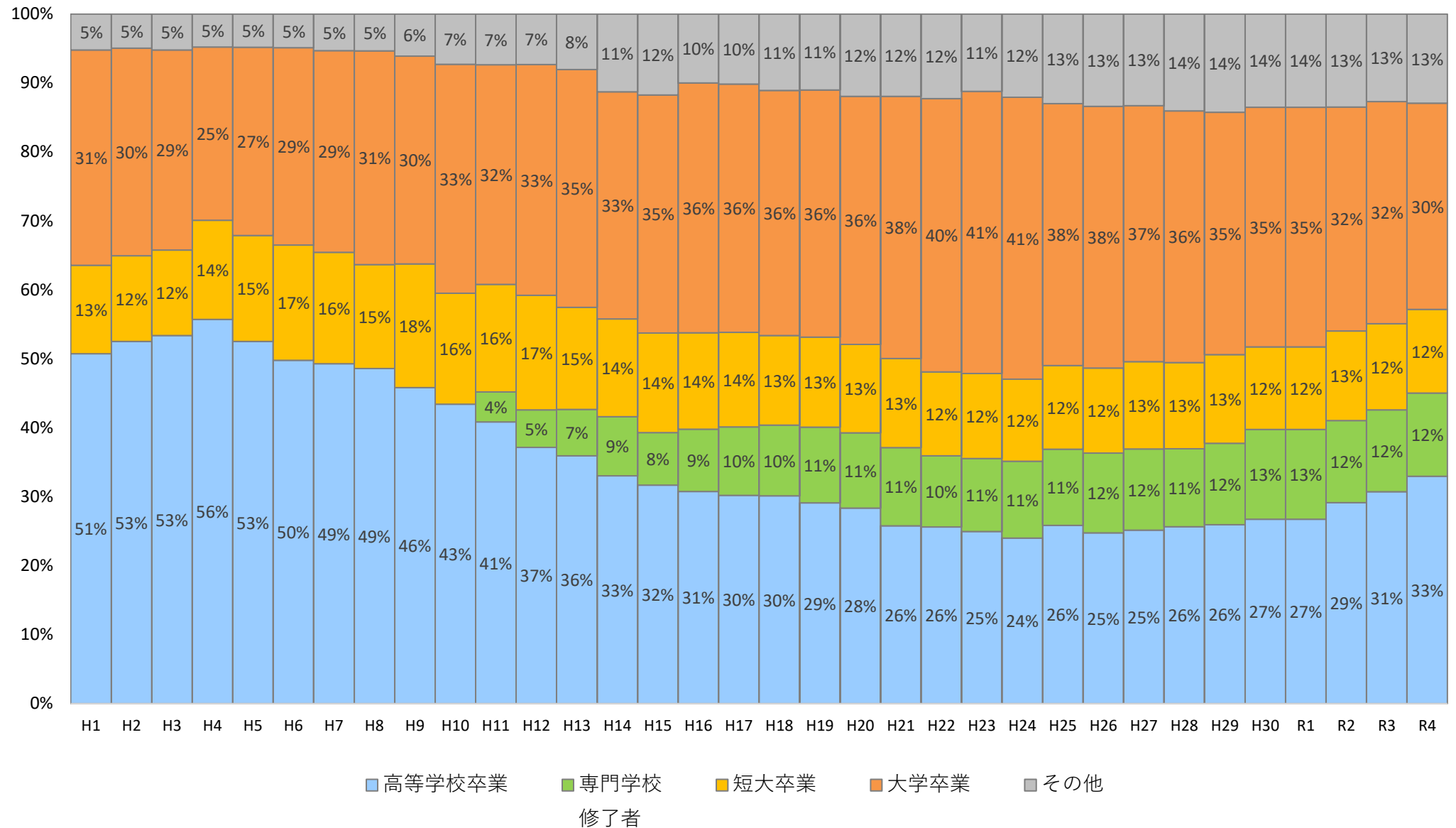
通信制大学(学部)の年齢別学生数の推移

- 通信制大学(学部)の学生の年齢層について、平成初期と比べ、23歳～39歳の学生の割合が減少する一方で、50歳以上の学生の割合が増加した。
- 近年では、18～22歳の年齢層の割合が増加傾向。



通信制大学(学部)入学者の最終学歴の変遷

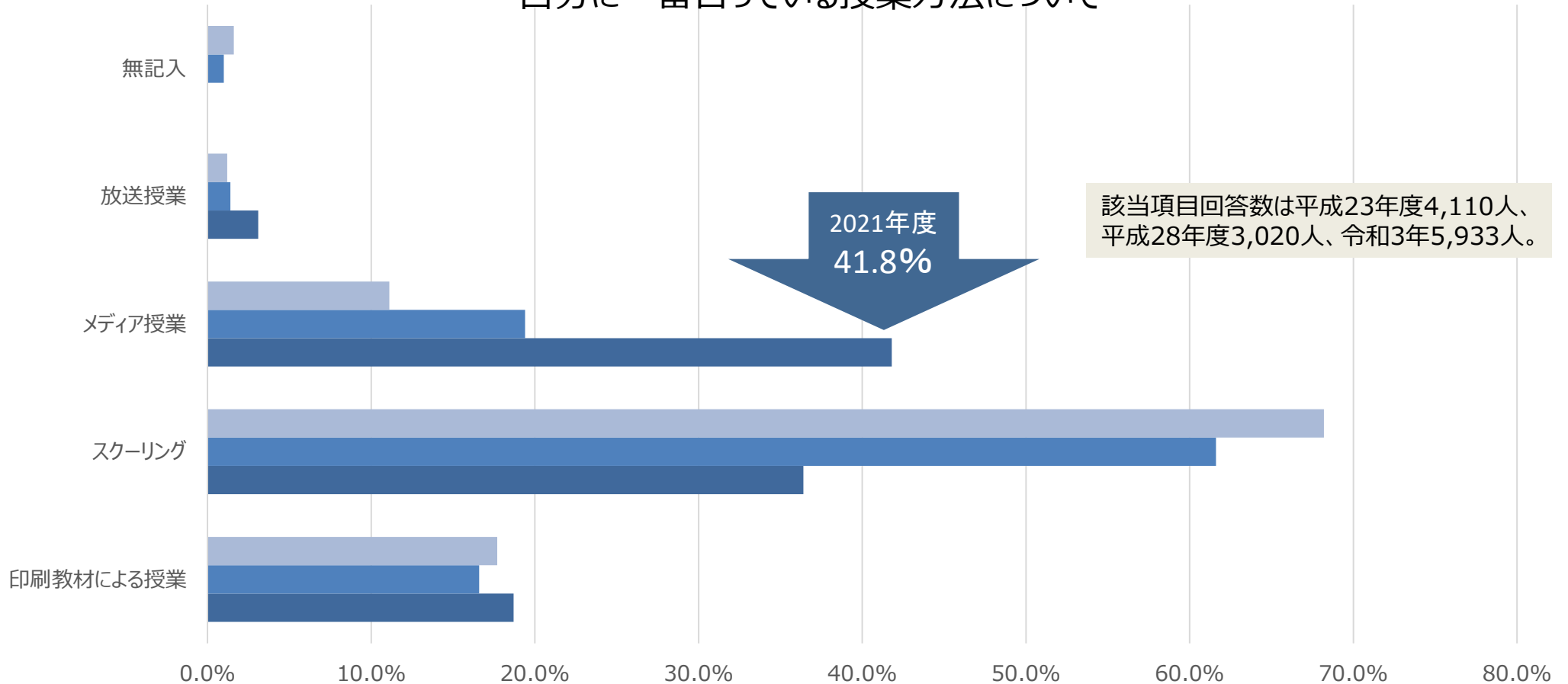
- 通信制大学(学部)入学者の最終学歴は、平成4年以降「高等学校卒業」の割合が減少し、「大学卒業」や「専門学校修了者」の割合が増加してきた。
- 近年では、「高等学校卒業」の割合が増加に転じている。



大学通信教育における授業方式

大学通信教育の4つの授業方式のうち、学生から評価の高いものは、面接授業（スクーリング）であったが、コロナ禍を経て、2021(令和3)年度調査では、遠隔授業（メディア授業）が最上位となった。

自分に一番合っている授業方法について



	印刷教材による授業	スクーリング	メディア授業	放送授業	無記入
■平成23年度	17.7%	68.2%	11.1%	1.2%	1.6%
■平成28年度	16.6%	61.6%	19.4%	1.4%	1.0%
■令和3年度	18.7%	36.4%	41.8%	3.1%	0.0%

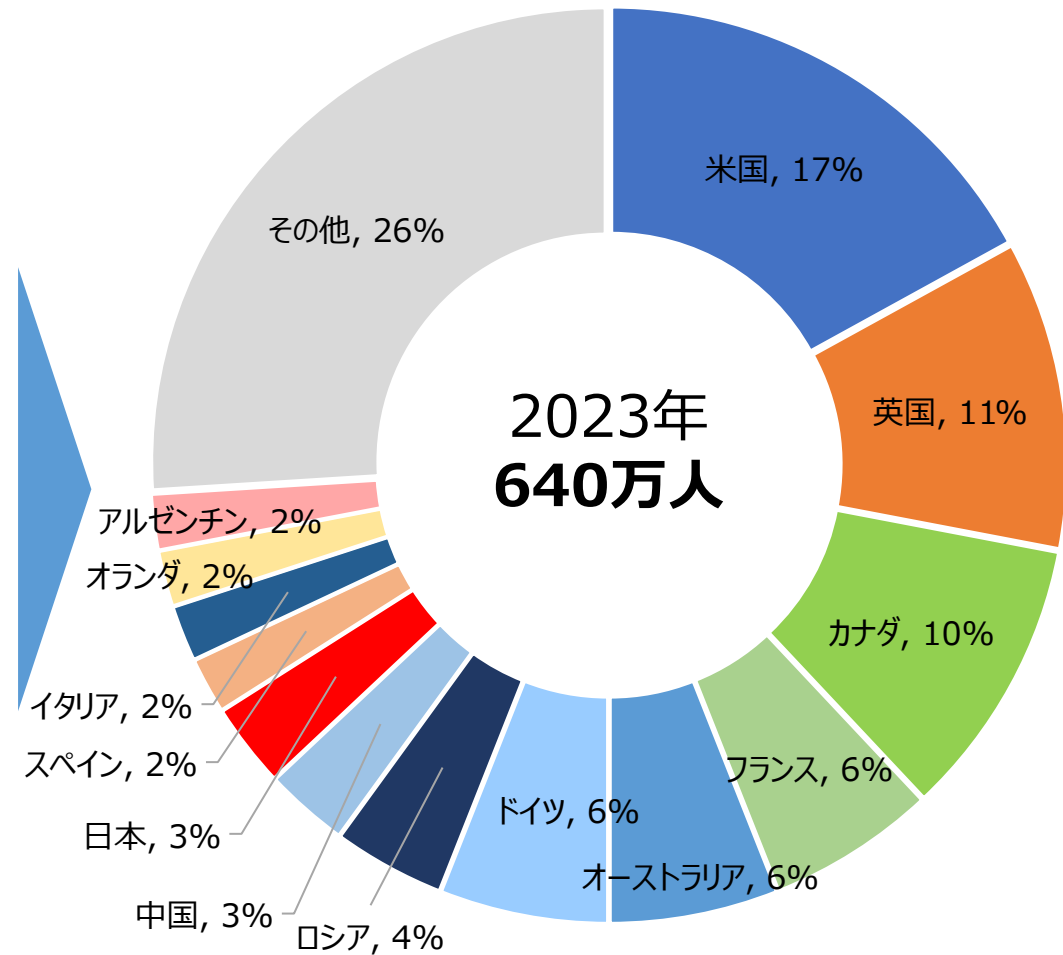
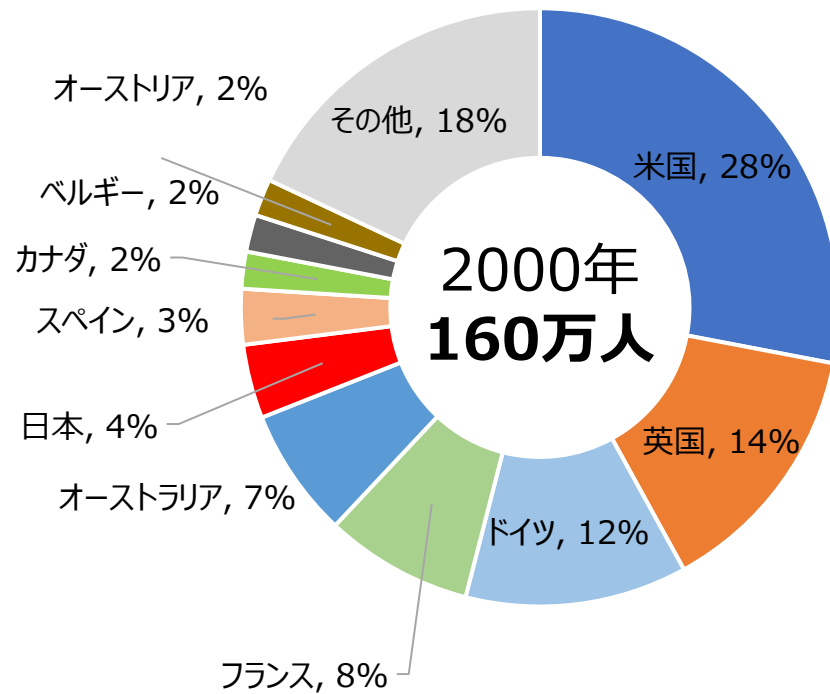
■平成23年度 ■平成28年度 ■令和3年度

私立大学通信教育協会「学生生活実態調査」

留学生交流

世界の留学生数と各国シェア(受入れ)

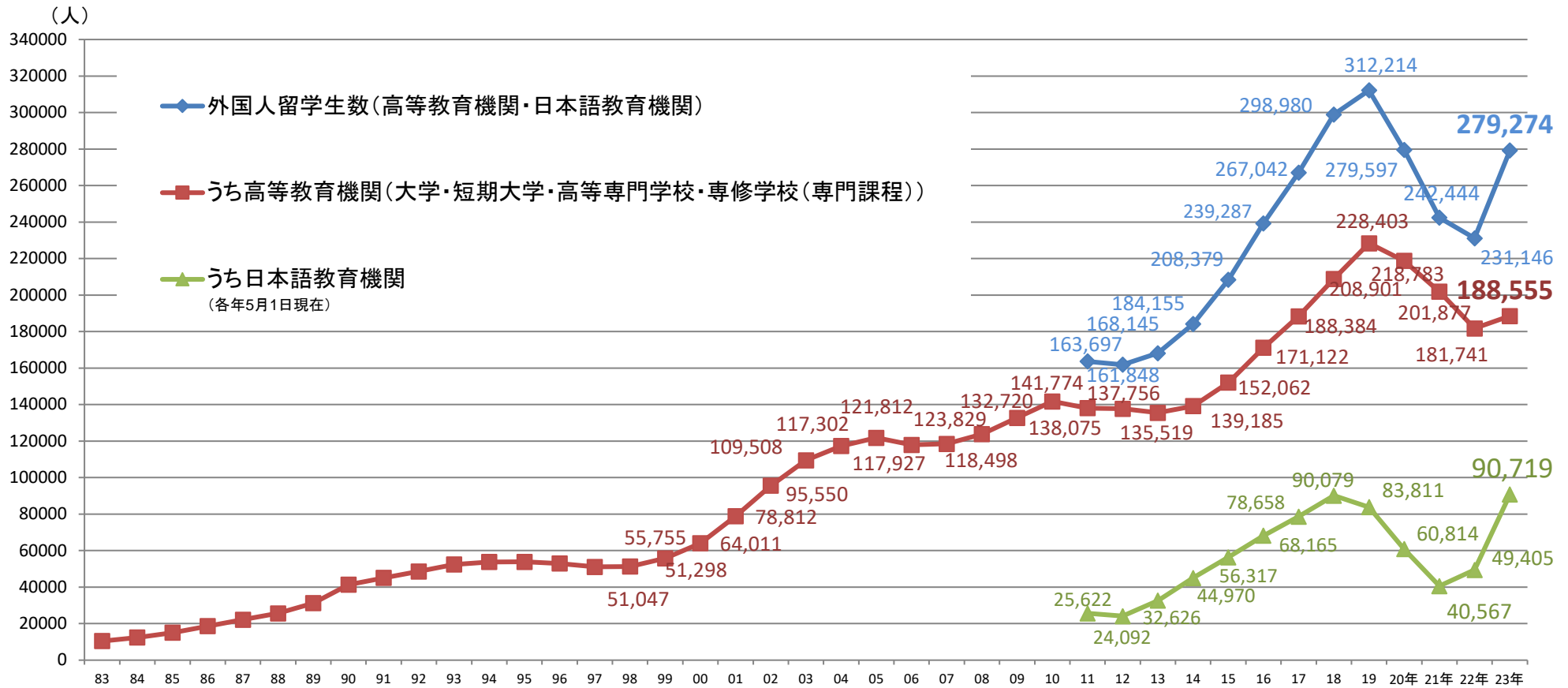
- 世界の留学生数は2023年は640万人と、2000年の約4倍にまで増加。
- 受入れ国別に見ると、欧米先進諸国が占める割合が大きく、日本はほぼ変わらない一方、一部の国では2000年と比べて大きく伸長している。



外国人留学生数の推移

- 外国人留学生数は新型コロナウイルス感染症の影響により減少していたが、留学生総数はコロナ禍以降初めて増加。
- 出身国・地域は多い順に中国、ネパール、ベトナムとなっており、アジアや東南アジアからの留学生が多い。

推移



出身国・地域別

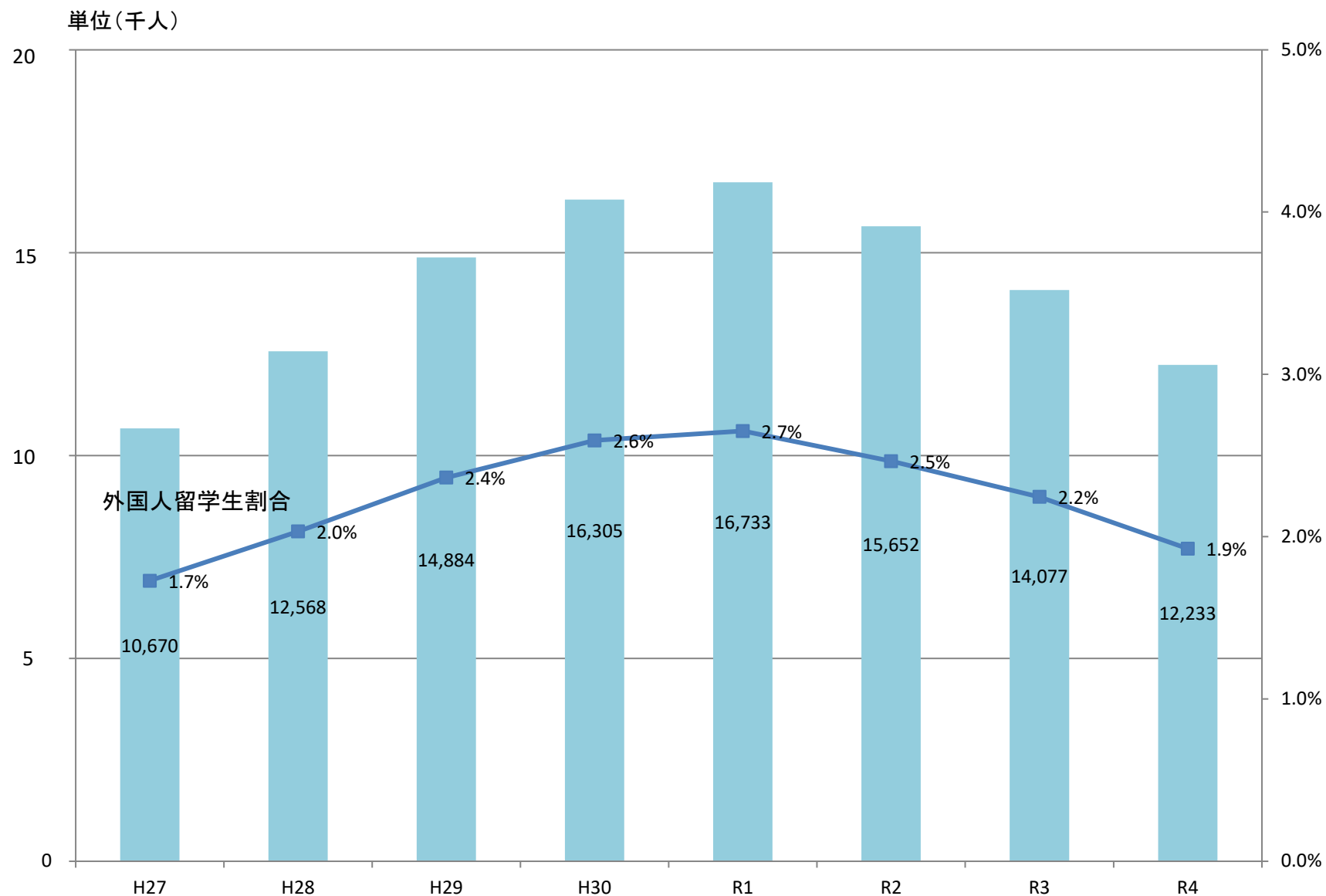
国・地域名	留学生数(前年数)	対前年増減	国・地域名	留学生数(前年数)	対前年増減
中国	115,493(103,882)	11,611	スリランカ	6,819(3,857)	2,962
ネパール	37,878(24,257)	13,621	ミャンマー	6,552(5,763)	789
ベトナム	36,339(37,405)	△1,066	バングラデシュ	5,326(3,313)	2,013
韓国	14,946(13,701)	1,245	タイ	4,076(1,655)	2,421
インドネシア	7,773(3,813)	3,958	その他	37,074(28,485)	8,589
台湾	6,998(5,015)	1,983	合計	279,274(231,146)	48,128

(出典)独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」

2023年5月1日現在

外国人留学生入学者の動向(学部・通学制)

外国人留学生学部入学者は、令和元年度から新型コロナウイルス感染症の影響により減少傾向となっている。



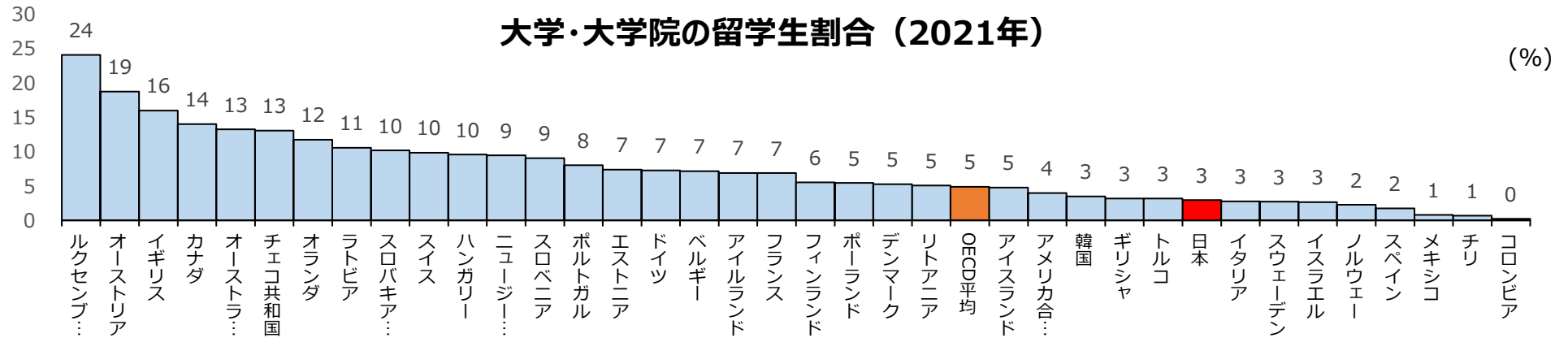
出典:学校基本統計(在留資格「留学」を有する者をカウントしている)

大学、大学院における留学生割合

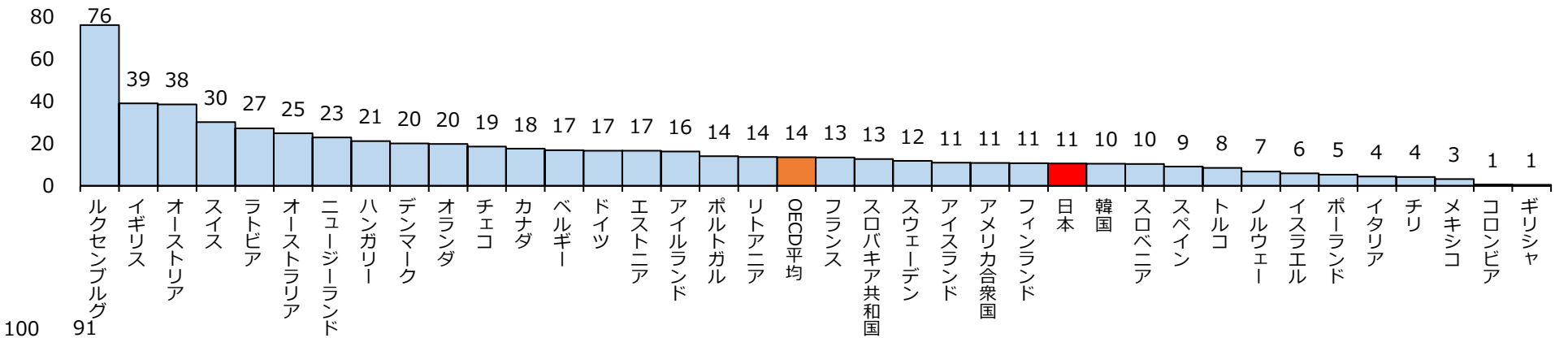
- 学士課程において留学生が占める割合は、OECD平均が5%であるのに対して、日本は3%にとどまる。
- 修士課程については、OECD平均が14%であるのに対して、日本は11%。
- 博士課程については、OECD平均が24%であるのに対して、日本は22%。

大学・大学院の留学生割合（2021年）

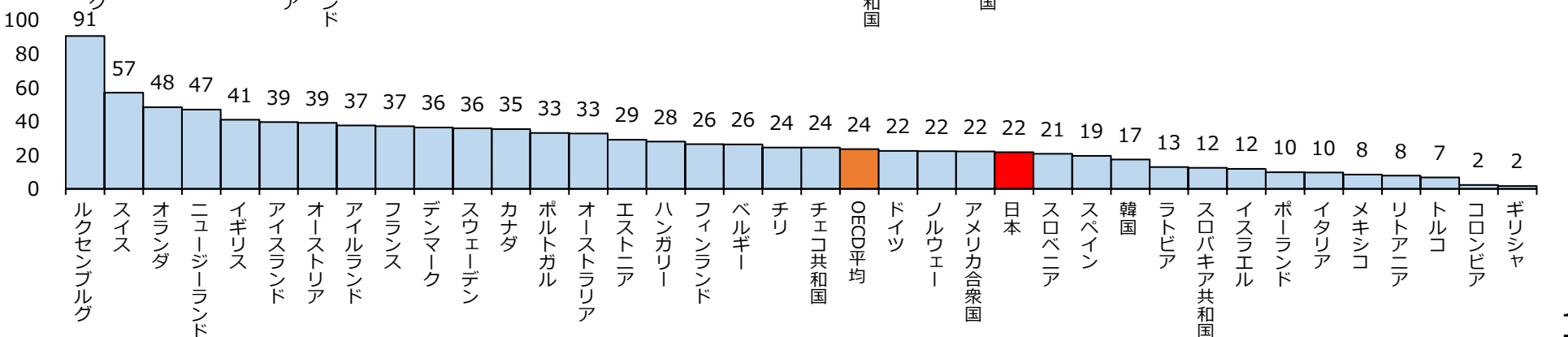
大学学部



修士課程



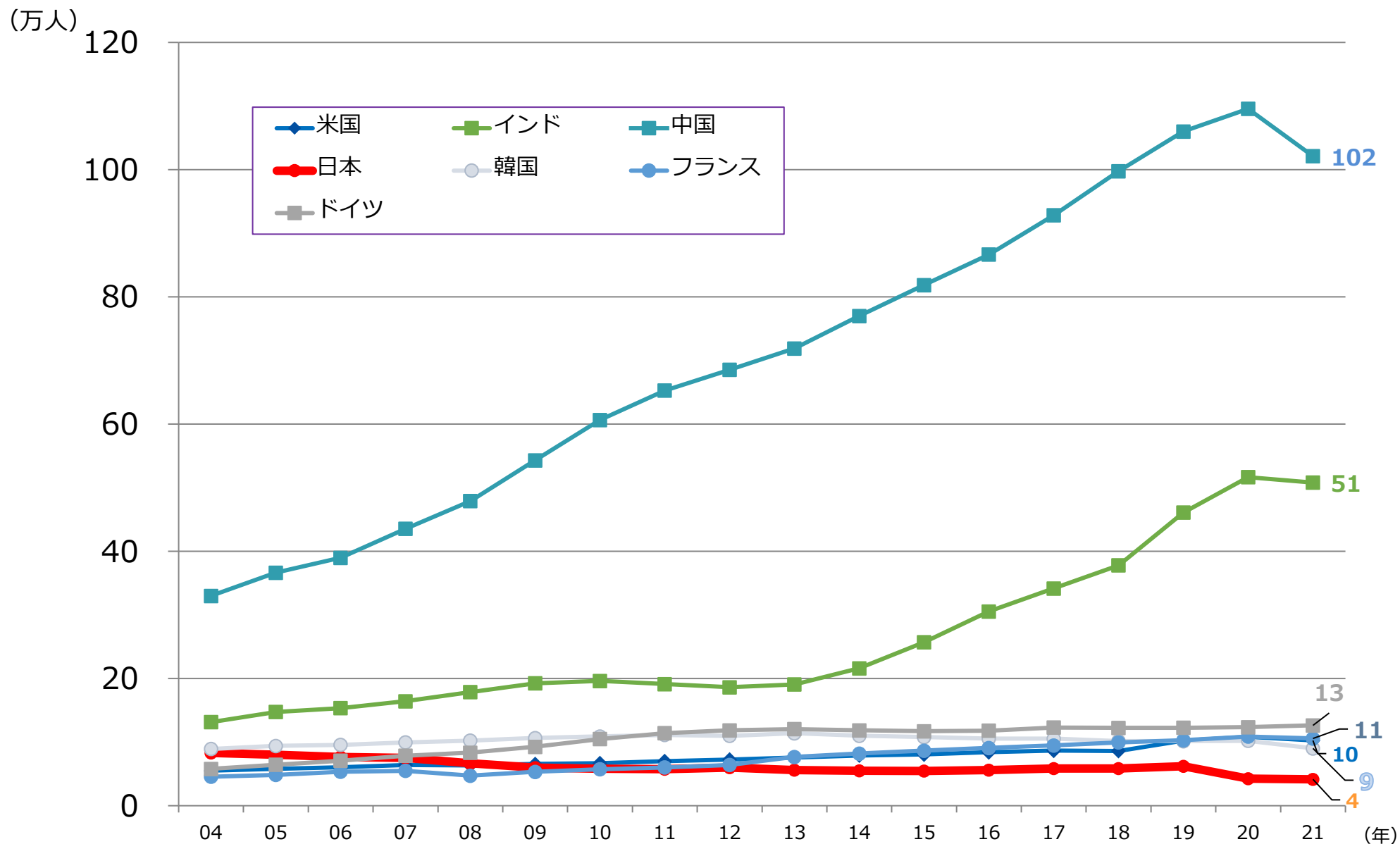
博士課程



(出所) OECD. stat「Share of international students among all students」より作成。

諸外国における海外留学の状況(長期留学)

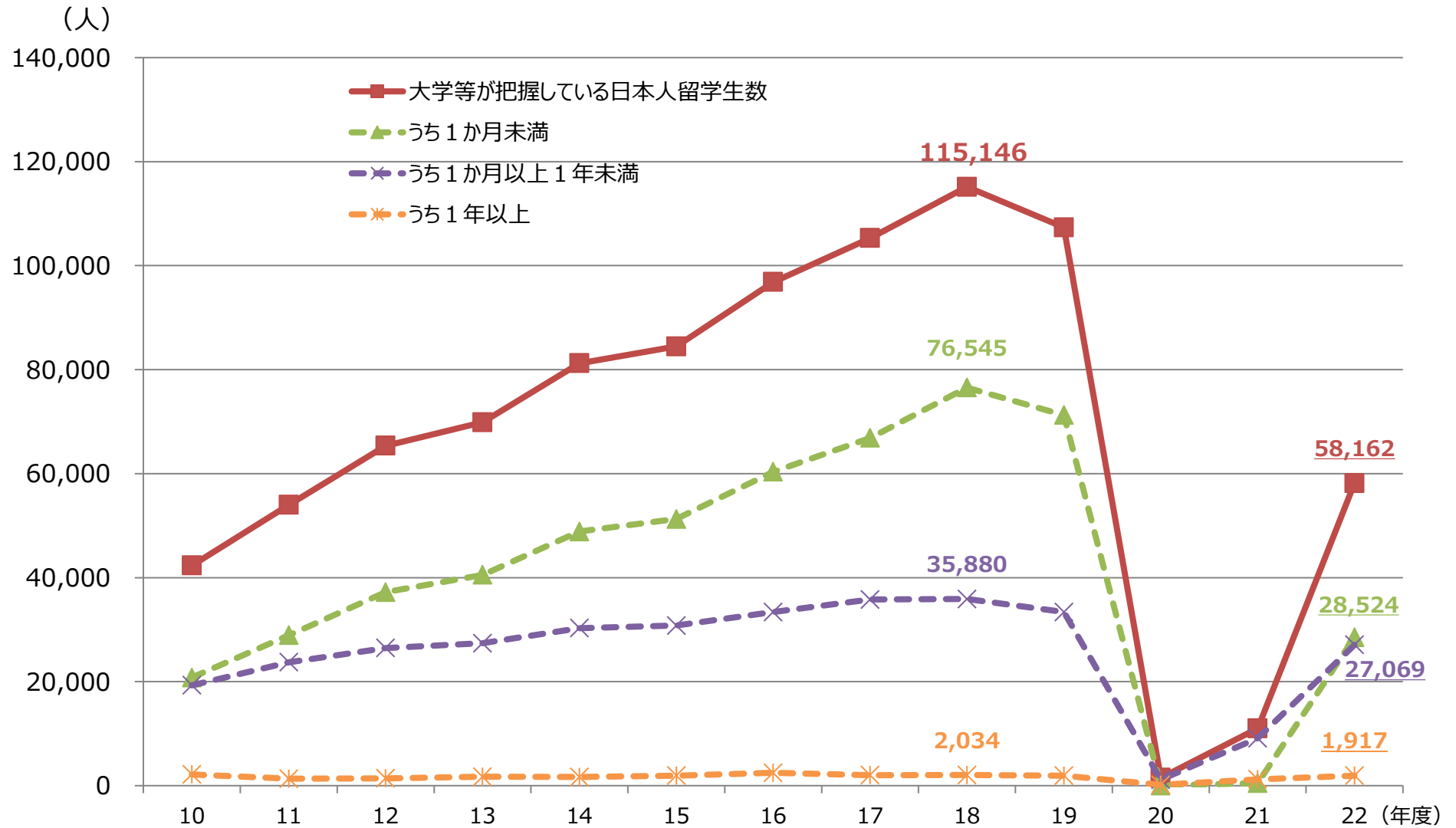
諸外国における海外留学者数は、特に中国・インドが伸長する一方で、日本は近年横ばい傾向であったが、2021年には4万人程度となっている。



(出所) 日本：令和6年5月24日文部科学省報道発表「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について、その他の国：ユネスコ統計局、より作成。

日本人留学生の推移(主に中短期留学)

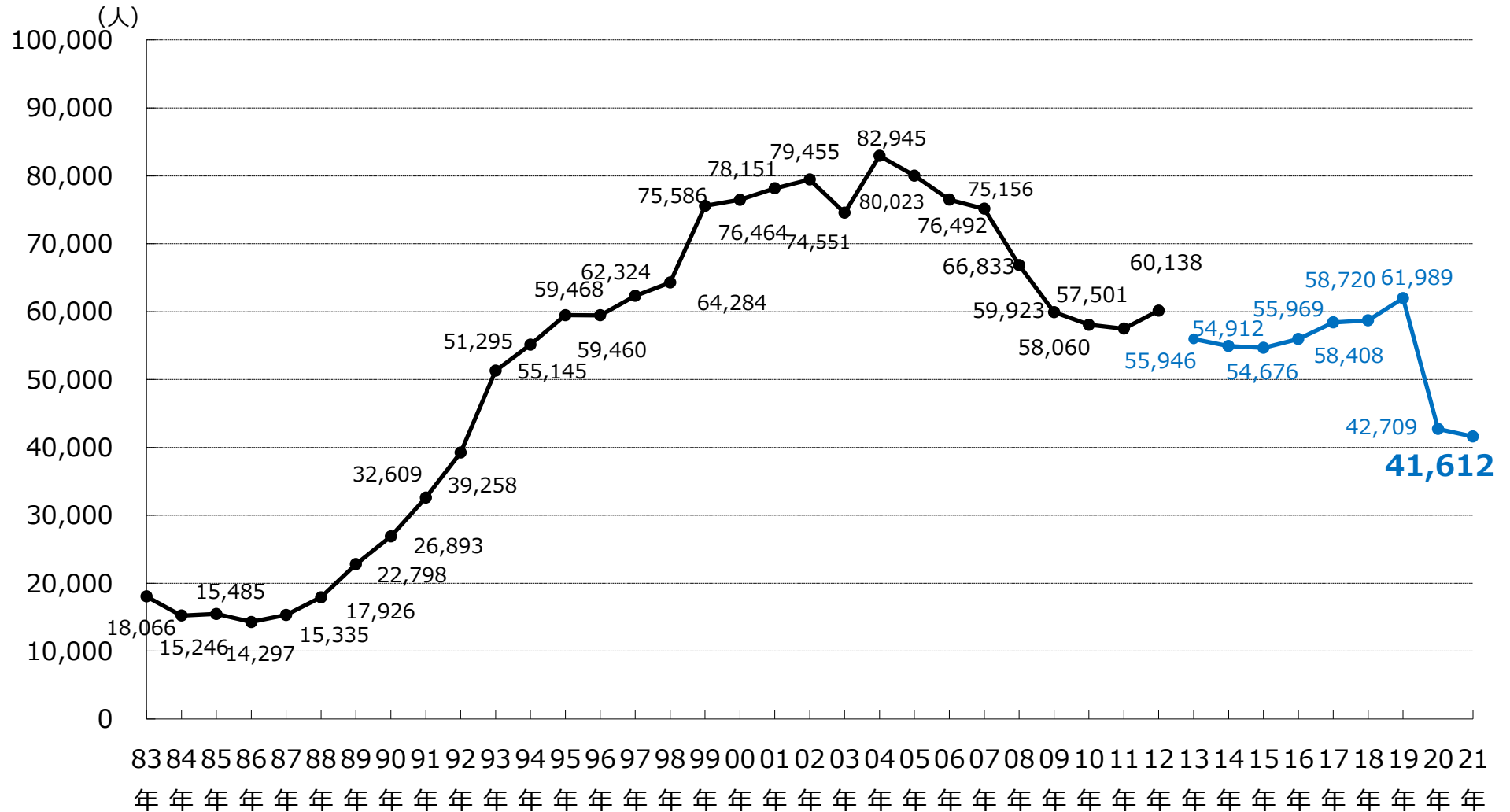
大学等が把握している日本人の海外留学生数は新型コロナウイルス感染症の影響により2020年度以降激減し、増加（回復）傾向にあるもののコロナ禍前の半数程度にとどまっている。



(備考) 大学間交流協定等に基づく日本人留学生数。留学期間が「不明」の学生も一定数いるため、「大学等が把握している日本人留学生数」とそれを足し合わせたものは一致しない。
 (出所) (独) 日本学生支援機構「日本人学生留学状況調査」より作成。

主に学位取得を目的とする日本人海外留学者数

主に学位取得を目的とする日本人の海外留学者数は2000年前後の約8万人をピークに減少し、近年は6万人程度で横ばいであったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、2021年には4万人程度まで減少した。



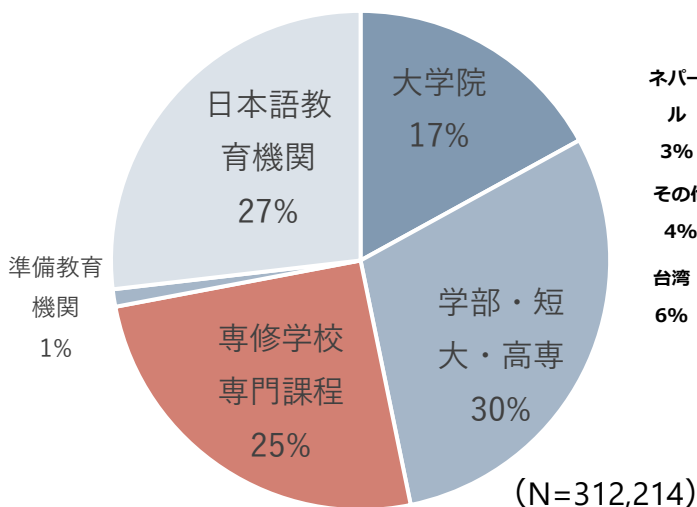
(備考) 2012年統計までは、外国人学生（受入れ国の国籍を持たない学生）が対象だったが、2013年統計より、高等教育機関に在籍する外国人留学生（勉学を目的として前居住国・出身国から他の国に移り住んだ学生）が対象となったため、比較ができなくなっている。

(出所) 文部科学省「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について（令和6年5月24日）より。

専門学校における留学生の概略

- 留学生30万人計画を達成した2019年度において、留学生総数の25%が専門学校に在籍。
- 専門学校の留学生の割合は、全体としては12%程度と推計され、国別留学生割合としては、近年、ベトナムやネパールの留学生が増加傾向。
- 日本で就職を希望する専門学校の留学生の割合は7割程度である一方、実際に日本で就職した学生は4割程度に留まっている状況。

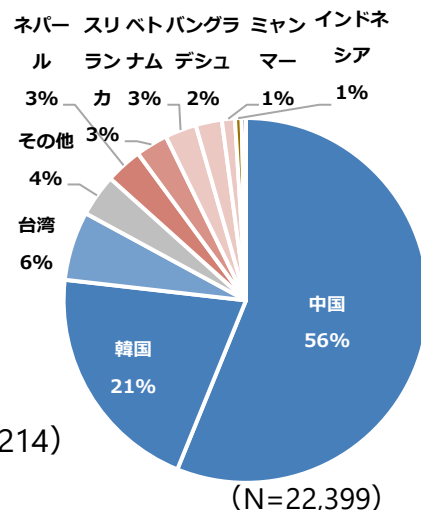
● 留学生総数に占める割合



出典：日本学生支援機構
「2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査」

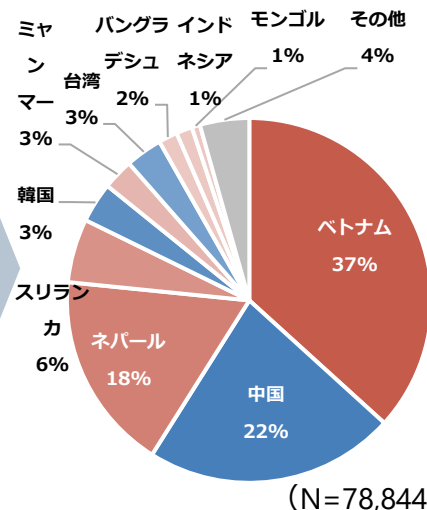
● 国別留学生割合

2007（平成19）年

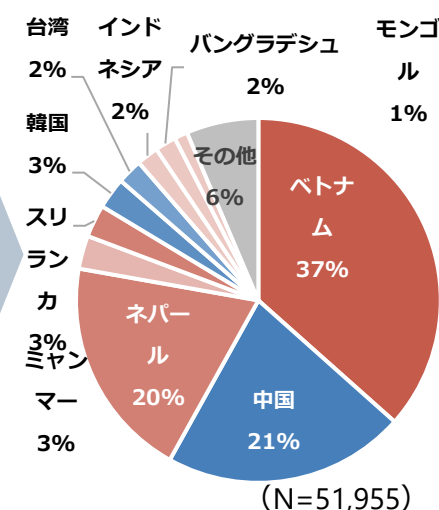


※留学生30万人計画を達成した年

2019（令和元）年



2022（令和4）年



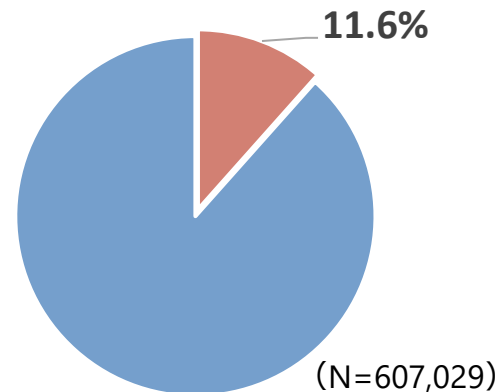
出典：日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」

● 日本での就職を希望する者と、実際に日本で就職した者の割合等

日本での就職を希望する者の割合※1	→	実際に日本で就職した者の割合※2
69.9%	→	39.2%

出典：
※1 日本学生支援機構「令和元年度私費留学生生活実態調査」
※2 日本学生支援機構「令和元年度留学生進路状況・学位授与状況調査」

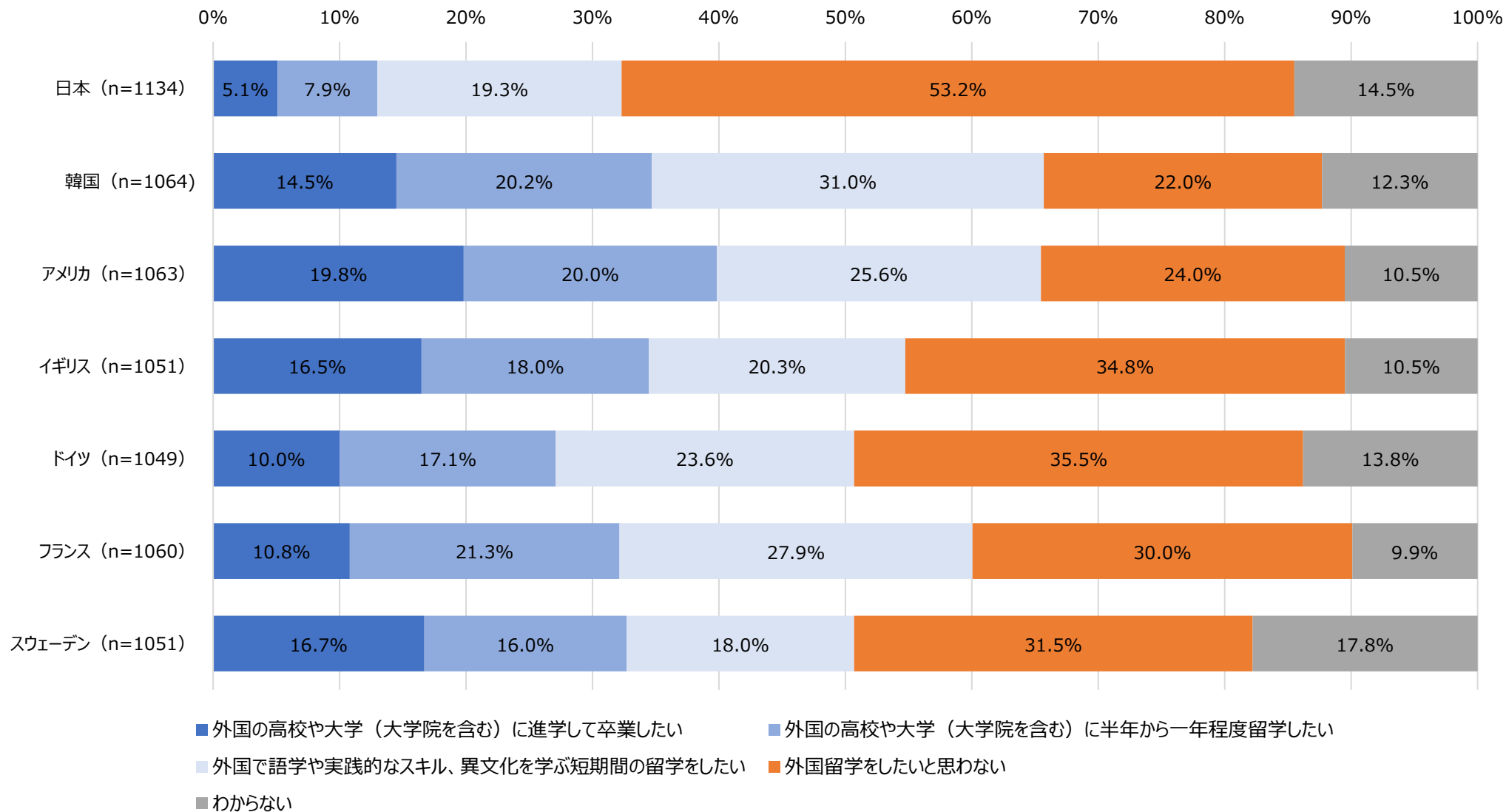
● 留学生割合（推計）



出典：日本学生支援機構「2022（令和3）年度外国人留学生在籍状況調査」
文部科学省「令和3年度学校基本統計」

外国留学への意識

諸外国においては、外国留学を希望する者が5割を超える中、日本の若者は「外国留学をしたいと思わない」とする者が5割超と諸外国の中でも高い。

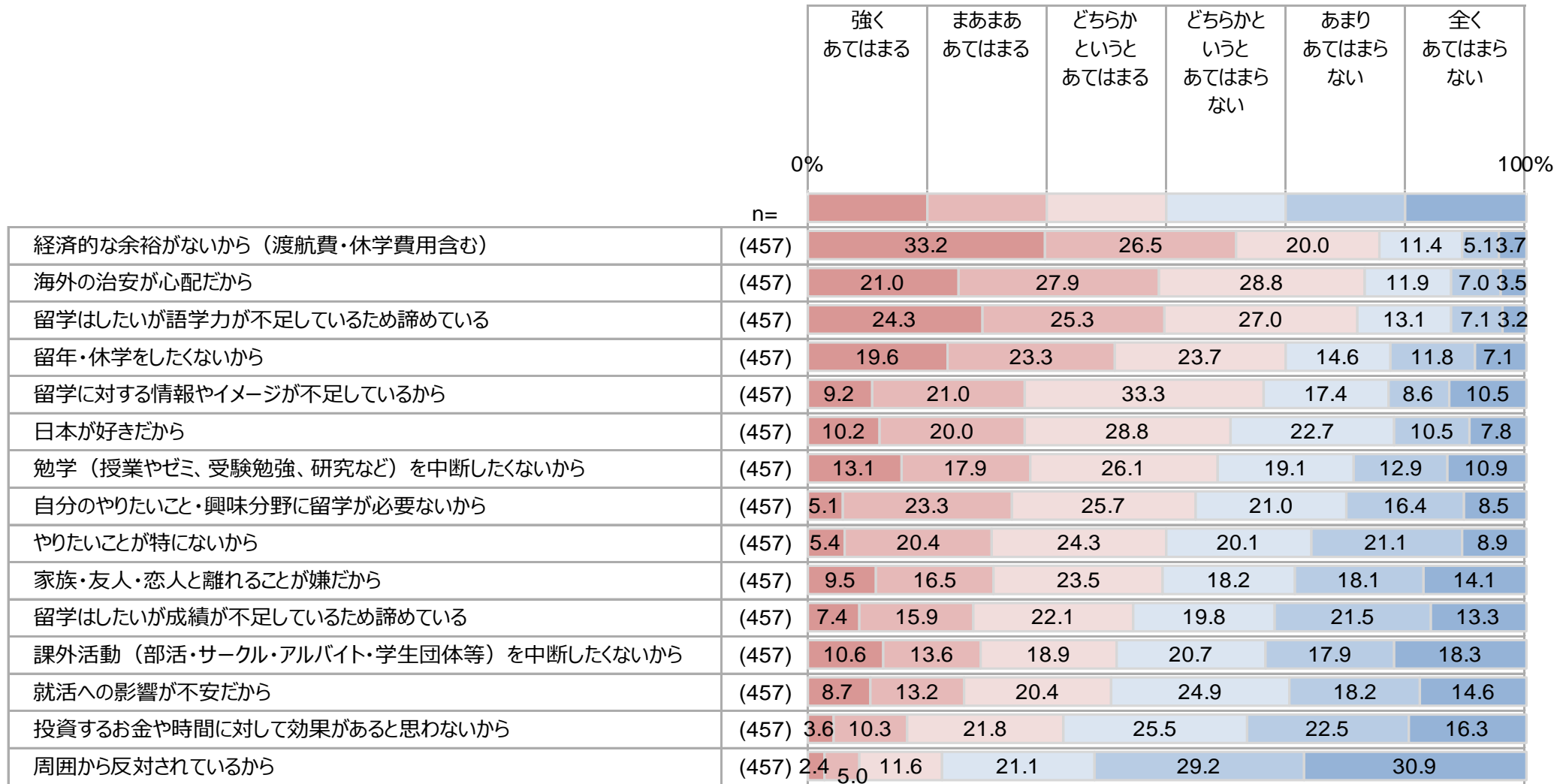


(備考) 各国満13~29歳の若者に対するインターネット調査

(出所) 内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」より作成。

興味・憧れはあるが、海外留学していない理由

海外留学に行かない理由としては、経済的理由や治安への心配、語学力不足などが多く挙げられている。

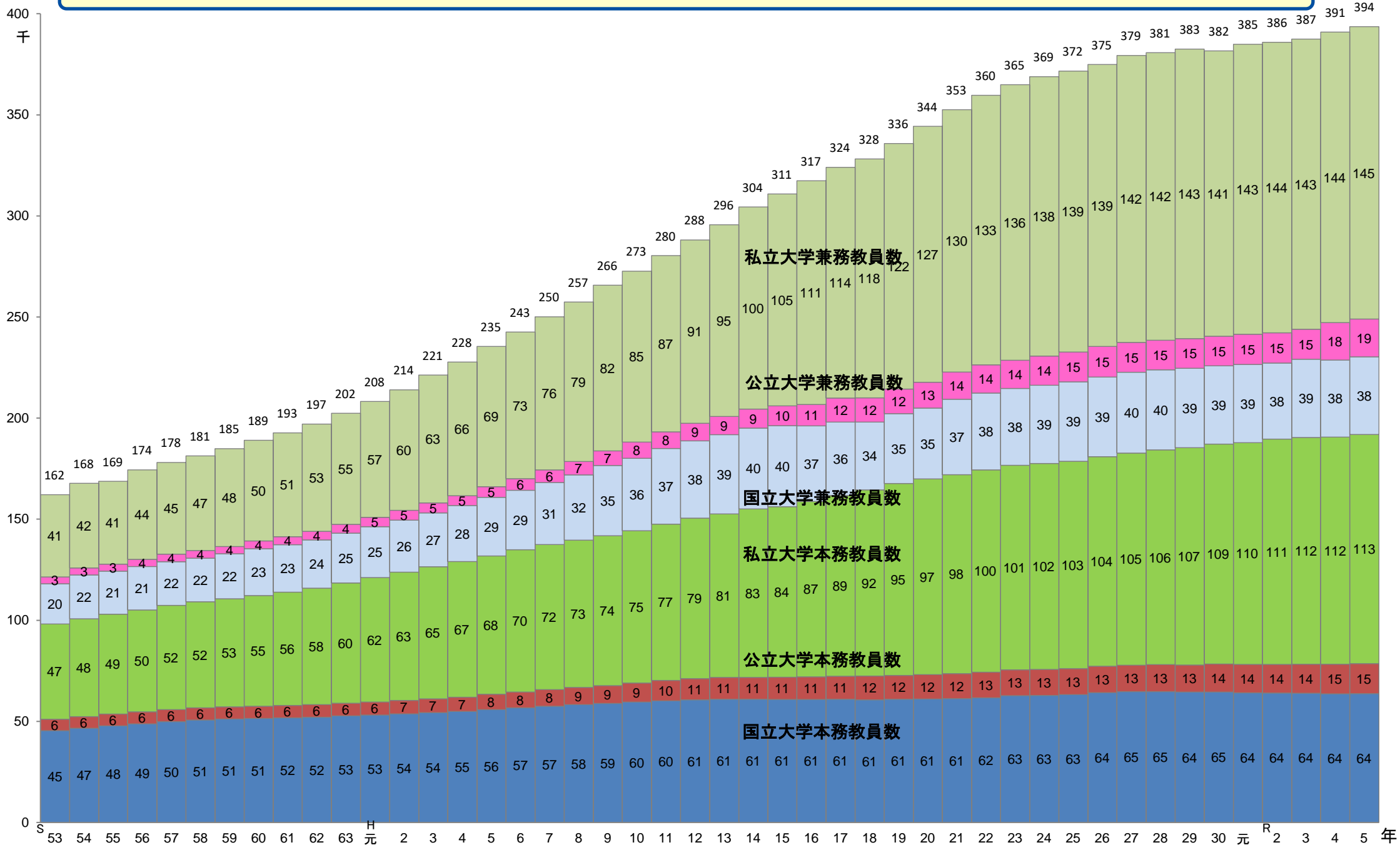


（出所）文部科学省「学生の海外留学に関する調査2022」より作成。

教員を取り巻く環境

設置者別大学教員数の推移

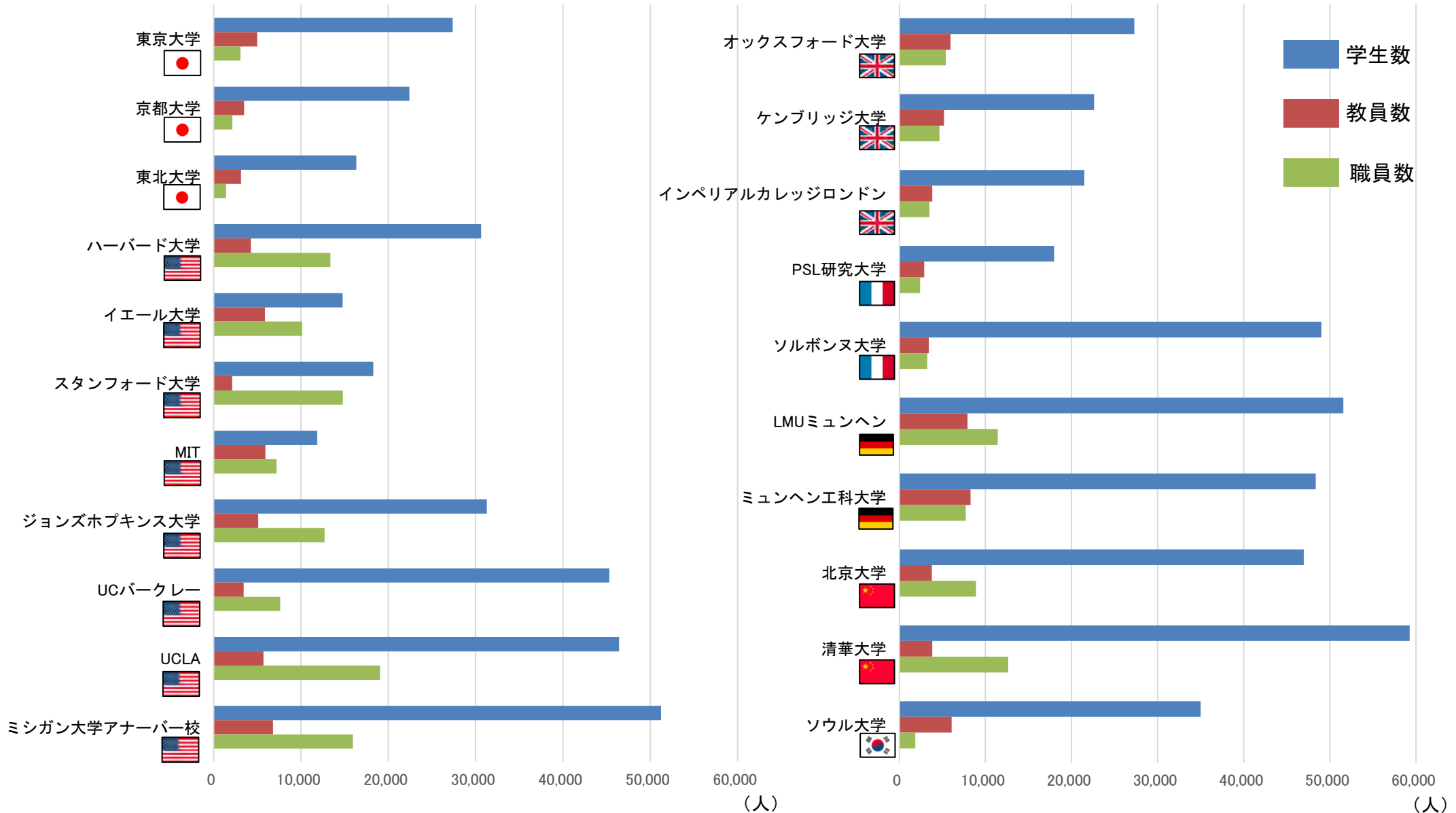
大学教員数は上昇してきたが、近年では、上昇傾向は緩やかになっている。



出典：文部科学省「学校基本調査」。
 ※大学教員数については、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の計と合計が一致しない場合がある。

各国の有力大学における教職員数比較

- アメリカの有力大学は、日本と比べると、学生数に対する教職員数の割合が高く、教員数よりも職員数の方が多く傾向がある。
- 各国の有力大学においても、職員数が多い傾向がある。



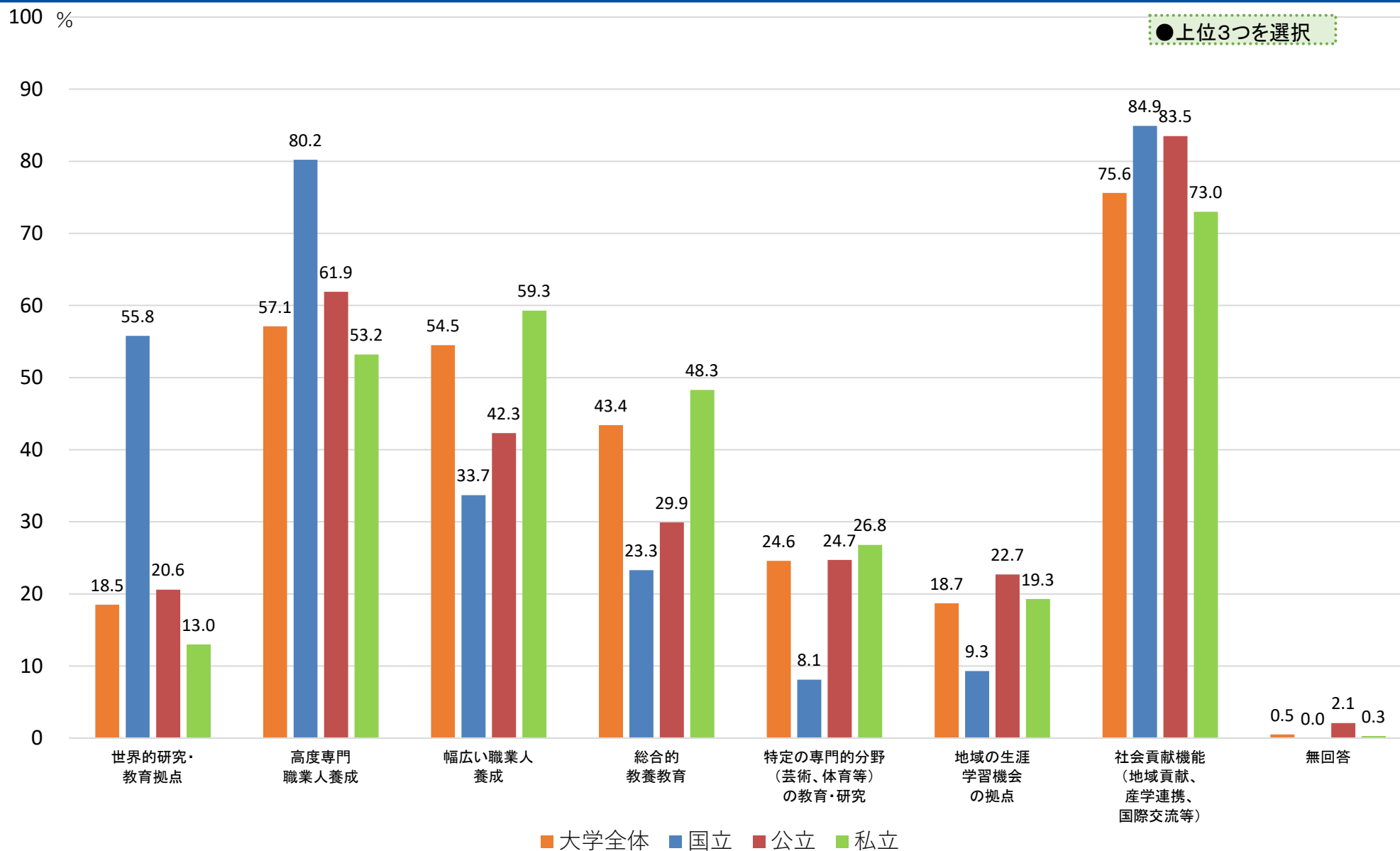
(注)

1. 学生数は在籍者ベース
2. 日本の教員数は教授・准教授・講師・助教・助手。附属学校の教諭・養護教諭がある場合にはここに含める。
3. 職員数からは病院職員を除く。

(出典:各国のウェブページの情報から文部科学省作成)

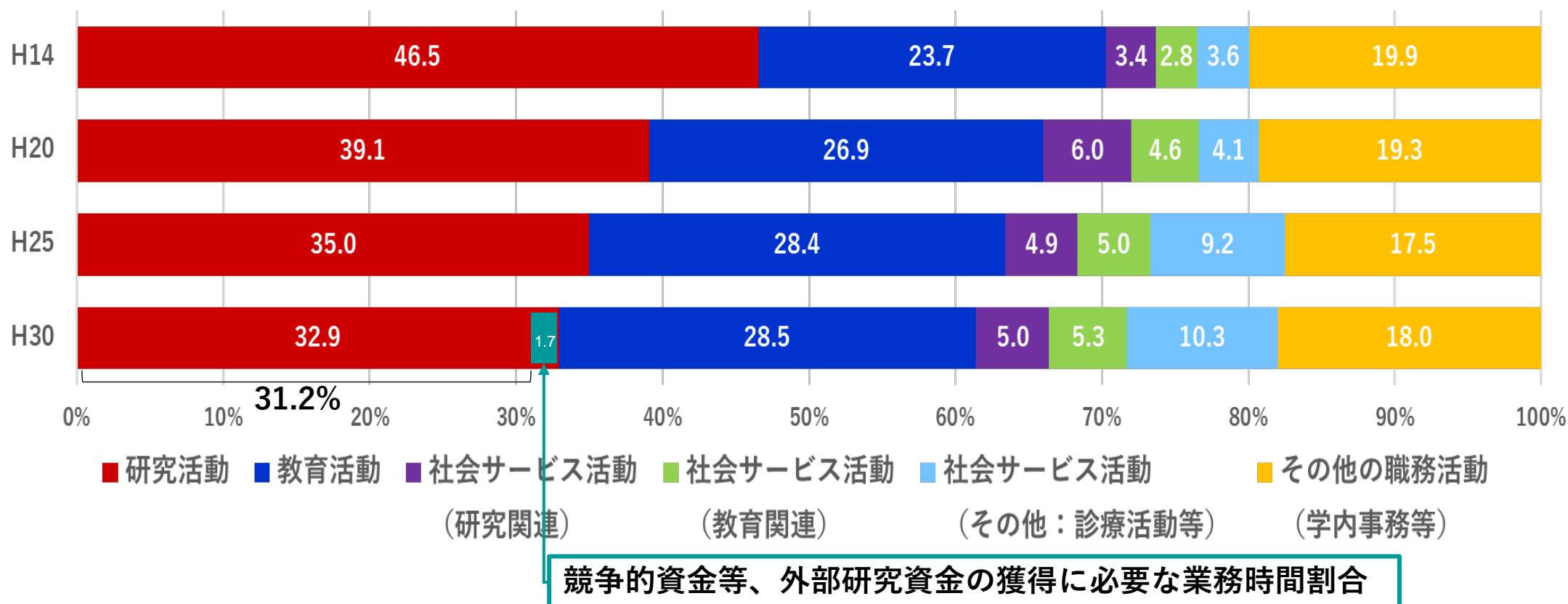
学長等が認識する「重視している大学等としての機能」

- 「世界的研究・教育拠点」と「高度専門職業人養成」は国立大学で高い割合となっている一方、「幅広い職業人養成」と「総合的教養教育」は私立大学で高い割合となっている。
- 「社会貢献機能（地域貢献、産学連携、国際交流等）」は、全ての設置者において高い割合であった。



大学等教員の職務活動時間の割合

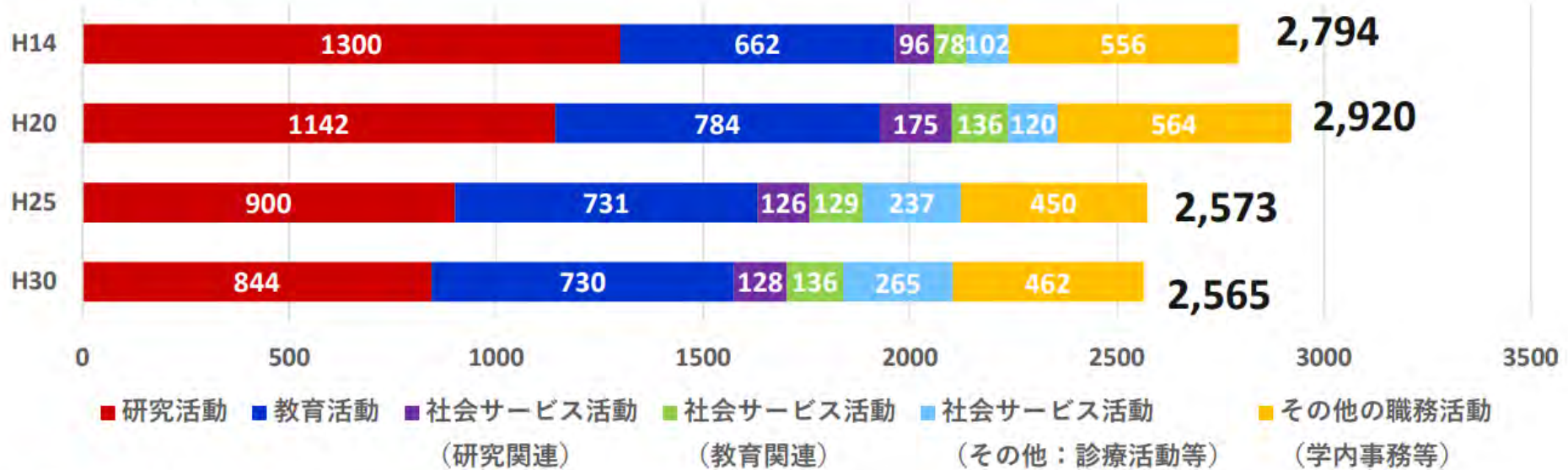
- 教員の研究活動時間割合は減少傾向が続き、平成30年度は32.9%（競争的資金等、外部研究資金の獲得に必要な業務時間割合を除くと、31.2%）となっている。
- 教育活動、社会サービス活動（研究関連、教育関連）時間割合がそれぞれ微増しており、前回特に増加傾向の強かった社会サービス活動（その他：診療活動等）も1.1ポイント微増している。その他の職務活動（学内事務等）時間割合はこれまで減少傾向にあったが、今回は0.5ポイント微増して18%となっている。



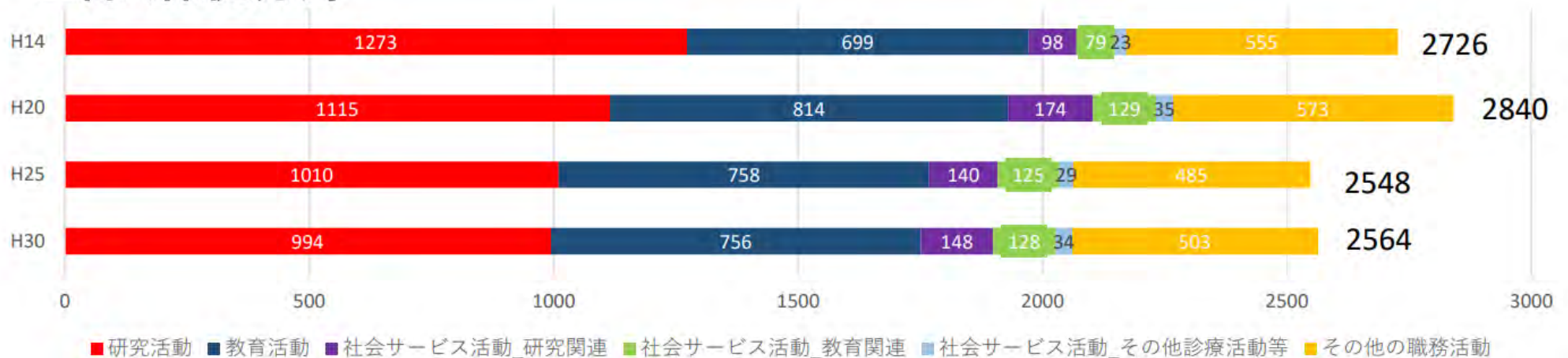
大学等教員の職務活動時間の推移

年間総職務時間の減少もあり、実際の研究活動時間は、保健分野を除いても、一貫して減少。

■ 全分野



■ 除く保健分野

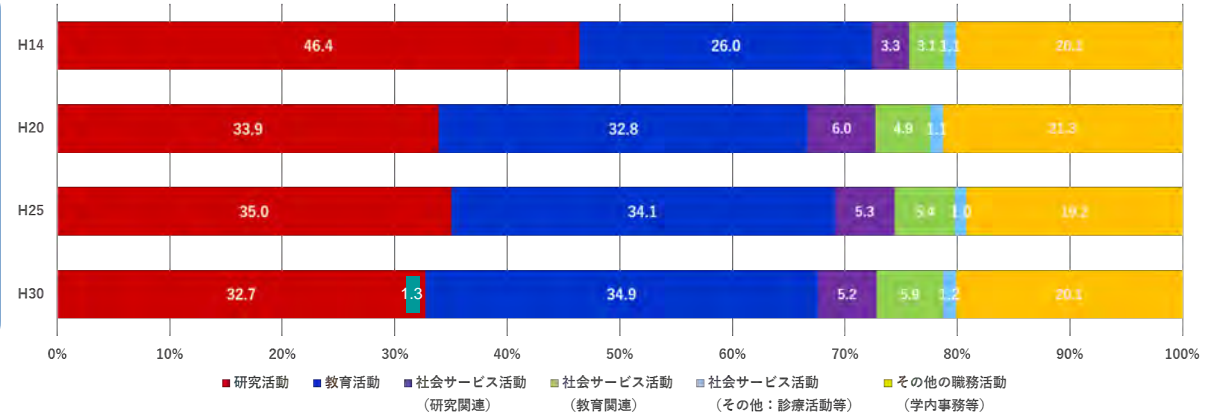


(出典) 文部科学省「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査(H20,H25,H30)」のデータを基に作成

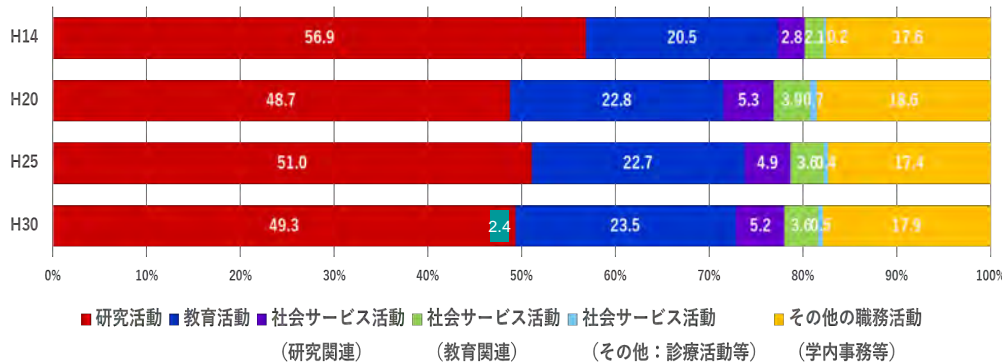
大学等教員の分野別職務活動時間の割合

- 大学等教員の研究時間割合は全体としては減少しているが、学問分野別に見ると保健分野の教員における職務活動時間割合の増減が大きく影響している。
- 理学、工学及び農学分野における研究活動時間割合は平成20年度以降、大きな変化は見られない。
- 人文・社会科学分野では他の分野と比較しても教育活動時間割合が最も高い。

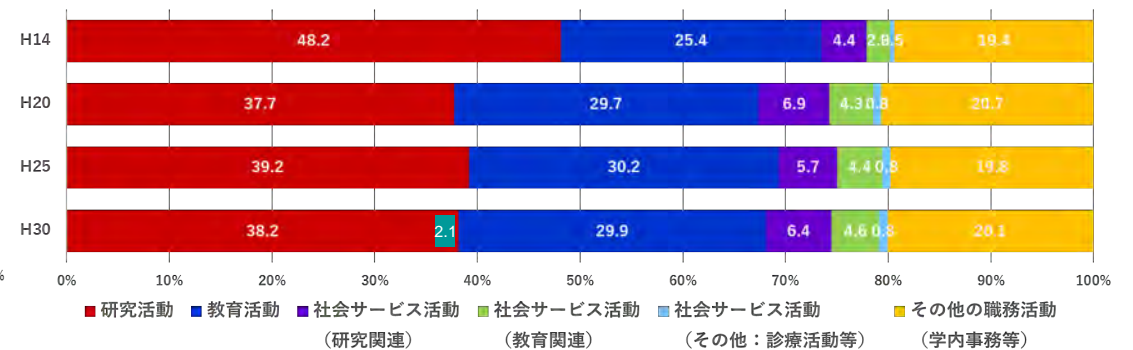
人文・社会科学



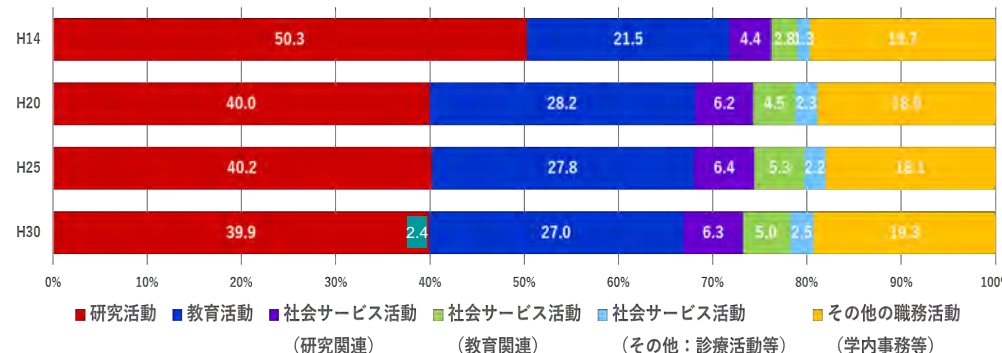
理学



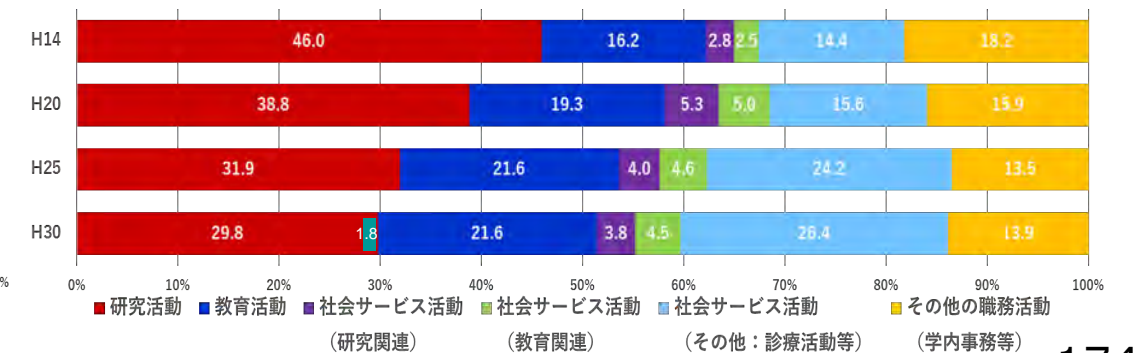
工学



農学



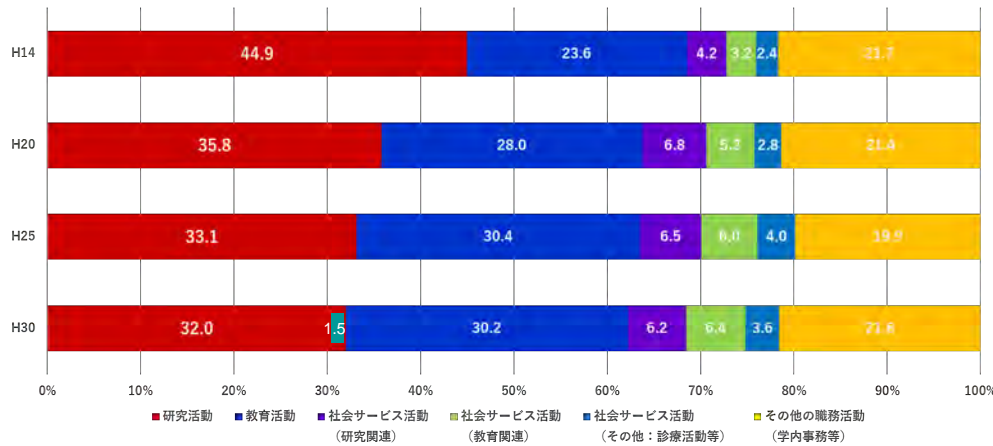
保健



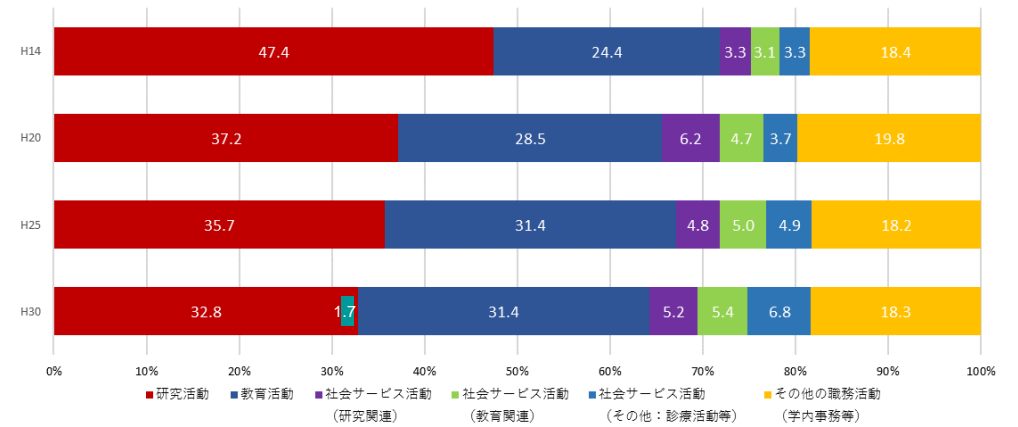
大学等教員の職位別職務活動時間の割合

- 助教は保健分野の影響が大きく、社会サービス活動（その他:診療活動等）の時間割合が高い。
- その他の職務活動（学内事務等）割合については教授が最も高い。

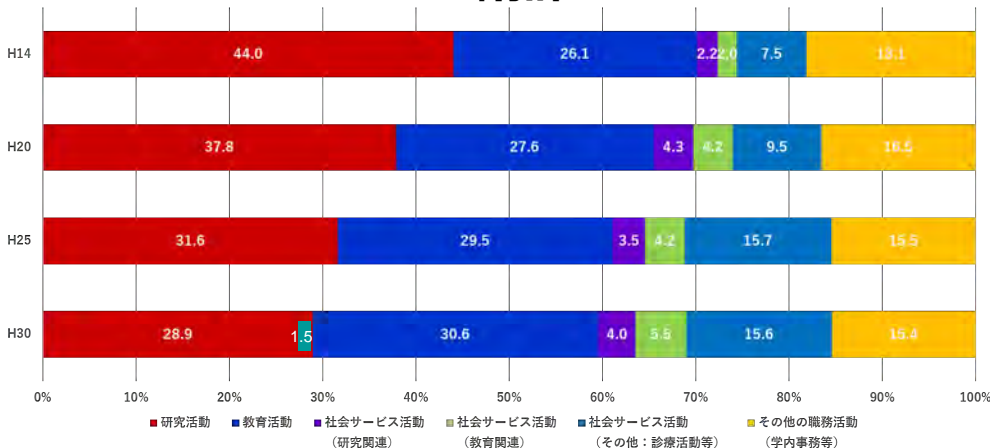
教授



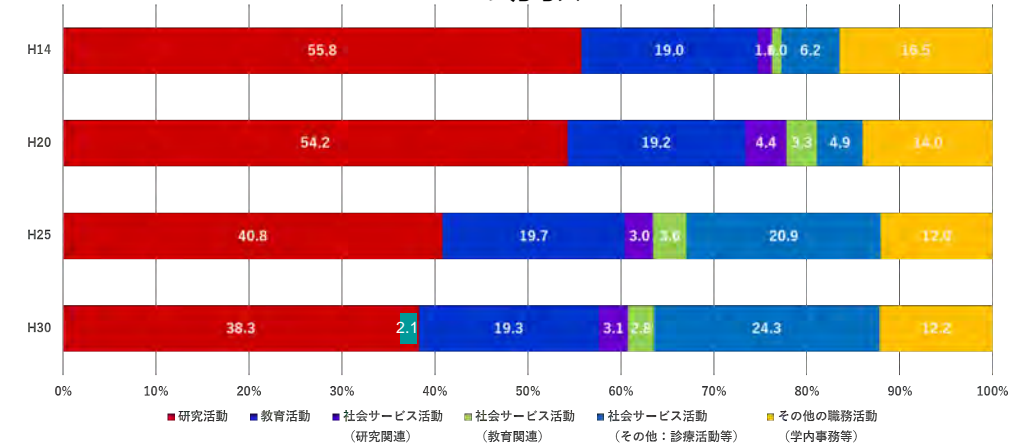
准教授



講師



助教



大学教員の業務時間実態と理想の比較

大学教員の業務時間割合の実態と理想を比較すると、「研究」を9.0%（時間換算で4.7時間）増やしたい。一方で、「学士課程教育（授業時間、準備含む）」を▲5.5%（時間換算で▲2.9時間）、「大学の管理・運営」を▲4.2%（時間換算で▲2.2時間）減らしたいとなっている。

平均的な1週間（授業開講期間）の業務時間・割合の実態、理想とする業務時間の割合

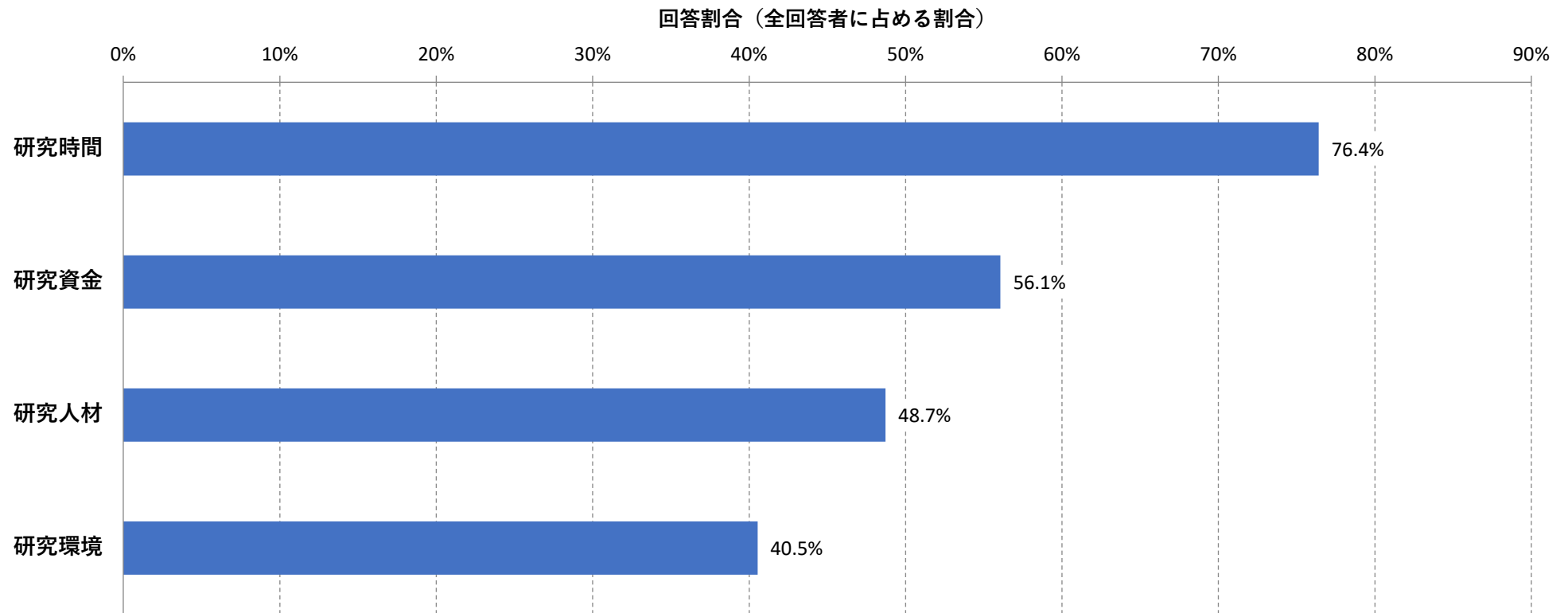
	研究	学士課程教育（研究室での学生の指導時間等）	学士課程教育（授業時間、準備含む）	大学院教育（研究室での学生の指導時間等）	大学院教育（授業時間、準備含む）	診療・臨床	社会貢献	大学の管理・運営	学外業務	その他	合計
実態の業務時間（時間）	12.2	6.2	12.6	3.5	2.3	3.1	1.8	5.9	2.6	1.9	52.1
実態の業務時間割合(A) (%)	23.4	11.9	24.2	6.6	4.4	6.0	3.5	11.3	4.9	3.7	-
理想の業務時間割合(B) (%)	32.4	12.5	18.7	8.2	5.7	4.8	4.9	7.1	3.8	1.9	-
業務時間割合の比較(B)-(A) (%)	9.0	0.7	-5.5	1.6	1.2	-1.2	1.3	-4.2	-1.1	-1.8	-

(※)四捨五入の関係で数値が一致しない場合がある。

研究パフォーマンスを高める上での制約要因

研究パフォーマンスを高める上での制約要因は、「研究時間」が最も多く（76.5%）、次いで、「研究資金」（56.1%）、「研究人材」（48.1%）、「研究環境」（40.5%）の順になっている。

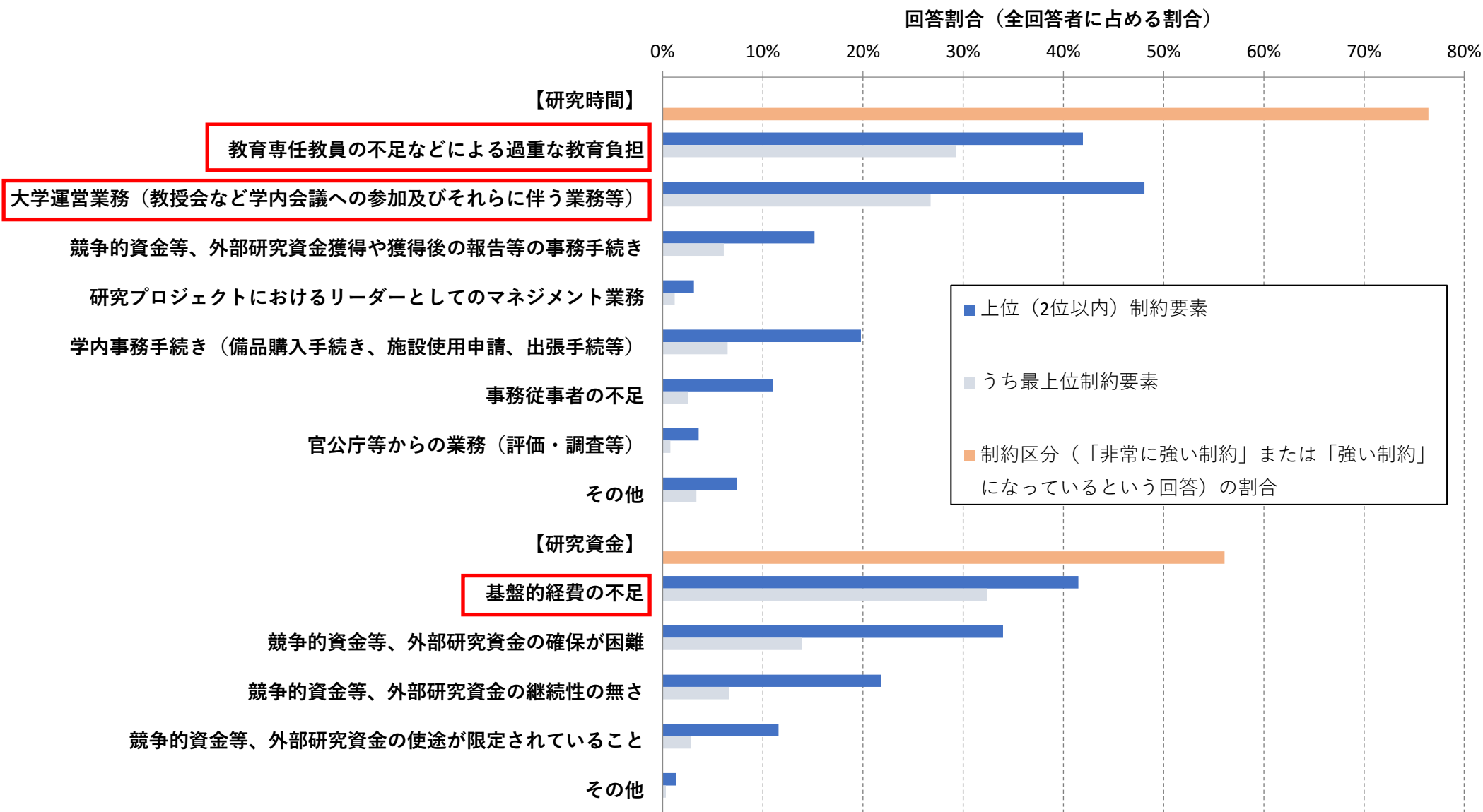
研究パフォーマンスを高める上で制約となっていること



※それぞれについてどの程度制約を感じているか、「非常に強い制約となっている」「強い制約となっている」「どちらとも言えない」「あまり制約にはなっていない」「全く制約ではない」という5件法で回答を求め、上位2位（「制約となっている」と回答した教員数）を集計

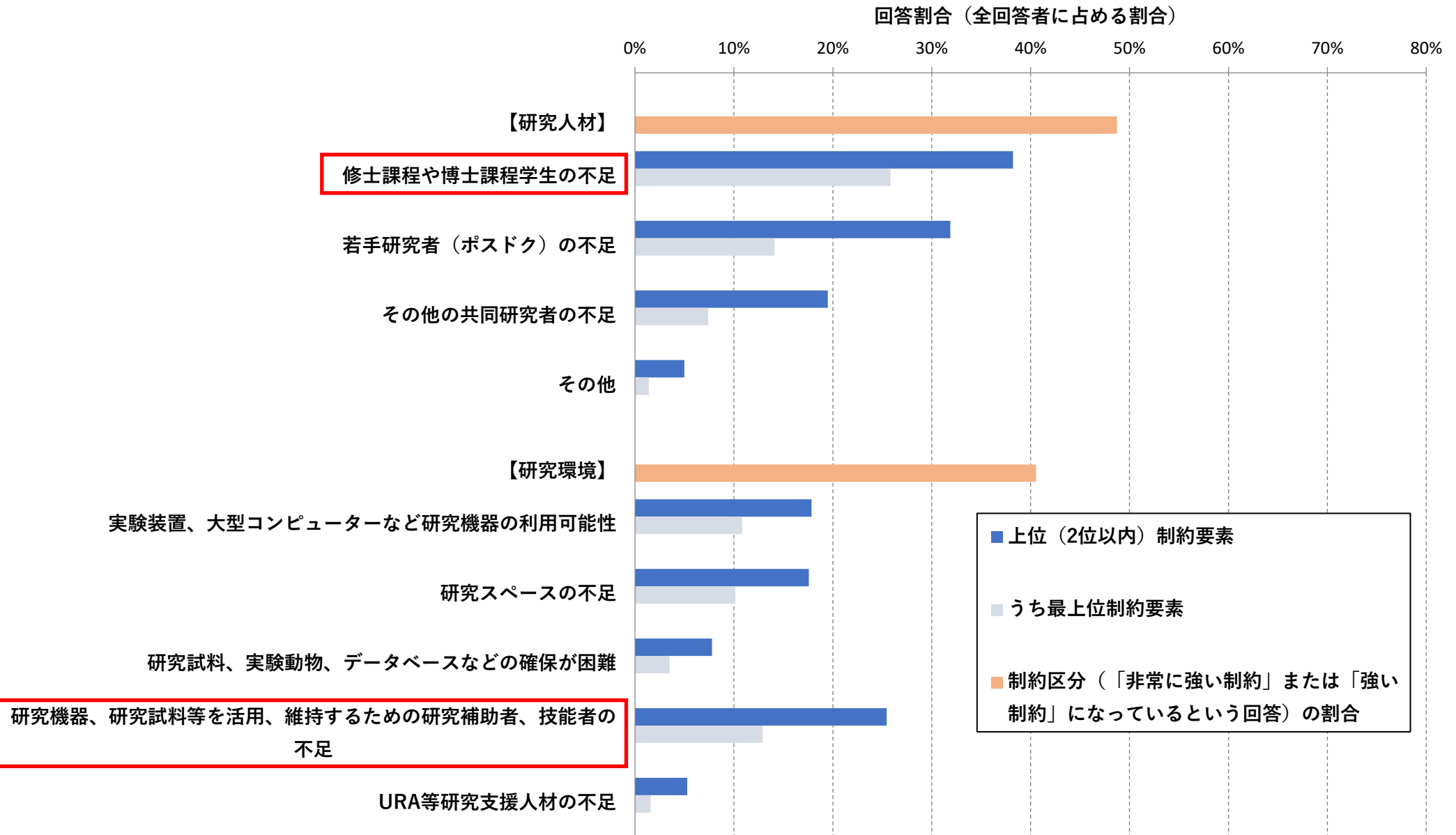
研究パフォーマンスを高める上での制約(研究時間、研究資金)

- 研究時間については、「教育専任教員の不足などによる過重な教育負担」「大学運営業務（教授会など学内会議への参加及びそれらに伴う業務）」を制約と感じている教員が多い。
- 研究資金については、「基盤的経費の不足」を制約と感じている教員が最も多く、「競争的資金等、外部研究資金の獲得が困難」がそれに続いた。



研究パフォーマンスを高める上での制約(研究人材、研究環境)

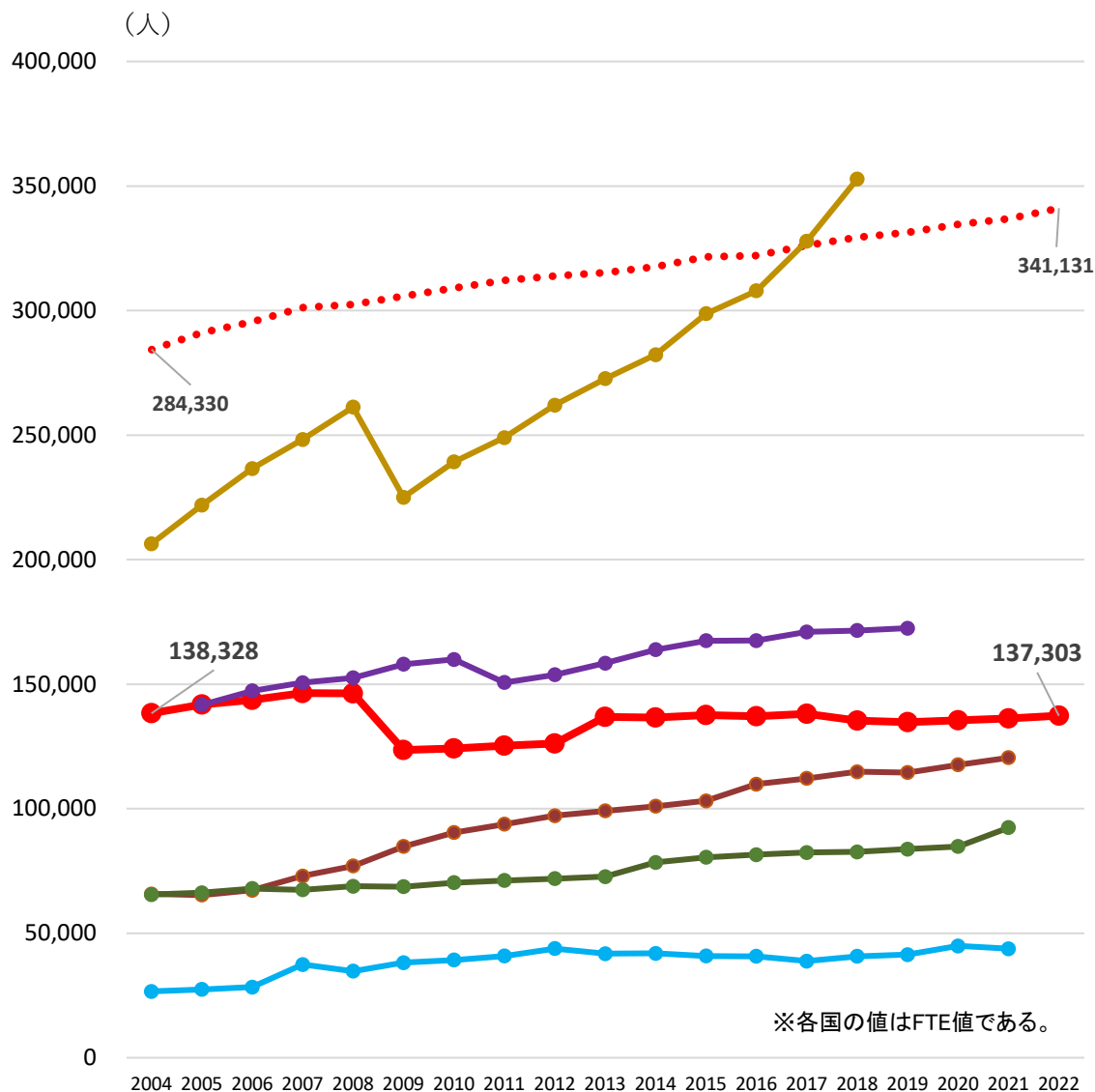
- 研究人材については、「修士課程や博士課程学生の不足」を制約と感じている教員が最も多い。
- 研究環境については、「研究機器、研究試料等を活用、維持するための研究補助者、技能者の不足」を制約と感じている教員が最も多い。



(出典) 文部科学省「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査」(令和元年6月26日)を基に作成

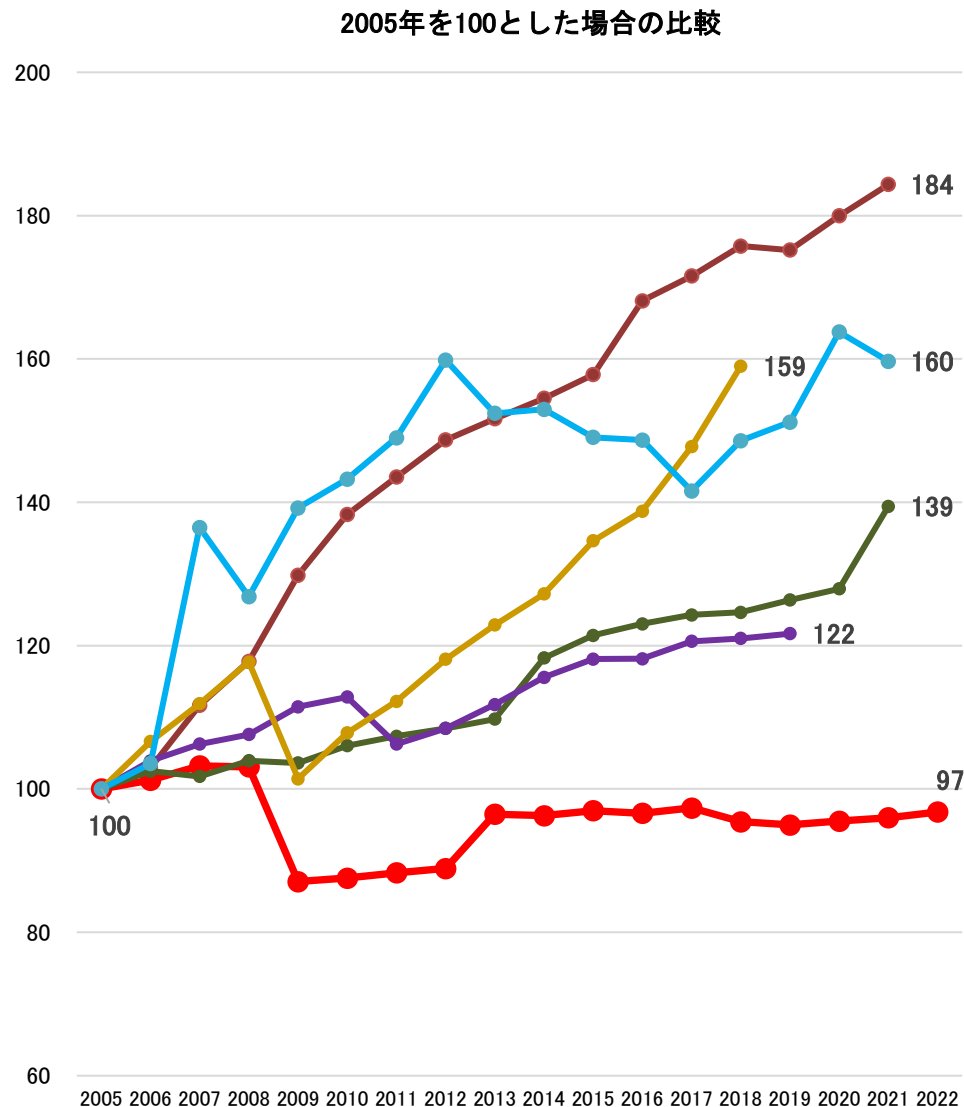
主要国における大学部門の研究者数(FTE)の推移

日本の大学部門の研究者数は増加しているが、研究時間をフルタイムに換算した研究者数（FTE）では、主要国は増加している中、日本は低迷している。



※各国の値はFTE値である。

- 日本 (実数)
- 日本 (FTE)
- ドイツ
- フランス
- 英国
- 中国
- 韓国

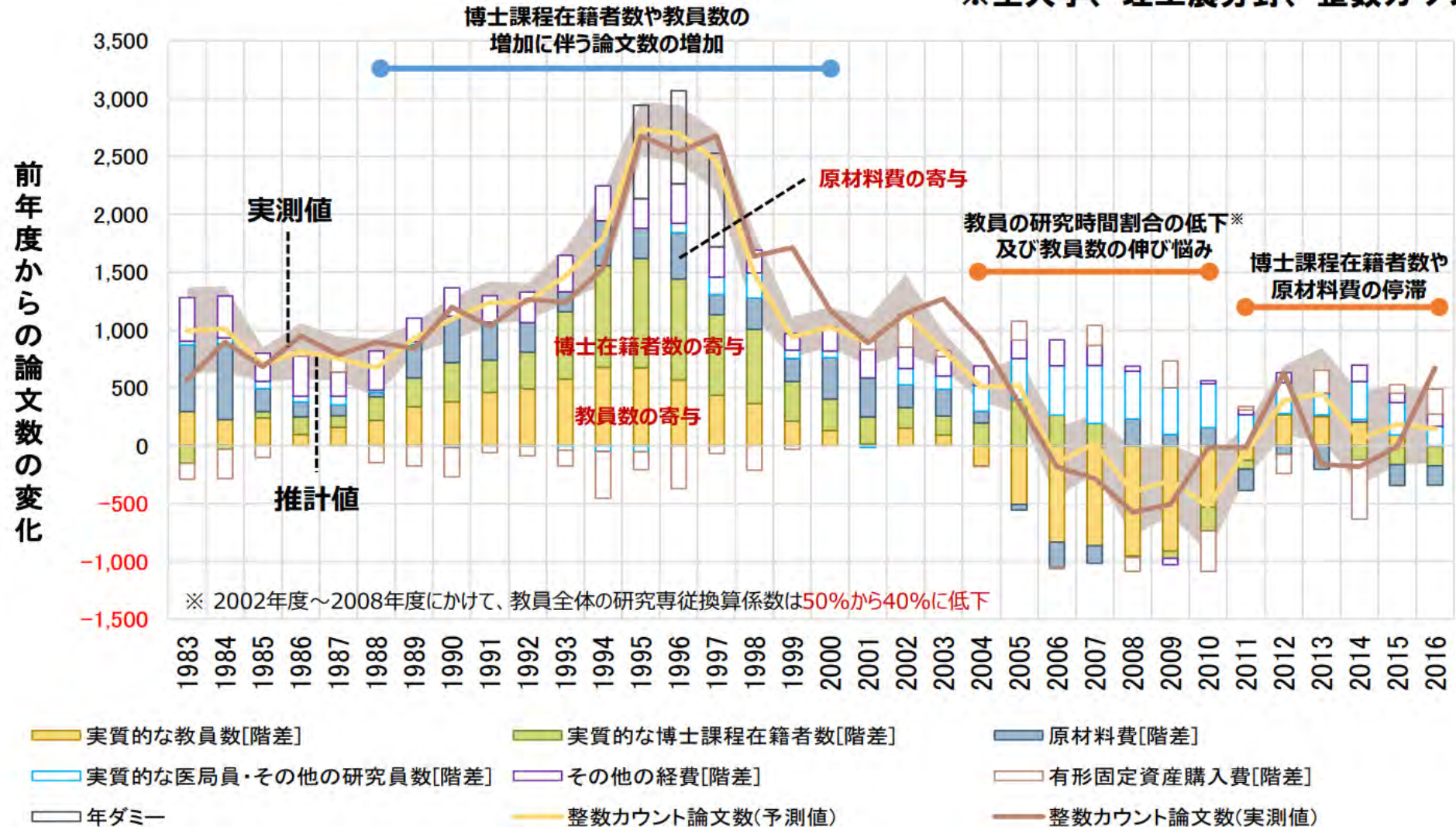


(出典)文部科学省 科学技術・学術政策研究所、「科学技術指標2023」を基に作成。

論文数変化についての要因分解の結果

2000年以前の論文数の増加には、博士課程在籍者数や教員数の増加が寄与しており、2004年以降の論文数の低迷は、教員の研究時間割合の低下及び教員数の伸び悩みや、博士課程在籍者数や原材料費の停滞によるとの指摘がある。

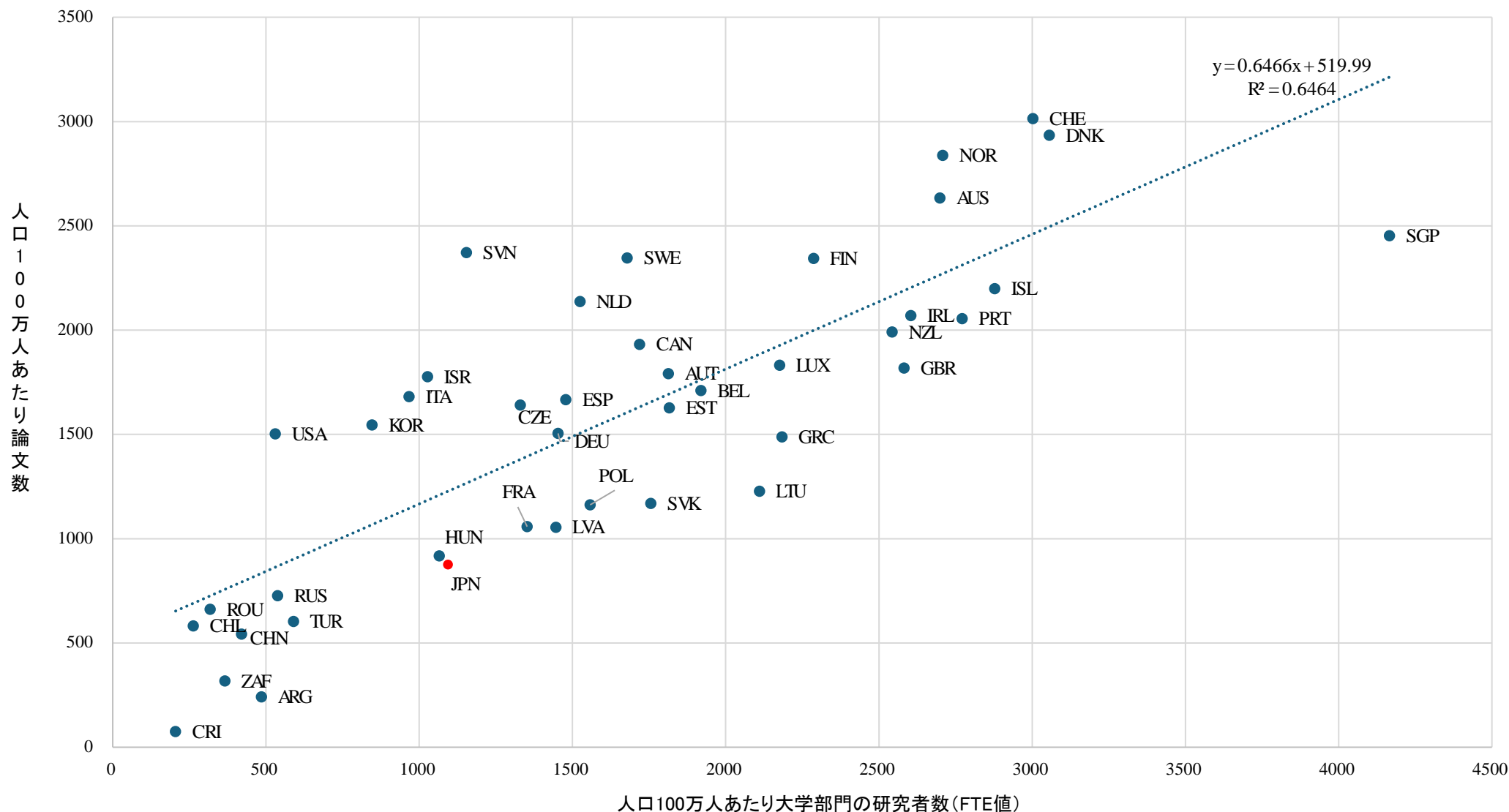
※全大学、理工農分野、整数カウント



実質的な研究者数: 研究時間割合を考慮した研究者数(研究時間割合が50%の場合は、0.5人と計上)。
 原材料費: 研究に必要な試作品費、消耗器材費、実験用小動物の購入費、餌代等の支出額。
 その他の経費: 研究のために要した図書費、光熱水道費、消耗品費等、固定資産とならない少額の装置・備品等の購入費等。

論文数と大学部門研究者数(FTE値)の相関関係

- 人口100万人あたり論文数と大学部門の研究時間をフルタイムに換算した研究者数（FTE値）には、強い正の相関関係が認められる。
- 日本の人口100万人あたり大学部門の研究者数（FTE値）は、相対的に低位である。



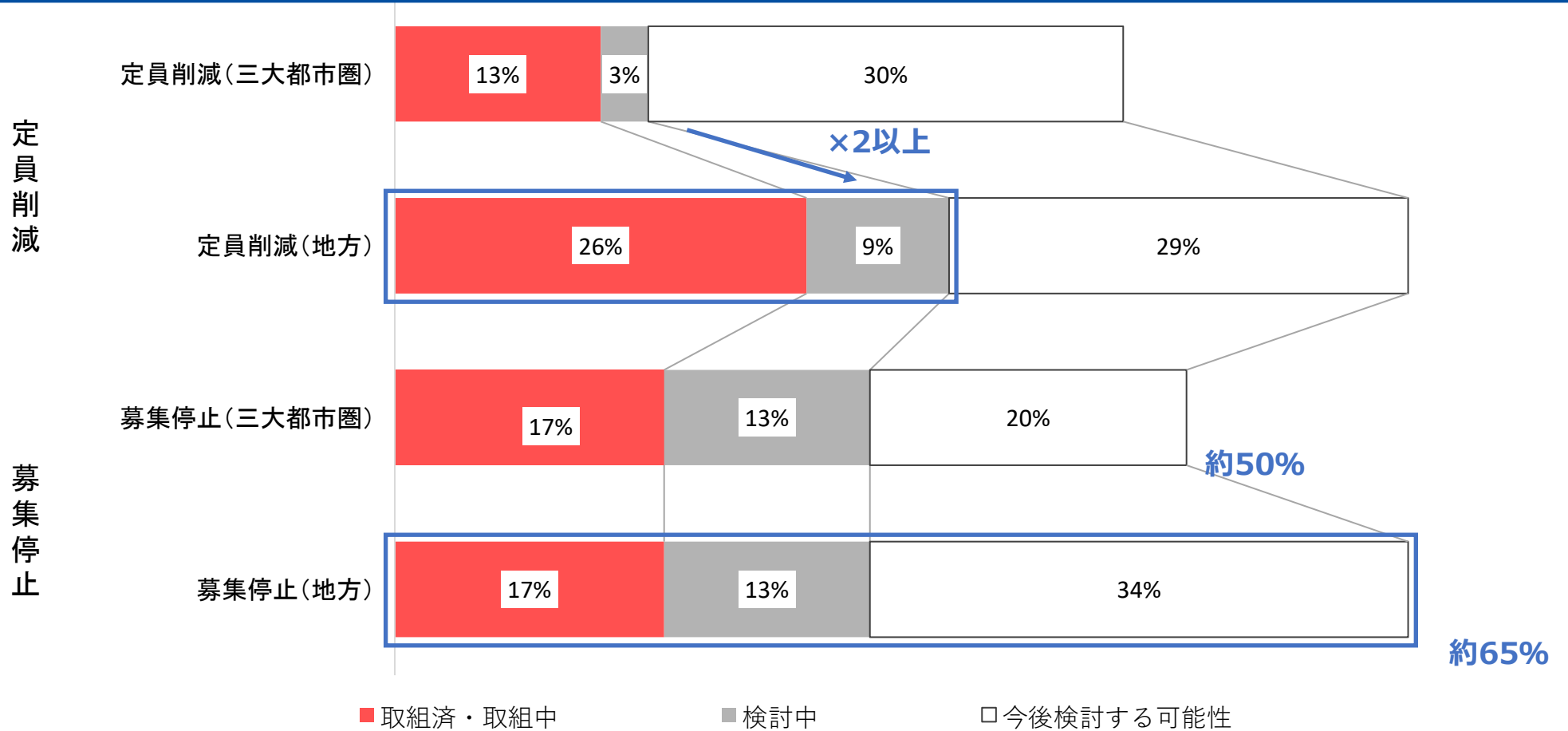
※ FTE値について、アメリカ、イスラエル、オーストラリア、カナダ、シンガポール、チリ、南アフリカ、ロシアは2020年データ、イギリスは2019年のデータを利用。
 ※論文数は、大学部門を含めた全部門の論文数のデータを利用。

【出典】OECD statisticsの2021年データを基に、文部科学省作成。

少子化を見据えた大学経営の状況

学校再編に関する取組の実施状況

- 地方の学校法人では約35%が定員削減を取組または検討しており、三大都市圏の2倍以上となっている。
- 募集停止においても検討可能性を含めると約65%あり、三大都市圏より大きくなっている。



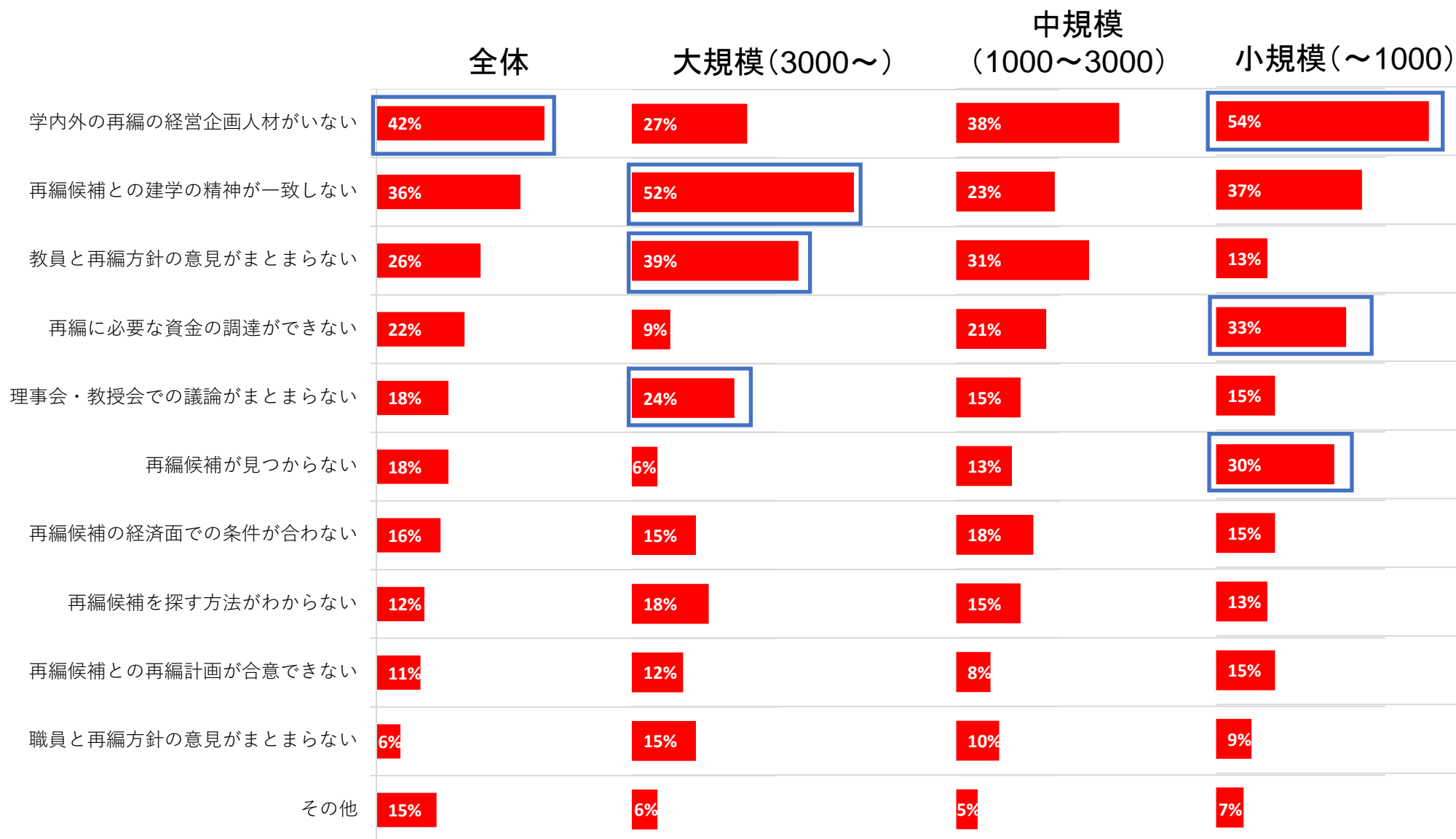
※三大都市圏：東京23区・名古屋市・京都市・大阪市・神戸市

【参考】学校再編に関する調査概要

実施期間・方法：2024年1月・Web調査
 回答者：四大／短大を持つ118の学校法人(672法人に配布：有効回答率18%)
 (学校種別) 四年制大学：98、大学院：78、短期大学：53(内19法人が短大のみ)、専門学校：14 ※複数回答可
 (エリア) 政令指定都市：33%、中核市：20%、小都市以下：17%、中都市15%、特別区：14%
 (定員) 小規模1000名未満：39%、中規模1000-3000名未満：33%、大規模3000名以上：28%

学校再編に取り組む上での課題

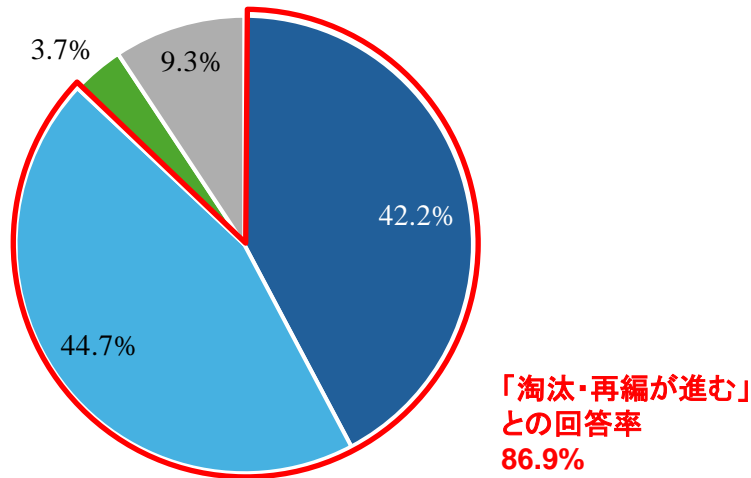
- 学校再編に取り組む上での最大の課題は経営企画人材がないこと（特に小規模な学校法人）。
- 小規模な学校法人は、資金調達や再編候補を探す上での課題も大きい。
- 大規模な学校法人は、建学の精神、学内の意見の取りまとめの課題が大きい。



大学経営に関する認識(18歳人口の減少を見据えた大学の淘汰・再編等)

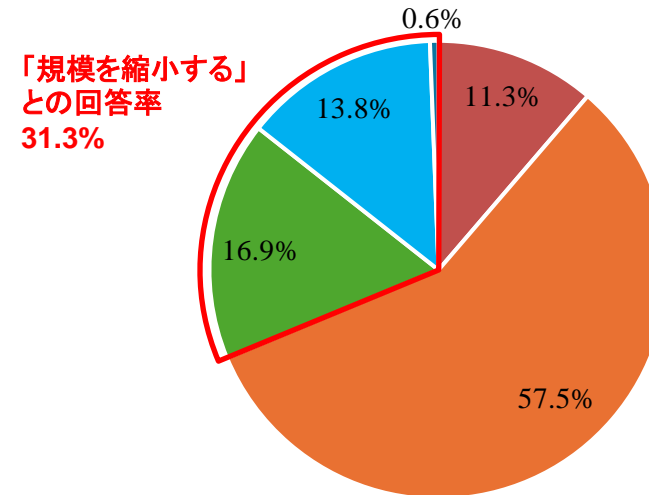
学校法人理事長調査によると、「わが国の大学の現状及び将来に対する見通し」に関して、9割近くが淘汰・再編が進むと認識している一方で、「学校法人が設置する大学の規模に関する今後の方向性」に関しては、規模の縮小はやむなしと回答した割合は約3割にとどまっており、必ずしも大学全体と自大学に関する認識が一致しているわけではないことが窺える。

わが国の大学の現状及び将来に対する見通し



- 1. 今後淘汰・再編が急速に進むことは避けられない
- 2. 淘汰・再編は不可避だが、当面は緩やかに進むものと想定している
- 3. 淘汰・再編は不可避だが、当面はそれほど進まない想定している
- 4. 量的な需給だけで淘汰・再編を見通すことは難しい

大学の規模に関する今後の方向性



- 1. 経営の規模を拡大しつつ競争力を強化
- 2. 経営の規模は現状を維持しつつ、学問分野等の組み替えにより競争力を強化
- 3. 18歳人口の減少を踏まえて、規模を適正化(多少の縮小はやむなし)
- 4. 規模をある程度縮小しつつ、強みを生かせる分野を強化(資源を集中)
- 5. 規模の大幅縮小もやむなし

【参考】理事長調査概要

調査実施日: 2023年7月12日~8月10日(回収最終日同8月10日)

対象: 大学・短大を設置する学校法人の理事長

回答数: 161 法人 回収率: 24.4%

< 理事長と学長の兼務の有無 >

・理事長・学長兼務 25、理事長・学長は別 133、その他 3

< 回答 161 法人の地域分布と学生数の規模 >

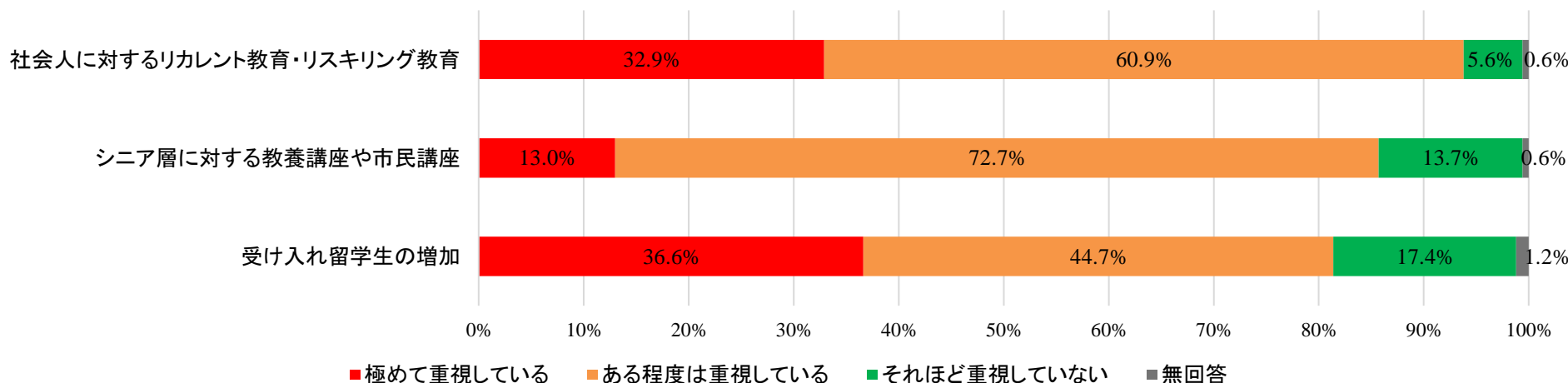
・1都3県(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県) 53、愛知県 15、2府1県(大阪府、京都府、兵庫県) 28、その他 65

・1000人未満 34、2000人未満 27、4000人未満 31、8000人未満 25、8000人以上 33、無回答 11

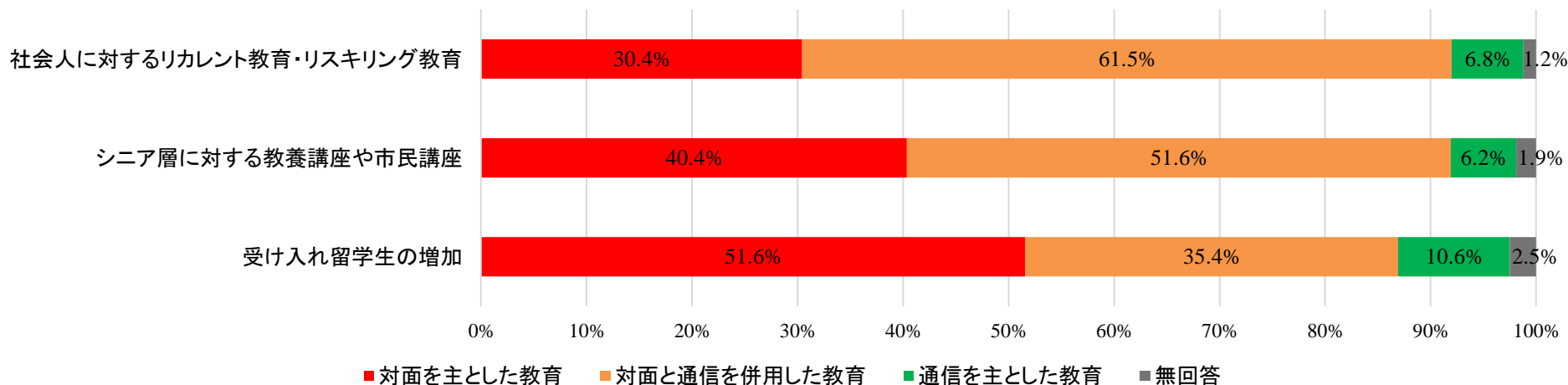
大学経営に関する認識(18歳人口の減少を見据えた新たな需要獲得方策)

- 学校法人理事長調査によると、18歳人口の減少を見据えた新たな獲得方策として、「極めて重視している」の割合が最も高かったのは、留学生の増加(36.6%)、次いで、リカレント・リスキング教育(32.9%)、シニア層向けの講座(13.0%)の順になっている。
- 教育機会提供の手段としては、留学生は「対面を主とした教育」が「対面と通信の併用」を上回り、シニア層向け講座やリカレント・リスキング教育では「対面と通信の併用」が「対面を主とした教育」を上回っている。

18歳人口の減少を見据えた新たな需要獲得方策／重要度



18歳人口の減少を見据えた新たな需要獲得方策／教育機会提供の手段



(3) 国公私の設置者別の状況

関連データ

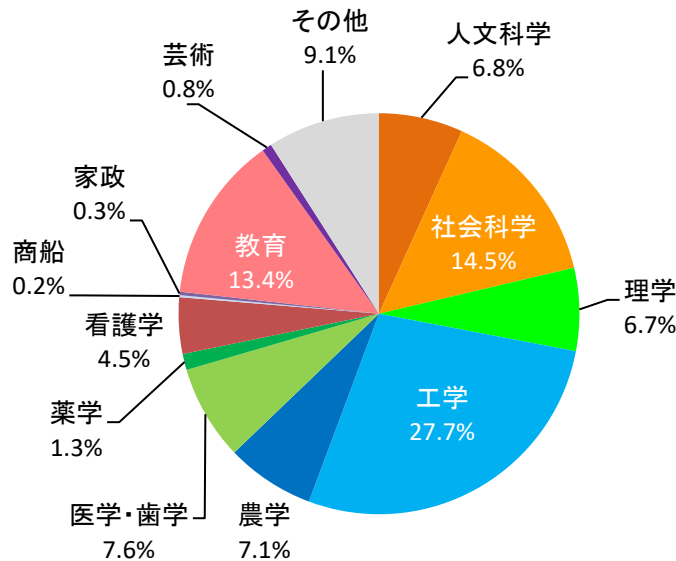
国公私別 学生数・構成比率(令和4年度)

大学数は国公私が約 1 : 1 : 8 だが、学生数は約 1.5 : 0.5 : 8。国立は自然科学系や教育系が多く、公立は看護学、私立は人文社会系が多い。

国立大学(86大学)

人文学	29,221人
社会科学	62,665人
理学	28,816人
工学	119,370人
農学	30,791人
医学・歯学	32,978人
薬学	5,580人
看護学	19,602人
商船	691人
家政	1,199人
教育	57,740人
芸術	3,403人
その他	39,050人

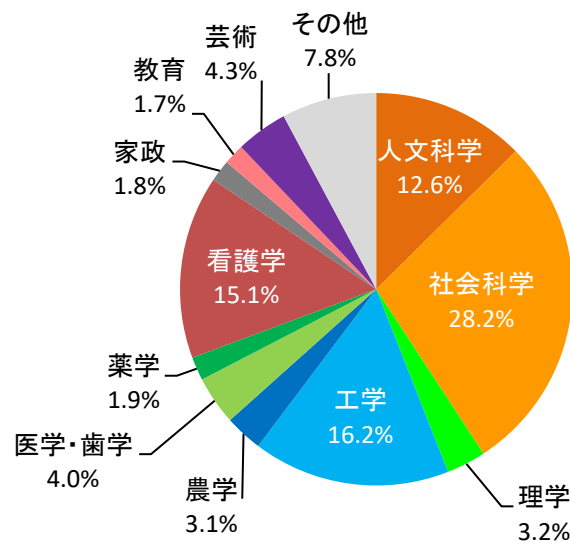
合計 431,106人



公立大学(99大学)

人文学	18,077人
社会科学	40,470人
理学	4,646人
工学	23,309人
農学	4,458人
医学・歯学	5,762人
薬学	2,778人
看護学	21,648人
家政	2,578人
教育	2,433人
芸術	6,138人
その他	11,216人

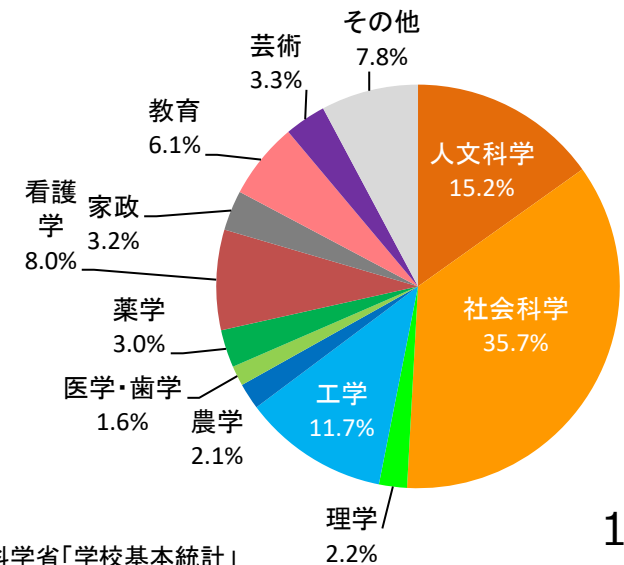
合計 143,513人



私立大学(619大学)

人文学	311,729人
社会科学	734,960人
理学	46,058人
工学	240,122人
農学	43,244人
医学・歯学	33,072人
薬学	62,157人
看護学	165,350人
家政	66,108人
教育	126,101人
芸術	68,314人
その他	160,382人

合計 2,057,597人



出典: 文部科学省「学校基本統計」

国立大学の種類・規模(R5.4.1現在)

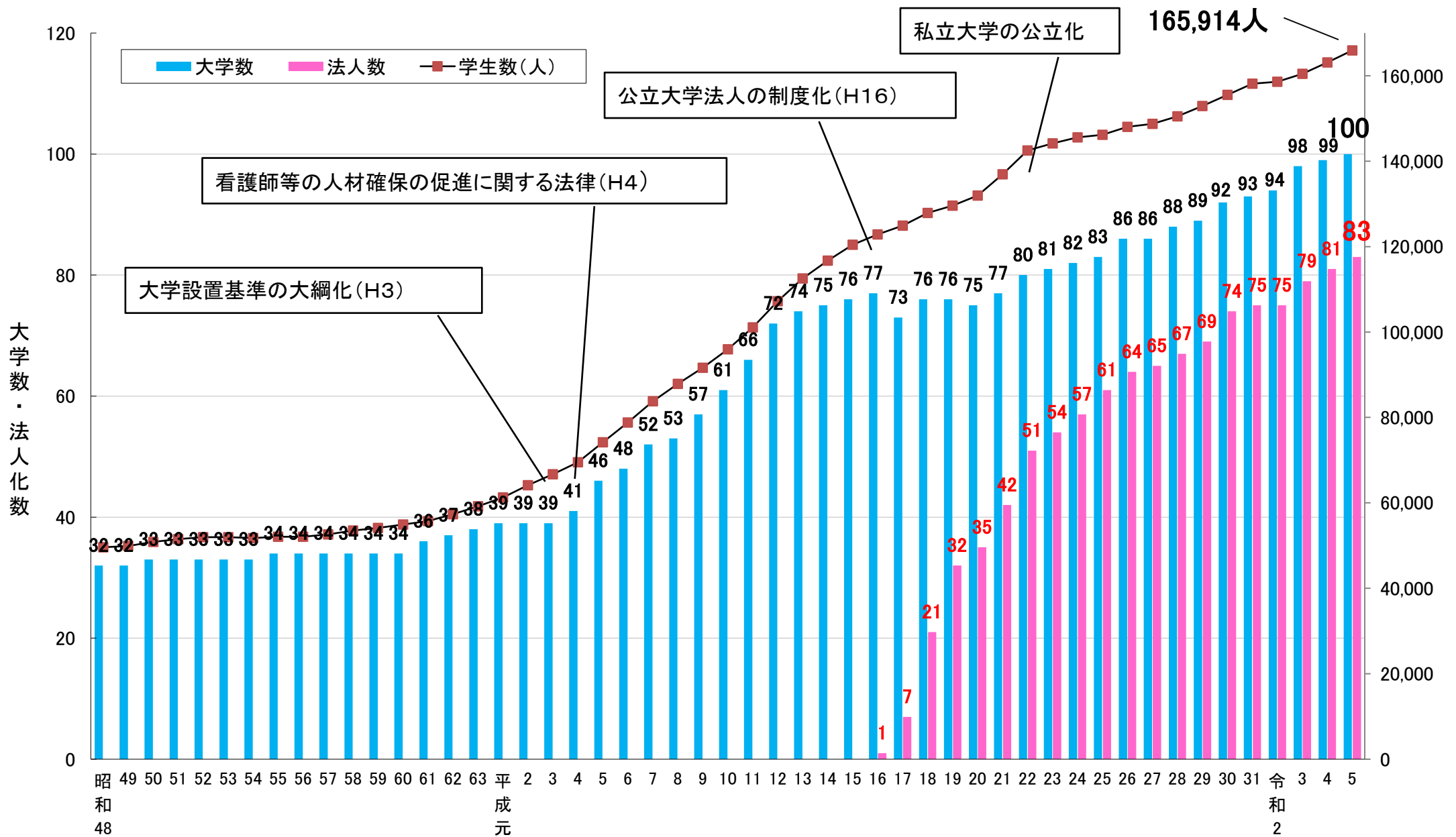
国立大学は86大学あり、47の総合大学と33の専門大学、2つの女子大学と4つの大学院大学からなっている。

86 大学	総合 47	7学部以上	23		
		6学部	5	〔山形、徳島、香川、高知、佐賀〕	
		5学部	9	〔弘前、茨城、宇都宮、埼玉、横国、岐阜、三重、大分、宮崎〕	
		4学部	8	〔岩手、秋田、群馬、※金沢、福井、山梨、和歌山、鳥取〕	
		3学部	2	〔※福島、滋賀〕	
	その他 39	専門	教員養成系	11	〔北海道教育、宮城教育、東京学芸、上越教育、愛知教育、京都教育、大阪教育、兵庫教育、奈良教育、鳴門教育、福岡教育〕
			工学	10	〔室蘭工業、北見工業、東京農工②、※東京工業⑥、電気通信、長岡技術科学、名古屋工業、豊橋技術科学、京都工芸繊維、九州工業②〕
			医学	4	〔旭川医科、東京医科歯科②、浜松医科、滋賀医科〕
			社会	2	〔小樽商科、一橋⑤〕
			外国語	1	〔東京外国語③〕
			芸術	1	〔東京芸術②〕
			体育	1	〔鹿屋体育〕
			海洋	1	〔東京海洋③〕
			畜産	1	〔帯広畜産〕
			障害	1	〔筑波技術②〕
女子大学	2	〔お茶の水③、奈良女子④〕			
大学院大学	4	〔政策研究、総合研究、北陸先端科学技術、奈良先端科学技術〕			

・※は学群等制度を持つ大学
 ・○の中の数字は学部数
 ・赤字は医学部を持つ大学

公立大学の大学数・法人数・学生数の推移

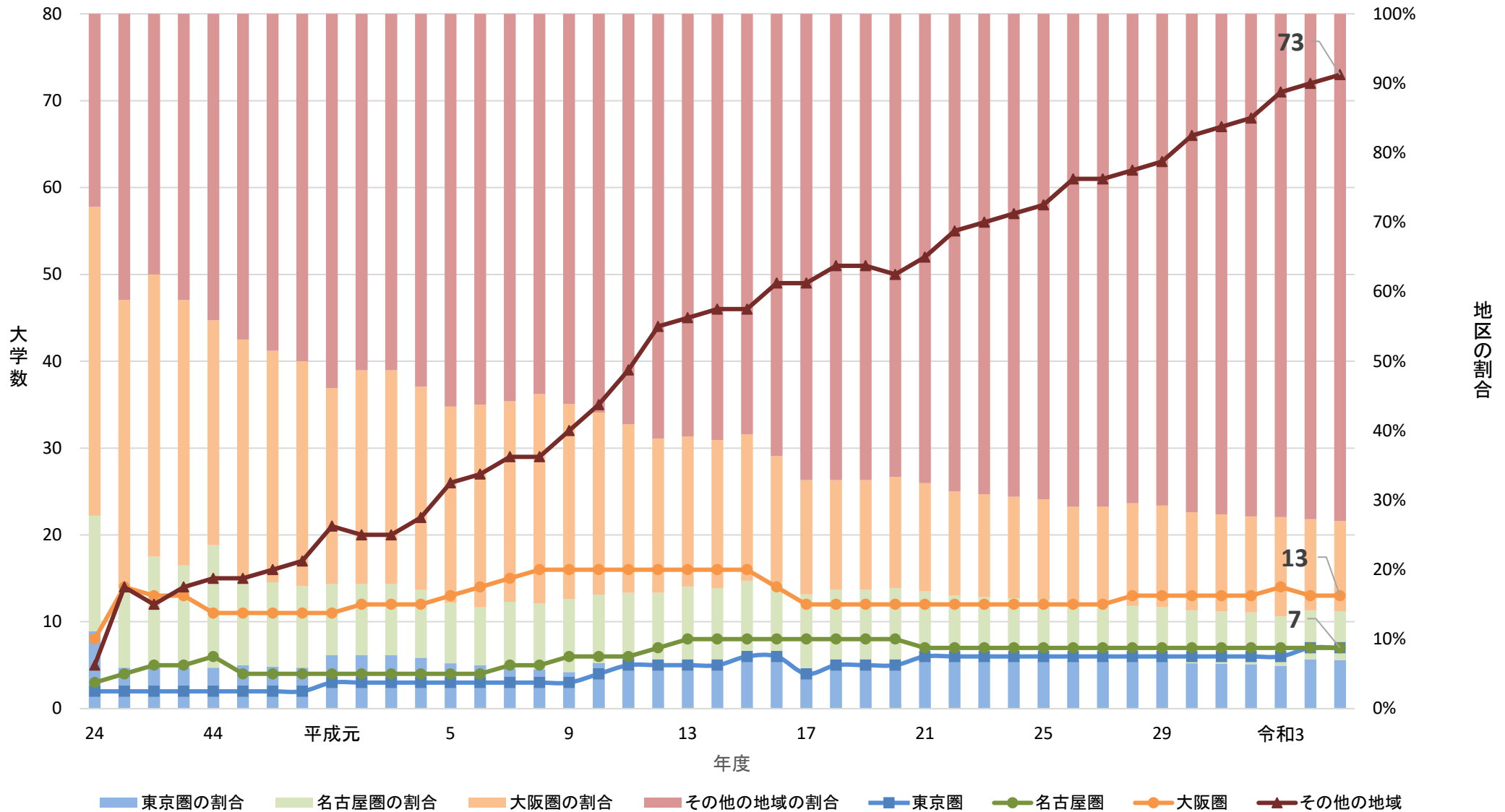
大学数・学生数ともに平成以降急増。法人数も平成16年度の公立大学法人制度導入以降急増。



【出典】学校基本統計 ※大学数に、募集停止の大学は含まない。また、大学数、法人数、学生数ともに公立短期大学分は含まない。

公立大地域分布状況の推移

昭和中期までは、大阪圏に約3割の公立大学が集中していたが、平成以降、全国的な公立大学の設置に伴い、地方圏での割合が上昇、現在では約7割となっている。



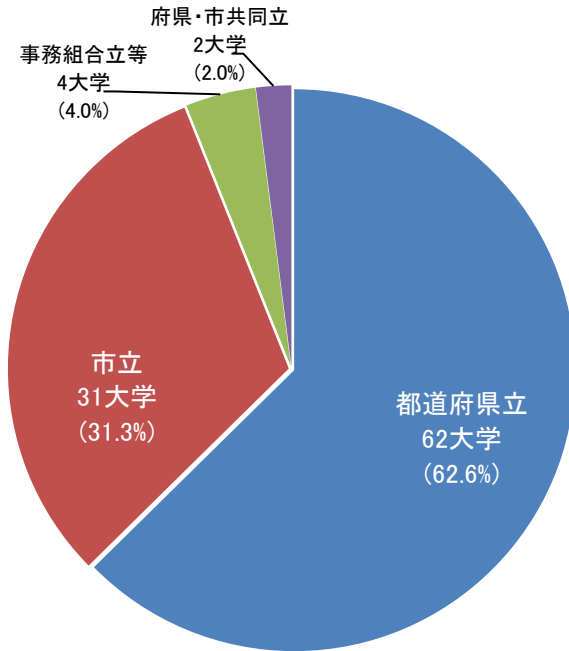
出典【全国大学一覧】

※東京圏(埼玉、千葉、東京、神奈川)、名古屋圏(岐阜、愛知、三重)、大阪圏(滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)

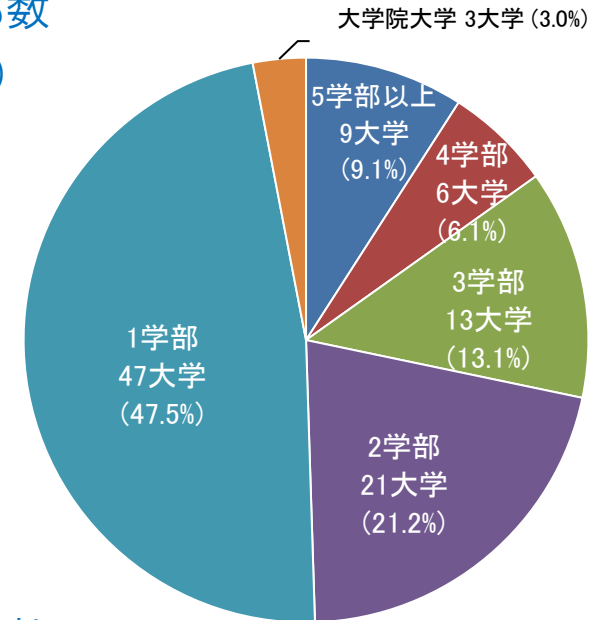
公立大学の特徴

- 公立大学は、都道府県立大学が62.6%であり、単科大学が半数となっている。近年は、中核市・一般市による設置が増えている。
- 地域のニーズに即した学部が設置されており、学生数2,000人以下の大学が4分の3を占めている。

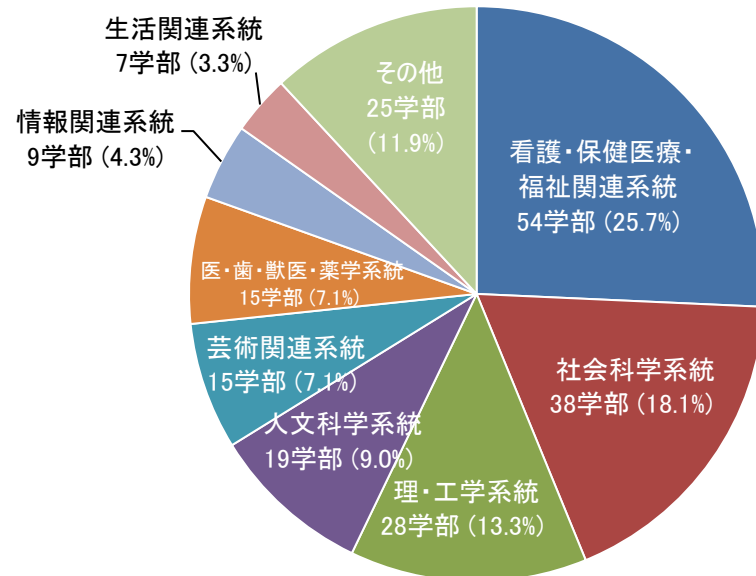
■ 設置団体の種別



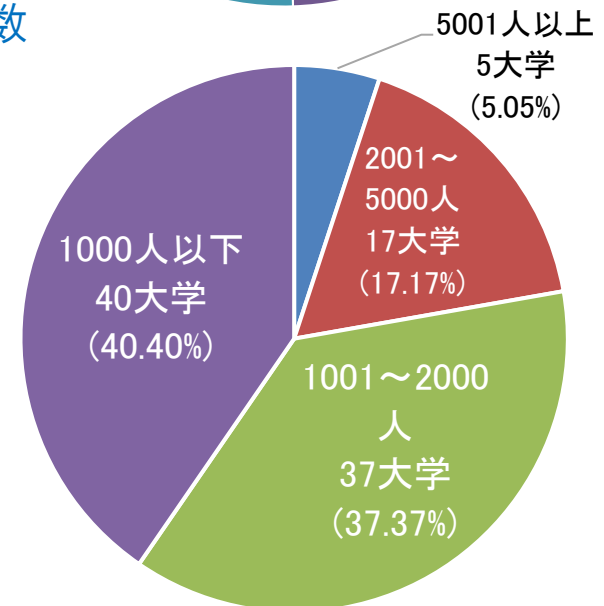
■ 設置している学部数 (大学院大学を除く)



■ 系統別学部数

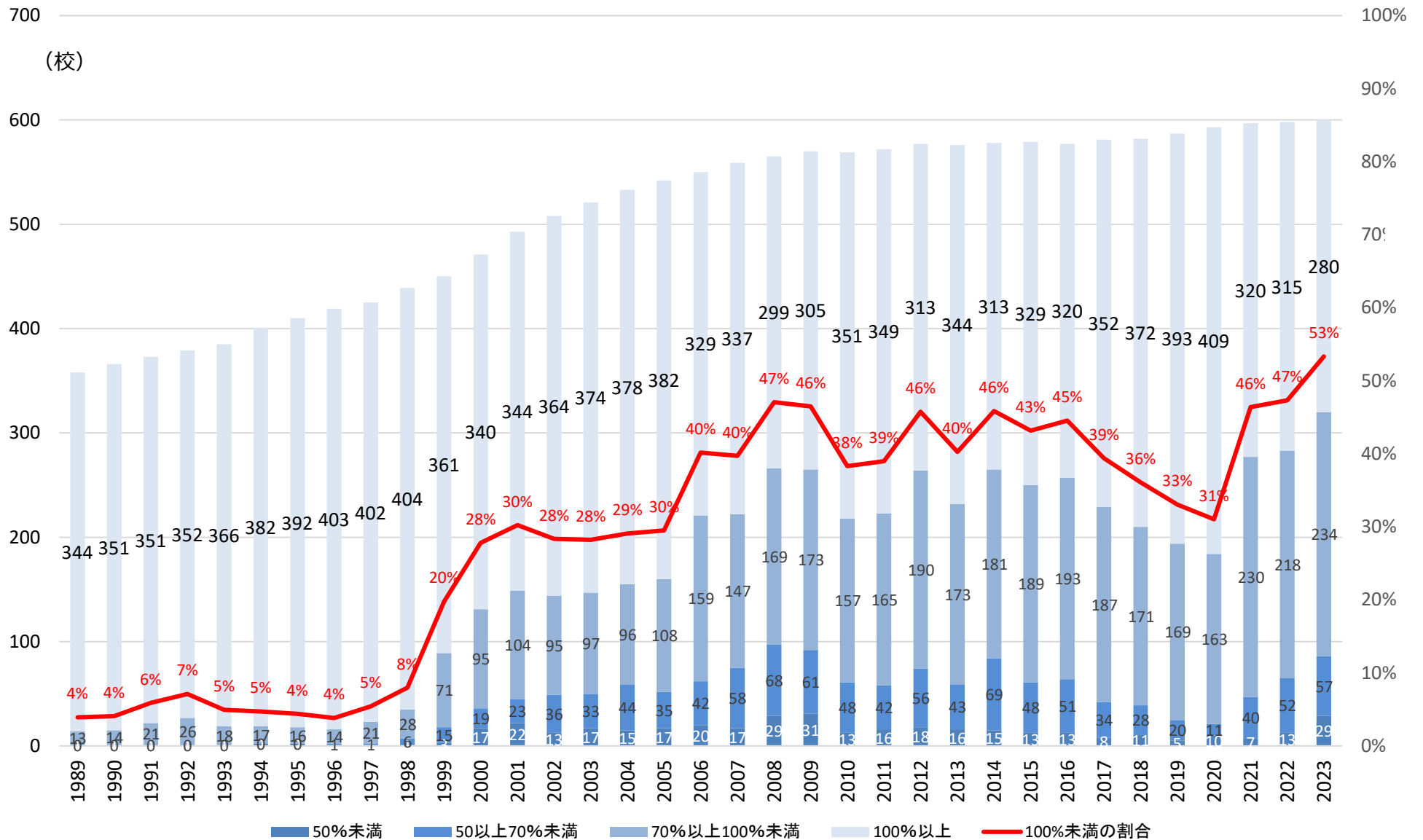


■ 学生数別大学数



定員未充足の私立大学数

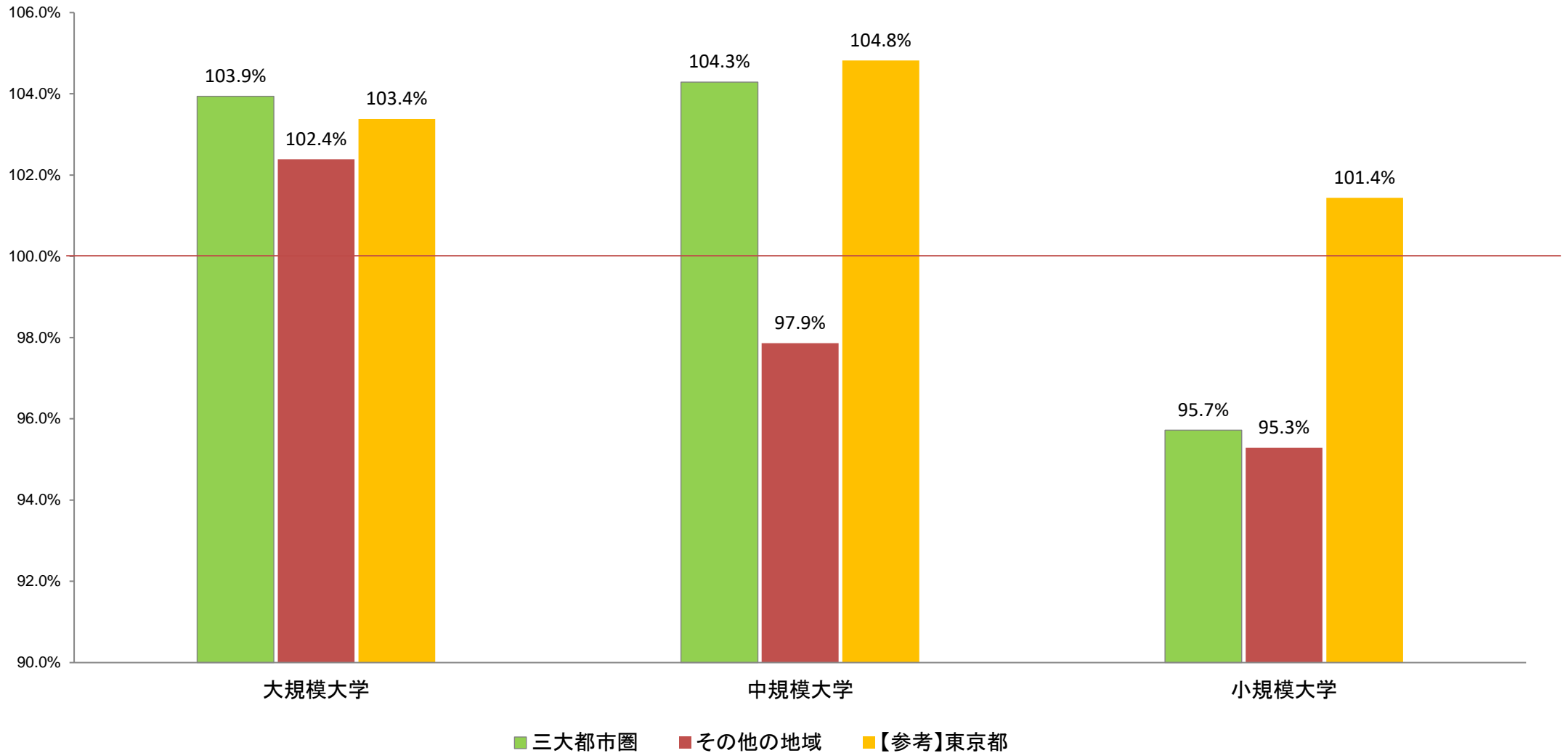
私立大学の5割以上が入学定員未充足状態となっている。



(出典) 日本私立学校振興・共済事業団「令和5(2023)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」より作成。

三大都市圏・地方の入学定員充足率（私立大学）

- 大規模大学は、三大都市圏と地方のどちらも定員を充足しているが、中小規模大学では、地方は定員割れとなっている。
- 小規模大学は、地方だけでなく三大都市圏であっても定員割れとなっているが、東京は定員を充足している。



※大規模大学: 収容定員が8,000人以上の大学、中規模大学: 収容定員が4,000人~7,999人の大学、小規模大学: 収容定員が3,999人以下の大学。

※三大都市圏は、埼玉・千葉・東京・神奈川・愛知・京都・大阪・兵庫。

※小数点第二位を四捨五入しているためグラフの合計値が一致しない場合がある。

私立大学における地域別の入学定員充足率

令和5年度における私大の入学定員充足率は、平成27年度と比較して、北海道・九州を除いた全地域で減少している。



地域区分

北海道(北海道)
 東北(青森・岩手・秋田・山形・福島)
 宮城(宮城)
 関東(茨城・栃木・群馬)

埼玉(埼玉)
 千葉(千葉)
 東京(東京)
 神奈川(神奈川)

甲信越(新潟・山梨・長野)
 北陸(富山・石川・福井)
 東海(岐阜・静岡・三重)
 愛知(愛知)

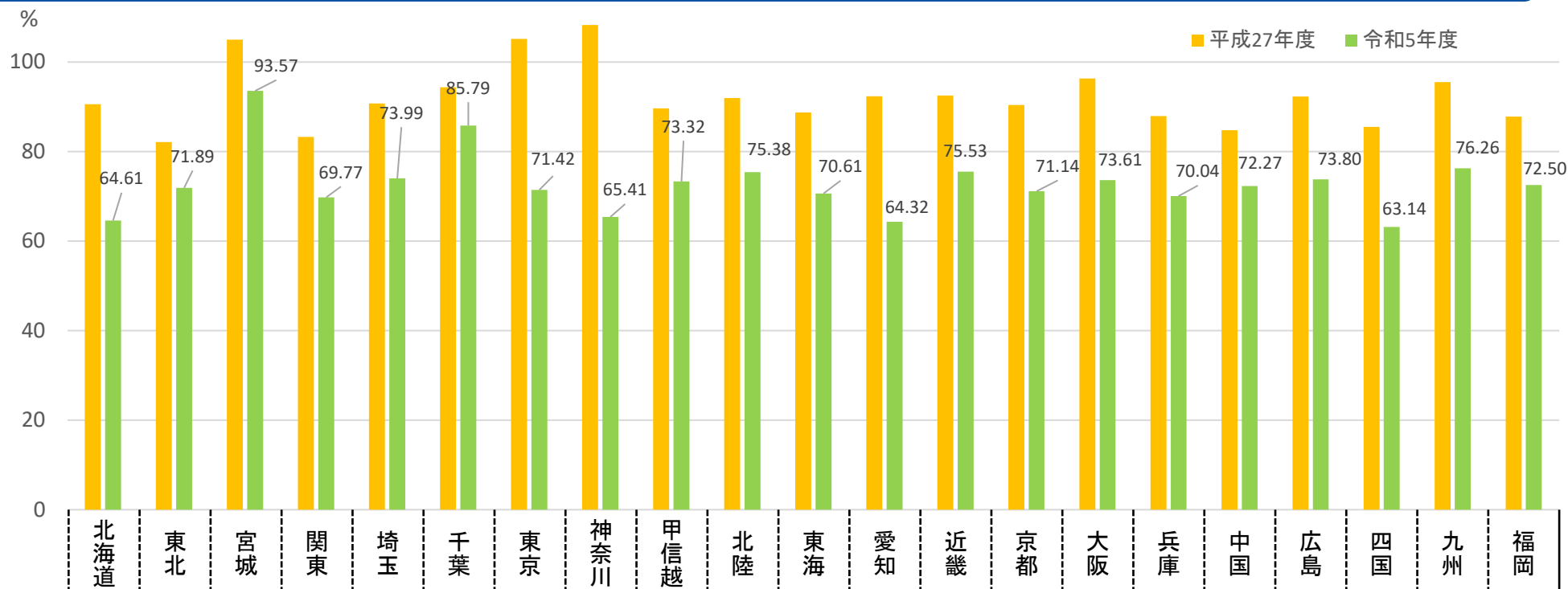
近畿(滋賀・奈良・和歌山)
 京都(京都)
 大阪(大阪)
 兵庫(兵庫)

中国(鳥取・島根・岡山・山口)
 広島(広島)
 四国(徳島・香川・愛媛・高知)
 九州(佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄)
 福岡(福岡)

(出典)日本私立学校振興・共済事業団「私立大学・短期大学等入学志願動向」を基に作成

私立短期大学における地域別の入学定員充足率

令和5年度における私立短大の入学定員充足率は、平成27年度と比較して、全地域で減少している。



年度	区分	地域区分																				
		北海道	東北	宮城	関東	埼玉	千葉	東京	神奈川	甲信越	北陸	東海	愛知	近畿	京都	大阪	兵庫	中国	広島	四国	九州	福岡
平成27年度	入学者	2,558	2,434	1,071	2,256	2,042	1,840	7,093	3,085	2,263	1,802	2,963	3,999	1,332	2,038	5,479	3,280	1,928	1,089	1,753	3,625	4,021
	入学定員	2,825	2,965	1,020	2,710	2,250	1,950	6,744	2,850	2,525	1,960	3,340	4,330	1,440	2,255	5,690	3,730	2,275	1,180	2,050	3,795	4,580
令和5年度	入学者	1,373	1,463	1,165	1,528	1,428	1,364	3,339	1,681	1,613	1,078	1,843	2,021	929	1,188	3,110	1,814	1,402	583	1,105	2,551	2,563
	入学定員	2,125	2,035	1,245	2,190	1,930	1,590	4,675	2,570	2,200	1,430	2,610	3,142	1,230	1,670	4,225	2,590	1,940	790	1,750	3,345	3,535

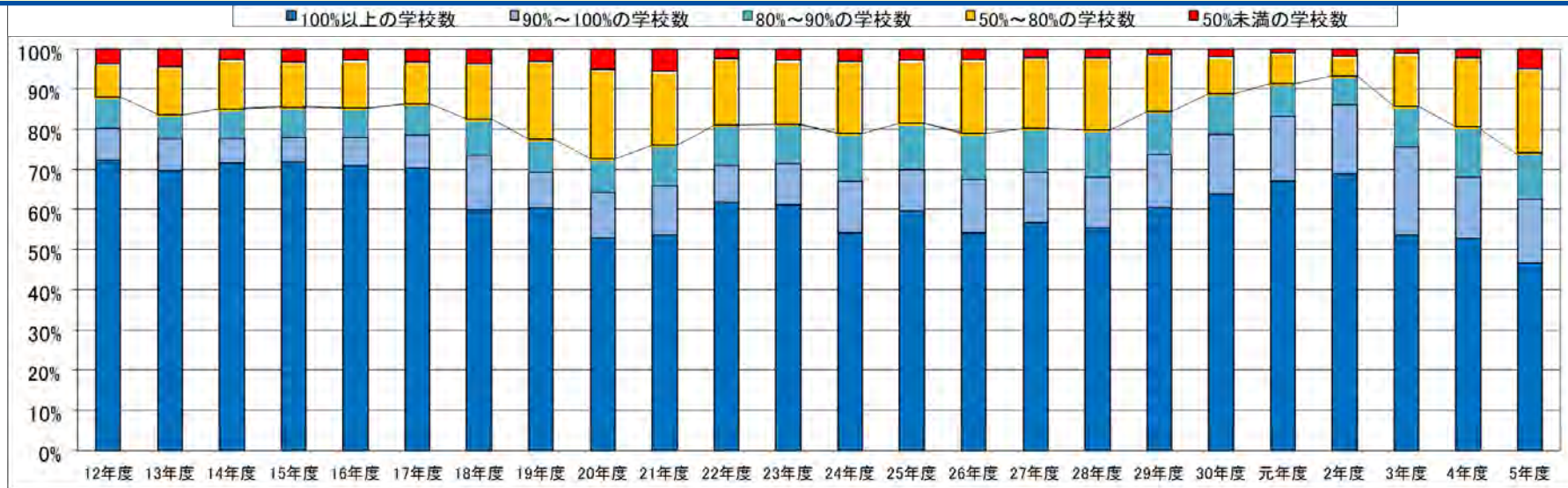
地域区分

- | | | | | |
|--------------------|----------|---------------|---------------|---------------------------|
| 北海道(北海道) | 埼玉(埼玉) | 甲信越(新潟・山梨・長野) | 近畿(滋賀・奈良・和歌山) | 中国(鳥取・島根・岡山・山口) |
| 東北(青森・岩手・秋田・山形・福島) | 千葉(千葉) | 北陸(富山・石川・福井) | 京都(京都) | 広島(広島) |
| 宮城(宮城) | 東京(東京) | 東海(岐阜・静岡・三重) | 大阪(大阪) | 四国(徳島・香川・愛媛・高知) |
| 関東(茨城・栃木・群馬) | 神奈川(神奈川) | 愛知(愛知) | 兵庫(兵庫) | 九州(佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄) |
| | | | | 福岡(福岡) |

(出典)日本私立学校振興・共済事業団「私立大学・短期大学等入学志願動向」を基に作成

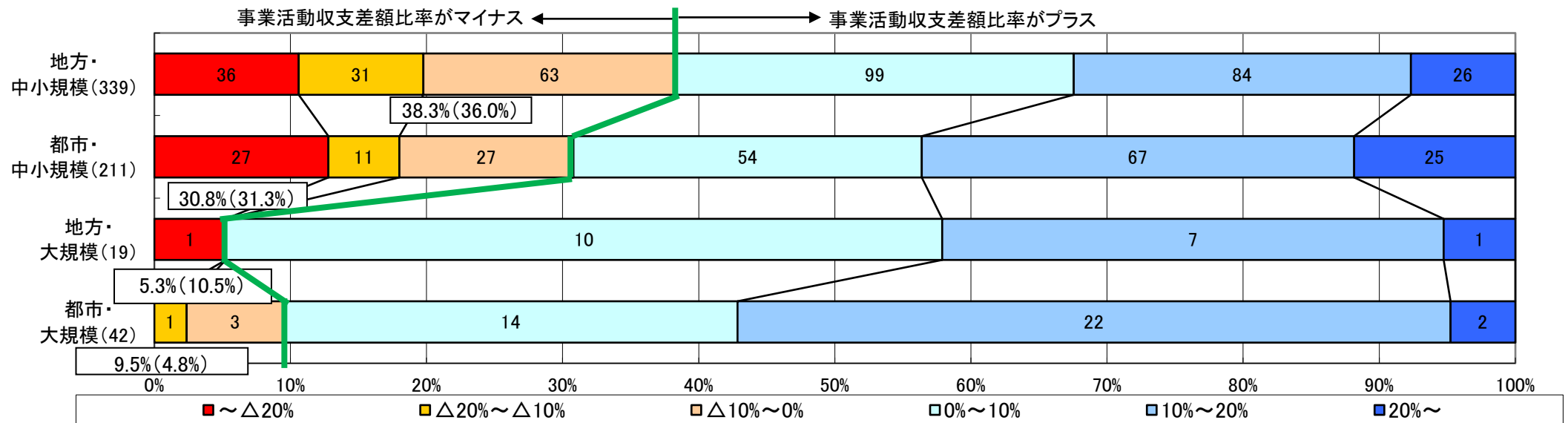
私立大学の経営状況について

私立大学の約53%が入学定員未充足（約26%が充足率80%未満）となっている。



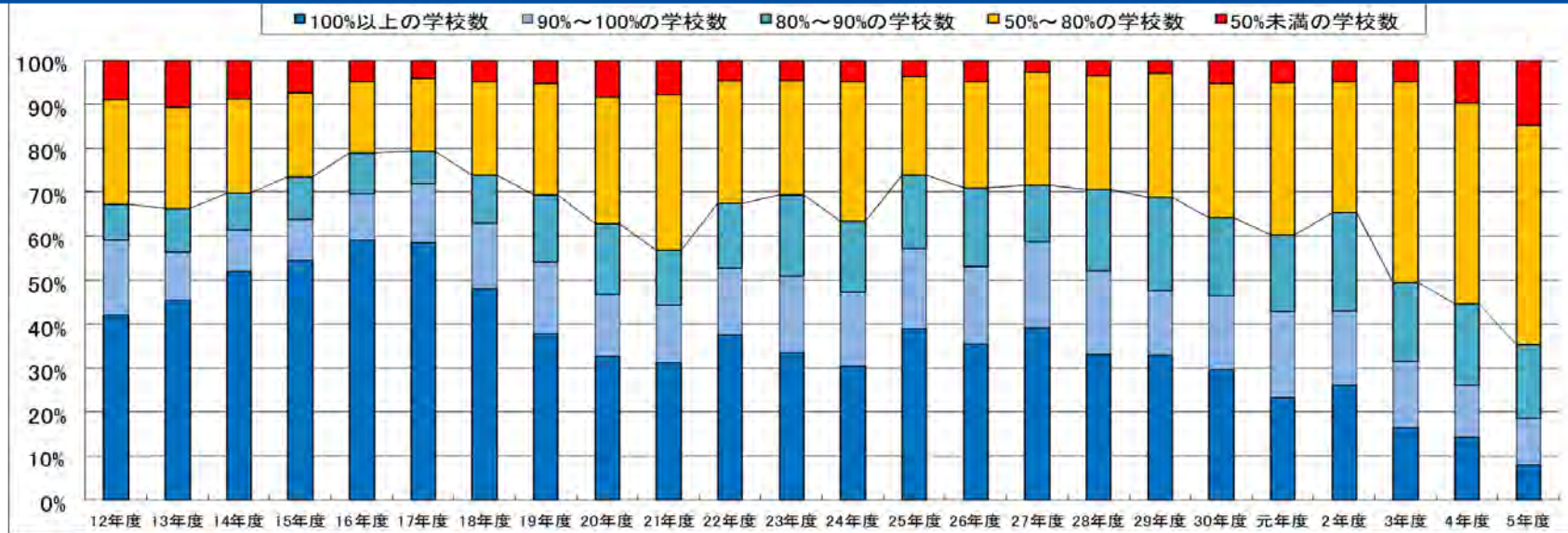
(日本私立学校振興・共済事業団「令和5(2023)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」より作成)

地方・中小私大の収支状況は約4割が赤字傾向となっている。



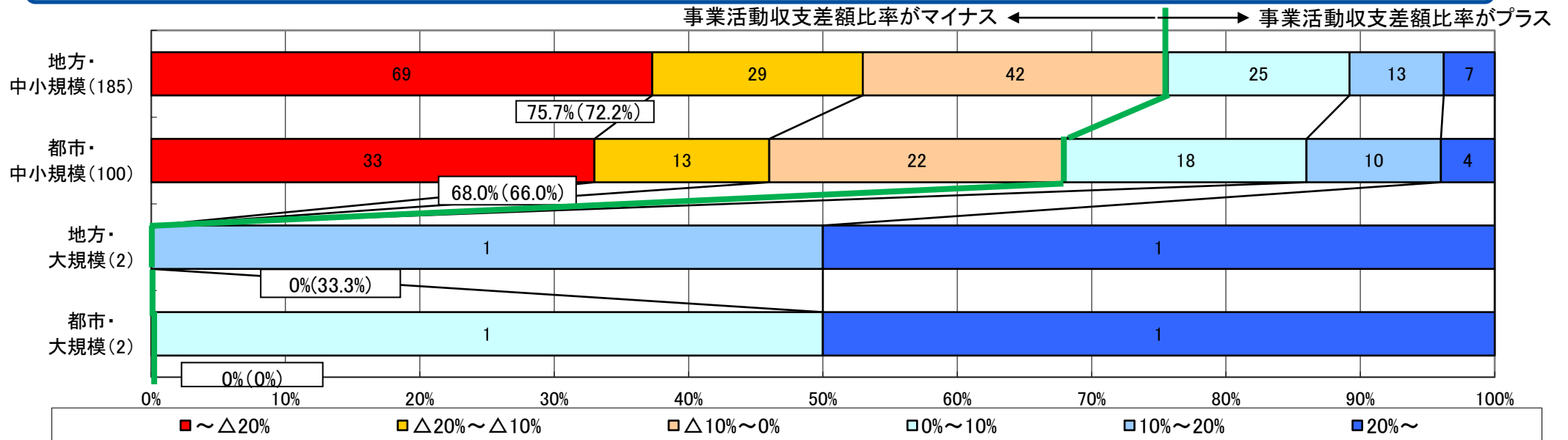
私立短期大学の経営状況について

私立短大の約92%が入学定員未充足（約65%が充足率80%未満）となっている。



(日本私立学校振興・共済事業団「令和5(2023)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」より作成)

地方・中小私立短大の収支状況は約7割が赤字傾向となっている。

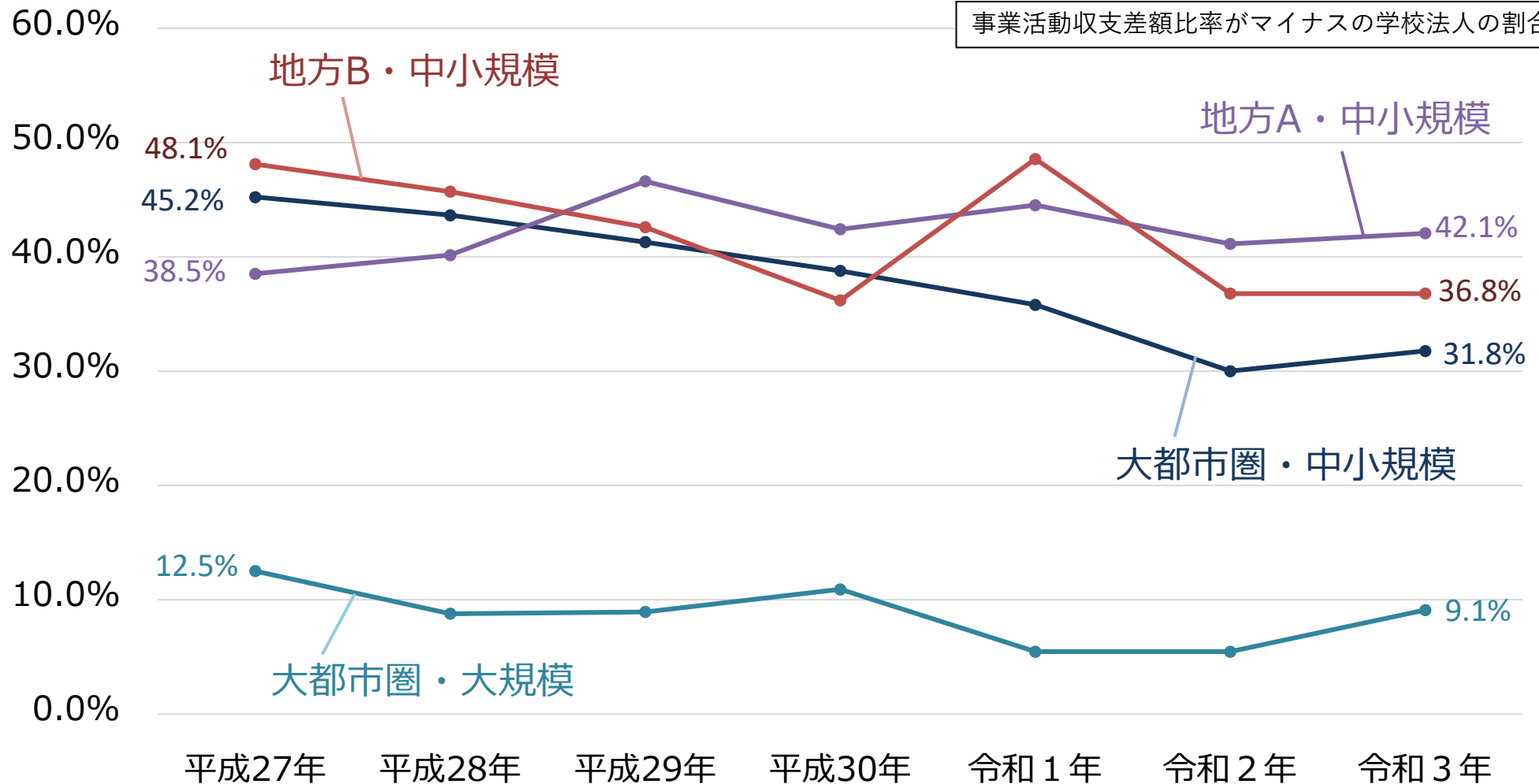


※ [] は事業活動収支差額比率がマイナスの割合で () は前年度の割合

日本私立学校振興・共済事業団「今日の私学財政 (令和4年度版)」より作成

私立大学の経営状況の推移

事業活動収支差額比率（平成27年以降）がマイナスの私立大学（短期大学を除く）の割合は、地方A（北関東、北陸、甲信越、東海、東近畿、中国、四国の24県）の中小規模の私立大学の赤字傾向が強まっている。



※大都市圏：東京圏、京阪神、愛知県の1都2府5県

※地方A：北関東、北陸、甲信越、東海、東近畿、中国、四国の24県

※地方B：北海道、東北、九州・沖縄の15県

※大規模：在籍学生数が8,000人以上

※中小規模：在籍学生数が8,000人未満

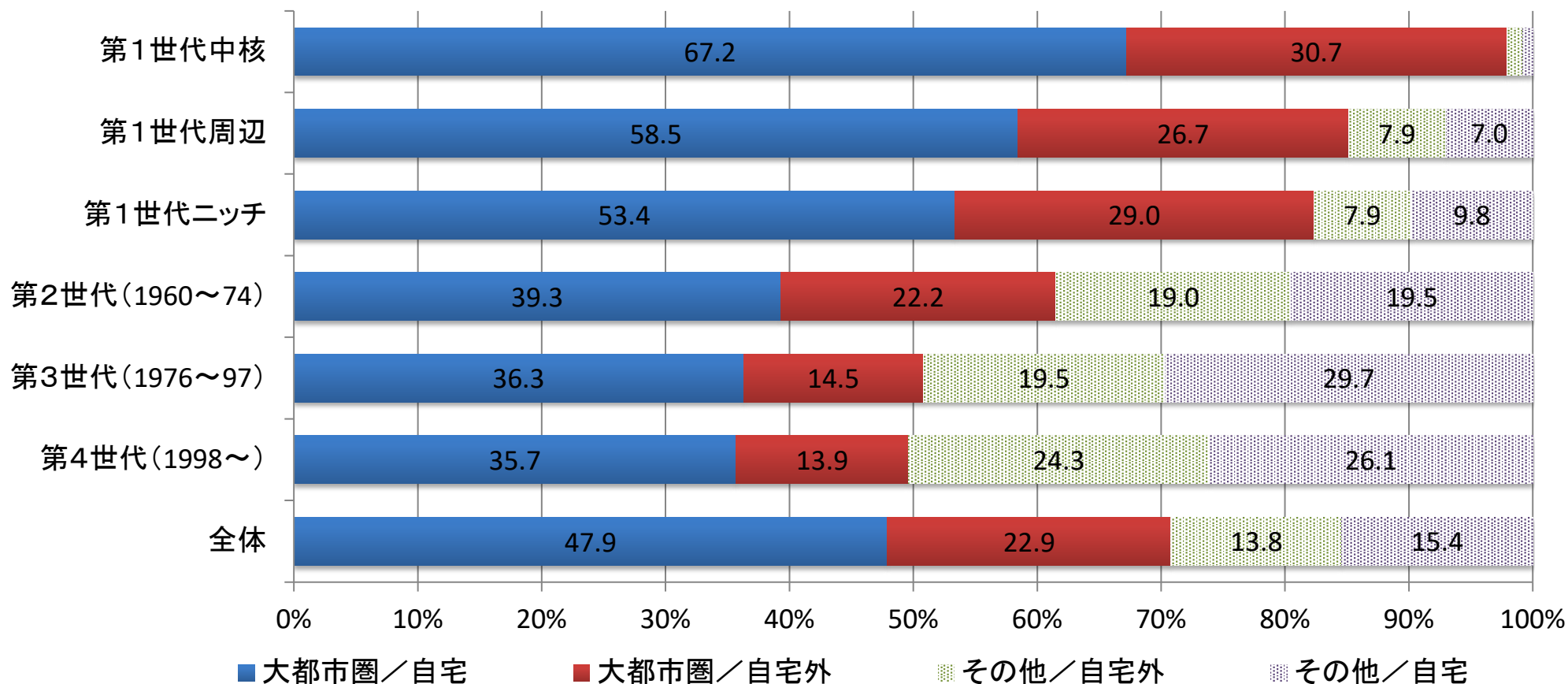
※地方A・大規模、地方B・大規模は該当する私立大学数が10以下のため省略

※大都市圏、地方A、地方Bの地域区分は、朴澤泰男「大学の受験パターンと出身地域の関係について」『高校生の高等教育進学動向に関する調査研究 第二次報告書』（2023年）を参照。

出典：日本私立学校振興・共済事業団「今日の私学財政」を基に作成

新設大学と地元進学

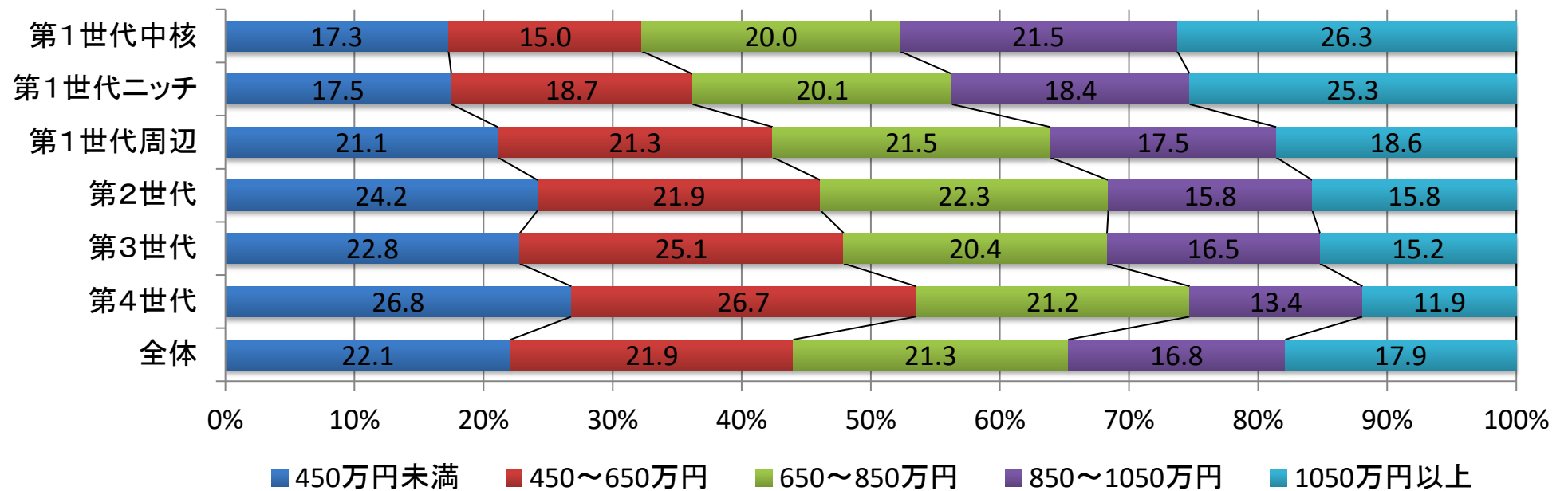
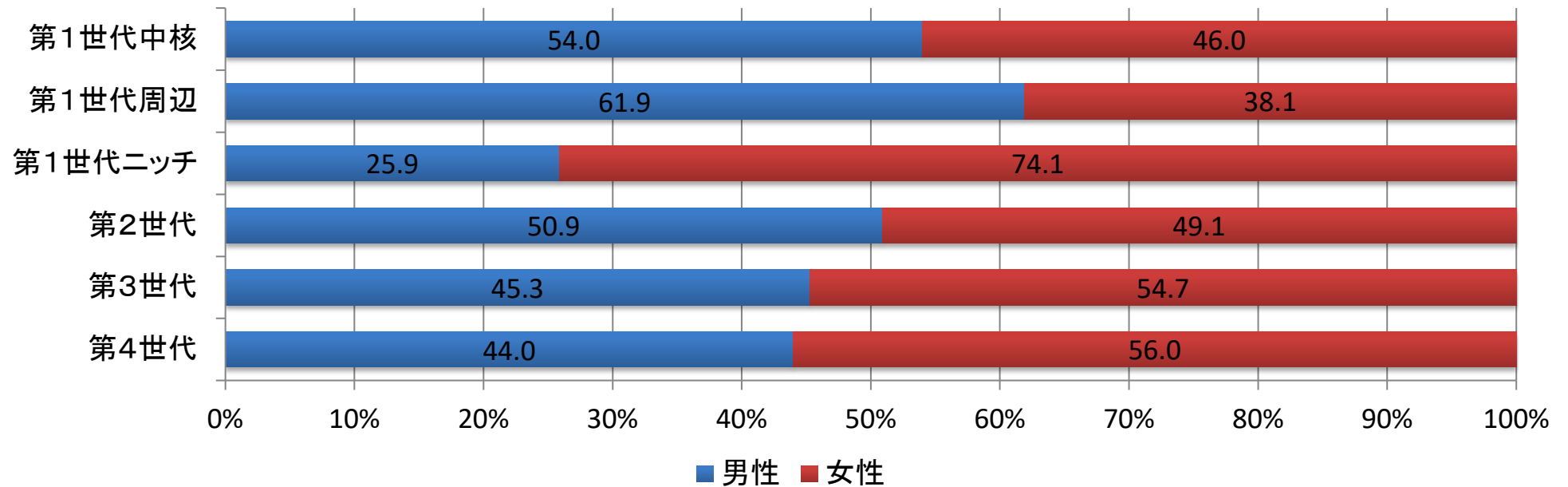
- 1975年以降に設置された私立大学（第3世代、第4世代）は、大都市圏（東京・神奈川・埼玉・千葉・京都・大阪・兵庫・愛知）以外の地域の学生が約半数となっており、地方における高等教育へのアクセスの拡大に寄与。
- 大都市圏以外の私立大学における自宅通学者は半数程度にとどまる。



※上記の私立大学の分類は、金子元久(1996)「高等教育大衆化の担い手」、『学習社会におけるマス高等教育の構造と機能に関する研究』、放送教育開発センター研究報告91, pp.37-59による。
 第1世代: 高等教育の大拡張期までに設立された大学(大学設置年～1959年)。中核大学は大規模で私立大学の中では中核的存在である大学10校。周辺大学は中核大学に含まれない規模が中～大の大学(1992年時点の在学者が4000人以上の大学)。ニッチ大学は特定の需要に対応しながら発展してきた小規模大学(女子大学、医歯薬系・宗教系・芸術系の単科大学)
 第2世代: 高等教育大拡張期(1960～74年)に設立された大学。
 第3世代: 大拡張期以降(1975年～)に設立された大学。
 第4世代: 1998年以降に設立された大学。

新設大学の学生の特徴

1975年以降に設置された私立大学（第3世代、第4世代）は、女子学生や家計年収が低い学生の比率が比較的高い。



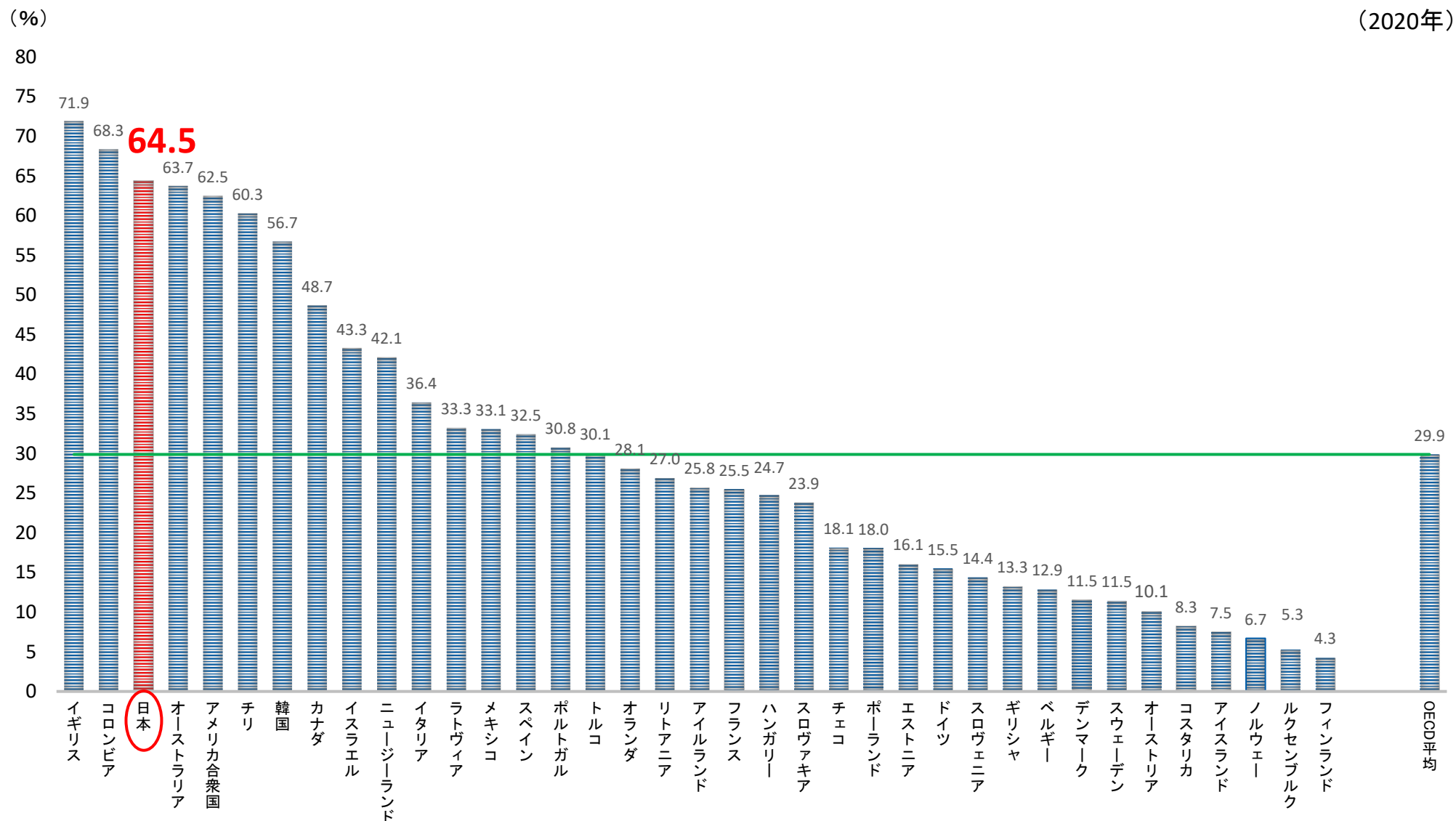
出典：私立大学の振興に関する検討会議（第1回）濱中委員提出資料を基に作成

(4) 高等教育の財政措置

関連データ

高等教育機関への教育支出における私費負担割合

高等教育段階における私費負担の割合は、OECD加盟国の中で高い水準。



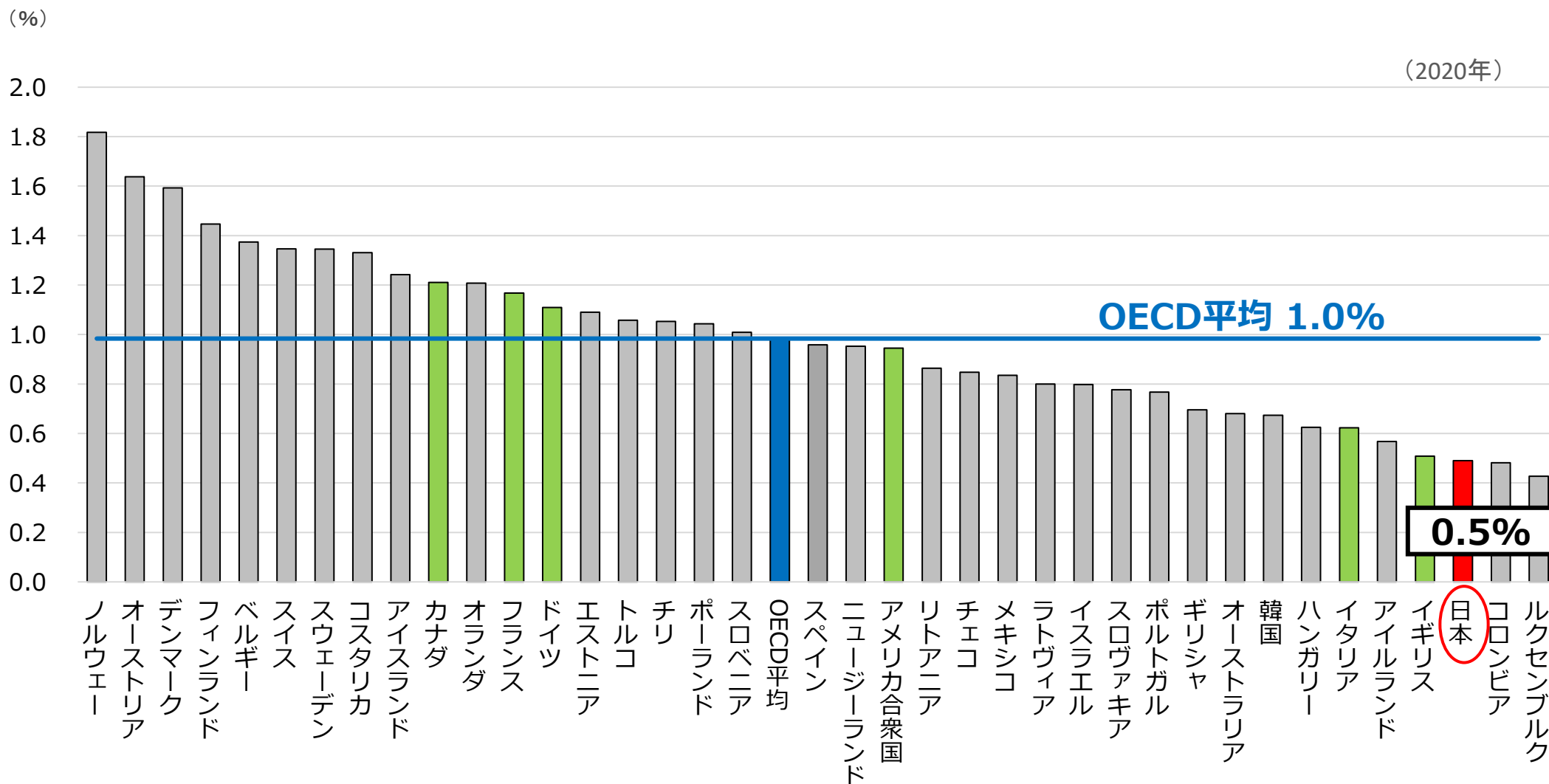
注1：OECD加盟38カ国のうち、スイスを除く。

注2：他の教育段階に係るデータが一部含まれる。

出典：OECD「Education at a Glance 2023（図表でみる教育2023）」

高等教育段階の教育機関に対する公財政支出(対GDP比)

国の経済規模（GDP）に対して、教育機関への公財政支出は、OECD諸国の中で極めて低い水準。

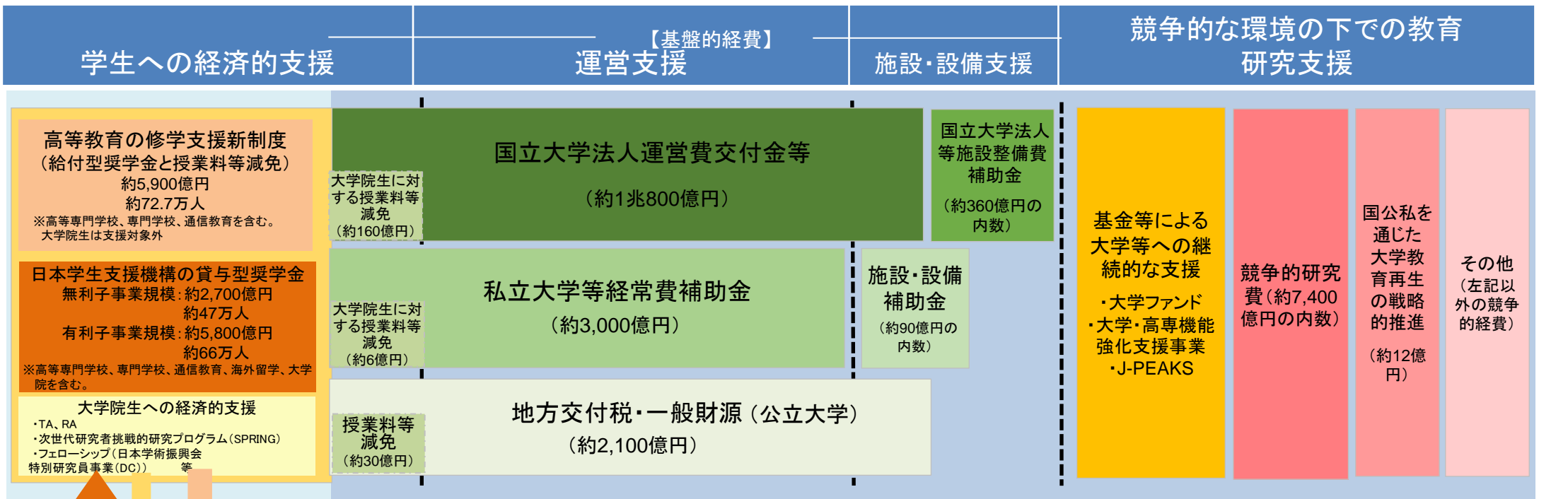


※データはOECD加盟38か国。
 ※グラフ緑色は日本以外のG7諸国。

出典：OECD「Education at a Glance 2023 (図表でみる教育2023)」
 TableC2.3 (Web Table) ([C2.3](#))

※我が国の参照年度は2020年度（令和2年度）。
 ※奨学金等の個人補助を含まない。
 ※分類不可（教育行政費等）を含まない。
 ※我が国のデータは、他の教育段階に係るデータが一部含まれる。

大学段階における財政措置と費用負担の仕組み



注) 財政措置は令和6年度予算(当初)をベースに算出。(国立大学法人運営費交付金は大学共同利用機関法人等も含む。国立大学法人等施設整備費補助金は大学共同利用機関法人及び国立高等専門学校機構分も含む。私立大学等経常費補助金は高等専門学校を設置する学校法人分も含む。施設・設備補助金は高等学校等を設置する学校法人分も含む。)公立大学は令和4年度の各都道府県市町村の各公立大学に対する当初予算を合計した数値。公立大学の授業料減免等は令和4年度の実績。(寄附金等の独自財源による実績を含む。)

大学数、学生数は令和5年度の数値(募集停止校を含む)。授業料等納付額は令和3年度の数値(大学学部・大学院・短期大学の合計)であり、高等教育の修学支援新制度における授業料等減免に要する額は含まない。

医療費は厚生労働省「令和4年度 医療費の動向」による令和4年度の額(Ⅲ 医療機関種類別の概算医療費 (1)入院・入院外計 表6-1 医療費の推移)。

研究収益等は文部科学省「大学等における産学連携等実施状況について」による令和4年度の額。(共同研究全体・受託研究全体の研究費受入額、治験等の試験・調査費受入額、知的財産権等収入額)

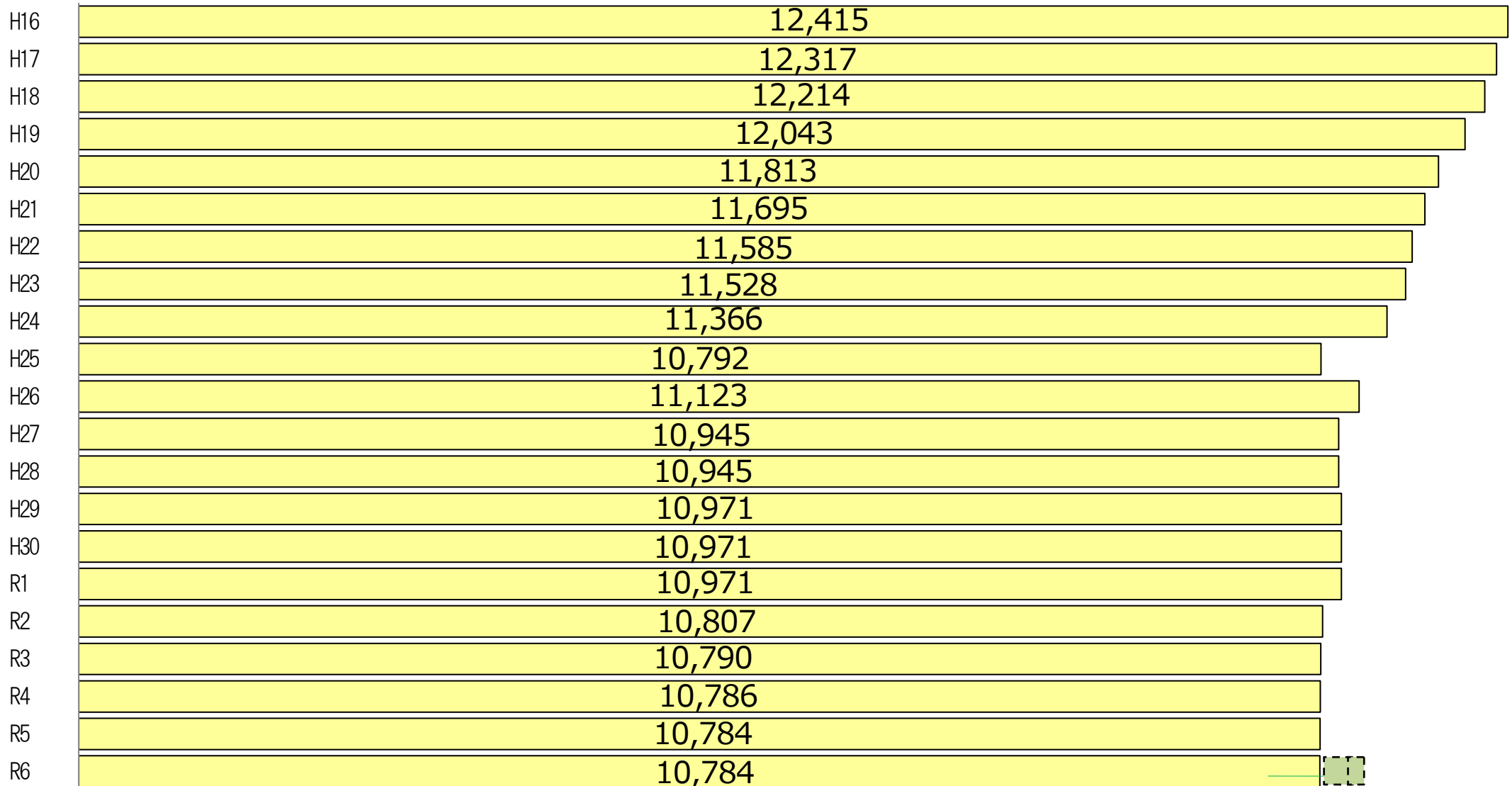
寄附金額については、1つの法人が大学以外の学校種を設置している場合には、当該学校種に対する寄附金も含まれる点に留意。

「高等教育の修学支援新制度」における授業料等減免に要する費用は、基盤的経費に含まれない。

国立大学法人運営費交付金予算額の推移

法人化以降は減少が続いたが、平成27年以降は同額程度が毎年度措置されている。

(単位：億円)



※平成25年度、平成26年度予算額には、国家公務員の給与減額措置の影響による増減がある。

※平成29年度・平成30年度予算額には、国立大学法人機能強化促進費を含む。

※令和2年度予算から、高等教育修学支援新制度の授業料等減免分を内閣府に計上。

令和5年度補正予算

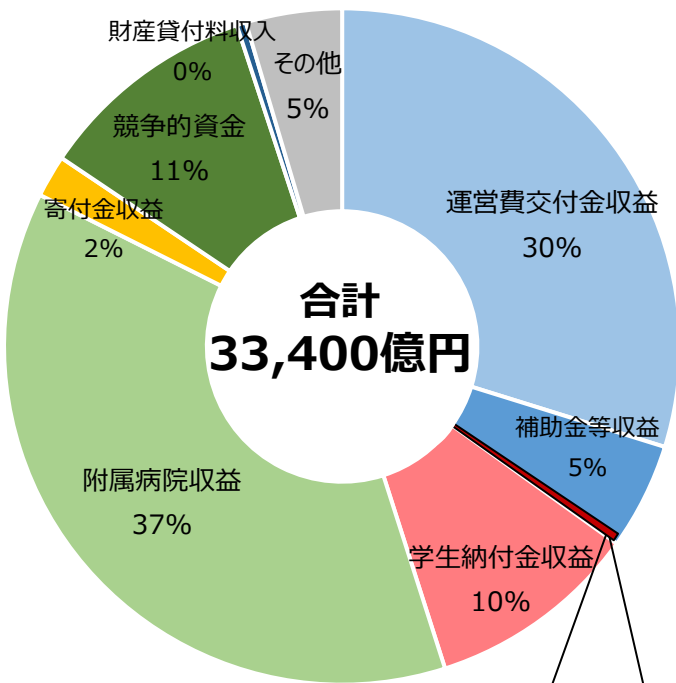
国立大学法人設備整備費補助金等 : 118億円

国立大学法人先端研究等施設整備費補助金 : 77億円

日本の大学の財政状況(収入)

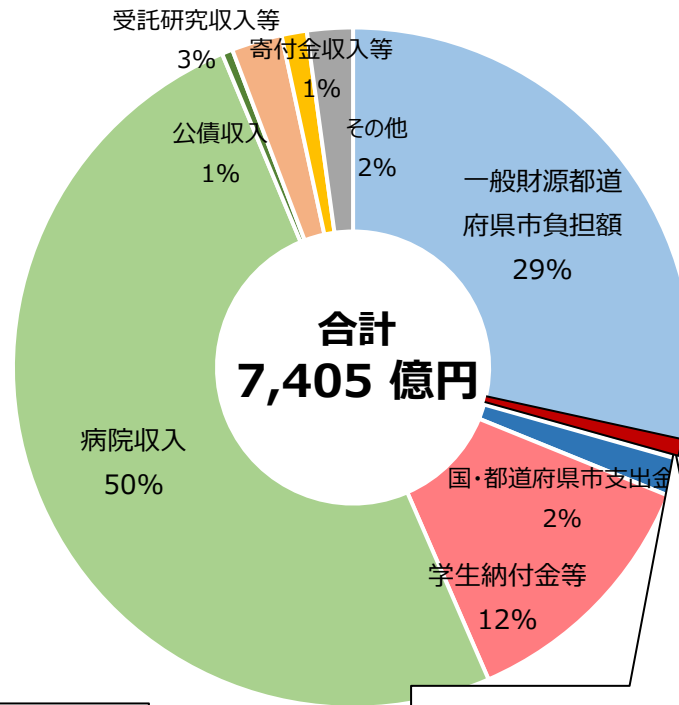
国立大学法人の収入の財源別比率は、公財政（運営費交付金，補助金等収益の合計）が35%、学生納付金が10%である。また、公立大学の財源別比率は、公財政（一般財源都道府県市負担額，国・都道府県市支出金の合計）が31%、学生納付金が12%である。これに対して、大学・短期大学を設置する学校法人（附属病院や設置する高等学校以下の学校の収入も含む）は、学生納付金が48%を占める。

国立大学法人の収入状況（令和3年度）
（經常収益）



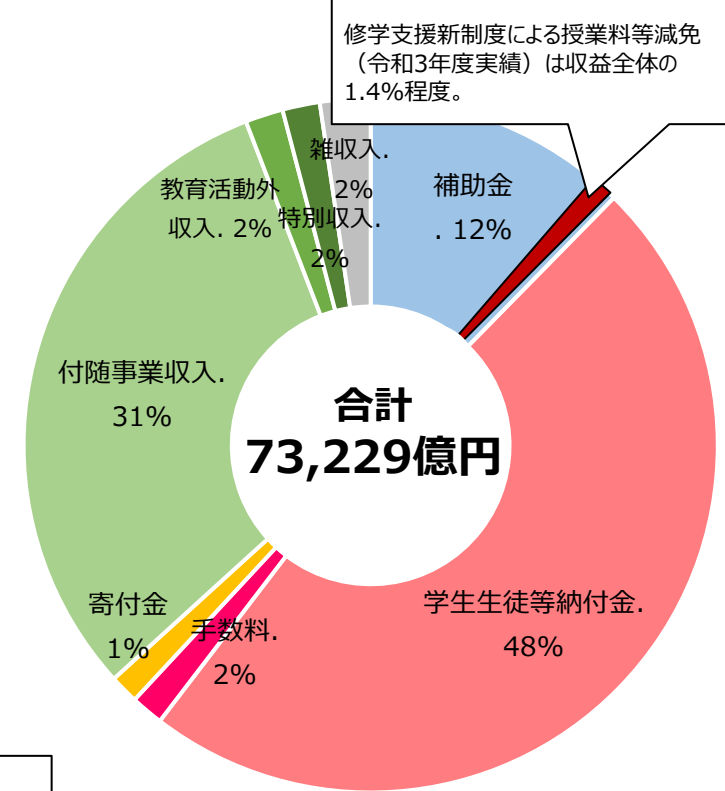
修学支援新制度による授業料等減免（令和3年度実績）は収益全体の0.5%程度。

公立大学の収入状況（令和3年度）



修学支援新制度による授業料等減免（令和3年度実績）は収益全体の1.1%程度。

大学・短期大学を設置する学校法人の収入状況（令和3年度）（事業活動収入）



修学支援新制度による授業料等減免（令和3年度実績）は収益全体の1.4%程度。

出典：各国立大学法人の令和3年事業年度の財務諸表を基に文部科学省作成

出典：公立大学実態調査（公立大学協会）令和3年度決算データを基に文部科学省作成

出典：日本私立学校振興・共済事業団「今日の私学財政（令和4年度版）」

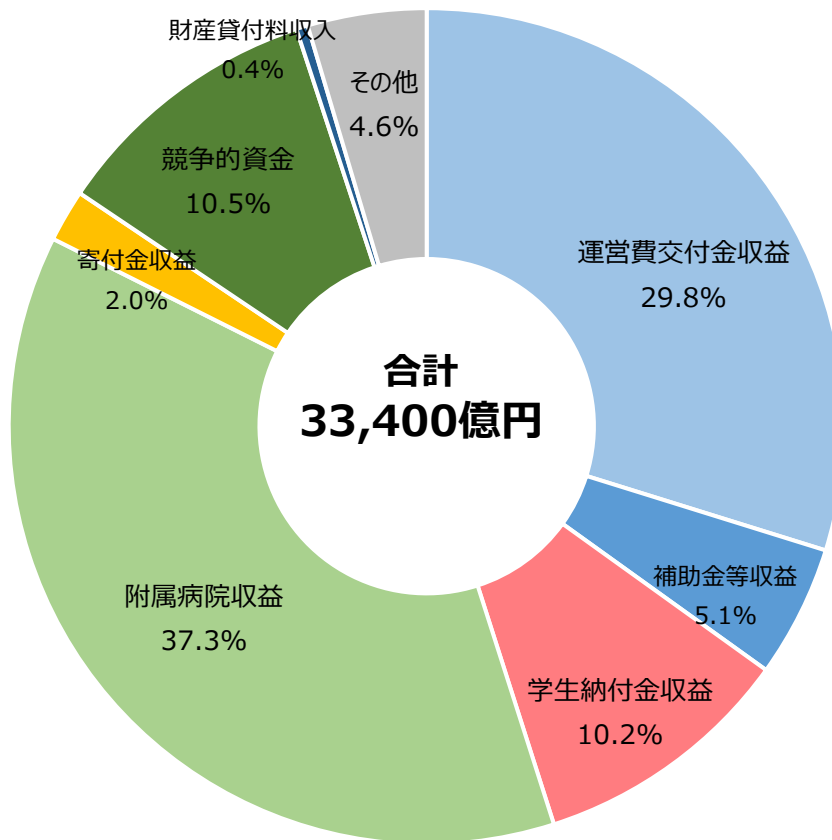
※658法人の事業活動収支計算書を集計
※大学（短大を含む）を設置している学校法人が高等学校以下の学校も設置している場合、それらの学校の収入も含む。

※ 上のグラフとは別に、JASSO等により学生等に対して奨学金を支給・貸与しており、仮に大学への授業料等に充てられた場合、「学生納付金収益」等に計上されることになる。

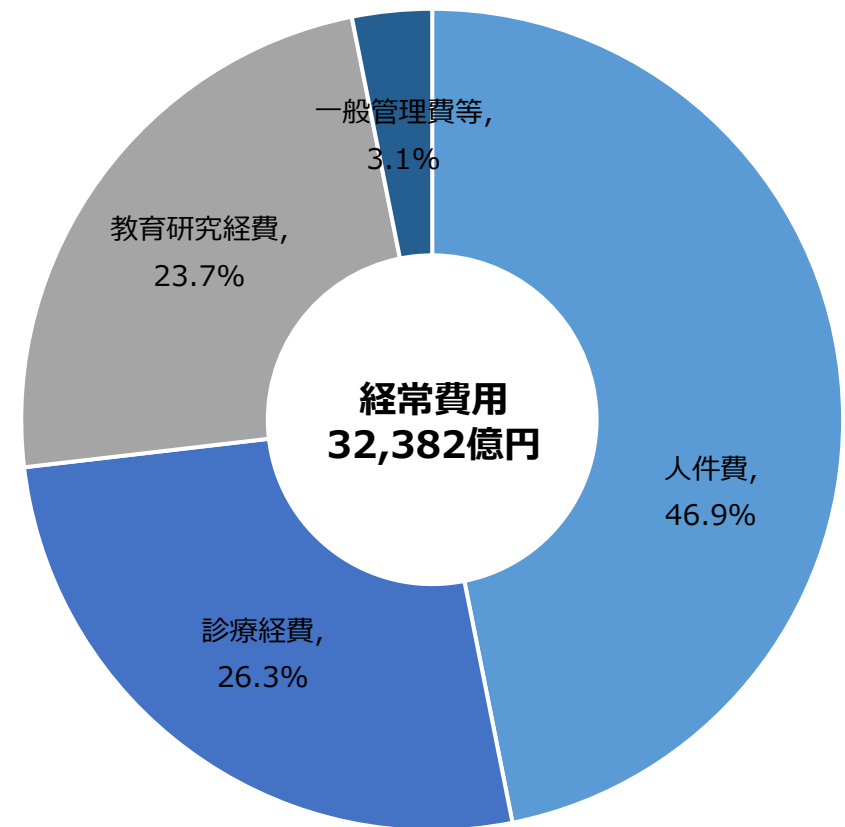
国立大学の収支状況

国立大学法人の収入の財源別比率は、公財政（運営費交付金，補助金等収益の合計）が34.9%、学生納付金が10.2%である。
国立大学法人の経常費用のうち46.9%が人件費、26.3%が診療経費、教育研究経費は23.7%である。

国立大学法人の収入状況（令和3年度）
（経常収益）



国立大学法人の支出状況（令和3年度）
（経常費用）

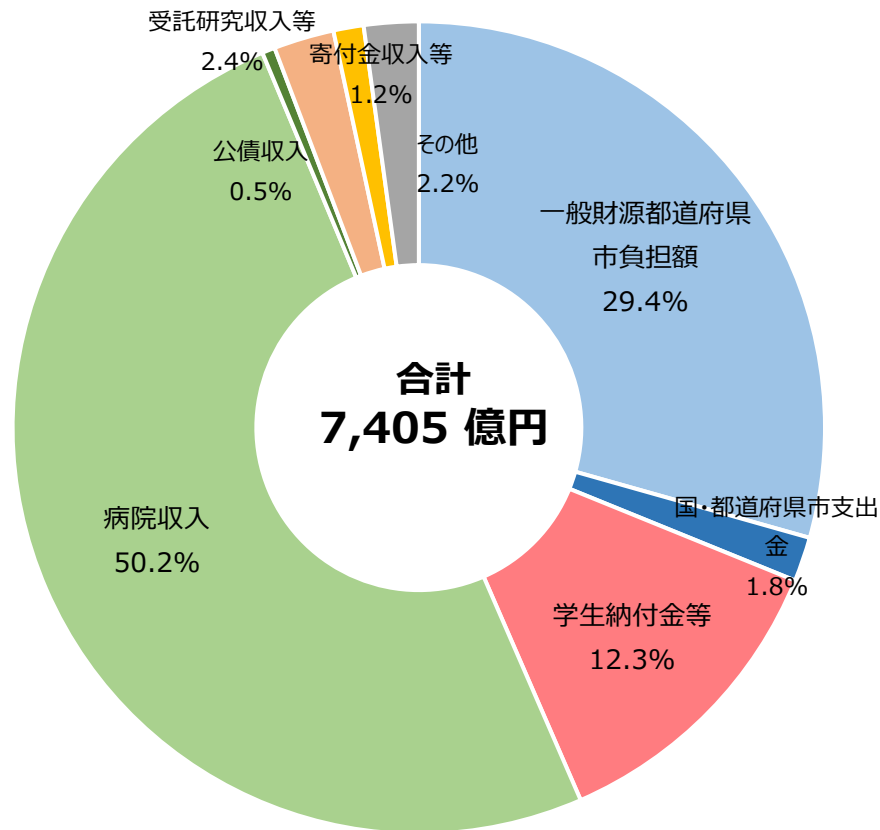


出典：各国立大学法人の令和3年事業年度の財務諸表を基に文部科学省作成

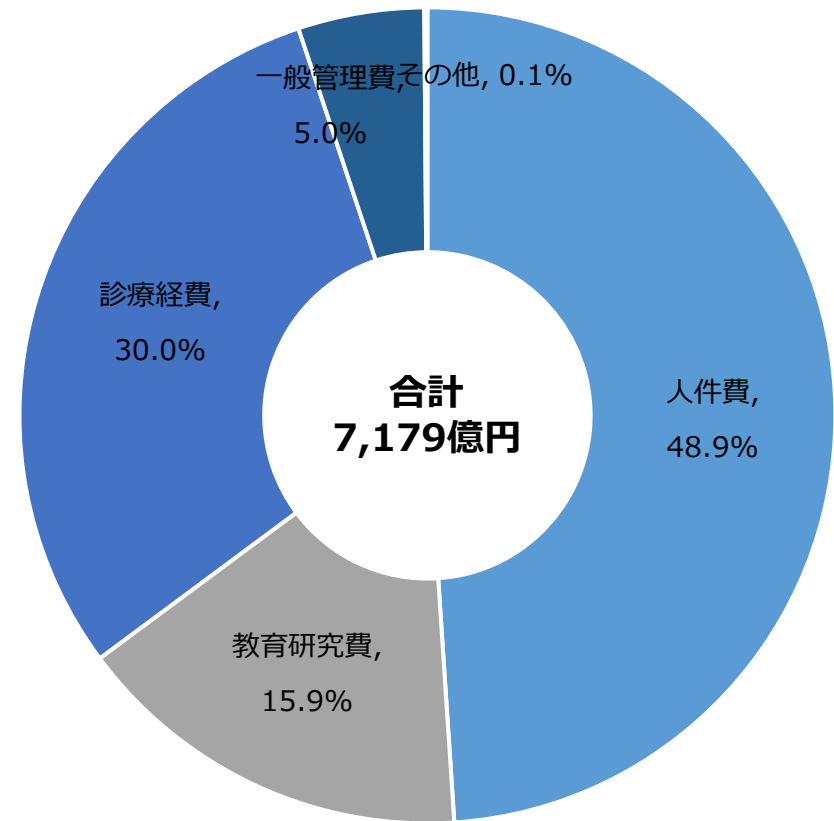
公立大学の収支状況

公立大学の収入の財源別比率は、公財政（運営費交付金，補助金等収益の合計）が31.2%、学生納付金が12.3%である。
公立大学法人の経常費用のうち48.9%が人件費、30.0%が診療経費、教育研究経費は15.9%である。

公立大学の収入状況（令和3年度）



公立大学の支出状況（令和3年度）



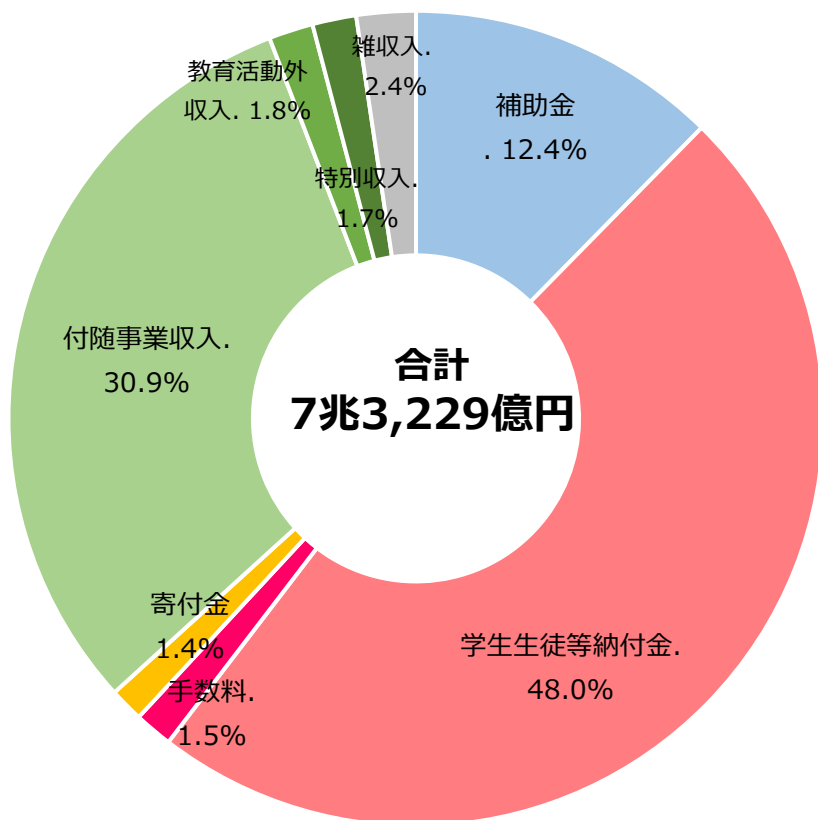
出典：公立大学実態調査（公立大学協会）
令和3年度決算データを基に文部科学省作成

私立大学の収支状況

大学・短期大学を設置する学校法人（附属病院や設置する高等学校以下の学校の収入も含む）では、学生納付金が48%を占める。
大学・短期大学を設置する学校法人の事業活動支出のうち49.2%が人件費、29.4%が教育研究経費（医療経費除く）、医療経費は13.1%である。

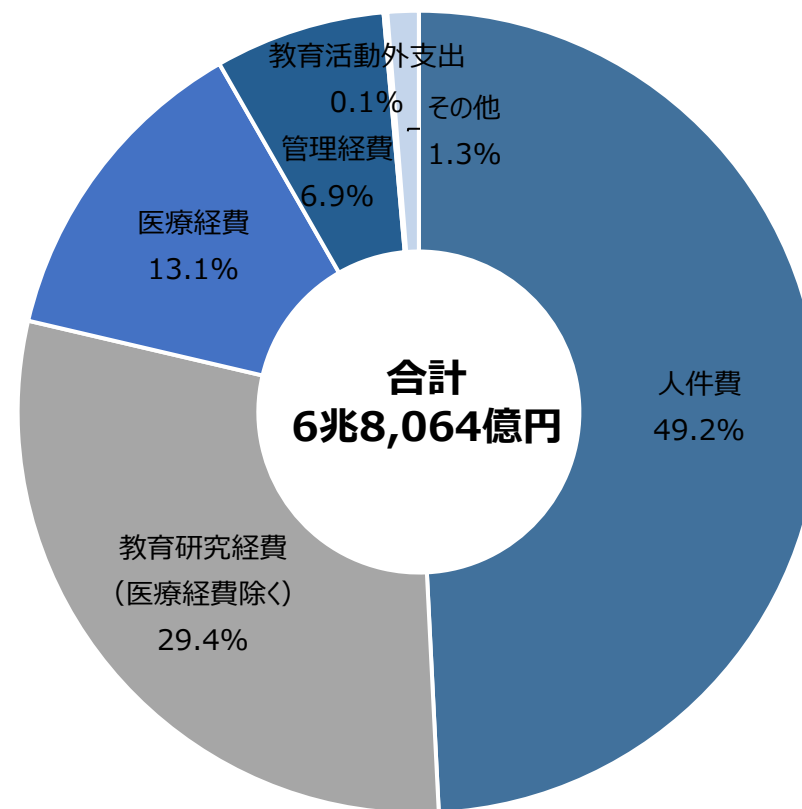
大学・短期大学を設置する学校法人の収入状況（令和3年度）

（事業活動収入）



大学・短期大学を設置する学校法人の支出状況（令和3年度）

（事業活動支出）



出典：日本私立学校振興・共済事業団「今日の私学財政（令和4年度版）」

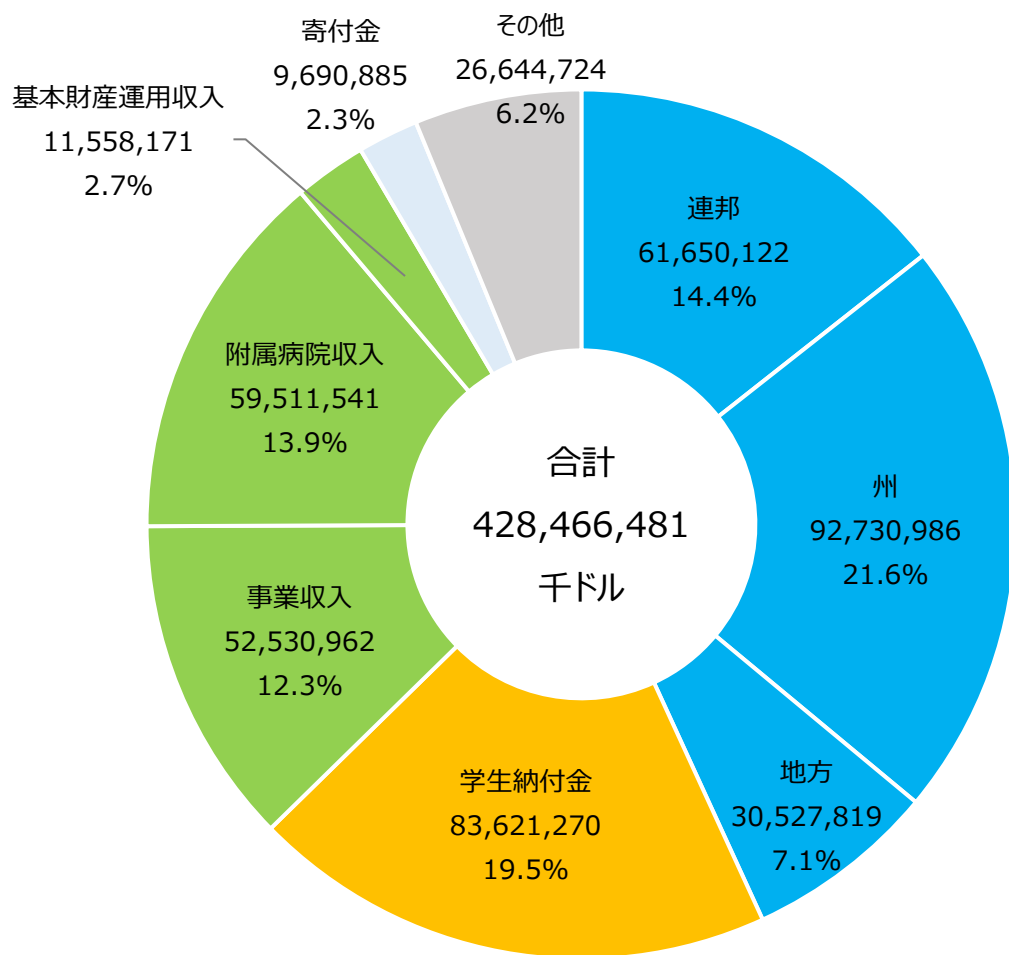
※658法人の事業活動収支計算書を集計

※大学（短大を含む）を設置している学校法人が高等学校以下の学校も設置している場合、それらの学校の収入も含む。

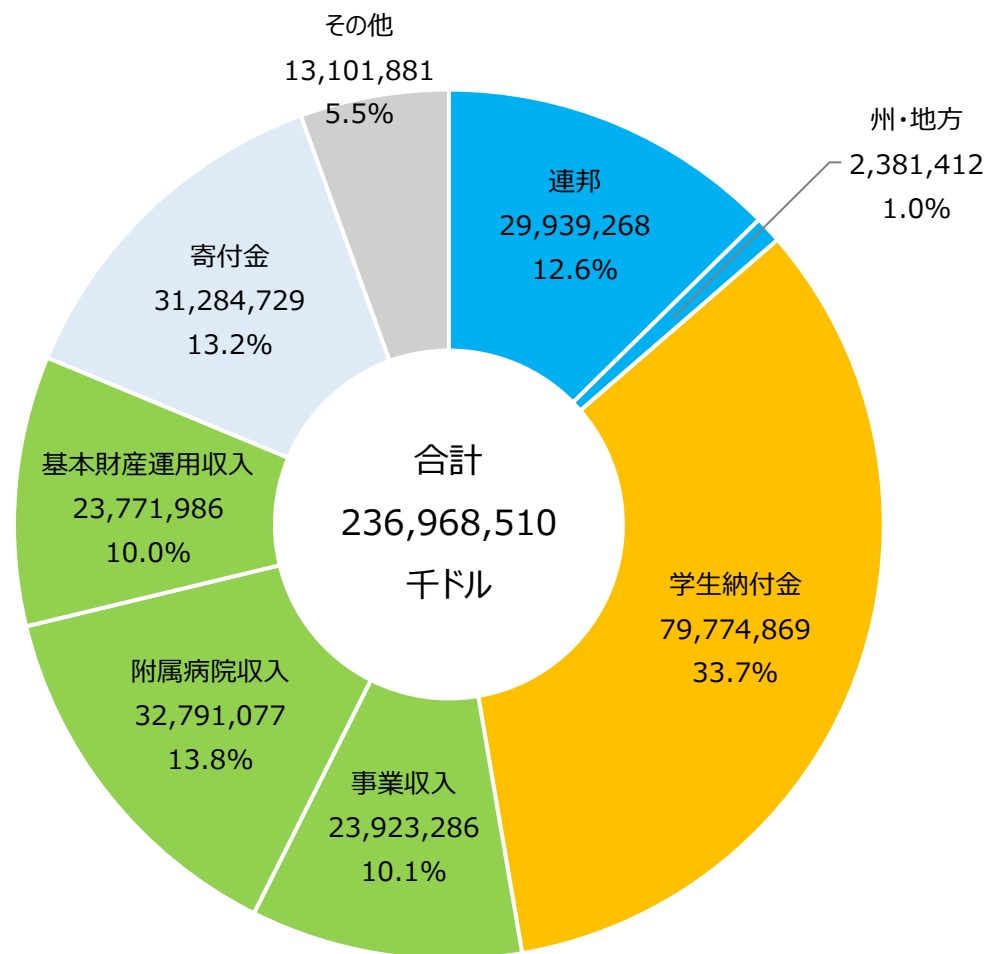
アメリカの大学の財政状況

州立大学と私立大学のいずれもが多様な収入源を持つ点は共通しているが、財源別の収入構造の比率にはそれぞれ特徴がある。州立大学の収入の財源別比率は、公財政（連邦、州、地方の合計）が43.2%、学生納付金が19.5%となっている。これに対して私立大学は、公財政が13.6%、学生納付金が33.7%となっている。

州立大学の収入の構成（2019年）



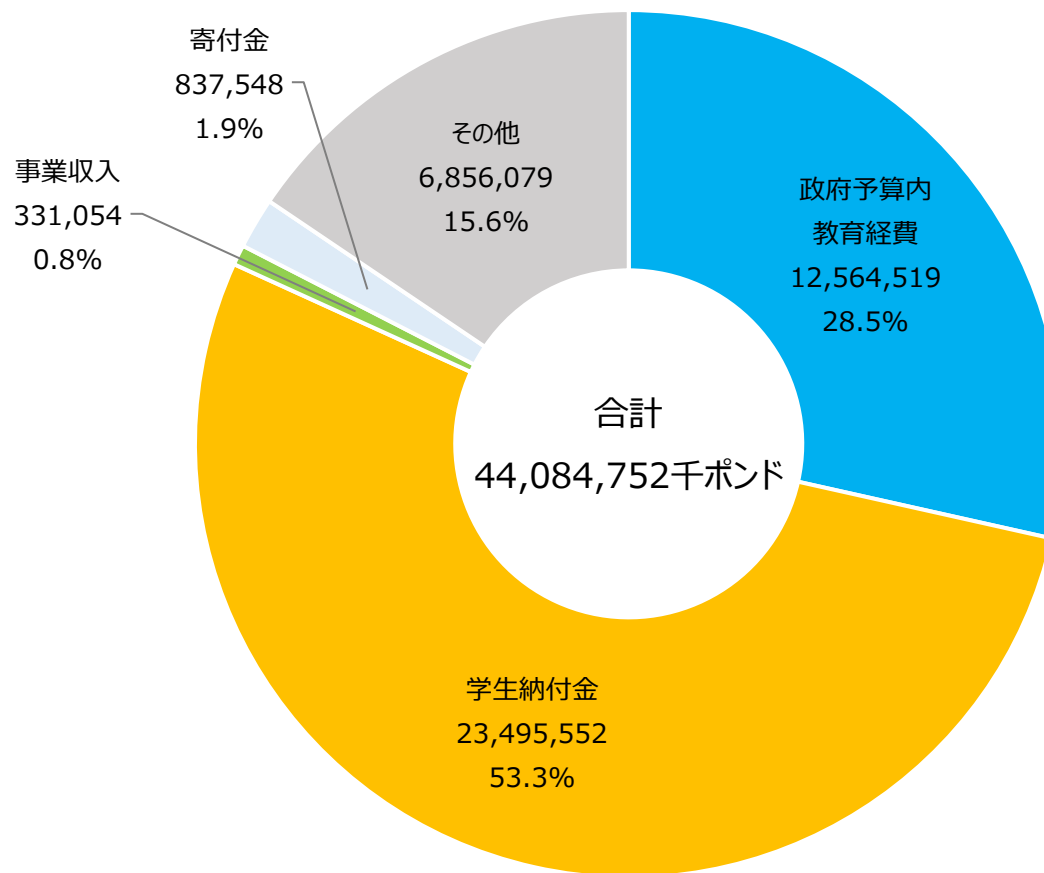
私立大学の収入の構成（2019年）



イギリスの大学の財政状況

イギリスの大学の主な収入は公財政（政府予算内教育経費）が28.5%、学生納付金が53.3%となっている。

全大学の収入の財源別構成（2020年）



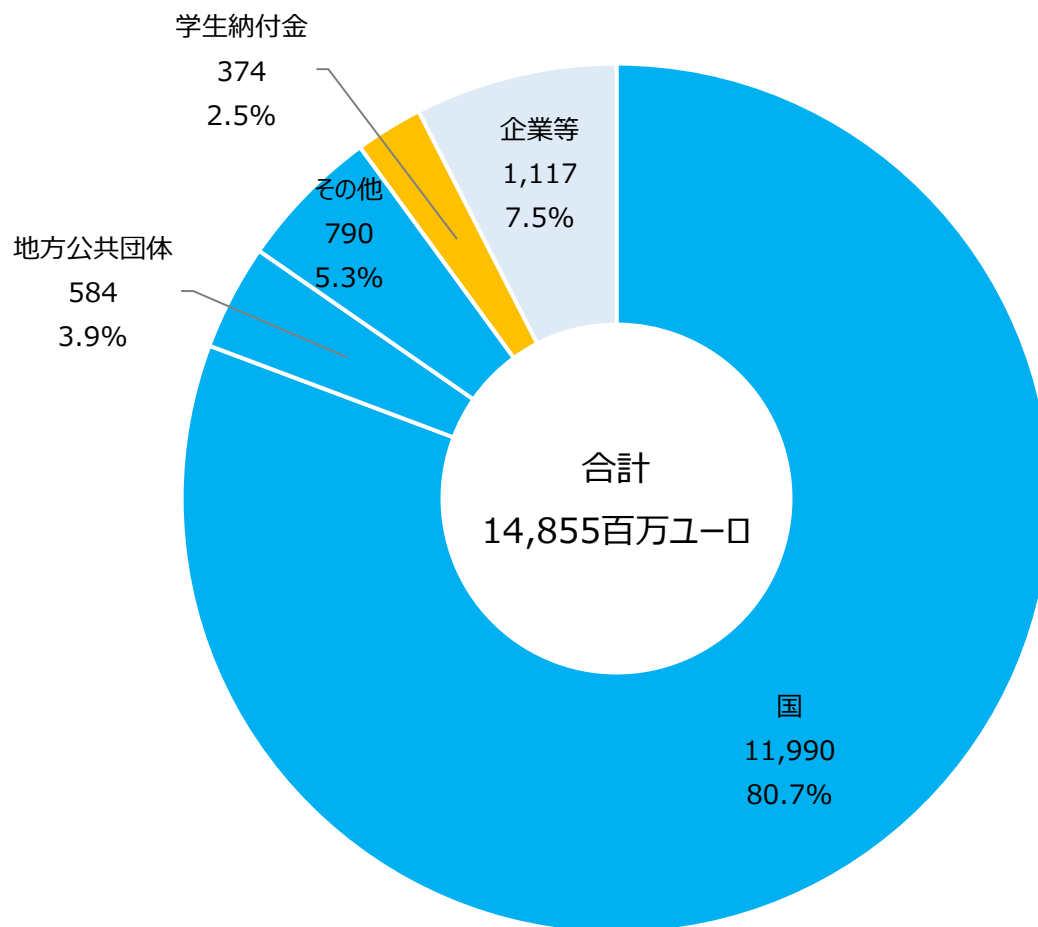
(注1) 国の機関補助を受けない高等教育機関も含まれる。

(注2) 構成比は小数点第二位を四捨五入しているためグラフの合計値とは一致しない。

フランスの大学の財政状況

フランスでは大学は国立機関であり、財源の約9割は国・地方公共団体・公的機関からの公財政となっている。

国立大学の収入の財源別構成（2020年）

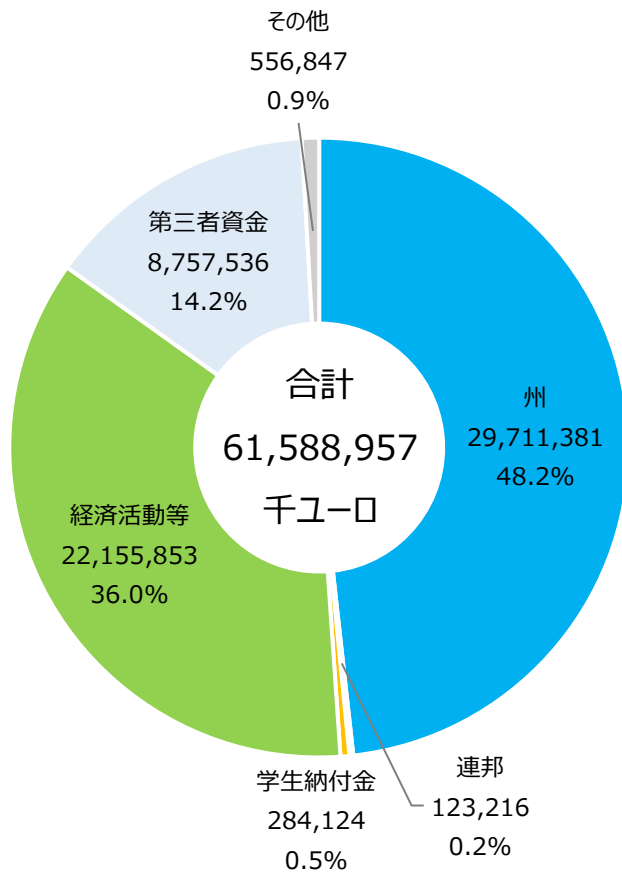


(注1) 本土及び海外県の数値(政府の公表数値)。「国」はEU(欧州連合)及び外国を含む。「その他」はその他の公的機関。

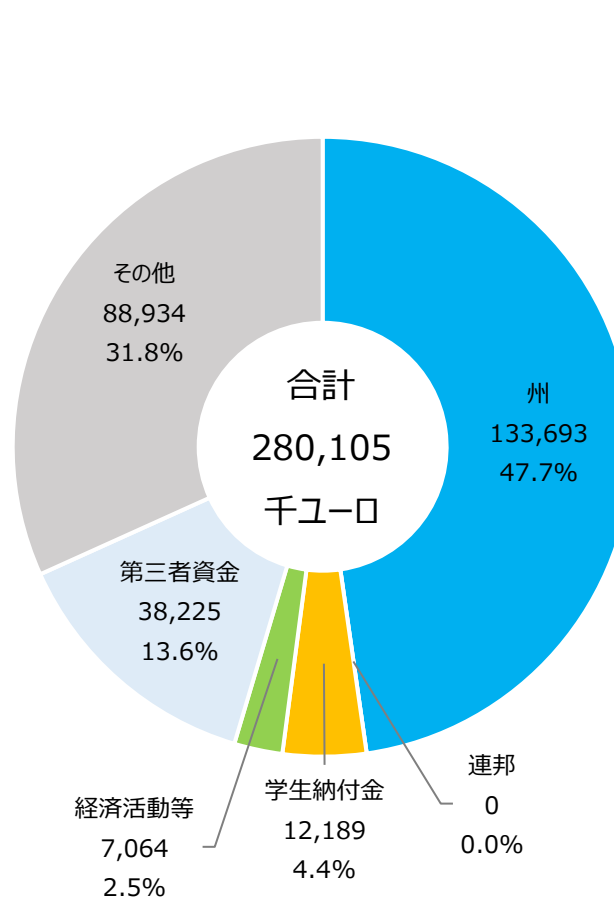
ドイツの大学の財政状況

州立大学、教会立大学の収入の財源別比率は、連邦や州から支出される基礎的資金（公財政）が約5割となっている。これに対して、私立大学は基礎的資金が2%、事業収入（学生納付金、経済活動等）が約9割となっている。

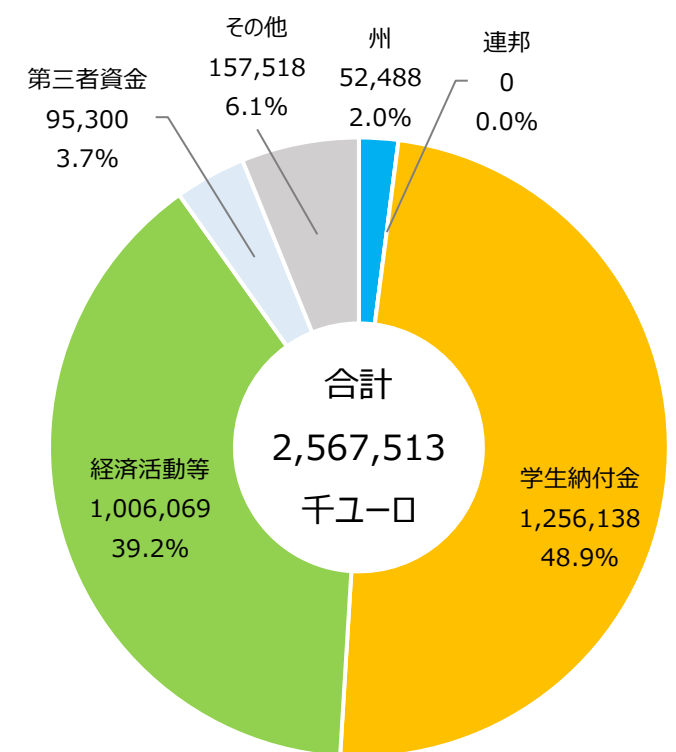
州立大学の収入の財源別構成（2020年）



教会立大学の収入の財源別構成（2020年）



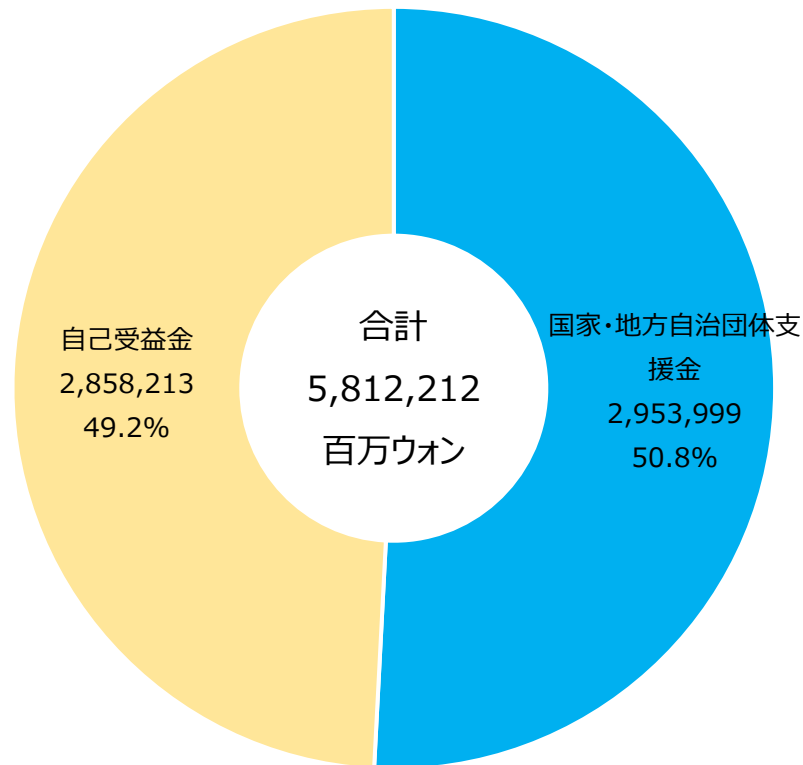
私立大学の収入の財源別構成（2020年）



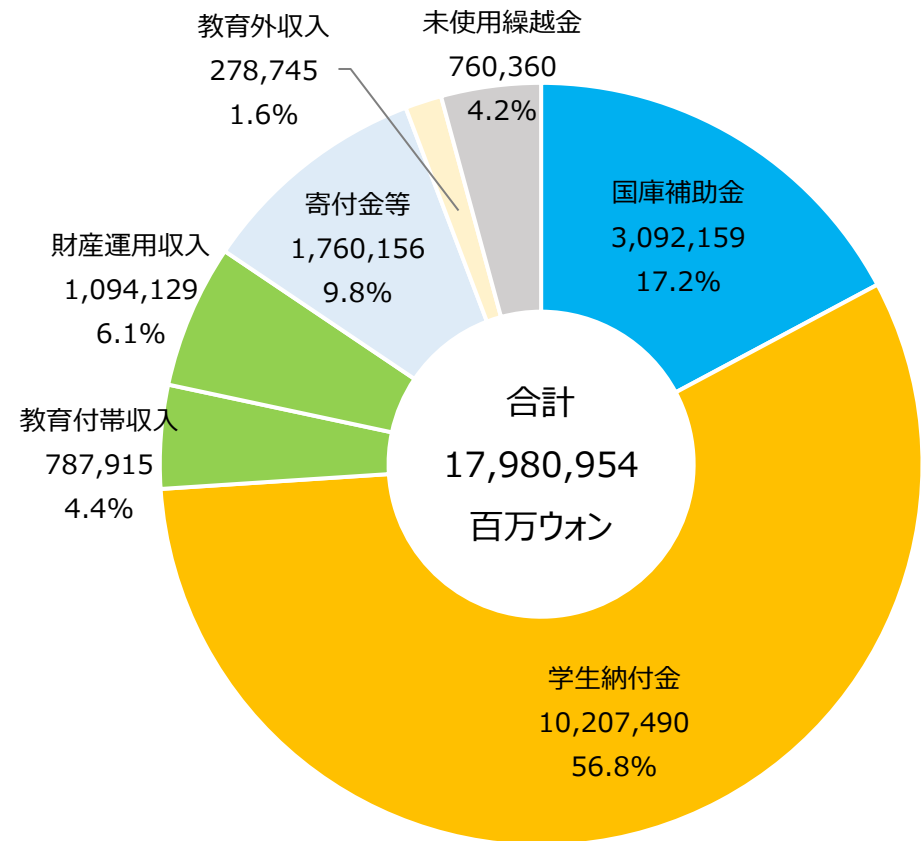
韓国の大学の財政状況

国公立大学の収入の財源別比率は、国家・地方自治団体支援金が50.8%となっている。
これに対して、私立大学は国庫補助金収入が17.2%となっており、学生納付金と教育付帯収入が約6割となっている。

国公立大学の収入の財源別構成（2020年）



私立大学の収入の財源別構成（2020年）



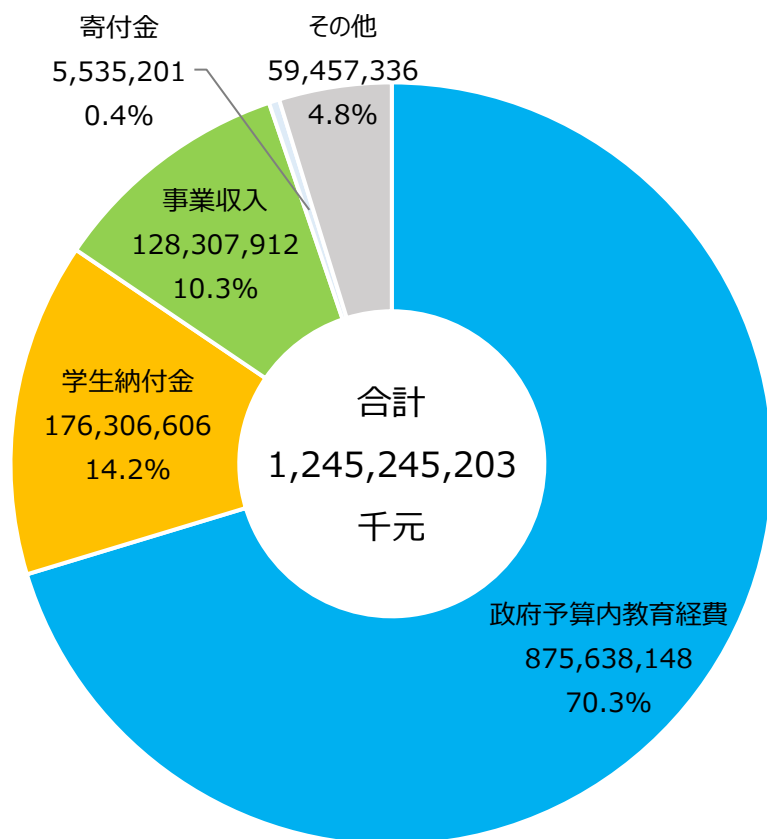
- (注1) 国公立大学には、国立大学、公立大学、国立教育大学を含む。
- (注2) 教育付帯収入には、入試手数料収入、証明・使用料収入、その他教育付帯収入が含まれる。
- (注3) 寄付金等収入には、寄付金収入、転入金、産学協力団・学校企業転入金収入が含まれる。
- (注4) 教育外収入には、預金利子収入、収益財産収入、その他教育外収入が含まれる。

【出典】「諸外国の教育統計」令和5（2023）年版を元に作成

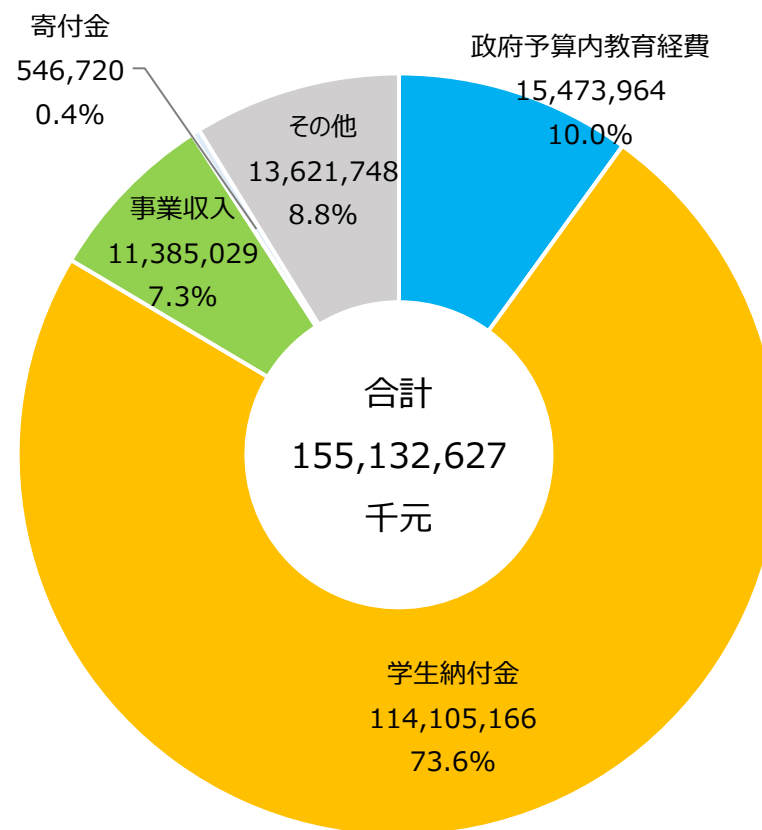
中国の大学の財政状況

国公立大学の収入の財源別比率は、政府予算内教育経費（国・地方の支出）が70.3%、学生納付金が14.2%となっている。これに対して、私立大学は政府予算内教育経費（国・地方の支出）が10.0%、学生納付金が73.6%となっている。

国公立大学の収入の財源別構成（2020年）



私立大学の収入の財源別構成（2020年）



(注1) 国公立大学には、国営公営企業立を含む。

(注2) 大学、専科学校、職業技術学院についての数値である。成人高等教育機関は含まない。

(注3) 政府予算内教育経費に関連した収入は、国・地方の支出である。

国公立大学の授業料等の推移①

年度	国立大学		公立大学		私立大学		
	授業料	入学料	授業料	入学料	授業料	入学料	
	円	円	円	円	円	円	
昭和	50	36,000	50,000	27,847	25,068	182,677	95,584
	51	96,000	↓	66,582	74,220	221,844	121,888
	52	↓	60,000	78,141	80,152	248,066	135,205
	53	144,000	↓	110,691	90,909	286,568	157,019
	54	↓	80,000	134,618	104,091	325,198	175,999
	55	180,000	↓	157,412	119,000	355,156	190,113
	56	↓	100,000	174,706	139,118	380,253	201,611
	57	216,000	↓	198,529	150,000	406,261	212,650
	58	↓	120,000	210,000	167,265	433,200	219,428
	59	252,000	↓	236,470	178,882	451,722	225,820
	60	↓	↓	250,941	179,471	475,325	235,769
	61	↓	150,000	252,000	219,667	497,826	241,275
	62	300,000	↓	290,400	230,514	517,395	245,263
	63	↓	180,000	298,667	261,639	539,591	251,124
平成	元	339,600	185,400	331,686	268,486	570,584	256,600
	2	↓	206,000	337,105	287,341	615,486	266,603
	3	375,600	↓	366,032	295,798	641,608	271,151
	4	↓	230,000	374,160	324,775	668,460	271,948
	5	411,600	↓	405,840	329,467	688,046	275,824
	6	↓	260,000	410,757	357,787	708,847	280,892
	7	447,600	↓	440,471	363,745	728,365	282,574
	8	↓	270,000	446,146	371,288	744,733	287,581
	9	469,200	↓	463,629	373,893	757,158	288,471
	10	↓	275,000	469,200	375,743	770,024	290,799
	11	478,800	↓	477,015	381,271	783,298	290,815
	12	↓	277,000	478,800	383,607	789,659	290,691
	13	496,800	↓	491,170	387,200	799,973	286,528
	14	↓	282,000	496,800	394,097	804,367	284,828
	15	520,800	↓	517,920	397,327	807,413	283,306

国公立大学の授業料等の推移②

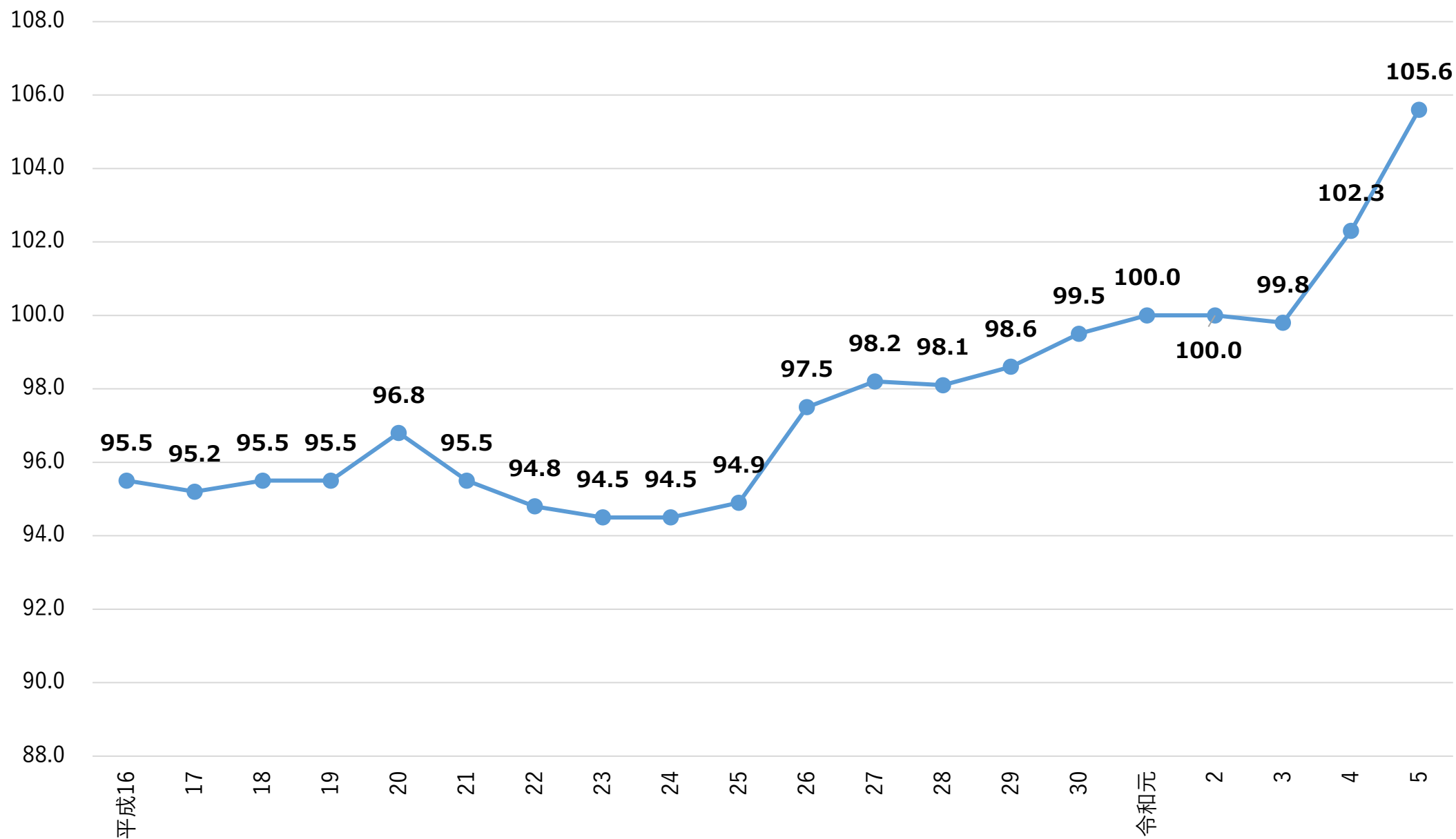
年度		国立大学		公立大学		私立大学	
		授業料	入学料	授業料	入学料	授業料	入学料
		円	円	円	円	円	円
	16	520,800	282,000	522,118	397,271	817,952	279,794
	17	535,800	↓	530,586	401,380	830,583	280,033
	18	↓	↓	535,118	400,000	836,297	277,262
	19	↓	↓	536,238	399,351	834,751	273,564
	20	↓	↓	536,449	399,986	848,178	273,602
	21	↓	↓	536,632	402,720	851,621	272,169
	22	↓	↓	535,962	397,149	858,265	268,924
	23	↓	↓	535,959	399,058	857,763	269,481
	24	↓	↓	537,960	397,595	859,367	267,608
	25	↓	↓	537,933	397,909	860,266	264,417
	26	↓	↓	537,857	397,721	864,384	261,089
	27	↓	↓	537,857	397,721	868,447	256,069
	28	↓	↓	537,809	393,426	877,735	253,461
	29	↓	↓	538,294	394,225	900,093	252,030
	30	↓	↓	538,633	393,618	904,146	249,985
令和	元	↓	↓	538,734	392,391	911,716	248,813
	2	↓	↓	536,382	392,111	927,705	247,052
	3	↓	↓	536,363	391,305	930,943	245,951
	4	↓	↓	536,195	389,125	-	-
	5	↓	↓	536,191	374,371	959,205	240,806

(注) ①年度は入学年度である。

②国立大学の平成16年度以降の額は国が示す標準額である。

③公立大学・私立大学の額は平均であり、公立大学入学料は地域外からの入学者の平均である。

(参考)消費者物価指数の推移



(出典) 総務省統計局「消費者物価指数」 ※2020年 = 100

短期大学の学生納付金等平均額(令和5年度)

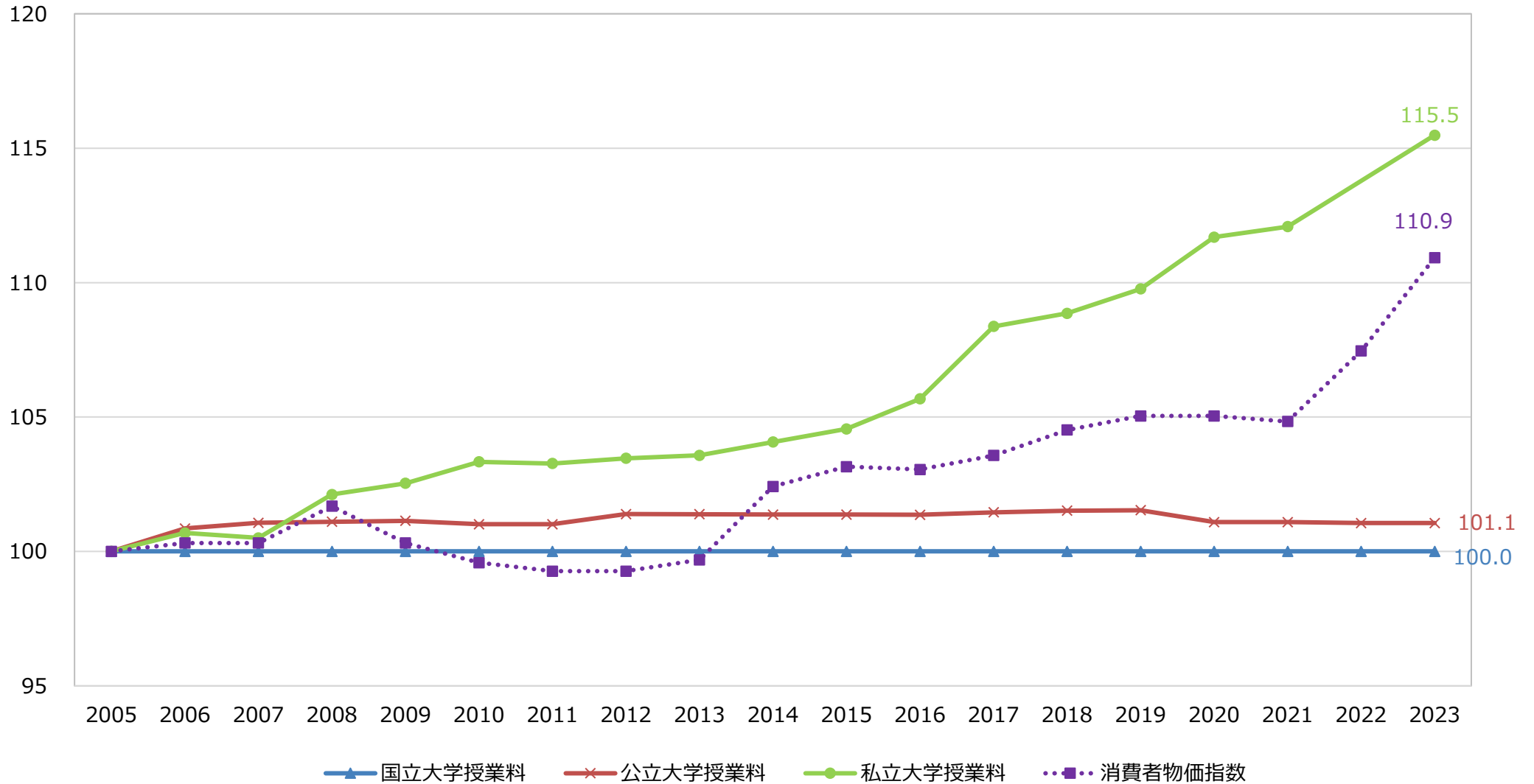
(単位:円)

	学生納付金			参考		初年度 学生納付金等
	授業料	入学料	施設設備費	実験実習料	その他	
公立短期大学	377,357	225,050	—	—	—	602,407
私立短期大学	729,069	237,122	163,836	40,229	101,732	1,271,988
【参考】 私立大学学部	959,205	240,806	165,271	28,864	83,194	1,477,339

【出典】文部科学省作成

設置者別授業料及び消費者物価指数の推移

国公立大学の授業料は横ばいな一方で、私立大学の授業料は上昇している。
消費者物価指数は2021年以降上昇している。



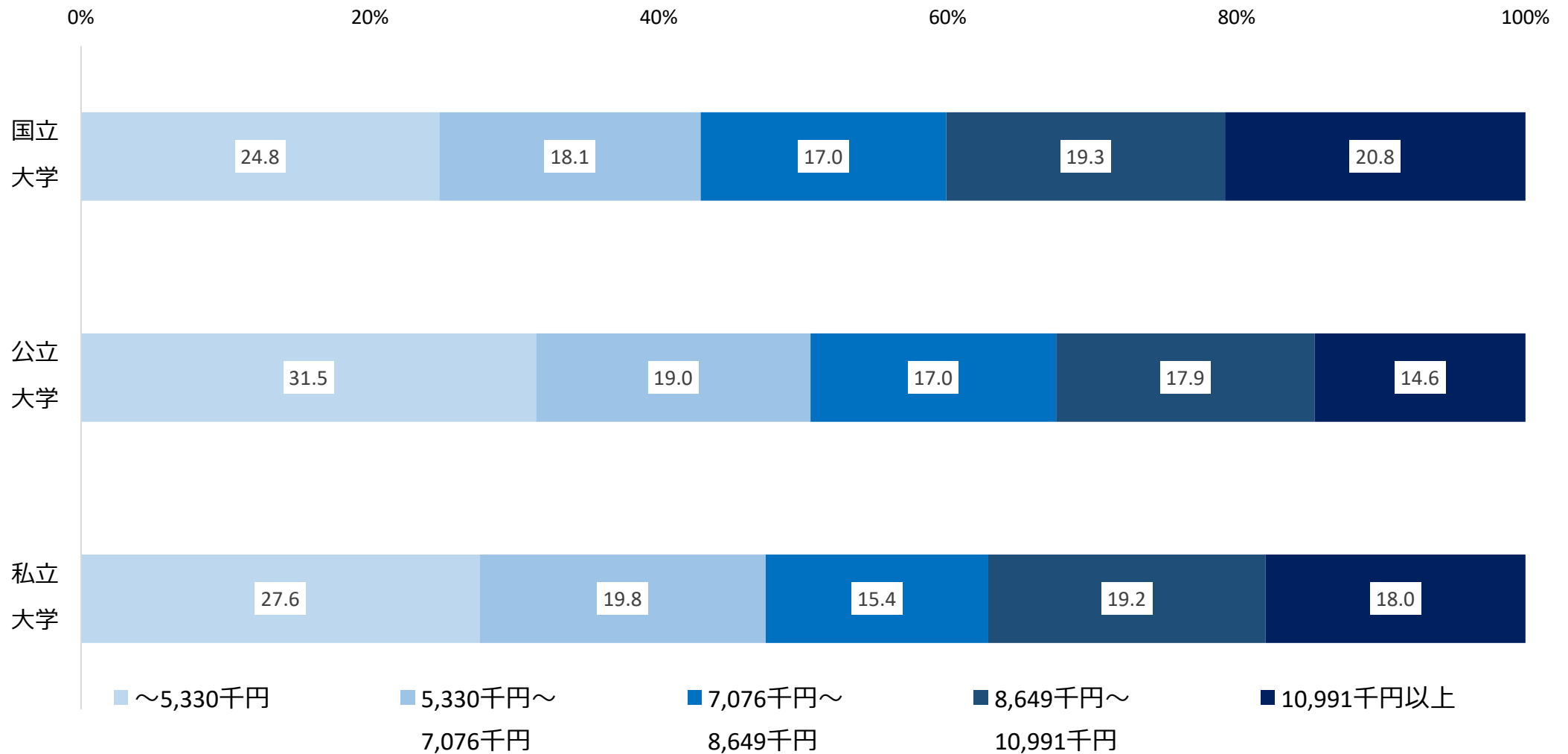
※ 国立大学の授業料は国が示す標準額
 ※ 公立大学・私立大学の額は平均であり、公立大学入学料は地域外からの入学者の平均

(出典) 授業料：文科省省調べ
 消費者物価指数：総務省統計局
 いずれも2005年 = 100

家庭の収入階層区別学生数の割合【45～54歳の世帯主】(大学(昼間部))

家庭の収入階層区分をみると、1,099万円を超える家庭の割合は、国立大学に在籍する学生の家庭が最も高い。

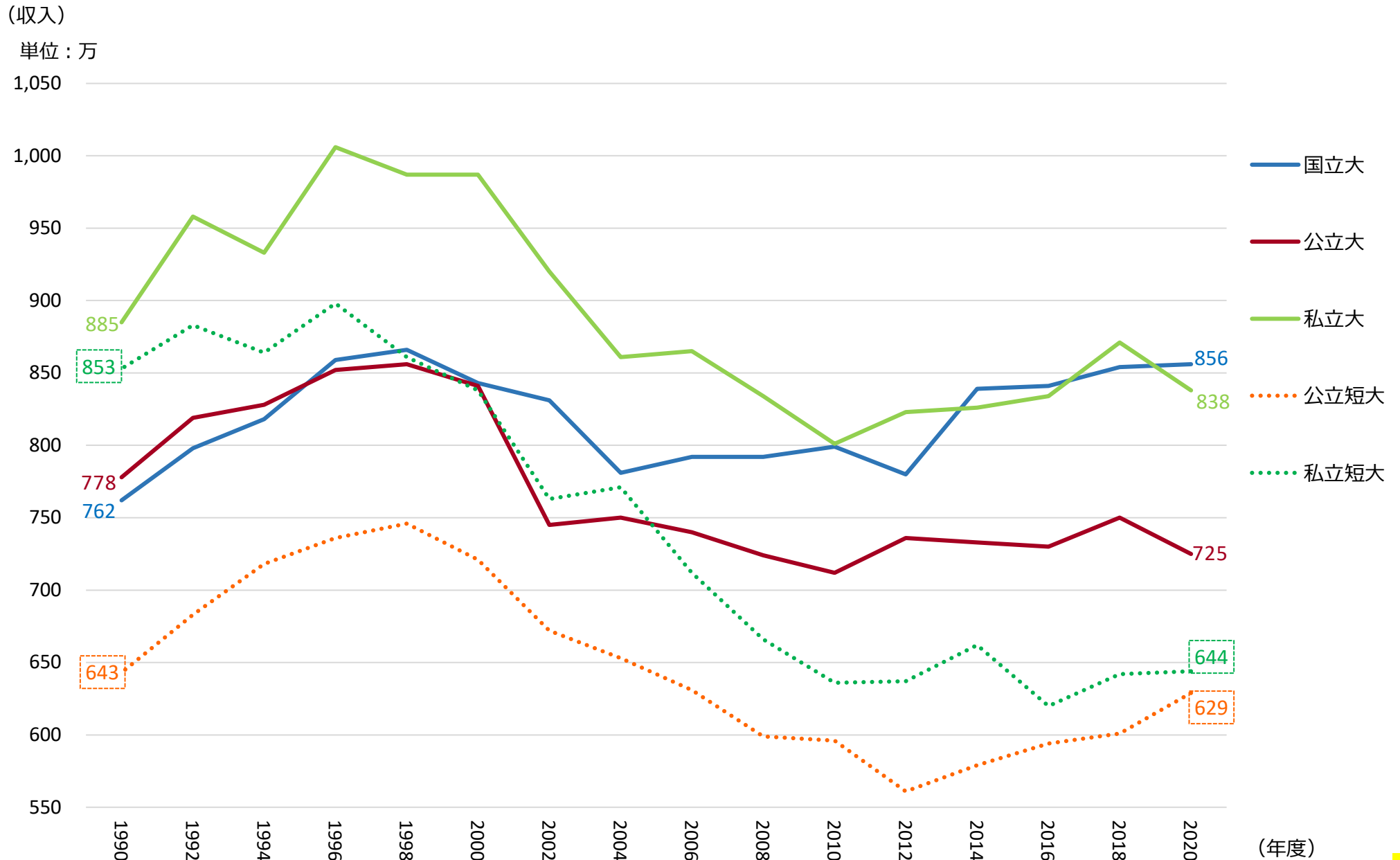
令和2年度



出典：独立行政法人日本学生支援機構「令和2年度学生生活調査報告」をもとに、文部科学省において作成。

家庭の年間平均収入

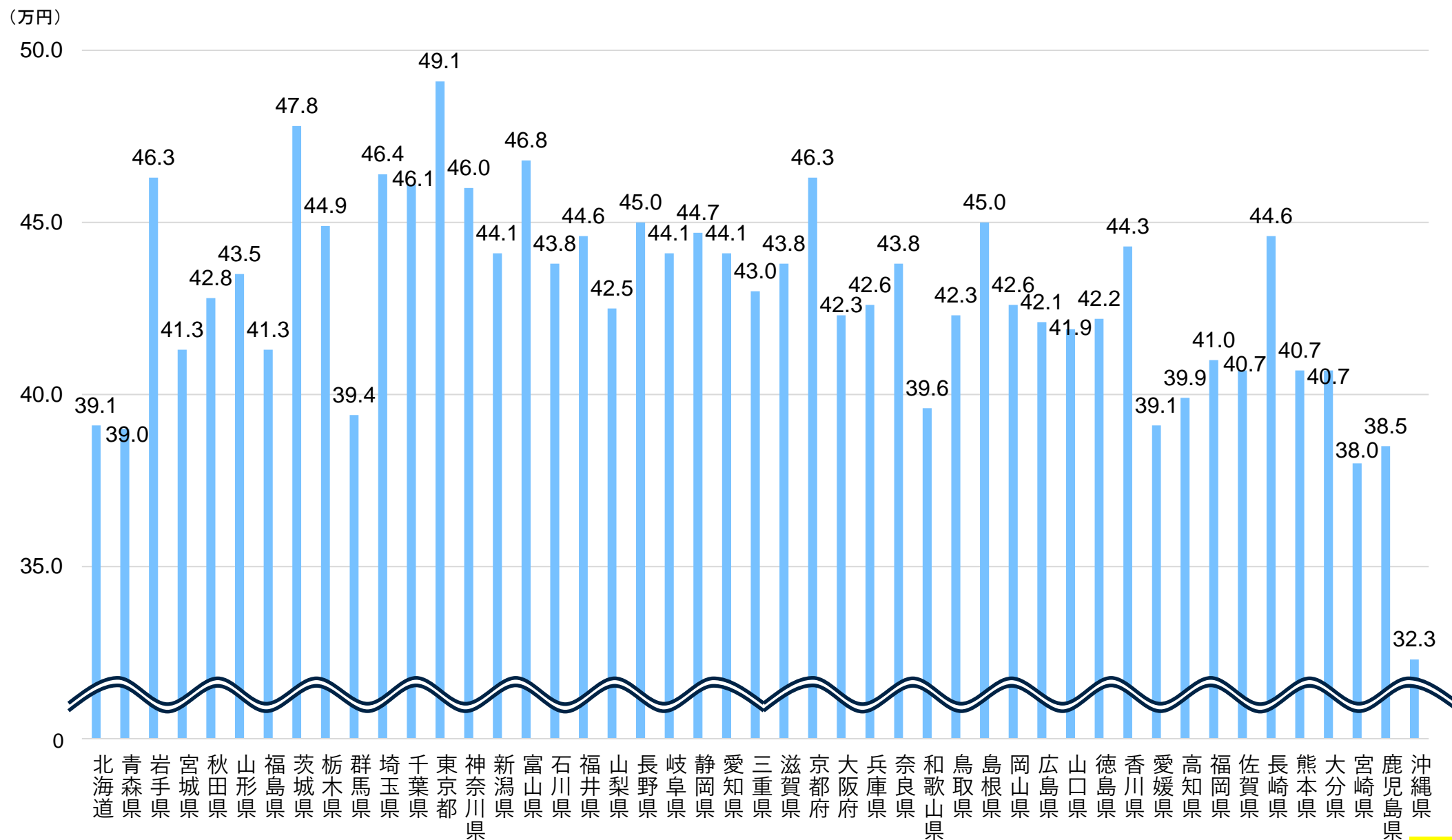
2000年代までは私立大に在籍する学生の家庭の年間平均収入が最も高いが、2010年代以降、国立大に在籍する学生の家庭の年間平均収入が上回りつつある。



出典：独立行政法人日本学生支援機構「学生生活調査報告」をもとに、文部科学省において作成。
(1990年度-2002年度においては、「大学と学生」文部科学省高等教育学生課編をもとに作成。)

都道府県別の可処分所得

東京都に在住する世帯（2人以上の勤労者世帯）の1か月当たりの可処分所得は約49.1万円であるのに対して、沖縄県に在住する世帯の可処分所得は約32.1万円と開きがある。

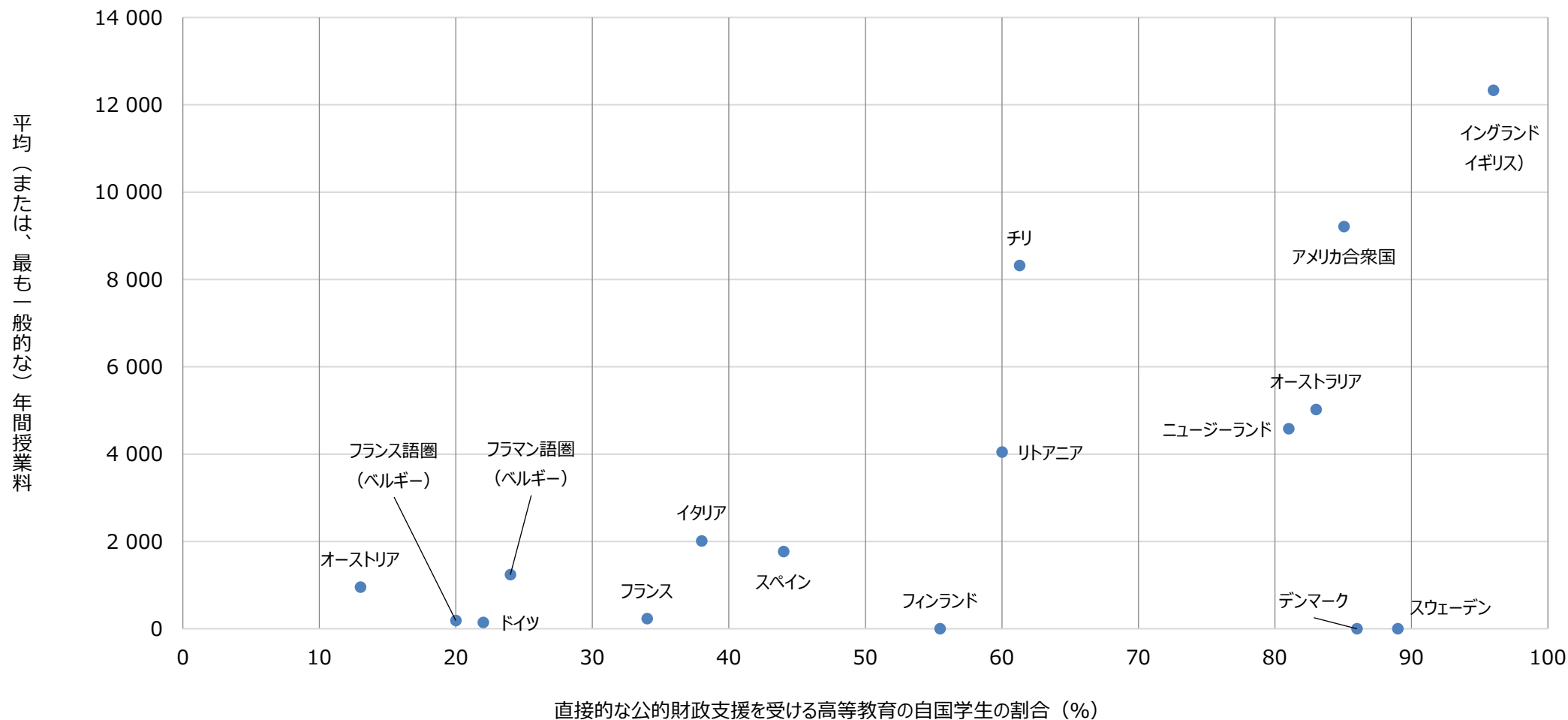


出典：総務省統計局「2019年全国家計構造調査結果」より文部科学省作成

国公立教育機関の平均年間授業料と公的財政援助を受ける学生の割合(各国比較)

購買力平価による米ドル換算額

国公立教育機関が学士課程の自国学生に課す平均授業料、及び、
直接的な公的財政援助を受ける高等教育の自国学生の割合（2019～20年度）



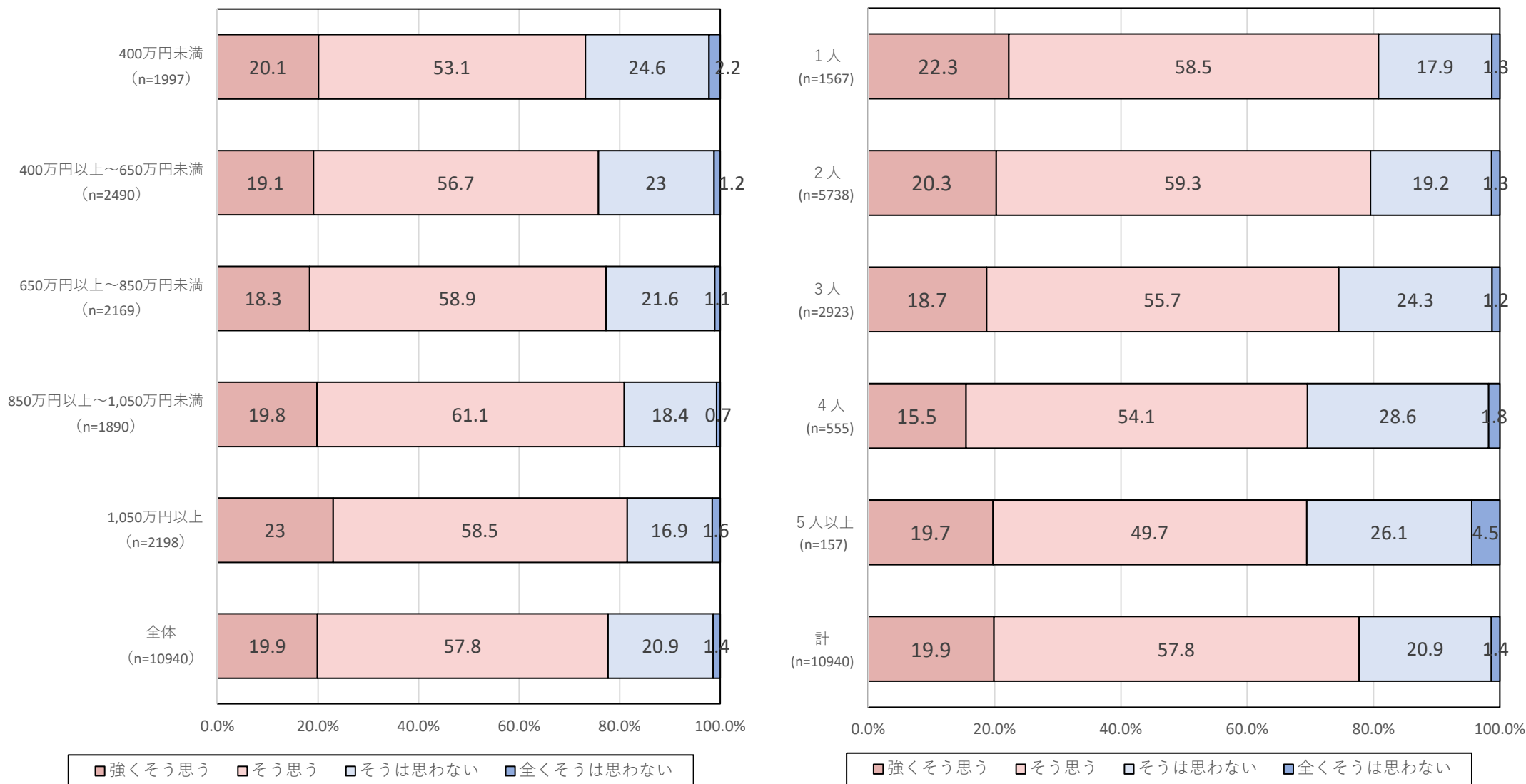
【出典】「図表で見る教育 OECDインディケータ（2021年版）」図C5.3

【参考】令和4年度学生生活調査によると、日本の大学学部（昼間部）において何らかの奨学金を受給している者（JASSOの給付奨学金、同貸与奨学金、JASSO以外の給付奨学金、同貸与奨学金のうち、1つ以上を受給したと回答した者）の割合は55.0%となっている。

学費・生活費に関する保護者の意識

学費・生活費は親が出すのが当然だと考える保護者の割合は、全体として約8割近くを占めており、所得の低い家庭、子供が多い家庭ほど少ない。

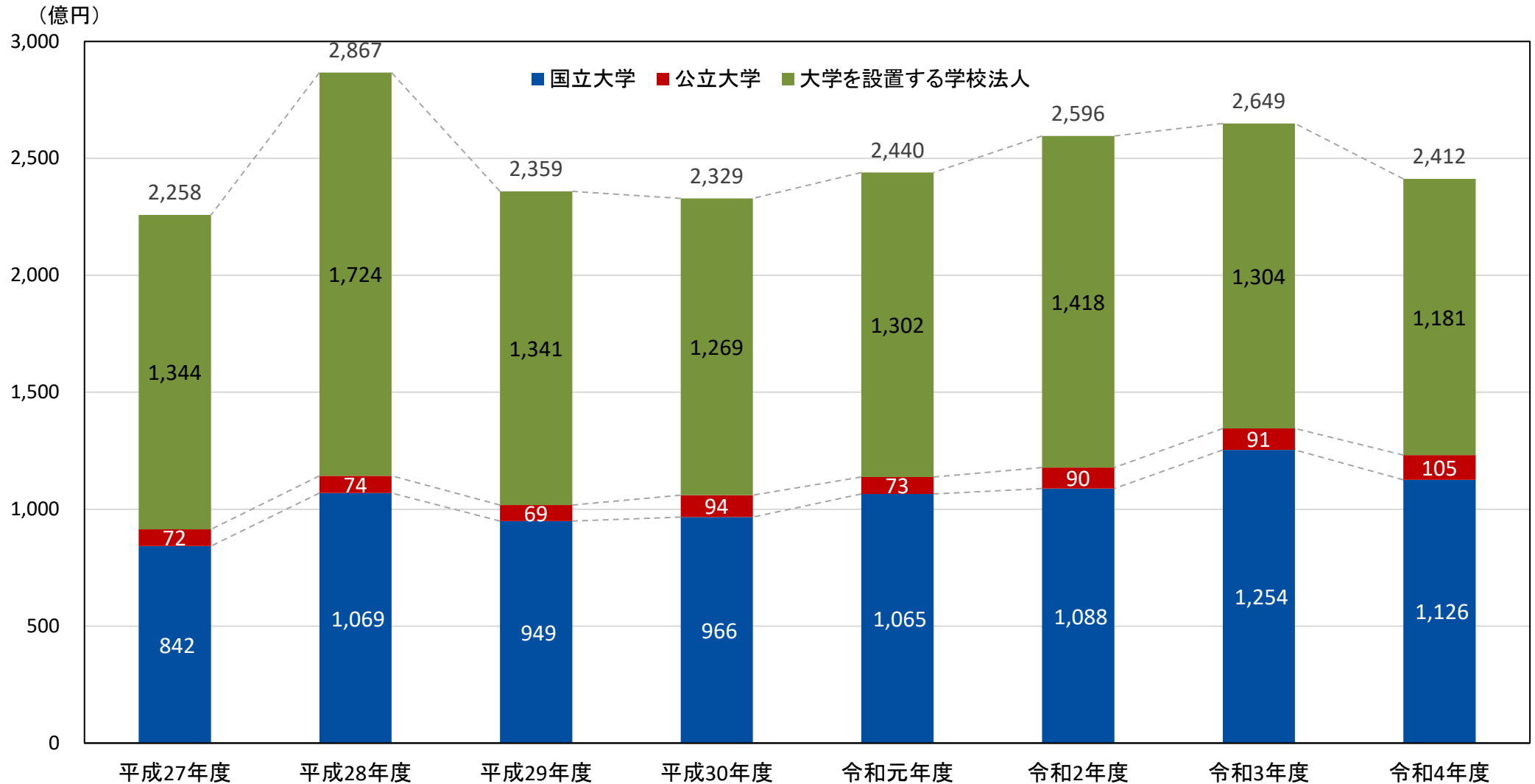
(大学や専門学校への進学に係る費用について)
卒業までの学費・生活費は親が出すのが当然だ(世帯収入別・世帯構成(子供の数)別)



(出典)文部科学省・国立教育政策研究所「高校生の進路に関する保護者調査」(令和5年度)より作成
※高校3年生の子を持つ保護者に対して調査を実施

寄附額の推移

大学等への寄附額は約2,412億円であり、うち、国立大学は1,126億円、公立大学は105億円、大学を設置する学校法人は1,181億円となっている。(令和4年度)。



【出典】国公立大学は文部科学省調べ。

学校法人は私立学校振興・共済事業団「今日の私学財政(令和5年度版)」をもとに文部科学省作成。

研究大学における寄附の受入れ状況

基金を造成していくためには、寄附金等の受入れ額を増やしていくことが必要。寄附金については我が国においても増加しているものの、諸外国との差は依然、大きい。

大学名	2005年 寄附受入額	2019年 寄附受入額	増減率
北海道大学	24.1億円	25.0億円	3.7%
東北大学	44.2億円	33.4億円	▲24.4%
筑波大学	12.4億円	28.1億円	126.1%
東京大学	98.0億円	103.6億円	5.7%
東京工業大学	10.7億円	15.0億円	40.5%
名古屋大学	20.6億円	42.2億円	104.7%
京都大学	74.6億円	121.9億円	63.4%
大阪大学	44.8億円	59.9億円	33.8%
九州大学	24.0億円	36.0億円	50.0%
慶應義塾大学	98.5億円 (2006年)	99.1億円	0.6%
早稲田大学	39.4億円	28.3億円	▲28.2%

大学名	2006年	2019年	増減率
スタンフォード大学	1,002.3億円	1,223.5億円	22.1%
ハーバード大学	654.4億円	1,516.9億円	131.8%
カリフォルニア大学 バークレー校	270.6億円	605.7億円	123.8%
カリフォルニア大学 サンディエゴ校	203.4億円	317.9億円	56.3%

※VOLUNTARY SUPPORT OF EDUCATION, Council for Aid to Educationより作成。
\$1=110円として計算。

大学名	2006年	2019年	増減率
オックスフォード大学	—	152.3億円	—
ケンブリッジ大学	—	150.4億円	—
ユニバーシティカレッジ ロンドン	—	54.7億円	—

※各大学の財務報告書のdonation and endowmentの数値。£1=135円として計算。

※国立大学は財務諸表における寄附金当期受入額、私立大学は事業報告書内収支計算書の寄附金収入の数値。

(別添) 将来推計

近年の急速な出生数減による大学・短期大学への影響(試算)

- 近年の急速な出生数減は、2040年度頃の各年度に、約2万3千人／年規模の大学・短大への進学者減を及ぼす恐れがある。
- これは、2023年度の大学・短大の入学定員の中央値（270人）の86.5校分に相当する。

A.出生数減による大学・短大への進学者数への影響（試算）

西暦	出生数	前年度増減
2018	918,400	
2019	865,239	▲ 53,161
2020	840,835	▲ 24,404
2021	811,622	▲ 29,213
2022	770,759	▲ 40,863
2023	727,277	▲ 43,482

直近5カ年平均
▲38,225人

【出典】厚生労働省「令和5年人口動態統計」を基に算出。

直近5カ年平均 ▲38,225人 × 2023年度大学・短大進学率（参考値）
61.1%（大学：57.5%、短大：3.4%）

2040年度頃（各年度）の大学・短大への進学者数増減
= ▲23,355人（1年度分の大学・短大進学者※の減）【A】

※ 留学生、社会人等の大学入学者は考慮していない。

B.大学・短大の入学定員（2023年度）

機関別	学校数	入学定員	入学定員の 平均値	入学定員の 中央値
大学	780	631,949	810	390
短大	290	51,152	176	150
大学・短大	1,070	683,101	638	270

【出典】文部科学省「全国大学一覧」「短期大学一覧」（2023年度）を基に、学生募集中の大学・短大で算出。

大学・短大の入学定員の中央値（2023年度）
270人【B】

C.2040年度頃（各年度）における大学・短大への影響（試算）

$$23,355人【A】 \div 270人【B】 = 86.5 校$$

大学入学者数等の将来推計について【推計の考え方】

推計の考え方

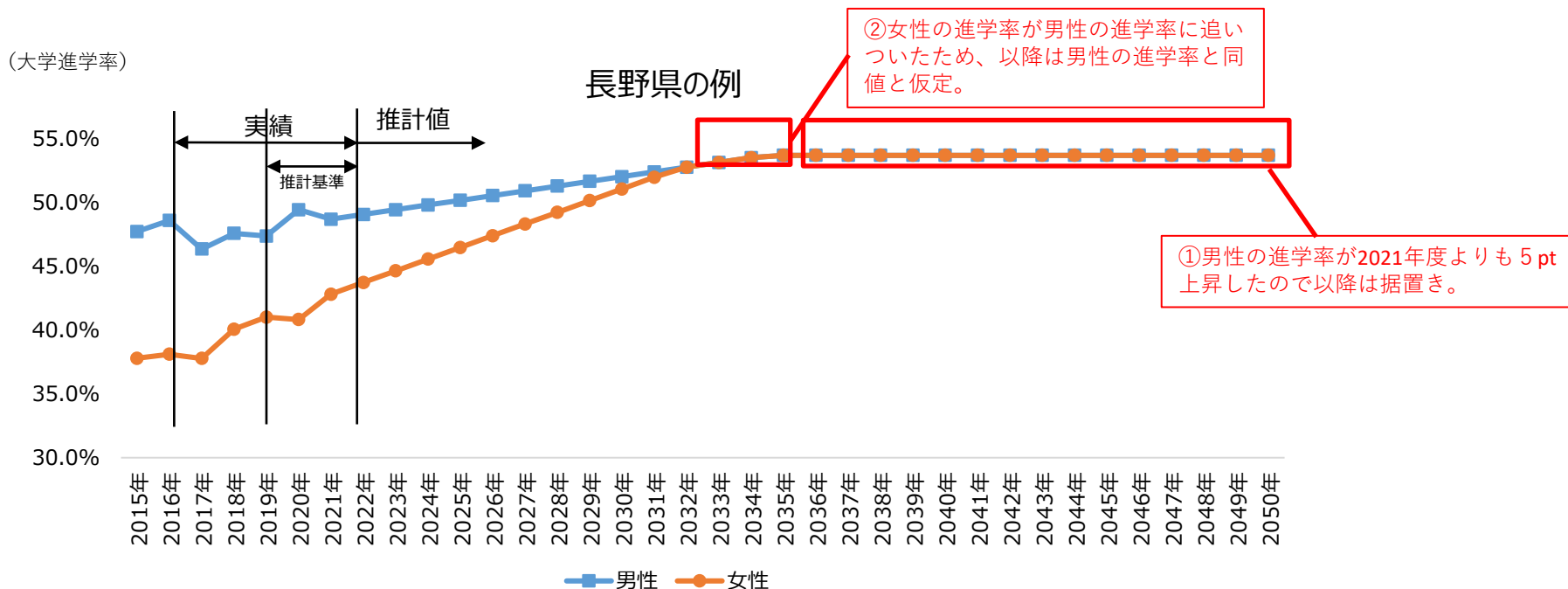
将来の大学入学者数(E)は、推計18歳人口(B)に推計大学進学率(A)を掛けて算出される各都道府県からの大学進学者数(C)に、外国人留学生(D)等を足すことによって求められる。

A. 大学進学率の推計について

- 2018年度～2021年度における都道府県別、男女別の大学進学率の伸び率によって今後2050年まで大学進学率が上昇すると仮定して都道府県別に推計。

(例外)

- ① 男性の進学率が2021年度と比較して5pt以上上回った場合、+5ptを上限として以降据置き。
- ② 女性の進学率が男性の進学率を上回った場合、以降は男性の進学率と同値と仮定。
- ③ 進学率伸び率がマイナスの場合、2021年度の大学進学率が今後維持されると仮定。



B.18歳人口の推計について

- 2040年から2050年までの18歳人口について以下の推計方法により都道府県別に18歳人口を推計。
2040年以降の日本の将来推計18歳人口（国立社会保障・人口問題研究所の推計）を2039年の都道府県比率で案分
（2020年度中の出生者数に各都道府県の生存率を乗算することにより、大学等に入学することが想定される2039年4月時点の18歳人口の都道府県比率を算出）

年	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050
推計18歳人口 (全国)	823,382	793,715	800,949	801,455	797,757	797,466	799,003	800,105	800,267	799,364	797,223

C.各都道府県からの大学進学者数

- 各都道府県の推計18歳人口（B）に各都道府県の大学進学率（A）を掛けたものを合計することにより算出。

D.外国人留学生の入学者数の推計について

- 2020年度～2022年度は新型コロナウイルス感染症の影響により外国人留学生数が一時的に激減したことを踏まえ、2019年度の外国人留学生数が維持されると推定。

E.大学入学者数の推計について

- 各推計値に基づく（B）×（A）による都道府県別の大学進学者数の合計（C）に（D）及びその他を足したものが2040年以降の大学入学者数の推計値となる。

※その他は高等学校卒業程度認定試験合格者・専修学校高等課程修了者で大学に進学した者

【（例）2040年の大学入学者数推計】

(B.18歳人口推計)

(A.大学進学率推計)

北海道18歳人口（男性）14,602人 × 北海道進学率（男性）56.9% = 8,307人	}	北海道進学者数 16,213人
北海道18歳人口（女性）13,898人 × 北海道進学率（女性）56.9% = 7,906人		
青森県 …	}	…
…		
沖縄県18歳人口（男性）7,507人 × 沖縄県進学率（男性）47.5% = 3,565人	}	沖縄県進学者数 6,952人
沖縄県18歳人口（女性）7,134人 × 沖縄県進学率（女性）47.5% = 3,388人		

大学進学率（全国）59.6%
（男性）61.2% （女性）57.9%

(C.2040年の各都道府県からの大学進学者数)

490,781人

(D.2040年の推計外国人留学生入学者数)

(その他)

(E.2040年の推計大学入学者数)

490,781人

+

17,096人

+

2,233人

=

510,110人

※四捨五入の関係上、四則演算の値と記載の数値は必ずしも一致しない

(注) グランドデザイン答申時の推計について

881,782人（推計18歳人口）×55.5%（大学進学率）（※）+ 16,724人（外国人留学生等）= 506,005人

（※）GD答申時は外国人留学生も含めて進学率を57.4%としていたが、18歳人口推計値に訪日予定の外国人等は含まれていないため上記の記載としている。

大学入学定員の総数
627,160人 (R4)

2040年～2050年の進学率・進学者数推計結果

- 急速な人口減少に伴い、大学進学率の伸長を加味したとしても、**2040年代の各都道府県の大学進学者数の合計は40万人台。**
- 外国人留学生の数を加えても**、現在の大学の入学定員の規模が維持された場合には、**定員充足率は80%を割る年も見られた。**
- 外国人留学生受入れ推進により、外国人留学生数がOECD並みになったとしても定員充足率は80%を超える程度、G7並みになったとしても、現在の大学の入学定員の総数（令和4年度 627,160人）と約10万人のギャップがある。

【外国人留学生比率が現状のまま（3.07%）であった場合】

年	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050
18歳人口	823,382	793,715	800,949	801,455	797,757	797,466	799,003	800,105	800,267	799,364	797,223
進学率	59.61%	59.68%	59.75%	59.82%	59.88%	59.94%	60.00%	60.06%	60.12%	60.17%	60.22%
(a)進学者数	490,781	473,671	478,559	479,415	477,722	478,034	479,436	480,570	481,105	480,972	480,092
(b)留学生等	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096	17,096
(c)その他	2,233	2,155	2,178	2,182	2,174	2,175	2,182	2,187	2,189	2,189	2,185
大学入学者数 (a)+(b)+(c))	510,110	492,922	497,833	498,693	496,991	497,305	498,714	499,852	500,390	500,256	499,372
定員充足率	81.81%	79.05%	79.84%	79.98%	79.71%	79.76%	79.98%	80.17%	80.25%	80.23%	80.09%

【外国人留学生比率がOECD平均（4.77%）となった場合】

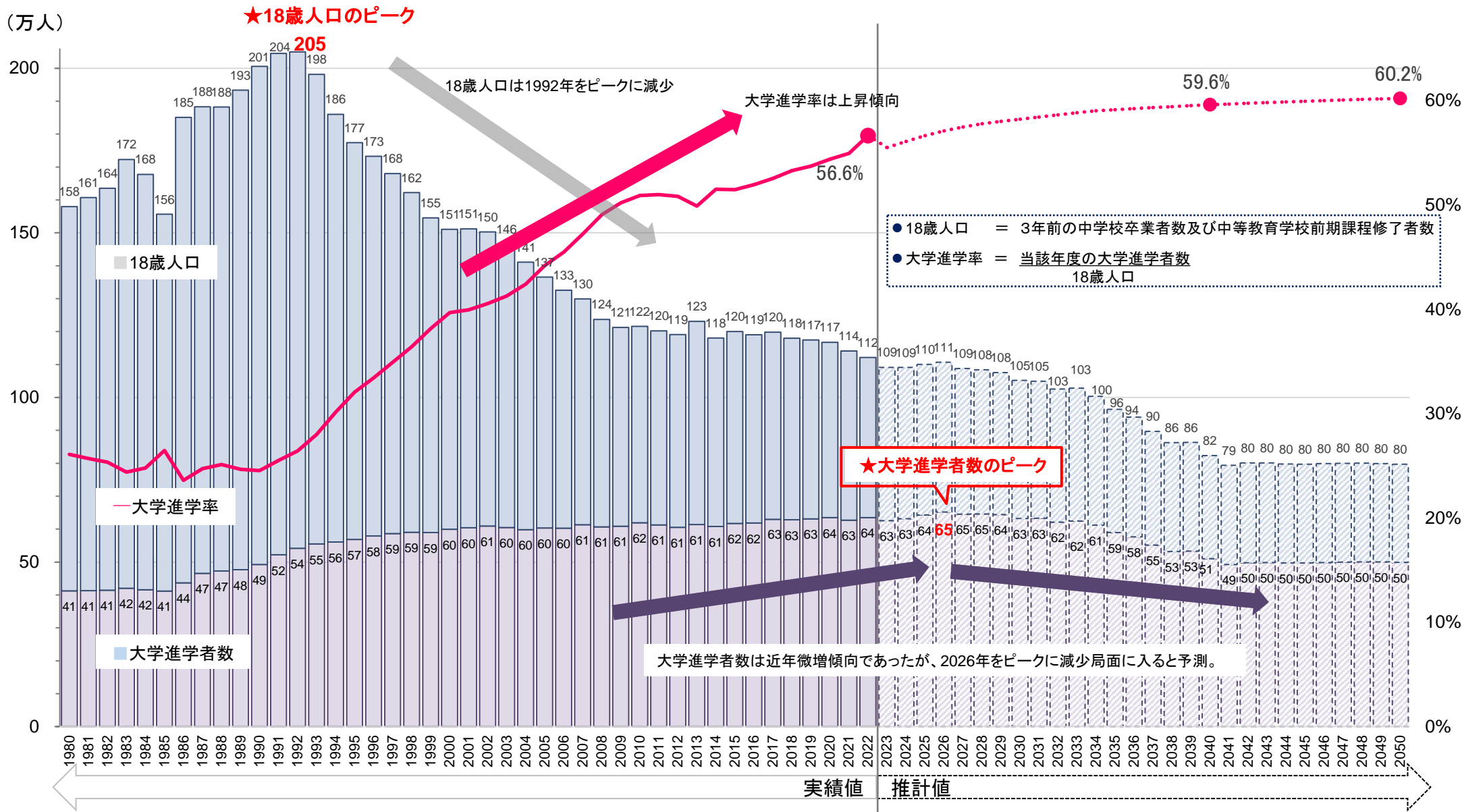
年	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050
18歳人口	823,382	793,715	800,949	801,455	797,757	797,466	799,003	800,105	800,267	799,364	797,223
(a)進学者数	490,781	473,671	478,559	479,415	477,722	478,034	479,436	480,570	481,105	480,972	480,092
(b)留学生等	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598	26,598
(c)その他	2,233	2,155	2,178	2,182	2,174	2,175	2,182	2,187	2,189	2,189	2,185
大学入学者数 (a)+(b)+(c))	519,612	502,424	507,335	508,195	506,494	506,808	508,216	509,355	509,893	509,759	508,875
定員充足率	83.34%	80.58%	81.37%	81.50%	81.23%	81.28%	81.51%	81.69%	81.78%	81.75%	81.61%

【外国人留学生比率がG7平均（8.08%）となった場合】

年	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050
18歳人口	823,382	793,715	800,949	801,455	797,757	797,466	799,003	800,105	800,267	799,364	797,223
(a)進学者数	490,781	473,671	478,559	479,415	477,722	478,034	479,436	480,570	481,105	480,972	480,092
(b)留学生等	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084	45,084
(c)その他	2,233	2,155	2,178	2,182	2,174	2,175	2,182	2,187	2,189	2,189	2,185
大学入学者数 (a)+(b)+(c))	538,098	520,910	525,821	526,681	524,980	525,293	526,702	527,841	528,378	528,244	527,360
定員充足率	86.30%	83.54%	84.33%	84.47%	84.20%	84.25%	84.47%	84.65%	84.74%	84.72%	84.58%

大学進学者数等の将来推計について

18歳人口が減少し続ける中でも、大学進学率は上昇し、大学進学者数も増加傾向にあったが、2026年以降は18歳人口の減少に伴い、大学進学率が上昇しても大学進学者数は減少局面に入ると予測される。



(参考) 2040年の各都道府県進学者数等推計 (2021年基準) ①

	北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県
18歳人口【2021】	45,007	11,830	11,379	20,998	8,171	10,269	17,622	27,454	18,417	18,806	64,508	54,908
高校等卒業生数【2021】	40,596	11,056	10,585	19,412	7,586	9,555	16,130	25,234	17,183	16,849	56,216	49,294
大学進学者数【2021】	21,039	4,975	4,460	9,982	3,345	4,097	7,215	14,797	9,063	8,971	35,056	30,362
大学進学率【2021】	46.7%	42.1%	39.2%	47.5%	40.9%	39.9%	40.9%	53.9%	49.2%	47.7%	54.3%	55.3%
大学進学率(国公私立)【2021】	10.0% 3.4% 33.4%	12.0% 5.1% 25.0%	11.2% 5.4% 22.6%	9.3% 2.6% 35.6%	14.4% 4.4% 22.2%	11.0% 2.7% 26.2%	7.6% 3.2% 30.1%	8.5% 2.1% 43.3%	8.5% 2.0% 38.8%	7.9% 3.7% 36.0%	4.2% 0.9% 49.3%	4.3% 0.6% 50.4%
短大進学率【2021】	4.1%	4.8%	4.2%	4.6%	5.9%	4.7%	5.0%	2.7%	4.0%	4.2%	3.5%	3.1%
専門学校進学率(現役)【2021】	20.8%	14.8%	17.8%	16.2%	16.5%	18.1%	15.6%	17.2%	16.9%	15.5%	16.1%	17.6%
大学数【2021】	37	10	6	14	7	6	8	10	9	15	27	27
大学数(国公私立)【2021】	7 6 24	1 2 7	1 1 4	2 1 11	1 3 3	1 2 3	1 2 5	3 1 6	1 0 8	1 4 10	1 1 25	1 1 25
入学定員【2021】	18,806	3,363	2,509	11,511	2,090	2,766	3,579	6,461	4,668	5,785	28,855	25,751
入学定員(国公私立)【2021】	5,600 1,345 11,861	1,322 516 1,525	1,030 440 1,039	2,722 420 8,369	955 665 470	1,663 145 958	945 599 2,035	3,760 170 2,531	910 0 3,758	1,098 1,482 3,205	1,535 395 26,925	2,592 180 22,979
大学入学者数【2021】	19,119	3,407	2,544	11,713	2,075	2,792	3,451	6,697	4,823	5,983	28,847	27,402
(国公私立)【2021】	5,756 1,434 11,929	1,371 549 1,487	1,068 473 1,003	2,779 453 8,481	985 694 396	1,690 148 954	991 605 1,855	3,829 171 2,697	929 0 3,894	1,142 1,551 3,290	1,598 406 26,843	2,635 180 24,587
県外から流入【2021】	4,954	1,363	1,281	6,061	1,194	1,868	1,822	3,727	2,639	3,249	18,497	17,051
県内から流出【2021】	6,874	2,931	3,197	4,330	2,464	3,173	5,586	11,827	6,879	6,237	24,706	20,011
流出入差(流入-流出)【2021】	-1,921	-1,568	-1,916	1,731	-1,270	-1,305	-3,764	-8,101	-4,240	-2,988	-6,209	-2,961
自県進学率【2021】	67.3%	41.1%	28.3%	56.6%	26.3%	22.6%	22.6%	20.1%	24.1%	30.5%	29.5%	34.1%
18歳人口推計【2040】	28,500	6,466	6,434	13,971	4,306	5,967	10,142	17,097	11,623	11,517	46,401	39,801
大学進学者数推計【2040】	16,213	2,905	2,719	7,090	1,996	2,522	4,661	10,443	5,943	5,833	27,982	24,374
大学進学率推計【2040】	56.9%	44.9%	42.3%	50.7%	46.3%	42.3%	46.0%	61.1%	51.1%	50.7%	60.3%	61.2%
大学入学者数推計【2040】	15,553	2,772	2,070	9,529	1,688	2,271	2,807	5,448	3,924	4,867	23,468	22,292
(国公私立)【2040】	4,683 1,167 9,704	1,115 447 1,210	869 385 816	2,261 369 6,899	801 565 322	1,375 120 776	806 492 1,509	3,115 139 2,194	756 0 3,168	929 1,262 2,676	1,300 330 21,837	2,144 146 20,002
入学定員充足率推計【2040】	82.7%	82.4%	82.5%	82.8%	80.8%	82.1%	78.4%	84.3%	84.1%	84.1%	81.3%	86.6%
(国公私立)【2040】	83.6% 86.7% 81.8%	84.4% 86.6% 79.3%	84.4% 87.5% 78.5%	83.1% 87.7% 82.4%	83.9% 84.9% 68.5%	82.7% 83.0% 81.0%	85.3% 82.2% 74.2%	82.8% 81.8% 86.7%	83.1% - 84.3%	84.6% 85.1% 83.5%	84.7% 83.6% 81.1%	82.7% 81.4% 87.0%

(参考) 2040年の各都道府県進学者数等推計 (2021年基準) ②

	東京都	神奈川県	新潟県	富山県	石川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県
18歳人口【2021】	104,150	78,433	19,807	9,656	10,574	7,584	7,768	20,242	20,034	34,622	71,537	17,458
高校等卒業者数【2021】	101,997	67,477	18,071	8,898	10,073	7,246	7,874	18,424	17,986	31,948	63,402	15,401
大学進学者数【2021】	78,180	44,498	8,698	4,561	5,607	4,104	5,018	9,269	9,760	16,879	38,573	7,864
大学進学率【2021】	75.1%	56.7%	43.9%	47.2%	53.0%	54.1%	64.6%	45.8%	48.7%	48.8%	53.9%	45.0%
大学進学率(国公私別)【2021】	6.7% 1.0% 67.3%	3.7% 1.2% 51.8%	9.6% 4.0% 30.4%	13.5% 5.6% 28.2%	13.7% 5.2% 34.1%	14.6% 6.3% 33.3%	9.5% 5.7% 49.4%	8.5% 4.1% 33.2%	9.1% 3.2% 36.4%	8.4% 3.9% 36.4%	9.6% 3.0% 41.3%	8.7% 2.5% 33.8%
短大進学率【2021】	1.9%	2.9%	3.8%	6.4%	5.7%	4.8%	5.4%	6.9%	5.4%	3.5%	3.1%	4.9%
専門学校進学率(現役)【2021】	11.8%	14.7%	24.6%	15.8%	13.5%	13.9%	17.9%	19.5%	12.4%	15.7%	12.1%	12.8%
大学数【2021】	146	32	22	5	14	6	7	11	13	14	52	7
大学数(国公私別)【2021】	12 2 132	2 2 28	3 4 15	1 1 3	2 4 8	1 2 3	1 2 4	1 4 6	1 3 9	2 4 8	4 3 45	1 1 5
入学定員【2021】	153,377	44,893	6,699	2,575	6,502	2,300	4,169	4,020	4,940	8,090	41,964	3,190
入学定員(国公私別)【2021】	9,716 1,570 142,091	1,662 1,130 42,101	2,467 765 3,467	1,770 495 310	1,726 590 4,186	855 450 995	825 990 2,354	1,978 960 1,082	1,240 200 3,500	2,145 935 5,010	3,976 1,764 36,224	1,310 100 1,780
大学入学者数【2021】	153,519	45,619	6,592	2,588	6,492	2,362	4,245	4,163	4,825	7,970	42,461	3,303
(国公私別)【2021】	10,055 1,592 141,872	1,697 1,174 42,748	2,547 826 3,219	1,832 480 276	1,764 620 4,108	895 485 982	851 1,075 2,319	2,023 1,007 1,133	1,265 220 3,340	2,166 1,051 4,753	4,092 1,830 36,539	1,335 102 1,866
県外から流入【2021】	100,599	28,384	3,132	1,640	3,813	1,083	3,012	2,276	2,679	3,165	14,960	1,554
県内から流出【2021】	25,261	27,263	5,238	3,613	2,928	2,825	3,785	7,382	7,614	12,074	11,072	6,115
流出入差(流入-流出)【2021】	75,339	1,121	-2,106	-1,973	885	-1,742	-773	-5,106	-4,935	-8,909	3,888	-4,561
自県進学率【2021】	67.7%	38.7%	39.8%	20.8%	47.8%	31.2%	24.6%	20.4%	22.0%	28.5%	71.3%	22.2%
18歳人口推計【2040】	102,821	57,768	12,502	6,165	7,369	5,142	5,006	12,557	12,172	21,904	54,496	11,241
大学進学者数推計【2040】	82,811	35,649	6,084	3,355	4,423	3,121	3,669	6,738	6,854	10,888	31,686	5,508
大学進学率推計【2040】	80.5%	61.7%	48.7%	54.4%	60.0%	60.7%	73.3%	53.7%	56.3%	49.7%	58.1%	49.0%
大学入学者数推計【2040】	124,890	37,112	5,363	2,105	5,281	1,922	3,453	3,387	3,925	6,484	34,543	2,687
(国公私別)【2040】	8,180 1,295 115,415	1,381 955 34,776	2,072 672 2,619	1,490 390 225	1,435 504 3,342	728 395 799	692 875 1,887	1,646 819 922	1,029 179 2,717	1,762 855 3,867	3,329 1,489 29,725	1,086 83 1,518
入学定員充足率推計【2040】	81.4%	82.7%	80.1%	81.8%	81.2%	83.5%	82.8%	84.2%	79.5%	80.1%	82.3%	84.2%
(国公私別)【2040】	84.2% 82.5% 81.2%	83.1% 84.5% 82.6%	84.0% 87.8% 75.5%	84.2% 78.9% 72.4%	83.1% 85.5% 79.8%	85.2% 87.7% 80.3%	83.9% 88.3% 80.1%	83.2% 85.3% 85.2%	83.0% 89.5% 77.6%	82.1% 91.4% 77.2%	83.7% 84.4% 82.1%	82.9% 83.0% 85.3%

(参考) 2040年の各都道府県進学者数等推計 (2021年基準) ③

	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県
18歳人口【2021】	14,328	23,145	79,549	51,482	12,973	8,809	5,195	6,233	18,190	26,108	12,219	6,581
高校等卒業生数【2021】	12,836	22,526	71,803	45,157	11,585	8,163	4,820	6,014	17,342	22,985	10,855	6,054
大学進学者数【2021】	7,185	15,965	47,469	29,769	7,877	4,366	2,177	2,748	9,328	14,387	4,706	3,246
大学進学率【2021】	50.1%	69.0%	59.7%	57.8%	60.7%	49.6%	41.9%	44.1%	51.3%	55.1%	38.5%	49.3%
大学進学率(国公私別)【2021】	6.7% 3.3% 40.1%	8.6% 4.2% 56.1%	5.9% 3.0% 50.7%	8.9% 4.2% 44.8%	10.5% 3.9% 46.3%	9.5% 3.9% 36.2%	14.2% 5.1% 22.6%	12.5% 7.0% 24.6%	12.7% 4.2% 34.4%	11.4% 5.2% 38.5%	10.0% 4.9% 23.6%	16.0% 3.4% 29.9%
短大進学率【2021】	4.7%	4.1%	4.6%	3.6%	4.2%	4.0%	7.2%	5.0%	4.0%	2.9%	4.5%	4.0%
専門学校進学率(現役)【2021】	15.3%	13.1%	13.7%	12.1%	11.2%	16.6%	18.0%	20.1%	17.3%	10.7%	14.2%	14.9%
大学数【2021】	9	34	56	36	11	5	3	2	18	21	10	4
大学数(国公私別)【2021】	2 1 6	3 4 27	2 2 52	2 4 30	3 2 6	1 1 3	1 1 1	1 1 0	1 2 15	1 5 15	1 3 6	2 0 2
入学定員【2021】	7,548	35,123	54,721	27,777	4,858	2,035	1,519	1,617	9,905	13,399	4,211	2,893
入学定員(国公私別)【2021】	945 600 6,003	3,706 1,046 30,371	4,155 2,863 47,703	2,690 1,902 23,185	730 348 3,780	890 280 865	1,139 300 80	1,157 460 0	2,195 550 7,160	2,336 1,570 9,493	1,917 1,084 1,210	1,388 0 1,505
大学入学者数【2021】	7,661	35,049	56,375	27,050	4,777	2,038	1,554	1,682	9,068	13,328	4,306	2,638
(国公私別)【2021】	957 625 6,079	3,820 1,082 30,147	4,278 2,943 49,154	2,767 1,897 22,386	770 348 3,659	939 281 818	1,161 315 78	1,206 476 0	2,257 577 6,234	2,407 1,677 9,244	1,965 1,113 1,228	1,422 0 1,216
県外から流入【2021】	6,052	26,717	28,439	13,866	3,648	1,261	1,223	1,203	5,111	5,662	3,090	1,455
県内から流出【2021】	5,576	7,633	19,533	16,585	6,748	3,589	1,846	2,269	5,371	6,721	3,490	2,063
流出入差(流入-流出)【2021】	476	19,084	8,906	-2,719	-3,100	-2,328	-623	-1,066	-260	-1,059	-400	-608
自県進学率【2021】	22.4%	52.2%	58.9%	44.3%	14.3%	17.8%	15.2%	17.4%	42.4%	53.3%	25.8%	36.4%
18歳人口推計【2040】	10,577	16,391	57,966	35,927	8,025	5,623	3,616	4,373	13,161	18,831	7,908	4,327
大学進学者数推計【2040】	6,243	12,389	40,022	23,042	5,548	3,279	1,754	2,040	7,694	10,398	3,046	2,298
大学進学率推計【2040】	59.0%	75.6%	69.0%	64.1%	69.1%	58.3%	48.5%	46.7%	58.5%	55.2%	38.5%	53.1%
大学入学者数推計【2040】	6,232	28,513	45,862	22,006	3,886	1,658	1,264	1,368	7,377	10,843	3,503	2,146
(国公私別)【2040】	779 508 4,945	3,108 880 24,525	3,480 2,394 39,988	2,251 1,543 18,211	626 283 2,977	764 229 665	944 256 63	981 387 0	1,836 469 5,071	1,958 1,364 7,520	1,599 905 999	1,157 0 989
入学定員充足率推計【2040】	82.6%	81.2%	83.8%	79.2%	80.0%	81.5%	83.2%	84.6%	74.5%	80.9%	83.2%	74.2%
(国公私別)【2040】	82.4% 84.7% 82.4%	83.9% 84.2% 80.8%	83.8% 83.6% 83.8%	83.7% 81.1% 78.5%	85.8% 81.4% 78.7%	85.8% 81.6% 76.9%	82.9% 85.4% 79.3%	84.8% 84.2% -	83.6% 85.3% 70.8%	83.8% 86.9% 79.2%	83.4% 83.5% 82.6%	83.3% - 65.7%

(参考) 2040年の各都道府県進学者数等推計 (2021年基準) ④

	香川県			愛媛県			高知県			福岡県			佐賀県			長崎県			熊本県			大分県			宮崎県			鹿児島県			沖縄県			その他
18歳人口【2021】	9,310			12,483			6,184			46,524			8,412			12,691			16,741			10,244			10,517			15,625			16,363			
高校等卒業者数【2021】	8,593			11,445			5,891			41,516			7,697			11,857			15,073			9,745			9,842			14,227			14,424			
大学進学者数【2021】	4,840			6,144			2,845			22,333			3,455			5,434			7,075			4,091			4,180			6,126			7,002			17,919
大学進学率【2021】	52.0%			49.2%			46.0%			48.0%			41.1%			42.8%			42.3%			39.9%			39.7%			39.2%			42.8%			
大学進学率(国公私立)【2021】	13.5%	3.7%	34.7%	14.8%	4.2%	30.2%	9.9%	6.2%	29.8%	9.3%	3.0%	35.7%	12.3%	2.1%	26.7%	14.2%	5.3%	23.3%	10.1%	3.4%	28.8%	13.5%	4.2%	22.3%	12.8%	4.2%	22.8%	12.0%	2.4%	24.8%	9.6%	3.4%	29.8%	
短大進学率【2021】	4.8%			4.5%			4.3%			4.4%			4.2%			3.8%			3.2%			7.1%			4.7%			7.2%			3.6%			
専門学校進学率(現役)【2021】	15.8%			17.1%			16.1%			16.1%			16.5%			15.5%			18.1%			20.1%			16.1%			19.6%			24.0%			
大学数【2021】	4			5			5			35			2			8			9			5			7			6			8			
大学数(国公私立)【2021】	1	1	2	1	1	3	1	2	2	3	4	28	1	0	1	1	1	6	1	1	7	1	1	3	1	2	4	2	0	4	1	3	4	
入学定員【2021】	2,189			3,860			2,215			25,761			1,818			3,986			5,712			3,520			2,335			3,683			3,972			
入学定員(国公私立)【2021】	1,239	90	860	1,770	100	1,990	1,075	860	280	4,110	1,999	19,652	1,278	0	540	1,641	730	1,615	1,667	480	3,565	1,070	80	2,370	1,035	300	1,000	2,053	0	1,630	1,547	640	1,785	
大学入学者数【2021】	2,092			3,875			2,212			25,963			1,817			3,914			5,643			3,029			2,174			3,652			4,153			
(国公私立)【2021】	1,275	90	727	1,818	100	1,957	1,110	906	196	4,214	2,097	19,652	1,315	0	502	1,657	752	1,505	1,706	505	3,432	1,086	81	1,862	1,064	312	798	2,100	0	1,552	1,567	664	1,922	
県外から流入【2021】	1,260			1,840			1,459			11,422			1,244			1,942			2,357			1,947			1,096			1,601			937			
県内から流出【2021】	4,008			4,109			2,092			7,792			2,882			3,462			3,789			3,009			3,102			4,075			3,786			
流出入差(流入-流出)【2021】	-2,748			-2,269			-633			3,630			-1,638			-1,520			-1,432			-1,062			-2,006			-2,474			-2,849			
自県進学率【2021】	17.2%			33.1%			26.5%			65.1%			16.6%			36.3%			46.4%			26.4%			25.8%			33.5%			45.9%			
18歳人口推計【2040】	6,054			7,871			3,924			38,596			6,114			8,734			12,888			7,335			7,589			11,545			14,641			
大学進学者数推計【2040】	3,517			4,389			2,021			18,989			2,670			4,347			5,566			3,172			3,129			4,808			6,952			19,329
大学進学率推計【2040】	58.1%			55.8%			51.5%			49.2%			43.7%			49.8%			43.2%			43.2%			41.2%			41.6%			47.5%			
大学入学者数推計【2040】	1,702			3,152			1,800			21,121			1,478			3,184			4,591			2,464			1,769			2,971			3,379			
(国公私立)【2040】	1,037	73	591	1,479	81	1,592	903	737	159	3,428	1,706	15,987	1,070	0	408	1,348	612	1,224	1,388	411	2,792	883	66	1,515	866	254	649	1,708	0	1,263	1,275	540	1,564	
入学定員充足率推計【2040】	77.7%			81.7%			81.2%			82.0%			81.3%			79.9%			80.4%			70.0%			75.7%			80.7%			85.1%			
(国公私立)【2040】	83.7%	81.4%	68.8%	83.6%	81.4%	80.0%	84.0%	85.7%	56.9%	83.4%	85.3%	81.4%	83.7%	-	75.6%	82.1%	83.8%	75.8%	83.3%	85.6%	78.3%	82.6%	82.4%	63.9%	83.6%	84.6%	64.9%	83.2%	-	77.5%	82.4%	84.4%	87.6%	